

I S 深海の探索者

雨夜 亜由

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スペインの大企業、S・Q社。

そこに学生の身分ながらに属する男性研究員、深水沙良。

幼馴染の後を追うように沙良がIS学園に入学したときから、波乱の学園生活が幕を開ける。——よくあるオリ主介入型の物語です。原作は読んでいますが、多分にオリジナル設定やら、設定の改変がありますので気をつけてください。

この作品はにじファンに投稿していたものを修正、改変しています。

目次

第一話	開幕	1
第二話	若い覚悟	25
第三話	たわいもない日常	45
第四話	酒場	64
第五話	深夜の訓練者	79
第六話	発覚	95
第七話	身の程知らず	116
第八話	意識の差、同郷の友	140
第九話	専用機	165
第十話	決闘	186
第十一話	疑念	207
第十二話	パーティー	225
第十三話	整備室	252
第十四話	間違えた意味	276
第十五話	クラス代表戦	296
第十六話	選べと言うなら	313
第十七話	個人間交渉	327
第十八話	根も葉もない	351
第十九話	懐疑の編入者	369
第二十話	優しき傀儡者	384
第二十一話	シャルロット・デユノア	410
第二十二話	優しすぎる償い	436
第二十三話	屋上にて	456
第二十四話	理由	470

第二十五話	乱闘の劈頭	495
第二十六話	私闘の結尾	510
第二十七話	深夜の姉弟通話	535
第二十八話	エキシビジョン	549
第二十九話	硝煙の大祭	570
第三十話	立ちはだかる同郷	587
第三十一話	決勝戦	609
第三十二話	英雄投影	627
第三十三話	ラウラ・ボーデヴィツヒ	
646		
第三十四話	戦いの後に	666
第三十五話	その前に	682
第三十六話	それは海と対となる	

第三十七話	指導戦闘	716
第三十八話	記念撮影	733
第三十九話	濃密な一日	748
第四十話	疲労困憊の帰り道	768
第四十一話	慌しき日々の再開	789
第四十二話	開発最前線	811
第四十三話	夢の残滓	827
第四十四話	追い込み作業	842
第四十五話	買い物日和	859
第四十六話	とある車内で	887
第四十七話	夏の晴れた日にて	906
第四十八話	海辺にひと夏の	925
702		

第四十九話 止まり木 | 947

第五十話 西会話 | 969

第五十一話 覚悟の紅 | 984

第五十二話 望まぬ狂気 | 1002

第五十三話 残されし蒼紅 | 1023

第五十四話 最善の犠牲であるのなら | 1041

1041

第五十五話 命令 | 1059

第五十六話 不器用な笑み | 1077

第五十七話 相応 | 1097

第五十八話 横に立つために | 1113

第五十九話 この気持ちをも何と呼べば | 1131

いのだろうか | 1135

第六十話 戦いが終われば | 1159

第六十一話 あからさまな会合 | 1182

第六十二話 考察 | 1203

第一話 開幕

ISが世界に知れ渡ったのは少年が小学生の頃だった。

世にも有名な『白騎士事件』である。

その圧倒的科学的力を持ったISは本来の宇宙開発という目的から逸れていき、いつの間にか兵器としてその存在を主張するようになった。

その軍事力から、その存在が軍事バランスを崩し、その開発者である篠ノ乃東博士は世界に追われ、その家族もバラバラになってしまう。

こうして、小学四年の頃、幼馴染は引越してしまうことになった。

それを少年はもう一人の幼馴染と涙で見送った。

大した言葉をかけれず、ただ涙を堪える幼馴染の姿にまた会えるからと約束を交わし、幼い別れに涙を流し続けた。

それから姉代わりであった束の言うことを守り、秘密を抱えたまま一年が経ったころ、少年はISについての論文をとある科学誌で発表した。

それは、年も若い少年が考えたものとは思えないと、世界中から注目を浴びることになった。

そして、待ち続けた展開が沙良に訪れる。生まれ故郷であるスペイン、その大企業S・Q社から、研究員として、本社に招きたいとスカウトを受けたのだ。



「サラ、本当に行つちやうのか？」

沙良は、玄関を出て空港までのタクシーを待っていた。

「なに言ってるのさ一夏。ずっと前から決めてたつて言ったでしょ？」

「でも、スペインだなんて遠すぎるよ」

そういう一夏は今にも泣きそうな顔で俯いてしまう。

それを見ると、沙良も泣き出しそうになってしまふのだが、一生の別れではない。何とか涙を堪えて、気丈に振舞う。

「たまには帰ってくるよ。それに姉さんみたいに世界を追われてるわけじゃないんだ。何時でも連絡は取れるよ」

一夏を心配させたくない。そう思う気持ちは一夏にも伝わったみたいだ。

一夏はこくと頷くと、右手を差し出してくる。

沙良はその手をしっかりと握り、別れの握手を交わすと、すぐ後ろで、幼馴染の別れ

の挨拶を待っていた、千冬に顔を向ける。

「行つて来ます、千冬さん。二年間でしたがお世話になりました」

素晴らしい深々と頭を下げる。

二年間だが住まわしてもらっていた織斑家を離れるのは寂しいが、これも決めたことだ。

後悔はしないと決めたのだ。

「ああ、向こうでも元気にな。エルベルトさんによろしく言っておいてくれ」

「はい、必ず伝えておきます」

千冬とも握手を交わした沙良は最後に一夏と抱き合い、タクシーに乗り込む。

「二年間は忙しいと思うから、来年の夏に一回帰つて来るよ」

「約束だからな」

一夏と約束を交わした沙良は、スペインに向けて飛ぶために空港に向かうのであった。



「ここがエスパニーヤか」

バルセロナの空港から出ると大きく深呼吸する。

——ここが僕の生まれ故郷か。

沙良は自分が生を受けた街を眺める。

その町並みは日本とは違うが、何故か落ち着く雰囲気醸し出している。

「……ぼんやりしてる場合じゃないや。迎えに来てくれている人がいるはず」

指定されていた待ち合わせ場所に急ぐ。

だが、見慣れぬ土地故に、待ち合わせ場所も探すのに一苦労だ。ころころとトランクを引き摺りつつもキョロキョロと回りを探す。それは、待ち人を探すという意味もあるが、興味、好奇心を持って周りの風景を見ているというのが一番の理由だろう。

待ち合わせ場所は空港を出て一番近い駐車場の入り口と聞いている。

その場所らしき看板が見えたことにホッと一息つく。

そこには、Sara Ruizとその上に片仮名でサラ・ルイスと書かれた紙を持った女性が立っていた。

——あれかな？

女性に近寄り声をかける。

「! Mucho gusto! Soy Sera Ruiz? Es una persona de S Q? (始めまして、僕がサラ・ルイスです。貴女がS・Q社からのお迎えですか?)」

「あら、あなたが沙良君ね」

返ってきた返事は、聞きなれた言語である日本語だった。

あまりにも流暢に喋るものだから、釣られて日本語で話してしまう。

「日本語がお上手ですね」

「社用語が日本語ですから」

そうなんだと言わんばかりの表情を作る沙良に微笑が向けられる。

「ふふふ、意外ですか?」

「ええ」

「ISを扱う会社ですもの。全ての資料が日本語で書かれたものを研究するんだから、この業界ではみんな日本語を覚えるのよ」

なるほど、と頷く。それを見て、笑みを深くする女性。

そこで沙良は、女性の名を聞いていないこと気付いた。

「あ、すいません。改めて自己紹介をさせていただきます。サラ・ルイス・フカミ、日本名で深水沙良といいます」

「これはご丁寧にありがとう。私はカルラ・ファリーノス・イエロよ。気軽にカルラと呼んでくれて構わないわ」

「わかりましたカルラさん」

「それでは、早速行きましようか」

そういつて、車を指差すカルラ。

黒塗りの車体に全長を伸ばし、拡大された後部空間。

その車は、何処からどう見てもリムジンだった。

気後れしてしまうのも仕方ないだろう。

視線に気付いたのだろう、運転手らしき人物が頭を下げたので、沙良は慌てて頭を下
げ返した。

「何処に連れて行かれるのですか？」

「それは着いてからのお楽しみよ」

そこから、カルラは楽しげに笑うだけで、質問には答えてくれなくなった。

着けばわかるってことか、と幼いながらに判断し、初めて乗るリムジンに心躍らせた。

まあ何とかなるよね。そう樂觀的に考えて、とりあえずは町並みを楽しむことにしよう。
う。

流れていく異国の景色を堪能していると大きなビルが近づいてくる。

それは、この街で見たものの中では異様なスケールを誇っていた。

大きなビルに車が入っていくと、なにやらカードをスロットに入れて見えた。指紋認証に静脈認証、網膜認証、そして声帯認証をパスし、ようやく車がゲートをくぐった。

その情報管理の厳しさに沙良が目を丸くしていると、カルラが「凄いでしょ」と胸を張るのだった。

車を降り、社内をカルラに手を引かれて歩いていく。

別に手を引かれなくても歩けるのだが、カルラがどうしてもというので、されるがままとなっている。

その際、社員と思われる女性たちに囲まれたりしたが、何とか切り抜けることが出来た。

そうして綺麗なオフィスを通り、エレベーターで最上階に上がると、そこには重厚な扉が沙良を待っていた。

連れて来られたのは、社長室だった。

しかし、沙良には気負った様子はなく、何処か嬉しそうな気色すら見せている。

「社長、沙良様をお連れしました」

カルラが畏まって扉をノックし、沙良が訪れた旨を伝えると、入れと低い声が聞こえる。

「失礼します」

カルラが開けてくれた扉をくぐり、沙良はこの会社で一番の権力者と向かい合う。太陽を背に、尊厳な雰囲気醸し出した初老の男性。

その男性が、笑みを浮かべて口を開いた。

「随分長いこと待たせたな、沙良」

「お待たせ、お祖父ちゃん《・・・・・・・・》」

ソファアーに座り、今までのことなどを楽しそうに話す沙良。

社長である祖父も、その孫息子が歩んできた人生を、時に驚き、時に笑い、時に怒り、時に感動し、楽しそうに聞いてくれる。

「そうか、タバネも元気になっているのか」

「東姉さんも、千冬さんも、一夏も、お祖父ちゃんに会いたがっていたよ」

「それならまた日本に視察に行かねばならぬな」

声高らかに豪快に笑う祖父に、本来は秘書なのかカルラが近づいた。

時計を気にしていることからこの後の展開も想像出来る。

「社長、家族の交流も結構ですがそろそろお時間です」

社長はあからさまに嫌な顔をし、カルラに睨まれたが、沙良に向きなおした時には、その目は真剣なものになっていた。

「そうだな、家族の交流もいいが、本題に入らせてもらおう」

そう祖父が言うと、沙良も真剣な顔つきに変わる。

「今回、サラをエスパニーニャに呼んだのは他でもない。現在、世界を変えていつているISを研究してもらいたい」

沙良はわかってると頷く。

ISの登場により、世界の構成はがらりと変わった。

それは、平和ボケしている日本がその法律を変え、ISを配備していることから分かるだろう。

いまでは、ISを持っているかどうか。そのISが最先端をいつているか。それがその国の力を表す事につながっている。

「我が社はエスパニーニャで唯一、ISの開発許可を勝ち取った。既にドイツ、イギリス、イタリヤには遅れを取り、最近ではフランスのデユノア社も動き出したとの事。あまり、悠長にしている時間はないのだ」

フランスはI Sの開発でいうと後進国である。

そのフランスに遅れを取っているというのは、かなり良くない状況だろう。

しかも、研究者は何時でも不足しているという事態だ。

「今回のプロジェクトには、国からの莫大な支援がある。しかし、一国家からの支援など知れたものには過ぎない」

それに沙良はゆつくりと頷く。

全てがギリギリの中、最大級の成果を残さなくてはならない。

「だが、遠慮は要らない。必要と思うものは全て用意する。目的は、一つ。新世代のI Sの開発だ」

新世代。その言葉にどれだけの期待が寄せられているか。

「子供だと、幼いことを理由にする者はこの社にも居るだろう。私のコネだと言いまわるやつも居るだろう、七光りだと言われることもあるだろう。だから、私は一切手を出さない。見返してやれ。タバネに付いて行く事が出来たサラならば出来る」

社長は、右手を差し出す。

それは、沙良を、孫としてではなく、一人の研究者として捉えていると言うことに相違はない。

沙良もその右手を掴みしっかりと握手を交わす。

「太陽の昇る国から太陽の沈まない国へようこそ小さな探求者よ。私たち、Sea Quest Companyは貴方を歓迎する」

こうやって、篠ノ乃東に教えを受けた若き研究者、深水沙良の研究生活が幕を開けた。



「セラ、起きて」

身体を揺らされ、不快な声が漏れる。つい不満を口にしようとしたが、起こしてと言ったのは自分だったため、素直にベッドから身体を起こした。

「んー……おはよう」

「はい、おはよう、よく寝てたわね」

「んー、そだね。懐かしい夢見るほどにぐっすり」と

「どんな夢？」

「僕が始めてエスパーニャに来た時の夢。懐かしいなあ」

ふあつと伸びをし、首を回す。

ここは本社の経営部の仮眠室であり周りを見渡せば、まだ仮眠を取っている社員がたぐさん居た。

開発部の仮眠室では落ち着いて眠れないため、こちらに避難して来たのだ。

本当に懐かしい夢を見たものだ。あれから一年半は過ぎた。

研究に専念しようと、当初は学校に行く気は全くなかったのだが、義務教育は出ておくべきと言われ、しぶしぶミドルスクールに通うことになった。それも飛び級を重ねて既に大学入試資格は取得しているのだが、ミドルスクールには通い続けている。

しかし、優秀な I S 部門の研究員に支えられて、学校に通いながらも第二世代の I S を完成させることに成功する。

それは、会社名からを名を取ってシークエストと名づけられた。

ここで、量販機として世界に公表しようとしたところ、とある弊害があった。

それが沙良の存在である。

沙良は、束の開発当時から、その傍で束を支え続けてきた。I S に触れたのも世界で二番目。つまり千冬の次に I S を動かしたのだ。

I S 開発最初期はまだ『女性しか使えない』と認識されていなかった。

女性だけが扱える現在が不思議なのであり、当初は男性も乗ることを考えて沙良がその役をかって出ていたのだ。

だから沙良も簡単に考え、そのことを誰にも言わずに成長してきた。知っていたのは、東と動かしたときにそばにいた千冬だけだ。

もちろん沙良は男である。

その沙良がこの『女性しか使えない』と認識された世界で、開発に関わったシークエストを世界に出したとしたら、沙良に他国から盛大に注目を集めることになるだろう。それは秘密が漏れるリスクが高まることに繋がる。ここで、利益を最優先させるなら、ISを公表するべきだっただろう。

沙良が、ISを扱える男と知られること、それが広告版にもなる。

それが、沙良にどんな負担を与えることになっても、その利益は見過ごすことは出来ないほど大きいだろう。

まさしく世界が動く。

それも後発国であるスペインを中心に、だ。

このチャンスのような事態に政治家が甘い蜜を吸おうと群がったのだ。

しかし、この会社の社長がそれを許さなかった。

世界に発表すべきだという意見に真っ向から反対し、ISの開発によって国に根付かせた経済の力を持つてして、反対意見を捻じ伏せた。

しかし、その機体はスペイン海軍で普及し、国民の殆どがSQ社の開発部門をISを

エスパーニヤにもたらした英雄として認識していた。

ここまで広まれば外国にも開発部の技術力が広まってもおかしくはなく、たびたび欧州連合でその研究を共有したり共同研究などを行なえるようになった。

こうして、落ち着いた研究環境を手に入れた沙良は第三世代の開発に着手していた。



仮眠室から戻った沙良は休憩時間が少し残っていたため、暢気にパソコンを弄りながら紅茶を飲んでいた。

すると手元に置いていた携帯が鳴り出す。

——この着信音は

案の定そこには姉さんの文字。

篠ノ乃東からの連絡である。

別に姉弟というわけでもない。沙良が東に色々教えを受けていた頃に、「お姉ちゃんと呼びなさい」と言われてから、ずっと姉さんで通してきたのが未だに残っているだけ

のことである。

「もしもし」

『はろー♪ セラ元気してた？ あなたの姉ちゃんのお東さんだよー。東さんは元気

モリモリ、イエイ！』

そのテンションの高さに沙良は顔を顰めてしまう。

ちなみにセラとは沙良の愛称である。

「姉さん、今度は何処にいるの？」

『オヨヨ……、セラが東さんをシカトするんだよ……』

「はいはい、僕は相変わらず元気ですよ、姉さんも元気で何よりです。で、今度は何処に

身を潜めてるの？」

『ふっふっふ、そんなこと教えると思ってるのかい!?!』

電話しながら、キーボードを叩き出した。

この携帯の通信から東の居場所を割り出そうと考えたのだ。

「別に教えてくれなくてもいいよ」

『えー、面白くな〜い♪』

そして、お望みの結果が現れる。

それを見て、額に手を当てる。これは面倒くさくなった時の沙良の癖である。

「……そうか、ノルウェーか。また逃亡しにくい所に行ったね。あれほど北歐は駄目だつて言ったのに」

『……………セラ、ハックしたね?』

「何のことでしよう?」

『まあセラは東さんの味方だから別にいいけどねー』

「で、またエスパニーニヤの入国に手引きして欲しいと?」

『流石愛しの弟。東さんのことはお見通しだね』

「まあ愛しの姉にお願ひされて断るような僕じゃないよ。つて返事を期待して、僕に連絡を入れる姉さんほどではないよ」

電話越しに、楽しそうな笑い声が広がる。

その声を聞いて、ああ、いつも通り元気だなあとだけ思うのはどこかズレているのだろうか。

『ご想像の通り、マドリードまでお願いできるかな』

「はいはい、じゃあ明後日の午前四時から五時の間に、バルセロナの空港で降りてください。僕が一時間だけ空路を止めておきますから。降りた所に社員を向かわせますので。あとは社員に何とかしてもらおうように言っておきます」

『うう、いつもすまないねえ』

「そう思うなら、たまには顔を見せに来てよ」

『もちろんだよ!! 今回は無理だけどまたいずれ顔を見せに行くからね!!』

「楽しみにしてるよ、姉さん」

『じゃねー、東さんもセラの第三世代機「オルカ」を楽しみにしてるよ♪』

「ちよ、なんでそれを知ってるの!?!」

しかし、先に通信が切れてしまったため、沙良の叫びが束に届くことはなかった。

「……向こうもちやつかりハッキングしてるじゃないか」

—— おかしい、シークエストが完成してから、ハッキングに備えて、対策員を数人持ち回りで在住させていたはずなんだけど……

サイバー攻撃をリアルタイムに可視化、警告を発するプログラムも自作し、セキュリティ部門を独立させ自社で抱えるなど、並半端な攻撃では崩れないほどのセキュリティを誇っていると自負していたのだが、それも勘違いだったらしい。

一通りの流れを見ていた研究員たちは、沙良が振り向くとビクツとして身を硬くした。

その顔には笑顔が浮かんでいるが、目が明らかに笑ってない。

「……二週間のハック対策員って誰?」

その言葉に、研究員は、同期を庇おうと必死に言葉を重ねる。

「ほ、ほら、ハッキングされたといつても相手はあの篠ノ乃博士じゃないですか」

「そ、そうですよ。それを責めるなんて少し可哀相じゃないですか」

「セ、セラ。ほら、また好きって言つてたチエロス買って来てあげるから」

「ほら、ここにプリンがあるよ!？」 所長が楽しみに取つてたやつだけだ」

そこにたまたま所長が通りかかった。

「みんな集まつてどうした？ おいちよつと待て、それは私の」

「「「所長は黙つててください!!」」」

研究員の必死な説得により、沙良はしぶしぶプリンに手を伸ばす。

なんだかんだ言つても沙良も中学生である。好きなものが目の前に出てきたら、おい

それと欲望を封じてしまうことは難しい。

沙良がチビチビとプリンを食べ始めたのを見て、所長以外の研究員はホツと一息つ

く。

そのチビチビと食べる癖は小さい頃から変わらない。

研究員の安心した顔は、いつの間にか沙良を温かく見守る顔となつていた。

しかし、結局、ハック対策員は呼び出され、罰として束の手引きに駆り出されること

となつた。束に発信機を付けてこい、と命令を下されることになつた対策員は、涙目で

同期に助けを求めたのはまた別のお話。



「ロサ居る？」

そう言い、所長室を覗くと、そこには茶色の髪を後ろで結上げている二十台前半の女性が出たりとコーヒーを飲んでいた。

「カルラさん」

「あら、セラ。所長なら会議でしばらく帰ってこないわよ？」

「なんとタイミングの悪い」

カルラは自分の横をポンポンと叩く。

ここに座ればの合図だ。

これといって断る理由のない沙良はチョコンとそこに座る。

しかし、横に座ったはずが、いつの間にか膝に抱えられている。

「何で後ろから抱っこされてるのですか？」

「ちよっと待ってなさい。今、社長に自慢のメール送るから」

「お祖父ちゃんも頑張ってるんですから、あんまりいじめないであげてくださいね」

沙良は、ため息をつき。大人しくカルラの腕の中でじっとしている。

頭には、豊かな双丘が押し当てられているのだが、幼い頃から束に引付かれ、スペインに来てからは、同僚が全員年上の女性という環境で働いているのだ。そんなことは全く動じなくなっていた。

「それで、ロサに何か用でもあったの？」

「ちよつと機密事項なんですけど、聞きたい？」

「私を誰だと思ってるの？ 社長の右腕よ？」

「その右腕さんはこんなところで油売っていいんですか？」

「もちろんまずいわ」

「……」

今、沙良は「おじいちゃんにメール送ってたよね」とか思いつつも、指摘するのが面倒くさくなったので何も言わないことにする。

「で、何があったの？」

本当は軽々しく喋っていいようなことではないのだが、ロサに言ったところで、その報告を受け取るのはカルラなので、大した問題でもない。

そしてここはエスパーニャである。唯一、篠ノ束を追わない国である。

ましてや、研究所では東は沙良の姉として認識されているため、研究所の人間なら誰の耳に入っても大丈夫だろう。

「またあの兎さん連絡してきましてね。うちまで逃げ切りたいから手引きしてくれと」
兎さんとは東のことである。

沙良に会いに研究所に来たときに、その頭についたウサ耳から兎さんと研究所では呼ばれている。

「また？」

「またです」

「半年前にも来たばっかじゃない」

「それが、よりによってノルウエーに逃げちゃったから、東欧方面に逃げられなくなったんだって」

「それで、エスパーニヤ経由でアメリカにピョンかしら？」

「そこまでは知らないですけどね」

カルラは考える素振りを見せ、タブレット端末で社員のスケジュールを確認する。

胸が強く押し当てられる形となった沙良も、もう諦めたかのように何も言わない。

「出来れば、ハック対策員を連れてつてもらえませんか？」

そこで、カルラはパタッと携帯を閉じ、恐る恐る聞いてくる。

「まさか……ハックされたの?」

「兎さんにですけどね」

ホッと胸を撫で下ろすカルラ。

それを背中に感じ、沙良は少し機嫌が悪くなる。

「姉さんだからってハックされていい訳ありません」

「それでも荷が重いのは確かじゃない。兎さんは沙良レベルじゃないと無理よ」

「それはわかってますよ。でも、駄目です。ミスはミスです。お給料を貰っているならちゃんとその分は働かないと」

「会社員の鏡ね。……本当、世知辛いわ」

カルラは心の中で、先週のハック対策員に同情の念を送り、兎さん手引き作戦のメンバーにその名前を書き込むのであった。

沙良は用も言い終わったので、ソファァーから腰を浮かす。

「もう行っちゃうの?」

「うん、そろそろシエスタだからね。さつきザイダがチェロス買ってくれるって言うてたから、一緒に行こうと思って」

「そう、時間に遅れないように気をつけてね」

「そんなこといって油断させて覆面で護衛つけてるくせに」

「あら、気付いてたの？」

「そりゃ、ね」

「次からは見つからないように気をつけるように言っておくわ」

沙良は違うと身振りで表現する。

「そうじゃなくて、護衛を外して欲しいなあって」

「それは無理ね」

カルラはさもあつげらかんと言つたぐらいで肩をすくめる。

「なんで？」

「あの孫バカの社長がそんなの許すわけないもの」

カルラはコーヒを飲みながら、近くの雑誌を手取る。

「でも、僕だつて、専用機持ちなんだけどなあ。襲われたつて、襲つたほうが可哀相になるぐらいの戦力差があるのはカルラさんでも分かつてるでしょ？」

ペンダントの状態で待機しているシックエストを掴み、訴える

「ええ、分かつてるわよ」

「じゃあ」

「でも、衆人の前でISを起動できないでしょ？」

「うっそれは……」

「銃だつて未だに上手く扱えないじゃない。もう少し影でセラを守っている人たちに、感謝しなさい」

貴方が自由に過ごせるのはその人達のおかげなんだから。その言葉に、沙良はこくりと頷くしかなかった。

第二話 若い覚悟

沙良は机に突っ伏してダウンしていた。

なんせ先程の授業は、苦手なスペイン史だったのだ。人生の殆どを日本で暮らしていた沙良にとっては、全く分からないと言っても過言でもない。

そして、昨日はシークエストのテスト起動を行っていたため、疲れがたまっている。

「セラ？ 大丈夫？」

「ああ、ソフィ。もうお手上げだよ。数学なら得意なんだけど、どうしてもスペイン史はわからないよ」

「もう、普通は逆なんだけどね」

「そい言い、沙良の横に陣取った少女、ソフィアは笑った。

「飛び級したせいで覚える範囲が異常だよ……」

「セラは暗記物が苦手だよね」

「計算は得意なんだけどなあ。誰か、スペイン史教えてくれないかなあ」

「そ、それなら私——」

「数学教えてくれるならいいぜ」

「ちよつと、トニーー!!」

「やあ、トニー。いつも通り元気そうだね。僕にもその元気を分けてくれよ」

ソフィアの言葉を遮って表れたのは、クラスでも少ない男子の一人、短い茶髪が特徴のアントーニョである。アントーニョは沙良の前の席に座り、ニヤニヤと笑っている。

「ちよつと、トニーー! セラには私が教えるの!」

「どうしたソフィ? そんなに必死になっちゃって? もしかしてセラのことが」

「な、な、なに言ってるのよ!! ただ、セラが困ってたから助けてあげようとしただけよ!!」

「じゃあ、俺が教えといてやるよ。俺のほうがスペイン史は成績良いもんな。ほら、セラ。これがスペイン史のノート。どうせ、寝てて取ってないんだろ?」

アントーニョはUSBメモリーを投げよこした。

「御明察。僕がノート取るわけないよ」

「威張ってるんじゃないよ」

「痛」

軽くデコピンされて、二人で笑い出す。

ISの誕生による仮想ハードウェアの発達により、授業風景は目に見えて変わった。生徒一人一人にコンピューターが支給され、同じ教室でも違う授業を受けることすら可

能である。席は決まっておらず、生徒は学生証でもあるICカードをパソコンに読み込ませることで、学校のパソコンから自分用のアカウントでログインするのだ。そんな中でも、授業ではコンピュータとは別にノートはしっかりと取られている。それは、手で書いたほうが覚えがいいという昔からの習慣が残っているのだろう。しかし、それも紙という媒体ではなく、電子データに移り変わっているが。

「ちよつと、ほつたらかしのしないですよ！」

ソフィがトニーに食い付くのを、沙良は、仲が良いなあといった目で見ている。

「おいおい、良いのか？ 確実にセラが勘違いしてるぞ？」

「え？ いや、セラ？」

アントーニョの胸倉を掴んだまま、視線だけが沙良の方に向かう。

「二人は相変わらず仲がいいね」

「ち、違」

「二人のジヤマにならないようにちよつと席を外そうか？」

「待つて！ 違う。セラは勘違いしてるよ!？」

明らかかな好意を見せられても全く気付く素振りの見せない沙良を見て、アントーニョは自分の幼馴染に心から同情するのであった。

ソフィアとアントーニョは幼馴染である。

故に昔から一緒につるんで来たし、付き合ってるのではないかと冷やかされたことも少なくはない。

アントーニヨは恋愛感情を向けては居ない。それはソフィアも同じだ。だからこそ、この長い期間男女間で友情を築けたのだ。

その大切な幼馴染が、今では親友とも言える少年に恋心を抱いていると知った時は驚いたが、同時に応援しようと思ったものだ。しかし、生憎親友を好いている人間は多すぎた。

「ルイス君いる？」

教室の扉に近い生徒が沙良の名前を呼んだ。

「ちっ」

「居ますよー」

生徒が扉の外を指で示すと、誰かに呼び出されたのかと察した沙良が会釈を返し、席を立った。

「おい、あからさまに態度に出すなよ」

「あん？ 何よ、トニーは心配じゃないの？」

「まあ俺としてはお前とくつついてくれた方が安心するというのが本心だが、誰を選ぶかはセラしだいだからな」

「何、その余裕ムカつく」

「それだけ、あいつが鈍感ってことだよ」

IS業界に若くから関わる沙良は、スペインでは有名人であり、その活躍は多岐に渡る。最近ではスポンサーを得るためにモデル活動を始めたことも記憶に新しい。

それゆえ周りには女子が常に群がり、ロッカーには手紙や小包が山のように積み重なる。

それを沙良は、「僕も有名になったんだね。研究費用が増えるといいなあ」と何処かズレた回答をするのだ。

告白もストレートに言わないと伝わらず、仮に「好きです」と伝えても「ん？ 何が？」と返すような人間である。

今もまた告白が上手く伝わらなかったのか、出歯亀に出ていた生徒が苦笑と共に席に戻っていく。

「ほらな？ 心配するだけ無駄だって。それに、セラは信頼したやつにしか靡かないのは知ってるだろ？」

「……そうね」

「ただいまー」

「お帰り」

「おかえり」

「何話してたの？」

アントーニョとソフィアは顔を合わせてくすりと笑った。

「内緒だよ」



スペイン第二世代機【シークエスト】

その開発とテストパイロットに携わっている沙良の存在は、シークエストを発表していない外国とは違い、国内では隠し通せるわけがなかった。

まさしく英雄である。

IS技術後進国であるスペインに、いち早く第二世代機をもたらした立役者。

その代表的な論文、『深海におけるISの運用の可能性』は世界中で評価されている。

その姓である『ルイス』は英雄という意味が付加され、その『サラ』と言う名はその年の赤ん坊の名に多く採用された。

沙良が、S・Q社に出入りしている事を多くの人が知っている。

それは、沙良が通う学校でも同じことだ。むしろ、より多感にISに興味を向ける若い世代の方が、沙良への憧れの意識は強くなる傾向があった。

沙良自身が考えている以上に、学園では注目を集めている。

沙良は、その仕事の性質上、学校を休まなければいけない時が多々ある。

既に国民が知っていることだが、沙良は信頼できる友人にのみ、自分がスペイン唯一の国産モデルIS「シークエスト」を開発していると自らの口で伝えてある。

だから、沙良に好意を持つソフィアがあんなことを言い出してもおかしくはないのだった。

「もう直ぐミドルも卒業かあ。結局七年しか飛び級できなかったなあ」

「七年飛び級できるだけおかしいだろ。セラが来るまで学年一位の俺でさえ一年飛び級が精一杯だぞ?」

実際には沙良はこのミドルスクールでは二年しか飛び級していないのだが、沙良は既に高校卒業同等の学力があると認められて大学の入学が認められている。その単位数も順調に二年分取得しているため、結果として七年飛び級していることになる。

「そっつかない?」

「そうなんだよ」

「トニーはこのハイスクール行くの？」

「まあ持ち上がりでこのままかな。ここらでは一番の進学校だしな。セラは？」

「僕も同じ。ハイスクールに通いつつカレッジに通うことになるかな」

「あんたたちは気楽でいいわね。卒業考査が先にあるでしょ」

「あんなの落ちる人いるの？」

沙良はまたまたーと手をひらひらさせて笑う。

「おいセラ、止めろ、ソフィの去年度の期末考査日本語の成績を思い出せ」

「はっ、確か落第ギリギリ」

「止めろ、哀れになる」

「あんた達ねえ……!!」

明らかにからかう気満々のアントーニョはともかく、無自覚の沙良が一番性質が悪い。

「おい、待て冗談だ、止めろ」

「もう許さない!!」

「はい、もう怒らないで、ご飯食べよ？」

何時までもじやれてないでさ、とお弁当を開きだした沙良に、お前も原因だと鋭い視

線が突き刺さる。

「ソフィはどこハイスクール行くの？」

色とりどりの具材が挟まったサンドイッチを口に運びながら沙良が聞く。

「日本に、IS学園に行くわ」

沙良は飲んでいた紅茶を噴出してしまい、目の前のアントーニョに迷惑そうな顔をされる。

そのときに自分のお弁当に少し紅茶がかかってしまったが、今はそんなこと言っていない場合じゃない。

「ゴホツゴホツ！ ソフィ、本気で言ってるの？」

「もちろん本気よ。これを見て」

渡されたのは、先日行われたIS適性テストの結果だろう。

そこには、Aの文字が。

「私、ISを動かせると判明したわ」

沙良は、驚きを隠せずにソフィアの顔を見つめる。

アントーニョは予め話を聞いていたのだろう。驚いている素振りが全く見えない。

「来月、シークエストが量産機として世界に発表されるのよね？」

シークエストはついに世界にその姿を見せるときが来た。

それは、世界が、既に第三世代機の研究に乗り出して、後進国であるスペインが第二世代機を量産してもおかしくないと政府が判断したためである。

もちろん、中学生である沙良の存在はあまり表に立たない。

その開発代表者は所長であるロサの名前になり、テストパイロットは架空の人物で発表されることとなっている。

「そうだね。三週間後の世界会議でエスパリーニャは開発戦争に足を踏み入れることになる」

それは沙良にとって、より世界と関わっていくこととなる。

「既に、IS学園には先進国が、そのISを送り込んで競い合っているんでしょ？ ならエスパリーニャも負けていられない。私が、セラの機体の実力を、エスパリーニャの技術力を証明して見せる」

沙良はその真摯な瞳に何も言えなくなる。

「私は、卒業後、ISに乗るために一年間訓練を受ける。そして、代表候補生になって専用機としてシークエストを手に入れてIS学園に行くわ」

アントーニョを見ると、首を横に振る。

止めても無駄だ。

そう言っているのだろう。

その真つ直ぐすぎる思いに、沙良はある決意を固める。

「代表候補生になるための条件は知ってるの？」

「政府による訓練施設に入り、ある一定の成績を収めることよね？」

「そう。じゃあ、その訓練施設に入る条件も知ってるよね？」

「……一般試験を受けて合格したら」

「エスパーニャでは一般人に対しての試験は行われていないって知ってるでしょ？ なんせ、世界から見たらまだISの開発後進国だと思われてるんだから」

「……現在の代表か代表候補生に推薦してもらうか、企業などにテストパイロットとして配属され、ある一定の結果を出せたら試験を受けれる」

「ここで、聞くけど、当てるはあるの？」

「う、」

「もしかして、これから代表と代表候補生に接触するなんて、非効率な方法を取ろうとしてたんじやないだろうね？」

「……」

目が泳ぎだしたソフィアに、今まで黙っていたアントーニョがため息を吐きながら話しかける。

「だから、もう少し計画を煮詰めてから話をしたほうが良いと言っただろ」

「だって……」

そのシヨボンと落ち込むソフィアに、沙良は真剣に問いかける。

「ソフィア」

「な、なに？」

急に名前と呼ばれたことで、背筋をピンと伸ばしたソフィアに、沙良はゆつくりと話し出す。

「ただ、IS乗りとしてではなくて、代表候補生となり、あろうことか専用機を手に入れる。それは汚いことにも少なからず、触れていくことになるとは分かってるね」

ソフィアは力強く頷く。

「代表候補生は、その国に何かがあった場合、そのISを持ってして事態に当たらないといけない。それは、自分の命に関わることにもなる。ソフィアのその意志は、命を賭ける程の価値があるんだね？」

ソフィアは迷うことなく頷く。

「そう、決意は本物なんだね。……で、その意志は、僕のため？」

そう沙良が問いかけるとソフィアは顔を真っ赤にして頷いた。

「ソフィアのその気持ちは友達として？ それともまた別の気持ちとして？」

沙良は自分より一っだけ年上のソフィアにそう聞いた。

ソフィアは言いづらそうにもじもじしている。

「その、えつと……全部」

その答えを聞いて、沙良は決意を確かなものにした。

このときにソフィアは別な気持ち、つまり恋心もあるといった意味で、全部と言ったのだが、沙良はそのことには全く気付いていなかった。

その事に気づいたアントーニョは、こつそりとため息を吐いていた。

「分かった。もうこれ以上聞かない。放課後、予定を空けておいて。僕がコネになるよ」
そういい、沙良は携帯端末を取り出し、耳に当てた。

『もしもし、ロサ？ うん、僕。ちよつといいかな。うん、カルラさんそこにいる？』

「何語？」

「日本語だろ？ てか、ISに乗りたいたいなら日本語も勉強しとけよ」

「英語すらまともに話せない私が出来るとでも？」

「胸張つていうことか」

「えへへ」

「本当にね」

「あ、終わった？」

いつの間にか通話を終えていた沙良が残りのサンドイッチに口をつける。

「とりあえずは日本語からだね」

「あう……」

ソフィアはガクツと額を机にぶつけるのだった。



放課後、ソフィアは沙良と共にS Q社の本社を歩いていた。

綺麗なオフィスを肩身を狭く感じながら歩いていく。

廊下を歩き、透明な仕切りに分けられたオフィスでは多くの人間が忙しそうに動き回っている。

会議室らしき部屋からは、言い争う声が聞こえてくるし、そこかしこから怒鳴り声が聞こえてくる。

そして、通りすぎる社員は、必ずと喋っているほど、沙良に挨拶をしていく。

周りの視線がやけに自分に向いていると感じるのは、恐らくは自意識過剰ではないだろう。

沙良と歩く自分がその噂話の種になっているのは想像できる。

そのひそひそと漏れる会話は、エスパニーヤだといふのにどれも理解できない。

「()だよ」

通された部屋には髪を結い上げた若い女性が座っていた。

恐らくだが二十代の前半だろう。だが、その若さの中に落ち着いた大人っぽさが内在している。不思議な雰囲気を持つ美女だ。

『あら、この子がセラの言ってた子?』

『うん、そう、ソフィア・アルファード・クリエル。僕の大切な友達。あと、日本語が話せないから』

『それは大きな減点ポイントよ?』

『僕の顔を立てると思ってる、ね?』

『調子のいいときだけ可愛い顔して……貸し一だから』

『ありがとう、カルラさん大好き』

『せめて棒読みだけは止めなさい』

日本語と思われる会話に、居心地の悪さを覚えていると、ようやく美女の視線がこちらの姿を捉えた。

「こんにちは、あなたがセラの言っていた子ね。私はカルラ・ファリーノス・イエロよ。気軽にカルラお姉さまと呼んでくれて構わないわ」

お姉さまという単語が出た瞬間、沙良がカルラの足を踏みつけた。

軽い冗談だったのだろうが、それよりもようやく聞こえてきたスペイン語にソフィアはほっと息をつく。

「は、はい。ソフィア・アルファード・クリエルです。よろしくお願いします!!」
深々と頭を下げる。

「あの子から話は聞いているわ。でも、こちらもそう簡単に頷くことは出来ないから、軽いテストを受けてもらおうわね」

テストと聞いて身体が強張るが、これはチャンスだと自分に言い聞かせ、鼓舞するよ
うに声を上げる。

「はい!!」

「ついてきなさい」

後ろを確認することもなく先々と進むその背中を、慌てて追いかけていく。

「頑張つて」

後ろから掛けられる声に、振り向くことはせずに、片手を挙げることで対応とし、
行く背中を追い続けるのだった。



多くの実験機が並ぶ整備室兼ハンガー。

そこには多くの研究者や技術者が、自分の担当の仕事に熱を入れている。

翠瞳の少年も、周りの大人たちに負けじと、額に汗を浮かべながら手を動かしていた。

「どうだった?」

外部装甲をパージし、片腕を突っ込んで内部配線を弄っているその少年は、一人の人間に声を掛ける。

その主語も目的語もない問いかけに答えるのは、スーツという整備室には浮いた姿の女性。

「まあ、やる気は充分ね。落第ギリギリと聞いてたけど、平均よりは頭もいいみたいだし。何よりもあの適正は捨てがたいわね」

「ふーん」

「自分で推薦しといて乗り気じゃないわね」

「そりゃ、友達が危険な仕事をしようとしてるのに、諸手を挙げて喜ぶなんて出来ない
さ」

「でも、危険だけど、自分の手の届かないところよりはって事でしょ？ 本当にあの子が大切なのね。嫉妬しちやいそ」

「はいはい、カルラさんも大切ですよ」

「投げやりね」

カルラは懐から煙草を取り出すと、慣れた手つきで火をつけた。

「煙草臭い」

「それは煙草を吸っていれば臭いでしょうね」

「吸うなって言ってるの」

「ケチね」

はあと沙良は深くため息をつく。

「で、ソフィはどうすんの？」

「あら、愛称で呼んでるのね」

「ぶっ飛ばすよ？」

「あら怖い怖い。まああの子はやる気あるみたいだし、何よりもセラに対して不利となることはしないでしょ？ なら歓迎よ。この会社はセラの味方にはとことん優しいつもりよ。」

「全く過保護なこと。で、ソフィは？」

「大量の書類と睨めっこ中よ。誓約書とかも多いから時間が掛かると思うわ。それに引越しの手続きもしないといけないしね」

「引越し？」

「そりやそうよ、わざわざ実家から通うなんて無駄の極みじゃない。情報もそういうところから漏れるのよ？ まあ言い方は悪いけど、しばらくは隔離と監視を兼ねて寮生活ね。あの子もそっちの方が楽でしょう」

ふーんと興味なさそうに反応する少年は、機体弄りに意識の大半を向ける。

たまに飛んでくる火花に、カルラは顔を顰めるが、沙良はお構い無しに甲高い金属音を鳴らす。

「興味なさそうにしてるけど、あの子の部屋が準備できるまでは、セラと一緒に部屋に入ってもらおうから」

「はあ!？」

今まで何処吹く風と聞き流していた沙良が、一番大きな反応を示した。

「だって知らない人と同部屋より、セラと一緒にの方が落ち着くでしょう？ それに寮の室割を弄ることもなくて、管理課の仕事も少なくて、私の仕事も減って、面倒はセラに押し付けられる。良いこと尽くめじゃない」

「後半が大半を占めてるんじゃないだろうね……」

「そりやそうよ。個人的な理由を優先するほど、会社は甘くないわよ。まあ精々間違いを犯さないように健全な生活をしなさいね。まあ起こるとしたら貴方が襲われる立場だと思うけど」

「はは、僕が襲われる？ それはないよ」

「……あの子も大変ね」

「何か言った？」

機械音が鳴り響く室内ではカルラの眩きは拾われることはなかったようだ。

「何でもないわ。じゃあお仕事頑張って」

「うん、お疲れ様」

片手を挙げる沙良に、同じように片手を挙げて応える。

「ええ、お疲れ様」

カルラはゆっくりと紫煙をふかしながら、ハンガーを後にするのだった。

第三話 たわいもない日常

ソフィアが沙良の部屋に泊り込んで訓練を行なうようになってから既に二週間がたっていた。

日々、身体作りにトレーニングを重ね、あらゆる武術を学び、ISの基礎を学ぶ。

その疲労は想像するに容易い。

身体には多くの生傷や、痣を拵え、筋肉痛で満足に歩くことも困難である。

この日も早朝からトレーニングに出かけ、午前だけの授業をこなし、SQ社で専門の講師を招き学習や訓練に励んでいた。

その残骸とも言えるものが、開発で疲れて返ってきた沙良の目の前に転がっていた。

「……ソフィ、玄関で寝ないで。邪魔」

限界を開けると、床にうつぶせに倒れている少女の姿があった。その服装は乱れ、髪もボサボサ。そして、その目は生気を映してはいない。

「……うう、あ」

「パンツ見えてるよ」

「……」

「隠す元気があるなら大丈夫だね。僕はお風呂入って来るから、上がってくるまでに勉強の準備しといてね」

ソフィアの一日は、自らの部屋に戻っても終わりではない。疲れた身体に鞭を打つて、無理やり学校の勉強を詰め込むのだ。

日本語が苦手なソフィアは、毎日のように夜遅くまで日本語の勉強を沙良と行なうのが日課となりつつある。

「ちよつと、何時まで寝てんのさ」

バスタオルと着替えを片手で持った沙良がソフィアの身体を足でつつく。

これは悪戯でもなんでもなく、ソフィアが脱衣所の前で寝てるから退けと暗に言いたいのだ。

「……もう、限界」

筋肉痛で悲鳴を上げる身体で床を這うように移動しながら、かすれた声で訴える。

「うん、じゃあ限界を越えるまで頑張ってみようか」

脱衣所に消えていった沙良はとても良い笑顔でそう言い遣して行った。

「……死ぬ」

ここは地獄か、鬼の巣なのか。

鞭だけでは人間生きていけないと声高らかに叫びたい。

「あ、そうだ。勉強する前にマッサージしてあげるからマット出しといて」

訂正、地獄には間違いないが、きちんと飴が用意されているようだ。

「セラの……マッサージ……」

想い人が自分のためを思っで行なってくれるご褒美。

それも直接、手が触れる系統の。

ソフィアも、思春期の少女なのだ、こんな美味しい御褒美を目の前にして動かないわけがない。

こうして、少女は襪履雑巾なりながらも、飴と鞭による辛い訓練を乗り越えていくのである。

「……とりあえず、マット」

痛む身体を引き摺り、マットを引き、机に勉強道具をセットすると、マットにうつ伏せで倒れこむ。

シャワーの音だけが部屋を支配し、少女はただ水音が止むのを待つのであった。



「……………い……………ソフイ！」

「はいー！」

「ぼつと身体を起こすと、そこには天使がいた。

「おはよう」

「な、何分立った？」

「三十分ぐらい」

「どうやら、疲れに負けて眠ってしまっただようだ。

「少しだが、身体のだるさも取れている気がする。」

「待ってる間で授業中の復習ぐらい出来たでしょ？ 何で寝てるの？」

「い、痛いー、待って、筋肉痛で、あ、そこは押さないで！」

訂正。天使の顔をした鬼がいた。恋する乙女のフィルターを通してみても、その所業は天使とは思えない。

「たまにはご褒美あげないとなくなっと思って、マッサージしてあげようと思ったのになあ、これだもんなあ」

「痛い痛い痛い痛いごめんなさい！！ 人間の関節はそっちには曲がらないからあ！！」

「筋肉痛に加え、関節を決められる痛み悲鳴を上げる。」

しかし、湯上りの沙良に密着されて内心ラッキーと思っているのは内緒だが。

「ま、ソフィが頑張っているのは見ててわかるからね、お疲れ様」

「あう……」

関節を開放されたと思つたら、そのままマッサージが開始された。

その心地よさについて声が漏れる。

「ん、どう？ ふう、んっしょ。痛く、ない？」

「うん、気持ち良い……」

——それに吐息がエロイです、はい。何、あの風呂上りで上気した頬。肩から覗く鎖骨とかもう色っぽ過ぎて、身体が動いてたら押し倒したよ!?

「ん……しょ。今、なんか変なこと考えてるでしょ」

「ソナナコトナイワヨ」

「ふーん」

「な、何？」

「チラチラと鎖骨見てるよね？」

「——っ!!」

ばれてたかーと枕にクツシヨンに顔を押し付けて、照れ隠しを試みる。

「まあ、見ても減る物じゃないし良いけどさ。何処か重点的にやって欲しいところある？」

「足、とか」

「りようかい」

痛かったら言つてねーと沙良は乳酸が溜まりきった足を揉みしだく。

「あああ……」

これが天国か。

今までの地獄の日々も、この天国の存在を知つていれば耐えられる気がする。

「じゃあ痛くするよー」

「痛たたたたたたたたたた!!!」

そんな妄想も一瞬で碎かれ、一瞬で地獄を見たソフィアは、暴れてもなお、未だに足裏を指圧している沙良をバシバシと叩く。

飴と鞭の比率が明らかにおかしいと、ソフィアは訴えなくなる衝動をグツと押さえる。

「痛い痛い!! 冗談抜きで!! 足ツボはやバイつて!!」

「ちよつと、暴れないで。押しにくいから」

「ああああああ!! 痛いつてえええ!!」

「はい終了」

「はあ、はあ、はあ」

もう無理、そう眩いた途端だった。

「次は反対の足だね」

「ああ痛あああ!!」

しかも今度は暴れられないように海老反りの体勢で足をホールドされているため、床をバシバシ叩くことしか痛みを訴えることが出来ない。

「ちよつと、下の人に迷惑だから止めてよ」

「じゃあ、足ツボをやめてよおおお!!」

「ここで最後だから頑張つて」

「ああああああ痛ついつて、ば!!」

「はい、しゅーりよー。痛かったけど、足は楽になったでしょ?」

「はあ、はあ、ん、確かに、楽にはなった、かな?」

「次、どこ揉んで欲しい?」

「お尻とか?」

「お尻凝る様なことやつてないでしょ」

軽くお尻を叩かれる。

「じゃあ胸?」

「セクハラで訴えるよ?」

実際には結構な勇気を以って言ってみたのだが、あっけなく流されてしまう。

「定番だけど腰が限界きてるからお願い」

「はいはい」

すぐに手が伸びてきて、背骨の付け根をぐりぐりと指圧される。

「うう……」

手の平の下部による指圧も加わり、ソフィアの口からは吐息が漏れるようになる。

「はあ……セラ、どこでマッサージなんて覚えたの？」

「ん、言ったことなかったっけ？ 日本にいる兄弟みたいな子の話」

「イチカだっけ？」

「そうそれ。その一夏がマッサージが上手くてね。一緒にやり合ってるうちに覚えちゃった」

「へー……」

「ソフィ？ もしかして眠い？」

「んー」

「ん、じゃあ今日のお勉強はいいや。このまま寝ていいよ」

「ほんと？」

「本当、本当。その代わり明日から三日間訓練が無しになって、勉強の時間が増えるから

ね」

「はい」

マッサージュもただ指圧や揉むだけではなく左右から圧迫したり、リンパ腺にそって擦ったり、軽く叩いたり、バリエーションを持たせ、ソフィアの睡魔を誘う。

「このまま寝てもいいよ。ベッドまで運ぶから」

その声を聞いた後、瞼を開けるのが辛くなり、そのまま瞼を閉じてしまう。

最後、意識が落ちる前に聞こえてきた「おやすみ」に、声に出さずに「おやすみ」と返すと、ソフィアの意識は眠りに落ちていくのだった。



「で、訓練はどうした？」

「今日はお休み……てか三日間は休息日なんだって。良くわかんないけど昨日セラが言ってた」

ああ、筋肉の回復を待つのか、と少年が問いかける。

しかし、問いかけられた少女は、昨日のマツサージは気持ちよかつたなあと頬に手を当て、くねくねと気持ちの悪い動きをしていた。

腰に当たる太ももの感触があ、といいつつ肩をバシバシと叩いてくる幼馴染を放つておいて、少年は手元に視線を戻す。

「えつと……この料理は303卓か」

「ちよつとトニー、私の話を聞いているの?」

「ああ、聞いている聞いている。今日は海老とマツシユルムのアヒージョが美味そうって話だろ? いい海老が入ったんだ、味は保障するぜ」

手元の料理を視線で示し、胸を張る。

「ちよつと聞いてないじゃない。つまりは、私の天使がいかに天使かって話よ」

くだらないと肩を竦め、料理に手を伸ばすソフィアの腕から料理を遠ざける。

「誰がお前の天使だよ。てか摘まもうとするんじゃない。これは向こうの卓の客のだ。食いたかったら自分で注文しろ」

「何よケチ。そんなんだからモテないのよ」

「同じ台詞をあそこの客に言つて来いバカ野郎。それに俺はそこそこモテる」

「バカつて何よ!?!」

「てか、まず仕事からだ。話しかけんな。もう直ぐで休憩に入るから大人しくカウンターでジュースでも飲んでセラが来るまで待つてろ」

幼馴染に冷たくあしらわれたソフィアは、ブスツと不貞腐れたようにカウンターに突っ伏した。

今日は休息日ということで、一切の訓練が休みとなった。沙良曰く、休むのも訓練のうちだとか。

それならばと、最近足を運んでいなかった三人のたまり場に集まろうという話になったのがつい先ほどだ。

咄嗟に決めたため、アントーニヨは仕事、沙良は学校の用事で遅れている。

その間、ソフィアは一人で、三人のたまり場、アントーニヨの実家であるリストランテ・パール『トルメンタ』のカウンターで店の主のアントーニヨの父親に構ってもらっていた。

「ははは、ソフィちゃんも不貞腐れてないで何か飲みね。おっちゃんの奢りだよ」

「おじさん……」

「親父、あんま甘やかすな」

「おっと、うちの若いバーテンダーがお怒りだ」

「本当ケチね。誰に似たのかしら」

「そりや母さんだろ」

「違いねえ」

カウンターの主がからからと笑う。

「そろそろセラが来るころか？ お、噂をすれば」

扉が開き、いらつしやいませの声にそちらを向いてみると、翠の目に茶色が混ざった黒髪の少年がキョロキョロと何かを探しているような素振りを見せている。

「案内行つてくるわ」

アントーニョが沙良を出迎えに行くと、案の定沙良は常連客に捕まっております、あたふたと戸惑っている。

「お客さん、すみません。こいつは今日はこっちの貸切なんで勘弁してやってください」

「トニー、遅い！」

「いや、なんでもありません。勘違いでした。どうぞご自由に」

「わー嘘、嘘!! 待つてたよ、ありがとう！」

まるで漫才のような掛け合いに、店内がドツと沸いた。

「相変わらずお前ら三人組は仲良いな」

「まあ親友なんで」

トニーがあっけらかんと言いのたまう。

「そんな三人に乾杯!!」

「「乾杯!!」」

常連客やノリの良い客が一齐にジョッキを掲げ、アルコールを呷る。

そして、一齐にドリंकのおかわりの声が殺到し、アントーニョはご注文ありがとう
ございますと営業スマイルを浮かべるのだった。

「んで、お前はこんなところで暢気に飯を食つてる場合か？」

「ほえ？」

沙良を連れて戻ると、何時の間に注文していたのか、魚介のパエリア、蛸のトマト煮、
イベリコ豚のアヒージョ、牛頬の煮込みガーリックトースト添えなど多くの料理がカウ
ンターに並んでいた。

「とりあえず、口に入れてるものを飲み込め」

頷き、もぐもぐと口を動かすソフィアに、はあとため息が漏れる。

「三日後に迫った卒業考査の勉強に来たんじやないのかお前は」

ハツと今思い出したようなリアクションに、沙良もついぷつと吹き出してしまふ。

「いや、セラ笑い事じゃねえぞ。こいつ、この二週間授業中寝てやがるからマジでヤバ
イ」

「は？」

「ちよつとそれは内緒って」

「ソフィア？」

「す、すいません……つい、太陽が気持ちよくて」

「よし、休息日は全部お勉強だね。この三日間付きっ切りでみつちりしごいてあげるよ」
「ええええええ！ そんな御無体なあああ!!」



「終わったあ」

グツと背伸びをして、凝り固まった身体を解す。

三日間に亘る卒業考査は、座りっぱなしの生徒の関節と精神をガリガリと削っていた。

「お疲れさん」

「あ、トニーお疲れ。どうだった？」

「まあ日本語の問三の引っ掛けが難しかったが、ほぼ取れてるだろ」

「流石、学年次席」

「首席に言われても嬉しくともなんともねえよ」

「ははは、ごめんごめん。ソフィは？」

アントーニョが親指で背後を示す。

その先に視線を向けてみると。

「おおう」

真つ白に燃え尽きた少女が椅子にもたれ掛かっていた。

「あれは、どう捉えたらいいの？」

「まあ卒業考査はハイスクールの入試にも関わってくるからな。持ち上がりとはいえ、

この辺りでは一番の進学校だし、その基準点に達してねえんじゃないのか」

ちなみに、基準点とは十一教科平均八十点取れていればパスとなる。

「哀れだね、ソフィ……」

「本当にな」

「まあ僕たちがみんな同じ学校を受けるってことで、学校側も何らかのアクション取る

でしょ」

「まあ内申か一芸か」

「ソフィはもう、うちで訓練を始めてるし、一芸なら確実に受かるでしょ。未来の国家代

表だよ?」

「そんなに才能あんのか?」

「まあ才能もあるけど、何よりもその才能に胡坐を搔かないのがソフィの長所だよ。努力する天才ほど応援したくなるものはないさ」

「ふーん」

「寂しい?」

「そんなんじゃないやねえよ。って言いたいけど、まあ仲間はずれは寂しいな」

「ふーん」

「何ニヤニヤしてんだ気持ち悪いな」

「僕もトニーがいないと寂しいな」

「はいはい言ってる。頻繁にうちに晩飯食いに来てんじゃないやねえか」

言葉と裏腹に、その手は沙良の頭をわしゃわしゃと撫でている。

「おっと、そろそろ時間か」

「どこ行くの?」

「呼び出し、ちよいと屋上までな」

「ああ、お礼参りってやつだね」

「そつちじゃねえよ、バカ。お前の苦手な恋愛方面だよ」

「へー、トニーモテモテだねー」

ニヤニヤとトニーの脇をつつく。

「お前には言われたくねえよ鈍感野郎が」

「敏感だよー。脇とか」

「そういうこつちやねえよ、バカ……………ソフィが哀れで仕方ねえ」

はあとため息を吐き、小声で何かを呟くが、そこまでは沙良には聞き取ることが出来なかった。

「俺はそろそろ行つて来る。お前らは先帰つてろよ。今日はうちで会社の奴等と飯食うんだろ？ 大人数の予約が入つてたし。また、そんな時にな」

「はーい行つてらっしゃい」

片手を挙げて教室から出て行くアントーニヨを見送る。

何時までもフリーズしている少女に目を向けると、一つため息をつき、一緒に帰るためにフリーズを解きに掛かるのだった。

「あれ、ロッカーは寄らないの？」

「昨日のうちに全部持ち帰ってるから大丈夫」

「じゃあちよつと待ってて」

そう声をかけ、自分のロッカーから荷物を全部取り出すと、それを持ってきていた大きな目のカバンに詰め込む。

その際に沙良のロッカーを見ると、案の定在るわ在るわ。ロッカーに詰まった手紙や小包の数。

「哀れだ……」

少しでも沙良のことを理解してれば、最終日に慌てて持つて帰るような性格ではないことぐらい分かるだろうに。

少しでも沙良と仲良くしていた者は、いまごろ沙良に直接アタックしている。

ソフィアがいると、みんな遠慮してるのか沙良に関わらないが、ソフィアが居なくなると、急に積極的になる。

それを、分かってて態々一人の時間を作ってあげたソフィアの余裕は、恐らくライブル共には伝わらないだろうが。

「これも、持つて行ってやるか……」

鞆にはまだ余裕もあることだ。今日ぐらいは優しさを見せても良いだろう。なんせ今日は特別な日なのだから。

第四話 酒場

「では皆様、この度は態々ご足労頂きとてもありがとうございます!!」

三人のたまり場、『トルメンタ』。

そのテーブルやカウンターは、白衣やスーツを着た女性に埋め尽くされていた。

その中で、普段フラメンコなどに使われるステージから、大きな声を挙げる女性が一
人。

態々持ち込んだのであろうマイクを手に、注目を集めている。

「堅苦しいのはいいから早くしろよ!」

「そうだそうだ!」

「うるさい! 今日は大変な日でしょ、言わせなさい!!」

「どれだけ私たちがこの日を待ったと思ってるんだ」

野次が飛び、スーツと白衣が喧嘩を始める。

しかし、司会はそれを無視し、演説を進める。

「今日は素晴らしい日です。何せ、私たちの魂の結晶がついに世界に飛び立つのですから!!」

その声に、集まった者共が手を高く掲げる。

「「「うおおおー！！！！」」」

「では、モニターを注目!!」

皆がモニターを注視し、騒がしかった空気が、一瞬で深々となる

店の大型モニターに映し出されているのは、欧州会議の生中継。

そこにエスパニーヤ代表として大統領が座るその横に、所長であるロサの姿があった。

そのロサが、スツと席を立った。

店内が息を飲む。

そして、ロサが壇上に立ち、呼吸を整え、キツと前を向く。

『今回発表するのはスペインが開発した量産型第二世代機【SeaQuest】です』

そして、ロサの後ろの特大モニターに、シークエストの詳細データが映し出される。

「おお」

「「「おおおおおおお!!」」」

ついに、世界にスペイン国産ISが発表された瞬間だった。

激しく盛り上がる会場。

それに油を注ぐように、司会が催し物を進める。

「そして、ここにこんなものを用意しました」

そう言つて連れてこられたのは、沙良に手を引かれたソフィア。

皆がなんだなんだとぎわめく中、この催しを予め聞いていたのか、ニヤニヤする白衣たち。

対照的に緊張にガチガチと固まってしまったソフィアに、頑張れとの声が掛かる。

「ここに居るのは皆さんご存知、我々の天使サラ・ルイス!!」

とりあえず手を挙げて観客に応える沙良。

抱いて、押し倒したい、など黄色い歓声というよりは頭ピンクなんじゃないかと思われる歓声が飛んで、つい顔を引き攣らせてしまう。

「そして、皆さんご存知、天使に恋するわが社のマスコット件下僕のソフィア・アルファード」

頑張つてー、など暖かい歓声にホツとした笑みを見せるソフィア。

「それでは、二人とも、あとは任せた」

二人でこくりと頷くと、司会はステージを降りる。

二人は小声で何か会話をすると、沙良が後ろに下がって、コンピュータを用意した。ソフィアが沙良に目で合図を送ると、深呼吸し、自然体の状態で目を閉じる。

瞬間、ソフィアの首に掛けられた青いペンダントが光を放ち、光の粒子がソフィアの

身体を包み込んだ。

その工程は、皆の記憶を揺さぶる。

この会社で働いていて、あの光を知らない者はいないだろう。

ISの展開。

光の粒子が形作ったのは先ほど、モニターで見たものと全く同じ。

まるで深海をそのまま表したような青。

違う点はそれを人が装着しているという点だけだろう。

スペイン製水域特化型IS「シークエスト」を纏ったソフィアがそこに立っていた。

ここにいる者たちは、シークエスト自体は見たことがあっても、実際に稼動しているところを見る機会は殆どない。それこそ、開発部の、実際に計測や実験に携わる一部の者たちだけだ。

そのISが自分の目の前で実際に動いている。その感動は臆断に難しい。

そして、一番感動しているのは、誰でもないソフィアだろう。

初めてISを装着したソフィアは、つい涙腺が緩くなってしまう。

このISを纏うため、そのために辛く厳しい訓練に耐えてきたのだ。

それを知っている社員はもらい泣きをしてしまう。

「どう、気分は？」

沙良がソフィアに話しかける。

ソフィアは涙を流し頷く。感極まって喋ることが出来ないのだ。

それを汲み取った沙良は、ソフィアに抱きつく。機体を身につけ背が高くなったソフィアの首に両手を回し、その身をソフィアに任せる。

「ほら、ここがゴールじゃないでしょ？」

ただそれだけの言葉で充分だった。ソフィアはボロボロと涙を流すと、沙良をぎゅつと抱きしめた。

社員が口笛を吹き、拍手喝采の会場に冷やかしの声上がるも、暖かい雰囲気には包まれた。

「ほら、ソフィ、乾杯するよ？」

沙良は、ポンポンとソフィアの頭を撫でると、離してくるようをお願いする。

地面に足をつけた沙良は、用意されていたグラスを手にとると、それを高く掲げた。

「みんなグラス持つて!!……シークエストと我が社の栄光の未来に対して、乾杯!!」

「乾杯!!」



熱狂する空気の中、この喧騒をカウンターから眺める二人の少年がいた。

一人は席に腰掛け、もう一人はカウンターの中で、シェーカーを振っている。

「おい、主役はあそこに居なくていいのか？」

「冗談。あんなどころに入っちゃうと汚されちゃうよ」

アントーニョの視線の先には服を脱ぎ始めた女たちを必死に止めようとするソフィアの姿があつた。

しかし、ミイラ取りがミイラとなるとはこのことか、止めようとしているソフィアを脱がそうと数人の酔っ払いがソフィアの服を引っ張る。

「ああ、目の前に良い例があつたな」

「うちの馬鹿達が迷惑かけちゃうね」

「貸切料金は貰つてるから大丈夫さ」

アントーニョは次から次へと消費されていく生ビールに、嫌そうな顔をする。サバーには多くの人が群がっている。

「生、足りそう？」

「この日のために生樽を十数樽発注してある。大丈夫だ、と信じてい」

足元に積まれた大量の空樽を見てやや冷や汗をかく。

沙良に視線を戻すと、その後ろからよたよたと下着姿のソフィアが喧騒の中から戻ってきた。

上半身裸の酔っ払いたちや、全裸の猛者たちを見るに、必死に下着を死守したらしい。
「……トニー、シャツを貸して」

チラチラと、沙良を気にしながら恥ずかしそうに下着を手で隠そうとするソフィア。アントーニョとしては、幼馴染の下着姿を見ても何も嬉しくない。むしろこの空間の中、下着以上のものがそこかしこで露出している状況で冷静を保っている自分が恐ろしいぐらいだ。

「ああ、プライベートルームにあるのを好きに使え」

「ありがと」

ソフィアは許可を得るや否や、疾風のように駆け出していった。

沙良に下着を見られたことがそんなに恥ずかしかつたのだろうか。

話を聞く限り、一緒に風呂に入ったこともあると聞いたが。

いや、一緒に入ったというのは少し違う。筋肉痛で動けないソフィアを風呂に入れたという話だったか。

「こんな馬鹿騒ぎの席で何を照れる事があるんだろうね」

「そりゃ、見られたくない人が居たんじゃねえの？」

「皆、気心知れた仲だと思っけどなあ」

「はあ、これだから鈍感は」

「むー」

「はいはい、悪かった悪かった。ほら、あそこの席で、手招きされてるぞ?」

「やだ。碌な目に遭わないし」

「それはそれは、賢明な判断で」

「ああいう、日頃仕事しかしてないような女性は、飲むと見境ないからねえ……」

「何だその、哀愁漂う言い方は」

「察してくれよ」

「あー、なるほどな」

似たようなことがあつた訳か、と一人納得するアントーニョに、沙良は苦笑を返す。

「お二人さんは楽しんでるかい?」

そこに、カメラを持った女性が近寄る。

良く店にきてくれる常連で、アントーニョも良く覚えてる。

「お疲れ。そこそこ楽しんでるよ」

「俺は店側の人間なんで」

そう言って作っておいたカクテルの中から、スクリユードライバーを出す。

確か、この女性はウオッカベースを好んでいた筈だ。そんな記憶を引つ張り出したが、笑顔で受け取る女性を見る限り、正解だったようだ。

「まあとりあえず、笑顔向けて……『uno dos tres』」

パシヤリとフラツシユが焚かれ、ピースサインを出した手を下ろす。

「相変わらず、トニー君は年にそぐわず大人っぽいねえ。どう？ お姉さんと付き合つてみない？」

科を作つて胸を寄せる常連客。それを冷たい目で流す。

「恋人が出来ないからつて十四歳をナンパするような二十二歳はお断りです」

「ナンパじゃなくて本気なら良いの？」

「ははは、切羽詰りすぎでしょう」

「ですよー。あー彼氏欲しいわ。仕事ばかりで休みもないと、男も漁れんわ」

「だからつてトニーに絡むのは止めてよね」

見るに見かねたのか、沙良が横から口を出す。

流石に会社の人間が、自分の友達に絡んでいる所を見て見ぬフリは出来なかつたらしい。

だが、沙良は知らないのだ。

「この人、飲みに来るとこんな感じだぞ？」

他にもこんな絡み方をする人間がそこそこ居ると教えると、沙良は聞きたくなくなつたと呟く。

「……本当にうちの会社の連中は」

沙良が額に片手を当て、深く息を吐く。その沙良の肩に、凭れ掛かるように手を掛けグラスを傾ける元凶。

「さあ、サラも飲みな、ここは私の奢りだよー」

「未成年にお酒を勧めない。それにここの代金は全部会社持ちですー」

「ケチケチしないのー」

「アルコールは駄目なんだってば」

沙良はお酒が弱い。そして、酔い方も絡み酒という性質の悪いものだった。それも、酔うと幼くなるというおまけ付だ。

良く常連に絡まれてはアルコールを飲んで潰れて、その世話をアントーニヨがする。そんなことが一時期は日常的に行なわれていたのだ。

沙良のアルコールの弱さはアントーニヨが一番良く分かっている。

「じゃあ、はいオレンジジュース。これなら飲めるでしょ?」

「まあ、ジュースなら」

そう言つて渡されるは、先ほどアントーニヨが渡したスクリユードライバー。

簡単に言うとお酒入りのオレンジジュースだ。

——おいおい、ちよつと待て、それは拙いだろ。

女性の顔を見ると、計画通りとニヤニヤしている。

「ちよつ」

「ゴクツゴクツ……ぷはあ。んー、なんか変な味する」

「待った……つて遅かったか」

止めようと、手を伸ばしたが、一息遅く既にグラスの中の液体は沙良の胃に納まつてしまった。

「ふっふっふ、さあ、皆のところに行こうか」

あくどい顔をしながら沙良の手を引いていこうとする女性に一言掛ける。

「あんま飲ませないでくださいよ？ 明日も会う約束してるんですから」

「そこで飲んじや駄目って言わない辺りが、トニー君の良いところだよ」

振り向き様に投げキッスをプレゼントされたアントーニョは悟った。

——あの様子じゃ、明日の予定は変えたほうが良さそうだな。

沙良が明日無事に約束の時間に起きれる可能性を考え、はあとため息を吐くのだった。



「え、何この状況」

プライベートルームに吊つてあつた予備の制服に着替えたソフィアは、目の前に広がる光景に呆然とする。

何故、沙良がうさ耳をつけてポーカーに勤しんでいるのだろうか。というより、ポーカーに参加している者全員が可笑しな格好をしている。誰だあのアフロにサングラスを掛けたマスクの女性は。

ソフィアの頭の上には疑問符が浮かび続けている。

「ああ、お帰り。サイズは大丈夫だったか？」

困惑を隠せない中、掛けられた声にそちらを向くと、幼馴染がどうした、と首をかしげている。

「え、ああ、その、サイズは大丈夫だけど、状況判断が大丈夫じゃないかも」

「ああ、あの着衣ポーカーか」

「え、着衣ポーカー？ 脱衣じゃなくて？」

「そこで脱衣つて発想がおっさんだな、お前。何でも、負けるたびに、指定のアイテムを身に着けていけないといけないんだと」

「へ、へー」

「軽くドン引きだな」

「そりゃあ、あんな不審者たちを見たら……ねえ」

視線の先にはアフロの他に、ナース服にトンガリ帽子をかぶった丸刈眼鏡や、猫耳と犬耳と狐耳をつけて何が何だかよくわかんなくなつた眼帯に、強盗でもするのかといなくなるマスクをつけた者など、その変態度合いは多種多様に及ぶ。

「でも、セラのうさ耳は眼福眼福」

「お前……最近一段と気持ち悪いな」

「何よ、溢れんばかりの愛が漏れ出しただけじゃない」

「ああ、うん。そうだな。なんていうか……すまん、やっぱキモイわ」

「殴るわよ?」

「既に足を踏んづけてるだろ。地味に痛え。てか、お前は今日は客側なんだから向こうに混じつて来いよ。今日のセラは軽くアルコール入つてつからノリがいいぞ? 着衣ポーカーをノリノリでやる位には」

「行つてくる」

即座に返事を返すと、迷いもなくカウンターから離れることにした。

「……………本当に残念なやつだな」

背後から馬鹿にされたような声が聞こえてきた気もするが、既に意識はポーカーに向いている。

いや、ポーカーというよりも、アルコールが入った沙良に、といった方が正しいだろう。

「セラ、どう？　良い感じ？」

後ろから覗き込むようにカードを見る。

場に二枚のポケットカードが出ていることからテキサス・ホールデムと推測できる。

その数字は7と9。

沙良の手札は、沙良の体に隠れていまいち見えないが、強気にレイズしていることからそこまで悪い手札ではないと思われる。

「あー、そふいだ」

ソフィアが存在に気付いた沙良が、にへらと笑い席を一つ空ける。

何だ、これは。参加しろということなのだろうか。

ソフィアが、流れについていけず、どうしようかと戸惑っていると、現在配られている枚数と同じ枚数だけ、席に配られた。

——ああ、参加しろってことね……

見てるだけでよかったのに、と肩を落とすソフィアの耳には、カウンターからの笑い声がしっかりと届いていた。

——他人事だと思って、あんにやろう。

とりあえず、負けなかつたらいいのだ。そして、沙良を負かせばいいのだろう。簡単なことだ。酔っ払いに負けるほど、落ちぶれては居ない。

「よし、レイズ!!」

ソフィアは強気に掛け金を吊り上げる。

——とりあえずは一勝かな。

しかし、酔っ払いは酔っ払った方が賭け事が強く、このあと一回も勝つことが出来ずプライドも羞恥心もずたぼろになるとは、このときのソフィアはまだ知らなかったのである。

第五話 深夜の訓練者

それは深い青。

まるで深海をそのまま表したような青。

第二世代型ISシークエスト

深海の圧力にも耐えられるように設計された装甲は、見るからに荘厳な雰囲気醸し出している。

そのフォルムは自分で開発したとはいえ、何時見ても惚れ惚れとするほど合理的で無駄がない。

そのシークエストを纏った少女が、訓練用アリーナで決められた訓練メニューをこなしているのを確認すると、まるで近くのコンプニでも行くかのような気軽さでアリーナに足を踏み入れる。

入ってきた人物に気付き、機体を急停止させる少女。

その、ブレもなく、ピタリと止まった身のこなしは充分合格点を与えてもいいだろう。

少女はISを用いた訓練を開始してから二週間しかたっていないことを考えると相
当な進歩だ。

「どうしたの、セラ？ 何か用事？」

「んや、今日の講師は僕。カルラさんが今日からドイツに出張だから、今週は僕しか教えられる人間がいらないんだ」

「開発は？」

「今の段階では誰がやったってそう大差ないよ。それに、信頼できる研究員しか僕の開発部には居ないからね」

「流石、第一海研はエリートの集まりだねえ」

開発研究部第一深海作業開発研究室。

沙良を中心とし、シークエストを始め多くの深海探査機を開発する、会社の看板でもある研究室だ。

「早く、ソフィアも入れたらいいのにね」

ソフィアは、いまだ訓練生の身なので、正式に所属している部署はない。

しいて言うなら、秘書課の下っ端というところか。現在では沙良の秘書として会社に属している。

無事に代表候補生になれた暁には、テストパイロットとして開発研究部第一深海作業開発研究室に入ることが決まっている。

「まだ政府の訓練施設にも入ったばかりだからね」

先週、ソフィアは訓練施設の試験をパスした。

もちろん、コネもあつたが、それ以上に実力が評価されたのだ。

午前中は、沙良やアントーニョと仲良くハイスクールに通い、放課後はみつちりと軍の施設で扱われる。そして、夜になると、こうしてS Q社で特訓を行なうのだ。

ISの操縦とは、その搭乗時間が物を言う。

代表候補生になるためには、訓練生の中で、蹴落としあい、勝ち抜かなければならぬ。皆が同じ条件であるならば、訓練時間の中だけで使用できる搭乗時間では物足りないのだ。

だからソフィアは毎日この社内訓練用アリーナで、講師に訓練を見てもらっている。それは、今年中に代表候補生にならねばIS学園に専用機を持つていけないため。その審査が夏にあると聞いて、ソフィアは史上最短での代表候補生を狙っている。

「訓練はどこまでやった？」

「向こうでは基礎動作全般を詰め込まれてるところ。特殊無反動旋回とかもやってる」

「瞬時加速は？」

「そこまでの応用はまだ」

「こつちでは？」

「取り合えず、機体の扱いを自分の身体と同じかそれ以上に扱えるようになって訓練メ

メニューを組んでもらってる」

ソフィアが指先をピンと弾く動作を行なうと、沙良の端末にその訓練メニューが表示される。

「ふーん、なるほど。考えてあるね」

「そろそろ良い感じに仕上がってると思うんだよね」

「また調子乗った事言つて。じゃあ、今日は基礎的動作から、空中起動までを『完璧』に終わらせて。出来なかつたら出来るまで続けさせるから、本気でやつてね」

ソフィアの額からたらりと汗が垂れるが、そんなこと誰も見てはいない。

「三日以内に軽く戦闘が行えるレベルまでは達してもらおうよ。出来るよね？ 自分で大口叩いたんだし。安心して。このテスト室にはエネルギーピットがある。いくらエネルギーが切れても大丈夫だから、出来るようになるまでやつてもらおうよ」
こうして、ソフィアの地獄の一週間が始まった。



死ぬ。

このままだと間違いなく死んでしまう。

ソフィアは張られ続ける弾幕にそう思った。

視界を埋め尽くす弾丸達。

加速された思考が、回避不可と叫ぶが、これをどうにかして避けないと訓練にならない。
い。

だが、

「無理無理無理無理!!こんな対処できないよー!」

弱音が漏れてしまうのも仕方ないだろう。

無情にもその弾幕はソフィアのシールドエネルギーを削っていく。

「それをどうにかしないと訓練にならないでしょ」

物凄く楽しそうないい表情で照準を合わせ続ける沙良に、背筋に氷片をあてられたような気分になる。

——鬼だ。マジで鬼だ。天使の皮を被った鬼が居る。

心でぼやくが、そんなことしても現状に好転の兆しは見られない。

とりあえず被弾数を減らそうとシールドを展開してみるが、シールドで捌こうにもその弾幕が厚すぎる。

あつという間に使い物にならなくなったシールドに、開いた口が塞がらない。

シールドを沙良に投げつけることで間を取れないかと思つたが、ひよいと避けられてしまった。

「くっそー！」

最初は弾切れまで、様子を見ようと思つてたけど、今では逃げることに必死だ。

よくよく考えると、あの沙良が弾切れを起こすはずがない。

今でも、片手で余裕そうにアサルトマシンガンを撃ち続ける。

こうやってISののつてみて初めて分かる。沙良は天才ではない。しかし、秀才だ。その努力によつて染み付いた機体制御力は、才能だけでは対応しきれるものではない。

——あんな、自分の身体の一部みたいに動かすなんて、私には無理だ。

いけない。いけないことを考えていると、刻一刻とシールドエネルギーが削られるだけだ。

——何とかしないと……そうだ！

「瞬間加速！」

ソフィアは急な加速により、弾幕から抜け出そうと試みる。

つい先ほど習ったばかりの応用技術。

これなら裏をかけるか。

しかし、抜け出した先には、アサルトライフルを両手に構えた沙良が見えた。

「教えられたことを即、実践。それは良い事だよ。でもね」

抜け出したと思ったら、新たな弾幕を張られ、シールドエネルギーがガリガリと削られていく。

——なんで、逃げ出した先に待ち構えてるのよ!?

「使えることと、使いこなすことは全く違うことだと頭に叩き込んだほうがいいよ」

「ちよ、ちよつと待って!!」

もちろん、待ってくれるわけがない。

躊躇無く引かれる引き金に、ソフィアは涙目で逃げようとするが、急に方向転換などできる訳もなかった。

瞬時加速には、使用中は加速に伴う空気抵抗や圧力の関係で軌道を変えることができず、直線的な動きになるという欠点がある。

その高い加速力に使い勝手の良さを感じるが、初動が大きく、行動が読まれやすいなどのデメリットも存在する。

ソフィアは回避しようとしてPICを切ることにより重力の影響を受けることによって、その軌道を僅かにずらした。

それは確かに効果的な避け方だったであろう。

しかし、PICを切るといふ行動は一瞬だが機体の制御を手放すのと等しい。

熟練したIS乗りはマニュアル操作によってPICを制御できるが、そこまでの技術がなかったソフィアは切断という手段をとるしかなかったのだ。

その一瞬の隙を沙良が見逃すはずもなかった。

——速っ！

一瞬にして懐に入られてしまう。

その際用いられた技術は、ソフィアが先ほど利用したのと同じ、瞬時加速。

エネルギーを取り込み、圧縮して放出するという過程を経る為、少なからず行動に兆しが見えるものだが、それが一切なかった。

それはエネルギーの運用に一切の無駄がないことを示しており、その加速度も、初動も、姿勢の制御もソフィアとは比べるも烏澁がましい。

ソフィアは咄嗟に装甲に収納されていたナイフを取り出す。

しかし、沙良はそれを気にも留めず、ソフィアの機体に突っ込んだ。

機体という大きな弾丸が持つ質量が、膝に集中し、ソフィアの腹部に突き刺さる。

「へ？」

ソフィアの機体が浮いた。

簡単な話だ。ソフィアに体当たりしたまま瞬時加速を続けているというだけ。

「ちよっ」

背部に衝撃が走り、腹部に突き立てられている膝がより深くめり込み、息が詰まる。

「チエックメイト」

ちかちかする視界を挙げてみると、銃口が真つ先が目に入った。

天使のような笑顔を浮かべる沙良。

しかし、ソフィアは引き攣つた笑みしか返すことが出来ない。

足で壁に押し付けられ、顔面に銃を突きつけられているのだから。

「ハ、降参し」

両手を挙げて降伏の意を示そうとしたが、それより先に、銃口が火を噴いた。

シールドがあると分かっているにも顔面に迫る銃弾に、恐怖を抱かないわけがない。

それも一発ではない。フルオートのアサルトライフルのマガジンが無くなるまで只

管に銃弾の雨に耐える。

正直、トラウマになってもおかしくないレベルだ。

そしてあつけなく銃弾はシールドエネルギーを削りきった。

甲高いブザー音が鳴る。

『そこまで、沙良もソフィアもピットに戻ってください』

「はこ」

沙良が返事を返すが、ソフィアは口を開くことが出来ない。

呆けた頭で、煙を吐いている銃口をぼんやりと眺めることしか出来なかった。

「立てる？」

沙良が手を伸ばしてきた。

何時の間にISを解除したのだろうか、気付けば地面にへたり込んでいた。

手を頼りに、立ち上がると、足が小鹿のように震えていた。

「大丈夫？」

「……無理」

「喋れるなら大丈夫そうだね」

沙良との訓練を始めて既に五日がたった。

始めは沙良がISに乗れると聞いた時に、衝撃を隠しきれなかったソフィアだが、打ち明けてくれたという事は、それだけ自分が信頼を得た事だと気付き、よりその忠誠度を増した。アントーニョがソフィアより先にその事実を知っていたことが腹立たしいが、仲間と認めてもらえたようで、喜びは隠し切れない。

そんな沙良との訓練も残り二日となっている。

二日したら出張で講師を交代していたカルラが戻ってくるため、このような地獄の訓練から開放されるだろう。

「エネルギーチャージして、もう一回ね。状況を判断する力をもつと付けた方が良いよ。そのとき取るべき方法は何か。どのように動けば最善の結果が出るか。そこを良く考えて行動してみな。何も考えなしに手札を切つてもエネルギーを無駄にするだけだよ」
沙良のありがたいお言葉に、しよんぼりと頷く。

「はい」

「十分間耐えないと今日は終わらないからね」

チラツと時計を見ると、既に二十二時を回っている。

明日、英語の小テストがあつた気がするが、そんなこと、勉強が出来る沙良に伝えたところで、「日頃から勉強していないのが悪い」と説教される理由を与えることになるだけだ。伝えなかつたところで赤点を取つて説教される未来が簡単に想像できるわけだが。

「あ、明日の小テスト、もし赤点取つたらどうなるか分かるよね？」

ああ、この世に神は居ないらしい。

先に逃げ道を塞ぎに来るなど、狩人の鏡ではないか。

そんな私は哀れな得物。仕留められて、いいように扱われてしまうのだろう。

天使のような笑顔で、悪魔のような仕打ち。戦乙女も真つ青だ。

——せめてもの抵抗を。

「じゃあ、帰って勉強した方が……」

「日頃から勉強し」

「よ、よーし、訓練再開!! 頑張っちゃおうよ!!」

「……………」

予想されていた説教が始まる予感を感じ、咄嗟に言葉を被せてしまう。

言葉は止まったが、そのジト目が辛い。

「……………」

「……………あは、あはは……………すみませんでした」



今日もダメだったか。

沙良との訓練を始めて既に五日。戦闘を行えるようになったけど、未だに沙良に手も足も出なかった。

結局、十分逃げ切ることが今の精一杯だ。それも成功するまでに三時間の時間をかけ

ているが。

「お疲れ様、ソフィ」

「あ、ザイダさん、お疲れ様です」

ピットから出ると、使った機体の整備に来ていたであろうザイダに声を掛けられた。

「今日も残念だったわね」

「うう、道のりは遠いです……」

「そんなソフィに朗報です」

そう微笑みかけるザイダはいつもより輝いて見える。

「先週の写真が現像できました」

それを聞いたとたん、ソフィアはザイダの手を握っていた。

「待ってましたよ!!」

「ふっふっふ、しかも今回は中々レベルが高いものをチョイスしたよ」

そういつて、ザイダは一枚の写真を見せてくれる。

「……」

「どう? 最高の写真じゃない?」

渡された写真には、恥ずかしそうにウサ耳をつけている沙良の姿が写っていた。

——ああ、これは着替えてる時の写真か。着衣ポーカー恐るべし……!!

しかし、ザイダはひよいと写真を取り上げてしまう。

——ああ、私の癒しが……

写真をひらひらと目の前で揺らされ、つい奪おうと手を伸ばしてしまいが、高く掲げられて写真に手が届かない。

傍から見たら小学生のいじめだ。

「この写真も含まれたコレクション、欲しい？」

「もちろんです！」

「五千円」

「ぼったくりじゃないですか！」

写真の現像代なんて安いものだろうに。

「何言ってるの。モデルもやっている沙良の生写真、それもプライベート写真よ？ お

金で買えること自体感謝しないと」

「……でも、学生にはきついです」

一ヶ月に五万円のお小遣いをSQ社から貰っているが、携帯代や食費に消えて大した額は残っていない。

「それじゃあ、今回の条件……どうしようかしら。そうね、今やってる戦闘訓練で、三十分耐えて見なさい」

「……分かりました」

「分かりましたってそんな嫌そうに言わないの。沙良はそこまで戦闘訓練は積んでないんだからそれぐらい耐えられないと、代表なんて夢のまた夢よ？　しつかりしなさい」

今日ですら十分耐えるのに十八倍の時間を掛けてしまったのだ。

三十分なんてどれぐらい掛かるだろうか。

しかも沙良と訓練できるのはあと二日しかないのだ。

タイムリミットは決められている。

「もう……じゃあ、もし達成できたら、今までの写真もアルバムにして渡してあげるわ」
「うおー！　やるぞー！」

現金だな、と自分でも思ったが、乗せられてしまったものは仕方ない。

「はいはい、その前にシャワー浴びて、着替えていなさい。沙良、待たせてるんでしょ？」

「日付超えてるわよ？」

「しまった」

「ほら、沙良を待たしたくなかったら、急ぎなさい」

「はいー」

沙良は恐らくシャワー室に先に行ってるだろう。

早くシャワーを浴びてしまわないと、休憩室で、沙良が何時までも暇を持て余すこと

になつてしまふ。

せつかく訓練に付き合つてくれた人をそんな目に合わせるわけにはいかない。疲れた身体で、通路を全力疾走する。

「こら、走るな―」

起こられたので、早歩きで、シャワー室に向かう。

――やつと今日も終わつたかあ

明日の訓練では、より一層気合を入れなくては。

頭の中ではウサ耳を付けた沙良がピョンピョン跳ねている。

「ふふふ、ふつふつふ」

そして、二日後の訓練で、逃げずにあえて攻め続けるという戦法をとり、ソフィアは無事にコレクションを手に入れることに成功したのである。

第六話 発覚

纏うは白。

その藍白のボディは、例えるならば 誰も足を踏み入れたことの無い雪原のようだ。そこに足跡を残すかのような蒼と黒のラインが、より白を際立たせる。

胸に「Deflin」と刻まれた機体。

沙良は第三世代試作機、シークエスト「ドルフィン」のテストを行っていた。

今は、そのドルフィンの代名詞とも言える、装備を展開しようとしている。

『出力を下げてください。搭乗者への、危険段階まで迫っています』

「ちっ」

急に、沙良が纏う白い装甲が、その輝きを失ってしまう。

具現維持限界だ。

『リミット・ダウンです』

「またか」

どうにも特殊武装の開発が上手くいかない。

苛立ちを隠せぬまま、唇を尖らせる。

『一度、ピットに戻ってください』

「りよーかい」

指示通り、沙良はピットに戻り、ハンガーにドルフィンを戻す。

待機していた整備班が、ケーブルをドルフィンに接続し、測定班がデータを読み取る。
「問題はイメージンターフェイスかな」

先程の、テストを思い出し、頭を搔く。

ドルフィンのイメージンターフェイスには、もう一つの第三代試作機、シークエ
スト「オルカ」のイメージンターフェイスの技術を応用したのだが、如何せんエネ
ルギー効率が悪すぎる。やはり、同じシークエストだからといって、同じ技術は通用しな
いのか。

「やっぱ相性とかもあるのかな」

オルカは沙良専用機の特特殊型として設計されている。

それに対して、ドルフィンは防御・機動力に重点を置いた量販機を目指した作りと
なっている。

専用機でなおかつ特殊な兵装を持つオルカのインターフェイスを、ドルフィンが受け
入れられなかったのだろうか。

「設計しなおそうか」

沙良はまだ十五歳だ。日本なら高校への受験やらで忙しいが、ここはエスパーニャ。飛び級をしている沙良は既に高等教育二年生だ。同時に通っている大学では今年卒業予定で、既に単位は取り終わっており卒業研究も既に論文として発表してある。

大学院に來ないかと、数多くの誘いを受けたものだ。

これから研究に集中できると考えると、開発にもう少し時間を掛けても良いだろう。それに、ドルフィンには沙良と相性が悪い。

しかし、テスターが沙良しかいないため、効率よくデータを集めることが出来ないのだ。ソフィアが居たころは、全てをソフィアに押し付けていれば済んだ話なのだが、当の本人は日本で高校生をしているため、そうはいかない。

——いつでも問題は人手不足か……

『そのまま、オルカのテストに入る。整備はドルフィンを回収、沙良はそのままオルカを付け直して』

「了解」

沙良はドルフィンをしやがませ、コックピットから飛び降りる。

整備員がピットからドルフィンを運び出したのを確認し、沙良は別の機体に近寄る。

ドルフィンとは対になるような、黒。

それに、白と蒼のラインが刻まれている。

胸には、同じく『Orca』の文字。

沙良の専用機となる予定の機体。

SeaQuestシリーズ特殊統率型第三代試作機「オルカ」である。

沙良はコックピットに背中を預ける。途端に装甲が閉じる。身体と装甲が混ざり合うような一体感に、つい口角が持ち上がる。

沙良の専用機として開発されているだけあって、そのシンクロ率は凡庸機の比ではない。

全感覚が鋭敏化し、世界が鮮やかに感じられる。

「オルカ、テストを開始します」

『オルカのテストを始めます』

沙良は、ピットから躍り出ると、そのまま指示を待つ。

『今回は機能向上させたハイパーセンサーのデータを取得します。今からランダムで出現する的全部を撃ち抜いてください』

「りょーかい」

『始め』

ハイパーセンサーにより、感覚が鋭敏となる。

自分の周りの世界が、自らの手に収まったような錯覚すら得る。

それは五感を最大限に引き出し、ハイパーセンサー自体が新しい感覚として機能する。

沙良は、アサルトライフルを呼び出し、的が出現するのを待つ。

その時間はほんの一瞬だった。的が現れたとほぼ同時に、撃ち抜かれていく。

「悪くない」

すぐさま銃口を背部に向ける。そちらを見ることなく引き金を引く。

この空間を支配したような感覚に、気分が高揚する。

連続で出現するターゲットを一切のミスもなく打ち落としていく。

それはリズムすら感じさせるほど優雅だった。

「まずまず、といった所かな」

的を撃ち抜く沙良の姿はまるで踊っているかのようだった。



ピットに戻ると、待ち構えていた整備班に機体を任せ、沙良はコックピットから飛び

降りた。

タイムリングを見計らったようにタオルを差し出した整備員に感謝の意を伝え、適当な機材に腰を掛ける。

「お疲れ」

「やあザイダ」

タンクトップにホットパンツというラフな格好をした女性が、腰に整備道具を掛けて立っていた。

「機体、どうだった？」

「機体の反応速度、良い感じだったよ。むしろ、合いすぎて気持ち悪いぐらいに」

「お褒めに預かり光栄」

「欲を出せばもう少し鋭敏にしてもいいよ。緩すぎても張り合いがない。もっと緊張感を持って動きたいから」

「そこら辺は調節時に付き合って頂戴」

ぽいっとペットボトルを投げられる。

片手で受け取ると、中の液体が静かに揺れる。

渡されたのはミネラルウォーター。軽く口に含むと残りを頭から被る。

「ああ、気持ちいい」

タオルでわしゃわしゃと頭を拭く。

「先にシャワー浴びてきたら、どう？」

「いいよ、どうせこの後オイル塗れになるんだから」

「そう」

ザイダは 沙良に整備用のポーチバッグを投げ渡す。

それは沙良が良く使用する工具がセットされている。

「準備がいいね」

「それ、私の番号で借りてるから、そのまま返さないでね。返す時は私に返して」

開発室では器材の紛失などを防ぐため、器材を持ち出す際に社員番号を登録して持ち出している。

「了解。終わったその場で返すよ」

ISスーツの上から、作業用のつなぎを着る。その腰の連結部分にポーチをぶら下げる。

「じゃあ、行こうか」

既にオルカは運び出されており、後は沙良と、整備班の主任であるザイダが整備室に行けば、整備が開始される。

「今夜は長くなりそうね」

「本当にね。コーヒーが手放せないよ」

「あら、ミルクとシユガーを忘れてるわよ?」

「ああ、大丈夫。僕はザイダと違ってスウィートに飢えていないからね」

「ビターに慣れ過ぎると、甘いものが欲しくなるものよ?」

「別に恋人募集中は良いけど、愚痴られる身にもなつてほしいよ。まだ十五歳なんだからね」

「善処するわ」

「運搬用のコンベアに乗りながら他愛もない会話を繰り広げる二人の夜は、まだまだ長くなりそうだ。」



どうしよう。

カルラの心情はこの一言に尽きた。

今まで、様々なことがあつたけど、持ち前の判断力で、何とか乗り越えてきた。

しかし、この予想もしてなかったニュースにカルラは胃が痛む思いをしていた。
『世界で唯一ISを動かせる男子、織斑一夏』

ついに現れてしまったのだ、世界で二人目の男性操縦者が。

世界で唯一といわれているが、一部の人間は知っている。

もう一人、男性操縦者がいる事を。

サラ・ルイス・フカミ。日本名、深水沙良。

スペインと日本のクォーター。

その四分の一が日本人の血のため、彼は日本国籍と、スペイン国籍の両方を持っている。

シークエストを発表した際に、欧州連合の上層部には、沙良の存在は伝わっている。それが、世界に伝わってないのは、公表することによって世界の力関係が崩れることを危惧したため。

そして、沙良を実験体とし、日本やアメリカに少しでもリードするため。しかし、スペインは必死に沙良を守った。そのせいで国力が下がろうとも、沙良を実験体から救い出した。

沙良はギリギリの境界で守られていたのだ。

しかし現れてしまった。その境界を崩す人間が。

拙い。これは拙いことになった。

カルラは必死に考える。

今では、沙良はスペインにとつていなくてはならない存在。

このニュースのせいで、沙良の存在を世界に隠し通すのが困難になってしまった。

隠し通せて、二ヶ月だろう。

隠し通せないなら、むしろこちらから公表してしまったほうが都合がいい。

それに、沙良がISを操縦できると公表するのは、今が最もいい時期。

一般的ネームバリューから、興味がもう一人のほうに偏るであろうから、今、彼が注目を浴びて、関心を集めている横で、その影に隠れることが出来る。

彼は、かの有名なブリュンヒルデの弟。世間は、業界では有名だが一般的には名もない沙良より、織斑一夏に話題を集めるだろう。

そして、織斑一夏は沙良の幼馴染でもある。

カルラも面識がある。素直で根の良い優しい子だ。沙良のことを兄弟のように大切に想ってくれている。

おそらくは、一緒に行動することとなり、面倒を見てくれるだろう。

しかし、ここで沙良のことを公表してしまうと、沙良のISの研究をスムーズに行なうことは難しくなる。世界の目の中、研究を行なうのは効率が悪すぎる。確実に、情報

の提示が求められるだろう。

わざわざ実戦配備をせずに研究を続けてきた意味がなくなってしまう。

まだ、第三世代機が完成に至っていないこの時期に、それは大きな痛手となる。

それに、ブリュンヒルデの弟と違い、世界では開発者としてしか名のない沙良は、世界から実験体としてその身を引き渡せと言われる可能性もある。欧州連合も、沙良の身を守るとは考えにくい。味方に付く国など我がエスパパーニャだけではないだろうか。

キリキリと痛む胃を抑えて、ひたすら悩み続けるカルラ。そこに予想もしていなかったところから助けの手が差し伸べられる。

PPPP……

「はい、こちら秘書課代表、カルラ・ファリーノス」

『あ、カルラさん、ご無沙汰してます、ソフィアです』

それは日本のI S学園にいる、ソフィアだった。

「あら、お久しぶりね、どうかしたの？」

『いえ、今、ニュースを見てセラのことが気になったので』

「そう、貴女も分かっているとと思うけど、どうしようもないわ。あの子の身の危険がかかっているのに、おいそれと発表するわけには……」

『カルラさん、私に良い考えがあるんですけど』

「何かしら」

『セラをIS学園に入れちゃえばいいじゃないですか』

「どういうこと？」

『IS学園特記事項です。本学園に所属する生徒はありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。またこれらからの干渉を受けることもない。つまりは、学園に居れば三年間はセラの身柄は保障されるってわけです。その間に何かしらの方法を考えればいいのではないかと』



「というわけで、セラはIS学園に入学することになったの」

「……」

沙良はポカンと口をあけて、言われた事を頭で反芻する。

珍しく本社に呼び出されてみれば衝撃の告白が待っていた。

——IS学園に？ 僕が？ それよりもなんで一夏がISを動かしてるの？

いろいろ考えて頭が爆発しそうだ。

しかし、状況は目まぐるしく動いているらしい。

「サラ・ルイスの存在を世界で最初の男性操縦者として世界に発表することが決定したわ。今まで隠れていたが、第二の男性操縦者の搭乗で、表舞台に姿を表す。そういうシナリオ。政府にも社長が対応する予定よ」

「い、いや、日本に行けるのは嬉しいんだけど」

「だけど？」

「オルカもドルフィンもまだ開発段階だし、そんなの政府が簡単にOKを出すとは思えないんだけど。だから、僕が抜けるわけには……」

カルラはモニターのスイッチを入れる。

『——とのことで、スペイン政府は、サラ・ルイスを男性操縦者と公表、織斑一夏と共にI S学園に入学を認めると決定した。サラ・ルイスには、スペイン代表候補生として、S Q社から第二世代機シークエストのカスタム機が専用機として渡される』

国内ニュースがありえないことを言った。

「ごめん、間違えたわ。決まったんじゃないやなくて、もう手は回しちゃったの」

「え、え、え？」

「あの、孫バカの社長を舐めちゃダメよ？ 貴方のためなら手段は問わないんだから」

「ええええええええ!!」

——聞いてないよ!? てかそんな大事なこと、本人に相談せずに決めちゃダメでしょ!!

「言ったら、絶対に行かないって言うでしょ?」

——そりやそうだけど……

「てか、心の声を読まないでよ」

「というわけで、セラ。貴方に拒否権はないの。むしろ、女として送り込もうとしなかっただけ感謝して欲しいわ」

そんな話まで出てたのか。

いや、でも、

「オルカと、ドルフィンはどうするの?」

今まで研究してきたものが、ここで足踏みを食らってしまうのは、沙良としても、本意ではない。

「もちろん、研究は続けるわ。ドルフィンは流石に無理だけど、オルカなら持ち出して結構わないって言われているから、IS学園で実働データを取ってきたらいいじゃない。向こうにはいろんな国のISが集まっているのだから、いいデータが取れるでしょう。それにね、元々、セラの専用機として開発がされてきたんだから遠慮なんかする必要な

いわ」

持ち出してもいいのなら話は変わってくる。

向こうでデータを取り、何かあればパーツを送ってもらおう。それで何とかなるかもしれない。

むしろ、堂々と他の最先端のISのデータと比較できるのは、美味しい状況ではないだろうか。

IS学園には整備科なるものもあるらしく、整備施設も整っているのだろう。

——ん、いや、ちょっと待って。

「でも、さっき、僕にシークエストのカスタム機が専用機として送られるって言ってなかった？」

「ええ、そうよ」

「それなのにオルカも専用機として持っていくの？」

「だって、まだ完成してないんでしょ？」

確かに完成はしていないが、IS学園に通う生徒は、大多数が専用機を持つてはいない。

——別にIS学園にも訓練機ぐらいいはあるだろうし、オルカが完成するまでは、別に専用機なくてもいいと思うけどな。

「今、別に専用機なんてなくてもいいと思つたわね？」

「う、何でばれたんだらう？」

「わかつてる？ セラは世界で二人だけの男性操縦者。おそらくは、いろんな国から狙われることになる。そんな所に、専用機も持たないで放り出すなんて出来ないわ。ただでさえ守られる立場なの分かつてるの？ 貴方は、弱いのか？」

「オルカだつてあるよ？」

「それは武力としての強さ。立場としての強さと考えると、エスパーニヤから出た時点で皆無よ？」

「ううそんなに言わなくてもいいのに」

「それに、セラはエスパーニヤ国籍と日本国籍の二つを持っているわよね。このこと、専用機も持たずに日本に行つて見なさい。オルカが完成するまで、日本政府に専用機を押し付けられて、日本に取り組まれてしまうわ」

「でも、僕はEspañolだよ？」

「私たちは、分かつてゐるわ。でも、他国がそう思うとは限らない。ただでさえ、貴方には少しだけ日本の血が流れているの。シークエストカスタムは、ただの専用機として渡しているのではないの。セラに余計な虫が寄つてこないように、付け込まれる隙を無くすために渡してゐるの。わかつた？」

「でも、ISを二台も持つなんて、前代未聞だよ?」

「でも、やってはいけないうち、誰も決めてはいないわ。ただ、出来なかつただけ。でもエスパニーニャは違う。元々、兎さんがセラに渡したコアを政府が借りていただけ。所有物が帰ってきただけなんだから」

——そうやって、おじいちゃんたちは政府を脅したんだろなあ。

真剣なカルラに、沙良はしぶしぶ頷くしかなかった。

しかし、日本に、その血を引いた沙良が帰ると言うことは、国民はどう思うのだろうか。

向こうにも国籍を持っている。言ってしまうえば向こうも故郷だ。年に二回は帰っているほどに。

すると、カルラは優しく微笑んで、頭を撫でてくれる。

「大丈夫よ。ここはエスパニーニャ。日本に帰ってしまうからといって英雄を見捨てるような国じゃないわ」

沙良はこくりと頷く。

「入学は一夏君に合わせると言つてあるわ。それまで、あまり時間はないわ。準備しないといけないことはたくさんあるんじゃない?」

「うん、そうだね。僕が日本に行くことを考えたら、引継ぎの作業も行なわないといけない

いっし」

「ほら、ならもう働かなくちゃね。これから忙しくなるわよ?」

「うん!」

話が決まれば、しなければならぬことも多い。

それは沙良もカルラも同じことだ。

これ以上仕事の邪魔をするのも悪いだろう。

いつも仕事をサボっているイメージのある彼女だが、その裏では相当重要な役割を果たしているのは周知の事実だ。

沙良は自らの研究室へと急ぎ戻ったのである。



「今年のI S学園にエスパニーヤから入学する生徒は?」

カルラは苛立ちげに机に肘を立てる。

「四人ですね。そのうち沙良様と面識のあるのは一人です」

「……海軍所属スペイン代表候補生リナ・フェルナンデス・コロソ……なるほどあの子ね」

確か、同じ代表候補生のソフィアを慕っており、そのソフィアを通して沙良とも交流がある。

その成績は代表候補生の中でも上位に食い込んでおり、沙良が直々にカスタマイズしたシークエスト・カスタムIIを専用機として与えられているはずだ。進学理由もソフィアが存在が大きかった気がする。

彼女なら、まず間違いなく沙良の力になる。

「他の三人は？」

「空軍から一人、陸軍から一人、他企業から一人です」

海軍とは、関わりが強いSQ社だが、その他とはあまり関わりを持ってはいない。

出来ることならばもう一人、沙良のサポートに入れる人間が欲しい。

「沙良の存在を最大限に利用して、うちの会社から一人ねじ込みなさい」

「もう既にIS学園の入学試験は終了していますし、途中転入にしても時期が間に合いません」

「そんなこと、IS委員会を脅すなり何なりすればいいでしょう。うちから護衛を付けるって言えばなんともなるわ」

「そんな無茶苦茶な……」

「いい？ 私はやれって言ったのよ？ それに対する返事は『 Si 』しか求めてないわ」

「……s, Si. De acuerdo. (はい。わかりました)」

「分かればいいのよ。我が社から送り込めそうな人間をピックアップして」

「はい、少しお待ちください」

「十秒で出しなさい」

「出ました、年齢十五歳から十七歳の女性、I S 適正あり、沙良様と面識がある人間は三人です」

「……随分と少ないわね。それにどうも使えない……うちの人間は？」

カルラが言ううちの人間とは、カルラの所属している秘書課のことである。

「秘書課から動かすおつもりですか？」

「貴女、秘書課の目的を忘れたの？」

「い、いえ、申し訳ありません」

カルラの冷たい双眸が女性を射抜く。

「それで？」

「それならば一人、最適と思われる人物が」

「見せなさい」

「こちらです」

「なるほど……この子が居たわね。秘書課にして、第一海研所属」

「沙良様と年齢も同じですので護衛としては最善かと」

「沙良への忠誠は死をも覚悟できるほど……ねえ。最高の人材じゃない」

「では決定で？」

「ええ、迅速に動きなさい。状況は既に始まっているのよ」

「De acuerdo」

「報告は要らないわ。失敗は死と同意だと思いなさい」

「De acuerdo」

部下が出て行くのを確認し、カルラは大きく息をつく。

最近は頭が痛くなる案件ばかりだ。

しかし、それも沙良のためと思うと手を抜くことは出来ない。

「次、入りなさい」

カルラは次の案件を聞くために、また部下を呼ぶのだった。

第七話 身の程知らず

「……出来た」

目の前には荷物がこれでもかというぐらいに詰まったトランクケース。

そして、篠ノ之家から離れた際に譲り受けた愛刀、『水切』が竹刀袋に入っている。

その横には、長さが目立つ、薙刀が薙刀袋に収まっている。薙刀に「号」をつける場合は女性の名をつけるのが慣しであるため、沙良の薙刀にも女性の名が付いている。

『茜』それが沙良の愛刀である。

篠ノ乃道場にて教わった剣術。それをエスパニーヤに來ても大切に続けた。

愛刀に触れることにより、遠く離れている一夏や箒、東に千冬と触れ合えるような気がするから。

そんな理由で太刀を振り続けた沙良を、大人たちは微笑ましく見守っていた。

その教わった剣術は、一夏や箒が学んでいたものとは違う。使用するのは薙刀。そして太刀、それも太太刀である。その長さは三尺をゆうに超える。

それは元々は神社等への奉納の舞として生まれたが、時代の流れにより、今は古武術として伝わったと聞いている。

女性が鍛え上げたその剣術は、体力のない沙良に合っていた。

「よし、忘れ物はないかな」

ちゃんと、忘れ物がないかチェック表で確認する。

最初に、チェック表を渡されたときは、何処まで過保護なんだよ、と思ったが、使ってみると意外と便利だった。

「うん、大丈夫だね」

そろそろ出発しないと間に合わなくなる。

明日は、I S学園の入学式。

しかし、授業にギリギリ間に合うかどうかの強行軍になってしまったので、入学式には間に合わないだろう。

「カルラさん準備できたよー」

所長室でロサと喋っているはずのカルラに声をかける。

「荷物持ってこつちに来なさい」

声だけが返ってくる。

愛刀を肩にかけ、荷物を持ち所長室に入ると、そこには研究員が全員そろっていた。その一人ひとりが一輪の花を持っている。

「みんな……行って来ます」

一人一人に抱きつき、頬にキスするとみんな泣きそうな顔で花を渡し、行つてらつしやいと言つてくれた。

「おいおい、最後の別れじゃないんだ。もう少し、晴れやかに送り出してやらないか」
ロサは、沙良の花を纏めて花束にしてくれる。

しかし、所長らしいことを言っているのだが、その目が潤んでいるのは誰の目にも明らかだった。

「行つてらつしやい。怪我のないようにね」

「頑張つてな」

皆が思い思いに別れの挨拶をしてくれる。

「じゃあ行つてきます」

後ろ髪が引かれる思いで、所長室を出ると、わざわざ席を外してくれていたのか、カルラがタバコを吸っていた。

沙良は苦笑いを浮かべて近づく。

「社内は禁煙ですよ」

「そんな注意も、しばらく聞けなくなると思うと寂しいものよね」

笑いながらカルラはタバコの火を消した。その姿は哀愁が漂っている。

「じゃあ、行こうか」

そういい、向かう場所は、社内に設置されている滑走路。

そこには、あきららかに個人で使う用途ではない、旅客機がたたずんでいた。

「……」

「どうしたのセラ？」

「いえ、今更だったと思って」

本当に、何処まで過保護なんだよ。

そして飛行機に乗り込むと大きなモニターに気がつく。

そのモニターには日本のニュースが流れている。

『スペインで、男性操縦者発見』

「ん？ 日本では僕の名前は出ていないの？」

飛行機の中、先程、日本で流れたニュースを見て、沙良は思ったことを口にする。

「ええ、『スペインで公表された少年R』として発表されたわ」

「でもイニシャルってエスパーニャではルイスを名乗ってるからRだけど、日本なら深

水と名乗るからHなんだよね」

「エスパーニャ主体でいいじゃないの」

「それもそうだね」

それにしても、

「一夏、驚いてるだろうなあ」



「空港にI S学園の教諭が迎えに来ているそうだから、後はその人に頼りなさい」

長いフライトを終えて、無事に日本に着いた沙良は、カルラと別れを交わしていた。

「うん、ありがとうカルラさん。行つてきます」

沙良は、研究所の職員と同じように、カルラに抱きつき、頬にキスをする。

カルラはキスを頬に返し、沙良の首のチャョーカーにふれる。

「完成するまで、オルカは戦闘に使つちやダメよ？ セラの身体に負担が大きすぎる。

オルカを使うときは、……死なないように」

「わかつてる。僕が作ったんだから。だから安心して？ カルラさん、ここ最近寝てな

いんでしょ？ 僕は大丈夫だから。ね？」

「もう……セラは最後まで人のことばかりね。帰ってきたら覚悟しなさい。職員全員からの頬擦りは免れないわ」

「あはは、それは覚悟しときますよ」

沙良は、荷物を台車にのせ、愛刀を右脇に挟む。

これ以上ここに居たら泣いてしまいそうだ。

沙良はカルラに背を向け、顔を上に向けることで涙を堪える。

「じゃあ、行つてきます」

「行つてらっしゃい」

沙良の肩が震えているのに気付いたカルラは、それだけ伝えると、沙良の背中を見つめ続ける。

沙良の姿は空港に消えていった。



「迎えに来てるといわれても、どんな人とか聞いてないんだけど」

落ち着き、涙を拭った沙良は、エントランスで、辺りをキョロキョロと見渡す。

すると、見覚えのある人が近づいてきた。

女性にしては背が高く、よくスーツが似合っている。

「千冬姉！」

それは、大切な家族である千冬であった。

「遅いぞ、沙良」

沙良は、文句を言う千冬に抱きつき、頬にキスをする。

千冬も呆気に取られたようだが、沙良の挨拶を受け止める。

「久しぶり、千冬姉！ ドイツで会った以来だね！」

「お前も変わらないな。特にその抱きつく癖だ。私や一夏には構わないが、ここは日本だ。スペインと同じように抱きつくんじゃないぞ？」

沙良はよく分かってないのか「なんで？」という顔をしているが、もう一度言われると、コクコクと頷いた。

「それでは、行くか。もう授業は始まってしまっている。途中から入るしかないだろう」「新入生なのに転校生みたいだね」

「そうだな」

千冬は、軽く笑い、ふと思ひ出したように言った。

「沙良、分かっているとは思いますが、私は教諭だ。学校では先生と呼べ」

「分かりました。千冬先生」

「織斑先生だ」

沙良の頭に拳骨が落とされる。

「いったあ!!」

「学校で同じことをされたくなかったら気をつけるんだな」

「……はい」

沙良は、重たい荷物を抱えたまま千冬の後についていく。

しかし、荷物が多い上に、愛刀を脇に抱えてる状態で早く歩けるわけではない。

「千冬姉」

「却下だ」

「まだ何も言っていないのに」

「言わなくてもわかる」

「じゃあ持つてよ」

「そんぐらい、持てなくてどうする」

沙良は、考える素振りを見せて、笑顔を作り爆弾を落とした。

「IS学園の器材って何パーセントがSQ製だったっけ？ 海底作業の際には良く声が

掛かった気がするなあ」

沙良がこれまでにない笑顔で言うと、千冬は怒りを堪えているのか、拳をプルプル震

わせている。

「いくらその名が有名だからといって、学園ではただの公務員だもんね。社会人って辛
いよねこういうとき。分かるよ、僕も社会人経験あるからね。ちよつと特殊だけど」

千冬は、沙良に向けて片手を差し出す。

沙良はとてもいい笑顔で千冬にトランクを渡した。

「向こうに行つてから、要らないことを覚えてきたな」

そんな皮肉に、沙良は肩をすかして答える。

「純粹すぎると、ぱくんと食べられちゃうからねえ」

千冬は、沙良の特別な環境についてある程度は知つているため、顔を顰めてしまう。

実験体として身柄を拘束されそうになつたことも。

「色々、あつたものだ」

「そうだね」

「恨んでないのか？ こんな世界に巻き込んだ束と私を」

「感謝することはあれど、恨むことなんかはないよ」

「しかし、沙良を平凡から遠ざけたのは紛れもなく、私と束だ。沙良が許しても、私は私
を許せない」

千冬は、辛そうに俯いてしまう。

沙良は、その千冬に笑いかける。

「ねえ、千冬姉。僕、笑えてるでしょ?」

言われた意味が分からなかったのか、少し呆けている千冬に、もう一度笑いかける。

「あ、ああ、笑えている」

「うん、僕は今は笑えてるんだ。だから大丈夫だよ?」

千冬は、沙良の言いたいことが伝わったのか、その表情を変える。

それは、沙良の祖父がよく言っていたこと。

『笑え、それが幸福の旗印だ』

それは、千冬も覚えていたようだ。

「そうか、私も、笑っていないとな」

その、千冬を見て、沙良は言葉を紡ぐ。

「それに」

「ん?」

「僕の事、守ってくれるんですよ?」

それは簡単なことではない。

これから先、沙良には様々な企業から身柄の拘束やデータの提供を求められるだろう。

誘拐などがあっても全くおかしくない。

今では、一夏に注目が向いているが、それも時間が経てば沙良の、その徳逸した技術に注目が集まるだろう。

学園にいる三年間も安全とは言いきれない。その三年が終わればもつと危険が増えるのは目に見えている

それをこれから先、守り続けていくのは困難だろう。

それを分かっているからこそ、千冬の表情は柔らかくなる。

「なるほどな、そういうことか」

「どう受け取ってもらっても結構ですよ？」

千冬は、内心感謝していた。

罪悪感に押しつぶされないように役目を与えてくれたことを。

「お前も、一夏も、私の家族だ。家族ぐらい守ってやるさ」

沙良が横から見えた千冬の顔は、とても晴れやかだった。



沙良は一人で歩いていった。

千冬は授業があるため学園に付いた時点で別れている。

沙良も荷物を持ったまま教室に入るわけには行かなかつたので、荷物を預けに学生寮まで来たわけである。

千冬には荷物を置いたら一年一組の教室に来るようにといわれているので、今は廊下を歩いている。

その女性しかいない特有の雰囲気は、研究所を思い出す。

「うう、早速帰りたくなってきたよ」

そうこう考えているうちに、目的の教室にたどり着く。

一組の文字を確認し、ノックしようと拳を握ると、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

『全部分かりません』

それは、男の声。

IS学園には男は二人しかいない。

一夏である。

『……織斑、参考書は読んだのか?』

その威圧感のある声は千冬だろう。

『えっと、古い電話帳と間違えて捨てました』

一夏が言うと同時に何かが硬いもので叩かれた音がする。

『必読だと書いてあっただろうが、馬鹿者が』

『……すみません』

『後で、再発行してやる。一週間以内で覚えろ』

『いや、一週間であの厚さは……』

『えっと……入りにくいんだけど』

沙良は、肩まで持ち上げた手を、ノックする形で止めたまま、入るタイミングを見計らっていた。

『ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ』

場が一度落ち着いたみたいなので、ノックする。

すると、ドアに近づくと気配を感じる。

開かれたドアの先には千冬が出席簿片手に立っていた。

「よし、来たな。一度場を整えるから、呼んだら入って来い」

「分かりました」

もう一度ドアが閉められ、千冬が声を張り上げるのが聞こえる。

『たった今、その空席に座る生徒が到着した。今から紹介するが、騒がないようになよし、入って来い』

「失礼します」

合図と共に、ドアを開き、教壇に近づく。

沙良が入るとざわめきがピタリと止まった。

その静寂に居心地が悪くなった沙良は教室をぐるりと見渡し、一夏の姿を見つける。ポカンとした顔の一夏にひらひらと手を振ると、頭に衝撃が走る。

「早く挨拶をしろ、馬鹿者」

「すみません、織斑先生」

もう一度教室を見渡し、挨拶を始める。

「深水沙良です。スペインより来ました。昔は日本にも住んでいたため、大丈夫だとは思いますが、不慣れなところもあると思います。特殊な立場ですけど、気軽に仲良くしてくれと嬉しいです。皆さんよろしくお願いしますね」

皆が、何か言いたそうにしているが誰かの眩きが耳に届いた。

「お、男？」

その眩きに、沙良は律儀に返事をする。

「ええ、男ですよ。ニュースであった、スペインの少年Rとは僕のことです」

そう胸を張って答える沙良は、生徒の様子がおかしい事に気付いた。

「きや……」

「ん？」

「きやあああああ!!!」

黄色い悲鳴が沙良を襲う。

その圧力にやられ頭がグラングランしている、生徒が堰を切ったかのように喋りだす。

「男子!! 二人目の男子!!」

「それもうちのクラスに!!」

「それも美形!! 織斑君とは違う感じの、可愛い系!!」

「さつき織斑君に手を振っていたよね!? 知り合いかな!？」

似てる。

沙良はそう思った。

あの研究所の空気に。

あそこの人間も大概騒がしかったなあ、その子供版って感じ。そんなことをぼんやりと考える。

「静かにせんか、馬鹿者が！」

千冬が出席簿を振るうのを見て、沙良は、みんながいい意味で馬鹿であると確信した。そこで、一人だけ沙良に他と違う視線を送る者に気付いた。

窓際に座る、髪の長い女生徒。

その生徒の姿を見つけると、沙良の顔に満面の笑みが浮かんだ。

小学四年のころから会っていない幼馴染、篠ノ乃箒が、そこに座っていた。

こんなところで会えると思ってもいかなかった沙良は、嬉しさのあまりに、箒に向かって手を振る。

箒も最初は戸惑ったようだが、手を振り返してくれた。

そこで、頭に覚えのある衝撃が走った。

「早く席に着け。授業中ということを忘れるな」

千冬の叱責にわたわたと席に向かう沙良。なんとも締まらない自己紹介に笑い声が聞こえてきた。こうして沙良の学園生活が幕を開けた。



一夏の後ろの席に座ることになった沙良は、授業が終わると、その前に座る一夏に問い詰められていた。

「どういうことだよ沙良。沙良がIS学園に来るなんて聞いてないぞ!」

「そりや言つてないもん」

そう悪びれる様子もなく答える沙良に、一夏は頭を抱えなくなる。

「あ、でも姉さんと千冬姉にはちゃんと伝えたよ?」

「何で俺に伝わってないんだ?」

「それは、僕が口止めしたからに決まってるじゃん」

もちろん嘘だ。実際には伝わっているものだとばかり思っていた。

「何で口止めしてんだよ!」

「ビックリさせようと思って」

そう楽しそうに笑う沙良の姿を見て、もう何も言えなくなったのか、一夏は話題を変えざる事にした。

「それにしてもビックリしたぜ。まさか沙良までISを動かせるようになるとはな」

「そうだね、僕もニュース見てビックリしたよ。まさか国際ニュースで一夏の名前を聞くことになるとは思ってなかったから、懲役何十年ぐらいの罪を犯したんだろうって心配したんだからね?」

沙良はISを動かしたときの話は出来るだけしないようにと心がけているため、軽く冗談を挟み、会話を誘導する。

本当はIS学園に入った時点で特別な立場を話してしまってもいいのだが、面倒くさそうなことは嫌だなあと沙良自身が感じているため、オフレコにしているのだ。

「酷い心配の仕方だな」

一夏も笑いながら冗談に乗ってくれたようで、ほっと胸を撫で下ろす。

「ちよつとよろしくて?」

「はい?」

「ん?」

声をかけられてた先に女生徒が立っていた。

長い金髪に、欧州によく見られる青い瞳。その白い肌は日本人とは違い、気品さを生み出している。

沙良はその姿を確認し、思い当たる人物がヒットしたため、顔を顰めてしまう。

セシリア・オルコット。記憶が正しければイギリスの代表候補生であり、専用機持ち。

どう見てもエリート風をすかしているお嬢様といった印象を拭えない。

「聞いてますの? お返事は?」

「ああ、聞いてるけど……君は?」

一夏は戸惑いながらもそう答えた。

沙良は久しぶりに上から目線で話しかけられ、正直笑いを抑えるのに大変だった。

高々代表候補生の分際で、沙良に高圧的に話しかけるなど、スペインの人間が見たら卒倒しても可笑しくない。

「わたくしを知らない？ このイギリス代表候補生でこの学年の主席たるセシリア・オルコットを!？」

「だって自己紹介すらされてないクラスメイトにいきなり話しかけられても知ってるわけじゃないじゃん」

沙良は顔に出る表情を隠そうともせずには答える。

「まあ、なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも至極光栄な事なので、それ相應の態度というものはあるんじゃないかしら？」

そのセシリアの上からの態度に沙良は笑いを耐え切れなくなってくる。

——自分の国しか見てこなかったんだろうなあ。

少しでも世界に目を向けていれば沙良の名前は自然と入ってくるものである。

ISに関わってなかった一夏ですら、沙良の名前をそういう場で聞いたことがあると聞いたのだから。

「あ、一ついいか？」

そこで一夏が空気を読まずに挙手をする。

「代表候補生って何？」

その言葉に、セシリアだけではなく沙良も呆れかえってしまふ。

「その国の国家代表 I S 操縦者の候補として選出される人のことを言うんだよ。まあエリートって思つてれば間違いはないかな」

「へー、そうなのか。流石、沙良は物知りだな」

「えへへ、そうでもないよ」

「ちよつとほつたらかしにしないで下さる!？」

沙良は、つい吹きだしてしまい、一夏も、コイツ面倒くせえ見たいな顔をしている。

「で、そのイギリス代表候補生のエリートさんが何のご用で？」

一夏も対応が投げやりになってきているのが分かる。

「そうエリートなのですわ! 本来なら、わたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡! 幸運なのですわ! その現実をもう少し理解していただければ?」

「へーすごいね」

「そうか、それはラッキーだな」

「……あなた方、わたくしを馬鹿にしていますの?」

「別に？」

「大体、あなた方 I S について何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男で I S を操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

期待外れと言われても実力を見せたわけでもないのに、何で判断しているのだろうか。沙良は自分のほうが I S については上だと確信的な自信があるため、セシリアの姿が滑稽に見えてしまう。

「あれ、沙良って I S については詳しいんじゃないかなかったのか？」

「まあ、そこそこね」

日本らしい謙虚さをアピールしてみる。一夏は S Q 社に招いたことがあるため、沙良の発言が謙遜だと気付いているが、目の前の女生徒はそうもいかない。

「I S のことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら、教えて差し上げてもよかったですよ？ 何せわたたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

分らないところがあれば先生に聞くのが手っ取り早いだろうに。

「いや、いいよ。沙良に聞くから」

「一夏、そこは先生に聞くのが正解だよ」

沙良は、呆れて物も言えなくなっていた。

「てか、入試ってあれか？　ISを動かして闘うやつ」

「それ以外入試などありませんわ」

「俺も倒したぞ？　教官」

一夏が爆弾を投下した。

その一夏の言葉を理解していくと同時に、表情が変化していく。

「……わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「まあ一夏は特殊な例だしね」

沙良が会話に介入する。

「そ、そういう、あなたは どうですかの!？」

「僕？　僕はまず、入試自体を受けてないよ？」

「……………え？」

一夏とセシリアが綺麗にハモツたのを、沙良は、なに言ってるのこの人たち、といった目で見ていた。

「だって強制的に入学が決められているのに、何で入学試験するのさ。どうせ入れるつもりなのに。考えたら分かるでしょ」

「ああ、確かに言われていたら」

「な、な、な」

セシリアは顔を驚愕の色に変え、沙良に何かを言おうとしたが、予鈴に阻まれてしま
う。

「また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって!」

捨て台詞をはいて、自らの席に帰っていったセシリアを見て、また笑いが込み上げて
きた。

「IS学園は癖が強い子がいっぱいだね」

「……全くだ」

一夏は沙良の方を向きながら答えたが、それがどういう意味かは考えないことにし
た。

「それにしても、沙良ってIS学園の教科書に乗るぐらい有名なんだろう?」

「そうだよ。もっと崇めて崇めて」

「その割にはあの金髪ロール、沙良の事知らなかったな」

「だって、顔写真公開してないし」

「あ、そっか」

公開してないものを知っておけというのが酷な話だろう。実際、整備士を目指してい
る者なら八割方が沙良のことを認知していると言われているが、パイロット志望の学生

は技術者を対して気にも留めていないと聞いている。

「でも名前で気付くと思うけどなあ」

「それは思ったけど、あまり外国に目を向けないタイプの人なんじゃないかな。代表候補生ってことは自分のことで精一杯で、あまり周りに目を向けてる余裕がないんだと思うよ」

だが、知らずして他国の権力者を罵倒。代表候補生としては失格レベルだ。

沙良がIS委員会にこのことを進言すれば、英国は簡単にセシリアの首を切るだろう。

代表候補生なんて代わりは幾らでもいるのだ。一度痛い目に合わねば取り返しのつかないことになってもおかしくはない。面倒を見るつもりはないが、様子見で現状を見させたほうがいいだろう。

「素質は高そうだけど、性格で損するタイプだよ、あの子」

セシリアに妥当な評価を下し、沙良はつまらない授業に向けて教科書を取り出しておくのだった。

第八話 意識の差、同郷の友

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」
先程の授業とは違い千冬が教壇に立っている。

大事なことなのか、真耶ですらノートを手に授業を真剣に聞いている。

しかし、沙良はその授業をきちんと聞いていなかった。

使用する装備の特性なんて、言ってしまえばキリがない。

それこそ装備一つ一つに違った特性があるのに、まとまったジャンルで特性を教えるも、それはただ『使える』というだけであって、『使いこなす』レベルじゃないのだ。

それを、武装を開発する立場に居る沙良は、身に沁みるほど理解している。

——まあ、ここにいるみんなはまだ経験が圧倒的に足りないから、使えるようにはしておかないとって判断なのかも。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
千冬の発言に、沙良は頭を捻る。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみに、クラス対抗戦は入学時点での各クラス

の実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

つまりは、成長の基準にされるわけだから、無駄に戦闘回数も多い。

データを取る目的ならいいが、雑用も押し付けられることを考慮すると、さほどやりたいという気にはならないだろう。

沙良は開発のほうに気を回したいという気持ちもあるため、その態度が顕著である。

——どうか僕にその役目が回ってきませんように！

「はいっ。織斑くんを推薦しますー」

—— B i e n h e c h o !! (でかした!!) 誰かわかんないけどよく言った!!

一夏の「織斑ってこのクラスにもう一人いるのかー」という間抜けな面を横目に、沙良は胸を撫で下ろす。

「私もそれがいいと思いますー」

またしても一夏の名前が挙がり、沙良は安堵を深くする。

「では、候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!？」

「ぶっ、気付くの遅いよ一夏」

立ち上がった形になる一夏は視線に晒される形となる。

正直、とても目立っている。

それに、面倒くさそうな視線を向けたのは、教壇に立つ千冬であった。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

一夏が、一瞬だけ沙良のほうを見た。

嫌な予感がする。

背中に伝う嫌な汗は、これから起こることを敏感に察知したようだ。

「な、なら俺は、沙良を推薦する！ 沙良なら俺よりしっかりしてるし、ISについても詳しいいな」

「拒否権を発動します」

一夏は手を合わせて謝っているが、ここでそんなことしても状況が変わるわけでもないのは誰の眼にも明らかだ。

「他薦されたものに拒否権などないと言っただろう。織斑に、深水か。他にはいないか？」

もちろん、沙良としては乗り気ではない。

どうにかして、誰かに押し付けなければならぬ。

それには、候補者が少なすぎる。

そこで、沙良は一人の人物を思い出す。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

まさにベストタイミング。名を挙げようと思い立った瞬間に、その生徒が机を荒々しく叩き異議の声を上げた。揺れる金髪に意志を秘めた青い瞳、どこぞのイギリスの生徒だった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

嫌なら、初めから立候補すればいいのに。

周りの視線がそう語っている。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

極東の猿。

沙良自身は、エスパーニヤを祖国だと思っているため、そこまで何も思わない。

しかし、一夏は目に見えてイライラしている。

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そして、それはわたくしですわ
!」

——入試の結果だけで、よくもここまで大きなことが言えるもんだよなあ。

沙良を含めたスペイン勢は入試を受けてない者が多数混ざっている。入試自体は、そこまで実力を測る指針になってるとは思われない。

それに実力と言えど、その各々に得意な分野があり、それに適した戦場がある。何が優れているとは一概に言えないはずだ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって
は耐え難い苦痛で——」

「イギリ——」

「じゃあ帰ればいいのに」

「……沙良？」

一夏が勢いよく立ち上がったところに言葉を被せる。

ただ立ち上がっただけとなった一夏は軽く注目を集めている。

しかし、セシリアが注視しているのは、言葉を紡いだ沙良の方である。

「なんですって……!?」

「嫌なら帰ればいいじゃん」

「あ、あなた、わたくしを侮辱しますの!？」

「何処をどう捉えたらそう思えるのかが不思議で仕方ないよ。それに、君が侮辱だと言
い張るのなら、さつき君が言ったことは侮辱に入らないの?」

「う、それは……」

「それに、君は日本人を極東の猿と表現したけど、君が使う I S も元はその極東の猿が
作ったものだよ?」

千冬に視線を向ける。

「そして、そこに立つ、人類最強の I S 操縦者も君の言う極東の猿だよ? 君はその極東
の猿に勝てるの?」

「そ、それとこれとは話が別ですわ!!」

沙良はため息をつく。

「イギリスの代表候補生だよ、オルコットさんって。君はイギリスの名を背負って
るんだよね?」

「あ、当たり前ですわ!」

「じゃあさ、その国の代表の君が、日本を一方的に貶したと理解できる? 君の発言はイ
ギリスが日本を貶めてるとなんなら変わりないんだよ?」

オルコットがその事実には驚き、顔を青くする。

「君の言い分はよくわかんないけど、一回落ち着こう？ 話を整理して、それから話そうよ」

千冬の視線を感じてそちらを向くと、頷きが返って来た。

沙良は大人しく席に座りなおし、応対の終わりの合図とする。

教室の空気が一瞬で重たくなった。

「とりあえず、話を進めましょう。候補者は三人。それでいいですか？」

真耶が、その空気を何とかしようとして、場を仕切り始める。

「さて、どうやって決めよう」

「実力が認められたらいいんだろう？ 戦ってみたらどうだ？」

一夏の何も考えてなさそうな声に、千冬が提案をする。

しかし、その表情は明らかに楽しそうに笑っており、まともな発想とは思えない。

「いいでしょう、言われっぱなしっていうのも気に食いません。決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

しかし、乗せられやすい二人は簡単にその意見に乗っかってしまう。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「イギリスつて未だに奴隷制度があるの？」

「悔るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？　なんにせよちようどいい機会ですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

沙良の疑問は華麗にスルーされる。

沙良などまるで眼中に無いと言わんばかりに、勝手に話が進んでいく。

しかし、沙良としてはやらなくていいなら、やらないに越したことは無いため、この流れを好ましく見守ることにした。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いやー、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

起動時間が数十分の一夏が、百時間を越えるであろう代表候補生相手にまともに太刀打ちできるとは思わない。

沙良は苦笑いを浮かべる。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

周りの生徒も苦笑いを浮かべている。

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「しかも、467個しかないコアの1個を専用機として持つてるのに」

しかし、その理由が沙良とは全く違った。

沙良は、あくまでも代表候補生と、素人と言う観念の元無茶だと言う結論を出したが、周りの女子たちは違う。

男が女に勝てるわけが無い。

そんな思考に染まっているのだ。

それがIS業界にどっぷり浸かっている沙良には気に食わなかった。

「確かに、女性のほうが強いって言われてるけど、今は違くないかな？」

「え？」

沙良のつぶやきは、隣の席の女子に拾われたようだ。ちらりとそちらを向くと目があつた。

「だって一夏、IS使えるじゃん。条件は一緒じゃないの？」

そう、一夏も沙良もISを操縦することが出来る。女性が強いと言われる所以は、ISを動かせることにある。ならばISが動かせる男ならばその差は全くと言っていいほどないだろう。

「確かに……」

隣の席の女子も沙良の言葉である程度理解したようだ。

その高い理解力に、I S 学園のレベルの高さがわかる。だからこそ、このような思考の偏りをもつたいたなく思う。

沙良と隣の席の女子の話はほかの子にも聞こえていたようで、少し空気が引き締まっているような気がした。

「まあ、一夏がオルコットさんに勝てるとは思わないけどね」

そうおどけると、女子もくすくすと笑ってくれる。険悪な空気になることは防げたよ
うで、沙良もホッと胸を撫で下ろす。

「それに、今、出ている情報だけを真に受けちゃだめだよ。コアが467個しかないとか、そんなわけないからね」

「沙良」

「あらっ？」

千冬の声に、沙良は肩を竦める。

どうやら、これは話してはいけない部類の話らしい。

業界では有名な話なのだが、どうやら上層部がそういう意向らしい。

千冬は教室の状況を一回整理しようと、場の進行の手綱を握ることにした

「……さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と深水、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始

める」

ぱんつと手を打って千冬が場を纏める。

「織斑先生、僕の名前が入ってますけど、間違いないのですか？」

呼ばれた名前が意味することは、巻き込まれたと言うこと。

「何も知らない小娘らに教えてやれ」

そういつてニヤリと笑う千冬。

周りの生徒たちは、その意味が全くわかっていないが、沙良はきちんと気付いていた。

——ああ、押し付けるつもりか。

めんどくさいことになった。

知識はある。ISにも慣れている。

それはそうだ、ずっと開発側だったのだ。

ここにいる誰よりもISの身近に居たのだ。ISの雛形をずっと見てき、触れてきたのだ。その起動時間も代表候補生など比ではない。

——あまり目立ちたくないんだけど。

その沙良の思いは誰にも届くことはなかった。



「うう……」

放課後、一夏は机にぐったりともたれかかっていた。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

「大丈夫、一夏？」

「沙良はよく理解できるな。俺には全くだ」

沙良は苦笑いしながら、一夏の机に腰掛ける。

「僕は研究職だからね。IS作ってるのに理解してなかったらそれはそれで問題じゃないかな？」

「確かにそうだな」

「そんなに分からないなら、要点纏めた資料作ろうか？」

「一夏はがばつと身体を起こし、沙良をまじまじと見つめた。

「いいのか？」

「もちろん。そんなに手間じゃないしね」

その言葉は嘘じゃない。

開発の指揮を執る側の人間として、新人研究者の教育を手伝ったことも多々ある沙良にとつては、基礎を纏めるだけなら一時間もあればできる。

「じゃあ、よろしく頼む」

「任せて」

とりあえず、職員室に行かなければならないから、その後で用意するとしよう。

今日の決闘騒ぎで、いろいろしなければいけないことが出来たのだ。

「ああ、織斑くん、ルイスくん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「ルイスって久しぶりに聞いたな」

日本に来てから初めて呼ばれたかもしれない。

確かにルイスが父親の姓だから名乗るのはルイスだ。しかし、日本の姓もあるから普通は日本姓で呼ぶだろう。実際に千冬は深水と呼んでいる。

真耶の真面目な部分が垣間見れる会話だ。

「自己紹介で深水って言ってますから、別にルイスじゃなくていいですよ。むしろ日本にいる間は深水でお願いします」

「はい、分かりました。深水君ですね」

「それで、何かあったんですか？」

一夏が話を促して、真耶は思い出したように言う。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーを、一夏に渡す真耶。

ⅠS学園は全寮制だ。その表立つての理由は生徒の安全確保とか言うものだ。何処の国も優秀な操縦者の確保に必死になっている現状、妥当な制度と言える。一夏や沙良が自宅から通学すると確実に学園にたどり着かないだろう。

ちなみに、沙良は授業に行く前に、先に部屋に荷物を置きに行ったから自分の部屋は把握している。

「あれ？ 俺の部屋、決まっていんじゃないじゃなかったんですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通うって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです」

「部屋は沙良と一緒になんですか？ 鍵は一個だけしか渡されてないですけど？」

「僕は個室だよ？ 荷物置きに先に寮に行ったから鍵ももう持つてるし」

「てことは俺も個室ですか？」

「いえ、それが……用意できた個室は一個だけで、織斑くんは相部屋となります」

羨ましそうに沙良を見つめる一夏。

「それですね、織斑くん荷物のことなんですけど——」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

——千冬姉の手配って絶対生活必需品だけだよ。そんなに気が利くようには見えな
いっ。

「ど、どうもありがとうございませ……」

「まあ生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

一夏が潤んだ目で千冬姉を見つめてるが、千冬は持つてきただけでも感謝しろと言わ
んばかりの態度だ。可哀相だが、千冬が相手なら仕方ない。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂
で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。
学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、お二人は今のところ使えません」

それもそうだろう。

「女子と一緒に入るわけにはいかないですしね」

エスパニーヤには、ゆっくり湯船につかる習慣があまり浸透していない。それゆえ、
シャワーでも気にはならなかったが、やはり日本に來たらゆっくり浸かりたくなるのが
日本の血の性といったものだろう。

一夏が「そっかあ」とでも言わんばかりの間抜け面をしているため、沙良は少し心配
になってしまう。

「ははは、沙良、ジト目で見るのやめてくれ」

「他に何か聞きたいことはあるか？」

「なんで沙良と俺が一緒に部屋じゃないんだ？ 相部屋の子にお願いして、その個室に

移ってもらえばいいだけじゃないか？」

「何かあったときに一緒にいられると対応しにくいからだ」

「どういうことだ？」

「つまりはね、一夏。業界では名の知れ渡っている僕を囿として切り捨てて、一夏だけでも助けようということだよ。今、エスパニーヤは同盟国のほうが少ないしね。IS委員会は一夏さえ無事ならいいって考えを示してるんだ。僕は替わりのいる一介の技術者に過ぎないからね」

「でも、沙良だつてあの束さんの弟のようなものじゃないか！」

「……織斑先生、私は仕事がありますので」

一夏の叫びに、真耶が空気を讀んだのだろうか、席を外す。

三人で話しやすいようにとの配慮だろう。

千冬もそれに気づかないような人間ではない。

「ああ、すまない」

千冬の言葉に、苦笑しながら真耶は元来た道に戻っていった。

「お偉いさんはね、不確定な状況よりも、確実性のある事実を好むんだよ」

「俺が、千冬姉と姉弟だからか」

「うん。一夏はあの戦乙女の血の繋がった弟だ。期待度は一夏のほうが高いんだよ。女尊男卑の傾向が強まった世界にとって、一夏は起爆剤になりえるんだ。僕とは違ってね」

「そのとおりで。IS委員会は、沙良をよく思っていない。一人は実験に回せなどというイカレたことを言う人間もいるのだ。もちろん、私が何としてでも止めるがな」

千冬の口調はいつも通りのように見える。しかし、動揺しているのが沙良にはよく分かる。なにせ、学内に関わらず沙良のことを名前で呼ぶのだから。

「千冬姉、そんな辛そうな顔しないで。一夏も、そんな顔しないで、ね？」

「なんだよ、それじゃあ」

「一夏、僕は大丈夫だから」

「……くそつたれ」

一夏はその怒りを隠そうとしない。

「他に聞きたいことはあるか？」

「……特に」

「織斑先生、放課後のアリーナの使用許可と、本国からの機体が到着するまでの訓練機の

貸し出し許可をもらえませんか？」

「……いいだろう。しかし、私はこれから会議がある。それが終わってからになるが待てるか？」

「どのぐらいですか？」

「おおよそ一時間半ぐらいだろう」

「では、書類だけ書いて待ってます」

「わかった。では後で職員室まで提出しに来い」

「de acuerdo (了解しました)」

「そう、かしこまるな」

千冬は意味を分かってくれたようだ。笑ってくれたようでホッとする。

一夏も少しは気を抜いてくれたようだ。

敬礼を解くと、沙良は緩い笑みを浮かべるのだった。



「ふう、疲れた」

沙良は、職員室に書類を提出し、寮までの道を歩いていた。

「それにしても、シックエスト以外に乗るのは初めてだなあ。ちよつとだけ楽しみだ」

今回、貸し出しの許可を貰ったのはラファール・リヴァイブ。そして、打鉄。

そう、二台借りたのだ。目的はもちろん、一夏にも訓練させるため。

正直、一夏が国家代表候補に勝てるとは思わないが、何もせずに負けるつてのも気に食わない。ならば、出来るだけのことを一夏につき込もうということだ。

「セラ?」

そう考え事をしていると、声をかけられた。

「セラだよね? やっぱりセラだ! ! Cuanto tiempo! (久しぶり!)?」

Como estas? (元気にしてた?)」

「Lina?」

そこには、スペイン代表候補生リナ・フェルナンデス・コロンがいた。ダークブラウンの長髪が元気に跳ね、その表情を輝かせる。

リナは沙良に抱きつき、挨拶として頬にキスをした。

「Estoy bien Cuanto tiempo sin vernos. (もちろん、元気だよ。本当に久しぶりだね)」

沙良もリナと同じように頬にキスを返す。

育った環境からか、頬にキスをするのが挨拶みたいになっていたため、お互いに躊躇いなくキスをする。

「入学してたのは知ってたけど、まさかこんなに早く会えるとは思ってなかった」

「僕もビックリ。いずれ、機体の整備で会うとは思ってたけど、初日で会えるなんて運がいいね」

リナは、S・Q社から専用機を与えられている。

それも、ただの専用機ではない。将来有望な候補生のみが与えられるカスタム機。いわばエリートの人だ。その割に人当たりがよく、沙良も仲良くしている。

「!Que suerte! (本当に運がいいわ!) ねえ、夕食は食べた?」

「まだだよ」

「Vamos a comer juntos! (それなら、一緒にご飯を食べようよ!)」

「Si, !que buena idea! (うん、それはいい考えだね)」

沙良は、リナと共に食堂に向かう。

その足取りは、祖国の人間に会ったからか、いつもよりは軽いように思われる。

「リナはなに食べるの?」

「せっかく日本にいるんだから和食定食Aにするわ。セラは？」

「そうだなあ。じゃあ、和食定食Bにするよ」

食券を注文口で出すと、そのまま受け取り口まで移動する。待つのはほんの少し。

運ばれてきたのは、美味しそうな魚の煮つけだった。

それに、小鉢、おひたし、味噌汁、漬物、白米といった日本によくなじんだセットとなっている。

「先、席取っておくね」

沙良は、そう言い二人分空いている場所を探す。

「結構空いてるなあ。なんでだろう？」

難なく端の席を確保する。

よく見ると一箇所に、人が固まってるのが見える。

そこには、見覚えのある生徒がいた。

「一夏……犠牲になってくれたんだね」

「それは何か違うと思うわ」

「あ、リナ」

リナが沙良の目の前に座る。

「もしタイミングが悪ければ、セラもあなってたってことね」

「puede ser (ありえるね)」

「もう、他人事じゃないんだよ？」

リナは、けらけらと笑う。

沙良もその顔には笑顔が浮かんでいる。

「なんか一日も経つてないのに、セラって呼ばれると懐かしく感じちゃうよ」

「今はなんて呼ばれてるの？」

「深水とか沙良とかだね」

「深水……向こうでは全く聞かないね」

リナは喋りながらも、綺麗に焼き魚を口に運ぶ。

どうやら和食定食Aは鯖の塩焼きのようだ。

「リナ、箸の使い方上手だね」

「えへへ、実はソフィア先輩に教えてもらったんだ」

「ソフィに？」

「うん。セラより大分早くにIS学園に来てたから、そのときにお世話になったの。私

たちは、みんなお世話になったんじゃないかな？」

「ソフィも頼られてるんだなあ」

「セラの最高傑作を扱える人だからね」

最高傑作。それは、オルカ、ドルフィンと同じ第三世代シークエストシリーズ、ケートウスシリーズの機体。ケートウスとはラテン語で *Cetus* と書き、海獣を意味する。

「リナも実力が認められたら、そのカスタムをケートウスにしてあげるよ」
「本当!?!」

「もちろん、ソフィに勝てるぐらいまでにならないとだけどね」
「えーケチ」

食事の時間は他愛無い会話で楽しく過ぎていく。

気付けば、食器の上も綺麗に片付いている。

今はお茶だけ残っている状態だ。

「それにしてもソフィが頼られてるねえ……」

その眩きには、様々な思いが込められている。

「人のベッドに潜り込んできて鼻血出して運ばれていくようなソフィがねえ」
未だに納得していない沙良であった。



「じゃあ、僕の部屋はここだから」

「1030ね、覚えてたわ。私は1034だからいつでも遊びに来てね」

「気が向いたら行くよ」

「嘘、そういうときのセラは絶対来ないって知ってるもん」

そんなことないと言ふと沙良は反論しようと思ったが、否定しきれない部分もあるため、何も言わずに、愛想笑いに留めた。

「Buena noches Sara. (おやすみ、セラ)」

「Buena noches Hasta mañana. (おやすみ、また明日)」

挨拶を交わし、自分の部屋に入ると自分のトランクがベッドに鎮座していた。

「片付けないと……」

沙良は、トランクの中身を取り出し、綺麗に収納していく。

しかし、その量は問題ではないのだが、如何せん機器の配線がややこしい。

「明日にするか」

『No dejas para mañana lo que puedes hacer hoy. (今日できることは、明日に先延ばしをするな)』

有名なことわざだが、そんなもの、疲れきった沙良には関係ないことだった。

「あ、一夏の資料も作んなきゃ」

あの時の自分を殴りたい気分だが、そこは約束してしまった自分が悪い。

「……シャワー、浴びるか」

こうして沙良の学園生活初日は終わった。

第九話 専用機

「箸、醤油とって」

「ほら」

「ん、ありがとう」

「沙良、ご飯粒がついているぞ？」

「え、うそどこ？」

箸は右頬を指差している。

「あ、本当だ」

沙良はにへらと笑い、ご飯粒を口へと運ぶ。

「……沙良は良くこの状況で、普通に飯が食えるな」

「ん？」

一夏は暢気にご飯を食べる幼馴染に、ため息を吐く。

何故この視線の中、そんな暢気にご飯が喉を通るのだ。

一夏は食べづらくて仕方ないというのに。

チラッと周囲を窺うと、案の定、女子が一定の距離を保ちながらこちらの様子を窺っ

ている。

——なんだ、この状況。今なら動物園のパンダの気持ちができる気がする。

居辛いのはそれだけが理由ではない。

「ねえ、織斑君、深水君、隣いいかな？」

——来た。

「ヤダ」

「ど、どうしても駄目かな？」

「ん？ だって他にも席空いてるよ？」

「え、あ、うん。そうだよね」

——違うんだ、沙良。相席したいのは席がないからじゃなくて、一緒に食べたいってことなんだ。

「ん？ どうしたの？ ご飯冷めちゃうよ？」

「あ、そ、そうだね。ありがとう」

——哀れな女生徒がこれで六人目か。

一緒にご飯を食べようと近寄ってくる女子を、沙良が追い払う。

そんな光景がなんやかんやで十五分近く続いている。

「同じクラスでも駄目だなんて」

「天然ほど恐ろしい壁はないわね」

「まだ、まだ一週間も経ってない。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「作戦を立てましょ」

周囲も、目的が、一緒にご飯を食べることから、沙良を領かせる事に移り変わっている。

沙良と一緒に食べたいのだったら、その旨をはつきりと言えればいい。しかし、全員が様子見から攻めてくるせいで、沙良は本当の意図に気付かない。沙良は、自分に向けられている関心の意味を疑うのだから。

「箒、インターミドル優勝だつてね」

「ほう、知っていたのか」

箒も、邪魔が入らずにご飯が食べれるおかげか、機嫌が良さそうだ。沙良が追い払うたびに小さくガッツポーズを取っている。

——箒も、ここまで人見知りだとはなあ。

そんな感じで、このIS学園で友達を作れるのだろうか。

「一夏が教えてくれたんだ」

「そういえば、一夏は会場に居たらしいな」

「ああ、一応選手として出てたよ」

「そうなのか？」

「まあ、剣道じゃないけどな」

「でも、剣道は続けてるんでしょ？」

「独学だけだな」

篠ノ之道場に通っていた時の練習をベースに、たまに千冬に教えを受けている。

「それは、腕を見てみたいな」

箒が無表情に言う。

「久しぶりに打ち合うか？」

「ならば、放課後を空けておけ、剣道部には私が話を通しておく」

——人見知りなのに大丈夫か？

「今、余計なことを考えなかったか？」

「いえ、なんでもありませんっ!!」



放課後、沙良たちは剣道場にいた。

沙良は竹刀を膝の上に置き、一夏と箒が稽古しているのを眺めている。

箒は全国の頂点に立ったと聞いていたため、一夏が負けるのであろうと思っていたが、一夏は箒相手に善戦していた。

「ふん、腕は落ちていないようだな」

「伊達に稽古を重ねてきたわけじゃねえよ」

二人は喋りながらも激しい打ち合いを続ける。

一夏が稽古を再開したのは、あの事件からだっただけだ。

この長くない期間で箒相手にここまで出来るようになるとは相当訓練を積んだのだろう。

しかし、それでも箒には及ばないのだろう。足元が覚束なくなってきたようだ。

「面っ!!」

少し、もたついてしまった一夏は、竹刀を面で受け止めることとなった。

「くっそお」

面を外し、悔しそうな表情を見せる一夏。

「次は、沙良の番だ」

箒に呼ばれ、沙良は竹刀を片手に立ち上がる。

「お疲れ、はいタオル」

「お、サンキユ。やっぱ剣では勝てねえな」

一夏に汗を拭くタオルを渡し、箒の前に立つ。

「一夏と違つて、そんなに出来ないんだから手加減してね」

「冗談はよせ、沙良相手に手加減など出来るわけないだろう」

箒は苦笑いを浮かべ、竹刀を正眼に構える。

沙良はそれを見て、竹刀を下段に構える。

箒はそれを見て、一瞬嫌そうな顔をした。

剣道において、下段の構えはあまり好まれていない。見た目が地味な上に、結局は正眼に引き戻さなければ、相手の攻撃を受け太刀出来ないからだ。

しかし、沙良が使うのは剣道ではない、剣術だ。それも大太刀と薙刀を使う、実戦的な古流剣術。沙良の持つ竹刀も普通の物より、長めに作られている。

下段に構えると地面に付くぐらいに長い竹刀は、沙良の体格で扱えるのか不安に思うものも多いだろう。

しかし、箒の表情は真剣そのもの。

箒は知っているのだ。この構えが篠ノ之流薙刀術の基本の構えであると。

故に、沙良が一切の手抜き無しで相対しているのだと分かっているのだろう。

「はああああ!!」

箒が、掛け声と共に、沙良に踏み込む。それは、素人には目視さえ難しいキレと速さを掛け合わせていた。

しかし、その踏み込みから放たれる竹刀が、沙良を捉えることはなかった。下だ。

沙良は箒の踏み込みに合わせ、重心を落とすことによつて、動きの工程を最小限に抑え、箒の足を竹刀で払った。

普通なら力を込め、踏み出し、下へ潜り込み、剣を振るう。

大まかに分けても四工程の動作を、沙良は身体の色を抜き、自然に倒れる力を利用することで行ったのだ。

動きは工程が少ないほど相手に認識されにくい。

箒にはいきなり目の前から消えたように見えただろう。

床に伏せた箒を見る限り、上手くいったみたいだ。

「箒、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

箒に手を貸して、立ち上がらせる。

「沙良の剣はいつ見ても凄いな。俺も太刀を習えばよかったかな」

一夏が二人分のタオルを持って二人に近寄る。

「今のは、太刀じゃなくて薙刀の応用なんだ。相手の力を利用する柔の技だね」

沙良は圧倒的に体力が足りていない。

その華奢な身体では、相手の動きを利用することぐらいしか出来ない。

「俺も沙良みたいに強くならねえとな」

「箒とは相性が良かっただけだよ。一夏とやったら半々ぐらいかな勝率は」

「はは、じゃあ六割は勝てるようにならねえとな」

沙良は、一夏の言葉を聞き、いい事思いついたと箒に声をかける。

「ねえ、箒。一夏に、稽古つけてあげたら？」

「は？」

一夏が腑抜けた声を出す、沙良はシカトする。いまいち理解していない様子の箒に小声で話しかける。

「一夏と一緒に居れるチャンスだよ」

箒に耳打ちすると、箒はすぐさま一夏に宣言する。

「そうだな、私が稽古をつけてやろう!!」

沙良の言葉が聞こえていなかった一夏は、急に箒がやる気を出したことに驚いたが、稽古自体に文句はないのか嫌そうな素振りは見せない。

「そりゃあ、こつちとしても稽古に付き合ってくれるのは嬉しいけどいいのか? 付き

合わせて。箒だって忙しいだろうに」

「もう、好意は素直に受け取るものだよ、一夏」

箒が昔から一夏に好意を抱いているのを知っている沙良は、内心、「ちよろいもんだよ」と思うのだった。



月曜日、決戦の日。

「一夏、どうすんの？」

「いや、俺に言われても……」

「全く、なんという事態だ」

三人はピットで、戸惑っていた。

それは、たった一つのアクシデント。

「何故、専用機が届いていない」

箒の言ったとおり、一夏の専用機がまだ届いていないのだ。

決闘開始まで、三十分しかないという、この状況にも関わらずだ。

「どうする？ 打鉄で出る？」

沙良は言っではみたものの、それは出来ないと知っている。

ただの会話を繋ぐためのネタに過ぎない。

「今更、貸し出し許可が貰える訳がないだろう」

「だよー」

沙良は出来ることなら自分が出てもいいと思っっているのだが、そういうわけにもいかない。沙良のISは午後が届くと言われているため、沙良の試合は午後に回されているのだ。

「どうしたものかな」

責任が誰にもないため、なんとも言えない空気が漂っている。

その空気を切り裂くように、甲高いヒールの音が響く。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

真耶が後ろに千冬を伴って駆け足で向かってくる。

「ふう、来たみたいだね」

「来ました……来ましたよ！ 織斑くんのIS！」

ピット搬入口が開く。

それはゆつくりと、駆動音を響かせながら、その向こう側を晒していく。

そこに、『白』がいた。

白。

真っ白。

飾り気のない、無の色。

眩しいほどの純白。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用I S『白式』です！」

一夏は惹きつけられるかのように白式に近づく。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。わかったな」

一夏は白式に触れる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じがいい。後はシステムが最適化する」

一夏は、白式に体を任せ、その体に白を纏っていく。

「一夏、いけそう？」

沙良は、一夏に声をかける。それはI Sが動くかと聞いたものではない。勝てるか。そう聞いたのだ。

「ああ、ここまでお膳立てされておいて、やれないわけがない」

「じゃあ、今日の夜は祝勝会だね」

「はは、期待しておけよ?」

「……………」

何か言いたげな箒に気づいたのか、一夏は箒に目を向ける。

「箒」

「な、なんだ?」

「行ってくる」

「あ……………ああ。勝ってこい」

一夏の意識がゲートに向かったのに気付いた沙良は、一夏に声をかける。

「じゃあ、僕はそろそろ戻るよ」

沙良は、この次、セシリアと戦うことになっている。

そのため、この一夏vsセシリアの試合を見ることを禁じられているのだ。

少しでも条件を近づけるためだろう。

沙良としては、データのあるセシリアよりも、全く未知な一夏の機体の方が恐ろしい

のだが。

「勝つてね、一夏」

沙良がピットを出ると、一夏がゲートを飛び出すのは同時だった。



沙良は控え室で自らのISに対峙していた。

それは深い青。

深海を思わず深い青。

「シークエスト、それも僕がテストパイロットとして使っていた製作試作機か」

沙良は本国から送られてきたISに驚きを隠せなかった。

訓練機を持たせると聞かされていたから、一般的に普及しているシークエストが送られてくると思っていたのだが、送られてきたのは、沙良が自らの手で作り上げたプロトタイプだった。

それに、沙良が指示していたように改良が加えられている。

「もう、やたら時間がかかっていると思ったらそういうことか」

実際、初期化することも出来ず、特殊兵装の研究用としか用いられてなかったということを見ると、有効利用なのかもしれない。

それに、『オルカ』との関連性もある。

「もう一度、君と潜れるんだね」

沙良はその青藍を優しく撫でる。

飛ぶではなく潜る。

シークエストは、元は水中での活動をメインに開発されたISだった。

今でもスペインは、海底からレアメタルを取得している。

ゆえに、シークエストに乗るものは、皆こう言うのだ。

『空に潜る』と。

沙良はコックピットに飛び乗り、その身をシークエストに任せる。

— Start system, Access —

— Fitting Start —

— Sea Quest Diving system, Access —

— 搭乗者を確認、搭乗者データとの一致が認められました —

— Secret system SARA, Start Access —

——皮膚装甲展開……完了——

——推進器稼動確認……完了——

——ハイパーセンサー最適化……完了——

次々と浮かんでは消えていくモニター。その最後に表示されたモニターに、沙良は頬を緩まず。

——『!De la bienvenida, Sea Quest! !De la bienvenida!, amo Sara』——

《ようこそ、深海の探査者よ。ようこそ、私のマスター、沙良》

「覚えててくれたんだね。カイラ」

沙良は、身に纏う青を一度解除し、シークエスト製作試作機プロトタイプ『海良』を待機状態に戻す。

それは同じ色のネックレスに形を変えた。

指示が来ないことから、セシリアはまだ準備が完了していないようだ。

一夏の勝利と報告を受けてから二時間は経過しているだろう。

「セシリア・オルコット。専用ISは『ブルーティアーズ』か」

BT兵器の実働データをサンプリングすることを目的とした試用機。

最大稼動時はビーム自体も自在に操るBT偏向制御射撃が可能とのことだが、データ

を見る限り、未だその領域までは達していないようだ。

「武装は六七口径特殊レーザーライフルが一丁と、射撃型特殊レーザービット四機、弾道型ミサイル二機の自立機動兵器。」

「他国の最先端機の実働データをこんなに早く手に入れられるなんて、ラッキーだね」
この世で一番信頼できるデータとは、自分が計測したデータである。

そのデータが入手できるとなれば、僅かに沙良のテンションが上がっても仕方ないだろう。

この一週間、出来ることは全てこなした。

一夏と戦闘訓練を行い、情報を出来る限り集めた。

沙良は知っている。

敵のことを知っているかどうか。それが勝敗に大きく関わってくることに。

ゆえに調べ上げた。

敵の機体についての全てを。

そして、それに対する対策もしてきた。

後は搭乗者の情報があれば完璧だ。

『深水くん、オルコットさんの準備が出来たようです』

真耶の声に、沙良は『カイラ』を纏う。

カルラはすぐさま戦闘状態のISを感知した。

——操縦者セシリア・オルコット——

——ISネーム『ブルー・ティアーズ』——

——戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り——

「いくよ、カイラ。滅多に取れない他国の最先端技術のデータだ。わくわくするよ」

沙良は、とあるシステムを準備させる。

すぐにウインドウが表示される。

——D i v i n g S y s t e m——

これで、とある言葉を言うとシステムが作動するようになる。

「さて、潜ろうか」

沙良は敵が待つ、海のように青い空に、その身を投げ出すのだった。



「あら、逃げずに来ましたのね」

沙良は、セシリアの言葉などそっちのけで、武装の確認をする。その手に持たれている装備、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトmkⅢ》を見て、自らの情報収集を手放しで褒めたくなった。

「最後のチャンスをおあげますわ」

試合開始の鐘は鳴っているのでいつ撃たれてもおかしくはないのだが、セシリアは余裕を見せ続ける。

「チャンスつて？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理」

沙良は、右手のアサルトライフルをいつでも撃てるように構える。

「ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ」

射撃モードは使わない。自動ロックにより、敵のアラームがなってしまう。

ゆえに、マニュアル射撃を選ぶ。

この距離なら。

「今ここで謝るといふのなら、許してあげな——」

外さない。

放たれた銃弾は喋っている途中のセシリアに見事命中する。

「ちよつと、あなた!？」

「試合開始のベルは鳴っていますよ？ オルコットさん？」

「つ~~~~~~~~!!」

沙良はアサルトライフルを粒子変換で一回拡張領域に戻してから、手ぶらで肩をすくめて見せる。

「可愛い顔して、やることは可愛くないですわね！」

——警告！ 敵 I S 射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「くらいなさい！」

「D I V E !!」

沙良の叫びが I S に変化を起こす。

しかし、変化を待つことなく、耳をつんざく様な独特の音が響き、それと同時に閃光が走る。

カイラが装甲を閉じる。それと同時に閃光が直撃した。

「どうです？ これが実力の差というものですね」

「たいした威力だね」

セシリアは、何もなかったようにそこに留まっている沙良の姿を見て驚愕した。

それは、ダメージを受けた形跡がなかったことではない。もちろんそれもあるが、セシリアはもっと違う所に、驚きを隠せなかった。

「なんですの？ その姿」

沙良の顔は、目元は完全に覆われ、口元だけがかるうじて見える。普通なら腹部などが露出しているはずの装甲も間接部分だけを露出している。

沙良は、先程の射撃のダメージを見るが、エネルギーもさほど減っていないようである。

——バリアー貫通黙認。ダメージ56。シールドエネルギー残量794。実体ダメージレベル低。

第一関門突破。

それは、セシリアの主砲の直撃をカイラが耐え切れるか。

見事、DivinG Systemを作動したカイラはそのダメージを最小で済ませた。

「よく耐え切りましたけど、次はそうはいきませんわ！」

射撃、射撃射撃射撃。それはまさに雨のように沙良に降り注ぐ。しかし、それを的確に回避する。それも、最小限の動きで。

「いつまでも避け切れるものではありませんわ。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲は！」

セシリアが叫ぶと同時に、四つのパーツが、ブルー・ティアーズから切り離される。

それは、ビット兵器。もちろん、沙良はその存在を調べていた。

「いつまでも避けるよ。舞踏病のようだね」

浮かべる笑みの意味はセシリアには伝わらないだろう。

自らの武装が調べつくされた戦闘など、誰が想定できようか。

沙良は、セシリアの攻撃パターンを引き出すために、空を舞台に踊りだすのだった。

第十話 決闘

アリーナ管制室。

そこには二つの人影があつた。

記録やデータを取るため、モニターに座る山田真耶と、現場監督責任がある織斑千冬だ。

「はああ……。すごいですねえ、深水くん。ISに慣れているとしか思えない機動ですよ。それに、このデータ。IS全体のシンクロ率が並ではありません」

「慣れているとしかとしか思えないではなく、慣れているんだ。」

「深水くんは、織斑くんと同じで最近ISを動かせるようになったわけではない。そういうことですか？」

「山田先生。深水が使うISについて、何か知っていることは？」

「確か、スペインが作り上げた、第二世代機最後進機ですよ。たしか、その開発には天才科学者と言われる少年が関わっているという噂がありましたか……。まさか!？」

「関わっているというレベルではない。スペインが開発しているシークエストシリーズは全て沙良が構想し先導して開発したものだ。私の知る限り、あいつは十年前の時点で

「ISを動かすことに成功している」

「十年前と言いますと……」

「そうだ、『白騎士事件』が起きた年だ」

「このことは……」

「もちろんオフレコで頼む。他の先生にもな」

真耶に伝えたのはいざという時に動きやすいようにとの考えだが、純粹に真耶を信頼しているということもある。

「わかりました。……どうりでシンクロ率が高いんですね。自らが作った機体に乗るつて言うのはどういう気分なんでしょう」

その言葉に千冬が一瞬顔を顰めたのに、真耶は気付くことはなかった。

「それにしても、なんで攻撃しないんですかね。深水くんの腕なら充分攻撃するチャンスはあると思いますけど」

「初めて相対する機体はこういう戦い方なんだ。あいつは」

「と、言いますと？」

「データ収集だ。研究職の血でも騒ぐのか知らないが、安全にデータが取れる機会があれば、あいつは決まって持久戦に持ち込む。もちろん勝つために罠なりを仕掛けているだろうな。相性で考えるのならば空中機雷か」

「織斑くんの時といい、さすが姉弟ですね。そこまで分かるなんて」

「まあ、なんだ。あれも私の弟だからな」

「今回は、照れないんですか？」

「……………」

「いたたたたつっつ!!!」

「先程の試合で学習したと思っていたが、そうではなかったようだ」

「す、すみませんすみませんすみません！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！ わかりました！ わかりましたから、離し——あうううっ！」



何故、彼は攻撃してこないのだろう。

先程から、攻撃できる隙はあっただろうに、彼は武器を手を持つことすらしない。だからといってワンサイドゲームになっているとは到底思えない。

何故、絶対的な隙が出来ても、攻撃がこないのだろう。

試合開始から十分。

彼は避け続けていた。

今ではセシリアは彼を打ち落とすために全力を使っている。

それでも、それには至っていない。

的確に回避し、少し被弾したくらいではビクともしない機体。

(いったい、なんなんですのあの機体は!?)

セシリアは焦りが見えていた。

「そろそろ、いいや」

彼はそういい、回避行動を止めた。

「もう諦めましたの?」

「いや、もう見飽きたってことさ。『カイラ』、Dividing System解除」

彼が何か言ったと思うと、急に彼のISが変化した。

それは最初に見たときと同じ。今までの形態と違い、装甲が薄くなっている。

「わざわざ、やられやすくなるなんて、お馬鹿さんなのですわね!」

セシリアは彼に主砲を向ける。しかしその引き金が引かれることはなかった。

「なっ——」

狙撃された。それも的確に銃身を狙って。

「こつからは僕が指揮棒を振らせて貰うよ」

彼の手に持たれたスナイパーライフルがこちらに銃口を向けていた。

拙い。

同じ狙撃者としての勘が訴えていた。

避けきれない。

「くっ……」

銃弾は右肩に当たり、装甲を地面に落としていく。

「負けませんわ!」

セシリアはビットを動かし、抵抗の狼煙とする。

先程までの装甲を解いたのだ。当たれば相当なダメージが期待できるはず。

しかし、その光線が当たることはない。

「なぜ、当たりませんの!?!」

「ビットは右後方に誘導、左前方がけん制。意識を後方から逸らすのが主流」

「あなた、まさか!!」

「ビットを操作するときには本体がおろそかに」

彼はセシリアにアサルトライフルを向ける。

それは左足に被弾する。

「っ……っ……！」

セシリアはすぐさまスターライトmkⅢを構える。

「本体に気を取られると、ビットがおろそかに」

いつの間にか持ち替えられたスナイパーライフルが三つのビットを打ち落とした。

「まだ一つ残ってましてよー！」

スターライトを構えながら、あえてビットを操作する。

装甲が薄くなった分、ビットでも充分エネルギーを削れる。

だから、本体に気を引き付けてビットで撃ち抜く。

そのはずだった。

「ビットは、僕の反応が一番遠いところから射撃を始める」

セシリアが見たのは、ビットの方を向かずに、ライフルだけをそちらに向け、ビット

を打ち落とす彼の姿。

拙い拙い拙い。

読まれてる。

自分の行動パターンが。

いや、読んでいるというよりは、

「調べつくされている?」

一度、体勢を立て直そう。

セシリアは、ひとまず、宙に、上に逃げ場を求めろ。

空中戦においては上を取ったほうが有利なのは明白だ。

安全圏まで一度下がろう。

「きゃああ!!」

しかし、そこは待っていたのは安全圏ではなかった。



かかった。

沙良はセシリアが上に逃げ場を求めたことに作戦の成功を確信した。

そして、宙では、沙良が望んだとおりの光景が広がっていた。

爆発だ。

元は水中戦に用いていた機雷をIS用に改造したもの。

それは、使用者の遠隔操作で爆発するものと、エネルギーの接触により、爆発するものの二つがある。

それを、沙良は避け続けているときに、気付かれないように宙に設置し続けていた。それも、一つだけではない。

一つの爆発が、また近くの起爆のきっかけとなるように幅広く。

しかし、密度は濃く。

これが今回用意した装備の一部。

スペイン製、空中機雷。

その威力は一発では小さいのだが、一斉に、多くが爆発すると先程までエネルギーが大量に残っていたはずのブルーティーズの装甲を破壊し、シールドエネルギーを二桁まで削るほどの威力を誇る。

初見相手にのみ使える兵装。

一度使った相手にはもう通用しないであろう装備。

それを沙良は惜しげもなく公開試合に持ってきていた。

次に戦うときはどうするのか。

簡単だ。

違う武器を使えばいい。

それが開発者としての顔を持つ沙良の戦い方だった。

「爆音の奏でるカルテットはお気に召したでしょうか？」

沙良は、爆発の余波に晒されて動けなくなっているセシリアに問いかける。

正直な話、これで墜ちてくれなければ勝ち目は薄い。これはセシリアがこちらの実力と戦い方を知らなかったから出来た技だ。最初から真つ向勝負をしていたならばとくに負けていただろう。パツとみた感じ、派手で沙良が押ししていたように見えるがそうではない。セシリアの狙撃も避け続けたように見えるが、実際には相当数当たっており、攻撃しないのではなく避けるのに必死だっただけのことである。先ほどのブラフも成功しなければトラップにかけることはできなかつただろう。確信できるデータになるまでにはあと三十分ほど実戦を積みたいところだったが、成功したので結果オーライとしておこう。

「え、ええ。とても乱暴な音色でしたわ……」

沙良の軽口に乗ってくれるセシリアだったが、そのシールドエネルギーは、口が言うほど余裕を見せてはいない。

その数値は19。

あと一撃、何らかの攻撃が当たった時点でエネルギーが無くなってしまうのは目に見えている。

だが、むやみに突っ込んで行くこともできない。自らのエネルギーも154とかなり消費してしまっている。おそらくあの狙撃ライフルを受けてしまうとこちらの負けだ。

だから沙良は、あえて隙を作るためにとある事を聞いてみた。

「ねえ、オルコットさん。一夏はどうだった？ 好きになりそう？」

「な、なな何を言ってますの!?!」

そう言いながらも、沙良はライフルをセシリアに向けて発砲していた。

急に予想外のことを言われ、反応が遅れたセシリアにそれは避けることができなかつた。

「ん。脈ありとは言わないけど、気にはなっている、と」

沙良は、わざとらしくため息をついたのであった。何ともしまらない勝ち方だ。

『試合終了！ 勝者、深水沙良！』



セシリアとの戦いに勝利した沙良は、そのままピットに留まる。

今はエネルギーを回復するために供給機に機体を任せている。

エネルギーが回復したい、一夏との試合が始まる。

沙良は、一夏の試合はデータを取得することなく、試合開始直後に勝負を決める気でいた。

おそらく、一夏には何かしら言われるとは思いますが、自分の身が一番可愛いのは誰だつて同じだろう。

——エネルギー残量850 MAX——

カイラのエネルギーが回復したようだ。

カイラのエネルギー量は他のISに比べ、格段に多い。

普通のISは600に乗ればかなり多いほうだというのに、沙良のISは800を簡単に越している。

沙良の機体だけではなく、シークエスト全般もエネルギー量が多く作られている。

それが、シークエストの持ち味である長時間戦闘を可能にする。

「山田先生、こちらの準備は出来ました」

通信で、呼びかけると、すぐに返事が返ってくる。

「わかりました。織斑くんは先にアリーナに出ています。出撃が可能ならもう出ちゃってください」

沙良は、カイラを纏い、そのままピットを出た。

そのまま、空に身体を任せると、ハイパーセンサーが一夏の姿を捉えた。始めて見たときとは違う形に、少しばかりの驚きを感じる。

——あの短時間でフィッティングを行ったってことか。

その洗練された白は、機動性重視だと簡単に読み取れる。

そして、手に持つブレードには心当たりがある。

(雪片に似てる)

しかし、雪片であるわけがない。あれは千冬の武器だ。

そうすると考えられるのは、雪片の後継武器。

考えられなくもない。なんせあの機体を作ったのは束なのだから。

(姉さんのことだから、一夏の機体も、千冬姉と同じ接近に特化した機体を作ったんだらうな)

「よう、沙良。無事に勝ったみたいじゃないか」

「当然。一夏こそ勝ったじゃない。おめでと」

宙に浮かび、先程の試合を思い出す二人。

『それでは戦闘を始めてください』

その思考を遮るかのように、真耶の声が届く。

そのアナウンスは試合開始を告げる。

「それじゃあ、行くぞ！」

一夏がその手にブレードを構えて、沙良に一直線に向かっていく。

——速い。でも、何処を狙ってるかがバレバレだよ

しかし、沙良はそれを避けようともせず、堂々と構えている。

そして、一夏はありえない発言を聞いた。

「この試合、棄権します」

それは、この試合の終わりを告げるもの。

沙良はゆっくりと下降していく。

「……は？」

一夏は振りかぶったブレードを止めて、呆けることしかできないのだった。



「沙良！ いったいどういうつもりだ!？」

ISを解除した一夏が、肩を怒らせて沙良を追及する。

しかし、沙良はどこ吹く風と受け流している。

「どういうつもりだつて言われてもねえ。一夏、何のために決闘してたか忘れたの？」

一夏はポカンとした顔をしている。

「ん？ そりゃあ、クラス代表を決め……ああああ!!」

一夏もようやく気付いたようだ。

「よかったね、一夏。二勝できたじゃん」

「さ、沙良、お前……」

「馬鹿だなあ。さっきの試合で勝った方がクラス代表なんだから勝っちゃだめじゃないか。それに、一夏とは決闘する理由ないし、負けても何も言われないしね。おめでどう、クラス代表」

「うわあああ!」

一夏は頭を抱えて叫ぶ。

実際はデータを入手できるだけ入手してしまおうとも考えたのだが、あのような、見た目からして判断できるような接近戦特化型の稼動データは必要としてなかったため、呆気なく降参したわけだ。

「本当、馬鹿だなあ」

沙良の皮肉は、一夏に深く刺さるのだった



翌日の朝のSHR。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

真耶は嬉々として喋っている。そして、クラスの子も楽しそうに盛り上がっている。もちろん沙良も盛り上がっているほうに属している。その中で、暗い顔をしているのは一夏だけだった。

「先生、質問です」

一夏が挙手。

「はい、織斑くん」

「決闘において、棄権するなんて有りなんですか？」

「まだ根に持つてるの一夏？」

沙良に押し付けようという魂胆はバレバレである。

「そうだと、勝ったのだからいいではないか」

「そうですわ、一夏さん。貴方は、このセシリア・オルコット相手にどんな形とはいえ勝利を取めたのですから、クラス代表になるのは当然ですわ」

セシリアはいつの間は一夏を名前で呼び始めたのだろう。箒は、怖い顔でセシリアを睨んでいる。

「これは、一夏のためでもあるんだよ？」

「どういふことだ、沙良？」

「IS操縦は実戦を積むのが一番の上達する道だからね。その点、クラス代表は他の生徒と比べて圧倒的に実戦回数が多いからね。あと、面白いし」

「最後のが本音だな!? 本音なんだな!？」

「もう、そんなに興奮しないでよ。冗談だよ」

「だよな、面白いとかそんな理由じゃないよな」

「前半部分が」

「やっぱそんな理由か!!」

「もう、なにそんなに興奮してんの？ 何かあったの？」

「沙良のせいだろ!？」

「一夏はわかってないなあ」

この状況が一夏以外には求められてるってことが。

「いやあ、深水君はわかってるね！」

「そうだよねー。せつかく世界で二人だけの男子がいるんだから、同じになつた以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんは」

女子の発言が、一夏を追い詰めていく。

「ほら、諦めなよ一夏」

「持ち上げるなら沙良も持ち上げてくれよ……」

「何、呟いてんのさ」

というより、

「僕だって、副代表なんだから、自分だけが面倒くさいと思わないでよね」
そうなのだ。

沙良が副代表になってしまったのだ。

「くそう、あの時に負けておけばよかった……」

データを取るだけ取って負ける。

——それはそれで嫌だなあ。

結局、ちつぽけなプライドが働くだろう。

「そ、それでですわね」

「ホンと咳払いして、あごに手を当てているセシリア。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもう、みるみるうちに成長を遂げるに違いありませんわ！」

「ああ、一夏と一緒にいる理由が欲しいのか」

「沙良さん!!」

何故叱られたのか分からない沙良は、一夏に慰めてもらう。

「僕、今なんで怒られたの?」

「気が立ってたんだよ、きつと」

一夏も分からないらしい。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。指導は沙良が行うし、相手は私が直接頼まれたからな」

「あら、あなたはISランクCの篠ノ乃さん。Aの私に何かご用事かしら?」

「ら、ランクは関係ない! 頼まれたのは私だ!」

箒が見ていて可哀想になってきたので、助け舟を出す。

「ランクで強さが決まるわけじゃないでしょ? 僕だって最初はランクはBだけど、オ

ルコットさんには勝ったわけだし。それに訓練機で出した最初の格付けなんて大した意味は持たないよ」

「沙良……」

「座れ、馬鹿ども」

千冬姉がすたすたと歩いて行ってセシリアと箒の頭をばしんと叩いた。

沙良は最初から立ち上がっていないため、叩かれるようなことはなかった。

「一夏。何、下らなそうな事考えてるの？ 顔に出てるよ？」

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

出席簿が一夏の頭を目掛けて振り下ろされる。

「うわあ痛そう……」

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優越を付けようとするな」

そういう千冬だが、その瞳は沙良に「お前は例外だがな」と言ってくる。

沙良のように何年もI Sに乗っていれば、ランクなど大した目安じゃなくなるだろう。

もちろん、それが読み取れないような鈍さはしてない。肩をすくめることで返事としておく。

さすがのセシリアも千冬には反論は出来ないようだ。何か言いたそうな顔をしながらも、黙り込んでいる。

「代表候補生でも一から勉強してもらおうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

——千冬姉も外ではしつかりしてよなあ。

ドイツでも教官と呼ばれ慕われていた千冬も、部屋に入るとカリスマが一瞬で剥がれ落ちる。

寮長室など、どうなっているのか想像すら出来ない。

「……お前たち、今何か無礼なことを考えていただろう」

「いえ、滅相ありません」

「……」

（一夏、なに棒読みで答えてんの!?)

（いや、沙良だって心こもってなかったじゃねえか!）

「ほう」

頭に嫌な衝撃。それも今までのように面での打撃ではない。突きに近い。

「痛ったーい!! 角! 今、角で殴った!! てか、一夏? 一夏!?! ちよつと返事して!?!」

「何か言いたい事はあるか？」

凄む千冬の前に、大人しく頭を下げる。

「す、すみませんでした」

「わかればいい」

「こうして、一夏は理不尽な暴力の前に永遠の眠りにつくのであった」

「死んでねえよ!？」

「静かにしろ」

もう一発、頭に重い一撃を頂戴する一夏を見て、けらけらと笑う。

「馬鹿だなあ一夏」

「お前もだ」

「痛っ!!」

「全く、お前らは……。一番手の掛かるのが、身内だとはな」

千冬は、教壇に出席簿を置くと注目を集める。

「クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

綺麗に揃った返事が、クラスに響く。

それを、一夏だけが嫌そうな顔をして聞いているのだった。

第十一話 疑念

アリーナには生徒が整列し、ジャージ姿の千冬の授業を受けていた。

「ではこれよりI・Sの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、深水、オルコット。試しに飛んで見せろ」

沙良は、首から提げたペンダントに意識を集中させる。

(おいで、カイラ)

0. 3秒の展開時間

その時間に、沙良の体に光の粒子が纏わりつきI・S本体として形成される。

ふわりと体が軽くなり、地面から数十センチ浮遊した形で留まる。

一度瞬きすると、その景色はハイパーセンサーにより解像度の高いものに変わっていた。

一夏とセシリアも展開が完了したらしく、その身を宙に浮かばせている。

「よし、飛べ」

その声をスタートの銃声のように沙良とセシリアはほぼ同時に急浮上を始める。

機体の性能差が有るにもかかわらず、第三世代のセシリアの機体と第二世代の沙良の

機体はほぼ同じ速度を保っていた。

少し遅れて一夏も浮上を始めるが、そのスピードは沙良やセシリアと比べ格段に遅い。

「何をやっている。スペック上の出力では白式のほうが上だぞ」

昨日、教えを受けたばかりの急浮上を、一日で物にしろというほうが無理があるとは思うが、そこは千冬には関係の無いことなのだろう。出来ないなら出来ないでお叱りを受けなければならぬのだ。

「一夏、イメージはあくまでもイメージでしかないんだ。自分のやりやすい方法つてのを見つけたほうがいいよ」

「そう言われてもなあ」

「そーいい、頭をかく一夏。」

「一夏さんは、自分にあつたイメージをまだ作れてないだけですわ。ずっと飛んでいると感覚だけでも掴めるようにはなりませんわ」

「ちなみに、僕は海を泳ぐイメージだよ」

「大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いているんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくてもいい」

お手上げとばかりに手を上げる一夏を見て、沙良とセシリアは笑みをこぼす。

「今日も訓練手伝つてあげるよ。今日のおさらいだね」

「助かる」

沙良は、決闘から一夏によく訓練をつけていた。

目的は、一夏にIS操縦に慣れさせるため。

もちろん、沙良にも機体のデータ取りというメリットはあるが、どう考えても、一夏のほうに利がありすぎる。

しかし、沙良は喜んで一夏の訓練に付き合っていた。

身内にはとことん甘い。

この短い期間で一組の生徒が下した評価だ。

「あ、あのお二人とも——」

『一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りて来い！』

セシリアが何か言おうとした瞬間、通信回線から怒声が響く。

見ると、箒が真耶からインカムを奪ったらしい。

「すごいな、ハイパーセンサー。この位置から箒のまつげが見えるぞ」

一夏は少しずれた観点で感心していた。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんだよ」

元々ISは宇宙空間での移動を想定したものだ。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するために必要な為、この程度は見えて当たり前なのだ。

沙良の機体シックエストシリーズには、それに加えて、光がまったく無いところでも活動できるようにパッシブ遠赤外線方式による赤外線搜索追跡システムが導入されている。

わかりやすく言ってしまうと、ナイトビジョンである。

元々、戦闘用という概念ではなく、沙良の『深海におけるISの運用』という論文に始まりの基礎を置くシックエストは、深海に対応できるようにという機能が多く含まれている。

「織斑、深水、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地面から一センチ。

合格ラインは、地表から十センチだ」

「了解です。ではお二人とも、お先に」

言つて、すぐさまセシリアは下降の体制に入る。そのスピードは代表候補生の名に相応しいものだった。

「いいお手本だね。やっぱり代表候補生は伊達じゃないね」

下では完全停止も成功したのか、小さい拍手が沸いていた。

「沙良、先に行くぜ」

一夏も下降の体制に入る。推進器が物凄いスピードを生み出す。生み出した結果が

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

墜落だった。

その光景を、呆れの目で見ていた沙良だが、下の様子が落ち着いてきたので、下降の準備に入る。

「行くよ」

沙良は地面に落ちる。

そのイメージは、フリーダイバーが海を真下に泳ぐように。

周りの景色が一瞬で変わる。

徐々に近づく地面に焦ることは無く、沙良は体制を整えて体を捻るようにして勢いを殺し、スラスターを噴かしその身を宙に止めた。

「三センチ……です」

その真耶の一言に、周りの生徒がざわつく。

先ほどのセシリアで六センチだったのだ。

その二分の一。

それは、沙良の操縦技術がセシリアを上回っていると言つてもいい。そのざわつきを千冬は一喝する。

「このぐらゐ出来るようにならねば代表なんて夢のまた夢だ。深水も、これが出来たらと氣を抜くなよ」

その千冬の一言に、場の空氣は元に戻る。

なぜか言い争いをしていた二人を除いて。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやつてろ」

千冬は箒とセシリアの頭をぐいっと押しつけて、一夏の前に立つ。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになつただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

一夏は正面に人がいないことを確認してから、突き出した右腕を左手で握る。

強く右腕を握り締める左手。

一夏の集中力が極限に達したとき、手のひらから光が放たれた。それが像を結び、形

として握られる。

「遅い、〇・五秒で出せるようになれ」

その千冬の一言に、一夏は項垂れる。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏のときのよう光は放出することは無く、小さな爆発のように光ると、その手には狙撃銃《スターライト mk III》が握られていた。

速い。

それは射撃完了まで一秒もかけることなく展開されている。

「さすがだな、代表候補生。——ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏めるために必要な——」

「直せ。いいな」

「——、……はい」

千冬の前では如何なる反論も許されないのか、一睨みされただけで、口を噤むセシリア。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

いきなり振られ、反応が遅れたセシリアだが、代表候補生らしく一瞬で銃器を『収納』する。そして新たに近接用の武装を『展開』

しかし、手の中の光は中々に像を結ばず、その場で空中を彷徨っている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。——ああ、もうっ！ 《インターセプター》！」

武器の名前を叫ぶことにより、その光は収束し、武器として構成される。

しかし、それはイメージを纏めることの出来ない『初心者』が主に使う手段であり、代表候補生のセシリアが、それを使わねば展開できなかったというのは、かなりの屈辱だったであろう。

それを千冬は躊躇無く決る。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

「まあいい。深水、次はお前だ。武装を展開しろ」

沙良は集中し、イメージを固め、武装を展開する。

その自然体で立っていた沙良の右手にはいつの間にかアサルトライフルが握られていた。

「……次は右手に接近、左手に、違う銃器を呼び出せ」

沙良は姿勢を動かすことなく、アサルトライフルを『収納』し、右手にブレードを、左手にスナイパーライフルを『展開』する。

その展開時間は〇・五秒は軽く下回っていた。

その左右違う系統を『展開』するという技術を見せた沙良。千冬は内心はどう思っているかと、さも当たり前のような態度を見せる。

「要はイメージだ。イメージが確立できていればこのような展開が可能になる。これは慣れも関わってくる。訓練あるのみだ」

千冬は、チラッと時計を見ると、手を叩き、注目を集める。

「時間だ。今日の授業はここまでとする。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏はチラッと箒を見るが顔を逸らされてしまう。セシリアもその姿が見えない。ならばと沙良の姿を探すが、先ほどまでいたはずの沙良が見当たらない。

一夏は諦めて、一人で後片付けをするのであった。



「で、何のようだ深水」

千冬は、授業が終わり次第、沙良に声をかけられ、面談室に呼び出されていた。

この面談室は、政府の人間や、企業のお偉い方などが利用することも多いため、盗聴、盗撮対策がしっかりとしてある。

そこに千冬を呼び出すということは、ただの相談とは思えない。

沙良も座ることはせず、入り口付近に立ったままだ。

千冬も入り口付近に寄りかかり沙良が口を開くのを待つ。

「ねえ、千冬姉」

「……何だ、沙良」

それは、学園での教師と生徒での話し合いではない。

姉弟としての意見を求めているのだ。

「最近、監視されてる気がするんだけど、千冬姉は何か知ってる？」

「……それは、学園の人間を疑ってるというのか?」

千冬は、質問をあえて質問で返すことによつて、この件については何も知らないということを示す。

「じゃあ……今の生徒会長、信頼できるの?」

「なつ……」

それは暗に生徒会長から、監視を受けてるといつているようなものである。

「僕も、そこまで気配に聡いわけじゃないから、尻尾を掴んだわけじゃない、けどさ。何の理由かはわかんないけど、生徒会長は僕の動向を監視している。一夏ではなく、僕を」
はつきりと言いつ切る沙良に、千冬は動揺を隠せない。

「……目的は?」

「それが、わかんないから千冬姉に相談したんだけどね」

一夏ではなく沙良を監視している。

それはつまり、沙良のことを少なからず危険視、もしくは利用しようということだ。

千冬は、現生徒会長、更識楯無が暗部に深く関わっていると知っている。

だからこそ、安易に信頼できると言う訳にはいかなかった。

千冬は他の人間よりも沙良の重要さを理解している。

あの、束からISについての教えを受け、スペインにおいてたった一人でISの雛形

を完成させた人間。

そして、世界でもトップクラスのIS搭乗時間を誇り、卓越した操縦技術を持つ人間。技術者としても、操縦者としてもそのレベルは一般人とは比較にならない。

沙良の身柄一つで必ずスペインという大国は動く。

利用価値など掃いて捨てるほどある。

沙良もそれがわかっているからこそ、こうして千冬に相談しに来ているのだろう。

しかし、千冬には答えることが出来なかった。

信頼できると言って、更識に取り込まれてしまいかもしれない。

信頼できないと言って、無駄な不安を植えつけてしまいかもしれない。

その答えが、どういう結果を招くかわからないから。

だからこそ、その二択ではなく、別のものを沙良に渡す。

「まあ、ロシアで会った事あるんだけどね。だからこそ、目的が分からないっていうか、なんとというか」

「……私では、更識が何を以って動いているかはわからない。だから、こう言っておこう。何かあったら迷わず力行使しろ。それに伴う責任は全て私が背負う」

それは何を行ってもよいとする許可。

沙良に何かあつてからでは遅い。

しかし、千冬がずっと傍に居られる訳ではない。自分で何とかしろと言うしかない。

だから、行動に制限は付けないと言っているのだ。それは千冬の覚悟。

自分には立場というものがある。それは教師という枠を出ることは無い。

それでも、千冬は責任は負うと言っているのだ。

沙良もその意味がわからないような人間ではない。

だから、ここは大人しく頷くことで場を収めた。

「わかった。その時は躊躇しない」

「ああ、それでいい。何かあったら私に言え」

「うん。わかった」

こうして、相談事を終えた沙良は、面談室から出て行く。

その時に、周りを探るような素振りを見せていたため、先ほどの会話中も、監視されてないか気を使っていたのだろう。

会話内容を聞かれていなくても、面談室に、千冬と二人で話しているというだけで、考えられることはある。

「まったく、面倒くさいことになったものだ」

千冬は、これからの学園のことを思い、頭が痛くなるのだった。



「ふうん、ここがI S学園ね……」

I S学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなポストンバッグを持った少女が佇んでいた。

金色の髪留めで結ばれた黒髪は、まだ暖かな夜風になびいている。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

少女は、上着のポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出す。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれがどこにあんのよ」

文句を言いながら、紙をポケットにしまう。

中で、くしゃつと音がしたが、既にくしゃくしゃな物を気にしたって仕方ない。

「自分で探せばいいんですよ、探せばさあ」

ぶつぶつと文句を言いながらも、その足は歩みを止めない。

思考より行動という少女のスタンスがよくわかる。

学園内の敷地をわからないなりに歩く。その視線は人影を探しているのか、きよろきよろと動いている。

とはいえ、夜になって校内を出歩いている生徒は居ないのだろう。

歩き続けて既に二十分が経過していた。

(あーもー、めんどくさいな。空飛んで探そうかな……)

しかし、あの、電話帳三冊分はあるであろう学園内重要規約書を思い出し、やめる。

それからまた歩き続けると、電気についている建物が見つかった。

「あつた……ふう、疲れたあ」

少女はふらふらとその建物に近づいていくが、よく見ると本校舎には見えない。

しかも、少女が建物をじっと見ていると、

「ああ！ 電気がつ！」

電気が消えてしまう。

やはり、目的の建物ではなかったのだ。

少女は肩を落とし、来た道を引き返そうとする。

そのとき、声が聞こえた。

「ん？ 誰かいるの？」

視線をやると、生徒らしき人影が、先ほどの建物から出てきたところだった。
——ちようどいいや。場所聞こつと。

少女は小走りで生徒に近づき、その姿を目に入れると、大きな声を出した。

「すいませーん。ちよつといいで………き、沙良!」

「……鈴?」

鈴と呼ばれた少女は、幼馴染である沙良を見て驚きの表情を作る。

しかし、それは長いこと続かなかつた。

「鈴、久しぶり」

沙良が抱きついてきたのだ。

「あんたも相変わらずね。その挨拶」

えへへと笑う沙良に、鈴はつられて笑顔を見せる。

「鈴は何でここにいるの?」

「ふふん、あたしはここに転——」

「本校舎つて正反対だよ?」

「……え? そつち?」

「だって、ここにいるつてことは転入しに来たんでしょ?」

「ええ、まあ」

てつきり、何で生徒じゃないのにI S学園にいるのかと聞かれたと思った鈴だったが、実際聞かれたのは、何で、この場所まで来てるのというものだった。

相変わらず、一だけで十まで理解して、五ぐらいを聞いてくる男だ。

「受付って、正面ゲートからグラウンド迂回してまっすぐだよ？ 何で整備棟まで来たの？」

「あはは、迷っちゃって……」

「ああ、鈴だもんね。いいよ、案内してあげる」

鈴だからという理由に納得いかないものを感じるが、せっかく案内してくれるというのに甘えない手は無い。

「沙良もI S学園に来てたのね」

「よく言うよ、代表候補生だから知ってたでしょ？」

ギクリといった表情を見せる鈴に、沙良は笑みをこぼす。

「表情に出すぎ」

「そ、そういう沙良だつてよく私が代表候補生って知ってたわね」

「中国でモデルみたいなことまでやってたら、そりゃ知ってるよ」

「あははー。そうそう、一夏つて何組かわかる？」

鈴は、もう一人の幼馴染である少年を気にする。

「一組だよ。それでクラス代表」

「よくあいつが代表になれたわね」

「ふふん、僕が頑張ったからね」

「……あんたも相変わらねえ」

身内にはとことん甘いのが、その分厳しくもある。

鈴もいままで沙良の厳しさに助けられてきたことは多い。

「あれが本校舎だよ。そこまでついていったほうがいい？」

「ここで大丈夫。わざわざ、ありがとねー」

「あ、そうそう。一夏には黙つといたほうが良いの？」

走りかけた鈴を呼び止め、沙良が声をかける。

「もちろん！」

それに笑顔で答えた鈴は、本校舎に走って行くのであった。

第十二話 パーティー

「というわけです！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

「ついでに深水くん副代表おめでと〜！」

誰かの掛け声とともにクラツカーが乱射される。

クラツカーは沙良と一夏に降りかかる。

集まった生徒は皆、楽しそうな顔をしている。

一夏と沙良を除いて、だが。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラツキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

先ほど、相槌を打っていたのは二組の生徒だ。しかし、この場にそんな些細なことを気にするようなものは居ない。ここには既に一組の人数を超えて人が集まっている。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふん」

箒は機嫌悪そうに、お茶を飲む。

一夏は箒が機嫌の悪い理由がわからず、首を傾げるばかりである。

「はいはい、新聞部です。話題の新生生の織斑一夏君と深水沙良君に特別インタビューを申し来ました〜！」

新聞部と名乗る女生徒が食堂に入ると、周りの生徒のテンションはまた一段と上がっていく。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてます。はいこれ名刺」

「あ、どうも」

沙良は丁寧の名刺を受取り、自らも名刺を出そうとした。

しかし、ここでは学生として過ごしている沙良が仕事先の名刺を出すのは少し違う気がしたため、慌てて手を引つ込めた。

その動作に気づき、何か言おうとした薫子だったが、沙良の苦笑いに感じる事があつたのか、ターゲットを一夏に移す。

「ではではざり織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞー！」

ボイスレコーダーを一夏に向け、薫子は無邪気な子供のように瞳を輝かせる。

「一夏は乗り気ではないものも、その無邪気な瞳の期待は裏切れなかった。

「えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか」

「一夏のコメントは、薫子のお気に召さなかったようだ。」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

「薫子の反応に周りの生徒はうんうんと頷く。」

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして、次は深水君。インタビューしても良
いかな？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「沙良は、テーブルに用意されているお菓子を食べる手を止めて、薫子に向かい合う。」

「副代表になったきつかけとも言える、あの決闘。あれについてのコメントがいつぱい
届いてるから何個か答えてもらっても良いかな？」

「答えられる範囲なら」

「まず、『あの機体はなんと言う機体ですか？』」

「この子は、スペインの第二世代機シークエストのカスタムです。強固な装甲と莫大な
エネルギーが特徴です」

「ほほう、シークエストのカスタムと」

薫子はメモに会話の内容を書き込む。

「じゃあ、次ね。『代表候補生のオルコットさんに勝利を納めたわけですけど、IS学園に来るまでに何らかの訓練はされたんですか?』」

「そうですね。機密も入っちゃうので詳しくは言えないですけど、回答としては『YES』です」

「ふむふむ、では次の質問。『彼女は居ますか?』」

「残念ながら、今まで研究者としても活動してたので、良い出会いが無くて」

この発言には、スペインの代表候補生たちが憤慨するかも知れないが、沙良の感覚では、そういう出会いなどは無かったようである。

「はい、次の質問、『好きな人は居ますか?』」

「まだ、素敵な人は見つかってないです。さつきから質問がプライベートなことに変わってきていませんか? ていうか、一夏のとくと比べて質問が多い気が」

「気のせい気のせい。では、最後の質問です。『二年三組の二条初音です。あの決闘を見てから貴方のことが頭から離れません。可愛い顔立ちなのに、凛々しくISを操る貴方に胸がときめいてしまいました。好きです。一目惚れです。お付き合いしていただけますか?』……ってなんだこりゃ!? 誰、こんな抜け駆けしてるの!？」

「お気持ちはいれはうれしいですが、ごめんなさい」

「答えるんかい!!」

「キレのある突っ込みですね」

「深水君、インタビュ慣れしてるよね。こちらの欲しい事言ってくれるし、対応も慣れた感じだし」

薫子は口でペンを咥え、ぶらぶらさせる。

「まあ、向こうではいっぱいインタビューを受けてきましたから」

「有名人だもんね」

「僕のことを知ってるんですか?」

沙良は、少しだけ驚きを顕わにする。

「そりゃ、整備課の人間にとってサラ・ルイス・フカミの名前を知らない人間はモグリだよ。なんせ、今後破られることのないとまで言われる特級整備士^{ウイザード}の最年少記録を樹立!あの完成に最も近いと言われた第三世代機ケートウスシリーズの生みの親!この道を進む者にとっては憧れの的なんだから!」

「ああ、だから質問が多かったんですね」

「まあ、そういうこともあるかな。あ、握手してもらっても良い?」

「ええ、良いですよ」

「ど、どうも。よし、今日は手を洗わずに過ごさないと」

「それは洗ってください。ぼっちいです」

インタビュールが始まってから、初めて笑顔を見せる。

それに釣られるように、薫子も笑みを浮かべた。

「じゃあ、最後に、クラス副代表になった感想をどうぞ！」

「自分、不器用ですから」

「被せてきた!?!」

薫子はけらけら笑うと、カバンからカメラを取り出した。

「とりあえず、ピンで写真良いかな？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「それじゃあ取るよー。『uno dos tres』」

スペインでよく使われるフレーズに合わせてシャッターが切られる。

「ほんと、気を利かせますね。本当、記者の鏡ですよ」

「えへへ、それほどでもないよ。そういえば、さっき名刺出そうとしたよね？」

「見られてましたか」

「良かったら、名刺を貰えたりなんかは……」

沙良は、懐に入れていた財布から、予備の名刺を出す。

「変なことに使わないでくださいね？」

「もう、家宝にします」

「充分変だよ」

沙良は、けらけらと笑う。

段々と口調が砕けてくる沙良に、薫子も喜色をみせる。

「あ、差し出がましい事を言うんだけど、記念にツーショット写真を……」

「んー今回だけだよ？」

「ありがとう深水君!! ちよつと、その貴女撮ってもらって良い？」

薫子はカメラをそこら辺に立っていた生徒に押し付けると、沙良の横に並んだ。

「え、じゃあ、取りますよ? はいチーズ」

急にカメラを押し付けられた生徒は、困惑しながらも、シャッターを切る。

そのカメラを奪い取るように強奪すると、写真を確認して、満足げに頷いた。

「ありがとー!! じゃあ、次は織斑君との写真もいいかな? おーい織斑君」

そんなに嬉しかったのだろうか、沙良は返事をする前に一夏を呼び出す薫子の姿を見

て、笑みをこぼす。

既に薫子に対しての警戒心は薄れてきていた。

「呼ばれましたか?」

一夏が両側に箒とセシリアを連れてやってきた。

「深水君と織斑君のツーショット貰えるかな?」

「ああ、いいですよ」

一夏は沙良の横に立つ。

小柄な沙良と大きくは無いが平均よりはある一夏が並ぶと周りの女子が騒ぎ出した。

しかし、沙良と一夏は意識からその声をシャットダウンした。

聞いてはいけない気がしたのだ。

案の定、横では周囲の盛り上がりを受けてしまったセシリアが「非生産的ですよ!」と
うろたえている。

「いっくよー。はいチーズ」

カメラのシャッター音が響き、一瞬だけ固まった空気が穏やかになる。

沙良は、その場を動き、セシリアに近づくと、耳元でこう囁いた。

「一夏と二人で取ってもらいなよ。専用機持ちのツーショットだからたぶん断られない
と思うよ。一夏のこと、気になってるんでしょ?」

セシリアにとってそれは天使の囁き。

セシリアに親指を突き出し、お菓子の山に向かう沙良に、親指を同じように突き出す。

今、セシリアには沙良が天使のように見えているだろう。

勿論、沙良もセシリアが純粹に一夏に恋慕の情を抱いているのなら手助けはしなかつただろう。知っている限りでも二人は一夏のことを好んでいるのだ。その二人の邪魔はしたくない。

ただ、セシリアは一夏に好意を持ちつつも、その情が憧憬に偏っていると判断した。精々、ちよつと氣になる男の子止まりだろう。

今まで、男性と仲良くなるという経験が乏しいセシリア。今の想いが、一時の熱だと直ぐに気付くはずだ。そんなセシリアの背中を押すことぐらい、あの二人も許してくれるはずだ。

その背中を押されたセシリアは早速、薫子に話しかけようとする。

「あの、おねが——」

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

お願いを途中で遮られてしまったが、薫子が小声で、「ちゃんと聞いてたから」と囁くと、セシリアは意気揚々としゃべりだした。

「コホン、ではまず、わたくしが一夏さんにクラスだ——」

「ああ、長くなりそうだからいいや。写真だけ貰おう」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたってことにはしておこうかな」

「なっ、な、ななっ……」

そうニヤニヤしながら言う薫子に、セシリアは顔を赤くする。

「はいはい、とりあえず二人で並んでもらえるかな。写真取るから」

セシリアは来たとばかりに一夏の横にスタンバイする。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらうよ。あ。握手とかしてるもいいかも」

「そ、そうですか……。そう、ですわね」

セシリアはチャンス到来とばかりに自分の手を見つめるが、自分から握手を求めるところが出来ない。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて——」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

薫子は、一夏とセシリアの手をとって、強引に握手の形を作る。

赤面したセシリアは、薫子がウィンクしたのを確かに見た。

そのとき、セシリアは新聞部を今後も最前陣にしようと決めたのである。

もちろん、薫子も親切心でやっているわけでもない。

沙良から「セシリアは払いが良さそうだよね。顧客につけられたら美味しい思いが出来ると思うなあ。がっぽがっぽだね」とわざわざ聞こえるように呟かれたのだ。

それを実行に移しただけのこと。

薫子の頭の中では、利益の試算がすでに始まっていた。

「それじゃあ撮るよー。35×51×24は〜?」

「え? えつと……2?」

「ぶー、74・375でしたー」

カメラのシャッターが切られる。

「……なんでみんな入ってるんだ?」

恐るべき行動力で一組の半分近くの生徒が一夏とセシリアの周りに集結していた。

残りの半分は、お菓子を食べている沙良の周りで餌付けのような状態になっていた。

「あ、あなたたちねえっ!」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

クラスメイトはセシリアを丸め込んでいた。

「う、ぐ……せつかく沙良さんにいただいたチャンス……」

苦虫を噛み潰したような顔をしているセシリアを、クラスメイトはにやにやとした顔で眺めていた。

こうして『クラス代表副代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いたのだった。そして、沙良にとってのパーティーはまだ終わることは無かった。



沙良はあの後パーティーの後片付けを申し出たのだが、「主役は大人しくしてなつて」の一言で大人しく自室へと向かっていた。

「まあみんなの気持ちは嬉しいし、今日は空気を読んだのか、監視の視線も無いし、部屋でゆっくりしよう」

沙良は、一人部屋の自室でゆったりと休むことを考え、途中の自動販売機で炭酸飲料などを入手して、ご機嫌で鼻歌を歌っていた。

片手には、先ほどのパーティーで余ったお菓子が大量に詰め込まれている。

一夏がセシリアとが二人で写真を撮ろうとしているときに、沙良はひたすらお菓子を

食べていた。そこで、余ったお菓子を沙良に渡してあげようとクラスメイトが結託し、一夏との写真に入らなかつたグループは、沙良をお菓子で餌付けしながら、お菓子をかき集めていたのだ。

そんなことは露にも思わない沙良は、お菓子の袋と、ジュースの入った袋を嬉しそうにギュツツと抱きかかえて寮の廊下を歩いていく。

自室の前に着き、いつものように扉を開け、電気をつけようとした。しかし、なぜか電気は元々ついており、ベッドのほうから話し声が聞こえてきた。

——監視がついていないと思つたら、大胆な真似に。

沙良は物音を立てぬよう、細心の注意を払つて気づかれないように様子を伺う。

「ちよつと待つて、この写真は私持つてないよ!？」

「ふふん、いくらソフィアさんとはいえど、この写真だけは譲りませんよ。わたしがネガも持つてるから入手は不可能です」

「いいな、フィオナ。じゃあ、こつちの寝ぼけてる写真と、そつちの抱き枕抱いてるやつトレードしない?」

「うーん。まあいいよ。はい、抱き枕」

「じゃあ、私は最終兵器出すから、そつちの写真をくれない?」

「ソフィア先輩の最終兵器ですつて!? それつてまさか!？」

「そう、あの伝説のうさ耳をここに出すわ」

「ゴクリ」

「うさ耳って言うのと、あれですよね。着衣ポーカーなる遊戯の」

「そうよフィーナ。これは貴女といえども持つてないでしょう？」

「私が入社したのはその後ですからね……」

「さあ、どうかしらリナ。この写真とそのネコミミ付けて猫とお昼寝してる写真をトリードしない？」

「くっ……！ この写真は猫とお昼寝してたところにネコミミを付けてまで撮影した海軍の努力の結晶。訓練をサボつてまで撮った私たちの渾身の一枚。そうそう渡すわけには……。でも、うさ耳は研究所の門外不出の逸品。研究所に入れる人間しか手に入れることは出来ない。く、私はどうしたらいいんだ」

「海軍も馬鹿ばっかだね。ちゃんと訓練しなさいよ。で、どうなの？」

「先輩に言われたくないです。後もう一声」

「なら、これも付けるといふならどう？」

「こ、これは今は伝説となったミドルスクールの写真！ しかも水泳の授業！」

「ふふふ、これはその時に一緒に居た私しか持つてない写真よ？ これ、欲しくない？」

「先輩」

「何？」

「私、あなたと出会えてよかったです」

「私もよ」

「……………」

沙良は、今まで浮かべていた笑顔を能面に切り替える。

ベッドの上に寝転び、写真をトレードしている少女が三人。

その中でも、このようなことに対しての前科持ちである一人の少女の肩を叩いた。

「へー、その写真をどこで手に入れたか、じっくりと話し合う必要がありそうだね、ソ
ファイ？」

沙良は、出来るだけ低い声を出した。

「へ？ え、……………セ、セラ？」

「あ、セラ……………あはは」

ソフィアと、リナは写真を後ろ手に隠し、ごまかし笑いを浮かべる。

「ソファイ？ IS学園に居て、どうやって写真を手に入れたかは今は置いておくとして、
とりあえず、その写真は全部燃やせ僕の目の前で」

「そんな御無体な!？」

「そ、そうよセラ。写真ぐらい良いじゃない」

真つ白になるソフィアを庇うため、リナがフォローに入る。

「リナも、写真燃やすんだよ?」

「御無体な!」

しかしそれは、被害者を増やすだけに終わってしまった。

「まあまあ、沙良さん、落ち着いて。ね?」

「フィーナ、君もここにいる時点で同罪ってわかってるよね?」

フィーナと呼ばれた少女は、ギクリとして、動きを止めた。

その動きに、思うことがあったのか、沙良は追及しようとする。

「ねえ、フィーナ、もしかして、君も——」

「待って、フィオナは何も関わってないわ! 全てはわたしが悪いの!」

「リナ……」

友をかばう少女。一見素晴らしい光景だが、やってることはコレクションの秘匿だ。

実に見苦しい。

「もう、いいよ。写真は各自燃やしといて。僕は疲れてるの。休ませてよ」

沙良はそう言って、持ってきたお菓子とジュースを見せる。

それを見た三人は、沙良が言いたいことを理解した。

出ていけと。

そして、理解したが、行動には移さなかった。

「邪魔しなかつたらいいんですよ？」

ソフィアがいけしやあしやあと言い放ったので、沙良は諦めて、ベッドにダイブする。お菓子とジュースはもちろん机の上に置いている。

「もう、どっから入ったのさ」

それは、今更過ぎる発言。

タイミング的には、最初に言うべきことだろう。

「堂々と正面から」

沙良はこの発言に頭を抱える。

「鍵掛かってたでしょ？」

「あ、わたし合鍵持ってます」

「私も持ってる」

「私は持ってない」

フィオナとソフィアはどこから合鍵を入手したのだろうか。

「渡しなさい」

「「ええー」」

「どこから入手したのさ」

「なんか会社から言われたらしく、面倒見てやれって、織斑先生から」

「わたしも同じくです」

「千冬姉……」

犯人は身内だった。



「で、何しに来たの?」

「一応、セラが副代表に就任って聞いたからお祝いもかねてデータの提出に来たのよ。」

「この子達はただの連れ添い」

「いかにも堂々としたソフィアの回答に、沙良はため息を吐く。」

「はあ、僕は今から会社に送るデータを纏めるよ。リナとフィオナは遅くなる前に部屋に戻りなよ」

「あれ? ソフィ先輩は?」

「なんでわたしたちだけ?」

視線がソフィアに集まる。

「さつきデータの提出するんだって言ってたじゃん」

「なるほど、じゃあ、終わるまで待ってるわ」

「わたしもー」

「消灯過ぎちゃうけど、手続き取ってるの？」

「それを言うならソフィ先輩だって」

「あら、私は取ってるわよ？」

「……え？」

ソフィアの何気ない一言に固まる二人。

「もともとデータ出しに来る気なら外泊許可も取ってきてるんでしょ？」

沙良が一言添える。

「正解」

「わ、私も外泊とって来る！」

「待って、リナ。わたしも」

「一年の寮長は織斑先生だよ？」

「そろそろ、部屋に戻ります」

そのリナとフィオナの変わり身の早さに、千冬の影響力の強さを改めて実感する。

「じゃあね。 Buenas noches」

「Buenas noches Sara」

「おやすみなさい沙良さん」

リナとフィオナが名残惜しそうに出て行くのを見届けた後、沙良はソフィに視線を向けた。

「最初から泊まる気で来てたでしょ？」

「あれ？ やっぱりバレてた？」

ソフィアのその口調はさつきまでと違い、砕けたものとなる。

沙良の視線は、巧妙に隠されていたソフィアの荷物に向いていた。

「パジャマ持つてきといてよく言うよ。まあいいけどね、ソフィだし」

その言葉に嬉しくもあり、異性として認識されてないことに悲しくもあり複雑な気持ちのソフィである。

「とりあえず、データを出して」

ソフィアは待機状態となっているジュゴンを取り外し、沙良に渡す。それはコンピュータとケーブルで繋がれる。

沙良はソフィアの専用機、シックエストケートウスシリーズ【ジュゴン】のデータを閲覧していく。

沙良の前にはどんどん空中ディスプレイが展開され、その数は二桁にまで上つていく。

キーボードを叩く沙良の指は、残像すら見える。

「前、見たときとそう変わりは無いね」

「前から五時間ぐらいしか使っていないからね」

「じゃあ、後五時間稼動したらデータを出しに来て」

沙良は、S・Q社に送るための資料をまとめ始める。

「ソフィ、そっちのデータの報告書は自分で作って」

「はい」

ソフィは、先ほど渡したデータをまとめる。

それは、かなりの量があるが、あらかじめ沙良がデータごとにまとめてくれていた為、幾分かスムーズに終わらすことが出来た。

ちらと横を見ると、沙良がコンピュータと向かい合って戦っていたため、ソフィアはまとめたデータを、先に自分名義で送っておく。

ふと手持ち無沙汰になったソフィアは、テーブルに放置されたお菓子を一つだけ取り出し、沙良の前においておく。余ったお菓子は、棚にしまい、ドリンクも冷蔵庫にしまっておく。

沙良のほうを見ると、早速お菓子に手を付けたようだ。相変わらずの食い意地にくと笑みがこぼれてしまう。

「んー、終わったー！」

「お疲れさま」

沙良はジユゴンをソフィアに返す。

それをソフィアが受け取ると、沙良がのそのそと寝巻きに着替える。

沙良は上着をハンガーにかけている際に、ソフィアが顔を赤めていることに気付いたようだ。

「私がいるんだから恥じらいを持とうよ」

「ソフィアだから大丈夫」

ソフィアは何か言おうとしたが、沙良がそのままベッドに倒れこむようにして飛び込んだので、何も言えなくなる。

「セラ、寝ちやうの？」

「すること無くなったしね」

時間を見てみればすでに消灯から一時間は過ぎている。

「そういえば、ベッド一つしかなかったんだっけ」

沙良はどうでもいいことのように呟く。

「そうね。いいよ、私が床で寝るから」

「何言ってるの？」

その発言にソフィアが「何言ってるの？」という顔になる。

沙良はそんなことも気にせず、ベッドに潜り込むと、ベッドの横をぼんぼんと叩いた。

「一緒に寝ればいいじゃん。ベッド大きいんだし」

「……へ？」

その言葉に、一瞬フリーズするソフィ。

「ええええええええええええ!!」

「うるさいなあ……何に驚いてるのさ？ 早く寝巻きに着替えなよ」

その全く動揺しない沙良にソフィは悔しくもあるが、今は逃してはならないチャンスが到来してるのだ。嬉しすぎてニヤニヤが止まらない。

すぐさま、洗面所に向かい、一瞬で着替えを済まし、沙良の下に帰ると、沙良は端によつて眠る体制に入っていた。

「横、失礼しまーす」

恐る恐るベッドに身を潜らせる。

「どござー」

沙良の眠たそうな声が耳元で聞こえ、急に意識してしまう。

(ああああああ恥ずかしいよ!! 今更だけど恥ずかしいよ!!)

悶々とする思考を追い払って、煩惱の滅却に精神を傾ける。

すると、横から、寝息が聞こえてきた。

もう寝たのかと、何気なくそちらを向いたのが失敗だった。

(――！ 落ち着け私。ここで襲ってしまつたら今まで築いてきた、セラとの信頼関係がっ!!)

その寝顔に、ノックアウト寸前のソフィア。

しかし、試練はまだ終わってなかった。

「んう」

「っ!!」

普段から抱きつき癖のある沙良が、寝るときに抱き枕を愛用していたとしても何も問題ではないだろう。

ただ、今回は、抱き枕が普段ある位置にソフィアがいたと言うだけ。

つまりは、ソフィアは、沙良に抱きつかれていた。

(くっ！ 神は私にどうしろって言うんだ!?! この状態で眠れるわけが無いじゃん!)
ソフィアはいろいろといっぱいっぴいだった。

前回、似たような状況で鼻血を出してしまったため、今回はそのあふれる愛を抑えな

ければならない。

(普通、逆じゃん！ 私がセラに抱きついて、セラがドキドキするのがテンプレートじゃないの!？ 男女逆でしょ!?)

しかし、その叫びは届くことは無い。

沙良は女だけの環境に長いこといたから、女性に耐性が出来ているので、たいしたことでは恥ずかしくならなかった。

本人曰く、幼い頃から束に引つ付かれ、スペインではその研究職と言う特殊な環境から女性と触れ合う機会が多く、その際に大胆な行動を取られる事が多かったため、女性の裸を見ても特に何も思わないようにしている。実際は恥ずかしいのだが、慣れと諦めと呆れが勝っているというのが大きいとのことだ

(裸見られたときも、「風邪引いちやうよ？」って言われたっけなあ)

本当に女性として見られているのが不安になってきた。

(むしろ、あの人たちを普通だと認識してるのかな。日常茶飯事にセクハラしたり、一緒にお風呂に入ろうとしたり、やりたい放題だったからなあ。あその人間は)

そう思うと、沙良がこうなってしまうのも理解できるような気がする。

それでも、もう少し女というものを意識してもらえたらと切実に思う。

これでも告白して、返事待ちなのだ。

『……ありがとう。でも、僕は好意の違いが分からないんだ……だから……』

あの時は、本当に辛そうな顔をさせてしまった。

その後聞いた話だが、沙良は、その立場上、様々な思惑に巻き込まれることが多い。ハニートラップも日常茶飯事。故に、今のような社交的な仮面をつけるようにしたらいい。

沙良は親しい人間を増やそうとしない。

仲良くなるには多くの段階を踏む必要がある。

クラスメートから知り合いになり、友人を経て友達になる。そこで信頼を勝ち取っていけば、親友となり、身内に数えられる。

今の沙良は、知り合いまでは比較的友好的な態度を取っているように思われる。だが、フィオナやリナの話聞く限りでは、友人認定した人間は未だに居ないらしい。学園に入る前から知り合っていた人間は除いてだが。

ソフィアはミドルスクールでの沙良を知っている。

全てを拒絶するような態度を取る沙良を。

他人との距離を出来るだけ取ろうとする沙良を。

束の關係者と聞いて、納得するほどの人嫌いだった。

ソフィアとアントーニョが沙良と交友を始めることができたのも、最初は激しい喧嘩

からだだった。

それが、今では一緒に寝ることを許してもらえぬぐらいまでは信用されている。

一度、「ソフィには何をされてもいい」と言われたことがあり、自分でも当時の思考が分からないが夜這いをかけに行つた事がある。その際に沙良は一切の抵抗を見せることなく、されるがままとなつていた。尤も、興奮したソフィアが鼻血を出して倒れてしまったため、何事もなかったのだが。

(そう考えると、信頼されているなあ)

ソフィアは思考に余裕が出来たのか、沙良のほっぺをつんつんとつついた。

「むう」

すると、その腕が取られて。

「……」

「むー」

頬摺りされる。

ソフィアは必死に深呼吸していた。

ソフィアは結局眠れることなく、朝を迎えたのだった。

第十三話 整備室

「沙良聞いたか？ 隣のクラスに転入生が来るらしいぞ」

一夏に話しかけられた沙良は、鈴のことを思い出す。

一夏の言っている転入生とは十中八九、鈴のことだろう。

しかし、黙っておくと言ったため、ここは知らない振りをするのがベストだろう。

「へー、転校生？ こんな時期に」

「ああ、なんでも中国の代表候補生らしい」

鈴だ。

確実に鈴だ。

沙良はそう確信した。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

同じ代表候補生として思うことがあるのか、セシリアは手を腰に当てるいつものポーズで話に入ってくる。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

箒も、いつのまにか自分の席から一夏や沙良の席に移動してきた。

「どんなやつなんだろうな」

一夏はセシリアを見ながらそう言った。

大方、代表候補生ということで似たところでもあるんだろうかと思っ
ているのだからう。

「気になるの？」

「ん？ ああ、少しはな」

「ふん……今のお前に女子を気にする余裕など無いだろう。来月はクラス対抗戦が控えているのだぞ」

「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ」
その発言に、眉を顰める箒だが、自らが専用機を持つていないため、訓練に参加することは難しい。

「まあ、やれるだけやってみますか」

「やれるだけでは困りますわ！ 一夏さんには勝っていただきますんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気はどうする」

「そうだよ。僕のフリーパスは一夏にかかっているんだからね」

セシリア、箒、沙良が好き勝手言うが、一夏としては簡単に返事が出来なかった。

「織斑くん、頑張つてね」

「フリーパスのためにも！」

「でも、今年は専用機持ちが多いらしいからどうだろう」

「大丈夫だって、多いつて言つても第三世代はそうそう居ないんだから」

クラスメイトがわいわいとはしゃいでいると、水を差すような言葉がかかる。

「——その情報、古いよ」

その声は教室の入り口から聞こえた。

「二組も専用機持ち、しかも第三世代機乗りがクラス代表になったの。そう簡単に優勝は出来ないから」

そこには、鈴音が腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた。

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、風鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわけ」

トレードマークのツインテールを揺らし、鈴音は小さく笑みを漏らす。

「何、格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ？」

「……はあ、あんたも相変わらずね。もう少し沙良を見習つたら？」

「どういふことだ、沙良」

「ああ、転入手続きのときに挨拶は済ましたからね」

「なんで教えてくれないんだよ」

「そのほうが面白くなるかなあつて思つてさ」

「本当にあんたら、相変わらずね」

呆れたように鈴音は肩をすくめる。

「まあ私は早く戻るわ。沙良から担任が千冬さんつて聞いてるし」

「そういい、教室に帰ろうと振り返つたのだが、

「残念だが、手遅れだ。もう少し早くに行動を起こせ」

「ち、千冬さん……」

その名で呼んだ瞬間に、頭に出席簿が振るわれる。

「織斑先生だ。ほら、さっさと戻れ」

「すみません……」

鈴音は、ドアを千冬に譲り、教室を出ると、一夏に指差して吼える。

「一夏、覚えてなさいよ！ あんたが喋つてたから、入れる空気になるまで待つ羽目になつたんだから！ あんたのせいなんだからね」

「そう言つて、ドアの向こうに消えていった鈴音に対して、皆が「そんな理不尽な」と感想を持ったのである。」

「SHRだと言う事を忘れるな」

千冬的一声で、クラスの意識は鈴音から千冬へと戻る。

「あいつ、IS操縦者だったのか」

その一夏のつぶやきに、セシリアと箒が問い詰めようとしたのか、席を立とうとした。

「座れ、馬鹿共」

しかし、その頭に出席簿が食い込み、それは叶わなかった。

千冬の出現により、質問攻めを免れた一夏は、授業中に鈴音のことに思考を傾けるのだった。



「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みになると、セシリアと箒は一夏に詰め寄る。

「なんでだよ……」

身に覚えの無い罪で訴えられている一夏は、苦笑するしかない。

「鈴のことじゃないの?」

「それでなんで俺のせいなんだ?」

一夏は怒られている理由がまいちわかってないようだが、沙良に「女の子って言うのはそういう生き物なんだよ」と言われ、なんとなく頷いておいた。

「まあ、話なら飯食いながら聞くから」

「む……。ま、まあお前が言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行つて差し上げないこともなくつてよ」

そのほかクラスメイトが数名一夏たちについていく。

「じゃあね、一夏。また後で」

「おう、沙良も頑張つてな」

沙良が、お弁当を持って、食堂と違う方向に向かい出すのを見て、箒が声をかける。

「おい、沙良はどこに行つたのだ?」

「ん? ああ、箒たちは聞いてないのか」

セシリアと箒は「何がだ?」といった顔で一夏が話し出すのを待つ。

「まあ、それも一緒に話すよ。とりあえず学食行こうぜ」

セシリアは、しぶしぶといったようすで一夏に付いていく。箒は納得は出来てなかったが、置いて行かれそうになっていたため、急いで、その後を追った。

食堂に着くと、券売機で各自、自分の好きなものを購入する。

食券を出そうと、集団を引き連れて移動しようとしたとき、その行く手に立ちふさが
る影が一つ。

「待ってたわよ、一夏!」

そこには鈴音の姿があった。

しかし、一夏はその姿を見ても構うことはなかった。

「鈴、とりあえずどいてくれ。食券出せなくて後ろが詰まってきた」

「う、うるさいわね。わかっているわよ」

その手のお盆に鎮座したラーメンがのびかかっているのを見た一夏は、鈴に残念そう
な顔を向けた。

「鈴、いつから居たんだ? 麺、のびるぞ?」

「わ、わかっているわよ! 大体、アンタを待ってたんでしようが! なんて早く来ないの
よ!」

「別に早く来る必要もないだろ。席空いてんだし」

「そういうことじゃないわよ!」

一夏は、鈴音と会話しながらも食券を学食のおばちゃんに渡す。

「まあ、せっかく待つてくれてたんなら一緒に食べようぜ。悪いけど、席取つてくれな

いか？」

一夏が、一緒に食べようと誘ったことにより、鈴音の機嫌は良くなったようだ。

かわりに、一夏の後ろでは、箒とセシリアが殺気を放っているが。

「そ、そうね。せつかくだし、一緒に食べてあげるわよ。席取つとくから」

鈴音は、一夏の後ろを見て、席が多めに確保できるテーブルを探す。

鈴音が人数分の席を確保したところで、一夏たちがお盆を持つてくる。

お昼の込みだす時間帯に、すぐにテーブルにつけたのは僥倖といえは僥倖だろう。

「本当、久しぶりだな。沙良はちよくちよく帰ってきてたけど、鈴は帰ってこれなかったもんな。そう考えると丸一年ぐらいか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりや……。そういえば、鈴はいつ日本に帰ってきたんだ？ おば

さん元気か？ いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

一夏は、丸一年ともあり、思いつく限りの質問をぶつけていた。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「ああ、悪い。つい話しに夢中になっちゃった。こいつは凰鈴音。箒が引越した後に

引越してきた俺と沙良の第二の幼馴染ってところか」

箒の催促に、一夏は初対面同士を紹介する。

「で、こつちが箒。小学からの幼馴染で、ほら、前に沙良が言ってただろ？ 沙良が一時

期お世話になってた剣術道場の娘」

「ふうん、あんたが沙良の言ってた恋敵ね」

「な、何を言っている!？」

鈴音の発言に慌てる箒だが、そこは聞こえないように考慮したのか、一夏には大した反応はない。

「始めまして。これからもよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

そう挨拶する二人には火花が散っていただろう。

「それで、こつちがイギリスの代表候補生のセシリア・オルコット」

「へー、アンタがBITT適正最高値のセシリアね」

鈴音はセシリアを嘗め回すように見る。

本来なら他の国に興味を持たない鈴音だったが、沙良が「イギリスの代表候補生が一夏の魔の手に墜ちるかもしれない」と笑いながら言っていたので調べていたのだ。

「あんたも将来的には恋敵になる可能性があるってわけだ」

「な、な、なっ！」

顔を赤くするセシリアを見て、鈴音は改めて一夏のモテ具合を再認識したのだ。

「そういえば、見当たらないけど沙良はどうしたの？ あんた達いつも一緒にイメージがあるけど……あんたが沙良を一人にするなんて珍しいわね」

鈴音にとって、沙良は鈴音の恋心を知る理解者であり、協力者でもある。

その沙良がいてくれればいいのと思うていたのだが、どこにも見当たらない。

それと同時に、あの沙良が他人と仲良くしている姿が想像できずに、一人にいるのかと不安に思う。

「そうだ、一夏。先ほど言っていたが、沙良はどこに行つたのだ？」

箒も、先ほどから気になっていたのかすぐさま話題に乗ってくる。

沙良の幼いころを知っている箒も、鈴音と同じ不安を抱いたようだ。

「ああ、最近訓練終わった後に良く整備棟に残つてただろ？ とある縁で知り合った子に、整備棟で再会したんだってさ。で、その子が一人で作ろうとしてたISを作るの手伝つてるんだってさ」

すると、周りで聞き耳を立てていたクラスメイトが、反応を示す。

「それって……」

「四組の……」

「知ってるのか？」

一夏の問いかけに、噂程度ならと答えるクラスメイト。

「確か四組の更識さんだったと思う。でも、織斑君はあまり良い印象もたれてないからあんまり関わらないほうがいいかも」

「どうしてだ？」

「その子の機体の製作してた所が、織斑君の機体にかかりつきりになっちゃって、その子の機体の製作がストップしてるんだって」

それを聞き、一夏は、どこか居たたまれなくなる。

「それで一人で作ろうとしてるわけか」

「そういう噂だけどね」

どこか、静かになった場に、鈴音が話を変える。

「そういえば、一夏ってクラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……」

鈴はどんぶりを持って、そのままスープを飲む。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

その言葉に、一夏は難しい顔をする。

「そりや助かるんだけど、あまりにも申し出が多いから、訓練は沙良が管理してくれてるんだ」

「沙良……甘やかしすぎよ」

鈴音の呆れたと言わんばかりの言葉に、一夏は笑うしかなかった。



沙良は一夏たちと分けられると、そのまま整備棟に向かう。

連絡通路を抜ける途中、見知った顔が一つあった。

「フイーナ」

フイオナが、沙良と同じようにお弁当を持って、整備棟へと向かっていた。

「あ、沙良さん。奇遇ですね。沙良さんも今からお手伝いですか？」

「そうだよ」

フイオナは人の良さそうな笑みを浮かべて、沙良の隣まで寄ってくる。

第一整備棟を抜け、目的である第四整備実習室へと向かう。

行く先で沙良は声をかけられ、そのたびに手を振ることで返事としていた。

「今日はどこまで進みますかねえ」

「そうだね、外部装甲は大方完成してるし、後はスラスターの配置やバランス考えて補助のジェットブースターを取り付けたら、戦闘はまだ無理だけど飛行ぐらいは普通に出来るようになるかなあ」

「今日は戦闘に耐えられるところまで作り上げてしましましょうか」

沙良はそうだねと、朗らかに笑い返す。

この二人がほんわかと会話しているところは、整備課の癒しとして注目を集めていた。

「つきましたね。じゃあ、わたしは整備課の先輩に声をかけてきますので、先にかんちゃんのところに行っておいてください」

「うん。じゃあ、また後でね」

フィオナは整備室の奥へと駆けていった。

その姿を見送り、目的の第四整備実習室へと、足を踏み入れる。

すると、そこに居た少女が沙良に気づいたのか、顔を上げ、軽く微笑んだ。

「沙良、おはよう」

「うん、おはよう。簪」

沙良は持つてきた弁当を顔の高さまで持つてきてお昼ご飯を促す。

簪と呼ばれた少女は、その意図にすばやく気づき、自分のお弁当を広げた。そのタイミングで、フィオナが先輩方を連れてくる。

「あー、わたしをおいてご飯食べようとしてるー」

「……まだ広げただけだよ？」

「なんだ、そうだったんですね。では、わたし達もご飯食べちゃいましょうか」
こうして、整備室では、お昼のお弁当の時間が始まったのだった。



「簪も丸くなったねえ」

整備課の先輩に急に言われ、簪は反応に困ってしまふ。

「そ、そうです……か？」

その言葉は、はつきりと口に出たわけではないが、その瞳はきちんと相手の目を見ている。

その反応に先輩は満足そうに頷く。

「少し前までは近寄りにくい雰囲気があったもんな」

「そ、そんなこと……」

「それが今では、簪がきちんと顔を上げて喋ってくれるようまでなったんだ。そりや嬉しくもなるわね」

簪は、照れくさいのか俯いてしまう。

「それは……沙良のおかげ」

沙良のおかげと言われ、沙良はキョトンとする。

「確かにあの時はすごかったよなあ」

何のことを言っているのかに気づいた沙良はあわてて話を止めようとする。

「なんだったっけなあ」

「ちよつと、やめてくださいよ!? 僕だって今思うと恥ずかしいんですから」

沙良は、言葉に叫びを重ね、言葉を消そうとする。

「姉に対抗するため? そのお姉さんについて簪は何を知ってるの?」

「それは……何でも出来て……弱点なんかなくて」

「本当にそうかな?」

「え?」

「接することを避けて、相手のことなんかわかるはずがないじゃない」

『でも……』

『僕と、そのお姉さん。どっちがISについて詳しいと思う?』

『……沙良』

『でも、僕ですら一人つきりでISを作り上げるなんて出来ないよ？ 一人きりでは出来ない作業だつて山ほどあるしね』

『それは……』

『簪はただそのお姉さんの栄光だけを見て、その裏側の努力を見ていないだけじゃないかな。お姉さんもきつと壁にぶつかつて、誰かの力を借りて乗り越えてきたんだと僕は思うなあ』

『……』

『僕にも、手伝わせてくれるよね？』

『……うん』

『そのボイスレコーダーをよこせー!!』

沙良はボイスレコーダーを取り出した薫子に手を伸ばすが、ここには沙良に味方をするものなどいない。

既に沙良の体は取り押さえられ、その四肢は固定されている。

「ふっふっふ、取り押さえているわよ、沙良君」

「取り押さえてるのは二条先輩ですけどね」

「沙良くんのかなじ……」

「流石にぶん殴りますよ?」

「ふふふ」

そのやり取りを見ていた簪がこらえられないというように笑みをこぼす。

「ふっ」

「ははは」

それは周りに伝染して、大きな笑いを生みだす。

整備室に笑いが響くというのはここ最近ではなかったことだ。

これも、沙良が整備室に出入りするようになってからのことだ。

「あー、お腹痛いー。あ、京子。今回の実習当番って京子じゃなかったっけ」

薫子が時計を見ながら横に座っている少女に話しかける。

「あ、やば。実習の準備しないとー!」

京子と呼ばれた女生徒は弁当を片付け、急いでカバンにしまう。

「ごめん、ちよつと時間ないから急ぐね」

「お疲れ様です」

沙良はひらひらと手を振って見送る。

その姿が見えなくなったところで、自然と全員がお弁当を片付け始めた。

「んー今日もやりますか」

ご飯の時間は終わった。

その顔は、先ほどもまでの気の抜けた笑顔ではない。

笑ってはいいる。しかし笑顔の種類が違う。

まるで、試合などの前に自然と笑みが浮かぶような、そんな笑み。

「簪、デイスプレイを投影してくれる？」

簪は、空中デイスプレイを起動し、そのIS【打鉄式】の情報を全員に見えるように表示する。

「今回はスラスターの調節から入ろうか。たぶんこれは今日だけで終わると思うから、そろそろ武装に目を向けていってもいいと思う」

沙良の言葉に皆が頷く。

ここに集まるのは整備課の生徒。

その生徒にとって、世界の第一線で活躍する開発者である沙良は有名人なのである。

そのIS設計の第一人者の言うことに誰も否とは言わない。

「じゃあ、戦闘用の構想は僕と簪と、そうだなあ、黛先輩とフィーナが手伝ってください。他の人はスラスターをお願いします。スラスターさえ終われば、こいつは、空を飛べるはずなんで」

沙良がそう言うと、皆が言われたとおりに行動に移す。

沙良は、自分の近くに集まった三人に向かって、話し出す。

「今、簪の機体に絶対的に足りないものが一つ」

「実働データ」

「正解。でも、それはスラスタ―系が終わってからだね。だからこそ、今の状況で扱えない武装の実働データはこれを使う」

「何、それ？」

簪は、首をかしげる。

沙良が持っていたのは一枚のディスク。

「僕と一夏の機体の実働データ」

「なっ、正気ですか!？」

その発言に、フィオナが驚きの声を上げる。

「正気も正気。だって、手っ取り早いじゃん。一夏にも許可は取ってあるよ？」

「でも……いいの?」

「もちろん」

簪が、遠慮がちに聞いてくるが、沙良は笑顔でそれを肯定する。

「今日のところは、このデータの取り組みで一日が終わると思う。もうすぐ、昼休みも終わりだし、そろそろ、教室に戻ろうか」

「うん」

「はい」

「私は、このまま実習だからここでお別れね」

薫子だけがただ頷くことをしなかった。

「それでは、また放課後に余裕があれば手助けをお願いしますか?」

「もちろんよ。報酬は貰ってるしね」

「……報酬って?」

簪が不思議そうな顔をする。

「手伝ってもらう代わりに、一日密着取材を許可したんだよ」

「スペインの英雄に密着取材なんて、プロの記者でもしたことがない快挙よ。わたし、今から腕が鳴るわ!」

沙良は、苦笑いをするが、その表情に嫌そうな感情は見当たらない。

「では、みんな、また放課後に」

こうして、激動の昼休みが終わったのであった。



放課後、沙良は整備室にいた。

薫子とフィオナは稼動データの取り組みを担当している。

スラスター組は、アイデアを貰いに沙良に話を聞きに来ていた。

「そうだなあ、簪は機動型がいいんだよね？」

「うん」

「元々の打鉄が防御型だから、取り外せるところは取り外しちゃいませうか。簪は、こんなのがいいってアイデアある？」

元々が防御型のため、シールドや装甲など、取り外せるところはたくさんある。

「……ウイングスラスター……とか？」

「ありだね。よし、肩部のシールドを取り外して、大型のウイングスラスターを二つに纏めようか」

「でも、微調節難しくない？」

「それなら補佐ジェットブースターを前後二基搭載すればいい。装甲もよりスマートなラインに変更してるし、格闘戦における運動性を活かす構造に近くなると思う」

「OK。じゃあ、一回それでやってみようか」

「よろしくお願ひします」

スラスタ組がもとの配置に戻ると、沙良と簪は元の話し合いに戻る。

「じゃあ、話し合いに戻ろうか。武装の話だけど元が第二世代型の機体ってことで、拡張領域を利用するから、専用武装は積めても多くても四個、バランスを考えるなら三個が限度だと考えといて」

「……近距離武装が一つと、狙撃武装が一つ……」

「あとはミサイルとか面制圧武装もあつたほうがいいかな」

「そこは、任せる」

「了解。近距離とかなんかリクエストとかある？」

簪は、少し考えるように、瞳を閉じる。

「薙刀……かな」

「薙刀かあ、いいね！ 僕のカイラにも薙刀型の武装があるからそのデータを使おう。ただの薙刀はつまらないから、何かしらギミック付けたいね」

「私、力弱いから、そこを……」

「んー。あ、そうだあれを使おう！」

「あれ？」

「これだよ」

沙良は、自らのパソコンから、一つのデータを取り出す。

それは、最近発表された新しい技術。

「超高速振動機構……? これって……!?!」

「そう、最先端技術の一つだよ。これによって、触れるだけでも絶大な切れ味を誇つてくれる」

「……超高速振動薙刀」

「そう、それを、接近武器にしよう。名前、考えといてね。じゃあ、狙撃はどうしようか」
「荷電粒子砲がいい」

簪のリックエストに何の迷いもなく頷く。

「わかった。それでいこう」

簪は、少し考えたような素振りを見せる。

そして、口を開く。

「最後の武装は、沙良が考えて」

それは沙良に託す言葉。

「いいの? 自分で言うのもあれだけど、相当馬鹿げた武装作っちゃうよ?」

それは、オルコット戦でも利用した空中機雷等を見ればわかるだろう。

「決闘見たから、わかってる」

簪もそれはわかっているようだ。

「わかった、任されたよ。あつと驚くような武装作つてあげるから」

沙良は、今出たアイデアを、パソコンに打ち込む。

「簪は、粒子砲のプログラムをお願いするね」

簪はこくりと頷く。

「薙刀は僕がやるよ。とりあえず三日後には形にしてくるから」

簪は、その発言に恐怖すら覚える。

それは、自らが一回、一人でISを作ろうとしたからわかる。武装を一人で三日だなんて、相当馬鹿げている行動だ。

しかし、沙良ならやり遂げるのだろうと、根拠もなく思ってしまった。

沙良は、先ほどのアイデアを既に形にしているようだ。今は、空中投影ディスプレイを見ながら、キーボードを叩いている。

簪も、自分の仕事となった、粒子砲のプログラムを作り始める。

これから、沙良も簪も、私語をすることなく、キーボードに向かうのだった。

第十四話 間違えた意味

沙良は、いつものように簪の機体を作るため、整備室に訪れていた。

「おはようございます」

時間は放課後なのだが、ここでの挨拶は「おはようございます」という決まりがあった。

「ああ、おはようございます、沙良さん」

聞き覚えのある声が聞こえてきたので、周りを見渡すと、ISの下に体をねじ込んでいるフィオナを見つけた。

「おはようフィーナ」

沙良は、ISと睨めっこしていたフィオナに近づく。

フィオナは現在はスラスターの出力調節に回っている。

その作業着は油で汚れてしまっているが、本人は気にも留めていない様子でスラスターの下に体をつっ込んで作業している。

スラスターは話し合いの結果、大型のウイングスラスターを二つ、小型のスラスターを二つ、補佐ジェットブラスターを前後二基という配置に落ち着いている。これによ

り、大幅な機動性の向上と、旋回力の向上が認められた。

「じゃあ、邪魔しちや悪いし、僕は自分の持ち場に行くよ」

「はい、沙良さんも頑張ってください」

沙良は、自分の持ち場である特殊なシステムの制御を行なうコンピューターの前に腰を下ろす。

沙良の仕事は、反応速度の向上。

元が、打鉄という機体を使っている以上、元々の反応速度は高くない。

それに、搭乗者が高い技術を持つ、日本の代表候補生の簪である。

並大抵の反応速度では、簪の動きについてこれないのだ。

沙良は、打鉄式式の回路図と配線図を空中ディスプレイに投影しながら、キーボードを叩く。

そのキーボードは一つではない、同時に四つのキーボードを操作していた。

両手と、両足を使って。

その光景は、整備課の生徒の目を丸くさせるものだった。

「あれ、どういう原理なんだろうね」

「足でキーボードって、どういうプログラムをつんでいるのだろう」

周りで、生徒たちが騒いでいるが、沙良は聞こえていないのか、モニターから眼を離

すことをしない。

「信号の伝達速度が気にかかるなあ。これは、反応素子から変えたほうがいいかも」

沙良は、倉持技研にパーツの要求書を送る。

素子は打鉄と同じ系統のものの利用するため、届くのには時間はかからないだろう。

沙良は、機動型のデータを展開し、それを参考に回路の積み上げとプログラムを組み立てる。

「上手くいけば、今よりも二十四パーセントは反応速度が向上するはず」

沙良は、不意にその手を止めると、一つ伸びをして、時計をちらりと見る。

その短針は六の数字を刺していた。

沙良は、データを保存して、コンピュータを落とす。

ある程度のプログラムは組んでいるため、あとは素子が届くまでは他のことをしていたほうが効率がいいだろう。

沙良は、他の状況を見て回る。

スラスターは先ほども見たからいい。

エネルギー効率を担当する先輩チームも作業は順調なようだ。

警専用のユーザインターフェースを担当する薫子もぼちぼちと作業は進んでいるみたいだ。

ならば、自らが足を運ぶところは一つしかないだろう。

沙良は、武器を製作している簪の元へと向かった。

そこには、一心不乱にコンピューターへと嘯り付いていた簪の姿があった。

「簪、調子はどう?」

「……沙良? 調子はいい。もう少しで、出来る」

「それは、重畳」

沙良は、簪の造っていたものを見て驚きの声を上げる。

「これは考えたね」

それは、背中に搭載するタイプなのだろうか。二門の荷電粒子砲が映し出される。

それは見ただけでわかる。

「連射型なんだね」

そう、連射が出来るように作られていた。

「秒間に二発だけど、1トリガーあたりの総ダメージは大幅に強化した」

「なるほど、リロード時間の長さは、二門というところでカバーするわけか」

「私のAIM力なら十分使えるはず」

沙良は、満足そうに頷く。

悪くない。

むしろとても良い武装だ。

自分が作った武装と横に並んでも遜色ないだろう。

「じゃあ、約束してた物を渡すね」

沙良は『収納』していた武装を『展開』する。

「……それ、規約違反」

専用機持ちちに課せられる規約に違反していると簪は指摘してくるが、沙良としては知ったことではない。ISの武装を普通に運ぶなんて効率が悪すぎる。

「ばれなかつたら問題ないんだよ。はい、これが簪の薙刀、『夢現』だよ」

「これが、『夢現』」

「そう、高周波と超音波により、超高速振動を可能にした武装だよ」

簪は、その武装を見て、心を振るわせた。

この武装の凄まじさは使わなくてもわかる。

「そして、まだプログラムだけだけど、これが最後の武装になる『百千風』」

簪はそのデータを見て、言葉を失った。

「見てわかると思うけど、一対多を想定とする実弾系の面制圧兵器としては最高性能を誇るはずだよ」

簡単に言つてのける沙良だが、内容は馬鹿げている。

「使ったのはマルチロックオン・システム。それによって八機×八門のミサイルポッドから最大六十四発の独立稼働型誘導ミサイルを発射することが出来る。相手のエネルギーシールドに反応して追尾を行うようになってるから熱源を逸らされようと追撃を外される事はないよ」

「でも、これ……エネルギーが」

「そこが欠点なんだよね。一斉射撃するにはエネルギーの消費が激しいんだ。それに並の戦いでは使うことすら出来ないだろうし。だからこんな機能を持たせてみようと思う」

沙良は別のウインドウを開く。

「……個別作動システム」

「そう、八機あるミサイルポッドに個別に特性を持たせて、別々に稼働できるようにするんだ。簡単に言ってみれば性能の違うミサイルを八機持つてるのと同じ。状況に応じて一機ずつ使えばエネルギーの消費も抑えられるし、多対多の戦闘のときにも使用することが出来る」

その、応用性はこの『百千嵐』だけで射撃戦闘を行えるほどだ。

簪は驚愕を隠せなかった。

どう見ても第二世代に相応しくない兵装。

これにイメーჯインターフェイスが使われていたら、それを積むだけで第三世代と名乗っていいぐらいに。

「良いの？」

それは、ここまでしてくれていいの？　そういう意味が込められている。

沙良はきちんとその意味を読み取った。

「もちろんだよ。簪には借りがあるしね」

「あんなの、大したことじゃない」

「簪にとつてはそうかもしれないけど、僕にとつては大きなことだったんだよ」

沙良が簪と出会ったのは、二年前だ。

とあるＩＳ関連の学生論文コンペにゲストとして参加した沙良は、そこで金賞を取った簪と初めて顔を合わせた。

それから、お互い時間を見つけてはチャットで会話したり、学会に参加したりして顔を合わせている。

その間に、色々なことがあったのだ。

「じゃあ、素直に受け取る。……ありがとう」

「どういたしまして」

簪はその頬を赤くし、沙良に感謝の気持ちを伝える。

沙良はそれを、最高の笑顔で受け止める。

「……………」

それを見て、簪は朱を濃くし、俯いてしまった。

沙良はそんな簪に首を傾げるが、簡単に思考を放棄した。

「じゃあ、この『百千風』はこれで決定だね。さすがに倉持では作れないし、大まかなパーツはS Q社に頼むことにするから実験段階まで持っていくのは対抗戦ギリギリになると思う」

簪は、こくりと頷く。

「じゃあ、僕は黛先輩の方を手伝ってくるよ。簪も、根を詰め過ぎないでね」

「沙良も、だよ?」

沙良は笑いながらわかってると言うのと、薫子の元へと向かうのだった。

こうして、打鉄式式は日々、完成に近づいていくのだった。



沙良は整備棟から出ると、まっすぐ寮に向かう。

時刻は八時を過ぎているため、夕食は部屋で取ることになるだろう。

買い置きしておいたインスタント食品が活躍する時が早くも来たのだ。

しかし、部屋に戻る道中、とある部屋が騒がしいのに気づきその様子を見に行つた。

「一夏の部屋じゃん」

大方また一夏が何かやらかしたのだろう。

沙良は、一夏の部屋ということで、躊躇することなく、その部屋に入る。

「失礼しまーす」

扉を開けると、そこには竹刀を持った箒とISを部分展開した鈴音がいた。

「……えっと、どういう状況かな？」

沙良は理解できない状況に固まることしか出来ないのであつた。



「つまり、鈴は一夏が箒と同じ部屋というのが気に食わないんだね」

「そういうこと」

腕を組み答える鈴音に、沙良は冷たく言い放つ。

「鈴」

「な、何よ」

「諦めなさい」

「ちよつ、沙良までそつちの味方するの!？」

「いや、そうじゃなくて、この寮の寮長は千冬姉だよ？ 何言っても無駄だと思ふなあ」

「う、確かに……」

鈴音は顔を顰める。

「大丈夫だつて。だつて一夏だよ?」

鈴音もその言葉に納得するように頷く。

「そうね、一夏だもんね」

箒も同じように頷く。

「そうだな、一夏だしな」

「ちよつと待て、お前からどうということだ?」

一夏だけは、納得いかないのか、反論の声を上げる

「黙れ、唐変木」

「うるさいわね、唐変木」

「今は静かにしてて、唐変木」

しかし、その反論は三人の圧力の前に屈してしまう。

「……酷い」

一夏は、このままだと駄目だと判断したのか、話を逸らそうとする。

それが、あんなことになるとは知らずに。

「そういえば鈴、さつき何か言おうとしてなかったか？」

「え？ えつと、そのう、約束って覚えてる？」

鈴音は顔を伏せて、ちらちらと上目遣いで一夏を見ている。

「えーと、あれか？ 鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べさせてくれるってやつか？」

そう一夏が言うのと、箒がしかめっ面に変わり、対照的に、鈴音の顔が明るくなる。

「なつかしいな、そういえばそんな約束してたよなあ。俺に飯をご馳走してくれるって

約束だろ？」

一夏が笑いながらそう言うと、鈴音は気づいた。

約束はあっている。

しかし、一夏はその意味を理解していないことに。

箒もそれに気づいたのか、複雑な表情をしている。

「……………」

鈴音は、うつむいたまま顔を上げることが出来ない。

「どうしたんだ？」

鈴音はその顔を上げた。

一夏が見たのは、涙を零さないように唇をかみ締める、鈴音の姿だった。

「り、鈴？」

振りあがる腕。それが軌跡を描き、一夏の頬を捉えた。

「……………へ？」

一夏は、鈴音にいきなり頬を引っ叩かれて呆けてしまう。

「……………今は、話しかけないで」

鈴音は床に置いたバッグをひったくるように持って、ドアにぶつかるときの勢いで出て行った。

「り、鈴？」

まだ状況をわかっていない一夏は、呆けるしか出来なかった。

箒を見ると、視線をそらされてしまう。

「一夏、泣いていた理由、ちゃんと考えなよ」

沙良は、そう言い残し部屋から出て行ってしまふ。

おそらくは鈴音を追いかけたのだろう。

「一夏」

「お、おう。なんだ箒」

「馬に蹴られて死ぬ」

箒もその怒りを隠せないのか、一夏に辛辣な言葉を浴びせる。

「なんだよ、いったい」

未だに状況が把握できない一夏は沙良の言ったことを思い出す。

泣いていた理由。

一夏は、それを考え、眠れない夜を過ごすのだった。



沙良は部屋を出て、鈴を追いかけた。すると、すぐにふらふらと歩く鈴音の姿を見つけた。

「鈴」

振り向いた鈴音の顔は、もう限界に近いのだろう。

涙が決壊しそうだった。

「とりあえず、部屋において。こんなところじゃ、落ち着かないでしょ？」

鈴音はこくりと頷き、沙良の後についてくる。

沙良は、部屋の扉を開け、鈴音を迎え入れる。

鈴音が、ベッドに座ると、沙良もその横に腰掛けた。

「よく耐えたね」

その言葉に、ついに鈴音の涙腺が決壊した。

「ひっ……ふえっ……うわああああ！」

溢れ出す涙は、頬を伝い、床へと落ちる。

鼻水と涙でくしゃくしゃになった顔を沙良は何も言わずハンカチで拭いてあげる。

それは、鈴音が泣き止むまで続いた。



「……沙良、ありがとう」

「いえいえ」

不意に鈴音が礼を言ってくるが、沙良はそれを軽く受け止める。

今は幾分か落ち着いたようで、沙良のお菓子を食べながら、一夏の愚痴を言ってくる。

「でも、本当に一夏って唐変木ね！ 信じらんない！」

「それはフォローしようがないね」

「普通、意味を捉え間違えないわよ!?!」

「でもね、鈴。一夏が恋愛面では鈍いってことは前から知ってたでしょ？」

「うっ、確かにそうだけど……」

「ただでさえ遠まわしな言い方だったんだから、一夏に通じてるのはかは疑わないと」

「うう……」

「今回の事は、確かに一夏が悪いけど、一夏を甘く見た鈴音にだって、落ち度がないわけじゃないからね」

一夏のことでも鈴音のことでも理解している沙良の言うことに、鈴音は言葉を紡げなくなってしまう。

圧倒的に沙良の言うことは正しいのだ。

しかし、鈴音の怒りは収まることが出来ない。

「でも」

「でもじゃないの。僕だって鈴の味方をしてあげたいよ？　でも、それで鈴だけを庇うっていうのは鈴のためにもならない」

鈴音だって、沙良が鈴音のために言っているとわかっている。だから何も言い返せなくなる。

「……わかつてる」

「だったら、大丈夫だよ。一夏もこのままはぐらかす様な男じゃない。きつと答えを出してくれるから」

それは、信頼。

沙良は、一夏のことを理解している。

その沙良がそういうのだ。鈴音も信じるしかない。

「うん、わかっている。ありがと。沙良に話を聞いてもらうとスッキリした」

荷物をまとめて、部屋から出て行こうとする鈴音を見て、沙良は違和感を感じる。

「鈴、どこに帰るつもり？」

「……………じ、自分の部屋に戻るわよ」

「嘘、どうせ屋上にでも行くつもりでしょ」

「……………」

返事がないことから、凶星だとわかる。

沙良は、額に手を当てて、ため息をつく。

「鈴、泊まっつていきな」

その言葉に、鈴音は驚いたように振り替える。

「いいの？」

「ルームメイトに泣き顔を見られたくないんでしょ？」

「……千冬さんにバレたら大変よ？」

「鈴を外に放り出してたほうが気にかかって大変だよ」

「……ありがとう」

「いえいえ、さあ着替えてきなよ。そのバッグに着替え入ってるんでしょ？」

「うん」

鈴音は洗面所に入っていった。

おそらくそこで着替えるのだろう。

ならばと沙良は鈴音が出てくる前に、自分も着替えを済ましてしまう。

沙良の着替えが終わったと同時に、鈴音が洗面所から出てくる。

「じゃあ、寝よっか」

沙良はそのそとベッドに上がる。

鈴は床にタオルを敷き、バッグを枕に寝転ぼうとする。

「何してるの?」

「へ?」

沙良が、声をかけるが、鈴音は何のことかわからず、変な声が出てしまう。

「早くおいでよ」

沙良は、ベッドをぽんぽんと叩いた。

「ベッド広いんだからさ、そんな床で寝なくても」

「え、え、え?」

「ほら、こっちに入りなよ」

沙良はその体を片方に寄せ、鈴音が入れるスペースを作る。

鈴音がその展開についていけず、ぼさつとしてしていると、沙良は寝息を立ててしまった。

「寝付くの早い……」

相変わらず、人のことを女性扱いしてるのだろうかと思う。

沙良はいつもこうだった。

しかし、今はそんな優しさが嬉しかった。

鈴音は、沙良があけてくれたベッドに入り込み、沙良に背を向けて瞳を閉じた。

こうやって一緒に寝るのは、実は初めてではない。

鈴が一夏と沙良と出会った時には、沙良は既に織斑家に住んでいた。泊まりに行った

際には布団が足りなく二つの布団を引っ付け三人で寝たものだ。そのときから、鈴音は一夏を気にして寝付けなかったし、一夏も寝つけていなかったが、沙良だけは布団に入って数分で眠りに落ちていた。

(沙良を好きになる子は大変ね)

沙良が女性に対して異性という接し方をしたところを見たことがない。大したことでは絶対に恥ずかしがらない。

女性の裸を見ても『風邪引いちやうよ?』と言うような男だ。

姉代わりとなった女性が、奔放だったとの話だが、それはどこまで影響しているのだろうか。

鈴音は一夏と沙良のことを考える。

二人とも、よくここまで鈍感なくせに他人のことは鋭いのだろう。

それが、鈴音には可笑しく感じる。

鈴音は穏やかな気持ちで眠りに落ちるのだった。



翌日、沙良が起きると、鈴音の姿はなく、そこには手紙が一つおいてあった。

『いろいろありがと。あたしも頑張るわ　　鈴』

沙良はそれを見て、笑みを浮かべる。

「一夏も鈴も吹っ切れたようだね」

沙良は、携帯のメール画面を閉じる。

それは夜中に届いた一夏からのメール。

「本当に手のかかる幼馴染だよ」

沙良は、軽くなった気持ちで、寮を出た。

そして、生徒玄関前廊下に張り出された紙を見て気持ちがまた落ちるのだった。

表題は『クラス対抗戦日程表』。

一夏の相手となるクラスは、二組。

鈴音のクラスだった。

第十五話 クラス代表戦

試合当日。

沙良はカイラを纏って、空に居場所を作る。

その前には鈴音にクラス代表を奪われた元クラス代表がラフアールを纏っていた。その目は意欲に燃えている。

確か、イタリアの代表候補生だったはずだ。

専用機は持っていないが、実力者に違いはない。

一夏と沙良がI S学園に入学が決まってから、たくさんの代表候補生や専用機持ちがI S学園に送り込まれてきているらしい。

目の前の彼女もそういった部類なのだろう。

気を抜くことは出来ない。

『それでは両者、試合を開始してください』

鳴り響くブザー。

それが鳴り終わる瞬間、沙良と二組の副代表は動いた。

彼女が取ったのは前進。

セシリアとの戦いから、沙良が射撃主体と見切りを付け、後方に下がって様子を見るだろうと推測したのだろう。

それに距離を取ると搦め手を打たれる危険性もある。その判断は間違つては居ない。しかし、それは最善でもなかった。

「なに!？」

沙良はすぐ彼女の目の前まで迫っていた。

そう、沙良もすぐに前進していた。

それは、彼女が前進するだろうと推測しての行動。

それが見事当たったわけである。

沙良は、手に持っていたアサルトライフルを『収納』し、新たに近接武器を『展開』する。

それは薙刀。

それは、ISを装着している沙良よりも長く、ゴテゴテしい機殻がその存在感を主張している。

沙良はその薙刀を、向かってきているラファールの腹部目掛けて、振るう。

その動きは体の「伸筋の力」、「張る力」、「重心移動の力」だけを利用し、力むことはない。

そして、そこで得た運動量を、接触面で作用させる。

「かはっ……」

そのカウンターによって威力を増した一撃は、装甲に衝撃を通し、絶対防御を作用させる。

その衝撃は機体を後方に吹き飛ばすことなく、その機体を薙刀に食い込ませて止まっている。

衝撃は、体に響かせるようにして伝わった結果だろう。

これが、薙刀型武装『楔』の効果だ。

シールドエネルギーに接触した瞬間に機構が自動で作動し、衝撃を貫通させるのではなく全体に響かせる、対I S用武装。

これは、絶対防御を作動させ、相手のシールドエネルギーを削ることに特化した武装である。

しかし、欠点もある。

それは、機構が一回しか作用しないこと。

つまりは、一回機構を作動してしまうと、整備しない限りただの薙刀でしかなくなるわけだ。

沙良はその薙刀を体を回転させることによって、食い込んだ機体から取り外し、その

ままの勢いでラファールのスラスタ部をなぎ払う。

今度は機構が作動しなかったため、ラファールはその身を吹き飛ばされることとなる。

それを傍観するような者は代表候補生にはいない。

彼女はすぐさま体勢を整え、ライフルを展開。照準を沙良に合わせる。

それと同時に、沙良も薙刀を『収納』、アサルトライフルを『展開』する。

「遅いー」

しかし、銃弾が届くのは沙良のほうが早かった。

ラファールはあれよあれよという間にシールドエネルギーを減らしていく。

しかし、そのエネルギーを減らしているのは彼女だけではない。

それは同じように銃弾の雨の中に身をおく沙良とて同じことだ。

この撃ち合いは防御型に設計されているシークエストに分がある。

それを分かっているであろう、副代表の少女は顔を顰めながらも、弾幕のリズムを転調、少しでも被弾させるように動き回る。

しかし、それも沙良とて同じ。

お互いが持てる技術を発揮しての銃撃戦。

その勝敗は、お互いのシールドエネルギーを見れば明らかだった。

「——っ！」

そのエネルギー残量に気を取られたのか、一瞬だけだが沙良から注意が離れる。それを見逃す沙良ではなかった。

——瞬時加速

すぐさま接近し、体を捻り踵落しを決める。

「きゃああああー！」

地面に向かって蹴り落とされたラファールに、無慈悲に弾丸を浴びせ続ける。それでも飽き足らず、墜落していく機体に蹴りをぶち込むと、そのまま地面目掛けて加速していく。途中、反撃の一手とライフルを向けられるが、沙良はそれを完全に無視し、エネルギーを削りきることを最優先とした。その結果、二組の副代表の悲鳴を伴いながら、地面にクレーターを作ることになった。

無情にもブザーが鳴り響き、お互いに肩の力を向く。

『試合終了。勝者——深水沙良』

沙良は、倒れている彼女に手を伸ばすのだった。



沙良はピットに戻ると、入れ違いのように一夏がカタパルトにつく。

「お疲れ、沙良」

「頑張つて一夏」

お互いが自然に手を伸ばし、ハイタッチする。

一夏は前を向き、アリーナに意識を向ける。

向こうのピットでは、鈴音も同じように気持ちを高ぶらせているのだろう。

沙良は、邪魔するのも無粋だろうと、無言でピットのドアセンサーに触れる。

開放許可が下りるとドアが音を立てて開いた。

そのドアをくぐり、最後にピットを見ると、アリーナに飛び立つ一夏の姿が見えた。

「頑張つて、二人とも」

対抗戦は副代表戦を行つてすぐに代表戦を行うため、副代表はその試合を見ることが出来ない。

急いで向かえばまた別だろうが、勝つことを信じるならば、体力の回復に努めるべきだろう。

沙良は男子にあてがわれた更衣室で着替えを片手に持つと、軽い足取りでシャワー室

に向かう。

エネルギーも多く使ってしまった。専用機は持たずとも、流石は代表候補生といったところか。

そうこう考えながらシャワー室の扉を開き、上着を脱いでハンガーにかける。

一夏はどうなってるだろうか。そう沙良が考えたとき、校内にブザーが鳴り響いた。

「な、この鳴り方は緊急ブザー!?!」

沙良は急いで上着を着ると、そのまま飛び出した。

そこには慌しく動く教員と上級生の姿。

その顔色には戸惑いと焦りが見て取れる。

「何が起こったんだ?」

沙良はアリーナが見える場所へと走る。

しかし客席に入ろうとした瞬間、驚愕の事実が沙良に突き刺さる。

「扉がロックされている……」

それはただの非常事態では済まされない。

扉の向こうからは、混乱している生徒の悲鳴が聞こえてくる。

「くっ、IS学園のシステムをクラックできる存在なんてそうそういないぞ!?!」

それが、IS学園の内部に敵が侵入したか。

「今は考えてる場合じゃない」

沙良は状況を把握できるであろう場所へと駆けるのであった。



「先生！ わたくしにISの使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

沙良が、管制室に到着すると、セシリアが千冬に迫っているところだった。

「織斑先生！ 一体全体どうなっているんですか？」

「深水か、良い所に来た。——これを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。その数値はこの第二アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……しかも、扉が全てロックされてる……」

「あのISの仕様ですか？」

「あのIS？」

「沙良はまだ見てないのか、あのISを」

何時の間にか傍に来ていた箒は、リアルタイムモニターを指差す。

そこに映るは異様に手が長く、深い灰色をした『全身装甲』

沙良は背筋に寒いものが走るのを感じた。

あれは、あれは、

「――ゴーレム」

沙良は、唇を噛む。

なぜ、あれがここにいるのだ。

あれは東と沙良が思索し、製作したもの。

だが、あれは盗まれたはずだ。

それに、東が作った人工AIではあんなことは出来ないはず。

あれは探索を目的として開発したものだ。また、戦闘に利用できるほどのAIが開発

されたという話を聞いた事がない。

——なら、何で動いて……。

「……まさか」

その思いを打ち消そうと頭を振るが、出てくるのは、それを裏付ける物ばかり。

東は確かに言ったのだ。論文ごと盗まれたと。

窃盗者は東が超えることのなかった一線を越えたのだ。

「脳を、人間の脳を繋げたのか……?」

「さ、沙良?」

沙良の状態に気がついた筈は、恐る恐る声をかける。しかし、その声に沙良が答えることはない。

「織斑先生、状況は」

「あ、ああ。今は三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できればすぐに部隊を突入させる」

言葉を紡ぎながら益々募る苛立ちに千冬の眉がびくつと動く。沙良はそれを危険信号だと受け取った。

沙良が今からハッキングに加われれば、確かに遮断シールドは解除できるだろう。

しかしそれは、一夏と鈴音の犠牲の上に成り立つ。

沙良はそんなことする気は更々無い。

沙良は優しいと言われてきたが、それも状況による。

沙良は少数の身内と、大勢の他人を秤にかけたとき、迷わずに身内を取る。

「はああ……。結局、待っていることしかできないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

「お前の I S の装備は 一対多向けだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！このわたくしが邪魔だなどと——」

「では連携訓練はしたか？ その時のお前の役割は？ ビットをどういう風に使う？

味方の構成は？ 敵はどのレベルを想定している？ 連続稼働時間——」

「わ、わかりましたわ！もう結構ですわ！」

「ふん。わかればいい」

このまま放っておくと一時間は続くであろう千冬の指導をセシリアは降参とばかりに両手を揺らして止める。

しかし、セシリアには予想外のところから助けが入る。

「この際、連携訓練は必要ない。後方からの射撃をメインにバックアップを担当。あくまで射撃に徹するなら、セシリア一人ぐらい、何とかなるかもしれない」

「沙良、さん？」

「出来るのか？」

千冬はそれだけを聞く。

それは可能かどうかを聞いたわけではない。

見せていいのか？

そう聞いているのだ。

沙良は頷く。

「あれの落とし前は僕がつける」

その目は決意に燃えていた。

「……やっつてこい」

「はい」

沙良はセシリアを伴い、管制室を出て行く。

向かう先は――

「ピットに行きますの?」

「そう、ピットに使われている遮断シールドは、アリーナを囲う遮断システムとは別に動いている。クラックにかかる時間は少なくともすむ」

沙良たちはピットに向かって走る。

しかし、目的地は同じではない。

「セシリアはこのままピットAに向かって」

「わかりましたわ」

沙良はそのまま、ピットBへと向かう。

セシリアをピットAに向かわせた理由は、単純にゴーレムの死角を付く事が出来るから。

沙良はピットに着くと指紋・静脈認証を経て、ピットの入る。

「カイラー！」

沙良はすぐさまカイラーを纏い、遮断シールド管理システムへとカイラーをつなげる。

同時に、空中投影ディスプレイを出せるだけ出し、カイラーの処理能力を使い、システムへと侵入する。

ハッキング自体は管制室でも出来た。

むしろ、管制室の方が良かっただろう。

しかし、沙良は他人に見られることを拒否した。

それは、沙良のISの根本に関わることだから。

それは沙良の唯一ワン・オフ・ア・ビリティの特殊能力。

『絶対的管理者』



鈴音は青竜刀を円の動きで振るう。

青竜刀を振りぬくは足首の高さ。バランスを崩すことが出来れば幸い。あわよくば転倒を狙う。そんな一撃だ。

しかし、その一撃は防がれる。

元々上手くいくとは思ってなかった鈴音は続けさま二発目を放つ。

それは右へと突つ込み、すれ違いざまに振りぬく。

当たった。

それに続くように、鈴音は三発目、四発目と放つていく。

その連続した斬撃に、敵ISはその巨体に似合わぬ速度で鈴音の猛攻を防ぐ。

しかし、ここで、戦っているのは鈴音だけではない。

鈴音の攻撃を捌ききった一瞬。

その隙を突いて一夏が後ろから切りかかる。

「うおおおおお！」

一撃必殺の間合い。

しかし、その躲せるはずの無い斬撃は、尋常ではないスラスタの出力を持ってして、簡単に離脱されてしまう。

「くっ、鈴！」

「わかってる！」

敵 I S は攻撃を避けた後は決まって反撃に転じる。

それは、まるでコマのように高速回転しながらビーム砲撃を行ってくる。

その回転状態での砲撃は有効射程が通常の半分になるため、一夏と鈴音はギリギリで射程範囲を抜けることが出来る。

「くそっ、罠が明かない」

一夏は苛立ちを抑えることなく言葉に乗せる。

「こないたちごっこじゃ、ごっちのエネルギーが先に切れちゃうわ」

鈴音もこの状況に焦りを感じていた。

なんとか打開策を見つけないと。

しかし、先に行動に起こしたのは敵 I S だった。

高速回転からのビーム砲撃を行う。

「同じことなんて通用しないわよー」

鈴音はこれをチャンスと見たのか、空間圧作用兵器・衝撃砲を持って、砲撃を行う。

しかしそれが仇となった。

意識の集中の必要な第三世代兵器。その砲撃による一瞬の隙。

そこを付かれた。

未だ回転している敵 I S の肩部から鈴音にミサイルが放たれる。

「えっ!？」

それは衝撃砲では落とすきれない数量を持って、鈴音に襲い掛かる。

「くっ!」

すぐさま回避行動に移るが、遅い。

数発を衝撃砲で墜とすが、それでも鈴音の視線には多くの弾頭が向かってきている。

被弾。

その衝撃は身体の不自由を呆気なく奪い去り、動きの止まった鈴音は爆風に暴虐される。

爆炎の中、叫びを上げこちらに向かう幼馴染を最後に、鈴音の視界は暗転した。



「りいりいんっつ」

一夏は鈴音の元へ急ぐ。

先ほどの爆撃を受けてはシールドエネルギーなど残っていないだろう。

急がなければ、鈴が危ない。

一夏は目の前で鈴音が倒れたことで、気が動転していた。

敵は、一夏が鈴音に駆け付けるのを黙って見ているわけが無い。

その敵 I S は一夏にその腕を伸ばし、銃口を突きつける。

一夏は、ロックされて、自分が狙われていると気づいたのだろう。

その直線的な動きは急に変えることは出来ない。

遮断シールドを突き破るビーム砲撃。直撃したらただではすまない。

万事休すか。

「くそっ」

一夏は、必死に体制を整える。

しかし、その短い硬直時間は敵 I S にとっては充分なものだっただろう。

その銃口が光を纏う。

「ちくしょおおおお!!」

光線がアリーナを貫いた。

第十六話 選べと言うなら

「りいりいんっつ」

一夏は鈴音の元へ急ぐ。

先ほどの爆撃を受けてはシールドエネルギーなど残っていないだろう。

急がなければ、鈴が危ない。

一夏は目の前で鈴音が倒れたことで、気が動転していた。

敵は、一夏が鈴音に駆け付けけるのを黙って見ているわけが無い。

その敵ISは一夏にその腕を伸ばし、銃口を突きつける。

一夏は、ロックされて、自分が狙われていると気づいたのだろう。

その直線的な動きは急に変えることは出来ない。

遮断シールドを突き破るビーム砲撃。直撃したらただではすまない。

万事休すか。

「くそっ」

一夏は、必死に体制を整える。

しかし、その短い硬直時間は敵ISにとっては充分なものだっただろう。

その銃口が光を纏う。

「ちくしょおおおお!!」

光線がアリーナを貫いた。



光線がアリーナを貫いた。

I S の右腕が衝撃に吹き飛んだ。

その光線に貫かれた右腕は、その照準を宙に移す。

「どうやら、間に合ったようですね。一夏さん?」

そのまま発射された敵機のビーム砲撃は、虚空を打ち抜いた。

セシリアはスターライトmkⅢを構えたまま、開放回線で言葉をかける。

「セシリア!」

「早く、鈴さんを安全なところに」

一夏は、すぐさま鈴音に駆け寄り、その身を抱いて戦線から離れる。

鈴音の装甲はあらゆる所が融解し、破壊されていた。

しかし、その身には絶対防御が作用したのか、命に別状はなさそうだ。

それでも、安心は出来ない。

一夏が鈴音を運んでいる間にも、セシリアはスターライトmkⅢによる狙撃を続ける。

それは的確に敵ISを貫く。

だが、敵ISの停止には至らない。

それでもセシリアは撃ち続ける。

しかし、それを露にも思っていないかのように、敵ISはセシリアに銃口を向けた。

セシリアは、それを笑みで眺めていた。

畏にでもかかったと言わんばかりに。

「わたくしだけに気を取られていてよろしいので?」

その言葉が何を意味するのか、一夏は理解できなかった。

しかし、すぐさまその意味を把握することになる。

「はあああああ!!」

沙良がピットから薙刀を持って敵ISに接近したのだ。

その薙刀は先ほど使ったものと同じ、『楔』。

機構は一度作動しているため、その衝撃はシールドを貫通することはない。ゆえに、沙良はそれをダメージ目的ではなく、体制を崩させるために使う。沙良はこのＩＳが無人機だと知っている。ゆえにダメージを与える目的では絶対に勝てないと分かっているのだ。やるからには破壊する。

「墜ちろー！」

あれの落とし前は、自分が付ける。

沙良は左足に目掛けて薙刀をなぎ払う。

それは、セシリアに標準を合わせていた敵ＩＳには避け切ることは出来ない。当たる。

その一撃で、敵ＩＳは体制を崩す。

しかし、その際に振るわれていた敵機の腕部がカイラを殴りつける。

「沙良さんっ！」

「セシリア撃って！」

沙良を気にするセシリアだが、その叫びにすぐさま照準を合わせる。

体勢が崩れている敵機には避けるすべはない。

光線が敵機ＩＳを焼き、回避行動を取らせる。

その隙を見逃す沙良ではない。

沙良は『襖』を『収納』。

新たに武装を『展開』する。

それは採掘用器材を基に作られた武装。開発者の名をとって『ハリマー』と呼ばれている。

「吹っ飛ばー！」

衝撃を一点に集めるハリマーは、敵ISに当たると、その身を遮断シールドまで吹き飛ばす。

結果を見るようなこともせず、すぐさまハリマーを『収納』、そして新たな武装を『展開』。

追い討ちをかけるように沙良は重火器を手に持つ。

ミサイルランチャー。

それはATM。対戦車ミサイルである。

「当たれええ!!」

放たれた弾頭は、ゆっくりだが確かに敵ISへと向かう。

吹き飛ばされた敵ISに避ける手段は無い。

それは当たった瞬間、とてつもない爆発を起こす。

「まだまだあー！」

沙良は両手にロケットランチャーを『展開』し、多目的ロケット擲弾をばら撒く。多目的ロケット擲弾は、空中にその身を躍らせると、敵ISに方向を変える。

それが爆発するまでに、沙良は次なる武装を『展開』する。

岩盤採掘用レーザー。

それは発射までに十秒かかるといふ欠陥品だがその分威力は抜群に高い。

セシリアもサポートに入っている今なら十秒確保できる。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

「発射」

沙良の無情なる声に、全てを焼ききるレーザーは敵ISの下部を割断した。

「すげえ……」

一夏の眩きか聞こえてくる。

まだだ。

気を抜くな、終わってない。

実際に、敵機がその腕を持ち上げた。

——ビーム、か……？

沙良はその初動を見極めようと、気を張る。

撃った。

しかし、それはビームでは無かった。

それは、連射性能に優れたガトリング砲。

毎分6000発の弾丸を吐き出す暴君が、あろうことか左腕部に内蔵されていた。

——なんて物を……！

それは紛れも無い、最後の手段。

所謂切り札と呼ばれる物。

まさしく豪雨。

普段の弾幕が俄雨に感じるほどの質量差に、焦りを隠しきれない。

ビームの一撃必殺ではなく、エネルギーを削ることだけに特化した狙い。

エネルギーが無くなったISの脆さは、技術者である沙良には良く分かる。

照準が沙良に向き続ける。

カイラがロックされたとの警告を出し続けるが、今の沙良に対処できる方法はあまり多くは無い。

——傘が無かつたら危なかつた……。

物理シールドを前面に配置し、“DivinGSystem”を作動。

只管に弾幕に耐え続ける。

状況は、あまり良くは無い。しかし、敵機をこちらに集中させることには意味がある。

『セシリア、一夏と鈴は』

『もう少しですわ』

プライベート・チャネル
個人間秘密通信によって通信を交わす。

沙良が偏に防戦に回ったのは、時間稼ぎが最大の目的だ。

沙良とセシリアに注意を向けさせている間に、二人をアリーナから抜け出させる。

今は、ピットAに逃げ出そうとしているため、セシリアの援護は期待できない。

ここで、セシリアが援護に回ることによって一夏と鈴音に照準が合わせられたら、憤懣やる

かたない気持ちでいっばいだ。

『早く、あまりもたないよ』

既にエネルギーはレッドラインに到達している。

『急がせますわ、少々お待——!?!』

『セシリアっ!?!』

急に通信を切ったセシリアに、嫌な予感を覚える。

通信と同時に止んだ弾幕が、その答えを伝えている。

既に使い物にならなくなっていたシールドを投げ捨てると、そこには敵機ISの照準から逃げる青い機体。

それは、一夏と鈴音に被害が行かないように二人から距離を離す。

行き着いた先は真逆のピットB。

ピットAには敵機ISを挟む形となっている。

——しまった、誘導されたか!?!

セシリアが、その位置に誘導された。それならば狙われているのは誰だ。

その答えを、沙良は外れて欲しいと願いながら、声を張り上げる。

「早くピットに入れ!!」

沙良は、自分がフォローに入らなければと、敵機を注視しながらも、ピットAにスラ

スターを噴かそうとイメージをする。

しかし、その深い青に包まれた体は、輝きを失う。

沙良の機体は、ガクツとその高度を落とし、多数の線を引いた。

「具現維持限界!? こんなときに!?!」

その機体は絶対防御だけを残し、機能をストップさせる。

先ほどの副代表戦後に、エネルギーの補給もせず戦闘を行ったツケが回ってきた。

それでも、あの豪雨のような弾幕に耐えた。ここまでエネルギーを保てたのが不思議なくらいだ。

最後に機能が止まりかける瞬間。

沙良のハイパーセンサーはある動作を捉えた。

敵が左手を一夏に向けて動かしていた。

それは、遮断シールドを貫通する殺傷兵器。

拙い拙い拙い拙い。

一夏は気づいていないようだ。

沙良は声を張り上げる。

「一夏あ! 逃げてえ!」

しかし、その一夏の機体は回避行動に移ることができない。

そこには、ISを解除している鈴音が横たわっている。

一夏が避けようとも、鈴音に当たっては話にならない。

このままだったら、一夏と鈴音が死んでしまう。

「一夏さん!?!」

セシリアも、敵ISの動きに気づくが、逆位置のピットからでは間に合わない。

間に合ったとしても、二人を運ぶのは無理だ。最悪三人とも撃ち落されてしまう。

だからといって、狙撃特化のセシリアの機体で敵機に強襲をかけるわけにもいかない。

「動け、動け、動いて、……動いてよ!!」

沙良は、反応を無くしたカイラを必死に動かそうとするが、その思いに反して、カイラは微動だにしない。

沙良は意味無き叫びを上げる。

——何のためのISだよ! 誰も守れないようなISしか僕は作れないのか!

自分が作った機体では一夏を助けられないのか?

英雄だ何だ呼ばれても、大切な人は守れないのか?

沙良は悔しさを滲ませる。

その自分の弱さに、不甲斐なさに涙が零れる。

——僕に、力さえあれば。

口元を隠すように両手を持ち上げると、黒いチョーカが手に触れる。

それは、待機状態の『オルカ』だ。

防犯のため、身から離すことなく持ち歩いているそれは、カイラを纏っている今でも沙良の首についていた。

——いけるのか？

しかし、思い出す。オルカを使うときの注意を。

その未完成ゆえの弊害ゆえに、戦闘で使用することは硬く禁じられている。死の文字が頭を過ぎる。

——でも一夏が、鈴が……!!

葛藤している時間すら惜しい。

他人と身内なら、迷いもせず身内を取る。

それなら、自分と身内ならどうだ。

(ごめん、みんなっ！)

「【オルカ】!!」

沙良は迷いも無く身内を取った。



鈴音を背に庇うように敵機に向かい合う一夏は見た。

沙良が叫びを上げた瞬間、具現維持限界リミット・ダウンを迎えたはずの沙良の機体が、光を取り戻したのを。

その機体は、深い青から、蒼が混ざったような黒に色を変える。

その装甲には白いラインが走り、蒼のラインがその姿を彩る。

厚い装甲が、消え、その機体は洗練された形となる。

エネルギーが無いはずのその機体は、敵 I S を見据えると、そのスラスタを噴かせた。

その機体は、一瞬でトップスピードに乗ると、敵 I S に肉薄する。

その動きはまるで、一夏たちを庇うかのよう。

敵 I S と一夏たちを分断するように、沙良は体を入れる。

それでも構わず、敵 I S は左手から溜め込んだ光を放出しようとする。

「沙良！」

その直前に沙良は『襖』で左手を切りつけた。
機構は作動しない。

一度使ってしまったているから。

しかし、それでよかった、目的は装甲の破壊だから。

その刃は敵ISの左手に食い込む。

方向は、ずらす事が出来た。

しかし、それだけでは駄目だ。

それは一夏でも分かること。ここで止めを刺さないと。誰も助からない。

それを沙良も分かっていると云わんばかりに叫びを上げる。

「あああああああ!!」

沙良はスラスターを最大限に負荷し、襖を押し込んでそのまま左手を切り飛ばした。

その瞬間、行き場をなくしたエネルギーが、光の渦となって沙良の身を包み込む。

ただ、ビームのエネルギーだけとは思えない。

自爆だ。

「サアアアアアア!!!」

一夏の叫びを最後に、沙良は意識を手放した。

第十七話 個人間交渉

「う……………?」

全身の痛みに呼び起こされ、沙良はまだぼやける意識を覚醒させる。

「……………知ってる天井だ」

なんだか状況がわからず周囲を見回すと、どうやら保健室で寝かされていたらしい。

「……………気がついた?」

「……………簪?」

近くに設置された椅子に座るのは四組の更識簪だった。

「あれからどうなったの?」

「試合は中止。対抗戦も一年は中止。来月末の学年別個人トーナメントの成績で代用するんだって」

「そっかあ。せっかく頑張って間に合わせたのね。打鉄式。まあ完成には程遠いんだけど」

「……………気にするのは、そこ?」

「今回はデータ取りとしても重要だったんだから大切なことだよ?」

「……ISバカ」

「褒め言葉として受け取るよ」

簪は、一瞬だけ笑顔を見せるが、すぐに隠してしまう。

「じゃあ、対抗戦、終わっちゃったけど、まだ手伝ってくれる？」

「もちろん。中途半端じゃ終われないからね」

簪は、その表情を明るくすると、椅子から立ち上がり、閉められていたカーテンを引く。

「織斑先生を呼んでくる」

それから程なくして、千冬がソフィアを伴って保健室に入ってくる。

簪はもう戻ったのだろうか。おそらくは休ませて上げたいとの配慮か。

「気がついたようだな。気分はどうだ？」

「ええ、特に悪くは」

「そうか、お前の体だが、一番ダメージが高いところが鎖骨のひび。安静三日全治一週間。次が、肋骨のひび。同じく安静三日全治一週間。そして、内臓へのダメージが大きい。全身にも打撲が見られる。いまは薬が効いているためマシだが、三日は地獄を見るだろう。我慢しろ」

沙良は自分の体が動かせない理由がわかった。

麻酔が残っているのだろう。

「医療が進歩してて助かったよ」

そうでなければ完治に一ヶ月以上かかっていたかもしれない。

ISが発表されてから、世界の医療は格段に進歩していた。

場を和ませようと沙良は笑顔を見せる。

「まあ、何にせよ無事でよかった。家族に死なれては流石の私も耐え切れん」

千冬の表情は普段より、柔らかなものだった。

「千冬姉」

「なんだ？」

「心配かけて、ごめんね？」

「そう思うなら、無茶な真似は止してくれ。心臓がいくつあっても足りない」

千冬は真剣な瞳で、沙良を見つめる。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、しっかりと休んでおけ」

それだけ言い残すと、千冬姉はすたすたと保健室を出て行ってしまふ。

途中、ソフィアに「ほどほどにな」との声をかけて。

それを切っ掛けにソフィアが行動を起こす。

「本当、無茶は止めてって言ってたよね？」

その声色は感情が押し殺されている。

今まで、黙って話を聞いていたソフィアが、沙良の横に立つ。

その噛んだ唇を見て、沙良は、ソフィアが本気で怒っていることを悟る。

ソフィアはゆつくりと腕を持ち上げる。

「——っ」

沙良の体を考慮してか、威力を抑えた張り手は体に響かない。

頬は痛まない。

それでも沙良の心には大きな波紋を与える。

ソフィアは泣いていた。

「約束したよね？ 無茶しないって。今回のセラの戦い方は最悪よ。頭に血が上った？

なんで自分たちだけで解決しようとするの。それこそ、私たちに命令すれば良かったじゃない。助けてって。あの二人を助けてって。したら私たちは躊躇いも無く助けに行つたわ。それとも、私たちがそんなに信用できない？」

「……ううん」

「それに、オルカは危険って分かってたでしょ？ 絶対防衛が作動しないのよ!!? あんなに皆から言われてたのに……それなのにセラは使った。それも、よりによってあんな危険な状況で！」

「……El que quiera pescado que se moje el culo. (魚を得たい者は尻をぬらさなければならぬ)」

「……危険を避けていては成功できない。そうね、それはそのとおりよ。でも、そのリスクをきちんとして管理して、最低限の安全を確保することが前提。貴方みたいに危険に身を晒す事を躊躇せず、ましてや、それを良しとするような人間には当てはまらない」

言い返す言葉も無い。

完璧に自分が悪いと自覚している。

「あの状況では仕方ない。そう言われたら私たちは何も言えないわ。命が掛かっていたのだから。でも、分かっている？ 『オルカは危険性のない場面でしか使ってはならない』。この意味がわかっているの？ 貴方には沢山の想いが乗せられているの。守るため、大いに結構よ。私だってセラを守るためなら同じことをやったわ。でも私は、全ての可能性を十分に吟味する。私は絶対に怪我をしない。それで助けられた側が傷ついているから」

わかっている。

沙良は、力があるというだけで、すぐにそれを選んでしまった。他にも選択肢があったかもしれないのに。それで、自分が傷つくことになった。

頬に、ソフィアの冷たい手が添えられる。

「貴方が傷ついて、それで私たちが何とも思わないとでも思ったの？」

ソフィアの零れ続ける涙に、沙良は身が裂かれるような思いを感じる。

「……ごめんなさい」

沙良の沈みきった顔をこれ以上見てられないのか、ソフィアは沙良に背を向ける。

「このことはしっかりと報告させて貰うわ」

ソフィアはその怒りを隠すことなく、出て行ってしまおう。

沙良は、ソフィアの姿が見えなくなると、扉越しに様子を伺っていた二人に声をかける。

「リナ、フィーナ。入っておいで」

二人は気まずそうに顔を見合わせながら入ってくる。

「セラ……」

「いいんだ。今回のことは僕が悪い」

「でも、沙良さんはイチカさんを守ろうとして——」

「それでも、だよ」

「——そう、ですか」

「ソフィアが本気で心配してくれたのは分かっているから。だからあの怒りは大人しく受け止めるよ」

「沙良さん」

「All mal tiempo, buena cara. (悪い天気の時、明るい顔で)」

「辛い時こそ笑顔で、セラは……強いね」

「弱いよ。だから笑ってないと潰れちやいそうなんだ」

そうして沙良は瞳を閉じる。

すると、空気を読んでくれたのか。二人は音を立てずに席を外してくれる。

沙良はゆっくりと眠りに落ちていった。



ふと眠りから覚めた沙良は、カーテンが全て開けられていることに気づいた。
(誰か来ているのかな?)

重たい体を動かし、横を向いてみると、鈴音が一夏に顔を近づけていた。

「何してんの、鈴?」

「さっ、沙良!?! 起きてたの!?!」

「いや、今起きたの」

「べ、別にさっきのはそういうんじゃないや無くて……」

段々音量が小さくなる鈴音に沙良は首を傾げる。

「そんなに大きな声を出すから、一夏起きちゃったよ?」

その言葉に、未だ一夏に顔を近づけた状態で固まっていた鈴音は慌てて、一夏から離れる。

「……何してんの、お前」

「おっ、おっ、おっ、起きてたの!?!」

鈴音は沙良の時以上に驚きの声を上げる。

「お前の声で起きたんだよ。で、どうした? 何をそんなに焦っているんだ?」

「あ、焦ってなんかないわよ! 勝手なこと言わないでよ、馬鹿!」

しかし、その姿はどう見ても焦っている。

「んーよく寝た」

「おはよう」

「お、沙良。起きてたのか」

「さっきね」

「そういえば、勝負の決着ってどうしようか。再試合も決まってるんだよな?」

「そのことなら、別にもういいわよ」

「え？　なんで？」

「いい、いいからいいのよ！」

一夏は納得はしていないようだ。

それゆえに、黙って頭を下げる。

「い、一夏？」

「その、なんだ……。悪かったよ。色々。すまん」

「一夏……」

「俺、あの時からずっと考えてたんだ。なんで鈴があんなに怒ってたのか」

そう切り出す一夏に鈴は面食らったような顔をする。

「でもさ、俺って馬鹿だから、全然わからなくて。意味が違うのかと思ったけど、あまり思い浮かばなくて。でも、俺、鈴と仲直りしたいんだ」

それは一夏が鈴音に真面目から向かい合って出した答え。

「これからもこんなことで怒らせてしまうかもしれない。でも鈴とは仲良くしていたいんだ。許してくれないか？」

鈴音は真剣な一夏を直視できないのか、赤い顔を一夏に見られないように俯きながら答える。

「ま、まあ、あたしもムキになってたし……。いいわよ、もう」

「で、一夏は他にどんな意味を思い浮かべたの？　あまりつてことは何個かは考えたんでしょ？」

一件落着した所に、沙良が爆弾を放り込む。

「ちよつ、ちよつと沙良!!」

鈴音が慌てるが、一夏は迷いも無く答える。

「もしかしたら『毎日味噌汁を』とかの話かとも思ったけど、それは流石に深読みしすぎたかな」

「——つ!？」

鈴音が、ピキツと動きを止める。

沙良もまさか一夏がそこまで考えていたなんて思っていなかったため、驚いてしまふ。

(あの、一夏が!!　あの何を言っても曲解して捉える一夏が!!)

本人が聞いたら怒るであろうが事実である。

「鈴?」

一夏は少し挙動がおかしい沙良よりも、完全に停止している鈴音に声をかける。

「へえっ!!　そ、そうね!　深読みしすぎじゃない!!　あは、あははははは!」

急に笑い出した鈴音に、不思議そうな表情を向ける一夏。

これで気づかないなんて相当鈍い。

「そっか、それならいいんだ」

「……」

自分で否定しておきながら、悲しそうな顔を見せる鈴音。

『馬鹿、チャンスだったのに』

沙良は個人間秘匿通信プライベートチャネルで鈴音に呆れたと伝える。

『だ、だって……』

『鈴のそういうところも一夏の鈍さに拍車をかけてるんだよ？』

『うう……』

「沙良、鈴、俺はもう動いても大丈夫らしいから、部屋に戻るな。沙良はしつかり休んでおけよ」

「うん、ありがとう」

沙良は一夏に手を振れないため、にっこり笑うことで返答とする。

一夏は、沙良に笑い返すと、そのまま、保健室を出て行ってしまふ。

残された鈴音は沙良の視線が自分に向いているのに気づいた。

「な、何よ?」

「勿体無い」

「も、もう少し、慰めてくれたっていいじゃない」

「……」

「何よ?」

「鈴の意気地なし」

「う、うわあああ!!」

鈴音は走り去って行くのだった。



学園の地下五十メートル。そこにはレベル四権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したI Sはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。

そこで、千冬は繰り返しアリーナでの戦闘映像を見ている。

「……………」

室内の薄暗さは、千冬の冷たさをより一層引き立てた。

「織斑先生」

ディスプレイに割り込みで開かれたウィンドウには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ？」

許可により自動で開かれるドアをくぐり、真耶は普段の姿からは想像も出来ないほどの堂々とした動作で入室した。

「あのＩＳの解析結果が出ました」

「ああ、どうだった？」

「はい、あれは——無人機です」

世界では、未だに完成されていないと思われる技術。遠隔操作と独立稼動。そのどちらかか、あるいは両方か。沙良の発言から恐らくは独立稼動だろう。その技術があの謎のＩＳに使われている。

「どのような方法で動いていたかは不明です。最後の自爆により機能中枢が焼き切られていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

どこか確信のある表情をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔を見せる。

「何か心当たりでもあるんですか」

「いや、ない。今はまだ……な」

そう言う千冬の瞳には怒りが燈っていた。

登録されていないコア。

それは束しか作ることの出来ないもの。

しかし、一番の被害を受けたのが、沙良である時点で、束と言う線はほぼ消えた。

束は沙良には危害を加えない。

喧嘩などで怪我を負う事はある。

そういうことではなく、束は沙良に対しては絶対に敵意を向けたりしない。

そして、沙良の管制室で見せた態度。

あれは束が、その研究が馬鹿にされたときに良く見せていた物と似ている。

(落とし前を付ける、か)

おそらく、沙良はあれが何か知っていたのだろう。

「ゴレム」

それは、沙良の呟いた言葉。

そのことから、作ったのは束だろうと千冬は確信していた。

しかし、その権限は束の手から離れていた。

沙良の態度から見て盗まれた可能性が強いだらう。

千冬はISを盗むなんて馬鹿なことをする組織を二つ知っている。

それは、あの事件にも関わっていた連中。

千冬は拳を強く握る。

「次、私の家族を傷付けてみる。その時は——」

そう言つて千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かつた。

かつて世界最高位の座にあつた、伝説の操縦者。その現役時代に、勝るとも劣らない鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けた。



敵機襲撃事件から一週間が経つた。

生徒会室には水色の髪色をした女生徒が、暢気に鼻歌を歌う。

「~~~~~♪」

彼女は浮かれていた。

なんせ、今まで距離を置かれていた妹に、昼食を誘われたのだから。

話すことはあまり無かったが、その一歩近づいたということが彼女にとっては大きなことだったのだ。

今も机に詰められた書類に目を通し、署名を書きながら、横で仕事をする幼馴染に自慢話をしている。

その幼馴染の妹は、クラスの子に用事があるといつて遅れている。

(ああ、楽しかったな。簪ちゃんとのご飯)

今の彼女は、生徒会長として見せてはいけない類の顔をしているのだろう。

横に座る幼馴染が、怪訝な顔をしている。

しかし、そんなことお構いなしに、彼女は鼻歌を歌い続ける。

そんな時、彼女たちのいる生徒会室がノックされた。

「はい、どうぞ」

彼女は、先ほどまでのだらけ切った表情をしまい、生徒会長らしい毅然とした態度をとる。

「失礼しまーす」

入ってきたのは、生徒会役員の布仏本音。

そして、

「失礼します」

監視対象であった、深水沙良だった。

——これはっ……!!?」

先ほどまでの浮かれ気分と違い、彼女は焦る。

最近まで自ら監視をしていた人物が訪れてきたのだ。何か感じるものがあってもおかしくない。

それに、つい最近まで彼は怪我で休養を取っていた筈だ。

それがいきなり生徒会室に足を運ぶだなんて、何も無いと言う方が信じがたい。

「あら、怪我は大丈夫かしら。有名人の深水沙良君?」

彼女は、ここ最近、彼を監視していた。それは更識家直々の命令。

スペインの英雄。

凄腕の研究者。

それは、有名すぎて隠し切ることが出来ない。

だが、他に有名な事柄がある。

篠ノ之束の唯一の理解者。

それが、世の沙良への評価だ。

更識家は沙良を通じて篠ノ之束の足取りを追うことができなかと考えていたのだ。

しかし、楯無はそれを快くは思っていない。

全く知らない人間というわけではなく、何回か表の場で挨拶を交わしている。

それに、彼は、楯無がこの世で一番大事にしている妹と仲良くしている。

最初は、彼が妹に近づいているのを見たとき、これ以上ないほどに警戒したが、それは杞憂に過ぎなかった。

妹は彼のおかげで明るくなった。

そんな彼を利用するのは彼女には少し気が重かった。

彼は、親しくさえなってしまうえば、ただのお人よしだ。

もちろん、敵対してしまえば容赦は無いが。

そんな彼と今、相対しているのだ。

冷や汗が流れる。

更識が日本の暗部として力を持っているように、S Q社はスペインの要として力を持っている。

そのS Q社の開発を一手に引き受ける彼には、国をも簡単に動かす影響力がある。つまり、彼は彼女に敵対できるだけの力を持っているのだ。

「ええ、少しばかり生徒会の活動に興味があり、少し会長にお話を伺えたらと」
白々しい。

彼女はそう感じた。

彼はこう言っているのだ二人で話せる場所を作れと。

「ええ、いいわ。部屋を移るのも手間になるでしょう。虚ちゃん、本音ちゃん。その資料を職員室まで運んでくれるかしら」

彼女は幼馴染たちに指示を出すと、彼に腰掛けるように、手で示す。

彼は、虚と本音が出て行くのを確認してから、腰を下ろす。

「流石の手際ですね」

「あら、何のことかしら」

実際、彼女はそれが何のことを示しているか絞り込めていなかった。

「接近した敵I Sの第二波を、学園に近づかせること無く始末するなんて流石は生徒会長ですね。助かりましたよ」

「——っ!？」

「なに驚いているんですか？」

「どうして、それをあなたが？」

「どうしてって、僕は当事者ですよ？ 織斑先生から聞いただけですよ」

「そ、そう」

確かに可笑しい事ではない。

しかし、態々あの織斑教諭がそれを生徒に伝えるとも思えない。どっちだ。ブラフか、事実か。

「流石は十七代目。その年で楯無の名を持つだけありますね」

「——っ!？」

拙い、拙い、これは拙い。

相手は調べてきている。

それに対して、受身になったこっちは切れるカードが少ない。

その上で、こちらのカードである敵 I S の増援殲滅が封じ込まれてしまう。

彼女は更に冷や汗が流れるのを感じた。

「さて、交渉を始めましょうか。大丈夫です。僕にも、貴女にも、双方に損の無い話だと自負していますから」

彼は指で何かを弾くような動作を取る。

不思議に思ったが、その答えは自らの携帯端末が答えてくれる。

机の上に出しておいた端末が勝手に動き、どこからかデータを引っ張り出してくる。

更識家秘蔵の機密データ。

それは携帯端末に保存するような代物ではない。

それは、目の前の人間にハッキングされたことを意味する。

それも遠隔で、楯無の端末を利用して。

「おっと、予想以上に呆気ないもので。人員の入れ替えを打診しては？」

「……流石は、最高峰のハッカー。いい性格してるわね」

「お褒めのお言葉光荣です」

これは暗に断ればどうなるかを示しているのだろう。

世界は武力では動かない。常に情報をもってして動いているのだ。

バイブレーションが鳴り、彼の端末と思われるアドレスからメールが飛んでくる。それを見て、楯無は目を丸くする。

「これは……？」

「どうですか？ お互いに利益のある話だと思いませんか？」

今回の交渉に当たった提案文。

確かに、悪くない。

向こうが要求している物も、楯無ならば容易に準備できる。

この条件を飲めば、楯無は、更識家の中で利権を握ることが出来る。

現在の『名前だけの当主』という立ち位置から、名実共に『当主』となれる。

それに、大切な妹のためにもなる。

「……までこちらに譲歩されると、裏があるようで領きにくいわね」

楯無は内心はどう思っている、簡単に頷くようなことはしない。

相手の思考を読まない、飲み込まれる。

「裏なんてありませんよ。僕はただ自分と身内の自由と安全。それと友達の夢を叶えてあげたいだけです。十七代目は、妹さんの夢を叶えてあげたくないのでですか？」

「あら、十七代目じゃなくて、たっちゃんと呼んでもいいのよ？」

「そうですね、十七代目としては呑み難いのですか？ 個人としてのメリットは大きいですけど、当主としてのデメリットを考えるとつてことですか？ ちっちゃい人間だ。上に立つ器ではありませんね。だから、名目だけの当主なんですよ」

あからさまな挑発に、楯無は感情を出さない。

この交渉は最初から交渉の形を成してはいない。断るといふ選択肢が無い交渉など、何が交渉だ。

出来ることは向こうの譲歩を引き出すこと。

しかし、最初から譲歩されている提案を受けて、これ以上何をすれば良いというのだ。「最初から選択肢を与えないくせに良く言うわね」

断れば、それで彼の思うように動くことになる。

「それでは？」

「ええ、呑むわ。その提案を」

「そうですか、それは良かった」

彼は、言質を取ると、へにやとソファアに深く沈んでいく。

「ちよつと?」

「緊張したあ。交渉なんて慣れない事するもんじゃないね」

テーブルにインカムを投げると、手足を伸ばした。

「……………」

「あ、もちろん今の流れも録音してあるからね」

「交渉を考えたのは…………?」

「そりゃあ会社の間人だよ。どうしても領かせてつて言ったらこんな提案文に」

「……………」

先ほどの迫力はどこに行ったのだろうか。

目の前にいる彼は、普通の少年に戻っていた。

「ていうか会長、名ばかりの当主なんですか?」

先ほどの交渉時に始めて知ったのだろうか。その言葉は裏があるとは思えない。

「それを、貴方がどうにかしてくれるのでしょうか?」

「貴女が味方につけばの話ですけどねー」

「味方でいる時だけは、協力してやる。なんて上から目線かしら」

「当たり前じゃないですか。僕のほうが圧倒的上ですよ？」

さも当然のようにいう少年。今は交渉人の指示を受けていないため、彼自身の言葉だ。

「そうね、ロシアと日本は、私がなんとかするわ。だから」

「ええ、僕は貴女の力になりたいよ」

「あら、スペインは動かしてくれないの？」

「何を、僕自身がスペインのような物ですよ」

その彼の目は冗談ではなく、ただ事実としてそう捉えていた。

「じゃあ、よろしくね。たっちゃん」

伸ばされる腕。

食えない男だ。そう思い、楯無は握手に応じるのであった。

第十八話 根も葉もない

六月頭。

日曜日。

沙良とはある部屋に来ていた。

休日のため、どこかに出かけようかとも考えた。しかし、一夏が中学の友達の家遊びに行つてしまった為、出かける当ても無い。

下手に外をうろついて、恐らく隠れて着いて来るであろう護衛を振り回すのも気が引ける。

それならばと、学内で普段来ない所に着てみたのだが、暇をもてあました結果、「なんで、抱っこされてるんだらうね」

ソフィアの膝の間に収まっていた。

沙良は特に抵抗することも無く、その膝に挟まれた状態で読書に耽っていた。

胸が押し付けられているが、沙良は慣れたとも言わんばかりに関心を向けない。

沙良は小柄である。

ソフィアよりもその身長は小さい。

研究所にいたころから膝の間に抱えられることが多かった沙良は、いつものことだと認識していた。

「ねえ、ソフィ」

「ん？ なーに？」

呼びかけに、甘い声で答えるソフィア。

既に、機嫌は山の天辺まで上ろうとしている。

全く現金なものである。

「汗かいたからシャワー浴びてもいい？」

「いいよー。一緒に入る？」

鼻息を荒くしながらソフィアが聞いてくるが、沙良は軽く流す。

「狭いからやだ」

狭くなかったら入るのかといわれれば、沙良は別にどっちでもと答えるだろう。

研究所には大浴場は一つしかない。少数の男性のためだけにもう一つ大浴場を作るという案は、未だに出ていない。

もちろん、男は沙良一人だけではない。元々機械工学系に進んでいた者がIS関連に転向するのは良く聞く話だ。SQ社の開発部にも、微々たる数だが男性社員が存在している。しかし、男共はシャワーだけで満足するような者ばかりであり、大浴場を利用す

る者は少数派であつた。もつとも、沙良以外の男性が利用しようものなら、即警報が鳴らされて、女子職員からの私刑が待っているだろうが。

ましてや、研究職に決まつた時間に行動しろと言うほうが無茶がある。

皆が適当に大浴場に入るのだ。そこに混じる沙良としては、女性の裸など見慣れたものであり、なおかつ、皆が沙良と一緒に風呂に入ろうと日々計画を練っていたりしていたので、既に興奮する対象ではなくなっていた。

「ちえー」

「覗かないでね」

一応言っておく。

それが実行されるかは分からないが。

沙良は、ソフィアの抱擁から抜け出そうとするが、ソフィアが離そうとしない。

「ちよつと、離してよ」

「えー、もうちよつとだけー」

そういつて、体を左右に揺らし始めたソフィアに、沙良はため息をつくしかない。

そうして、沙良とソフィアがゆつたりとした時間を過ごしていると、その部屋に來客が訪れる。

いや、來客ではない。元々がその者の部屋なのだから。



「ふう、疲れたわ。ソフィアいるの?」

帰宅と書かれた扇子を持った少女は悠然と扉をくぐり、タイを緩める。

「あ、会長だー。お帰りー」

「たっちゃんお帰りー」

沙良と、ソフィアは帰宅した楯無に声をかける。

「ええ、ソフィアも沙良君もただいま。用事があるから直ぐに出るわね。夕食は——」

そういつて、自分のベッドまで歩こうとしたが、楯無はピタリとその足を止める。

そして、ギギギとゆっくり顔だけ動かし、ソフィアの膝に挟まれてる沙良の姿を視認する。

視線が合うと、沙良はにっこり笑って、その手を振った。

楯無は手を振り返し、そして数秒後叫んだ。

「どうしてあなたがここにいるの!?!」

「話があるって言ったのは会長じゃない？」

「そうだとしても、ここは私の部屋よ？」

「ソフィの部屋でもあるもん」

遊びに来ただけだとニヤニヤしながら楯無をおちよくる沙良。

楯無は、何故気づかなかったのかと自分を責める。

（確かに話があるからって呼び出したのは私だけど、まさか部屋に来てるとは思わないでしょ!）」

楯無が、表面上は取り繕って、内面で大慌てしていたら、いつの間にか、沙良がソフィアの抱擁から抜け出していた。

「会長、シャワー借りますね」

そう言う沙良に、楯無はこれはチャンスと、いつものように飄々とした言動で沙良を惑わそうとする。

「あら、シャワー浴びるの？ お姉さんが一緒に入ってあげようか？」

「えー、狭いから嫌です」

「じゃあ狭くなかったら入るのかしら？」

楯無の中では、これで沙良があたふたしてくれるはずだった。

その姿を見て、楽しもう。そう思っていた。

「別にどっちでも」

「——えっ?」

しかし、帰ってきた答えは予想の斜め上をいつていた。

ならば、実際にその状況になったら流石に恥ずかしがるだろう。

その時におちよくつてあげればいい。

「じゃあ、大浴場に向かいましょうか。お姉さんが色々教えてあげるわ。日曜だし、この時間なら生徒会長権限で——」

その言葉は背後から向けられる殺気で止まってしまふ。

その禍々しい視線を辿ると、ソフィアが、拳銃を片手に楯無へ銃口を向けていた。

その顔は笑顔だが、完全に目が笑っていない。

ソフィアとしては、せっかく沙良が自分から遊びに来てくれたこの時間を、楯無に邪魔されてしまったことへの怒りも含まれている。

ソフィアの癒しの時間が奪われたことへの八つ当たりである。

「そ、ソフィア? じよ、冗談よ?」

今まで滅多なことでは怒らなかつたルームメイトの逆鱗に触れてしまったことを楯無は悟つた。

「へー、面白い冗談だね。もっと聞かせてもらおうか」

銃口が頭に押し付けられる。

流石の楯無もこの状態から状況を逆転させることは出来ない。

「生憎だけど、今はネタを切らしてるの。また今度聞かせてあげるわ」

「そう。……それならたつちゃん、頭への刺激で何か思いつくかも」

「流石にお断りするわ。そんなことされたら、いくら私といつても思いつく前に思考が停止してしまうもの」

「大丈夫、ゴム弾だから。程よい刺激かもよ?」

のらりくらりと怒りを流すが、段々ソフィアの顔から笑みが薄れていくのが分かる。

——あ、やば。

流石に、身の危険を感じた楯無は、助けを求めようと、沙良の姿を探す。

しかし、その姿はどこにもいない。

耳を澄ませば、シャワーの音が聞こえる。

——なんてマイペース!?

楯無は、その無表情に近くなつていくルームメイトに本気で恐怖を感じ始めた。

生徒会長はIS学園最強。それが不文律だが、流石にISを展開していない状態で、学年でもトップクラスの代表候補生に銃を突きつけられていたらどうしようもない。

自らの武術に自信があるとはいえ、相手もそれなりの使い手だ。

——これは、本気でマズイかも。

そう楯無が思った瞬間。

「ソフィー。リンズーてどれー？」

助けが入った。

「あ、二番目の青いのがそうだよ」

ソフィアは、拳銃を懐にしまい、洗面所に向かう。

「わかんないー」

そして、沙良が居るであろうシャワー室に入った。

「これよこれ」

「ああ、ありがとう」

「いえいえ」

「……………危なかった」

楯無は躊躇無くシャワー室に入っていったソフィアや、それに対して、何もリアクションを取らない沙良に突っ込みを入れることもせず、ベッドに座り込んだ。



「エキビシヨン？」

「ええ、そう。それに出てくれないかしら？」

沙良は、またソフィアに後ろから抱きつかれた状態でベッドに腰掛けていた。

「それはどういうことをするの？」

「今月末の学年別個人トーナメントでは多くの来賓が来られるわ。そこで、IS学園としてはショーとしての模擬戦闘を見せたいってこと」

「なんで僕？」

「それは、あなたが有名人だからよ」

沙良は、納得する。

「見世物としては最適なんだね」

楯無はそれに頷く。

「エキビシヨンはタッグで行われて、私と簪ちゃん対ソフィアと沙良君で模擬戦が行われる予定なの」

IS学園最強の生徒会長と、日本代表候補生のその妹のタッグは確かに人目を引くだろう。

それで、相手が学年トップクラスのスペイン代表候補生と、今一番の話題の人物であ

るスペインの英雄なら話題も尽きない。

「なるほど、それでスペインの機体もアピールして、S・Q社の機嫌も取っておこうと」
I S学園のスポンサーだからね、と沙良はあっけらかんと言いつつ。

「そんなはつきり言わないの。上層部だって、スポンサーへのアピールに必死なんだから」

「会長もはつきり言ってるじゃないですか」

「あら、楯無って呼んでくれていいのよ？」

「十七代目と呼んで欲しいと」

「冗談よ」

「なんと都合の良い」

「そういう時は聞き流してあげるのが紳士ってものよ？」

「淑女相手じゃないとエスコート出来ない性質なんで」

「はあ、もういいわ。で、沙良君はエキビションに出るから、本戦は免除でいいそうよ」

「……まだ出るって言ってないけど？」

「もう、出るって書類出しちゃったから、今更訂正できないわ」

「……………」

「えへ♪」

沙良は大きなため息をついた。

「もし、本戦に出る場合はどうなるのですか？」

「その場合は普通に参加できるわよ。でも、まだ本戦についての細かい規定が決まってないらしいから、そこは情報待ちね」

「了解。……………ソフィア？」

沙良は、先ほどから一言も喋らないソフィアに怪訝な表情をする。

そして、そのソフィアのにやけただらしない顔を見て、額に手を当てる。

目の前で手を振って見ても、反応は無い。

心ここにあらず。

これは、夜まで部屋に帰れなさそうだ。

沙良は、ソフィアに抱きつかれたまま、楯無とお喋りして、時間を潰すのであった。



「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた!」

「え、何の話?」

「だから、あの織斑君と深水君の話よ」

「いい話? 悪い話?」

「最上級にいい話」

「聞く!」

「まあまあ落ち着きなさい。いい? 絶対これは女子にしか教えちゃダメよ? 女の子だ

けの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで——」

沙良はソフィアと楯無と二年生用食堂に来ていた。

二年生用といいながらも、一夏と沙良が入学してから一年生用食堂に多くの上級生が押しかけているため、その区別はほぼ意味を成さなくなっていた。

「ん? なんかあそこで盛り上がってるね」

沙良は食堂の一角を指差す。

二年生用食堂が騒がしいのは珍しいことだ。

「えええつ!!? そ、それマジで!?!」

「マジで!」

「うそー! きゃー、どうしよう!」

何かよほど面白いことでもあるのだろうか。

黄色い声が津波のように押し寄せてくる。

「ん、騒いでるの、二条先輩だ」

沙良は知り合いの姿を見つけ、集団に近寄ることにした。

「セラ?」

「ちよつとだけ」

ソフィアも後ろをついてくる。

楯無はその噂の内容に心当たりでもあるのかニヤニヤしている。

「どうしたの?」

沙良は近くに居た女子に話しかける。

「それが、すごい噂が流れてるの!!」

「噂? どんな?」

彼女は相手が沙良と気づいていないのか、女子だけと言っていた噂を語りだす。

「なんと、今回の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と深水君とつ——」

「待って!! その人、噂の沙良君だから!!」

その少女の発言は、途中で沙良に気づいた初音によって止められる。

「えっ?」

「優勝したらどうなるの?」

沙良は首を傾げ、初音を見つめる。

その「教えてくれないの?」という沙良の視線に初音は耐え切った。

「くっ、そんな目で私を見ないで。うう、いくら沙良君でも、これだけは言えないのよ!!」

初音は、そのまま走り去ってしまう。

残された沙良はポカんと口を半開きで固まってしまふ。

「ほうほう、それは美味しいわね。上級生にも当てはまるの?」

「そこまではわかんないけど、期待は持てるわね」

後ろではソフィアがちやっかり別の人から噂を聞きだしていた。

「ソフィア?」

「何?」

「優勝したらどうなるの?」

その首をかしげている沙良の頭を撫で、ソフィアは物凄くいい顔を作る。

「なんでもないわよ。女子にはご褒美が当たるってだけの話」

それは全くの嘘ではないだろう。

だから沙良もそれを疑わずに鵜呑みにする。

「そっか」

沙良はそれで納得したのか、食券を買いに、販売機に並ぶ。その後ろでは、ソフィアを筆頭に、二年女子が狩人のような瞳で沙良を見つめていた。それを、楯無は面白そうな顔でただ眺めているのであった。



「あ、のほほんさん」

沙良は、前を歩く女子三人組から馴染みのある声を見つけ、声をかけた。

「あ、ふかみーだ」

だぼだぼの袖を振り回しながら、楽しそうに笑う少女。

簪の従者であり、簪と同じく整備科志望の本音である。

「今日、簪見なかった？」

「ご飯と一緒に食べたけど、その後はわかんないなー」

「そっか、どこか、行きそうな場所って分かる？」

「んー、日曜日だから、かんちゃんも整備室に居ないよねー」

「そうなんだよね。簪、端末持ち歩いてないのかなあ。連絡もつかないんだ」

「かんちゃんを見かけたら、ふかみーが探してたよ〜って伝える?」

「お願いしてもいいかな?」

「まかせてー」

大げさに胸を叩く動作をする本音に、つい笑みが漏れる。

「谷本さん、邪魔しちやってごめんね」

「ううん、本音も深水君も頑張ってるね、機体作り」

「ありがと。あ、のほほんさん待って」

沙良は、につこりと笑顔を作ると、ポケットに手をつ突っ込んだ。

「これ、調節の参考資料。流石に、簪のパーソナルデータを僕が見るわけにも行かないしね」

「むー、わたしの仕事増やしたな〜」

「のほほんさんを信用してのことだよ」

「今回だけだよー?」

毎度、そう言って仕事を振っているのだが、帰ってくるのは決まった台詞である。

彼女も、自分の幼馴染でもある簪を手伝うことは嫌ではないだろう。

「あ、あと会長に『よろしく』言っておいて」

本音の眉がピクリと動く。

しかし、それは直ぐにいつもの顔に塗り替えられてしまう。

「わかったー。『よろしく』言っておくね」

手を振り、別れの挨拶とすると、廊下を別方向に歩いていく。

簪の専用機作成を手伝い始めてから既に二ヶ月が経過しようとしている。

手伝つてくれているメンバーも、既に30人近くは居るのではないだろうか。

実用レベルまでは後ほんの少しというところまで来ている。

今は最終段階だ。

そろそろ、技術的な問題だけではなく、政治的問題にも目を向けていかねばならない。

コアは倉持技研のものだが、その機体製造は、途中から簪の手に完全に委ねられ、I

S学園製と言っても良い機体が仕上がっている。

このIS学園という特殊な環境で作られたこの機体は、完全に簪の機体として扱うに

は少々手続きが面倒くさいことになる可能性が高い。

そこで楯無だ。

裏の住人でもあり、国家代表という表の立場も持っている楯無ほど、こういう政治的

問題で利用しやすい人物は居ない。

既に沙良は面倒くさいであろう事柄を全て楯無に押し付ける気満々である。

「たっちゃん、ふぁいと」

今頃、沙良が部屋に置いた書類を見つけて大騒ぎしているであろう楯無に、心の籠つていないエールを送るのだった。



「あーもう！ こつちも忙しいって言うのに！！ このぐらい自分でやりなさいよ！！」

「たっちゃんうるさい」

「ソフィアも手伝うのよ！」

楯無の苦難の日々は、まだまだ続くのである。

第十九話 懷疑の編入者

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハツキのつてデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

女子がカタログを持ってあれやこれやと意見を交わしている。

その話題は、彼女たちが身に纏うことになるＩＳスーツだ。学校指定のものではなく、自分たちで好きなものを選ぶことが出来るため、盛り上がりも一入だろう。

「そういえば織斑君のＩＳスーツってどこのやつなの？ 見たことない型だけど」

「あー、特注品だつて。男のスーツがないから、どつかのラボが作ったらしい。えーと、もとはイングリット社のストレートアームモデルって聞いている」

一夏は時々思い出すような素振りを見せながら答える。

その回答に満足したのか、同じ問いが横に座っていた少年に向けられる。

「深水君のは？」

「僕のはS・Q社のオリジナルモデルだよ。まあ、オリジナルといっても、シークレストシリーズに特化したスーツを男性用に改造しただけなんだけどね」

沙良は自社の製品となるスーツの宣伝を忘れない。

「S・Q社のスーツは、作業のときにも使用され、それだけで潜水も可能という優れたもの。それに防弾防刃機能も優れてるんだ。デザインもモニターを募って日々意見を取り入れているから、きつと満足できる一品が見つかるはずだよ」

沙良はそういつて、S・Q社のカタログを取り出し、女子の談笑に混じっていった。

その後ろで、一夏は、真耶にISスーツの説明を受けているようだ。

時折、真耶を褒める声が上がっている。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございますー」

千冬の登場で、クラスの雰囲気が一瞬で引き締まる。

皆が言われる前に席に着くと千冬は満足そうに頷く。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないように。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ、下着で構わんだろう」

——いや、構うでしょ。

一夏と沙良は顔を見合わせると苦笑いをする。

どうやら同じ意見を持ったようだ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

真耶は千冬からホームルームを促されると、眼鏡を拭いていた手を止め、慌ててかけ直した。

その姿に一度笑いが起こる。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！」

「え……」

「「えええええっ!?!」」

いきなりの転校生発言に一気にクラスが騒がしくなる。

それもそうだ。噂が好きな十代女子が過半数を占めるこのIS学園の情報網をかくぐつてきたのだ。驚きが大きくても仕方ないだろう。

しかし、沙良は、一人別のことを考えていた。

(この時期に転校生？ 鈴のことを考えると、それなりの実力があって、専用機持ちの可能性が高い。でもそれなら一組に入れる必要がない。鈴だって違うクラスだし。そう

考えると、何かの圧力がかかったのか？ 政府か、企業の)

「失礼します」

沙良の思考は、転校生が入ってきたことにより一時中断される。

クラスのざわめきがピタリと止まる。

それもそうだろう。

入ってきた転校生は少女ではなく、少年だったのだから。



「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れたことも多いか
と思いますが、みなさんよろしくお願いします」

その挨拶をする少年に、皆は目を惹かれていた。

「お、男……？」

誰かがそう呟く。

その気持ちは良く分かる。

沙良ですら、驚きに開いた口が塞がらないのだから。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

沙良は、転校生の事などそっちのけで個人間秘匿通信《プライベート・チャンネル》で千冬を問い詰める。

『千冬姉』

「男子！ 三人目の男子！」

『おい、沙良。ISを無断で使用す——』

『彼、本当に男性？』

「しかもうちのクラス！」

『……………お前も、そう思うか』

『まず、秘匿なんて出来るわけがないんだよ。僕ですら連合には存在が知られていたんだ。もし彼が男性だったとしたら、僕にそれが伝わってこないわけがないし、僕や一夏が発表された時に発表しないとおかしい。そう考えると、考えられる可能性は少ないよ』

「美形！ 深水君もそうだったけど、守ってあげたくなる系の——」

『……………どちらにしても厄介だな』

『せめてデータだけが目的であって欲しいけど……………物騒なことが起こっているのは確実』

だね』

『あいつのことは沙良に頼む。一夏では何かがあるか分からん。お前なら、何かあったときの対処を心得てるだろうからな』

『心得たくは無かったけどね』

「地球に生まれてよかった~~~~~!」

元気が有り余っているかのように騒ぐクラス。

他のクラスが覗きに来ないのは、HRの時間だからだろうか。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬がぼやく。おそらく、面倒くさいのは先ほどの会話のほうだろう。

沙良は、もう一度転校生をまじまじと見る。

人懐っこそうな顔。

礼儀正しい立ち振る舞いに中性的に整った顔立ち。

背で結ばれた長く繊細な、金色の髪。

華奢に思えるぐらいのスマートな体。

沙良と同じぐらいの身長。

一度意識してしまうと男には到底見えない。

沙良自身、よく女顔だと言われるが、実際に女に間違われたことはない。性別など、そうそう間違えるものではないのだ。

「ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

ばんばんと手を叩いて千冬が行動を促す。

このままクラスにいと女子と一緒に着替えなといけなくなる。

それは彼、『デュノア君』も困るだろう。

確か、今日は第二アリーナ更衣室が空いてたはずだ。

「深水、デュノアの面倒を見てやってくれ」

了解。

その意を込めて沙良はコクリと頷いた。

「デュノア君、行こ」

「君が深水君？ 初めまして。僕は——」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

流石に一夏は行動が早かった。

説明と同時に教室を飛び出て走っていく。

「僕たちも行くよ！」

沙良はシャルルの手を取るとそのまま教室を出た。

「とりあえず、男子は毎回空いているアリーナ更衣室で着替えるから、早く移動に慣れてね」

「う、うん……」

どうかしたのか、シャルルの様子がおかしい。

「トイレか？」

「トイ……っ違うよ！」

「一夏、流石にその発言はデリカシーがないと思うな」

「まあ、違うならそれは良かった。今からトイレに行つてたら間に合わないからな」

とりあえず階段を下つて一階へ。

速度を落とすわけにはいかないのだ。

なぜなら――

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも織斑君と深水君と一緒に！」

そう、HRが終わっているということ、情報先取のための尖兵が動き出したのだ。

捕まったら最後授業には間に合わず、鬼の特別カリキュラムを受けることになる。

「いたっ！」

「者ども出会え、出会えい！」

いつからIS学園は武家屋敷になったのだろう。

「待て、いつからここは武家屋敷になったんだ。……おい、誰だ法螺貝吹いてるやつは!?!」

一夏も沙良と同じ思考にたどり着いたようだ。

法螺貝を吹いてる薫子の姿を確認すると、沙良はその場を離れるように、駆け出した。

「ああ、織斑君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！ 沙良君と一緒に！ お似合い！」

「きやああっ！ 見て見て！ ふたり！ 手！ 手繋いでる！」

「可愛い男の子二人組み……ご馳走様です」

「日本に生まれて良かった！ ありがとうお母さん！ 来年の母の日はちゃんと形のあの物をあげるね！」

母の日ぐらいきちんとしてあげれば良いのにと、こんな時でも暢気に考えてしまう。

「てかみんなは何に興奮してるの？」

「沙良、いいんだお前は知らなくても」

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

状況が飲み込めないのか、シャルルは困惑顔で聞いてくる。

「そりや男子が俺たちだけだからな」

「それもそうだけど、それだけじゃない執念というものを感じる気がするよ」

その顔が仄かに朱を帯びていることから、実際には意味がわかつているのかも知れないが、シャルルはそう意見を述べた。

しかし、会話に夢中になってたら包囲網が完成しつつある。

「一夏、喋ってる場合じゃないよ」

「——っ！ そのようだな。沙良、デュノアは任せても大丈夫か？」

「任せて」

一夏は、急に方向を変えると、階段から下に降りていく。

「相手は二手に分かれたぞ！ こちらも分散して追い詰める！」

「新聞部二人組みを追います！」

「なら私たちは織斑君を！」

その統率力をもっと別の場所で活用して欲しいと沙良は切実に思う。

だが、その追撃部隊に、新聞部を混ぜたのが間違いだ。

なぜならそこには沙良が交渉できる相手、薫子がいるのだ。

「薫先輩！」

沙良は走りながら声を上げる。

「ダメ！　どんな条件でも、インタビューはしないとイケないの!!」
その記者魂に脱帽する。

ならば、その記者魂を満足させればいいのだ。

「なら、後でデュノア君に個人インタビューを受けさせます!」

「ええ!!　なに言ってるのさ!?!」

「……」

薫子は、頭の中でその条件を吟味しているようだ。

「もう一押し!」

そして、もう一声を求めてきた。

「密着取材を三日にしてもいいですよ」

「ここは私に任せて沙良君たちは早く行きなさい!!」

薫子率いる新聞部は振り返り、追撃部隊を食い止める。

「流石、先輩!!」

その切り替えの速さも脱帽物だ。

このままいけば逃げ切れるだろう。

「甘いわ、沙良君」

「くっ二条先輩」

しかし、そこには初音が立ちふさがった。

いつの間にか回り込まれていたみたいだ。

「くっ、そこを退かないとあの事言いますよ!?!」

「えっ?」

「整備室で昼寝してたら二条先輩が寝込み襲おうとしてきたって話言いますよ!?!」

「待って、言ってる! それ、全部言ってるから!!」

「……目標、二年三組整備科二条初音」

「ひい……!」

集団の狙いが、沙良と転校生の身柄から、反逆者へと移り変わった。

「デュノア君、今のうちに逃げるよ! 二条先輩の犠牲を無駄にはしちゃいけない!」

「ええ!! 犠牲にしたの深水君じゃん!」

その言葉を、軽く聞き流し、目的地に向けて悠々と足を進める。

周りの雑音を無視し、必死に駆け抜けること数分。

「よーし、到着!」

目的地に到着した。

いつも通りの圧縮空気の抜ける音が、心に落ち着きを取り戻してくれる。

「沙良、無事だったのか！」

「一夏こそ」

既に一夏が到着していたようだ。

しかし、ゆつたりと会話をしている暇は無い。

「それより、時間がやばいな！　すぐに着替えちまおうぜ」

一夏は制服のボタンを一気に外し、それをベンチに投げて一呼吸でTシャツも脱ぎ捨てた。

「わあっ!?!」

「?!」

シャルルは一夏の上半身に大きな反応を示す。

「荷物でも忘れたのか？　って、何で着替えないんだ？　早く着替えないと遅れるぞ。

デユノアは知らないかもしれないが、うちの担任はそりやあ時間にうるさい人で——」

「う、うんっ？　き、着替えるよ？　でも、その、あっち向いてて……ね？」

「ん？　いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……って、デユノアはジロジロ見てるな」

「み、見てない！　別に見てないよ!?!」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル。

そのシャルルに、一夏は訝しげな視線を向ける。

しかし、このままでは全員が仲良く遅刻してしまうだろう。

それは沙良の望むことではない。

それに、出来るだけ一夏には感づいて欲しくはない。

「一夏、時間やばいよ！」

故に、助け舟を出す。

「しまった！ 先に行ってるぜ！」

「うん。遅れたら、新聞部に捕まりましたって言っておいて」

「了解」

一夏は急ぎ、第二アリーナに向かう。

沙良は、下にISスーツを着ていたので、制服を脱ぐだけですむ。

「デュノア君着替えないの？」

その理由はわかりきっているが、あえて質問として言葉にする。

「す、すぐに着替えるよ！」

「ふーん、先に行ってるね」

「うん」

先に行くという言葉に、わかりやすいぐらいにホツとした表情を浮かべるシャルル。

あとで千冬に報告しておく必要があるだろう。ほぼ間違いなくクロだと。

そう考えると、編入時の身体検査をどうやってパスしたのかが不思議で仕方ない。

——上層部に内通者が居る？

その可能性は考えていた方がいいだろう。

何時までも歩みを進めない沙良に、怪訝な視線が刺さる。

——おっと、考え込んでしまったか。

誤魔化しのために、適当に口を開く。

「デュノア君」

「ん？ 何？」

「むつつり」

「な、な、なっ!？」

「急ぎなよ、織斑先生は、怒ると怖いからね」

沙良も急いで、アリーナに向かう。

今日も、大変な一日になりそうだ。

第二十話 優しき傀儡者

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

千冬は連絡事項を伝えると、真耶を引き連れすぐさま出て行ってしまう。

残された生徒たちは各班ごとにIS専用のカートを使って運ぶのだが、それは完璧な人力であり、相当な力を使う。

一夏の班は一夏が一人で運びシャルルの班は体育会系の女子が運んでいるようだった。

沙良の班はと言うと、

「じゃあ、せーので押してね」

「「「「せーの」」」」

「わあ！ 動いたあ！」

盛大に遊んでいた。

最初は一夏を見習って沙良が一人で運ぼうとしていたのだが、沙良の力じゃ一人では運べず涙目で「いちかあ」と助けを求めていたら、班員が帰ってきてくれたのだ。

年甲斐もなくはしゃいでいる沙良は、普段より接し方が柔らかい。

「もつと速く速く！」

今は沙良はカートの上に乗し、高い位置での風を感じている。簡単に言ってしまうと、カートに沙良と機体を積んでそれを押しているだけだ。

それでも、沙良はカートの上できやつきやはしゃいでいる。

沙良に、お前も押せといえるような非情な人間はこの班には居ない。

班員の顔は皆仕方ないなあという顔をしている。

それに、沙良の班になったことで恩恵を被ったのだ。他の班よりも進んだ実習に加えて、この後の整備は終わったも同然だ。

いや、終わったも同然ではない。終わっているのだ。

先ほど、早く実習が終わったために、沙良が整備を教えたため、沙良の班は午後の整備は出席だけ取ってやることがないと言う事態になっている。教員曰く、終わったなら好きにしていとの事。

そのことを思うと少しぐらいサービスしてもいいではないかというのが班員の気持ちだった。

「よし、僕も押すよー！」

沙良がカートから降りると、そのまま持ち手に回りこむ。

「うわあ軽い」

一人で運ぶのとは違い、簡単に進むカート。

ニコニコと笑顔を振りまく沙良に、班員は微笑ましい気持ちになるのだった。



沙良が昼休み、お弁当を持って整備室に行こうとすると一夏が後ろから声をかける。

「沙良、一緒に飯を食わないか？ 箒に屋上で食べようと誘われてるんだ」

沙良はそれが一夏だけへの誘いだと気づき、一夏の鈍さのため息をつく。

「はあ、一夏、君って人間は……」

「なんだよ？」

「ううん、なんでもない。僕は今日は整備室で機体の調節しようと思ってるから、一緒に出来ないなあ」

「そっか、シャルルはどうする？」

一夏はいつの間にか呼び名をデユノアからシャルルに変えたようだ。

「うーん、そうだなあ。まだ食堂も行った事ないし、食堂でもいいかなって。お弁当も持ってきてないし」

そのシャルルの言葉に沙良は否定の言葉を投げる。

「ダメだよ。確実にデュノア君目当ての女子が群がってるからご飯食べれなくなっちゃうよ?」

「あ、そっか」

「シャルルも屋上来るか?」

「でも、篠ノ乃さんの邪魔をするわけにはいかないし……」

一夏は「邪魔? 何のことだ?」と首をかしげている。

「整備室で一緒に食べる? 整備棟もまだ行ってないでしょ? 専用機持ちなら何かとお世話になるから見てたほうがいいと思うな」

「じゃあご一緒させて貰おうかな」

シャルルは、沙良の提案にすぐさま頷く。

「じゃあ、一夏また午後の授業で」

「ああ」

沙良とシャルルは整備棟へと足を向けた。



「……深水君、騙したね」

「別に、僕はシャルルと一緒にご飯食べよつて誘っただけだもん。何も騙してないよ？」
沙良も一夏に倣い、シャルルのことをデュノアと呼ばずにシャルルと呼ぶことにした。

「ふふふ、ことういうときに沙良君と仲良くしておくとお徳ね」

シャルルは整備室に着いたとたん薫子に捕まつてインタビュウを受けていた。

沙良はシャルルを薫子に任せて、自分は簪のもとへと進む。

後ろからはシャルルの恨み言が聞こえてくるが全てシカトする。

「どうっ？」

「とても順調」

そう笑う簪の顔に嘘はないだろう。

「それは重畳」

沙良は簪に打鉄式式のスペックデータを見せてもらう。

武装やある程度の基盤が出来上がった段階から、打鉄式式の製作は簪が主体となり推し進められている。

沙良はアドバイザーとして意見を出したりしてはいるが、既に整備や開発には関わっていない。

「凄い……かなり進んでる。後は実働データさえ取れば、それを元に微調整して終わりかな？」

「うん、これだけでも……戦える」

「そうだね。生半端な機体じゃ式式には勝てないと思う」

「エキビシヨン、沙良に勝つから」

「エキビシヨンには勝ち負けはないけど、その気持ちは受け止めようじゃないか」

沙良はニヒルに笑うと、簪の横に腰を下ろし、お弁当を広げる。

「そういえばフィーナは？」

「お手洗い」

「あー沙良さんだー」

噂をすればといったところか。お手洗いから帰って来たのだろう、手をハンカチで拭きながらゆつたりとした足取りでフィオナがこちらに向かってくる。そのままお弁当を持つと沙良の近くに腰を下ろした。

「かんちゃん機の機体見ました？」

「見たよ、あとは、三年間で精練していただくだけだね」

「それでですね、さつき思いついたんですけど、完成記念パーティーしません？」

「完成記念パーティー？」

簪と沙良の声が重なる。

「お世話になった人たちを呼んで、パーとやりましょうよ！」

「まあ、いいんじゃない？ 簪は？」

「いい、と思う」

「じゃあ、決定しますね。じゃあ、今日の夜七時に第二整備室に集合にしましょう」

「了解」

「わかった」

話が纏まると、二人は自分のお弁当に関心を向ける。

しかし、沙良だけは空中ディスプレイを投影し、仮想キーボードを叩く。

それを見た簪とフィオナはいつものことだと、自分のお弁当を広げる。

しばらくはキーボードを叩く音と、暢気なお喋りだけが、この空間を占めるのであった。



インタビューが終わり、解放されたシャルルは薫子を引き連れ、弁当を広げている集団に近寄る。

「あれ、沙良君作業中？」

「あ、黛先輩お疲れ様です。そちらの方は？」

フィオナは薫子の横に立つシャルルに視線を向ける。

「この子が噂の転校生よ」

「シャルル・デュノアです。よろしくお願いします」

薫子はそれだけで伝わると思っていたのだろう。

しかし、フィオナにはそれが通じなかった。

「へー、いつの間にか転校生が来てたんですね」

「……そこから？」

簪もつい、突っ込みの声を上げる。

「三人目の男子って騒いでたのに」

薫子はまさか知らないと思っていなかったので少しばかり反応に困ってしまふ。

「IS使える男子って言われても、沙良さんがずっと身近にいましたし、わたし達にとつ

たらそこまで大したニュースでもないんですよー」

なるほどとシャルル以外が頷く。

シャルルと薫子は、ひとまず腰を下ろす。

シャルルの手には、先ほど薫子から貰った惣菜パンが乗っている。

これは、シャルルのご飯がないだろうと、沙良が薫子にお願いして用意してもらった物らしい。

今では、自分のために色々と手を焼いてくれていることを知り、先ほどの怒りを納めて、沙良に感謝の念を覚えていた。

シャルルは、只管にモニターを注視している沙良を見て、薫子に疑問をぶつける。

「深水君はなにをしてるんですか？」

「沙良君の専用機の調節よ」

「見てもいいんですか？」

それは、簪とフィオナがそのモニターをたまに見ることに気づいたから出た言葉。

「見てもいいんじゃないかなー。ここで理解できるはフィオナぐらいだから」

そう言われ、シャルルはそのモニターを覗き込む。

そこ目に映ったものは、

「……スペイン語？」

そう、スペイン語だった。

ＩＳのデータには日本語が使われることがほとんどだ。

ＩＳ業界においての共通語が日本語のため、ＩＳに日本語以外を使う国はほとんどない。

それが、目の前の少年の機体には日本語を使っていない。

シャルルはどういうことかと頭を捻る。

「開発がスペインで統括されているから、スペイン語でも問題ないそうだよ。むしろ、データなどを視認で盗まれる可能性も減るし、自国のものにとっては日本語より解読が早いんだって。メリットが多いらしいよ」

シャルルは愕然とする。

幾ら読めないとはいえ、その画面を写真に収めるなりしてしまえば問題はない。

いくらなんでも、危機感が無さ過ぎるだろう。

しかし、確かに母国語での開発は理にかなっている。ラファールは、量産機として世界中で使用されているため、その言語は日本語が使われている。そのため、フランスの技術者の前には、どれだけ腕が優れていても言語の壁が立ちほだかるのだ。

その差は少しのものだとしても、その開発が長年に亘れば、大きな差となるだろう。

だから、フランスはスペインに負けたのだと、なんとなくだが納得してしまう。

物思いに耽るシャルルだったが、そこに空気をぶち壊す者がやってきた。

「あれ、一人多いわね？」

ソフィアである。

「あ、ソフィアさん」

「あら、フィーナお疲れ」

「アルファード先輩」

「簪ちゃんもお疲れ」

そういつて、沙良の後ろに腰を下ろすと、沙良を膝の上に乗せた。

「つて、ええええええ!!」

その光景にシャルルは驚きの声を上げ立ち上がる。

そのされるがままの沙良にも。

別におかしいことなどありませんよと言わんばかりのソフィアにも。

いつものこととスルーしている簪とフィーナにも。

面白そうに写真を撮り出した薫子にも。

全てに対しての驚きの声だったのだが、

「えっ!! 僕がおかしいの?」

一人だけ、騒いでいるシャルルは、皆の「どうしたの?」という視線に耐えられなく

なり、声を上げたのだが、皆がそれを普通と認識していることに気づくと、すごすごとその場に腰を下ろすのだった。

そして、沙良が作業を終わらすまで、シャルルは自己紹介をして、楽しく談笑することが出来たのであった。



「——というわけで、無事に完成に至りましたことを祝って、乾杯!!」

「「「乾杯!!!」」」

なぜか出しやばっている楯無の音頭で乾杯すると、皆が思い思いにグラスをぶつけ合う。

その中に、おどおどとした影が一つ。

シャルルだ。

まさか自分も呼ばれると思っていなかったため、未だに空気に馴染むことが出来ていない。

頼りの綱の沙良はこの完成の立役者と言うことで、いろんなところにあいさつ回りに出ている。

同じクラスである本音も、楯無と行動しているため、頼ることが出来ない。

ふう、とため息をつくとき、シャルルは服の裾を引っ張られていることに気づいた。

振り向くとそこには昼に知り合ったばかりの簪とフィオナがいた。

二人とも四組ということによく一緒にいるイメージがある。

「いっち」

「そろそろ始まりますよ」

そう言われ、手を引かれていくシャルル。連れて行かれたのは最前列。

目の前には大きなモニター。

「みんなはもう知ってるけど、シャルルさんは知らないもんね。前で見てたほうがいいよ」

その言葉に首を傾げる。

何のことかわからないが、こちらのことを思っ言ってくれているのはわかっている。素直に指示に従う。

その際、変な視線を感じたが、その視線の意味がわからず再び首を傾げると、フィオナはいつもの笑顔に戻っていた。

追求しようかとも思ったが、そこまで親しい間柄でもない。自分の気のせいだと判断し、笑顔を取り繕った。

すると、いきなり、整備室の電気が消され、用意されたステージが明るく照らされる。そこに、歩いていくのは薫子だ。

マイクの前に立つと、周りは水を打ったように静まり返る。

薫子がマイクのスイッチを入れ、喋り出す。

「ええ、みなさん、ここに集まりいただきありがとうございます。今回のパーティーのメインでもある。この打鉄式式のお披露目会をしたいと思えます!!」

薫子の言葉に会場は一気に盛り上がる。

誰もが気になっていただろうその機体は、既にステージの上に布を掛けられて鎮座している。

既に、殆どのものがその姿を見たことがあるが、それは製作途中の物。実験段階だが、完成した姿を見るのはこれが初めてというものも多い。

薫子はその布を取り払うと、スポットライトに当てられたボディが光を反射する。

その打鉄の面影を残す銀灰色の装甲に、周りは感嘆のため息を漏らす。

打鉄の重厚なイメージを覆すその精練されたボディは、美しさすら感じる。

「特徴としましては、従来の防御重視の機体とは違い、機動性に特化しているところで

す。当初では機体速度は、あのイギリス代表候補生の狙撃型と同程度と特化と言うには物足りないものでしたが、本校の優秀な整備科によって、その機体速度はイギリスの狙撃型の追従を許さないまでになりました。そして専用のユーザーインターフェースにより、その反応を向上させています」

モニターにはその実働データが出る。

「打鉄と比較すると、耐久性に難はあります」

その耐久度を示すデータと、他の機体データとの比較グラフをモニターに表示する。

「しかし、卓越する操縦技術を持つ簪ならこの耐久度で何ら問題はありませぬ」

簪が皆の視線を受け、顔を赤らめる。

「そして、これがみなさんお待ちかねの武装でございます!!」

待ってましたと言わんばかりに皆が手を叩き、その武装に期待を膨らませる。

「まずはこちら」

その言葉に簪は薙刀を構える。

そしてモニターには大きくその名前が出る。

『夢現』

その表示された情報に皆が息を呑む。

高周波と超音波により、超高速振動を可能にした特殊機構武装。

それは圧倒的な攻撃力を誇る。

それが機動性重視の機体に載せられているのだ。

その意味がわからない者などここにはいないだろう。

「モニターの通り、この武装は高周波と超音波による超高速振動を特徴に持ち、それによつて対象の分子結合を緩くし、その斬撃が通りやすいようにします。一言でいうなら、大体のものは切れる。そういうわけです」

この『夢現』の製作に関わったものは皆が胸を張っている。

そして、他の武装に関わったものたちは皆が驚愕していた。

それはこの武装に対してではない。

もちろんそれもあるが、この武装と、自らが製作に関わった武装を積む機体に驚愕していたのだ。

「そして、背に搭載されているこちら」

簪は、背中に搭載された連射型荷電粒子砲を見せる。

その名は『鳴神』。

秒間二発の速度で電荷を持った素粒子を放つ。

その一マガジンあたりの総ダメージ量は、まさに雷を想像させる。

「このリロードの遅さと言う点を二門というところでカバーしています」

シャルルは驚きに言葉を無くしていた。

なんて武装を積んでいるのだ。

周りでは皆がハイタッチしているが、シャルルはそんな場合ではない。

フランスの代表候補生として、デユノア社の手のものとして、この武装を学生たちが作り上げたという点に、言い表せぬ感情が浮かぶ。

こここの技術が高いのか、向こうの技術が低いのか。

しかし、シャルルの驚きはまだ終わらなかつた。

「実はこれだけではありません」

その薫子の言葉に皆がモニターに注目する。

「これは整備課の選抜メンバーで作った、この機体のメインとなる武装です」

そして映し出された物に多くの人が言葉を失う。

それは八連装ミサイルポッド。

『百千風』

八機×八門のミサイルポッドから最大六十四発の独立稼動型誘導ミサイルを発射される。

それだけならよかつた。

その部分を沙良が読み上げる。

「この武装は第三世代型技術マルチロックスオン・システムを使用。それによって八機×八門のミサイルポッドから最大六十四発の独立稼働型誘導ミサイルを発射することが出来る。相手のエネルギーシールドに反応して追尾を行うようになってるから熱源を逸らされようと追撃を外される事はない」

この次の言葉だ。

その言葉を皆が固唾を呑んで待つ。

「そして、ミサイルポッドの個別独立稼働にイメージ・インターフェースを搭載しています」

その沙良の言葉に会場が静まり返る。

「沙良と簪を主体に組み上げたインターフェース。武装製作において最大の山場だった場所だ。」

結局、実験段階で思ったように作動せず、意を決して、インターフェースの開発に取り組んだわけだ。

「これで、『第三世代機』打鉄式式の武装は全部です」

沙良の言葉に会場は堰を切ったように騒がしくなる。

その沙良の煽りに皆が雄たけびを上げる。

それは、重なり合って会場が揺れているかのような錯覚を覚える。

「そして、これから、この打鉄式式に一つの名を与えたいと思います」

薫子は、簪をちらりと見る。

簪がその薫子の言葉を引き継ぎ、言葉を紡ぐ。

「この子は、もう打鉄の後継機としてではない……新しい機体として生まれ変わった。だから、この子に、新しい名前を付けたいと……思います」

「でも、この機体は皆から『式式』と呼ばれてきて、それに愛着がある人も多い。私もそうです。だから、響きを残して、字を変えました」

簪はモニターを指差す。

そこには漢字で一文字。

誰かがその文字を口に出した。

「……錦」

その漢字は『錦』

その洗練された機体に相応しい。

「これが、私たちが、ここに集まる三十人もの精鋭たちで作り上げた機体『錦』です!!」
整備室が拍手で包まれる。

シャルルは無意識に唇を噛締めていた。

その抜き出た技術力だけではなく、周りに与える影響力も尋常ではない。

——これがサラ・ルイス……エスパニーヤの英雄。

沙良が自分をここに連れてきた理由を今、理解した。

警告だ。

そんなに親しくも無い、関わりもないシャルロットに、自分たちが開発した機体を惜しげもなく見せる。

それは、自分の持つ力を見せ付けるといふ行為。

まるで、データなら幾らでも取れと言わんばかりに。

思い返せば、昼もデータを盗み見できるような状況があった。

データだけなら見逃してやる。だから余計なことをするな。

言外にそう言われている様な気がし、背筋が凍る。

——危険だ。

恐らく、フィオナも警告のことを知っていたのだろう。

最後にシャルルに向けた視線。今更ながらに形容すべき言葉が見つかった。

敵意だ。

今までの人生の中で尤も多く浴びてきた視線。それは網膜に張り付いて離れない。

薫子がステージから降りると、皆は思い思いにお喋りに花を咲かせる。

その中に、既にシャルルの姿は無い。

こうして、完成記念パーティーは夜遅くまで続いたのであった。



シャルル——シャルロットは同居人が寝静まった頃に一度起き出した。

そして、胸を締め付けていたコルセットを外す。

楽になった胸から一度深い息を吐く。

男装までしてＩＳ学園に侵入したのは実家であるデュノア社に命令されたためである。

世界第三位のシェアをもつデュノア社だが、まだ第三世代機の開発が進んでいない。

欧州連合の統括防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されている。

ゆえに第三世代型の開発は急務。

しかし、第二世代型も後発なため、圧倒的にデータも時間も不足している。

それで政府からの通達で予算を大幅にカットされ、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カットされてしまう。

その上でＩＳ開発許可も剥奪されてしまう形となる。

そんな中、一つの国がその名を上げた。
スペインだ。

第二世代型最後発機シークエスト。

それを引っさげて欧州連合にぽつと出てきたのだ。

その機体を見て、どの国も驚いた。

戦闘には全く向いていない。

しかし、その判断は間違いだった。

地中海での戦争。

そこにシークエストが投入されると戦況は一変した。

今まで空中戦が主だったISに海中からの奇襲で勝利を納めたのだ。

その今まで見たことのない武装を見せ付け、艦隊と連携を組むという戦術を用いて。

スペインはシークエストの性能を高め、初期第三世代にも劣らないものを作り上げた。
た。

そして、すぐさまスペインは第三世代型の研究に着手し、そして完成させた。

このままだと、デュノア社はスペインにも抜かれ、その地位をより落としてしまう。

そんなことシャルロットにはどうだって良かった。

父親の会社なんか知ったことではない。

しかし、シャルロットは従わなければならない立場にいた。

自分が愛人の娘だったからという理由。

それだけならシャルロットは従わなかっただろう。

母親さえ人質に取られていなければ

シャルロットはペンダントを握り締める。

「……お母さん」

シャルロットが命令されたのは、特異ケースの男性操縦者に接触し、そのデータと身体の一部サンプルの入手。

メインとなるのは敵国となるスペインの開発の柱となる深水沙良への接触。スペインの機体のデータ入手。そして妨害。

つまりは、模擬戦などで事故に見せかけて研究が出来ない体にしろと言われているのだ。

隙さえあれば殺せ。

そんなことまで言われている。

沙良への身体的危害。一言で言えば暗殺だ。それがシャルロットに課せられた任務。わざわざ男装までして入学した理由がそれだ。

ただデータを盗むだけなら、男装する必要など全くない。

仲良くなつてしまえば、いくらでも接触する機会はある。

しかし、暗殺となれば話が別だ。不意の事故を装う必要があるため、日常的に近くに居ることの出来る男性の立場が必要だったのだ。

それに、任務が完了した場合、すぐにシャルルという人物が居た痕跡を消せるように。そのような意図もある。

シャルロットは同室となつた沙良のベッドに近寄る。

そこには気持ち良さそうに抱き枕を抱える沙良の姿。

シャルロットは唇をかみ締める。

そして、沙良に馬乗りになると、その細い首に手を添える。

力を入れればそれで終わる。

しかし、シャルロットはそのまま手を外す。

「出来ないよ……そんなこと出来ないよう」

シャルロットは今までにいろんな命令を受けてきた。

その中には結果的に人の命を奪ってしまうものもあつた。

体を使うものもあつた。

ずっと心を殺してきた。

沙良が悪人であつたならシャルロットは躊躇しなかつた。

むしろ、悪人であつてくれと願うほどだ。

そのまま自分のベッドに倒れこむ。

沙良とは少しの間一緒に行動してわかつた。

なんてお人よし。

恐らくは気づかれている。

自分の正体も、その目的も。

それでも何も言わずにそばに居続けてくれた。

わざわざ警告してくれてまで、シャルルがここに居ることを黙認してくれた。

それは、こちらの目的ではなく、人柄で判断した結果だろう。

この娘は大丈夫。

それは一種の信頼。

シャルロットはそれを裏切れなかつた。

しかし、ここで自分がやらないと大切な人がいなくなってしまう。

母親が死んでしまう。

「でも、でも、引き換えに深水君の命を奪うことなんか出来ない！」

シャルロットは拳をベッドに叩きつける。

今回の任務だけは出来ない。

いくらシャルロットが傀儡だとしても、心を殺してきたとしても、心を亡くした事など一度もないのだから。

自分も深水君ではなく名前で、みんなと同じように『沙良』と呼びたい。でも、そう呼んでしまうと、決意が鈍ってしまう。

心が痛みつつも母親を助け出すまでは何があっても挫けないと。

だから呼べない。

それは自分を殺す行為。

シャルロットは枕に顔を押し付ける。

こぼれる涙はそのまま布に染み込んでいく。

「……………誰か……………誰か助けてよう」

第二十一話 シャルロット・デュノア

「じゃあ、また明日な」

「ああ」

「うん、また明日」

「一夏、明日はあたしがコーチだからね」

「はいはい、わかってるよ」

シャルルは一夏たちと別れると、そのまま自室に入る。

沙良は未だ帰ってきていない。今日は機体のデータを取ると言っていたから遅くなるだろう。

ここの所、アリーナの使用許可を取り、部屋に居ないことが多い。

「……………はあつ……………」

シャルルは寮の自室に一人になったところで、深いため息をつく。

先ほどまでは一夏たちと共にいたのだが、一夏が書類を出さねばならないと言って職員室に行ったので、そこで皆が別れる形となった。

シャルルは沙良の首を絞めようとした日から、ずっと元気がなかった。

自分が皆を騙しているという自覚がある分、自分に向けられる笑顔が辛かった。

一夏の純粋なる優しさも、沙良の全てを包み込む優しさも自分には相応しくない。

(くよくよしてちやダメだ)

シャルルはそう自分に言い聞かせるが、一度巡り始めた思考は簡単には止まらない。

「シャワーでも浴びよう」

シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへと向かった。



シャルルはシャワーを浴びているとボディソープがないことに気づいた。

(どうしようか、このまま取りに行っても大丈夫だよな?)

沙良はしばらくは帰ってこないはずだ。

シャルルはそう思って、バスタオルだけを持ってシャワー室を出た。

ボディソープの替えが置いてある棚を開けて、目的のものを見つける。

その瞬間、扉がノックされる。

「沙良、いるか?」

「——っ!?!」

シャルルはその身を強張らせる。

拙い、一夏だ。

予想もしていなかった状況に慌ててしまう。

「いないのか？」

ここで、返事をして待つてもらえば良かったものを、混乱してしまっているシャルルは、ただ突っ立ったまま硬直している。

「ん、無用心だな。鍵が開いてるじゃねえか」

そして、一夏は扉を開けた。

「……」

「……やあ、一夏」

——見られたっ！

シャルルは、計画が崩れる音を聞いた。

「……。えーと……」

一夏の視線の漂いに、シャルルは自分がバスタオル一枚と言うことに気づき、すぐさまシャワー室へと逃げ込む。

誤魔化せない。

もういい、なるようになる。

——口封じするわけにはいかないよね……

流石に、命令も出ていないのに、貴重な男性操縦者に危害を加えることは出来ない。

意を決したシャルルは服を着て、脱衣所から出る。

「あ、上がったよ……」

「ああ……」

そのジャージを着込んでいるシャルルの胸は女性であることを主張する。

「……」

「……」

沈黙が場を支配しようとしたとき、一夏が声を上げる。

「……なんで男のフリなんかしていたんだ？」

「それは、その、実家からそうしろって言われて……」

「うん？ 実家っていうと、デユノア社の？」

「そう、僕の父がその社長。その人からの直接の命令なんだよ」

シャルルは母親のこと、沙良の暗殺のこと、デユノアの裏の人間であること以外を全てを喋った。

自分が愛人の子である事。

自らのIS適応の高さからテストパイロットとして酷使させられていること。

自分の意志と関係なくIS開発のための道具として扱われてきたこと。

IS学園へ転入したのも、デュノア社がIS開発の遅れによる経営危機に陥ったため、数少ない男性の操縦者として世間の注目を集めることで会社をアピールするとともに、一夏と沙良に接近して彼らとそのISのデータを盗め、という社長命令だったこと。

それは今まで抱えていたものを吐き出すかのように苦痛の表情に満ちていた。

良くて無期懲役だろうね。

そう呟いたシャルルに一夏は言った。それで良いのかと。

良いも悪いもない。自分には選ぶ権利すら与えられていないのだ。

絶望すら通り越した諦観。

母親すら救えない自分の弱さに涙がこぼれる。

「……だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項二十一、本学園における生徒はその在学中において、ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

その言葉に、シャルルは一夏の言いたいことがわかった。

「——つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろ？ それだけ時間があれば、何とかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろう」

「一夏」

「ん？ なんだ？」

「よく、覚えられたね。特記事項は五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふっ」

一夏の言い回しに少し笑ってしまった。

「ま、まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えて見てくれ」

「うん。そうするよ」

「沙良には黙っていたほうがいいか？」

その言葉に、シャルルは考え込む。

黙っているも何も、恐らくは感づかれている。

「……わかった。とりあえず様子見な。沙良が帰ってくるまでに着替えとけよ？」

それを否定と捉えたのか一夏はそう言い残し、部屋を出て行ってしまった。

そうして一人部屋に残されたシャルルはベッドに倒れこむ。

一夏の提案はとても魅力的だった。

その案に飛びついてしまいたかった。

たった三年間だが、自由の道を示されたのだから。

母親の件さえなかったら飛びついていただろう。

「君は優しすぎるよ……」

こんな自分でもここにいっても良いと言う。

こんな自分にも居場所を提案してくれる。

こんな自分を否定しないでいてくれる。

しかし、その優しさに甘えてる状況ではないのだ。

平穏な日々はもう終わった。

一夏は味方になったといえど、学園に気づかれる日もそう遠くないだろう。

上層部がアクションをかけてくる前に学園を去らなければならぬ。

ならばやるしかない。

日にちが経てば経つほど、ミッションは難しくなる。

シャルロットは、震える身体を抱きかかえる。

（深水君を……やるしかないんだっ!!）



沙良はアリーナで、オルカの実働データを取っていた。

この絶対防御がないという欠陥を直すために色々な方面からデータを取る必要があった。

スペインの機密となる情報のため、手伝いを要求できない。

ゆえに沙良は一人で作業をこなさなければいけない。

そう見せかけていた。

「ふう、こんなもので良いかな」

沙良はオルカを解除し、カイラを纏う。

それは、先ほどから沙良に向けられている殺気に対処するため。

「いつまで隠れてるの?」

沙良はその手にライフルを持ち、アリーナの柱の影へと向ける。

「いつから気づいていたの?」

そこから現れたのは、アサルトライフルを手に持ったシャルルの姿。

「殺気を放つてれば誰だつて気づくよ」

「そう」

いつもと違う様子のシャルルにやっぱりかと肩を落とす沙良だが、銃口がこちらを捉えて動かないことから、相手から気を逸らせない。

「深水君、君には恨みも何も無い。けど、君には——」

シャルルはその身体に光の粒子を纏う。

ほんの刹那の眩さの後に残ったのは、橙色の機体。

「死んでもらう」

撃った。

沙良はその銃弾を最小の動きでかわす。

「たいした挨拶だね、シャルロット・デュノア」

その呼ばれた名に、シャルル——シャルロットは身を強張らせる。

その隙を見逃すような沙良ではない。

すぐさま銃弾によって、壁を作る。

「やっぱり気づいてたんだ！」

「そりや、業界人だからね。デュノアを名乗った時点で推測できるよ」

シャルロットはすぐさま接近ブレードに持ち替え、沙良に接近戦を挑む。

これはシャルロットが得意とする、攻防ともに高いレベルが安定した戦闘方法、
砂漠ミラーシュユ・デ・デザートの逃げ水。

斬り合っていたかと思えばいきなり銃に持ち替えての近接射撃、間合いを離せば剣に変更しての接近格闘。押しても引いても一定の距離と攻撃リズムを保ち続ける。それは「求めるほどに遠く、諦めるには近く、その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ、綾やかなる褐色の死へと進む」とまで言わせる物だ。

しかし、沙良にはそんなセオリーは通用しない。

いや、このときは沙良が相手ではなかった。

狙撃。

それは目の前の沙良からではなく後方からのもの。

「——っ！ どこから!？」

しかし、ハイパーセンサーがその狙撃主の姿を捉える前に、右後方から衝撃を受けて前方へと吹き飛ばされてしまう。

「なっ!？」

すぐさま起き上がり、攻撃を受けた方向に銃を向ける。

そこには沙良と似たような機体を纏う見知らぬ生徒が一人いた。

「くっ」

「動かないで」

すぐさま行動を起こそうとしたシャルロットの首元へ薙刀が突きつけられていた。

この武装は見たことがある。

衝撃を装甲に通す『襖』と呼ばれる武装。

それを首に突きつけられていると言うことは、生殺与奪を握られていることと同意だろう。

「——っ!？」

全く以って存在に気づかなかった。

普通ならISを纏っていれば、ラファールが知らせてくれる。

それが無かったという事は、シャルロットと同じように、ISを纏うことなく潜伏してたということ。

「沙良さんを一人にするわけがないでしょう?」

その『襖』を突き立てている生徒を確認する。

「フィオナさん……」

今まで見ていた彼女とは別人のように、その表情は感情を映しては居なかった。

そして、シャルロットを狙撃したISが姿を現した。

それは青色に輝くボディに銀色のライン。輪状の非固定浮遊部位が特徴的だ。

その機体は見たことはないが、その搭乗者には見覚えがあった。何回か会話したこともある。

ソフィア・アルファード・クリエル。

代表に最も近いとまで言われるスペイン代表候補生。

シャルロットはその表情に恐怖を抱いた。

完全な無表情。

ただこちらを始末する対象しか見ていない。

シャルロットは終わったと、そう思った。

「……殺しなよ」

すぐにエネルギーを○にされて自分は始末される。そう思った。

すぐに殺すことはないであろうが、彼らならシャルロットの命程度、簡単に始末できるであろう。

——終わった……か。

しかし、それは、沙良の一言によって違う道が付けられる。

「勝負しよう、シャルロット」

「え？」

シャルロットは言われていることが理解できなかつた。

「僕が勝つたら僕は君を好きにする。君が勝つたら僕を好きにすればいい。殺すなり、モルモットにするなり好きにね」

それは沙良には何もメリットはないだろう。

ただの傀儡。デュノアの裏の人間。それがシャルロットだ。沙良にとっての利用価値があるとは到底思えない。

「セラ!!」

「リナは黙ってなさい」

「しかし……」

周りではシャルロットを吹き飛ばした少女がソフィアに注意されていた。

「フィーナ。武装を下ろして」

シャルロットはこの勝負を受けるしかない。

「後悔、しないでね」

「大丈夫だよ。君は絶対勝てない」

「やってみなくちゃ、わかんないだろ!」

シャルロットは沙良が言い終わる前に沙良に突貫する。

シャルロットはすぐさまアサルトライフル『ヴェント』を展開し、沙良に照準を向ける。

それを沙良は避けようとしなない。

「——っ!? 死にたいの!?!」

それを馬鹿にされたと感じたシャルロットは周りの注意が疎かになった。シャルロットが地面に足を付けた瞬間、その地面が爆発した。

「きゃあああ!!」

その機体は、簡単に宙へと飛ばされてしまう。

「君は、誘き出された事に気づいてるかい?」

そして、シャルロットは見た、沙良の機体はその姿を消すのを。

「どこにいったの!?!」

シャルロットは混乱していた。

今まで積み重なってきた重荷がシャルロットから冷静さを奪う。

衝撃。

それは後ろから来た。

すぐさま体制を立て直したシャルロットはその方向へと銃を向けるがその銃が目標を捕らえることはない。

肉眼ならともかく、ハイパーセンサーが、その姿を見失うとは考えにくい。

何故?

そう思う時間も許さないといわんばかりに、シャルロットの機体に衝撃が襲い掛かる。

「くっ！」

その姿を探していると、沙良の姿がシャルロットのすぐそばに現れた。その距離は手を伸ばせば届くほどに近い。

「ちえ、時間切れか」

そう言い、シャルロットのアサルトライフルを掴む。

武器を奪うつもりなら無駄だ。そうシャルロットは思った。
使用許諾されていない武装は使うことが出来ない。

しかし、沙良は全く予想外の方法でシャルロットの武装を奪った。
「使用拒否」

沙良の言葉と共に、シャルロットのISに一つのメッセージが出現する。

——ヴェント……使用不可。ロックがかかっています。

シャルロットの手から勝手に『ヴェント』が『収納』される。

「なっ!？」

シャルロットは驚きを隠せない。

「君には見せてあげるよ。これが僕の唯一の特殊能力だ」

シャルロットはすぐさま六二口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を両手に『展開』し、沙良から距離を取ろうとする。

——敵ISからロックされています。

そのメッセージにシャルロットはすぐにスラスターを逆に噴かし、沙良に接近した。ロックされているということは沙良は狙撃銃に持ち直しているということ。

それならば近距離からの射撃を浴びせてやる。

シャルロットはそう思い、接近したが、沙良のその手には何も持たれていなかった。「いらつしやい」

沙良はシャルのショットガンを掴むと先ほどと同じように言葉を発する。

「使用拒否」

先ほどと同じように『レイン・オブ・サタデイ』が『収納』される。

すぐにアサルトカノンを『展開』するが、それも同じように強制的に『収納』されてしまう。

シャルロットは、もうなにが何だかわからなくなっていた。

自らの主戦力となる武装が片っ端から使用不可になっていく。

相手がどんな能力かすらわからない。

今、自らに残されたのは近接ブレードのみ。

それでも負けられない。

「負けられない……ここで負けると、お母さんが、お母さんが死んでしまうんだああああ」

シャルロットは叫びをあげ、沙良へと斬りかかる。

それはキレも技もない。

ただの武器の叩きつけ。

大した攻撃ではない。

回避して狙撃。

向かい合って切り伏せる。

選択肢はいくらでもある。

しかし沙良は、ブレードで只管に受け止めることを選択した。

そこからは、ただの斬り合いになる。

シャルロットは叫び続ける。

ただ溢れる思いをブレードに込めて、叩きつけるだけ。

それを沙良は淡々と受け止める。

「沙良に恨みはない！ けど、沙良をやらないと、お母さんが、お母さんが!!」

シャルロットは無意識に『沙良』とそう呼んだ。

「病氣のお母さんを人質に取られて、治療費を出してやるって、やりたくない仕事をさせられて、それでも、私は助ける機会をずっと窺ってきた！」

シャルロットはブレードを袈裟切りで切り下ろすと、その流れを利用して横蹴りを繰り出す。

それを、沙良は下段で払うように受け流すと、その勢いで裏拳を放つ。

「やっとチャンスが来たんだ！ この任務が終われば、母さんを助けてくれるってあいつは言ったんだ！ だから僕は、私はやるしかないんだ！ どんな手を使っても！」

シャルロットは叫び続ける。

「暗殺って言われても、会社が私を切り捨てるつもりって分かっている！ お母さんさえ助かるなら私はどうなっても良い！」

それはまるで自分に言い聞かせるように。

そうしないと崩れてしまうと言わんばかりに。

だから沙良は聞いた。

押し付けられた感情ではなく、シャルロット自身の想いを聞くために。

「ここでの生活は、楽しくなかった？」

その問いかけに、辛そうに顔を歪める。

「僕だって、皆とずっとここに居たいよ！」

それはシャルロットの本心。

「この暖かい空間で皆と過ごしたい！ みんなと一緒に笑いあって、一緒にご飯食べて、放課後に訓練して。僕だって、『沙良』って名前で呼んで、皆と一緒に——」

「じゃあ、居ればいい」

「それが出来たら苦労しないんだ!!」

シャルロットはブレードを強く叩きつける。

「データを盗む事、それも任務。だけど暗殺が一番の任務なんだよ!! 四肢を動けなくさせるとか、殺してしまうとかそんな内容なんだよ!? そんなことしてまでここに居れるわけがない！ 居て良い訳がないじゃないか！」

シャルロットは壊れかけていた。

殺さないといけない。

殺したくない。

正反対のジレンマ。

自分の想いと、やらねばならぬ命令に板ばさみになっていた。

その心はまさに破裂寸前だったのだろう。

シャルロットはブレードを手から離すとその場に膝をついた。

「出来ない……私には沙良を傷つける事も、お母さんを見捨てることも選べないよう

……」

そのままシャルロットはISを解除してしまう。

シャルロットの精神が憔悴してしまい、ISが展開不可と判断したのだろう。

「殺してよ。お母さんを救えなかったのに、僕だけがのうのうと生きて居たくはない」

ISを解除して、シャルロットに近づく沙良。

その沙良と視線を合わせると、シャルロットは微笑んだ。

その瞳に映るは絶望の色ではない。

諦念。

絶望を受け入れた諦めの眼差し。

沙良は唇を噛む。

シャルロットにこんな顔をさせる原因に対してどうしようもない怒りを感じている

のだろうか。

シャルロットは沙良が拳銃を構えるのを見て、その目を閉じた。

これで、楽になれる。

(お母さん、こんな娘でごめんね)

銃声が鼓膜を揺さぶる。

しかし、予想していた衝撃が来ない。

シャルロットは疑問に思い、その瞳を開いた。

「なっ!?!」

目に飛び込んできたのは、自らの左腕を打ち抜いた沙良の姿だった。

「なにしてるんだよ!!」

シャルロットはすぐさま沙良に近寄り、その傷口から溢れる血液を止めようとする。

しかし、沙良はそのシャルロットの頬をぶん殴る。

「傷つけることが出来ない? 助けることが出来ない!! ふざけるなよ! ならば一言だけでも言えば良いだろ!! 僕たちに助けてって言えば良いだろ!!」

その激昂した沙良にシャルロットは頬を押しえて何も言えなくなる。

「事情はなんとなくはわかってたよ。誰かを後ろに取られてるんだと思ってた。だから僕は待ってたんだ! 助けを求めに来るのを! 研究の阻害? 手の一本や二本ぐらいくれてやるよ!! 暗殺? 出来るもんならやってみるよ! 母親を助けたいなら、何でも利用するんだろ!?! なら、僕たちを利用しろよ! 外的介入の許されないここなら、助けを求めることだって出来ただろうが!!」

「でも、それでも……」

「もつと周りを頼りなよ。僕は『スペインの英雄』だよ? 苦しんでいる人間の一人や二

人、救えないとも思ったの？」

確かに彼ならば出来るであろう。

母親の治療費を出し、その身柄を確保するだけ。ただそれだけで今回の件は解決する。

シャルロットには、今までそんな事を出来るほどのコネが存在しなかっただけのこと。

だからこそ、大切な人のため、自分を犠牲にした。

力なき者は搾取されるのだと、幼いながらに学んだ結果、誰にも頼ることの出来ない傀儡に成り下がってしまった。

「君は、僕にそっくりだ。大切なものと自分を天秤にかけることを躊躇しない」

「それが、どうしたって言——」

「だから、君に辛気臭い顔をして欲しくないんだ。まるで、自分を見てるみたいだから。ただの自己満足だよ」

それは、暗に助けてやる。

そう言っているのだろう。

シャルロットの視界がぼやける。

それはいつもと違う涙。

「やってくれるの?」

「君が望むのならね」

「僕は君に酷いことをしたんだよ?」

「これから僕を助けてくれたらいい。過去を見るより、未来を視て生きていたいじゃん」
このお人よしは贖罪の場所すら与えてくれると言っているのだ。

シャルロットは沙良の胸に顔を埋める。

もう堪えることは出来ない。

「……………くつ……………うう……………たすけて、おかあさんを、お母さんを助けてください!!」
そう泣き叫んだシャルロットを片手で強く抱きしめる。

周りではソフィアたちがISを解除して様子を窺っていた。

少なくとも危険性は無しと判断されたのだろう。

「任せて、必ず助けるから」

沙良はカイラを部分展開する。

「なに、するの?」

シャルロットの涙に濡れた瞳に、安心して、と頭を撫でると、沙良はその能力を見せる。

『『絶対的管理者』 発動』

その言葉を切つ掛けに、空中ディスプレイが物凄い速度で展開されていく。

「こ、これは」

「あらゆる物へのアクセス許可。それが僕の唯一ワンオフオペレティ仕様の特殊能力、『神の管理領域』だよ」
それは、まさしく沙良にとっての機密事項であり、今回シャルロットが入手して来いと言われたものでもある。

それを、シャルロットの目の前で使い、あろうことか簡易的な説明を行なう。

それは、完全にシャルロットを身内に引き込むということ。

そのことに気付いたシャルロットは再び涙を滲ませる。

沙良は空中ディスプレイに投影されている情報から、お目当てのものを探し当てたようだ。

それは、シャルロットの母親が入院している病院の院内ネットワーク。

「フィーナ」

いつの間にか近くまで来ていたフィーナに呼びかけると、フィーナはすぐさま携帯端末で、その情報を何処かに流す。

『こちら、フィーナです。直ぐに秘書課を動かしてもらいたいのですが』

沙良に抱かれているシャルロットの頭を撫でるソフィア。

「よく頑張ったわね。ここから先は私たちエスパニーヤに任せなさい。必ず助けて見せ

るから」

ソフィアはそのまま携帯端末を三つ出して、慌しく連絡を取り始める。

沙良は、カルテなどを確認し、その病状を確認する。その際、近くに監視の目がないかの確認も忘れない。

これならいける、そう会話を繰り返している周囲に、頭がついていかない。

見た感じ、ソフィアが、沙良の片腕のような働きを見せている。その信頼関係は、純粹に羨ましいと思えるものだった。

その間、リナは必死に沙良の手当てをしている。

弾は貫通している。医療用ナノマシンを使えば簡単に直すことが出来るだろう。

しかし、シャルロットはナノマシンを用いても薄い傷跡が残る事を知っている。

自分の身体にも同じような傷が残っているのだから。

「シャルロット」

「はひいー!」

考え事をしていた。シャルロットは沙良に急に呼ばれて声が裏返ってしまう。

沙良は優しく笑みを作る。

「シャルロットのお母さんにはスペインで最高の治療を約束するよ。だから、安心して? もう、自分を殺さなくてもいいから」

その言葉にシャルロットはまた目頭が熱くなってしまう。

「泣きたい時は泣いても良いんだよ。シャルロット。そして明日、いっぱい笑おう？」

「深水く——」

「沙良」

「——っ、ふか」

「沙良って呼んで。ね？」

「……うっ……ひっ……沙良……沙良あ!!」

シャルロットは再び泣き出してしまった。

それは溜まっていたものを流すかのように、長く、とても激しいものだった。

第二十二話 優しすぎる償い

「……く、……(ん)は」

シャルロットが瞳を開けると見知った天井が目に入った。
自室だ。

——帰って、来た……のか。

身体を動かすと、ギシギシと軋むように痛む。

よく見ると、かすり傷も多く目立つ。

「うう……ん、……すう」

横のベッドから安らかな寝息が聞こえてくる。

枕元においてある時計によると、時刻は朝方の四時を少し過ぎたところ。

あれからの記憶がないことから、昨夜は泣き疲れて眠ってしまったのだと推測できる。

シャルロットは未だ起きぬ同居人を眺める。

すると、昨夜のことを思い出してしまい、その頬を朱に染める。

『もう、自分を殺さなくてもいいから』

そんなことを言われたのは初めてだった。

母しか理解者の居ない中、シャルロットを理解してくれたのは沙良が初めてだった。それだけではない。

沙良はシャルロットのしたことを許した。

一夏の否定しない優しさとはまた違う。

全てを受け入れる優しさ。

ただ、受け入れるだけではない。

暗闇に蹲るシャルロットに手を差し伸べてくれた。

罪の意識に潰されないようにと、贖罪の道まで示してくれた。

ただ、似ているという理由だけで。

沙良はそれを自己満足だといった。自分のため、偽善だと。

それは、行なう方が決めることではない。沙良にとつては偽善でも、シャルロットにとつては人生を救ってくれた神のごとき行為なのだから。

立場、しがらみ、血縁。

そんなものに囚われず、シャルロットという一人の人間を受け止めてくれたのは沙良が初めてではないだろうか。

母が病気になるからはずっと居場所などなかった。

血の繋がりでだけの父親には氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、ただただ無為に日々を過ごしていた。

いつしか、自分が必要とされることさえ求めなくなつて、温度のない灰色の生活が繰り返されていることにもやがて慣れてしまった。

それが今は違う。

世界は色に満ち溢れている。

顔を上げれば青空が広がる。花が鼻腔をくすぐり、海風が肌を撫で、あらゆる音が耳を樂しませる。

『自分の好きなように世界を知るがいい。世界は常に昼の側と夜の側とを持っているだろう』

そう言葉を残したのはゲーテだっただろうか。

それならば、自分の人生は夜明けを迎えたのだろう。

沈まない太陽はあるが、明けない夜はない。

シャルロットはようやく、暗く重い夜を抜けたのだ。

(沙良はずるいよ)

優しく傍に居てくれると思うと、その情熱さに胸が熱くなる。

「さすがは情熱の国スペインって言ったところかな」

今もこうして安らかな寝顔を浮かべている少年が、あの熱情を吐き出したとは思えない。
い。

「こうして見ると可愛いのにね」

シャルロットは沙良の顔を見つめる。

一度、その頬を撫でる。

——この温もりを、殺そうとしてたのか。

シャルロットは、安堵している自分に気づく。

この温もりを失わなかったことを有り難く思う。

そして、母親が我が子にするように、額にキスを落とした。

「……沙良も欧州の出だからおかしくないよね？」

火照った体を抱きながら、シャルロットは脱衣所に向かう。

こんな状況で二度寝など、出来るわけがない。

(せつかく早く起きたんだから、お弁当を作ってあげよう)

シャルロットは、服を脱ぎ、シャワー室に入り、その身に暖かいお湯をかける。

(喜んでくれるよね?)

傷口がお湯に悲鳴を上げているが、それは些細なことだと受け流せる余裕ぐらいはある。

シャルロットは今まで感じなかった未来への楽しみを胸に、その火照りを沈めるのだった。



シャルロットは早朝の厨房を借り、お弁当を二人分作ると、鼻歌でも歌いたい気持ちで廊下を歩いていった。

沙良に見せるのが楽しみで仕方ない。

早くお昼にならないか。

そんな気持ちでシャルロットの足を急がせる。

「ただいま」

小さな声で帰宅を告げると、ルームメイトは未だ夢の中だった。

今は抱き枕を抱え幸せそうな顔をしている。

時刻は七時を過ぎた頃だ。

そろそろ起こしたほうがいいだろう。

一緒に朝食を食べるにはちよūdい時間だ。

シャルロットは沙良を起こそうとベッドに近づく。

「沙良、起きて。もう朝だよ。」

シャルロットは沙良の体を軽く揺らす。

すると返つてきた反応は、

「……んう……やあ……もう……ちよつと」

その猫撫で声にシャルロットはつい顔を赤らめる。

(か、可愛いー… 何この生き物ー)

沙良は見た目はれっきとした男である。

確かにどちらかと言われれば女顔だが、それでも女に間違えることはない。

その可愛さは、顔立ちの幼さゆえだろう。

背も低いため、より、その幼い感じが強調されてしまう。

(こんなことやつてる場合じゃない。起こさないと)

シャルルは沙良の肩を揺さぶる。

「ぎーらー、起きてよー」

すると沙良に一つの反応があつた。

それはこちらの手を取つたのだ。

シャルロットはそれが起きる動作だと思っただけと息をつく。

しかしそれは目覚めの行動ではなかった。

「むう」

その手は頬に持つていかれた。

「え？」

そう、頬摺りである。

（ええええええええ!?）

咄嗟に叫びを抑えたシャルロットは自分を褒めてあげたい気分になった。

反射でその手を抜こうとすると、沙良はとても悲しそうな顔をし、「あ……や」と小さ

く呟くので、シャルロットはされるがままになっていた。

（ど、どうしたらいいんだろう!?）

シャルロットの中には二人のデフォルメされた天使と悪魔が追いかけてっこしていた。

悪魔曰く、『襲っちゃえよ！ 自分を解き放つんだ！』

天使曰く、『寝てる今がチャンスだよ！ 今なら何してもばれないよ！』

（ダメだあ!! どっちも敵じゃないかあ!!）

シャルロットが悶々としていると、沙良の携帯端末が音を立てる。

その着信音は枕元で激しく存在を主張している。

その音に反応し、沙良がその瞳を開ける。

猫のように目をこすると、そのまま大きく伸びをする。

そして、シャルロットの手を離すと、ディスプレイの文字を確認し、端末を耳に当てた。

シャルロットはほっとしたような少し残念なような複雑な表情をしていたことだろう。

「んー何、こんな朝早くから……」

シャルロットは、電話の邪魔にならないように、ベッドから離れる。

寝起きのための沙良のために、飲み物でも用意してあげるのもいいだろう。

「今何時だと思ってるのさ……早朝だよ、早朝。え？ そんなこと言ったっけ？ ああ、確かにそんな時間か。流石は秘書課だね。え？ ……そんなことないよ。君たちなら余裕でしょ。うんうん、そう。うちの病院に移しておいて。国籍問題？ そんなぐらいうにかしなよ。え？ パスポート？ そんなの偽装で良いでしょ？」

沙良の会話から判断するに、無事に母親は助かったようだ。

シャルロットはその大きな瞳に滲む雫を抑えることは出来なかった。

あんなに耐えてきた日々がようやく終わるのだ。

母親に会える。

それだけでシャルロットは何も考えられなくなる。

「じゃあ、亡命手続きしといて。それで安全は保障されるでしょ？ で、治りそうなの？

その病気は？」

シャルロットは、ビクツと身構える。

デュノアの手から母親の身柄を救出しようが、その病気が治らなければ目的は達成したとは言えない。

つい息を飲んで見守ってしまう。

「……そう」

その返答では、結果は読み取れない。

「僕が好きでやったことだよ。……分かってる。そこまで甘くないさ」

沙良は通話を切ると、シャルロットに真剣な顔を向ける。

「シャルル」

「覚悟は、出来てるよ」

例え、治らない病気だとしても、ただデュノア社に人質になっているだけの人生よりかはずっとマシだろう。

今までとは違い、会えないこともないのだ。

シャルロットはごくりとつばを飲み込む。

「確かに、シャルルのお母さんは重い病だ。ただ手術するだけで治るようなものではない」

「……うん」

それは、あまり聞きたくなかった答えを連想させる。

「一年。一年治療に専念してもらおう」

一年。それは長いのか短いのか病状を知らないシャルロットには判断できない。

「その一年間に掛かる治療費は膨大な額だ。シャルル、君は何で補う？ どうしたい？」

「……どうって？」

「払う意志はあるかい？」

「当たり前だよ！」

「じゃあ、どうやって？」

「それは……」

そんな当てがあるわけもない。

傀儡として生きてきたただの小娘に、そんなお金が稼げるわけもない。

——身体を好きにしてといたら、殴られるよね。

沙良がそういうことを嫌うのは分かる。

「君が、その方法を見つけていないならば、僕たちは提案したい」

「……何を？」

どんなことを要求されるのだろう。

シャルロットは、知らずのうちに、拳を握る締める。

「うちにおいで、『シャルロット』。S Q社に。衣食住、最低限の給金は出そう。忠義を誓うのならば、僕たちはそれに応えよう」

その意味を正しく理解したシャルロットは、違う思いで拳を握った。

「……………馬鹿じゃないの」

「何泣いてんのさ」

沙良が、指で涙を拭ってくれる。

「提案って、補うって、僕の居場所を作ろうとしてるだけじゃないか……。ただ僕が優しくしてもらっているだけじゃない」

「何言ってるのさ。優秀な操縦者が永久就職してくれるんだよ？ とてもいい条件だと

思わない？」

「思わないよ。僕を雇うって、大変なんだよ？ 国籍も所属も、全てが邪魔をするんだよ

？」

「じゃあ、帰化すればいいじゃん」

「簡単に言ってるけど、デュノアが黙っているわけないよ」

裏の情報を知りすぎているシャルロットを黙って敵国に渡すとは思えない。シャルロットが表に出て一番被害をこうむるのはデュノアなのだから。

「僕たちだって黙ってないよ」

「そんなの、つり合わないよ……。僕がもらってばかりじゃない」

デュノア社を裏切り、居場所がないシャルロットの後ろ盾になる。これはそういうことだ。世間的には人の人生を奪うといっておきながら、内実シャルロットの人生を守ろうとしている。

「君の人生を預かるんだ。大きな担保じゃないかな？」

——担保って思っただけに。

「……馬鹿。何が『……分かってる。そこまで甘くないさ』だよ。甘んじやないか。馬鹿だよ。大馬鹿だ」

「身内には優しいんだよ、僕は」

「こんな僕を身内に入れてくれるの」

「何を今更。既に入ってるんだよ」

「バカ……。ばか、ばか」

「馬鹿馬鹿うるさい」

「……沙良」

「もう、何も言わないで頷いてよ」

「絶対後悔するよ？」

「最後まで人のことばっかり気にして」

「ばか」

「馬鹿でいいよ」

「お母さんは……助かる、の？」

知らずに、声が震える。

「助ける」

シャルロットは我慢できず、沙良に抱きついた。

勢いのままベッドに押し倒される形となった沙良は、不満の声を上げようとする。

しかし、声もあげずに泣くシャルロットを見て、そっと、その背中をあやすのであった。



「——てことはシャルルはスペインに帰化するのか」

一夏はシャルロットと沙良から話を聞いていた。

流石に本当のことは言えないため、シャルロットは沙良に相談したということにして、一夏に話を通す。

「うん、このままフランスに籍を置いておくのも怖いしね。IS学園とは言えど、やり方によっては介入できるわけだし、代表候補生を下ろされて、専用機を回収されたら、その時に何が起こるかわからないしね」

「そう、なのか？ 俺には良く分からないけど、沙良と相談してそう決めたらそれが正しいんだろうな」

一夏はその言葉をすんなりと信じる。

シャルロットはそれに深い信頼を感じ、それを言葉にする。

「一夏は沙良のことを信頼してるんだね」

その言葉に一夏は「何言ってるんだこいつ」みたいな顔を作る。

「俺と沙良は家族だからな。家族が信じなければ誰が信じるって話だろ？」

沙良はその言葉に嬉しそうな表情を作る。

シャルロットはIS学園に潜入する際に詳細なデータを見ているために、その言葉の深さを知っている。

両者共に両親不在。

一夏は両親に捨てられ、沙良にいたっては、目の前で両親を亡くしている。そんな二人だからこそ、家族の大切さを身に沁みて実感しているのだろう。

(羨ましいなあ)

シャルロットは目の前の二人の理想的な絆に憧れの視線を送ってしまう。

(僕も、沙良とそういう関係になれたらなあ)

シャルロットはその妄想を広げていく。

その妄想はだんだんエスカレートしていく。

シャルロットの顔がどんどん赤くなっていくのに、沙良は首を傾げる。

「シャルル? どうしたの?」

「へ? あ、ううん、なんでもないよ!」

妄想から、現実に戻されたシャルロットは慌てて取り繕う。

しかし、シャルロットの顔の紅潮は収まることを知らない。

沙良はそんなシャルロットを見て、まだ疲れが残っているのかと思い、その額に自らの手を当てた。

それも身を乗り出して。

(——っ!?! 近い、近いよ!?!)

「熱はないね？ 疲れが残ってるのかな？ 今日には休みにする？ 千冬姉にも一応伝えてはあるから休んでも問題はないと思うよ？」

シャルロットはその羞恥に言葉を発することが出来ず、ただ首を横に振ることで答えとした。

一夏はそのシャルロットのトマトのように赤くなつた顔から、納得したように頷いた。

「シャルルは沙良のことが好——」

「うおっしやああああー!!」

シャルロットは女子としては出してはいけない声を上げつつ、一夏の顔面にノートを叩きつけた。

「一夏、余計なことを言うとな命が危ないと思つてね」

胸倉を掴み、地を這うような声で一夏に脅しをかけると、一夏はコクコクと頷くのであつた。

それにしても、まさかあの一夏に気づかれるとは。

——それなら、みんなの気持ちに気づいてやりなよ。

シャルロットは呆れたとため息を付く。

「諸君、おはよう」

千冬が教室に入つてくると皆が慌てて席に戻る。

「お、おはようございます！」

いつも通り、一瞬で変わる教室の空気に、千冬は満足そうな顔をしている。

「では、山田先生、お願いします」

「はいっ」

千冬からバトンタッチされた真耶は教卓の前に立つと、衝撃の発言をする。

「なんと、今日は転校生を紹介します！」

その言葉に、教室は水を打ったように静かになる。

「え……」

「「えええええっ!?!」」

シャルロットはその光景にデジャヴを感じてしまう。

「入れ」

千冬の声と同時に、教室のドアが開く。

「……………」

クラスに入ってきた転校生を見て、ざわめきがピタリと止まる。

それはシャルロットの時のような驚きによるものではなかった。



それは、力。

軍人をイメージさせるその冷たく鋭い気配は見るものに威圧感を与える。

その瞳の温度の低さに、誰しもその視線を合わせることをしなかった。

「……………」

転校生は未だに口を開かず、腕組みした状態で教室の女子たちを下らなそうに見ている。

しかし、それもわずかなことで、今はその視線は千冬に向けられていた。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直し、素直に返事をする転校生にクラス一同がぼかんとする。

敬礼を向けられている千冬は面倒くさそうな顔を見せていた。

「……ここではそう呼ぶな。私はもう教官ではないし、……ではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

転校生は手を真横につけ、足を踵で合わせ背筋を伸ばしている。

その佇まいは軍の関係者を思わせる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイトたちは続く言葉を待つが、いつまでたつてもその口が開かれることはなかった。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

空気に耐えられなくなった真耶が声をかけるが、帰ってきたのは無慈悲ともいえる即答だけだった。

そして、ラウラは教室を一回見渡すと、一人の生徒でその視線を止めた。

「っ！ 貴様が——」

ラウラはその生徒、一夏につかつかかと歩み寄る。

そしてその腕が振り上げられ——

「たいしたぐい挨拶だな」

振り下ろされることはなかった。

一夏はその振り下ろされる途中の腕をしつかりと掴んでいた。それをラウラは忌々しく睨み付ける。

「認めない、私は貴様があの人達の家族であるなど、決して認めるものか！」

その言葉はクラス中の注目を集める。

箒でさえもぽかんと口を開けてしまっている。

そんななか、動じずに行動に移す者がいた。

「ラウラ」

沙良は一言、その名前を呼ぶ。

それだけで、ラウラはその怒気を収め、沙良に一礼し一夏の前から立ち去ってしまう。

そして空いている席に座ると腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。

一夏はそのやり取りを見て、怒りの矛先を向けられている理由に気づく。

一夏は何か納得したように頷き、そして複雑な表情をするのであった。

第二十三話 屋上にて

「……どういふことだ」

「ん？」

昼休み、一夏を中心いつものメンバーが屋上の円テールブルでお弁当を広げていた。本来、教育機関の屋上というものは安全上の問題のため、生徒の立ち入りを禁止しているところが多い。

しかし、IS学園ではそんなことはない。

美しく配置された花壇には季節の花々が咲き誇っている。

欧州を思わせるその石畳は、その花壇に合わさって、見るものの心を落ち着かせてくれる。

晴れているということもあってか、一夏たちのほかに、多くの生徒が屋上を利用していた。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

箒はチラッと視線を横に向ける。

そこにいるのはセシリアと鈴音。そして沙良にシャルロットだ。

「せっかくなんだし大勢で食ったほうが上手いだろ。前は箒と二人だったわけだしな」
「待て、それは言わないって約束——」

箒は肩を鈴音に掴まれる。

「へえ、ちよつとお話しようか、箒」

セシリアも、鈴音の後ろから、圧力を放っていた。

箒は、笑顔を作りながらも目が笑っていない二人の追求を受けることになった。

それを横目に、シャルロットは沙良に今朝作っていたお弁当を渡す。

「はい、これ沙良の分」

沙良はそれを、目を輝かせて受け取っていた。

「いいの?」

「うん。一人分も二人分もそう変わらないから」

「じゃあ、有り難く頂戴するね」

沙良はお弁当を両手で持つと、満面の笑顔を見せた。

「う、うん……」

シャルロットは俯いてしまう。

よく見ると、頬に少しの朱色を差していた。

一夏はそれを見て、和やかな表情をしている。

「一夏、どうかした？　不思議な顔してるけど」

沙良はそれを見て声をかけた。

「不思議？　それはどんな感じだい？」

一夏の口調は、娘が幼馴染の男の子と一緒に遊んでいるのを微笑ましく見ている父親のような口調になる。

「口調まで不思議だあ。なんかね、娘が幼馴染の男の子と一緒に遊んでいるのを微笑ましく見ているお父さんみたいな顔をしてたよ」

「長いな。でも……」

一夏はチラリとシャルロットに視線を送る。

その視線に気づいたシャルロットは「何？」と首をかしげている。

「あながち間違つてないかもな」

その言葉にシャルロットは顔を紅潮させてしまい、あたふたしている。

「ふーん、変な一夏」

沙良はシャルロットから受け取ったお弁当を膝の上に置く。

どうやら、シャルロットの変化には気づいていないようだ。

今のうちにと、シャルロットは沙良に顔を見られないように手で押さえている。

「はやく食べようよ。僕お腹空いてるんだけど」

沙良はそんなシャルロットよりも食欲が勝ったようだ。

その言葉に、一夏は未だに言い合いをしていた三人に声をかける。

「喋るのはいいけど、そろそろ飯にしようぜ」

一夏は沙良を指差す、そこにはお腹を空かせて、だらーとだれてしまっている沙良の姿があつた。

「そ、それもそうだな」

箒は助かつたと言わんばかりに胸を撫で下ろした。

後ろでは鈴音が抜け駆けがどうこうと言葉を重ねているが、沙良の冷たい視線を受けてすごすごと引き下がってしまう。

セシリアも納得はしていないようだが、沙良のお腹がなったことで、そのバスケットをテーブルの上に置く。

「はい、一夏。前に食べたいって言ってたでしょ？」

鈴音から酢豚を受け取った一夏は嬉しそうにそれを眺める。

「おお、酢豚だ！」

「一人分も二人分もそう変わらないしね」

鈴音は自分の分だけ買ったのだろうか、食堂で売られているご飯をテーブルに置い

た。

「自分だけ、ご飯かよ」

「酢豚が貰えただけでも感謝しなさいよ」

「コホンコホン。——一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

バスケットを開くセシリア。そこにはサンドイッチがきれいに並んでいた。

「お、おう。後で貰うよ」

一夏の返事はいささか引いていた。

その横で、鈴音がうわあ……という表情を作っている。

その理由がわからないのか、沙良とシャルロットは首を傾げていた。

沙良は整備室で別に食べることが多く、シャルロットは転校してきたばかりなため、この料理の凄まじさが分からないのだ。

はつきり言おう。

このイギリス代表候補生、セシリア・オルコット、料理が全く出来ないのだ。

見た目は物凄くきれいに作る。

しかし、その味は見た目に反比例する。

本人曰く、「本と一緒になればいいのでは？」とのことだが、本と一緒にするのはその写真

だけであつて、味は再現できてはいない。

一夏としては、味見の大切さを二時間ぐらい説きたいぐらいだ。

「はつきり言わないからずるずるいつちやうのよ。バーカ」

しかし、せっかくの手料理を無下に扱うことの出来ない一夏は簡単に「不味い」とは口に出来ないのである。

自分が料理を作ることが多かつたため、誰かが作ってくるといふことだけで、一夏としては感無量なのだ。

「そうだ。箒、今日は弁当を作つてきてくれたんだろ？ そろそろ渡して貰えると嬉しいんだが——」

「……………」

箒は無言で弁当を突き出す。

一夏は返事に困つてしまふが、それでも手作り弁当は嬉しいのか、その顔には喜の表情が浮かんでゐる。

「じゃあ、早速。……………おおー！」

弁当を開けると、鮭の塩焼きに鶏肉のから揚げ、こんにやくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和えというなんともバランスの良い献立が敷き詰められていた。

「これは凄いな！ どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで。一人分も二人分もそうたいして変わらないからな」

一夏は聞き覚えのあるフレーズが使いまわされている気がした。

「そうだとしても、嬉しいぜ。箒、ありがとう」

「ふ、ふん……」

箒は何でもないように振舞いながらも、その顔には嬉しそうな表情が浮かんでいる。

「じゃあまあ、いただきます」

一夏はとりあえず、から揚げに口をつける。

「……」

「ど、どうだ?」

箒が心配そうにその顔を覗き込む。

一夏はゆっくりと咀嚼し、じっくりと味わう。

「……飲み込むのが勿体無いぐらいに美味しい」

その評価に箒の顔が輝くように明るくなる。

「これって、結構仕込みに時間かかってないか? ええと、混ぜてるのは生姜と醤油、そ

れにおろしニンニクか」

「……よくわかるものだな」

「へえ、美味しそう」

沙良が横から顔を出してくる。

よく見ると、その弁当箱は空になっていた。

シャルロットの弁当を見るとまだ三分の二ぐらいは残っている。

食べるのが早すぎる。

「一個食べるか？」

一夏の提案に、沙良は口を開けることで答えとする。

「あーん」

「ほれ」

一夏は沙良の口から揚げを放り込んでやる。

「あ、美味しい。下味付けるのに塩コショウした後、酒に浸けたのかな？　もしかして、

衣に大根おろし混ぜたのかな？」

「ああ、正解だ。全く、どういう舌をしているのだお前らは」

「いや、でも本当に美味しいな。箸は、食べなくていいのか？　そっちのお弁当には入って

ないじゃないか」

「……………」

箸は小さく何かを咥いたので、一夏には聞き取れなかった。

「ん？」

「あ、ああ、大丈夫だ。まあ、その、なんだ。美味しかったのならば、いい」

一夏は、から揚げを一口サイズに切ると、それを箸で持ち上げる。

「な、なんだ？」

「ほら、あーん」

「い、いや、その、だな……」

箸は頬を赤く染め、しどろもどろになってしまう。

「ほら、食ってみろって」

「……………」

箸は困ったように自分の弁当と一夏の箸を交互に見ている。

その様子を一夏は首を傾げてみている。

「箸、食べないの？」

沙良が物欲しそうな顔で、一夏を見上げる。

「どうやら、お弁当の具材を催促しているようだ。」

「あ、あーん……」

「はい、あーん」

その光景に心を決めたのか、箸は差し出されている箸を啜えた。

「い、いいものだな……」

その言葉に、一夏は頷く。

「だろ？ 美味しいよな、このから揚げ」

「から揚げではないが……うむ、いいものだ」

箸は分かり易い様に機嫌を良くする。

「一夏！ はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん！ サンドイッチもどうぞ！」

鈴音とセシリアが一夏に押し寄せる。

その差し出された料理は先ほどの箸への対抗心だろうか。

「ま、待て。酢豚は自分のがあるし、サンドイッチは食べ合わせ的に最後にいただき」

「はむ」

「はむ」

それを沙良が食らった。

「おお、この酢豚美味しい」

鈴音は、面を食らったような表情を作る。

しかし、沙良がべた褒めすると、機嫌を良くしたのか、上機嫌で料理の説明を始める。

沙良はそれを聞きながら勝手に一夏の酢豚を食べていた。

一夏はチラッと横を向くと、シャルロットが沙良と自分のお弁当を交互に見つめてい

た。

大方、自分も沙良にしたいとでも思っているのだろう。

どうにかして協力してあげられないかと、一夏は考える。

一夏が余所見をしている間に、沙良は差し出されている形となるサンドイッチを受け取り、それを口に運ぶ。

「っ！……!?!」

沙良の眉が顰められた。

その声に一夏は振り向く。

そして一夏は遅かったかと、ため息をつく。

「お味はどう——」

沙良はセシリアがなにか言い終わる前に、その開いた口にサンドイッチを詰め込んだ。
だ。

「——っ!!」

セシリアは詰め込まれた苦しさと、その味に言葉を呑む。

一夏も、そのサンドイッチを食べて見る。

「おお、これは……」

甘いのだ。

BLTサンドが甘いのだ。

確実にバナラエツセンスは入っているだろう。

それに、蜂蜜も塗られている。

ベーコンも下味を付ける時点で砂糖を入れてしまっているのだろうか。

とりあえず、沙良が真顔でセシリアにサンドイッチを食べさせているのを見て、なんとなく納得してしまう。

セシリアは既に涙目だ。

「さ、沙良、ほら酢豚あげるから」

流石にセシリアが可哀想になったのか鈴音が助け舟を出す。

沙良はしぶしぶといった具合に口を開ける。

しかし、その手は未だにサンドイッチを掴んでいる。

皆が額に冷や汗をかいていた。

——こいつ、徹底的にやる気だ。

皆が一度視線を集めて、頷き合う。

鈴音はひとまず口に酢豚を放り込むと、沙良の手からサンドイッチを離す。

箸は、沙良が咀嚼して味に気を取られている隙に、セシリアを救出する。

一夏とシャルロットは沙良にお弁当に与え続け、その興味をセシリアから逸らす。

この時、セシリアは誓ったそうだと。

料理が上手くなろうと。

「箒さん……鈴さん……」

「くっ、今は喋るな」

「動いちゃダメよ」

実際はそこまで大したことでもない。

「わたくしに、料理を……教えて、くれませんか?」

「ええ、もちろんよ。次は、沙良に美味しいって言わせてみせましょう」

「ああ、私も出来る限り協力しよう」

三人が固い握手を交わすのが見えた。

一夏は、聞こえてくる会話に、ほっと胸を撫で下ろす。

これで、セシリアの料理が美味くなれば、皆が幸せになるだろう。

一夏は、セシリアたちから意識を沙良たちに向ける。

そこには口を開けて待っている沙良と、嬉し恥ずかしそうに沙良にあーんと料理を運ぶシャルロットの姿があった。

一夏は、シャルロットに右手でサムズアップをすると、シャルロットは顔の朱をより濃くしてしまうのであった。

(シャルルも大変だな。なんせ、沙良は自分に向いた恋愛感情を信じようとしなないからなあ)

自分のことを棚にあげて、一夏は一人考える。

そこで、一夏は気づいた。

見られている。

もちろん、屋上には一夏たち以外の生徒も沢山いるわけで、実際、この時、シャルロットと沙良は写真を取られていた。

「黛先輩？」

一夏はどこから沸いてきたのか、急に姿を現した薫子に恐怖を覚える。

「ふふふ、たれ込みがあつてね。中々に面白い状況じゃないの。沙良君の写真は、とある筋に高く売れるからね。ふっふっふ」

薫子は、様々な角度から写真を撮ると、すぐさま走り去ってしまう。

「なんだつたんだ？」

一夏は、ただその姿を眺めることしか出来なかつた。

第二十四話 理由

「ええとね、一夏がオルコットさんや嵐さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

一夏は、シャルロットと軽く手合わせをしてもらった後に、戦闘に関するレクチャーを受けていた。

場所は第三アリーナ。

土曜日は午後が完全に自由時間となり、アリーナも全開放されるため、多くの生徒が利用している。

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さつき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「ううっ……確かに」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予想で攻撃出来ちゃうからね」

「直線的か……うーん」

一夏は考え込むように、あごに手を当てる。

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に付加がかかると、最悪の場合骨折をしたりするからね」

「……なるほど」

一夏はシャルロットの分かりやすい説明に感嘆のため息をつく。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

一夏の後ろでは、自称コーチがぶつくさと文句を言っていた。

箒は、擬音で説明し、鈴音は全てを感覚で済ます。

セシリアの説明だけは沙良が居れば何とか理解できるレベルだ。

その頼りの綱の沙良は整備室に籠っている。

何でも、シャルロットに渡す機体のプログラミングをするのだとか言っていた。

スペインに亡命するシャルロットは、確実に代表候補生から降ろされ、専用機を回収されてしまうだろう。

そのシャルロットに、スペインで代表候補生の試験を受けさせるらしい。

沙良の中では、既にシャルロットは受かったも同然とのことで、先走って機体の制作に掛かっているようだ。

もっとも、機体の制作といっても、既存の機体をシャルロット用に調節するだけなのだが。

本人は「シャルルには内緒ね」と楽しそうにしていた。

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね」

「ああ。沙良に何回か見てもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だとさ」

「そっか、なら今回は僕のを貸してあげるから射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

一夏は先ほどまでシャルロットが使っていたアサルトライフルを受け取る。

「ああ、借りるぜ」

「うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「おう」

初めて持つ銃器は、妙な重さを感じさせる。

それは精神的なものなのだろう。

人の命を奪うための兵器。

その考えが、一夏に重さを感じさせるのだろうか。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが自動で相殺してくれるから心配しなくてもいいよ」

「じゃあ、行くぞ」

一夏は一度深呼吸をしてから引き金に指をかける。

そして指先に力を入れる。

それだけで、その銃口からは人の命を簡単に奪う鉄の塊が放出される。

その火薬の炸裂音は一夏の鼓膜に響いた。

「どっ？」

「あ、ああ。なんていうか、速い。弾丸の速度も、ワンアクションで放たれる動作の速さも」

「そう、速いんだよ。一夏の瞬時加速も早い。でも、その質量を考えたら、銃弾のほうが断然早いんだ。それは、軌道予測さえ合っていれば、簡単に命中させることが出来るし、外れても牽制にはなる」

「それが、機体となるとどこかしらでブレーキがかかり、動きも読まれてしまうと……だから簡単に間合いが開くし、続けて攻撃を受ける」

「そういうことだね」

一夏は、理解をしたと、深く頷く。

そして、感覚を忘れないようにと、再び、銃口を的に向ける。

これを相手から向けられているときにどういふ風に動くか。

それをイメージしながら、引き金を絞っていく。

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソつ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

急にアリーナがざわつき始める。

一夏はちよつと一マガジン分を撃ち終わつたところで注目の的に視線を移した。

「……………」

そこには、転校初日に問題を起こしたドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒが

腕を組み立っていた。

「おい」

オープンチャンネル
開放回線で声が飛んでくる。

「……………なんだよ」

無視するわけにもいかず、一夏は言葉を返す。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば、話が早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

一夏は苦い顔を作る。

ドイツ、千冬、軍人、そう考えると考えると、考えられることは一つしかない。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

千冬はその強さに惚れこんでいるのだろう。

ゆえに、その経歴に傷を付けた一夏が憎いのだろう。

そして、あの事件に関わっている事柄なら、もう一つ理由があるだろう。

「そして、貴様の弱さのせいで、あの人までもが傷をおった。だから、私は貴様を——貴様の存在を許さない」

一夏と鈴音以外があの人という発言に首を傾げる。

一夏は、無意識に唇をかみ締める。

それは、一夏が訓練を再開した理由でもある。

弱かった。

そのせいで大切な人が傷を負ってしまった。

大切な人に跡を残した。

それは罪。

一夏は、未だにあの日の無力さを許せていないのだから。

その一夏を近くで見えてきた鈴音だけが、その一夏の拳がきつく握られていることに気づいた。

「一夏……」

「大丈夫だ、鈴」

一夏はラウラに視線を合わせる。

「相手はしてやる。だが、また今度な」

「残念だが、あの人のいない今しかチャンスはないのでな——戦わざるを得ないようにしてやる」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のISを戦闘状態へとシフトさせる。

刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

その銃弾は戦闘態勢を取っていない一夏に真っ直ぐに飛んでいく。

当たる。

「……こんな密集地帯でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

そう思われた銃弾は、シャルロットのシールドによって防がれる。

「貴様……」

シャルロットの右腕には六一口径アサルトライフルが展開させている。

「フランスの第二世代型アンテイク」ときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルキよりは動けるだろうからね」
互いに涼しい顔をした睨み合いが続いている。

しかし、ラウラはその均衡を破ろうとする。

シャルロットが身構えるのが分かる。

ラウラは引き金に添えた指に力を込めようとする。

「何してるのかな、ラウラ？」

しかし、その銃弾は放たれることはなかった。

その声に、一夏はアリーナの入り口に視線を向ける。

その人物を見て、ラウラが、引き金から指を離す。

「……Dr—Ing. Ruiz」

「昔みたいに沙良って呼んでよ」

「いえ、私にそのような資格など……」

そこには制服の上から白衣を着ている沙良が立っていた。

沙良はアリーナの中央まで歩くと、その射線に入る。

その身はI Sを纏っていないため、銃を向けられるとその命を落としかねない。

「沙良!？」

シャルロットは沙良に抗議しようとするが、一夏はその肩を掴み、止める。

シャルロットは疑念の表情を作るが、一夏はただ首を横に振る。

沙良に任せよう。

そう言いたいのだ。

「もう、一組の専用機持ちが騒ぎ起こしてるって言うから来たけど、何してんのさ。僕

だって暇じゃないんだから」

沙良は肩をすくめて見せる。

「しかし、私は——」

「ラウラ」

「……今日は引きます」

ラウラはあっさりりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。

その姿を最後まで見届けると、沙良がこちらに近寄ってくる。

「一夏、大丈夫?」

「あ、ああ。助かったよ」

「なんだったんだらうね」

シャルロットもいつもの人懐っこい顔で一夏の顔を覗き込んでいた。
「大丈夫ですか？」

「無事か、一夏？」

セシリアと箒は心配そうにこちらに駆け寄ってくる。

一夏の事情を知っている鈴音は複雑な表情をしている。

「なんでポーデヴィツヒさんは一夏に攻撃してきたの？」

シャルロットはそう尋ねる。

一夏はチラリと沙良を見る。

それは複雑な表情をしていたのだろう。

沙良は安心して、と前を置きする。

「僕は構わないよ」

沙良はそう言って、アリーナを出て行ってしまふ。

恐らくは整備室に戻ったのだろう。

「一夏……」

鈴音が一夏の傍までやってくる。

鈴音が、事情を知っているものが居る。

そのことで、一夏は、語る重荷が減った気がした。

「いいこでは話せない。部屋に戻ってから話すよ」



一夏は、自分のベッドに腰掛ける。

部屋には各自、思い思い腰を下ろす。その中で鈴音だけが一夏のところに座った。

鈴音も語る側。そういうことだろう。

一夏は呼吸を整えると、少し間を空けてポツリと語りだす。

「第二回 I S 世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦のことはみんな知っているな？」
皆が頷く。

千冬にとって二連覇がかかった大事な試合。しかし、それを千冬は棄権したのだ。

「千冬姉が、決勝戦を棄権した。その原因を作ったのは俺なんだ」

「でも、それは——」

「鈴」

「……いめん」

鈴音は唇をかみ締めている。

皆は、一夏の言葉に驚きを隠せなかった。

「あの日、俺と沙良、そして鈴で決勝戦を見ようと、その会場まで行つてたんだ。千冬姉の、控え室まで行つて、三人で応援の言葉を伝えて、そして会場に向かう途中——」

鈴音が顔を伏せる。

「——俺たちは誘拐されたんだ」



ふと目を覚ますと、身体が利かないことに気づく。

よく見てみると四肢を拘束され、猿轡を啞えさせられている。

身体を自由を一切奪われていた。

視線を彷徨わせると、そこには大切な家族と幼馴染の姿が。

無事なことに少し安堵を覚えるが、そもそも危険な状態に代わりはない。

千冬の控え室に足を運んだ記憶はある。その後、会場に向かおうとしてからの記憶がない。

——どういう、ことだ……？

耳に届くは、聞き覚えのない言語。

必死に、呻いてその抵抗の意志を示す。それが気に食わないのか、一夏は蹴り飛ばされてしまう。

「……………」

満足に悲鳴を上げることの出来ないまま、無様に地面をのた打ち回る。

「おい、静かにしろよ」

ようやく聞こえてくる、自分の母国語。

「お前、自分の立場分ってるのか？」

腹部に衝撃を感じ、身体が跳ねる。

「お前は人質なんだよ、人質。分るか？」

「おい、止めろ。あまりターゲットに危害を加えるなどいわれているだろう」

「じゃあ、こつちの二人はいいのか？」

男の視線が沙良と鈴音に向く。

鈴音は明らかに怯えの表情を見せているが、沙良は強く睨みつけていた。

「誰だかしらねえが、余分なものを連れてきよって」

「女も混じってるじゃねえか」

「止めなさいよ。私の前で性質の悪いことしないでくれる？」

「へいへい。……おい、こいつ見てみるよ」

下種な笑い方をする男が、沙良の顔を掴む。

「……本物か？」

「間違いない。ターゲット姉弟と親交があったのは周知の事実のはずじゃねえのか？」

「……これはとんだ大物ね。まさかウイザードが釣れるなんて」

ウイザード。

その単語には聞き覚えがある。

特級整備士の資格を持つものをそう呼ぶはずだ。

先日、沙良がその試験に通ったとメールで報告してきたのを思い出す。

「おい、そいつの猿轡を外せ」

「へいへい」

沙良の、猿轡が外される。

「……何が要求だ」

「話が速いじゃねえか。そうだな……スペインが開発してるISでも貰おうかな？」

「そりゃあ、いいやー!」

男達は下品な笑い声を上げる。

「あら、不満かしら? 彼たちがどうなってもいいの?」

女の視線が一夏を捉える。

「……Du alte Drecksau (このおいぼれた薄汚ないメスブタが)」

女は右腕をゆっくり振り上げ、一気に殴りつける。

沙良は受身を取ることも出来ずに地面に叩き付けられる。

「……こいつ、殺してもいいかしら?」

その足は、沙良を何度も踏みつける。

その沙良の苦悶の表情に、耐えられなくなった一夏は、四肢が拘束されている状態で、女の足に身体をぶつけた。

「……目障りな屑が増えてしまったわね」

「おい、止めろ」

「何よ、男の癖に指図する気?」

「スコールの指示を無視するつもりか?」

「……OK、頭を冷やすわ」

一夏を力の限り蹴り飛ばした女は、沙良の胸部を力いっぱい踏みつけた。

「——つか、……」

「これで、勘弁してあげるわ」

「お楽しみのところすまねえな」

いつの間にか、男が一人増えていた。

出入り口が巧妙に隠されているため、どこから来るのかが分らない。しかし、男が入ってきたということは、出て行く姿を確認すればいい。逃げ道を必死に探していた一夏にとって、それは希望の欠片だった。

「あら、何のよう?」

「作戦は終了だ。織斑千冬が此方に向かっていているらしい」

「よく嗅ぎつけたわね」

「ドイツ軍が恩を売ったらしい」

「なるほどね。で、後片付けは?」

沙良がビクリと反応する。

意味がわからない一夏はただ戸惑うばかりだ。

だが、ただぼさつとしているわけにもいかない。沙良が一夏に向けて袖口から何か滑らせたのだ。

それはナイフ。

一夏はそれを覆いかぶさるように隠すと、身体を捻りロープを切る。まだ気づかれていない。

足を拘束していたロープをナイフで切る。

「ああ、好きにしろ。もう生かす意味も無いだろ」

「ああああああ!!」

沙良が跳んだ。

何時の間に拘束を抜けたのだろうか、光の粒子を右手に纏った沙良は、手短に居た男をぶん殴る。

どういうからくりか、非力な沙良の一撃は男の意識を刈り取った。

チラリと、一夏と鈴音の姿を確認すると、その光の粒子は消えてなくなってしまう。

一夏は沙良が飛んだ瞬間に駆け出していた。

鈴音の拘束をナイフで切る。

「無事か、鈴?」

「……いちかあ」

涙目で一夏に縋り付く鈴音に、ホッと一息つく。

後は、沙良と逃げ出すだけだ。

「沙良!」

「逃げて!!」

振り向いた先には銃口を此方に向けた新手の姿。ふわりとしたロングヘアーの美人の女性。

その表情は、凶悪な笑みを浮かべていた。

身体が凍りつく。

初めて向けられた殺意と言うものに、足が動かない。

——ああ、死ぬのか。

それでも、鈴音は守る。

そう思い、鈴音を強く抱きしめる。

耳を劈く銃声に、悲鳴を上げることができない。

しかし、構えていた衝撃が襲うことはなかった。

——……あれ?

一夏は、鈴音を背に振り向く。

そこには一夏を庇うように射線に割り込んだ沙良の姿があった。

「……沙良?」

身体で銃弾を受け止めた沙良は、何事もなかったかのように、懐から拳銃を取り出す。

「いいのか? そんな物向けてよ。ええ? リトルラビット?」

口汚い言葉を吐く、新手の女。

「……………企業か」

「はっ、久しぶりって言った方がいいか？」

「……………殺すよ」

面識があるのか、沙良はこれまでに見たことのないような殺気を放っていた。

「こつちばかり気にしていいのかわ？」

沙良が、ハツと倒したはずの男を見る。

しかし、そこには気絶している男の姿は無かった。

一夏は沙良に銃口を向ける男の存在に気づく。

一夏は考える前に動いた。

「うわああああ!!」

ナイフを男に投げたのだ。

そのナイフは男の気を逸らすことに成功する。

しかし、その結果、男の標的が一夏に移った。

「このガキっ！」

一夏は、抵抗と言う抵抗も出来ず、ただ何もできぬまま殴られる。

「やめてっ！ 離して！」

いつの間にか鈴音も捕まっている。

「鈴を離せ！」

一夏は殴られた反動を利用し、男から距離を取ると、鈴音を後ろから羽交い絞めにしている男を殴りつけた。

「つつ……こいつ、死にてえらしいな」

男が銃口を一夏に向ける。

鈴音は、頭をぶつけたのか額から血を流し、気を失っている。

——ごめん。沙良、鈴、千冬姉……ごめん。

銃声。

同時に肩を貫く衝撃。

「いちかあ!!!」

沙良の叫び声が耳に残る。

薄れ行く意識の中、沙良の身体が蒼く染まった気がした。



「俺が爆音で目を覚ましたときは全てが終わっていた」

今でも思い出せる。

壁を貫いて助けに来た千冬の姿を。

一夏と鈴音の前に立ちほだかるように両手を広げて立つ沙良の姿を。

助けに来た千冬に、ボロボロの体にもかかわらず弾も残っていない拳銃を向けた沙良の真つ赤な身体を。

千冬を認識することすら出来なかった沙良を。

千冬が涙を流しながら、すまないと言った沙良に抱きつくとき、そこでようやく沙良は安心して、たよりに意識を落とした。

「あたしが目を覚ましたら、もう病室でベッドの上だったわ。だから、その後は何も語れない」

代わりに、一夏は淡々と言葉を吐き出す。

「その後は大変だった。生死を境を漂う沙良に謝りながら抱きつくソフィアさんに、自分を責め続ける千冬姉。周りには誘拐犯の痕跡がなかったことから、完全に逃げられたらしい。ソフィアさんも、千冬姉も、誘拐犯のISと交戦して取り逃がしたって言って

た」

一夏は辛そうな顔を見せる。

「俺と鈴も怪我人ということでは運ばれたんだが、沙良とは面会拒絶で会うことは出来なかった」

誰も言葉を発することが出来ない。

そんな空気ではない。

「あの日、面会拒絶の沙良の病室の前で、自分を責めていた軍服の女の子を見たわ。沙良が話してくれた事がある。ドイツで女の子に懐かれたつて。間違いない、それがあいつよ」

「鈴……」

「あいつは千冬姉に指導を受けているんだと思う。だからこそ、その強さに陶醉して、その経歴に傷を付けた俺が憎いんだろう。そして、沙良を傷つけた俺が許せないんだ」

鈴音が一夏の手を握る。

その合わさった拳は、一体どちらの震えなのだろうか。

「沙良、その時から、背が伸びてないんだ。あいつの成長を俺は奪ってしまったんだ。あいつは気にしてないって笑うんだ。でも、沙良はいつでも笑うんだ。それが辛いときでも」

一夏は上を見上げる。

「俺はその日から強くなろうと思って鍛錬を再開した。剣を振り、身体を鍛えた。沙良と家族である為に。だから I S に乗れるって知ったとき凄い嬉しかった。守れる力が手に入ったと思っただんだ」

それは人を傷つける兵器。

それでも構わなかった。一夏は力を求めたのだ。

「あいつが殺意を向けている理由はわかった。しかし、そんなもの、お前に何の罪もないではないか!! 悪いのは誘拐した連中であって、お前らは何も悪くない!!」

「箒さんの言うとおりですわ。第一、なんの訓練も積んでいない中学生が銃を向けられて咄嗟に行動できるほうがおかしいですわ」

「そうだよ、一夏に何か思うことがあったにしても、このことがボーデヴィツヒさんに銃口を向けられる理由にはならないよ」

「お前ら……」

「そうだよ。僕は気にしてないってずっと言ってるのに」

一夏は、その声のする方向に視線を向ける。

そこにはドアにもたれるように沙良が立っていた。

「もう、一夏はこの話のときだけ深く考え込むんだから。僕は一夏と鈴を助けたことを

後悔してないよ」

「……」

「まだ不満そうだなあ。よし、ならさ、こうしよ。ラウラを助けてあげて。あの子も同じ罪の意識に囚われてるから。それで贖罪ね」

「沙良……」

「僕はいつまでも過去に囚われるより、未来を見るほうが好きなんだ」

それはシャルロットにも言った言葉。

「笑おう？ 一夏。『笑え、』」

「それが幸福の旗印だ」。エルベルトさんの教え、だな」

「勝つて。そして笑おう」

沙良はそれだけ言うと、一夏の部屋から出て行ってしまふ。

「……はは」

なんて優しいんだ。

その優しさに、一夏は瞳が揺らぐのを感じた。

罪悪感。

それは一夏にずっと纏わりついていた。

それに罰を与えてくれる。それも、誰かを救う形で

「勝つ。絶対に勝つ」

一夏は、その決心を新たにする。

「よし、こうなったら明日から猛特訓だ！ 皆、手伝ってもらってもいいか？」

「ああ、もちろんだ」

「そんなこと当たり前ですわ」

「僕でよかつたら協力するよ」

「もちろんよ。巻き込まれただけなんか言わせないわ。あたしにも背負わせなさい」

一夏の瞳にはもう暗い感情はなくなっていた。

その頬に流れている、雫に、皆は何も言わない。

一夏は、いつもの明るさを取り戻したのであった。

第二十五話 乱闘の劈頭

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜日の朝。

教室に向かっていた沙良と一夏は廊下にまで聞こえる声に目をしばたせた。

「なんだ?」

「さあ?」

一夏は首を傾げて、沙良と視線を合わせる。

沙良も不思議そうな顔をしている。

そこでシャルロットの声が、教室から聞こえてきた。

「僕も良く分からないけど、この噂で学園中持ちきりみたいだね。月末の学年別トーナメントで優勝したら沙良が一夏と交際でき——」

「あれ、今、名前呼ばれた?」

「俺がどうしたって?」

「「きゃああっ!」」

クラスに入り、普通に声をかけただけなのだが、返ってきたのは取り乱した悲鳴だっ

た。

わたわたと慌てて取り乱す女子の群れ。

「で、何の話だったんだ？ 俺の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？ そうだっけ？」

最近一組に入り浸ることの多い鈴音は、微笑を浮かべながら話を逸らそうとする。

「あ、わかった！ 今、学園に流れてる噂だね」

沙良がそう言うのと、教室の空気が変わる。

それはまるで狩人のよう。

「沙良さん、あの噂は本当なんですの？」

セシリアが恐る恐る沙良に質問を投げかける。

その目は好奇心と期待に満ち溢れている。

「アレでしょ？ 女子は優勝したら御褒美が貰えるんですよ？ その内容までは教えて

くれなかったけど、とても良い物で、とても興奮して、とても涎が出そうになって、と

ても鼻血が出そうになるって二年の人に聞いたよ？」

その発言で、クラスメイトはしっかりと把握した。

この子は、誤魔化されたんだと。

クラスメイトは「食べ物かなあ？」とその商品に心を躍らせている沙良に、「商品は君

だよ」なんて言えないのであった。

「そうなのか、俺たちには何かご褒美は出ないのかな？」

一夏も、沙良の言う噂に納得したようだ。

「ね、女子だけせこいよね」

沙良と一夏は、何が欲しいか考える。

沙良は先ほどから食べ物の名前しか挙げていない。

その姿を見て、クラスメイトは思う。

優勝候補はこの専用機持ちの中でも、やはり、沙良だろう。

セオリー無視の戦い方は、初見の相手には対処できない。

それは、多種多様な武装を用いて、どのような機体にも相性を合わせるといふ離れ業。

専用機持ちの模擬戦闘でも、常に勝率一位をキープしている。

誰かが、声を上げる。

「でも、優勝候補は深水くんかなあ、やっぱり。そうなると御褒美が……」

その言葉が耳に届いたのだろう。

沙良が、その言葉に反応する。

「でも、出ないかも」

「——えっ!？」

「僕はエキシビションに出る関係上、まだ本戦に出れるか分ないんだ」

その、沙良の言葉に、皆は瞳に闘志を燃やす。

チャンスはある。

皆が顔を合わせ、頷き合う。

「よし、じゃあ、あたし自分のクラスに戻るから！」

鈴音が、そのやる気に満ち溢れた声をだす。

それを切っ掛けにか、何人が集まっていた女子たちも同じように自分のクラス・席へと戻っていった。

「沙良」

「ん？ どうしたのシャルル？」

「えっと、その……」

シャルロットは言いにくそうに言葉を濁す。

「？」

沙良はただ首をかしげている。

「ぼ、僕が優勝したら、沙良から何かご褒美が欲しいなあ……」

その言葉に沙良は簡単に頷く。

シャルロットは男子の姿をしているが、実際は女子。

シャルロットも御褒美が欲しいのだろう。

沙良はそう判断する。

「そっか、シャルルも欲しいよね。じゃあ優勝したら一緒に買い物いこうよ」
シャルロットは顔を輝かせる。

「ホント？」

「……嫌だった？」

シャルルの返事を勘違いしたのか、沙良が悲しそうな表情を作った。

「ち、違うよ!? 嬉しかったから信じられなくて……」

沙良は顔を綻ばせる。

その笑顔を向けられたシャルロットは顔を赤くする。

「良かった。じゃあ約束ね」

「うん！」

その様子を見ていた一夏は、シャルロットに良く頑張ったと言いたくなる。

そして、周りの連中が、変な目で沙良たちのことを見ていることを教えてあげたかった。

「やっぱりそういう関係なのね……今年はこれで行くしかないわ!」

「シャルル君は尽くし受けね。ふふふ——おっと、鼻から」

「ああ、指切りしてる、肌が触れ合ってるよ!!」

「デュノア君、顔真っ赤だよ!」

「これは、本当に脈ありか!」

「ああ、お母さん、私を生んでくれてありがとう!」

一夏はシャルロットが女子と知っているため、この光景は微笑ましいだけなのだが、周りの女子から見たら男同士が仲良くしているように見えるのだろう。

一夏は、そつとため息をつくのだった。



一夏は全力で走っていた。

トイレが三箇所しかないため、走らなければ授業に間に合わないのだ。

のんびりしている時間はない。次の授業はI Sの格闘技能に関する基礎知識と応用なのだ。

一夏にとっては死活問題となりうる授業だろう。

「この距離だけではどうにもならないな……」

一夏がぼそつと呟いたときだった。

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ」

声が聞こえた。

それは曲がり角の先から聞こえてきた。

その声に一夏は足を止めてしまう。

それは聞き覚えのある声。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

千冬とラウラだ。

ラウラは、不満や思いの丈を千冬にぶつけていた。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生か

されません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など、教官が教えるに足る人間など少数ではありませんか」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている。ISは兵器

です。それを理解できないような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど——」

「——そこまでしておけよ、小娘」

「っ……………」

ラウラは凄みのある千冬の声に言葉を途切れさせてしまう。

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「……………教官は何にこだわっているのですか？」

その声は震えている。

恐怖。

圧倒的な力の前に感じる恐怖と、かけがえのない相手に嫌われるという恐怖。

「教官の目的は教育よりも、この場所の維持なのですか？」

「……………」

しかし、その恐怖を感じても言わねばならぬことがラウラにはあった。

大切なのは、生徒なのか、それとも一部の者だけなのか。そのような質問に千冬は答

えなかった。

それが、答えだ。

「……………授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「教官っ！」

「二度も言わせるなよ?」

千冬は声色を元に戻す。

もう話す事はない。

暗にそう言っているのだ。

ラウラは、千冬に背を向けると、黙したまま早足で去っていった。

「まったく、沙良に出会ってからあいつも頭が回るようになった。本当に扱いづらくなつたものだ」

千冬は呟く。

それは本心だろう。

沙良は周りの人間によくも悪くも影響を与える。

「その男子。盗み聞きか? 異常性癖は感心しないぞ?」

「な、なんでそうなるんだよ! 千冬ね——」

「織斑先生だ」

「は、はい」

一夏が千冬の名を呼ぼうとすると、その頭に出席簿が振るわれる。

いつもながらの衝撃に、感嘆すら覚える。

「そら、走れ劣等性。このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さ

を忘れるな」

「わかってるって……」

「そうか。ならいい」

ニヤリと笑みを見せる千冬は今だけは姉として言ってくれているようだ。

「じゃあ、教室に戻ります」

「おう。急げよ。——ああ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな。……とは言わん。バレない様に走れ」

「了解」

どうやら見逃してくれるようだ。

一夏は教室までの道のりをバレないように全力で走り抜けたのだった。



「あ」

二人そろって間の抜けた声を出してしまう。

鈴音とセシリアだ

時間は放課後。場所は第三アリーナ。

お互いに既にI Sを纏っている。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

誰も居ないアリーナ。それもそうだろう。HRが終了して真っ先にここに来たのだ。

専用機持ちは、機体の使用申請が要らない。そうとはいえ、この早い時間から訓練と

は、流石は代表候補生といったところか。

その意識の差が、彼女たちを代表候補生たり得るものになっているのだ。

鈴音とセシリアは顔を見合わせると、そのまま隣り合って歩いていく。

そして、アリーナ中央にたどり着くと、少しの距離を置いて向かい合った。

「ちように良い機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはつきりさせと

くつても悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場

ではつきりとさせましょうではありませんか」

鈴音としては、射撃特化なセシリアと訓練して、銃撃戦に慣れておくに越したことは

ない。

射撃主体の高機動型。その相手の懐に潜り込むことが、今後必要なはずだから。

セシリアは『スターライトmkⅡ』を、鈴音は『双天牙月』を構える。

「では——」

「面白そうなことをやっているな」

いきなり声を被せるように言葉がかけられる。

二人はそろって、そちらに視線を向ける。

そこには、あの漆黒の機体がたたずんでいた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。

その表情の険しさは先日聞いた話が頭に残っているからか。

「何か用かしら?」

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブル―ティアーズ』か。……ふん、データで見たとときの方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的の物言いに鈴音とセシリアの両方が口元を引きつらせる。

一夏の話聞いてから、二人はラウラにいい印象を持っていなかった。

「何? やるの? わざわざ ドイツくんだからやってきてボコられたいなんて対し

たマゾっぶりね」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまり苛めるのは可哀想ですわよ？」

「ああ、良かった。あたしの頭が悪いから言ってることがわかんないのかと思つたわ。ほら、早く帰ってジャガイモ農場で温いビールでも飲んでなさい」

ラウラの全てを見下すかの目つきに並々ならぬ不快感を得た二人は、その怒りの捌け口を言葉に求めた。

しかし、それはラウラの口元を綻ばせるだけに終わった。

「それは、私に喧嘩を売ったわけだな？」

そう言つてとある機械を取り出す。

ボイスレコーダー。

「私から喧嘩を売ると、あの人が怒つてしまうのでな。これで、私は、堂々と貴様らの喧嘩を買うことが出来る」

「はっ、アンタのようなやつが軍人やれるなんて、ドイツも随分廃れたものね」
ラウラはボイスレコーダーをしまうと、二人を見下し気味に言い放つ。

「状況も把握できず、後先考えぬ発言。実力も伴つていようには見えん。貴様ら本当に代表候補生か？ よほど人材不足と見える。数と真似することしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

鈴音は、頭で何かがキレルような音を聞いた。

二人は、装備の安全装置を外す。

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。この喧嘩、高値で買い取りなさい。その値段に応じて楽しませてあげるわ」

既に戦闘態勢に入る鈴音。

「ちよつと、鈴さん。私を忘れないでくださる？」

「はっ！ 二人がかりで来たらどうだ？ 一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

それは明らかな挑発。

しかし、すでに堪忍袋の尾が切れている鈴音にはもはやどうだつていい。

「——今、何て言った？ あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞かされたけど？」

一夏を馬鹿にされた鈴音はその怒りのゲージを振り切らせる。

ただでさえ、ラウラには事件関係者として思うところがあるのだ。怒りを堪えることは難しい。

「この場に居ない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようここで叩いておきましょう」

「言葉もきちんと扱えないようなやつと、自分のことは棚に上げるようなやつが何を言っているのだ。私を笑わせたいのか？ それなら笑ってやるぞ？ 貴様らの頭に足を乗せてな」

得物を握り締める手にきつく力を込めるふたり。それを冷やかな視線で流すと、ラウラはわずかに両手を広げて自分側に向けて振る。

「とつとと来い」

「上等！」

第二十六話 私闘の結尾

鈴音はすぐさま距離を詰める。

その振りかぶられた青竜刀はフェイントを挟み、その漆黒の脚部を切りつける。

それは右足を引かれ避けられてしまうが、鈴音は青竜刀を振りぬいた勢いを利用し、回転により連撃を放つ。

それは円の動きでラウラを追い詰めようとする。

「甘ん」

その言葉と同時に、ラウラが近接武器を展開する。

それは両手首に装着されたパーツから展開された超高熱のプラズマ刃。

鈴音はそれを見て、すぐさまラウラから離れる。

武器を振るうスピードからして向こうの方が有利である。

アレを連撃で放たれたら、大きさのある青竜刀では捌きにくくなる。

故に鈴音は後方にその身を飛ばす。

まるで、追って来いと言わんばかりに。

来た。

ラウラはその機体を鈴音に肉薄させる。それは、追いつかれていないのではない。

——来た！

引き付けているのだ。

鈴音はその頬をニヤリと上げる。

何の合図もなく鈴音がバレルロールのような機動を取る。その間を縫うようにセシリアの精密狙撃がラウラを襲った。

「ちっ」

ラウラは、その身を右方面に捻ることによつて、その直線的な動きを射線から外す。

「アレを躲しますの!?!」

ラウラは大口徑レールカノンをセシリアに向ける。

その銃弾は狙撃場所からセシリアを無理やり動かすだろう。それはあまり好ましくない。

隙を見計らつて鈴音が青竜刀をラウラに叩きつける。

狙いは右腕、あえて胴体を狙うことはしない。

右腕のプラズマ刃さえどうにかできれば、接近戦に持ち込める。

しかし、その刃がラウラに届くことはなかった。

その右腕を突き出したラウラはその青竜刀を空中で止める。

「なっ!?!」

押し込めない。

ならばと、鈴音はすぐさま青竜刀を引くと、回り込むようにその身を滑らせる。背後を取る。

その判断は代表候補生に相応しい動き。

しかし、その機体すら動きを止められてしまう。

「A I C!?!」

ラウラは両腕のプラズマ刃で鈴音を切りつける。

腹部、胸部、脚部、腕部。

装甲が順次破壊されていく。

このままでは拙い。

A I Cにより、されるがままとなった鈴音は声を上げる。

「セシリアー!」

「分かっていますわ!」

セシリアは展開したビットで、ラウラに射撃を集める。

その光線はラウラの装甲を削る。

「ぶん」

ラウラは光線を体の捻りだけで避ける。そのままラウラはエルロンロールを繰り返して、鈴音の横を抜けるように加速する。

セシリアは鈴音の体が邪魔になり、その狙撃の精度が下がってしまう。しかし、その射撃により、注意力が逸れたのか、鈴音は自由を取り返した。

鈴音はすぐさまその機体を空中に躍らせる。

中距離からの衝撃砲による射撃。セシリアとの連携で、動きを抑えることが目的だ。

しかし、その自由は長くは続かなかった。

ラウラの肩部から刃が射出される。

それはワイヤーで本体と繋がれているため、複雑な軌道を描く。

鈴音の右足が捕らえられた。

「鈴さん!?!」

セシリアはすぐさま援護射撃を行う。

しかし、それは鈴音を助けることにはならなかった。

「馬鹿め」

ラウラはワイヤーに捕らえられている鈴音を射線に放り投げる。

セシリアが放った光線は鈴音の無防備な体を貫く。

「きゃあああー！」

装甲を失っている鈴音はその光線に悲鳴を上げる。

シールドエネルギーが物凄い勢いで減っていくのが分かる。

そのまま、鈴音の体はセシリアに向けて放り投げられる。

空中で姿勢を崩す形となった二人へとラウラが突撃を仕掛ける。

ラウラはプラズマ刃で、セシリアに切りかかる。

近接戦闘が苦手なセシリアは、その身を漆黒の機体から離そうとするが、機体性能の差か、その距離は離れることがない。

「くっ！ インターセプターー！」

セシリアは唯一の接近武器を取り出すが、慣れない近接戦闘だ。

防戦一方。それでいて、ラウラの攻撃だけがセシリアに届いていく。

「そんなっ!？」

そのシールドエネルギーは見る見るうちに残り少なくなっていく。

「離れなさいー！」

セシリアに近接格闘をさせる訳にはいかない。それは、自分の仕事だ。

そのラウラを吹き飛ばそうと、鈴音は衝撃砲を展開する。

その見えない砲弾がラウラを襲う。

「ち、衝撃砲か」

一撃を食らったラウラは、続けて放たれる砲弾に片手を挙げることで対処する。

「無駄だ。このシュヴァルツエア・レーゲンの停止結界の前ではな」

その不可視の弾丸がラウラに届くことはなかった。

「くっ！ まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」

ラウラは腰部からも刃を放出すると計六つのワイヤーブレードを自在に操り、鈴音の四肢を掴む。

「そうそう何度もさせますかっ！」

援護射撃を行いつつも、ビットを放出し、ラウラへと向かわせる。

「ふん……。理想値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアの精密な狙撃も、ビットによる視界外攻撃も、ラウラには届くことはない。ラウラは両手を突き出す。

その腕の先には見えない手につかまえられたようにビットがその動きを停止させていた。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアの狙い済ました狙撃はラウラの大型カノンによって相殺されてしまう。

すぐさま連続射撃に移ろうとするセシリアに、射線を塞ぐように鈴音を投擲する。

射線に鈴音が入ることによって、その狙撃を中断する。

その隙を見逃すラウラではなかった。

「瞬時加速——!?!」

その速度に、鈴音は体制を整えることが出来なかった。

ラウラはその体に、合わせた拳を腹部に叩き込む。

鈴音は、地面にその身を叩きつけられてしまう。

その鈴音にラウラは大型カノンを向ける。

「くっ!」

咄嗟に、青竜刀を投げることで時間を稼ぐ。それは、たった一瞬でもいい。鈴音は衝

撃砲を展開し、そのエネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとはな」

ひらりとかわしたラウラは狙いを、機体から衝撃砲に移す。

そのエネルギーが集中している、非固定浮遊部位に銃弾が当たると、その空間圧作用

兵器は爆散してしまう。

「終わりだ」

体制を大きく崩している鈴音にラウラはプラズマ手刀を腹部に突き刺そうと加速する。

「させませんわ!」

刃が届く前に、セシリアはその機体を鈴音とラウラの間に割り込ませる。

その刃をスターライトmkⅡで逸らすと、同時にウエイト・アーマーに装着された弾頭型ビットを放出する。

それは半ば自殺行為でもある近距離爆破。

その爆発は鈴音とセシリアすらも巻き込み、地面へと叩きつける。

「無茶するわね。アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが——」

セシリアの言葉は途中で止まってしまう。

「……………」

煙が晴れると、そこには右手を前に差し出しているラウラが宙に浮かんでいた。

至近距離での爆発ですら停止結界にダメージを通すことがないのか、その装甲には爆発による傷がついてはいなかった。

「終わりか? ならば——私の番だ」

ラウラは瞬時加速で二人に接近する。

その勢いを利用して、鈴音の体を蹴り上げる。

その蹴り上げた足をセシリアに叩き付け、近距離から砲撃を当てる。

ラウラは、六つのワイヤーブレードを利用して、飛ばされた鈴音の体をワイヤーブレードで捕まえる。

倒れているセシリアにもワイヤーブレードで体を捕縛して鈴音と並べる。

「これで終わりか？ どうした？ 私をスクラップにするのではないのか？」

「……はっ、なにびびってんのよ。殺す気で来なさい」

鈴音は諦めてはいない。青竜刀はさつき放り投げてしまったし、衝撃砲はもう使えない。

しかし、そんなこと関係ない。スラストアーを最大限に噴かすと、間近まで接近していたラウラに体当たりを打ち囁ます。

「まだ、終わってないわ」

しかし、拘束は解かれてはいない。状況は決して好転してはいない。だが、強がりだけは止めない。

ラウラは鈴音の装甲を削ろうと手刀を展開する。

もう装甲を削る必要もないだろう。だが、態々装甲がある所を狙う。まるで、取り返しのないことを恐れているかのように。

最悪の状況だけは起こさないように。

「アンタ、傷つけることに躊躇しなくせに、難儀な性質ね」

「……貴様にわかるものか」

この子は、きつと怯えているのだろう。あの日以来強くなろうと躍起になって、力を手にしても、尚、あの姿が頭に残るのだろう。

「大丈夫よ。あたしも死なないわ」

「——っ!? 貴様……」

拘束された状況では抵抗すら虚しい。ただ、言葉を交わす。

ラウラは、プラズマ刃を両手に展開する。

「後悔、するなよ」

それは鈴音にとつては敗北の宣告に等しい。

振りかぶる。

しかし、それは、振り下ろされることはなかった。

「その手を、離せええ!!!」

ラウラに、白い機体が迫る。

その速度は、目を見張るものがあるが、直線的過ぎる。

ラウラは左手を上げる。

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

エネルギーの刃が届く寸前で、停止結界がその機体を止める。

その言葉は、一夏を馬鹿にするもの。

しかし、鈴音は確かに見た。すぐに鉄仮面で隠してしまつたが、一夏が来て、ホツとするラウラの表情を確かに見た。

「な、なんだ!?! くそつ、体がっ……!?!」

一夏のエネルギーの刃は次第に小さく消えていく。

「やはり、敵ではないな。この私とシユヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。——消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、ぐるんと白い機体に砲口を向ける。

しかし、その引き金が引かれる前に、ラウラに銃弾の雨が降り注ぐ。

それはオレンジの機体。

シャルロットだ。

「ちっ……雑魚が……」

ラウラは回避行動を取り、セシリアと鈴音を開放する。

その隙を突いてか、一夏はすぐにセシリアと鈴音を抱え、瞬時加速により戦闘から離脱した。

「一夏、二人は？」

シャルロットは、アサルトライフルをラウラに向けたまま一夏に呼びかける。

向けられているラウラは、興味なさそうに、無防備な姿勢を取る。

意識を他のところに向けているところから、恐らくは個人間秘匿通信プライベート・チャネルで通話をしているのだろう。

「……あたしは、大丈夫よ」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。シャルル、大丈夫だ。二人ともなんとか意識はある」

「よかった」

安堵した声で答えるシャルロットだが、その注意はラウラから離さない。

「人が模擬戦を行っている最中に割って入るとは無粋な連中だな」

「ここまでしておいて、言うことはそれか！」

その一夏の言葉をラウラは鼻で笑う。

「その意識を甘いと言っているのだ」

「何っ!？」

「ISは兵器だ。その兵器を扱う戦闘において怪我人が出ない方がおかしいのだ。お前が今まで見てきた戦闘は皆が無傷だったか？ お前はただ、身内が傷ついたのを見て激

昂しただけだ。失せろ。もはや、貴様に興味などない」

「ここままでやっておいてよく言えるよ。それは同じことをされても、文句は言えないってことだよね」

「はっ、出来もしないことを吼える」

「試してみる？」

シャルロットは、両手にシヨットガンを構える。

「面白い。その喧嘩、買ってやる」

ラウラは体を低くかがめた。

「行くぞ……！」

「くっ！」

ラウラが、その行動を起こそうとした瞬間。

その一瞬で、影が割り入ってくる。

ラウラはその加速を中断し、ぶつかると寸前で急停止する。

一夏は、振った雪片を止めることが出来なかったが、それはしつかりと乱入者に受け止められていた。

「……やれやれ、これだからガキ共の相手は疲れる」

「……教官」

「織斑先生!？」

「千冬姉!？」

その影はISどころかISスーツすら装着していない。

生身の状態でIS用の近接ブレードを扱うことが出来るのは、世界中探しても千冬一人だけだろう。

その上で、今の横槍を入れてくる技術。

常人離れと言う言葉が一番しっくり来るだろう。

「模擬戦をやるのは構わん。——が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならなくては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

ラウラは素直に頷くと、ISの装着状態を解除。地面に足をつける。

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな?」

「あ、ああ……」

一夏は未だに惚けているのか素で返事をしている。

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい!」

「僕もそれで構いません」

返事をし直す一夏にシャルロットも追従する、

その言葉を受けて、千冬は改めて声を上げる。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁じる。解散！」

千冬は一度強く手を叩く。

それはまるで銃声のように鋭く響いた。



「……………」

「……………」

一夏は保健室に足を運んでいた。

先ほどの戦いから一時間が経過している。

ベッドの上には治療を受けて包帯を巻いている鈴音とセシリアが不貞腐れていた。

「別に、助けてくれなくてもよかったのに」

「あのまま続けていても負けていたかはまだわかりませんわ」
そう言いつつも二人の顔には悔しさが滲んでいる。

「はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「……あいつ、怪我をさせることを避けてた気がするから」

「装甲のないところは攻撃しない。それを行いつつもここまで差を付けるだなんて……」

二人は相手の実力に恐れをなしていた。

連携を取り入れた二対一で圧倒されたのだ。

それほどに、相手の実力は高い。

一夏は、その先ほどの戦闘を思い出す。

「どうして、そこまで怪我をさせないように拘ったんだろうな」

鈴音は小さく呟くが、それは誰の耳にも入らなかった。

「……あいつは、自分から喧嘩を売るような感じじゃなくて、こっちから喧嘩を売らせるように仕向けてた」

「怒られてしまうと行っていましたわ」

「つまりはお前から喧嘩を仕掛けたわけか」

一夏の言葉に、二人は言葉を詰まらせる。

「なんでラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「ふうん？」

一夏はいまいち理解できなかった。

「好きな人を悪く言われたから、頭にきたんだよきつと」

「ん？」

シャルロットが飲み物を買って戻ってきた。

一夏はその言葉を聞き逃してしまいが、怪我人二人はしっかりと聞いていたようだ。

その顔は真つ赤に染まっている。

「ななな何を言っているのか、全っ然っわかんないわね！ こここここれだから欧州

人って困るのよねえっ！」

「そ、そういう邪推は気分を害しますわ！」

「あれ？ 冗談のつもりだったんだけどなあ」

シャルロットはニヤニヤしている。

鈴音とセシリアはさらに顔を真つ赤にしてしまう。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたしょうっ！」

鈴音とセシリアは渡された飲み物をひったくるように受けとると一気に体に流し込む。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら——」

その言葉は最後まで紡がれることはなかった。

それは地鳴りのような音を立てる。

「な、なんだ？ 何の音だ？」

廊下から響く音の正体は、保健室のドアを吹き飛ばし保健室に流れ込んでくる。

「織斑君！」

「デュノア君！」

保健室は雪崩れ込んできた数十名の女子生徒に埋め尽くされてしまった。

それも一夏とシャルロットの姿を見るや、一斉に取り囲み、手を伸ばしてくる。

「な、な、なんだなんだ？」

「ど、どうしたの、みんな……ちよ、ちよつと落ち着いて」

「「ハレ！」」

差し出されたのは、学内の緊急告知が書かれた申込書だった。

「な、なにになに……う？」

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、ふたり組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』——

「ああ、そこまででいいから！ とにかくっ！」

そしてまた一斉に手が伸ばされる。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

一夏は、チラリとシャルロットを見る。

シャルロットは女子だ。

ここで、事情を知らない誰かと組むというのは非常に拙い。

今後ペアで行動することが増えるであろうし、いつどこで正体がバレてしまうか分からない。

(それなら、沙良と組ませてやりたいな)

しかし、沙良は本戦には出れるか分からないと言っていた。

シャルロットは困った顔でこちらを見てくる。

しかし、一夏と視線が合うとすぐに逸らしてしまう。

助けて欲しいけど言い出せない、といったところか。
それならば。

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ」

沈黙が場を支配する。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士つてのも絵になるし……ごほんごほん」

女子たちは納得したようだ。

一人また一人と保健室を去っていく。

それから改めてペア探しが始まったのか廊下が騒がしくなる。

「ふう……」

安堵のため息をついた一夏に、鈴音が食って掛かる。

「一夏。あたしと組みなさい。シャルルには沙良と組めるように頼んでおくから」

「鈴……う？」

普段と違う鈴音の様子に、戸惑いを隠せない一夏。

「あの子はあたしが——」

「駄目だよ」

「——っ!？」

その肩をいきなり掴まれて、鈴音はベッドに戻される。

その人物のいきなりの登場に、一夏は目をパチクリしてしまう。

「二人のISを見たけど、ダメージレベルがCを超えてたよ。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥が生じるかもしれない。ISを休ませる意味でも、僕はトーナメント参加は推奨しないね」

沙良の説明に、怪我人二人は悔しそうな顔をする。

「くっ……………沙良が言うならそうするわ」

「不本意ですが……………非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメントの参加は辞退しますわ……………」

ISは負傷状態で稼動すると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、平常時に悪影響を及ぼす可能性が出てくるのだ。

怪我した際に無茶をすると、変な癖がついて治ってしまうのと同じだ。

「うん。先生からは僕が伝えておくよ」

「沙良」

「何？」

鈴音が沙良を呼び止める。

「……いや、なんでもない」

「そう……『よろしく』ね」

沙良は忙しそうに保健室から出て行ってしまふ。

実際忙しいのだろう。

先ほどのアリーナでの報告書もなぜか沙良が書いていたし、今回の鈴音とセシリアの辞退の話も、機体を見た整備士としての立場から、書類を作らなければならぬのだろう。

「僕、沙良を手伝ってくるね」

シャルロットもその後姿を追って出て行ってしまふ。

一夏としても手伝いたい気持ちはあるのだが、自分が行っても足を引つ張ることはわかってるので、大人しく怪我人を看ていることにした。



書類を出し終わった沙良は、シャルロットと一緒に夕飯を取っていた。

そこは、二年生食堂。

一年生食堂に行くと、ペアを求めてくる生徒で騒がしくなるだろうとの判断だった。時間も遅いため、食堂には沙良とシャルロットしかない。

「へー。一夏と組むんだ」

「そう、一夏に助けられちゃった」

「シャルルなら一夏のことでもフォローできるし、いい組み合わせだと思うよ。バランスは取れてると思う」

沙良はうどんを啜りながら、シャルルと会話する。

しかし、そのシャルルの手が動いていないことに気づく。

「どうしたの？」

「え、いや、その、食べるよ!」

そう言つて、すぐに箸を手取るシャルロットだが、その箸は上手く物をつかめてはいない。

「箸、苦手なの？」

「う、うん。練習はしてるんだけどね。あつ……」

シャルルの箸は魚をつかむことがない。

「ごめん、焼き魚定食を選んだのは僕だね。フォークでも貫つてくるよ」

「ええっ!?! い、いいよ、そんな。これでなんとか食べてみるから」

「そうは言っても、冷めちゃうよ?」

「で、でも……」

「シャルルはもうちよつと他人に甘えることを覚えた方がいいよ。遠慮してばっかじゃ疲れちゃうよ?」

「うう……」

「まあ、いきなりは難しいかもしれないけど、僕や一夏なら全然頼っていいんだから」
「沙良……」

シャルロットは迷っていたが、食事が進まないことに気をもんだのか、観念したように口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あの……」

「ん、フオークでいい?」

「え、えつと、ね。その……食べさせてくれると嬉しいなあって」
顔を紅潮させながらシャルロットは言葉を捻り出す。

「あ、甘えてもいいって言ったから」

「まあ、言ったのは僕だけど、それは、んー。却下。どうせなら箸を使う練習をしようか」
「そ、そうだよね……」

シャルロットのテンションがわかりやすいぐらいに地に落ちる。

しかし、不意に、箸を持つ手に手を重ねられて、シャルロットは顔を上げる。

「え?」

自分が何をされているか理解したシャルロットはその頬を真っ赤に染める。

「じゃあ、いくよ。まずはお魚ね」

沙良は動きを教えるようにシャルロットの手を動かす。

そう、後ろから腕を回され、箸の使い方を教えられているのだ。

正直、食べさせられるより恥ずかしい。

その温もりに、シャルロットは何も考えられなくなる。

「美味しい?」

「う、うん……」

もちろん、味などわからない。

頭の中はお花畑が咲き乱れており、思考を放棄している。

「じゃあ、次はご飯だね。はい、あーん」

「あ、あーん」

シャルロットは自分の手にあーんされると言う滅多にない経験をするのだった。

第二十七話 深夜の姉弟通話

時刻は二十四時を回っている。

しかし、沙良はその身をベッドの上で休ませてはいない。

現在いるのは、寮の屋上。

夜風に当たりながら、携帯端末を握り締める。

その顔は、普段のどこやかなものとは違い、真剣な瞳をしている。

沙良は、来る途中に買っておいた缶コーヒーのプルタブを開け、苦いコーヒーを胃に流し込む。

この空間には、沙良しかない。

故に、沙良は今が思うがままに感情を押し出す。

「はあ……」

沙良は柵に凭れ掛かり、ずるずるとその身を沈めていく。

それは、悔しさ。

原因は時間を遡る。

それはクラス対抗戦に起因する。

無人機。

それは、東が開発した新しい可能性。

遠隔操作と独立稼動を可能にした、新しい探索機。

それは、沙良の研究による深海での作業稼動データと東の開発力により実現した、宇宙・深海探索用無人機。

それは、未だに人類が足を踏み入れていない領域に挑む、希望の光だったはず。

東は語った。

宇宙ってどんな住み心地だろうね、と。

沙良は答えた。

住んでみればわかるよ、と。

しかし、その夢は簡単に打ち破られた。

研究所がIS六機により襲撃を受け、無人機の製作試作機、論文、稼動データ、その全てが奪われた。

その襲来は、沙良にとって決して許しがたいものであった。

希望の機体が、悲劇の道具に使われる。

その状況を沙良は許せなかった。

送り込まれてきた無人機を調査し、様々な研究所にハッキングを仕掛けた。

しかし、返ってきた結果はどれも『NOT DATA』の文字だけ。それは、普通の企業ではないということ。

それなら考えられる組織は二つしかない。

そのうちの一つを沙良は呟く。

「亡国機業……」

それは、沙良と一夏、それに鈴音すら巻き込んだ事件の黒幕。

あの誘拐事件から、相当な大きさの組織ということはわかっている。

それに、各国からI Sを強奪する出来る組織力。

沙良は、親の仇のように憎しみを込める。

知っていることもそう多くはない。

古くは五十年前から活動していること。

第二次大戦中に生まれた組織だということ。

国家によらず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない。ゆえに目的は不明。存在理由も不確かで、その規模もわからない。

わかっているのは、組織は大きく分けて運営方針を決める幹部会と、スペシャリスト揃いの実働部隊の二つが存在すること。

そして近年、その主な標的はI Sであること。

そして、その実動員の中にアメリカで奪われた第二世代型IS『アラクネ』が用いられていること。

実働部隊の何人かは顔も割れている。

沙良は直々に相対したことがあるのだから。

世界最高峰のハッカーと呼ばれる沙良でさえも、この程度の情報しか得られなかった。

これは、相手に感づかれないようにして、ということだ。

これ以上踏み込むと、こちらの情報が相手に漏れてしまう。

情報が漏れていいのならば、沙良は、敵を丸裸にすることは可能だと考えている。

しかし、それは大きなリスクを伴い、下手をすれば第四次世界大戦が始まる可能性も出てくる。

沙良は、断腸の思いで調査を打ち切った。

そして、沙良はその過程で、思わぬ情報を見つけた。

それは独逸の秘匿研究資料。

そこに書かれた文字に、沙良は、目を疑う。

『ヴァルキリー・トレース・システム』

それは、アラスカ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全て

が禁止されているはずのものだった。

沙良はすぐさま、東に連絡を取った。

今は、その東からの連絡を待っているところだ。

東との連絡ということで、態々人の居ない場所、居ない時間を選んだのだ。

沙良の携帯が震える。

それは、耳に当てて使うのではなく、端末を置いたまま扱う。

「もしもし」

『やあ、セラの愛しのお姉ちゃん、東さんだよ！』

空のような真つ青なブルーのワンピース。

エプロンと大きなリボンが目を引く。

その頭につけられたうさ耳が、視線を奪う。

端末から、東の立体映像が浮き出た。

向こうには座り込んでいる沙良の姿が映し出されているだろう。

東特製、テレビ電話システムだ。

作った理由は動いている沙良が見たいということらしい。

「調査結果は？」

『セラはお姉ちゃんがいなくて寂しいかな？ 東さんは寂しすぎてセラの抱き枕を作っ

「ちやつたよー」

立体映像の束はクネクネしながら自分を抱きしめている。

そんな自称姉を、沙良は冷たい目で見ると見る。

「そうか、やはり独逸は研究を進めていたんだね」

「嗚みあわない会話。」

『ああ！ またハックしたねセラ!?!』

「ふむ、政府はこのことに気づいていない様子だね」

『……セラ？ 束さん、寂しくて泣いちゃうよ?』

束は、泣き真似を始める。

「はいはい、姉さんはいいい子だからそんなことでは泣かないよね」

『いつもそうやって誤魔化されるお姉ちゃんではないのです』

「いい子にしてたら今度帰ってきた時に添い寝してあげるよ」

その言葉に、ピシッと姿勢を正し、束は手元の資料を読み上げる。

『そうだね、束さんが調べた結果から言うと、とある軍の研究施設が独断で進めたつばいね。どの機体に搭載されているかのデータが、削除されてたから、恐らくだけど、相当追い詰められているよ。発動条件は、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、操縦者の意志および願望の三つが大きいみたいだね。どう? 束さん頑張ったよ?』

東はその身を褒めて褒めてと言わんばかりに揺らしている。

「流石は姉さんだね。ご褒美に一日だけ『お姉ちゃん』って呼んであげるよ」

『お、お姉ちゃん……はふう』

「もう、姉さん。トリップするのが早いよ。その研究所はどうしたのさ？」

妄想に浸ってしまい、現実に戻ってこない東を、沙良は呼び戻す。

『へへ、……ふう……はっ!? え? 何て?』

「その研究所はどうしたの?」

『もちろん、地上から消えてもらったよ。言わなくてもわかっているとと思うけど、死亡者は

ゼロね。赤子の手を捻るよりも簡単だったよ。なんせ東さんは——』

「完璧にして十全……でしょ?」

東は嬉しそうな顔を作る。

『流石はセラだね。東さんをことを良く分かっている』

「あんだけ一緒にいれば、そりや理解するさ」

『ううん。セラは私を理解しようとした。それは、他の誰にも出来なかったことだよ』

「そこにしか、居場所がなかったただけだよ、『姉さん』」

『そうだね、『愚弟』』

「懐かしい。まだ姉さんが僕に興味を持ってなかった頃の呼び方だ」

沙良は、楽しそうに笑う。

それを東は目を半月状にして見守る。

いろいろあつた。

最初は沙良も、全く相手にされない人間の一人だった。

しかし、沙良は、東を理解しようとした。

沙良が小学生に上がる前には東は既に、I Sの研究を始めていた。

だから、それに必要とされる知識を片っ端から集めた。

情報源は、東の部屋に転がっている。

東のやっている事を学び、東に話しかけ、また次のことを学ぶ。

両親が亡くなり、篠ノ乃家に居候していた沙良は、その居場所を箒ではなく、東に求めたのだ。

沙良が、東がやっている事を理解できるように学び始めてから一ヶ月以上経過した時、東は気づいた。

この人間は、私に追いつくことはなくても、私を理解してくれるかもしれない。

天才の思考に誰もついてこれないのなら、ついてこれるように凡才を育てればいい。

そう考えた東は、沙良に、『愚弟』と呼び名をつけ、自分を『姉』と呼ばせた。

そして、自分が持てる限りの知識と技術を沙良に教え込んだのだ。沙良はそれを必死

に習得した。

天才の束が教えても、凡才の沙良は理解するのに時間がかかる。束が三分で理解するものを沙良は三日かかるなど、当たり前のことだった。

普通の者なら、ここで諦めてしまう。しかし、沙良は諦めなかった。

諦めたら、篠ノ乃家での居場所が無くなってしまふと思つてしまつたから。

いきなり、十を教える束のやり方に、沙良は自分で一から調べることで付いていった。

そして、ついに、長年の指導の下、凡才が天才を理解できる領域まで達したのだ。

沙良が束に勝てるようになったものは唯一つ。

ハッキングの技術だけ。

しかし、それでも世界から見ると十分な技術を持つている。

天才と言われてもおかしくないぐらいに。

「そういうえば、姉さんが、僕のために怒ってくれたときがあつたね」

沙良は、世界から天才と呼ばれた。

それに対して、束は怒りをあらわにした。

天才といつて簡単に考えてしまう。どうせ才能があるからといつて、その過程を見ない。

常人では考えられない程の努力して、ここまでの技術と知識を手に入れた沙良に対し

て、天才だからとその過程を踏み躪ることを束は嫌った。

束は沙良をこう評した。

『世界最高峰の凡才』

それは、沙良の文字通り、血の滲む努力を知っている束だからこそ出来た評価。それを踏まえて、世界は沙良をこう評した。

『世界最高峰の頭脳の理解者』

『それは、あいつらがムカついたんだもん。東さんのセラなのにさ、ちゃんと評価しないんだもん』

「言いたいことは色々あるけど、勝手に所有物にしないでよ」

『えー、弟は姉のものって相場が決まってるんだよ？ 前やったゲームで言ってたもん。』

その弟がさあ、セラに似ててねえ。ぐふふ』

「そのゲームを即刻捨てなさい」

『いいよー、東さんには本物があるもの』

「そのゲームみたいな内容はやらせません」

『えー。子作りしよーよー?』

「よし、姉さんとは一回、家族会議が必要なようだね。もちろん、お話は肉体言語で」

沙良は、拳を鳴らす。

その威圧感に、束は引き気味に冗談だよと言葉を紡ぐ。

「そつちはもう十七時半ぐらいかな？」

沙良が、時計を見ながら呟く。

『そつちは二十四時半ぐらいかな。ていうか時差がわかってるってことは——』

「なんでバルセロナにいるの？」

『バ、バレてる』

「しかも、こつそりと僕の研究室に入ったでしょ？ システムにハック跡が残ってたんだけど」

『こつそりじゃないもん。ちゃんと狐が入れてくれたもん』

「カルラさん……まあ、その分、僕も姉さんの情報を抜き出したけどね」

『ちよっ!? セラ!?』

「まあ、何て機体を作り上げちゃってるんですか」

『本当に抜き出されてるしー』

「まあ、本人に乗りこなせる気はしないんだけどね。この機体」

『そんなことないよ!? 箒ちゃんなら大丈夫だもん!!』

「ほほう、箒にあげる機体なんだね。これ」

立体映像の束がその動きをピタリと止める。

『あれれ? ……謀った?』

「騙される姉さんも可愛くて好きだよ」

『……はにゃん』

「姉さんトリップしないで」

沙良は、蕩けた顔をする自称姉に苦笑を漏らす。

しばらく、その自称姉の人には見せられない顔を眺めていた沙良はふと話を切り出す。

「……姉さんごめんね」

『ん? いきなりどうしたんだい?』

「やつら、取り逃がしちゃった」

『セラで無理なら、誰も出来ないよ』

「そう言ってくれると助かるよ」

『セラは、今回のイベントで、何かしら起こると思ってるの?』

「うん」

『大丈夫。お姉ちゃんがああ組織を見張ってあげるから』

「ありがとう『束姉』」

『た、た、束姉!? 録音してなかった! ね、セラもう一回! もう一回だけ——』

「こっちは夜遅いから僕はもう寝るね。お休み」

『ああ、待つてよセラああ!!』

沙良は、端末の横のスイッチを押して、端末の通話を切る。

そして、ため息をつくと、手すりに背中を任せる。

今回のトーナメントは結構な課題を抱えていた。

まず、一夏とラウラが確実に戦わなければならない。

正直に言うとうと、ラウラは決勝まで上がるだろうが、一夏は上がれるかどうかは怪しい。

途中で負ける可能性だって高い。

恐らく、フィオナとリナのチームには勝てないだろう。

沙良ですら、あの二人に勝てるかと聞かれると簡単に頷く事はできないのだから。

ならば手を打っておく必要がある。

沙良は、先ほどの携帯端末とは違う端末を取り出す。

この時間にも関わらず、沙良はとある人物に電話をかける。

「……………ああ、おはようございます。え？ 寝付けたばかりなんですか。それは申し訳ない。でも、そんなこと僕には関係ないんで。…………ええ、そうです。それでお願い

があるんですけど…………。はい、ええ。一夏を第一試合に、ボーデヴィツヒを、ええ流石、察しの良い。それではそれでお願ひしますね」

沙良は電話を切ると、屋上の扉にもたれかかっていた人物に声をかける。

そこにはジャージ姿の女性が一人。

「千冬姉、盗み聞きはよくないよ?」

「この時間に屋上に出る非行少年に言われたくはないな」

千冬は沙良に近づく。

「ああ、そういう事言うんだ。僕は姉さんの相手をしてあげてたんだよ? 千冬姉の負担を減らしているのは僕なんだから感謝してよね」

心外だよとぶんぶんして怒る沙良に、千冬は微笑を漏らす。

「わかったわかった。感謝している。ほら、そろそろ部屋に戻れ。トーナメントの工作は見なかったことにしてやるから」

「そういうのは口に出しちゃいけないんだよ」

沙良は笑いながら、屋上を後にする。

「おい、空き缶を放置するなよ」

「おっと、これは失礼」

沙良は空き缶を手に、階段を下りる。

空き缶を自販機横の空き缶入れに捨てると、エキシビジョンに備えて、真つ直ぐ部屋に戻るのだった。

第二十八話 エキシビジョン

ピットには二つの影があった。

一つは深い青で構築された機体。

その横には青色に輝くボディに銀色のラインが走った機体がその出番を待つ。

「来てるね、来賓がわんさかわんさか。あ、あそこに社長がいる」

「あ、本当だ。おじいちゃんが来たんだね。てつきりカルラさんが来るもんだと思つた」

わざわざ日本に来るとは、それほどまでにこの催しに価値を見出しているのだろう。

確かに、この模範試合は一種のアピールには最適である。沙良はそう判断した。

実際には孫の晴れ姿を見に来ただけとは露にも思わないだろう。

「カルラさんは横に座ってるみたいね」

「折角見に来てくれたのなら、いいところ見せないかね」

沙良は、手に持った太刀を一度光に翳す。

その刃は、煌きを持って、沙良にその存在を示す。

「新武装のオンパレード。エスパリーニヤの開発力を見せ付けるにはもってこいのイベン

トね」

「そして、第三世代型の開発もきちんと出来てるって証明しないとね」

沙良はソフィアの機体をコツンと叩く。

『只今より、本校生徒によるエキシビションが行われます』

「お、やっとだね」

「セラ、くれぐれも油断しちゃダメよ？」

「そつちこそ、墜ちないですよ？」

二人は、拳をコツンと合わせる。

「深水沙良、行きます」

「ソフィア・アルファード、出ます」

深海の如し青と、浅海の如し青が、空に潜った。



大歓声によって包まれたアリーナでは、既に出ていた二機が待ち受けていた。

向かい合うように四機のISが対峙する。

水のドレスと薄い水色に包まれた機体。

洗練された銀灰色の装甲に守られた機体。

深海を思わせる深い青で構築された機体。

鮮やかな青に銀のラインが引かれている機体。

それぞれが、自分の武装を手を持つ。

楯無は大型ランス、『蒼流旋』を。

簪は超高速振動薙刀、『夢現』を。

沙良は背の丈程にも達する太刀、『逆桜』を。

ソフィアは大型ハルバート、『E_エル_ルトル_{トル}ナード_{ナード}（竜巻）』を。

沙良は簪と、ソフィアは楯無と戦闘を行う。

その瞳は今か今かと闘志に燃えている。

『試合——開始』

沙良が真っ先に動いた。

簪、楯無との距離はおおよそ三十メートル。

届くわけがないその距離にもかかわらず、太刀を二人の間を裂くように振るう。

瞬間、斬撃が走る。

それは、刀の軌道の延長線上にエネルギーを核と刃とする圧力波を放つ特殊機構兵器。

春一番がカマイタチを起こす様に、沙良は斬撃を飛ばす。

楯無と簪の間に奔った斬撃は、地面を削り取り、一瞬だが楯無と簪を分断する。それぞれの戦闘が始まった。



沙良が『逆桜』を振るつたと同時に、ソフィアは疾走していた。

楯無にハルバードを叩きつける。それは、技術も何もない。ただ野生的に振るう小細工無しの一撃。故に速い。

楯無はそれをランスで受け止める。

「重っ!?!」

しかし、容易に耐え切れるものではなく、流すことでその刃から逃れようとする。

「甘い!」

ソフィアは楯無の脚部を鉤爪で引つ掛け、振り切る力を利用して、回転切りを放つ。

斧槍特有の多彩な攻撃手段に、翻弄される楯無。

バランスを崩され、距離を取ることも出来ないまま、ランスでハルバードの一撃を受け止めた楯無は、その勢いを殺しきることが出来ず、機体を吹き飛ばされてしまう。

楯無が体制を整えた時には既に簪と沙良が空で刃を交えていた。しかし、そんなことに気を向けている場合ではない。

楯無はすぐさま機体を右方向に移動させる。

瞬間、元居た場所に、爆発音が響く。

手榴弾。

それは数え切れない数をもつて楯無を襲う。

ソフィアは、その両手に手榴弾を六つ抱えていた。

「ちよつ、ちよつと!?! スペインってこんなのはつかじやない!?!」

楯無は水のヴェールを展開し、爆発の衝撃を最大限まで減少させる。

その派手な爆発音に、会場が盛り上がるのがわかる。

「そりゃ、情熱の国だからね!!」

ソフィアは会場に答えるように、新たな武装を展開する。

それは十つの輪状の非固定浮遊部位。

その独自稼動する一つ一つから銃弾が放たれる。

しかし、その銃弾は金属ではない。

放たれた銃弾は水で作られていた。

それは、ISに当たると、超音波とエネルギーにより水の中に閉じ込められた特殊ガスが膨張と収縮を繰り返し、収縮して再び膨張する瞬間に、バブルパルスと呼ばれる急峻な圧力波を発生させる。

それは単純な衝撃による金属の剪断以外に、キャビテーション空洞現象による壊食エロージョンも引き起こす。

ソフィア専用機、『ジューゴン』の特殊武装である。

ソフィアは水弾銃を四方八方から撃ちまくる。

拡張領域には、必要最低限の武装だけを残り、残りは全て弾となる水で埋まっている。故に、ほぼ無限に撃つことが出来る。

楯無は、水のヴェールでその水弾を受け止めるが、

「ウソっ!」

その水弾は、着弾した水のベールに圧力波を浸透させた。

「そりゃ、同じ水なんだからおかしくはないでしょう!」

ソフィアは水弾銃で楯無の回避先を絞りこみ、そこにハルバードを振るう。

楯無は、ランスで、受け止めることを選択するが、その一撃の重さについて機動を止めてしまう。

その瞬間に背後から衝撃波が襲う。

「くつ、ホント、悪趣味な兵装を考えるわね」

「ちよつと、沙良の思考に悪態つくの止めてくれる？」

ソフィアは楯無を蹴り飛ばす。

これは試合ではなく見世物なのだ。

実力を示しつつ、観客を楽しませなければいけない。

先ほどは、ソフィアが仕掛けた。

だから次は、楯無の番だ。

楯無は、ランスに超高周波振動の水を螺旋状に纏わせると、その先端をドリルのように回転させる。

突く。

それをソフィアは弾こうとするが、その超高周波振動により、ハルバードが弾かれてしまう。

「げっ」

ソフィアは、その胴体に、突きの一撃を食らってしまう。

しかし、自ら背後に飛び、その一撃を軽くすると同時に、距離を取る。

楯無は、それを高圧水流を以って斬りつけることを選択する。

それはウォーターカッターの原理を応用したもの。

その間合いは十メートルまで届く。

「食らわない!」

ソフィアは、量子変換で、大量の水を展開する。

それを壁のように配置し、その水の斬撃をいなす。

そのまま、楯無を大量の水で包み込む。

「え、なに!」

「たっちゃん、覚悟!」

ソフィアは、大量の水を球体の形に整える。

そして、超音波を利用し空洞現象を無理やり引き起こす。

それは、装甲に壊食を発生させ、最終的にはバブルパルスを生み出す。

水弾銃の原理を応用したもの。

それは、魚雷や、機雷などの破壊力と等しい。

「爆発しろ!」

衝撃がアリーナを揺らした。

ソフィアの武装は二つに分けられる。

それは、接近用武器のハルバード。

そして、十つの輪状の非固定浮遊部位。

水弾銃としての使い方はメインではない。正しい使い方は別にある。それは超音波。

液体に超音波を照射すると、空洞現象によって、百マイクロン以下のごく微小な気泡核を核として液体が沸騰したり、溶存気体の遊離によって小さな気泡が多数発生する。

気泡は超音波が負圧になったときは膨張し、正圧になったときは収縮する。

特に、超音波の共振径付近のサイズの気泡は音速に近い速度で急激に収縮するため、断熱圧縮の効果によって瞬間的に数千度以上の高温状態となる。

ソフィアの専用機『ジュゴン』の特殊武装。

特殊超音波システム搭載兵装。

『マーメイド』。

イメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器である。

ソフィアは十のマーメイドを構えて霧が晴れるのを待つ。

水蒸気が立ち上り、視界が悪くなるなか、楯無の笑い声が聞こえる。

「ふふふ、お返しよソフィア!!」

水蒸気が爆発した。

「なっ!!」

ソフィアは、その衝撃に機体の体制を崩す。

絶対防御が作動したのか、そのシールドエネルギーは大きく削られていた。
クリア・パッション
清き熱情。

ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する
楯無の技。

普段は水のヴェールを濃い霧状に変えているが、今回は、マーメイドによつて生じた
霧にナノマシンを含めたのだろう。

お互い譲らない攻防に会場が沸く。

「くっ、やるわね、たっちゃん……」

「ソフィアこそ……この技、結構きついんだから」

二人は示し合わせたように、武器をぶつけ合う。

ソフィアが縦横無尽にハルバードを振るい、楯無が、的確に捌いていく。

それは、まるで踊るかのようように舞台を盛り上げていくのであった。



沙良は太刀を振るう。

それは様々な型に振られ、縦横無尽に迫る斬撃の檻は簪に不可避の念を抱かせた。故に、簪は薙刀で斬撃を消し去る。

「はあ！」

その超高速振動によって、沙良の圧力波を掻き消すのだ。しかし、打ち消すことは出来てもその数が多すぎる。

「くっ……」

簪は回避先を邪魔する斬撃だけを打ち消し、その身を高くに逃がす。

沙良はその機動に合わせて、ライフル銃を展開する。

その銃を見て、皆がアサルトライフルだと判断しただろう。

そのの正体を理解できた、一部の生徒は、苦い顔を作る。

簪は狙撃に備えて、沙良の一挙手一投足に注意を集める。

撃った。

そこから放出されたのは弾ではなかった。

それは、強烈な閃光。

そう、一組の生徒には馴染みの深い、指向性スタングレネード。

シャルロットの目を焼いたのと同様に、簪の目を焼く。

「きゃああああ!!」

防御機構がすぐに作動し、その視力が奪えるのは良くて数秒だろう。簀は、悲鳴を上げるも、すぐに、その場から離脱する。

そして視界による情報に頼らずに、すぐさま『百千嵐』を展開する。

「良い判断だね」

沙良はすぐさま簀から距離を取る。

エネルギーシールドに反応して追尾を行うため、目で標準をあわせる必要がない。それを、沙良は全て打ち落とさなければならぬ。

標準を合わせていないミサイルはソフィアにも飛ぶ恐れがある。

沙良は、両手にアサルトライフルを展開する。

『百千嵐』からミサイルが発射される。

四機八門から放たれた三十二発のミサイルは、アリーナを爆発に埋め尽くす。それを沙良は両手のライフルで一つ一つ打ち落としていく。

しかし、落としきれない。

「くっ!!」

何発か被弾してしまう。

熱波はシールドエネルギーが防いでくれるとはいえ、気分の良いものではない。

シールドエネルギーが四分の一も削られてしまう。

しかし、下で戦闘を繰り返しているソフィアと楯無にはミサイルは飛ばなかったようだ。

——警告、ロックされています。

ハイパーセンサーの警告に、沙良は咄嗟に急上昇する。

先ほどもで居た位置に電荷を持った素粒子がビームとなって飛来する。

簪は『鳴神』を構えていた。

それは連射により、沙良の行動を制限する。

直撃は避けなければいけない。

一撃でも食らうと、連射によってあっけなく沈められてしまうだろう。

沙良は必死で回避を始める。

それは最小限で避けることもあれば、大きく引き離すこともある。

だが、いつまでも避け続けることに限界を感じたのか、沙良はふと動作を止める。

そして、その砲撃が当たる瞬間、手を前に差し出した。

砲撃が拡散する。

その手に現れたのは、透明なシールド。

それはシールドエネルギーを用いた防衛兵装。

何発かの砲撃に耐え切ると、沙良は瞬時加速で簪に肉薄する。

そして、その肩に蹴りを叩き込み、体制を崩したところで横蹴りを腹部に放つ。

「きゃっ！」

簪はその機体を、地面と平行に飛ばされる。

そして体制を立て直した際に、その脚部を掴まれる。

「墜ちないでね」

沙良は簪を地面に向かって叩き落す。

簪は地上間際で体制を整えようと考えた。

しかし、それは叶わなかった。

爆発。

それは、空中で何の前触れもなく起こった。

爆風により、また爆発が起き、それをきっかけにまた爆発が起きる。

超小型空中機雷。

威力は落ちるが、視認の難しさとその爆発範囲の広さから罠として好まれている。

それを大量にばら撒いたのだ。

簪は爆風で、機体の制御が疎かになる。

沙良は即刻、『逆桜』で斬撃を放つ。

それは遠距離から始まり、中距離、近距離と段々距離が近くなる。

沙良は『逆桜』を袈裟切りで振るう。簪はそれを『夢現』で受け止めた。

「——っ!？」

しかし、その受け止めたはずの刃が簪の身を切り裂く。

「そう、これは遠距離用の兵装ではないよ。こうやって、斬り合って初めて効果が出るんだ！」

斬撃を飛ばす。

それは牽制用の武装だと思われがちだが、真の目的は斬り合いにある。

斬り合い、お互いの刃が打ち合っても、こちらの斬撃だけは向こうに通るのだ。

これは、いくら太刀を、近接武装で止めようとも意味は無い。

武器をぶつけ合った時点で斬撃が入ってしまうのだ。

対処方法はただ一つ。

避け続ける。

それだけだ。

「い〜くよ〜」

沙良は、連続で太刀を振るう。

袈裟、切り上げ、切り下ろし、足払い、回転切り、突き、回転切り、足払い、切り上

げ、横切り。

その刃は容赦なく振られる。

それを簪は避け続ける。必死に体を捻り、スラスターを噴かし、隙を見つけては薙刀を振るう。

その攻防は、下で繰り広げられている踊りのような攻防と相まって会場を沸かした。

『残り一分』

プライベート・チャンネル
個人間秘密通信により、残り時間が伝えられる。

沙良は、簪と視線を合わせると、コクリと頷いた。

沙良は、『逆桜』を収納すると、『襖』を展開する。

残りは五十秒。

まるで、薙刀の型を行うように沙良と簪は優雅に薙刀を振るう。

それは、ソフィアと楯無を踊るようにと評するなら、こちらは舞踊と言うのがしっくり来るだろう。

その洗練された動きに、会場が息を呑む。

残りは五秒。

沙良と簪は一度距離を取る。

そして、お互いが同時のタイミングで薙刀を突き出した。

切っ先同士が触れると、その超高速振動と、衝撃透過機構によって、衝撃波が生まれる。

それは試合終了のブザーと共にアリーナに響いたのだった。



エキシビションを終え、アリーナが学年別トーナメント用に変わる。

男性組みへと当て振られた更衣室で一夏とシャルロットはモニターで観客席の様子を見る。

「しかし、凄いなこりゃ……」

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チエックが入ると思うよ」

「ふーん、(´▽`)苦労なことだ」

一夏は興味なきげに眩くと、シャルロットはくすりと笑う。

「一夏はボーデヴィツヒさんと対戦が気になるみたいだね」

「まあ、な」

一夏は、鈴音とセシリアのことを思う。

二人はトーナメント参加の許可が下りず、今回は辞退している。

それは普通の生徒ならいざ知らず、国家代表候補生であり、なおかつ専用機持ちの二人にとっては、その立場を悪くする要因にもなるだろう。

二人はなんでもない様に装っているが、実際は裏で色々と手続きをしているのだろう。しかし、身内第一の沙良が、鈴音のために動いていないことから、そこまで危うい立場ではないとは想像できる。

しかし、そうとは言え、一夏はやりきれない怒りが湧いてくる。

「感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年の中では現時点での最強だと思う」

「ああ、わかっている」

一夏は瞳を一度閉じ、大きく息を吸う。

開かれた瞳には、もう怒りは残っていないかった。

「そろそろ対戦表が決まるはずだね」

突然のルール変更があったらしく、対戦表が作り直されていたらしい。

「あ、対戦表が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わる。

「俺たちはAブロックだな。見た感じ脅威になりそうなペアはいないな」

「ボーデヴィツヒさんのペアはDだね。当たるとしたら決勝戦だね」

「おう、燃えてくる展開じゃないか」

一夏は、打倒ラウラだけを考えていたのだが、それがすなわち優勝と言われると、燃えてこないわけがない。

「やっかいなペアはDとCに固まってるね。Bは……えっ?」

「どうしたシャルル?」

言葉を無くしたシャルルが指差したところを良く見ると、一夏もぼかんとした声を上げてしまう。

それも仕方ない。

そこには先ほどエキシビジョンで活躍した沙良の名前があったのだから。



沙良は一人頭を抱えていた。

どうしてこうなった。

当初は一夏とラウラを一回戦でぶつけてしまうはずだった。

しかし、突然、沙良たちも本戦に出なければいけなくなりトーナメントに食い込まれた結果。

「一番離れちゃったじゃんかあ」

不幸中の幸いとして、一夏のAグループには大したペアがない。

おそらく、準決勝までは勝ちあがってくるだろう。

問題はBグループだ。

そこには、沙良が棄権しようが、一夏ペアを倒せるペアが存在しているのだ。

リナとフィオナのペアだ。

身内の鼻目無しに、その実力は一夏やシャルロットより高いと思われる。

沙良は考える。

どうしたら、舞台を整えられるか。

その時、沙良は閃いた。

「そっか、勝てばいいんだ」

簡単なことだ。

沙良がリナとフィオナに勝てばいい。

そしたら舞台が整うはずだ。

沙良は立ち上がると、ペアとなる簪の元へと走るのだった。

第二十九話 硝煙の大祭

一日目。



一夏は疾走。

その機体は真つ直ぐに、対戦相手のラファールに突進する。

試合開始のベルと同時に一夏は雪片式型を展開していた。

一夏の機体は燃費がとにかく悪い。

長期戦になる前に倒さなければならぬ。

一日目、第一試合。

トーナメントの最初の試合に於けるもつとも有効な手段は開始と同時の奇襲だろう。

一夏の突進に虚を突かれた対戦相手は、その回避行動を遅らせてしまう。

その一瞬の遅れで一夏は充分だった。

剣は振らない。振るうのは拳だ。

——瞬時加速。

その強力な加速力を、全て拳に乗せる。それを懐に潜り込んだタイミングで放った。ただの拳。だが、それは相手の装甲が砕くほどのエネルギーを持つ。

振り切った拳。そこで、攻撃をやめる筈がない。

拳により、ノックバックが発生している敵機に、身体を回し裏拳を打ち噛みます。その際に、最初に殴った拳で雪片を展開。身体の円回転につられる様にして剣を振るった。

零落白夜。

それは一撃必殺の煌き。

それを刃が当たる一瞬だけ発動させる。

斬る。

それはラファールの腹部装甲を砕き、シールドエネルギーを一瞬で一桁まで削り取る。

「浅いか」

一夏は、振り切った雪片式型を手放し、その慣性を利用して後ろ回し蹴りを叩き込む。

「きやあああー！」

その蹴りは、最初に砕いた装甲部を寸分違わぬ正確さで打ち抜いていた。それが示すことはシールドエネルギーの枯渇。

「シャルル!!」

一夏はすぐさまペアの名前を呼ぶ。

「もうすぐ!」

シャルロットは、アサルトライフルで打鉄のシールドを削る。

近づこうとも距離を詰めれず、離れようとも距離を離せず。

打鉄に焦りの表情が見えた。

一夏はそれを好機と捉え、瞬時加速により、急速に接近する素振りを見せる。

それに気を取られたのか、打鉄に乗る対戦相手は、シャルロットから注意を逸らしてしまつた。

それを、シャルロットは見逃さない。

「余所見してていいのかな?」

六一口径アサルトカノンを機体に押し付ける。

対戦相手の顔色が変わるのがわかつた。

ゼロ距離射撃。

それは、残り少なくなっていた打金のシールドエネルギーを削りきつた。

『試合終了。勝者——デュノア・織斑ペア』



沙良は動かない。

それは動く必要がないから。

沙良はアリーナの壁にもたれて、腕を組んでいた。

アリーナの中央では簪がラファール二機を相手に悠々と薙刀を振るっていた。

「上手いもんだなあ」

的確な位置取り、防御回避の判断、選択の迷いのなさ、何よりその技術の高さ。

沙良が端っことでサボっていても何も問題がない。

沙良には時々流れ弾が飛んでくるぐらいだ。

むしろ、「沙良はゆっくり休んでいて」とまで言われている。

なぜかやる気満々な簪に沙良は首を傾げるが、休んでていいなら休むに越したことはない。

元々、エキシビジョンしか出る気がなかった沙良は悠々自適に鼻歌を歌うのだった。

すると、一機が痺れを切らしたのか、簪がもう一機を墜とした隙に、沙良に強襲を仕掛けようとする。

沙良は、それを見ても、動こうともしない。

あろうことか、欠伸まで出る始末。

「馬鹿にしてるの!？」

その怒りを踵にした女生徒はその機体を吹き飛ばされることになる。

その射線を見るところには『鳴神』を構えた簪の姿があった。

「シカトするなんて……良い度胸」

簪は、雷の如し砲撃を浴びせる。

そこに残ったのは、力なく膝を突いたラファールだけだった。

『試合終了。勝者——深水・更識。ぺア』



一クラス約三十人

単純計算で一学年、百二十人。

ぺアで考えると、六十組。

試合数で言うとしードを作り、三十四試合。

四つあるアリーナを使用しても、一つのアリーナにつき八試合。

そのうち一試合ずつがシードとなっているため、一試合二十分と計算すると、百四十分。

つまり、おおよそ、二時間である。

それが、一学年での一回戦にかかる時間。

それを三学年が行うのだ。

それは合計して六時間。

二、三年は整備科が試合を行わず、全員が試合に出ているわけではないため、時間は幾分か短縮される。

しかし、それでも食事休憩、機体整備、アリーナ修復などを挟むことを考えると、第一試合だけで一日が終わってしまう。

一年が第一試合を全て終えた時点で、二年生の第一試合が始まった。

アリーナごとにブロックが分かれているため、沙良たちはそのままBブロックの試合を見ることにする。

二年の試合は、見るまでもなかった。

優勝するペアは元々決まっていたようなものだ。

ソフィア・楯無ペア。

既にペアが決まっていたため、エキシビションを行った相手に急遽ペアを組むことになったため、学年で最強と名高い二人が組むことになってしまった。

対戦相手は、既に戦意を失っているようだ。

開始三十秒で勝負を決めるといふ最短記録を叩き出し、その試合は幕を閉じた。



二日目。



Bグループ第二試合。

開始直後に簪が『百千嵐』をフル展開した。

発射。

その八機八門から放たれる六十四発ものミサイルが、敵機を襲う。

それは、圧倒的圧力を持って場を制圧する。

「わあ……」

沙良は自分が作っておきながら、その威力に引いていた。

下手に介入するとフレンドリー・ファイアの危険性もある。

流石にあのミサイルの中を悠々と闊歩するほど神経は図太くないつもりだ。

煙が晴れると同時に、試合終了のブザーがなる。

『試合終了。勝者——深水・更識へア』

沙良は特にすることもなく二回戦を勝ち抜いた。



Aグループ二回戦。

一夏は瞬時加速を以って本音に斬りかかる。

「うわあ、おりむー、手加減してよー」

「残念だけど、勝負に手は抜けない性質でね」

一夏は、打鉄のブレードを、雪片式型で受ける。

「そしてすぐさま斬り返す。

振り切る流れで横蹴りを放ち、蹴り足をそのまま相手の前足の横に下ろし、そのまま腰を入れる。

それは雪片式型を腰で構えた状態での体当たりの形となる。

「わわわ、ちよつと待つてよ」

本音は、その体当たりの衝撃に、体制を崩す。

「もらつた!!」

一夏はそのがら空きとなった腹部に雪片式型を叩き込んだ。

「うわあ!」

本音はアリーナの壁に激突する。

一夏はすぐさまシャルロットの方に注意を向ける。

そこには、癒子が必死にシャルロットの銃弾を避けていた。

「うひー!」

「ちよこまかと!」

シャルロットはブレードを展開し、癒子に斬りかかる。

ラファールを纏った癒子は同じくブレードを展開する。

「シャルル、スイッチ!」

すぐさま一夏は、入れ替わるように雪片式型で癒子に薙ぎ払いを行う。

それは、癒子を背後に飛ばせる動きを作らせる。

そこにアサルトライフルを持ったシャルロットが銃弾を打ち込む。

「うはー!」

癒子はブレードを収納し、アサルトライフルに持ち替える。

ISを操縦しだして日の浅い癒子はその切り替えに時間がかかる。

その隙を一夏が狙う。

斬り上げの動きでは、ライフルで防がれてしまう恐れがある。

故に取った行動は雪片式型による突き。

一夏は勝負が決まったと思った。

しかし、現実はその甘くなかった。

癒子が急に目の前から消えたのだ。

「甘いよ織斑君!」

癒子はいつの間に背後に回ったのか、一夏にアサルトライフルによる射撃を浴びせる。

そのシールドエネルギーは数多くの瞬時加速の使用により、潤沢にあるとは言いがたい。

その残りを削り取ろうと、癒子は弾幕を増やす。

「一夏!!」

シャルロットは一夏を助けようと、ブレードで癒子に斬りかかる。

一夏は見た。

その癒子の機動を。

癒子はブレードにライフルを添え、そのまま体を捻り、片足のスラスタードだけを噴出すことにより、残した片足での回転運動を行う。

その急な旋回行動に目の前から消えたように錯覚するのだろう。

「伊達に、これだけ練習してきたわけじゃないよー」

癒子は旋回の勢いを利用してシャルロットの背を蹴り飛ばす。

そして、アサルトライフルをシャルロットに向ける。

癒子は引き金を絞る。

「くっ!」

シャルロットはすぐさま距離を取ろうとする。

「いらっしや〜い」

そこには、装甲の欠けた本音が待ち構えていた。

「しまった!?!」

本音はブレードを腰の捻りを最大限に利用して叩き込む。

「——っ!？」

シャルロットはシールドで防ぐが、その衝撃は殺し切れない。

衝撃により、本音と距離が開く。

「色物だと思つてたけど、やるね!!」

シャルロットは吹っ飛びながらもライフルを展開する。

そして、体勢を整える前にライフルを、ぶつ放す。

それは、的確に本音の装甲が欠けている箇所当たり、絶対防御を作動させる。

あと一撃で、本音のシールドエネルギーはゼロになる。

「一夏——」

一夏は、その声が発せられる前に既に行動を起こしていた。

すぐさまその接近し、その身を薙ぎ払う。

本音のシールドエネルギーがゼロになる。

「あと一人!」

一夏が、癒子に振り返り際に薙ぎ払いを行う。

背後から近寄ろうとしていた癒子は、そのライフルを弾かれてしまう。

「やばっ!」

癒子は一夏から、距離を取る。

「ようこそ」

そこにはシャルロットが居た。

「うはー」

癒子は咄嗟にブレードを展開する。

しかし、その背中に衝撃が走った。

『試合終了。勝者——デュノア・織斑ペア』

そこには、雪片式型を投擲した一夏が、残心を取っていた。



Bグループ三回戦。

沙良は、簪をアリーナの端で待機させると、すぐさまアリーナに機雷をばら撒いた。

「DIVE!!」

そしてあろうことか、その爆心地に向かって突っ込んで行った。

対戦相手は、下手に動くことも出来ずに、ただ戸惑うことしか出来ない。
開始三十秒足らず。

機雷が爆発する。

爆発音が鳴り響き、衝撃がアリーナを揺さぶった。

煙が晴れる間もなく再び爆音が響く。

二日目は二回戦、三回戦だけを行なうため、機体の損傷レベルを気にすることなく爆発を起こす。

土煙がアリーナを満たす中、高らかにブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者——深水・更識。へア』

簪は、何もすることなく三回戦を勝ち上がった。



Aグループ第三試合。

一夏は開始直後からシャルロットと共に一機を先に落とすことに専念する。

相手は、イタリアの代表候補生だ。

一夏はその相手に見覚えがあつた。

それは沙良がクラス対抗戦で戦つた相手。

二組の副代表だ。

「はあっ!!」

一夏は連撃を放つ。

斬り上げ、斬り下ろし、横斬り、薙ぎ払い、回し蹴り、後ろ回し蹴り、足払い、斬り上げ、横蹴り、突き。

その気迫の籠つた連撃に気を取られたラファールに、シャルロットが背後から恐ろしいもの突き出した。

それはシャルロットが秘密兵器として隠していたもの。

沙良が好んで使う『襖』と同じ機構を持つ、大型の槍。

『襖』。

相手は代表候補生という強敵。

出し惜しみは敗北に繋がる。

「墜ちろ!!」

シャルロットは全力でそれを突ききる。

それはあらゆる運動量をその一点に集めた必殺の一撃。

その機構が作動し、衝撃がシールドエネルギーを貫通し、装甲に響かせる。

普通ならその衝撃に機体が吹っ飛んでもおかしくない。

しかし、衝撃が拡散して響いたため、その機体はランスに突き刺さったままとなる。

それは、身動きが取れないということを示している。

「うおおおおお!!」

一夏は零落白夜を発動する。

その雪片式型にエネルギー刃が構成される。

エネルギー刃がラファールを斬り裂いた。

「シャルル!」

シャルロットはすぐさま残された形となっていたもう一人にライフルによる牽制射撃を行う。

一夏はその機体に後ろから回り込むように、位置取りをする。

その位置取りが完了したのを確認して、シャルロットが打鉄にブレードで斬りかか

る。その背後から、呼吸を合わせるように袈裟斬りを放つ。

二人から斬り付けられる形となる打鉄は捌き切ることが出来ず、刻一刻とそのシールドエネルギーを削られていく。

このまま、パターンから抜け出すことが出来ず、打鉄のシールドエネルギーはゼロになつてしまった。

『試合終了。勝者——デュノア・織斑ペア』



二日目は第二試合、第三試合を行い終了した。

これにて、各学年八組のペアが残ることになる。

準々決勝、準決勝、決勝は三日目に行われることとなつた。

第三十話 立ちはだかる同郷

「今日で全てが終わるか」

一夏はトーナメント表を眺めながらそう呟いた。

「ボーデヴィツヒさんと当たるのは決勝戦だね。でも、それより先に――」

「準決勝で沙良と、か」

「それも、Aブロックを勝ち抜いたらの話だけどね」

次の対戦相手は、三組のアメリカの代表候補生。

専用機は持つていないようだが、その実力は高いだろう。

一夏は、念入りに、イメージを固める。

勝利を勝ち取るための動きを、その頭に強くイメージする。

『選手、入場してください』

「一夏、行こう」

シャルロットが、ラファール・リヴァイブ・カスタムIIを纏って、一夏に声をかける。

「ああ」

一夏はすぐさま白式を纏うと、シャルロットの横に並ぶ。

「織斑、行きます」

「デュノア、行きます」



「くっ！」

一夏は雪片式型を盾のように扱い、銃弾を弾く。

一夏は得意の接近戦に持ち込めないでいた。

伊達にここまで勝ち抜いてきたわけではないということか。

位置の取り方が上手い。

一夏は、ラファールがリロードを行う隙について、接近を試みる。

「させない」

ラファールは、その機体を後方へ大きく投げ出す。

しかし、一夏はその機体を追うように、瞬時加速を重ねた。

「なっ!?! エネルギ―切れが怖くないの!?!」

「ここで決めれば問題ない!!」

一夏は雪片式型にエネルギー刃を纏う。
零落白夜。

そのエネルギーの刃はシールドを無効化する。
ラファールに乗る女生徒の顔に焦りが浮かぶ。

女生徒は、ライフルを一夏に叩きつけると、その衝撃で、雪片式型の軌道上から外れようとする。

しかし、避け切ることは出来ない。

肩に当たることになった雪片式型は女生徒のシールドをガリガリと削った。

「拙い。」

女生徒はすぐさま距離を離そうとする。

それを、一夏は利用した。

一夏は、距離を取ろうと、初動を起こしたラファールの腹部を、全力で蹴りぬいた。

その衝撃と、背後に飛ばうとしていた動きが重なり、女生徒は予想以上の後退をしてしまうことになった。

それはアリーナの壁際まで達する。

一夏は、すぐさま距離を詰める。

零落白夜は発動させない。

ここまで来たら雪片式型だけで充分だ。

背後に逃げ場はない。

一夏はシールドを削りきるために連続でブレードを振るった。

「シャルル！」

アメリカの代表候補生を担当していたシャルロットは、その機体を追い詰めていた。

接近戦に持ち込んだと思ったら、近距離でゼロ距離射撃を行い、距離を離そうとしたら、いつの間にかブレードを手にし、機体に斬りかかる。

シャルロットの得意とする戦闘スタイルだ。

一夏はすぐさま代表候補生に接近する。

タツグと言うものは、戦闘に参加しなくてもその些細な行為が大きな影響を及ぼす。

代表候補生は、一夏が接近したことにより、二人を相手取れるように、その位置取りを変更する。

その一瞬の隙が勝負を決めた。

ラビット・スイッチ
高速切替

先ほどまでアサルトカノンを手にしていたシャルロットは、いつの間にか、その手に大型の槍を持っていた。

代表候補生は、顔色を変える。

それは、シールドエネルギーを削るだけではなく、その後の連携にも繋ぐことが出来る。

その意味を代表候補生は良く分かっていた。

「うおおおおお!!」

代表候補生は、ブレードを展開し、シャルロットがその槍を振るうチャンスを奪おうとする。

その行為が、敗北に繋がるとは知らずに。

一夏は、自分から意識が離れたことを確認すると、雪片式型にエネルギーを纏わせた。

「よそ見してていいのか?」

一夏は背後から斬りかかる。

その一撃は、必殺の煌きを以ってラファールに襲い掛かる。

それをハイパーセンサーで感知した代表候補生は、すぐに体を捻り、ブレードを使い、その軌道を逸らそうとする。

しかし、そんなことシャルロットが黙ってみているはずがなかった。

シャルロットはその背部に『祓』を突き込む。

その衝撃に、ラファールは機動を止めてしまう。

衝撃が、響いている隙に、一夏はその刃をラファールに突き立てた。

『試合終了。勝者——デュノア・織斑ペア』

会場が沸いた。

現在は各学年八組しか残っていないため、観覧席は多くの学生で埋まっていた。

その拍手を全身に浴びた一夏は、その場にへたり込む。

「勝った……」

一夏は、その自分の両手を見る。

一夏はこのトーナメントを通して、自分の実力が高くなっていくのを実感していた。

「一夏、やったね。僕ら、Aグループ代表だよ」

シャルロットが、嬉しそうに一夏に近寄る。

一夏はシャルロットに軽く頷きを返すと、対戦相手の元に向かった。

「流石だね。強かったよ」

「そんなことないよ。タッグだから勝てたんだ」

「ははは、素直に受け取るときなって」

アメリカの代表候補生は、気持ちよく笑う。

一夏もつられて笑みを浮かべた。

こうして、一夏たちは準決勝進出を決めたのであった。



試合開始のベルと同時に沙良は動いた。

まずは、相手を引き離す。連携を取られると後手に回ってしまう。それは避けなければならぬ。

すぐさま『逆桜』で、斬撃の壁を構築する。

それは縦横無尽に飛び回り、不可避の檻を作り上げる。

しかし、それはあっけなく突破されてしまう。

その方法は、ただ攻撃を受けながらも進むという、原始的な方法。

同じ武装を利用するリナとフィオナは、その武装の特性を分かっている。

斬撃は核となるエネルギーが最大の威力を持ち、そこから離れていくほど低くなる。

要は、直撃さえしなければ大したダメージを与えられないのだ。

そうは言っても、その全ての刃から直撃を免れることは簡単なことではない。

「くそ!!」

沙良はすぐさま指向性スタングレネードを展開する。

発射。

その眩い閃光は、深い青の装甲を包みこんだ。

沙良はすぐさま簪のフォローに向かおうとする。

「させないよ」

閃光に包まれたはずの機体が沙良の前に回りこんでくる。

「ちっ!」

沙良はその場で手を叩いた。

すると、沙良と青い機体の間に爆発が起きる。

機雷を放り投げたのだ。

それを、ちょうど間で起動しただけ。

沙良はその隙をついて、簪とスイッチを試みる。

「だからさせないって」

しかし、その機体は、爆風の中を突っ切って来た。

その機体は沙良の肩を掴むと、地面に叩きつける。

「うわあ!?!」

沙良はすぐさま起き上がろうとするが、その深青の機体に、上に乗られてしまう。

「まさかセラに馬乗りになる日が来るなんてね。ああ、興奮するわ」

「ちよつと、リナ!? 目がマジだよ!」

必死にもがくが、そのたびに重心を動かし、拘束を抜け出さないように押さえつけられている。

リナは顔を沙良に近づける。

それを咎める様に、リナに銃弾が襲った。

「ちよつと、リナ?」

「ちよつと、ファイナ。味方に銃口を向けなくてくれる?」

「それは、抜け駆けしようとしたリナが悪いもん」

「なによ、コミユニケーションじゃない。本国では普通だわ」

「人の上で喧嘩しないでよ!!」

沙良は、リナを巴投げの要領で放り投げる。

すぐさまリナと距離を取ると、ファイオナと戦闘をしている簪のフロローに入る。

「簪、支援!!」

沙良は、『襖』を構えて、ファイオナの機体に斬りかかる。

「折角、かんちゃん機体を堪能してたのに」

「だからだよ!」

簪とファイオナを戦わせるのは得策とは言えない。

簪の『錦』の製造に関わったフィオナは、その細かい癖、挙動、されたら嫌な行動などを理解している。

相性が悪すぎる。

「別に、沙良さんでも一緒ですけどね」

フィオナは沙良と同じく、『襖』を展開する。

そして、斬り合いが始まった。

そう思わせて、フィオナはとんでもない行動に出る。

わざと『襖』を食らったのだ。

その機構が発動し、その衝撃が、装甲に響く。

「なっ!?!」

その奇を銜う行動に、沙良は一瞬だが、身を硬くする。

その沙良を、横から衝撃が走る。

沙良が、衝撃の方向を見ると、リナがハリマーを構えていた。

その衝撃は、沙良の機体を浮かし、壁に激突させる。

『襖』は相手の行動を止めると同時に、機構を作動させている間は行動を停止せざるを得ない。ですよね？ その停止時間は一秒にも満たないですけど、わたしたちにはそれで充分です」

フィオナはすぐさま簪に襲い掛かる。

簪は、リナに斬りかかろうとしていた『夢現』をフィオナに向けて振るいなおす。

フィオナはそれを悠々と受け止めると、返す刃で、簪に『禊』を叩き込む。

その衝撃に簪の機体が大きな隙を見せる。

「せーの!!」

リナが、簪にハリマーを突き立てる。

それは、加速の力も加わり、物凄いスピードで沙良と逆方向に簪の機体を吹き飛ばした。

その簪をフィオナが追う。その手にはハリマーが展開されている。

「簪!!」

「よそ見してていいの?」

沙良は瞬時加速によって接近したりナにその両腕を押しさえられる。

その際に、膝を腹にぶち込まれる。

「うっ」

加速の乗ったその一撃は沙良の身を壁に食い込ませた。

リナは右手にハリマーを展開する。

背に壁を背負っている沙良には逃げる場所がない。

「ちよつ、やばつ……」

リナが物凄い笑顔を見せた。

「ちゃんと看病してあげるから」

リナは無防備の沙良の腹にハリマーを突き立てる。

その衝撃は、沙良の身をアリーナの遮断シールドに押し付ける。

逃げ場のなくなった衝撃は、沙良の機体を破壊する。

「かはっ」

沙良がその衝撃に身を振った。

確実に内臓にダメージが入っただろう。

シールドエネルギーが一気に一桁まで下がる。

「あと一押し！」

リナがその拳を沙良の腹部に叩き込もうとする。

そこはハリマーにより、装甲が破壊されている。

拳でも、絶対防御は作動してもおかしくはない。

しかし、その拳は沙良に届くことはなかった。

リナは背に横から衝撃を受け、沙良から距離を取らされる。

「……沙良から離れて」

簪が『鳴神』によって、射撃を行っていた。

「なにこれ？ エネルギー減りすぎじゃない!?」

「だって自信作だもん」

フィオナが胸を張る。

それに簪も苦笑をもらしてしまふ。

しかし、和んでいる場合じゃない。

すぐさま簪は『百千嵐』を展開。

「発射!!」

様々な種類のミサイルが、フィオナとリナを襲う。

その隙に、沙良は、簪の近くへと避難する。

「ごめん、助かったよ」

「ううん。無事でよかった」

簪はほっとしたように笑顔を作る。

「……今ので、墜ちてくれればいいけど」

「そもいかないだろうね」

沙良の言葉に同期するかのように煙の中から、青い機体が二機ゆつくりと出てきた。

「ちよっと、何その武装？ Divining Systemを作動してる状態にも拘らず半

分しかないんだけど」

「私なんて『襖』を受けている分もっと少ないですよ。でも、やっぱ凄いですね。DIV Eしてなかったら墜ちてましたよ？」

二世世代型 I S シークエスト。

それは作業用に設計された機体と、軍用に設計されたものの二種類が存在する。

沙良の機体は前者。リナとフィオナの機体は後者に当たる。

二人の纏う機体は、製作試作機の沙良の『カイラ』とは違い、全体的に戦闘機能が向上している。

スペックだけ見ると、三世代型にすら負けていない。

特筆するのはその硬さ。

Div ing System を作動することにより深海の水圧にも耐えられるその機体は、全 I S の中でもトップクラスの硬さを誇る。

——負けたくないなあ。

その想いが伝わったのか、『カイラ』がとあるメッセージを表示する。

——うーん、どうしようかな。

それは、とある能力の使用の提案。

沙良は一瞬だが考える素振りを見せる。

——あの二人だし、問題ないよね。

「簪、一分任せても良い？」

沙良は、決意したように簪に開放回線オープンチャネルで伝える。

「何するの？」

「勝ちに行く」



沙良は、その場に目を閉じて全身の力を抜く。

それを簪は守るように二人に立ちふさがる。

「かんちゃん一人でやるつもり？」

フィオナは首を傾げる。

「任されたから」

「そう、じゃあ、やってみなさい！」

リナは機関銃を展開する。

普通はシークエストにはそんな大層な物は積んでいない。リナが追加で積んだものだ。

その圧倒的弾幕を、簪はただ避けることもせず、ただシールドで受け止め続ける。

その時間を稼ぐような動作に、フィオナは気づいた。

「リナ！ セラを狙って！！ ハックされてる！！」

「くっ!? そういうことね!？」

沙良の単一仕様能力『神の管理領域』によるハッキング。

その能力はあらゆるものへのアクセス許可の発行。

それだけ聞くと、何でもできるように思えるがそうではないことをフィオナは知っている。

許可を得るというだけであって、必ず成功するわけではない。

フィオナが同じ能力を使えたとしても、せいぜい監視カメラのハッキングが精一杯だろう。

それは扉の鍵であって、扉の前まで案内してくれるわけではない。

その扉までの防壁は自分で乗り越える必要があるのだ。

それは沙良が使うから意味がある。

世界最高峰のハッカー。

時間はかかるが沙良はコアネットワークに侵入し、ISをもハックする。

その条件には多くの制約があると聞いたことがある。

その一つにあつたはずだ。

コアネットワークに接続する場合は、機動を停止した状態で、全神経を集中させる必要がある。

いまの沙良と同じ状態。

『絶対的管理者』。

咄嗟には使うことの出来ない使いづらい能力。その制約ゆえに戦闘に使われることはあまりない。

それをあえてここで使うのか。

狙いに気づいたリナが、その狙いを沙良に向けるより早く、簪が『鳴神』をぶつ放す。

「……させない。任されたから」

簪は、電荷を持った素粒子を、秒間二発のペースで撃ち続ける。

その砲撃はリナとフィオナを交互に捉え、沙良への攻撃を許さない。

——拙い。この時間のかけ方……沙良さんはセンサーハックするつもりだ。

フィオナは、沙良が何をしようとしているのかに気付き、焦りを募らせる。

フィオナは両手にライフルを展開する。

それを、マニュアルで狙いをつける。

「させない」

簪が『夢現』でライフルを切断する。

そのまま簪は沙良が守れるように、『鳴神』を構えたまま、フィオナから離れる。

「邪魔しないで！」

フィオナは簪にハリマーを投げつける。

その機構により、簪は少しの距離だが後退を強いられる。

フィオナはその隙に沙良に『禊』で斬りかかる。

既に機構は作動しているため、ただの薙刀としか使えないが、今の状況ならそれで充分だった。

沙良のハッキングを止めるには、攻撃を当てるだけで良い。

しかし、寸前で沙良の姿が消えた。

「しまっ——」

瞬間、背後から衝撃を受ける。

しかし、衝撃がその身に襲おうとも、フィオナは沙良に気づくことはなかった。

——ハイパーセンサーをハックしましたね!?

フィオナのハイパーセンサーは沙良の姿を捉えていない。

ならば、とフィオナは、ハイパーセンサーに頼らず、自らの目で状況を見渡す。
そこには、

「えへへ、看病はリナにお願ひしてね」

最高の笑顔を浮かべた沙良がハリマーを構えて立っていた。

沙良の本気の突きをフィオナは腹に受ける。

「——っ!?!」

その衝撃は内臓を痛め、言葉を失わせる。

しかし、それはまだ終わりじゃなかった。

シールドエネルギーがゼロにはなっていない。

沙良は笑顔のまま拳を腹にぶちかました。



「フィーナ!?!」

いきなりその身を壁まで吹き飛ばされたフィオナに、リナは気を取られた。

沙良の姿がどこにも居ない。

——センサーハックか。

すぐさまリナはハイパーセンサーを切る。

それは沙良がこちらに向かう可能性を考慮したもの。

沙良はそのままフィオナに追い討ちをかけようとしていた。

「させない！」

リナはすぐさま沙良に接近しようとした。

「……シカトしないで」

「きゃあ!!」

リナは地面に這い蹲った。

おそらく、薙刀で叩き落されたのだろう。

ハイパーセンサーを切ったのが裏目に出た。

「くっ」

すぐさまハイパーセンサーを作動させ、簪を相手にする。

展開するは『逆桜』。

簪に斬撃の雨を降らせる。

沙良と違い未だに使い慣れていない武装だが、それでも強力な武装であることは間違いない。

簪はそれを距離を取って対処しようとする。

「逃がさない!!」

その距離を詰めるようにリナは後を追う。

その瞬間、簪が笑顔を作った。

「——っ!?!」

衝撃がリナを襲う。

その正体は見えなくてもわかっている。

沙良だ。

リナは遮断シールドに激突する。

すぐさまハイパーセンサーを切ろうとしたが、その前に、沙良が姿を現した。

「あら、時間切れだね」

リナは見た。

沙良がこれ以上ないほどに良い笑顔を作ったのを。

「リナ。ごめんなさいって言うなら今のうちだよ?」

そう言っておきながら、言葉を待つような事もせず、沙良はハリマーを突き放った。

「きゃあああああ!!」

絶対防御が作動し、そのシールドエネルギーが大きく削られる。

「まだ墜ちないか」

沙良は無情にも同じ箇所と同じように突きを放った。

「――」

声にならない悲鳴が上がる。

しかし、その猛追は、まだ終わらない。

シールドエネルギーはまだ残っていた。

沙良は笑顔のままハリマーを振りかぶる。

「せ、セラ？　ちよ、ちよつと待つて!?!　それは拙いつて!?!」

流石に三発目は耐えられない。

「リナが僕にした事覚えてないの?」

沙良の額には青筋が浮かんでいた。

――あ、死んだ。

「大丈夫、看病はちゃんとしてあげるから」

リナは衝撃を腹部に受け、意識を手放した。

第三十一話 決勝戦

「ん……あれ……？」

リナはその身を起こすと、周りを見渡す。

周りにはカーテンが引かれてある。

リナはカーテンを開ける。

そこには、

「あー、リナ、おはよー」

「おはようリナ」

沙良とフィオナがモニターを見ながら治療を受けていた。

薬品の臭いが鼻につく。

ここは保健室だろう。

「お、おはよう………じゃなくて!! 何でセラがここに居るの!? 試合は!? 準決勝は!?」

リナは状況が把握できず、口早に質問を重ねる。

沙良はあっけらかんとして答えた。

「棄権したよ」

「……はあ？」

リナはぼかんと口を開いたまま固まってしまう。

棄権。

その言葉が頭に響く。

「何だよ!？」

「だって出れる状態じゃなかったしね」

「ど、どういうことよ!？」

リナは沙良に食って掛かる。

「リナさ、僕に何したか覚えてないの？ あのハリマーのせいで機体損傷レベルがDを超えたんだよ」

機体損傷レベルD。それは戦闘に支障をきたしてもおかしくないレベルである。

「……………ごめんなさい」

リナはその原因に思い当たり、しゅんとしてしまう。

あの時は勝つことしか考えていなかったため、その後のことなどそっちのけだったのだ。

「リナの機体は損傷レベルがCを超えてたから、三日間は使わないでね」

「はい」

リナは軽く返事をする。

それもそうだ。沙良の機体が損傷レベルDを超えているのなら、リナの機体がそれを超えていないわけがない。

「フィーナも一緒だよ？」

「わかってますよ」

フィーナも同じように返事をした。

沙良は満足そうに頷くと、モニターを眺める。

「それにしても凄い機体だね」

沙良は、モニターを食い入るように見ていた。

そこに移っているのは、

「独逸の第三世代機ですか」

フィーナの言葉に沙良は頷く。

「近接から遠距離射撃までこなす万能型。バランス良い機体だね。搭載されてる特殊兵装も機体のコンセプトにあってるしね」

「同じ開発者としてはどう？」

リナはふと思いい聞いてみる。

「悔しいけど、技術は高いね。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーとか良く思いつくとよ」

「特殊超音波システムを開発するセラもどうかと思うけどね」

「でも、コンセプトが違うからね。僕らはあくまでも、深海探索用の機体を筆頭に開発を進めてるんだ。そりゃ、軍用として開発された機体には勝てないよ。でも、僕らが絶対に負けない領域もある」

「水中戦ですね」

フィオナが答える。

「そう、僕らの扱うシークレストは水中でこそ、その強さを発揮する。伊達に『Sea Quest』なんて名前はついてないよ」

そこは誰も念頭においていない領域。

今でもISによる戦闘は空中戦が主だ。

だからこそ、予想もしない領域からの攻撃には弱い。

地中海で勃発した戦争。

エスパニーヤではメデイテラーネオの海戦の名で知られている。

地中海に接する全ての国が地中海の上で戦闘状態になった。

その際、一番に狙われたのはエスパニーヤだった。

当初エスパリーニャはシークエストを発表したばかりで、なおかつそれは今のシークエストのように軍用に開発されたものなど存在せず、全てが深海作業用だった。

その深海での作業により、大量のレアメタルを保持するエスパリーニャは、各国に良い鴨だと思われた。

しかし、蓋を開けてみると、スペインは全戦全勝。

海中から狙撃され、対処しようと海に入ると、その動きに翻弄される。

空中から対処しようとする、海中から岩盤探掘用の重機を携え、奇襲をかける。

そして、あろうことか、軍艦と連携を取り、ISを沈める。

その姿は、各国のIS搭乗者に大きなトラウマを残した。

その海戦での戦績から、エスパリーニャの海軍は『Grande y Felicissima Armada』の異名をとることになった。

それは『最高の祝福を受けた大いなる艦隊』を意味する。

そう、歴史に名高い、無敵艦隊の名を引き継いだのだ。

リナは海軍に属する父親を持つため、そのことを誇らしく思っていた。

いずれ、父さんみたいに国を守る。

その気持ちがりナを代表候補生まで押し上げた。

スペインには代表候補生が数多くいる。

その中で、専用機としてシークエスト、それもカスタムを与えられるということは、とても名誉あることなのだ。

それは沙良にその実力を認められ、「カスタムを施してもいい」と思わせるという事だ。

リナは初めて、国のため、一人の人間のために戦いたいと思った。

エスパニーヤで専用機を持つものは皆が同じ気持ちだろう。

「リナ？ どうしたの、考え事？」

沙良がこちらの様子を窺うように見ている。

そこで、ようやく自分が思考の海に落ちていたことを悟る。

沙良のことを考えていたリナは頭を振った。

「や、なんでもないわ」

「それならいいけど」

リナは、思考を一度手放し、モニターを見つめる。

独逸の機体が、決勝出場を決めたところだった。



決勝戦を控えて、箒は更衣室で瞑想をしていた。

更衣室はラウラと箒しかない。

まさか、抽選でラウラとペアを組むことになるとは思わなかったが、その結果、決勝まで上がることが出来た。

優勝したら、一夏と付き合える。

そのような噂を立てる原因となった箒は、この優勝が見えているのにそれを早々諦めるわけにはいかない。

しかし。

——一夏にはボーデヴィツヒに勝って欲しい。

沙良との約束を果たすために訓練を積んで来た一夏を見ると、強く思う。

その相反する思いに箒は揺れる。

しかし、その思いを見透かしたように沙良は箒にこう言っていた。

——一夏を倒すつもりでいかなないと、一夏の為にならない……か。

確かにその通りだ。

箒はそう思う。

情の入った試合に何の意味があるか。

——何も考えるな。ただ、勝つことだけを考えろ。

そうしなければ戦えない。

そうしなければ、一夏とは、戦えない。

箒は組んだ指に力を込める。

そして、静かに意識を集中させていった。



アリーナには四つの機体が開始のブザーを今か今かと待っていた。

「わざわざ決勝まで待たせるとはな」

ラウラは腕を組みそう呟いた。

「決勝で戦えるって展開の方が俺は燃えるけどな」

一夏は雪片式型を構えて、ラウラを見据える。

「ふん、博士が棄権していなければ、そこに立っていたのはお前ではなかっただろう」

「運も実力の内って言葉をしらねえのか？」

『試合開始まで後十秒』

一夏は雪片式型を腰に添える。

それは居合いの形。
残り五秒。

四。

三。

二。

一。

「叩きのめす」

試合開始と同時に一夏は瞬時加速を行う。

その一手目が入れば、戦況は大きく傾く。

しかし、ラウラが右手を突き出した瞬間、一夏の機体が動かなくなる。

A I Cだ。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりやどうも」

そういう一夏の顔には笑みが浮かんでいる。

「何を笑っている」

ラウラはレールカノンの安全装置を解除した。

それでも一夏の笑みは崩れることがない。

「作戦成功だ」

そのラウラの機体が一夏の前から姿を消した。

そこに現れたのは、スペイン製のハリマーを携えたシャルロットだった。

ラウラは、急に現れたシャルロットに吹き飛ばされてしまう。

「なっ!?!」

追撃をかけるようにシャルロットがアサルトカノンによる爆破弾の射撃を浴びせる。

「ちっ……!」

畳み掛けるシャルロットの射撃に、ラウラは急後退をして間合いを取った。

「逃がさない!」

シャルロットはアサルトライフルを展開する。

しかし、その射撃がラウラに向けられることはなかった。

シャルロットは背後から衝撃を受ける。

「えっ!?!」

「忘れられては困るな」

箒が実体シールドを活用し、銃弾を捌きながらシャルロットに肉薄する。

「それじゃあ、俺も忘れられないようにしないとな!」

「それは私もだ」

一夏はすぐさま瞬時加速によりシャルロットとスイッチしようとするが、その機体は動くことを良しとしない。

停止結界。

そこにはラウラがレールカノンを構えていた。

「させないよー」

シャルロットが箒からラウラへと狙いを変える。

その射撃に、ラウラは回避行動を取るが、その際に、停止結界が解けてしまう。

A I Cから開放された一夏はすぐさま箒に斬りかかる。

ラウラに標準を向けたシャルロットは、そのまま箒から離れ、一夏と場所を入れ替える。

一夏は箒に雪片式型を振るう。

狙うは肩部。

目的は打ち合いに持ち込むことだ。

その誘いに箒は乗る。

連続する金属音。

一夏はスラスタ―推力を上げる。

加速を増した斬撃は徐々に箒を後方に押していく。

「くっ……のっ……い！」

押され続けながらも、箒は冷静さを保ち、一夏の連撃を防ぐ。

その崩れない受けに、一夏も焦りを抱く。

しかし、一夏もこれまで何もしてこなかった訳ではない。

腰を捻り、箒の脚部に雪片を振るう。

それは下段に構えられたブレードによって防がれてしまう。

「上段が空いてるぜ！」

一夏は箒の頭部に腰を入れた拳を叩き込む。

それはシールドエネルギーに阻まれてしまうが、それでも箒の気を逸らすことに成功する。

その隙で、一夏は切り付けることではなく、蹴りを放つことを選択する。

剣だけなら箒の方が遥か高みにいる。しかし、一夏の得意とするのは無手である。

空手。

それが剣を振るいながらも選んだ道。

剣術を学ぼうと、普段剣を持たなければ何の意味もない。ならば、無手で戦えばいいではないか。それが一夏の考えだった。

箒の上半身が揺れる。

そのまま追撃として、一夏は蹴り足を軸に後ろ回し蹴りを放った。その連撃に箒の機体は数メートル吹き飛ばされる。

「瞬時加速」

一夏は猛加速により箒の機体に膝蹴りを叩き込んだ。

そのまま箒を壁際まで追い詰める。

宙に飛ばされている形の箒はその一撃を防ぐことが出来ず、その身を遮断シールドに押し付けられることになった。

「くっ」

一夏はすぐさま雪片式型にエネルギーを纏わせる。

その輝きに箒が青ざめるのがわかった。

一夏は雪片式型を振るう。

しかし、その刃は箒に当たることはなかった。

「なに!?!」

突然、箒の姿が目の前から消える。

一夏の雪片式型はむなしく空を切る。

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。

そのワイヤーブレードの一つが箒の脚へと伸び、シャルロットに向けて投げ飛ばして
いた。

ラウラはプラズマ手刀を展開し、連続で斬りかかって来る。

斬撃と刺突を混ぜた正確無比な攻撃に、一夏は押されだしてしまう。

しかし、一夏は耐える。

元々、最初に箒を墜とすと決めていたのだ。

先ほど剣を交わしてわかったが、一夏よりはシャルロットの方が箒と相性がいい。

ならば一夏がやらねばいけないことは、ラウラをシャルロットに向かわせないこと。

時間稼ぎだ。

一夏はラウラの波状攻撃に必死に食らいつく。

放たれるブレードワイヤーは蹴り飛ばし、余裕があるなら切り落とす。

雪片式型でプラズマ手刀を弾き、危ないときには素手で、その腕自体を払う。

離れることは出来ない。

射撃武器を持たない一夏は、ラウラには的に等しい。

離れた瞬間にレールカノンが火を噴くだろう。

「うおおおおお!!」

ほぼゼロ距離での高速格闘戦。

途切れてもおかしくない集中力を、シャルロットを信じ必死に繋ぎとめる。

「……そろそろ終わらせるか」

ラウラはプラズマ手刀を解除する。

一夏はその意味に気付き、すぐさまラウラに雪片式型を振るう。

しかし、そのブレードは宙に止まったまま動こうとはしない。

「AICか！」

「では——消えろ」

無事に残っている四つのワイヤーブレードが一斉に射出。

一夏に襲い掛かる。

一夏のエネルギーは既に三分の一を削られている。

しかし、ラウラの追撃は止まらない。

一夏の腕部をワイヤーブレード二本で押さえ込み、ねじ切るような回転を加えながら、地面へと一夏を叩き付けた。

一夏は咄嗟に受身を取るが、その腹部をラウラの蹴りが襲う。

装甲のない喉を狙った攻撃。衝撃を殺しきれなかったのか、一夏は、息を詰まらせる。拙い。

一夏が咄嗟に感じ取った気配に後方へ飛ぶと、ラウラが大型レールカノンを構えてい

るのが見えた。

標準は合わせ終わっている。

「とどめだ」

ラウラは冷酷に言い放つ。

その砲口からは対ISアーマー用特殊徹甲弾が発射される。

それは当たり所が悪ければ一撃で勝負がついてもおかしくはない。

回避は間に合わない。

ならば、斬るしかない。

しかし、一夏の右腕はワイヤーブレードに捕らえられて動かすことが出来ない。

だが、一夏は、笑みを浮かべた。

「遅いぞ、シャルル」

「お待たせ！」

質量を持った重い音を響かせて、シャルルの盾が砲弾を防ぐ。

一夏はワイヤーをあえてその手に結んだまま、後方へ瞬時加速を行う。

急にワイヤーを引っ張られる形となったラウラは予想もしない形で、シャルロットに

接近を許す形となった。

その隙をシャルロットは見逃さない。

展開するは大型機構槍、『祓』。

機構は本日既に一回使用しているが、関係ない。

シャルロットは二本所持しているのだから。

突く。

その衝撃はシールドを透過し、装甲に衝撃を響かせる。

シャルロットはすぐさま六二口径連装ショットガンを両手に構える。

撃った。

銃弾は近距離から襲い掛かり、ラウラの装甲を削る。

「ちっ」

ラウラは右手を突き出す。

シャルロットの機体がピタつとその動きを止める。

「お返しだ」

ラウラはプラズマ手刀を展開し、シャルロットを斬りつける。

A I Cにより、動きを封じ込められたシャルロットには為す術がない。

その装甲は段々と削られていく。

「退け!!」

一夏はそのラウラに斬りかかる。

しかし、その刃はあっけなく回避されてしまう。

しかし、ラウラの停止結果は解除される。

そのままラウラは一夏とシャルロットから距離を取るように後方へと飛んだ。

「ごめん一夏、助かったよ」

「それはお互い様さ。箒は？」

「お休み中」

シャルロットの視線にしたがって視線を送る。

アリーナの隅ではシールドエネルギーをゼロにし、各部損傷甚大の箒が悔しそうに膝をついていた。

「かなり手古摺ったよ。箒も強くなってた」

「その箒に余裕で勝つてるとはさすがだな」

「その言葉はこの試合に勝つてから、ね」

シャルロットはショットガンとマシンガンをそれぞれ展開する。

その瞳はラウラを捉えている。

「ここからが本番だね」

一夏は頷きを返す。

「ああ。見せてやろうぜ、俺たちのコンビネーションをな」

第三十二話 英雄投影

一夏は疾走。

ラウラのA I Cによる拘束攻撃を急停止・転身・急加速で何とか交わすと、ブレードを構える。

「ちよこまかと目障りな……!」

ラウラはワイヤーブレードを活用し、一夏を追い詰める。

「前方二時!」

「了解!」

一夏はシャルロットの指示通りにワイヤーブレードをくぐり抜ける。

シャルロットは射撃による牽制と、一夏の防御を同時に行っていた。

一夏はすばやくラウラに回り込む。

「ちっ……小癩な!」

一夏はブレードを振りかぶった。

その刃にはエネルギーが纏われている。

「無駄だ。お前の攻撃は読んでいる」

一夏はニヒルに笑う。

「なら避けてみるよ」

一夏は肩まで雪片式型を引く。その際、その刀身に光が纏う。突きの形。

「無駄なことをして！」

ラウラは予想通り、一夏の体をA I Cで固定した。

「剣にこだわる必要はない。ようはお前の——」

ラウラの機体に雪片が突き刺さった。

「なっ!?!」

A I Cが解ける。

一夏はその雪片式型の柄を持ち直すと、全力で押す。

その一撃は装甲に食い込んだ刃を更に押し込むことになる。

その食い込んだ状態で大きく横に薙ぎ払い、その装甲を砕く。

「貴様!?! 武器を投げたのか!?!」

「おいおい、誰が刃は斬りつけるものだって決め付けたんだよ」

そう、投げたのだ。

A I Cが一夏の機体を止めに来ると予想していたため、一夏は雪片式型を投擲した。

その読みは見事当たり、雪片式型は装甲を削り、一夏の機体は自由を得る。零落白夜は手を離れた瞬間に解除した。

もともと、零落白夜は意識をそちらに集めるための罠に過ぎない。

その零落白夜を恐れたからこそ、ラウラは一夏の機体を止めて、確実に零落白夜を防ぐ方法を取ったのだろう。

だからこそ、一夏はもう一度零落白夜を発動させる。

「今度はさせるものか」

ラウラは、一夏が行動に移る前にその機体を封じ込める。

「これで、私の勝ちだ」

ラウラは大型レールカノンを一夏に向ける。

その砲口を向けられても、一夏は余裕の笑みを崩さない。

このことを予測していたかのように。

「おいおい、忘れてるのか？ 今は二対一だぞ？」

「——!?!」

慌ててラウラが視線を動かすが、ゼロ距離まで接近していたシャルロットがショットガンの引き金を引く方が速かった。

ラウラの大型レールカノンは弾丸を受け、爆散する。

「一夏！」

「おう！」

一夏はすぐさまラウラにとび蹴りを放つ。

それはラウラの胸部に命中し、その機体を大きく吹き飛ばす。

その隙にシャルロットは大型機構槍を持って突撃する。

その機構はもう使えないが、それでも武器としては充分だ。

ランスがラウラの胸部を捉えた。

「くっ!？」

収納する時間も惜しむようにシャルロットはそのランスを投げ捨てる。

すぐさまシャルロットはシヨットガンを展開、引き金を引く。

ラウラは、一度、距離を取ろうとする。

それを一夏は回り込んで阻止する。

「目障りな！」

ラウラはワイヤーブレードで一夏の動きを牽制する。

そして、一瞬の隙をつき、瞬時加速により、一夏とシャルロットから距離を取る。

「一夏」

「任せろ」

一夏は再度雪片式型にエネルギーを纏う。
しかし、

「シャルル、エネルギー残量が少ない。これがラストチャンスだ」

そのシールドエネルギーが底をつきかけていた。

「それならば一撃入れれば私の勝ちのようだな」

ラウラの声に近い。視線を戻すと、懐に飛び込んできているのが見えた。

その両手にはプラズマ手刀が展開されている。

ラウラの言うとおおり、一撃でも入れられたら、その瞬間に雪片式型はその能力を失い、シールドエネルギーもゼロになるだろう。

つまり、一夏は、零落白夜を発動できている間にラウラに一太刀入れなければならぬのだ。

だから、ラウラは接近戦を挑んできている。

その縦横無尽の攻撃でシールドを削ればよし。

そうでなくても一夏に攻撃させる隙を作らせずに、その効力が切れるのを待つ作戦だろう。

「やらせないよー」

シャルロットは援護射撃を行う。

「邪魔だー！」

ラウラは一夏への攻撃の手を休めることなく、援護に入ったシャルロットをワイヤーブレードで牽制する。

そのどちらも高い精度とスピードを伴っていた。

「くっっ！」

「シャルル！」

被弾したシャルロットに気を取られたほんの一瞬の隙。

ラウラはその隙を逃すことなく、一夏の機体を蹴り飛ばした。

「——ちっ！」

その一撃に、一夏はすぐさま体勢を立て直そうとする。しかし、そこで雪片式型がその輝きを失った。

「くそ!! ここまでできてエネルギー切れか！」

「は……ははっ！ 私の勝ちだ！」

高らかに勝利宣言をするラウラ。

それもそうだろう。

一対一になった時点で、後はA I Cの網にかけてしまえばそれで試合が終わるのだから。

しかし、一夏は諦めていなかった。

ラウラに超高速で接近する影が見えているから。

「まだ終わってないよ」

シャルロットは瞬時加速により、一瞬で超高速状態へと移った。

「な……！　瞬時加速だ?!」

ラウラが始めて狼狽の表情を見せる。

事前のデータにはシャルロットが瞬時加速を扱えるなどは書かれていなかったのだらう。

「手札を簡単に見せるのは素人のやり方だよ。まあ始めて使ったんだけどね」

「な、なに……?　まさか、この戦いで覚えたというのか!」

シャルロットのその器用さに、ラウラは驚きを隠せないようだ。

「だが、私の停止結界の前では無力!」

ラウラは右手を突き出す。

そのA I Cの網はシャルロットの機体を捕らえた。

しかし、そのラウラの機体が衝撃を受ける。

ラウラがその衝撃の原因を探る。

それはすぐに発見されてしまう。

ラウラは足元に落ちていた雪片式型を見つけると、一夏に鋭い視線を向けた。

一夏は投擲の残心を取っていた。

一夏はまたしても、武器を投擲したのだ。

「貴様あ！」

ラウラは吼える。

しかし、その冷静さは失っていない。

雪片式型を手放し、対抗する術を持たない一夏は一旦無視し、シャルロットに集中する。

一夏が笑みを浮かべたことにも気付かずに。

「これで間合いに入ることが出来た」

「それがどうした！ 第二世代型の攻撃力ではこのシュバルツェア・レーゲンを墜とすことなど——」

ラウラは気付いた。

あるではないか。単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた武装が。

「この距離なら外さない」

シャルロットの盾の装甲が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。

六十九口径。パイルバンカー『グレイ・スケール灰色の鱗殻』
通称——『シールド・ヒアース盾殺し』

ラウラの表情が焦りを見せる。

まさに必死の形相。

「おおおっ!」

「やあああっ!」

シャルロットは左拳を強く握りしめ、叩き込むように突き出す。

その一撃は瞬時加速によって接近しているため、全身をAICで止めても間に合わない。
い。

ピンポイントでパイルバンカーを止めなれば直撃だ。

ラウラはその集中。

その一点に狙いを澄ます。

その網がパイルバンカーを捉えた。

「しまった!」

シャルロットは、その加速を止められてしまう。

そのパイルバンカーを突き出した形のシャルロットは悔しそうな顔を見せた。

「これで、これで私の勝ちだ!」

ラウラはプラズマ手刀を展開し、シャルロットに襲い掛かろうとする。

「なーんてね」

シャルロットが、その表情を変える。

それは、いたずらが成功した子供のような表情。

ラウラは、その背部に衝撃を感じた。

「なんだと!?!」

ラウラはすぐさまハイパーセンサーでその方向に注意を向ける。

そこには、何かを投擲したような一夏の姿。

そして、自分に突き刺さる形で停止しているのは大型機構槍。

シャルロットが投げ捨てた『祓』だ。

「死に損ないがあ!!」

「おいおい、俺なんか注目していいのか?」

その言葉に、ラウラはすぐさま、背後に跳ぶ。

しかし、

「逃がさないよ」

その回避行動は遅かった。

ラウラの腹部に大型の杭が叩き込まれる。

シールドエネルギーが集中、絶対防御が作動。

そのエネルギー残量を示したゲージは数字を減らしていく。

相殺し切れなかった衝撃が、深く体を貫いたのだろう。ラウラの表情は少し苦悶に歪んだ。

しかし、これだけで終わりではなかった。

六十九口径パイルバンカー『グレイ・スケール灰色の鱗殻』は連射が可能なのだ。

合計で四発の杭を打たれ、ラウラの機体が大きく傾く。

その機体にIS強制解除の兆候が見えたときだった。

ラウラの機体に異変が起こった。



私は負けるのか？

全身に走る衝撃はシールドエネルギーを削り取るだろう。

相手の力量を見誤ったのは間違えようもないミスだ。

しかし、それでも負けることは出来ない。

私は、自分の力で乗り越えなければならぬ。

あの人を守れなかった私は、弱さを嘆く。

欲しい。

力が。

約束を果たせる力が。

守ると、そう言ったにもかかわらず、守れなかった自分を払拭したい。

私を闇から光に引きずり上げた教官のような力が。

教官は私にとって憧れであって目標なのだ。

あの事件以来、力を求めた私は、『越界の瞳』と呼ばれる疑似ハイパーセンサーの移植手術を受けた。

危険性のなかったはずの処置は失敗し、後遺症を残した。

その後遺症のせいで、訓練に遅れを取り、あの人と約束した自己をも失いかけた。

今でもあの人の姿が目に残きついている。自分が守れなかった姿。

それ以来、私は最後の引き金を引くことが出来なくなった。誰かを失ってしまう恐怖が頭に過ぎる。

その時に教官に指導を受けた。自己を繋ぎとめたのが教官だ。

あの人たちは私にとって、とても大切な人達。

教官が、治療しているあの人を眺めて、いつも辛そうな顔を作った。

あの人も、笑いながらも、その体に涙を流していたのを知っている。それでもあの人は言うのだ。

あいつがいるから強くなれると。

これは、あいつのせいではないと。

だから——許せない。

あの人達にそんな表情をさせる存在が。

こんな思いをさせておいて、のうのうと守られ続けるその弱い存在が。

事件の原因となったあいつが。

そして、弱さを人のせいにする自分が。許せない自分が何よりも許せない。

だから敗北させると決めたのだ。

あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると。そして、私は許そうと

思った。それによって、私はあの事件を払拭すると誓った。

『——願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。変革を望んでどうするとういうのだ。私は私でないといけないのだ。

(ラウラはラウラ。それは、識別上の記号なんかじゃない。ラウラという一人の人間を

確立するものだよ)

ふと、あの時のことが思い出される。

私が、自分と言うものを手に入れたときのことだ。

(ねえ、ラウラ。君は何になろうとしてるの？ 千冬姉？ それともっと別の人？)

あの時、私はなんと答えた？

そうだ、答えられなかったのだ。

(なら、良かった。ラウラは誰でもないラウラ・ボーデヴィツヒにならないと。それとも

何？ 千冬姉になりたい？)

違う。

私は、憧れはしても、教官の『よう』になりたいとは思ったことはあるが、教官になりたいなどとは思ったことはない。

私は自分を手に入れた。

ただの戦闘人形などではない。

私は、私だ。一人のラウラ・ボーデヴィツヒという女だ。

それが私の強さだ。

自己の確立こそ私の強さ。

その『私』に入ってくるな!!

— Damage Level…… D.

— Mind Condition…… Uplift.

おい、止めろ！

私は認証などはしない！

— Certification…: Not Clear.

— 《Valkyrie Trace System》…: boot.



沙良は、ラウラの機体に起こった事態に誰よりも早く気付いた。

— VTシステム!?

ありえない。

発動条件から言って、ラウラが借り物の力を求めるとは思わない。

— ならば、なぜ？

沙良は、頭によぎった答えにまさかと呟く。

流石にそれは無い。

そう言い切り切りたいが、それを、モニターのラウラが否定する。

ラウラはこう叫んだのだ。

『止めろ、こんな力など望んでいない』

それは、一つの事態を示していた。

「搭乗者の認証というストッパーを外してあるのか？」

VTシステムとは、過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステム。

その性質上、搭乗者に大きな負荷と負担を与えるため、その発動には搭乗者の許可が必要はずだ。

しかし、ラウラにその許可を出した素振りが見えない。

沙良は、怒りに拳を握る。

ドイツ軍はここまでするのか。

モニターには、ラウラが支配から逃れようともがいている姿が映し出されている。

しかし、それもすぐにVTシステムに抑えられてしまうだろう。

『や、めろ。私を……消さないでくれ。私は、私なのだ……』

「――」

沙良はその言葉を聞くと、駆け出した。

「沙良!?!」

「ソファイ! 付いてきて!」

今、会場は緊急事態レベルDとしている。

この来賓が多くいる中で、ラウラがVTシステムを積んでいると知れたら、ラウラの立場が危うい。

あらかじめ千冬に情報を流しておいて良かった。

アリーナは緊急シャッターが降りている。

おかげで、中の様子は管制室からしかわからなくなっているだろう。

先ほど見ていたモニターも通信が切断されたのか、何も表示されていない。

「どこに行くつもり!？」

「アリーナに乗り込む!」

「何で!？」

「あれの情報は前々から掴んでいた。姉さんもその存在を許していない。ISに無様なシステムを組み込むなんて僕だつて許さない。それが、千冬姉のデータならなおさらだよ」

それは表立っての理由。

沙良はピットに向けて足を動かす。

「正直に言いなさい」

「ラウラは知り合いだ。黙ってみているなんて出来ないよ」

「はあ……ホント身内には甘甘ね。でも、セラ。あなた機体の損傷レベルが——」

「オルカで出る」

「許可を出すと思つて——」

「出すよ。だって、ソフィが守ってくれるんだもん。でしょ？」

沙良は、ソフィアの言葉に言葉を重ねる。

自分が駄々を捏ねているとわかつてる。

しかし、ここは譲れないのだ。

「……セラ」

「無茶はしないから……ね？」

二人の足は止まっている。

既にピットの前まで来ているのだ。

沙良は、必死に懇願する。

「はあ……いいわ。いつてらっしやい。後始末はやっておくわ」

「ソフィ！」

沙良は顔を輝かせる。

「駅前のパフェで勘弁してあげる」

「ソフィ大好き！」

「ええ、私もセラが大好きよ」

ソフィアはその身に青を纏う。

「行くわよ。責任はセラが取りなさいね」

「わかってる。後で千冬姉にしぼられるよ」

沙良はすぐさまアリーナに走り行くのだった。

第三十三話 ラウラ・ボーデヴィツヒ

沙良がアリーナに到着したとき、既にラウラの機体はその変異を終えていた。

ラウラをそのまま表面化したようなボディラインに最小限のアーマーが付属している。

頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。

そして、その手に持つのは、

「雪片……?」

見間違えるはずもなかった。

それは千冬が振るった刀。

千冬だけの力。

一夏が雪片式型を構えた。

「一夏、ダメ!」

沙良の叫びも間に合わない。

漆黒の機体は一夏の懐に飛び込む。

居合いに見立てた刀を中腰に構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。それは紛れもなく、千冬の太刀筋だった。

「ぐうっ！」

一夏の構えた雪片式型が弾き飛ばされてしまう。

漆黒の機体はそのまま上段の構えに移る。

「一夏！」

沙良は首元に手を持っていく。

すると、黒のチョーカーが反応を返した。

「行くよ、オルカー！」

沙良の身体に黒の装甲が纏わりつく。

縦一直線、落とすような鋭い斬撃にその身を割り込ませる。

「シャルル！ 一夏をつれて離れて！」

沙良はすぐさま『襖』を展開して、漆黒の機体に斬りかかる。

足元を薙ぎ払い、そのまま返す手で上段を払う。そのまま腰を入れて、斬り下ろしを放ち、回転を加えて突きを放つ。

それは全て雪片に似せたブレードによって防がれてしまう。

相手が千冬のデータならまだ遣り様がある。同じ篠ノ之一門として、その剣術の癖は

分かつている。

沙良はタイムリングを読み、一瞬で戦闘から離脱する。

その着地と同時に、一夏が拳を握り締めて漆黒のISに向かおうとする。

「うおおおおおっ！」

「ちよつと!?!」

それを箒が一夏の頭を掴み、後ろへ叩き落すことによって止める。

「馬鹿者! 何をしている! 死ぬ気か!?!」

「離せ! あいつふざけやがって! ぶつ飛ばしてやる!」

一夏が怒るのも無理はない。

あの剣技は一夏が千冬に初めて教わった、『真剣』の技。

沙良もそこにいたからよく覚えている。

千冬は語った。

『いいか、一夏。刀は振るうものだ。振られるようでは、剣術とは言わない』

『重いだろう。それが人の命を絶つ武器の、その重さだ』

『この重さを振るうこと。それがどういう意味を持つのか、考えろ。それが強さとい

うことだ』

沙良は覚えている。千冬の厳しく、けれどどこか優しい眼差しを。

「どけよ、箒！ 邪魔をす——」

だから沙良は一夏の頭部を蹴り飛ばした。

「沙良!?!」

シャルロットはその沙良の行動に驚きを隠せない。

「今の一夏に、あれを相手にする資格なんかはないよ」

沙良は一夏に言い放つ。

一夏は言葉を返せない。

「頭を冷やして。それぐらいの時間はあるから」

V T システムは迎撃だけを行うようにプログラムされている。こちらからアクションを仕掛けなければ、何もしてこない。

一夏はゆっくりと体を起こした。

その瞳には先ほどの感情のブレは見当たらない。

「うん、いい顔になった」

「手間をかけさせたな、沙良」

一夏は白式のエネルギーを確認している。

そのゲージは非情にも赤色に染まっている。

「ダメだ。戦闘に回せるエネルギーがない」

『非常事態発令！ トーナメント全試合は中止！ 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに避難すること！ 繰り返す！』

「聞いている通り、お前がやらなくてもやらなくても状況は收拾されるだろう。だから――」

「無理に危ない場所に飛び込む必要はない、か？」

箒の言葉に、一夏は言葉を重ねる。

「そうだ」

箒の言っていることは正しい。

理路整然としている。

しかし、それでは一夏は止まらないであろう。

それは沙良も同じである。

「違うぜ箒。全然違う。俺が『やらなくちゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いてしまつたらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない。俺は、あいつを助けたいからやる。それで充分だ」

結果や過程がどうであれ、見捨てるなんて出来ねえよ。そう笑う一夏に、沙良は喜色を得た笑みを見せる。

「ええい、馬鹿者が！ ならばどうするといふのだ！ エネルギーはどのみち——」
「無いなら他から持つてくればいい。でしょ？ 一夏」

シャルロットがふわりと沙良たちの元へと近づく。

「普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイブならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か!? だったら頼む！」

「けどー！」

シャルロットが沙良と一夏に指差して、強い口調で言う。

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「もちろん」

声が重なる。

「じゃあ、負けたら二人とも女子の制服で通ってもらうからね」

「うっ……いい、いいぜ？」

「え？ 僕もなの？」

沙良は『襖』を肩に乗せる。

「じゃあ、一夏はシャルルにエネルギー分けて貰ってて。向こうもそろそろ我慢の限界みたいだしね」

そういつて示す先には、電流を体に纏わせ始めた漆黒の機体。

「たぶん、有り余ったエネルギーが機体を侵食してゐるんだろうね」

沙良は身を低く構える。

刃を下に向け、持ち手を高く構える。

篠ノ乃流薙刀術の構えだ。

沙良は一瞬でその身を機体に肉薄させる。

沙良は刃に近い方の手を離し、もう片方の手だけで薙刀を大きく振るう。

それが当たるとの瞬間、沙良はその身を反時計回りに回す。その流れで、薙刀を振るって
いる右腕を引き上げると、その形は自然と上段の構えとなる。

それを左手を利用し、叩きつける。

その上段の一撃も防がれてしまうが、沙良はすぐさま左手で薙刀を持ち直し、右手を
柄の先に当てることで、薙刀をすばやく背に回す。

それを手首の捻りを以って下段に振るう。

その一撃ですらも防がれてしまう。

「千冬姉のデータは流石だね」

それでも沙良は、連撃を止めない。

自分に危害が加わるはずがないのだ。

沙良が踊るように薙刀を振るう。その隙を打ち消すかのように飛び交う水弾。絶大の信頼を置く右腕の掩護を受け、沙良は踊り続ける。

「一夏！」

「おう！」

一夏は右腕の装甲だけを具現化させている。

防御はなし。当たれば即死、良くて重症。

それをさせないために沙良が居るのだ。

「一夏に刃は振らせない！」

沙良は連撃のスピードを上げる。

その沙良の後ろでは一夏が雪片式型を強く握る。

「零落白夜——発動」

一夏の雪片式型は普段のエネルギーを纏う姿ではなく、日本刀のような形に集約されたエネルギー刃が展開されている。

沙良が漆黒の機体の刀を上弾き飛ばす。

その隙を一夏は狙う。

しかし、漆黒の機体はそのまま一夏に袈裟斬りを放つ。

それは千冬と同じ太刀筋。

しかし、それは千冬のものではない。

「ただの真似事だ！」

一夏は叫んだ。

腰から抜き放つて横一闪、相手の刀を弾く。

そしてすぐさま上段に構え、縦に真つ直ぐ相手を断ち斬る。

沙良はそれをよく覚えていてる。

一夏がよく練習していた動き。

それは一闪二断の構え。

一夏の雪片式型が漆黒の機体を切り裂いた。

その機体から、ラウラが開放される。

その一瞬、沙良はラウラと目があつた気がした。

それはひどく弱っている捨て犬のような目。

助けて欲しいと言っているかのような目。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

一夏も、沙良と同じ思いを抱いたようだ。

一夏は力を失つて崩れるラウラを抱きかかえる。

その言葉が聞こえたかどうかはラウラにはわからないだろう。



全く、お前たちはどうしてそこまで他人のために躍起になれるのだ。
私など捨て置けばいいものを。

『僕がそんなのこことすると思う？』

思わないな。

それが貴方だ。どこまでも他人に厳しく、どこまでも身内に優しい。

『俺は気付いてたら動いてた。理由なんてそんなもんだ』

ふ、貴様もとんだ馬鹿のようだな。

『助けてやったのに、馬鹿とはなんだ』

……強さとはなんだろうな。

『そんなの、人それぞれだよ』

『俺は、心の在処。己の拠り所、だと思う』

己の拠り所……。

『自分がどうありたいか。その意思の強さだろ？ 大切なのはさ』

『やったもん勝ちだよ。遠慮してたら損しかないよ？』

しかし、私は……守れなかった。

『まだそのことを言うの？ 『ラウラ・ボーデヴィツヒ』』

っ!?! ……そうだ、私は私でしかない。

『お前の人生ぐらい、お前が好きに生きないとな』

では、お前は？ お前はなぜ強くあろうとする？ どうして強い？

『俺は強くないよ。まったくな』

断言、か。

あれほどの力を持ってなお、強くないという。それが理解できない。

『けれど、もし俺が強いつて言うのなら、それは——』

それは……？

『強くなりたいからでしょ？』

『あ、人の台詞取ってんじゃねえよ!』

『かっこつけようとしてー』

『サーラー』

『ごめんごめん』

……仲が良いな。

『家族だからね』

血も繋がってないのにか？

『家族ってのはな、血のつながりがなくても、心が繋がっていたらそれで良いんだ』

……家族、か。

『俺は、誰かを守ってみたい。自分の全てを使ってでもただ誰かのために戦ってみたい。それが、あの事件からずっと強さを求めている理由だ』

それは、まるで……貴方達みたいだな。

『家族だからな』

嬉しそうに笑う男だ。

『ポジティブだろ？』

『ただの馬鹿とも言おう』

『サーラー？』

ふふ、お前らは。

『ねえ、ラウラは吹っ切れた？』

博士……。

『もう、ここでは博士って呼んじゃダメだって』

では何て呼べば……。

『また、沙良って呼んでよ』

しかし、私には……貴方を守れなかったのに。

『もう、何で君たちはこうも面倒くさいのさ』

『おいおい、俺を含めるな。俺はもう吹っ切ったんだ』

お前は……強いんだな。私はまだそんな風に考えられない。

『でも、僕はラウラに名前を呼んでもらえないと悲しいよ』

呼ぶ資格など……

『ああ！ もう、間怠っこしいな！ ラウラは僕を沙良って呼ぶの！ 分かった!？』

は、はい！

『俺は一夏でいいぜ』

……お前にとっては、先ほどまで殺気を向けていた相手だぞ？

『そんなの関係ねえよ。俺は今、こうしたいと思ってやっただけだ』

ふ、ふふ。一夏に沙良……か。

『お前は何かしたいんだボーデヴィツヒ?』

私は……私は何かしたいんだろうな。

今まで、考えたこともなかった。

ただ我武者羅に生きてきたただけだ。過去から目を逸らすかのような

『じゃあ、ちょうど良かったじゃん。この三年間でそれを見つければ良いよ』

……本当に、甘いなお前らは。甘いじゃすまない。劇甘だ。

私に自己を与えてくれただけではなく、道まで標してくれるなんて。

『おいおい、標しただけで、選ぶのはお前なんだぞ?』

わかっている。

ただ、短い期間でもいい。

私も同じ景色を見たくなくなったただけだ。



「う、あ……」

「気がついたか」

その声に、ラウラは身を起こそうとする。

「くっ」

「無茶をするな馬鹿者」

その声は自らが敬愛してやまない千冬のものであった。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理をするな」

千冬の話題の誘導にラウラは引つかからなかった。

当事者として、誤魔化されるわけにはいかない。

「何が……起きたのですか……？」

ラウラは身を起こし、ただ真つ直ぐに千冬を見つめる。

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

そう言われても引き下がるような相手でもないのを充分承知しているのか、千冬はここだけの話と無言で示すと、口を開いた。

「VTシステムを知っているな」

「はい。しかしあれは——」

「そう、IS条約で研究・開発・使用全てが禁止されている」

「それが……積み重ねていたのですね」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の

意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するように細工されていたらしい。現在、学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

ラウラはきつくシートを握る。

「私が、力を求めたからですな」

勝ちたいと願った。その結果がこれだ。

ラウラは俯いたまま顔を上げることが出来ない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる。

「お前は誰だ？」

それはいつも沙良がする問いかけ。

「私は………私は、私です。私は、ラウラ・ボーデヴィツヒです」

言葉に出来た。

自分を認めることが出来た。

そのことがラウラの涙腺を緩ませる。

「それなら話は早い。後は、お前の生き方を決めるだけだ。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな」

「あ……………」

それは、特殊意識干渉での会話とまったく同じ。

まさか、千冬が自分を励ましてくれるなど思いも寄らなかつたラウラは口をぽかんと開けたまま呆けてしまう。

千冬は席を立ってベッドから離れる。

もう、言うことはないといったように。

千冬は、ドアに手をかけ、振り向くことなく言葉をかける。

「たっぷり悩めよ、小娘」

千冬はそう言い、部屋から出て行ってしまふ。

「ふ、ふふ……………ははっ」

何て姉弟だ。

まったく同じことを言う。

結局は自分で考えろと、そういうことではないか。

その頬には涙が伝っている。

完敗だ。

織斑一夏。

——貴様には完膚無きまでに敗北したわけだ。

だが、それは決して悪いことではない。
そのおかげで、スタート地点に立てたのだから。



「邪魔するわよ」

そう言つてノックもせずに入り込んでくる小柄な少女。

「貴様は……」

「風鈴音。鈴で良いわよ」

あつげらかんと言い放つと、ベッドの横にあつた椅子に腰掛ける。

「どう、一夏は。強かつたでしょ?」

鈴音は気負いもなく話しかけてくる。それがラウラにとっては信じられない。

「……お前は恨んでないのか?」

「ただ模擬戦やっただけで恨む必要があるの?」

「お前はそれでいいのか……?」

「アンタは何時までも後ろ向きね」

「お前らが前向きすぎるのだ」

「そうかもね」

鈴音はケラケラと笑うと、ラウラの言葉を待つ。

「どうして、悪意を向けた人間にこうも普通に話しかけてくるのだろうか。」

「どうして、何も無かったかのように接することが出来るのだろうか。」

「お前は、あの事件で一夏を恨まなかったのか？」

「バカね、アンタ。一夏を恨んでも仕方ないじゃない。恨むなら足手まといになった自分自身よ。私がいなければあの二人は助かったかもしれない。私を守るために二人は傷を負ったのかもしれない。それがあたしの罪」

「……お前も、私も、罪の感じ方は一緒なのに、どうしてここまで向きが違うのだろうか」
ラウラは自分の胸に手を置く。

「……どう、一夏は。強かった？」

同じ問いかけ。

「ああ、強かった。私にはなかった強さだ。私が欲していた強さだ」

「そう、なら良かった」

「……お前も、似ているな。あの二人に」

「一緒に居ると、自然に似てくるのよ。困ったことにね」

「そうか」

会話が途切れる。

ただ、静寂に身を任せると、鈴音が席を立った。

「じゃあ、あたしは行くわ。セシリアには一応謝つときなさい」

「ああ」

ラウラは考えるように俯く。

それをどう受け取ったのだろうか、鈴音が声をかけた。

「……一発、殴ってあげようか？」

「助かる。と言いたいところだが、大丈夫だ。私は前を向いたのだから」

そう、と笑った鈴音は、晴れやかな笑顔を浮かべ、部屋から出て行った。

「……本当に、甘い人間だらけだ」

ずっとここに居たらふやけてしまいそうな程のぬるま湯。

「だが、それを悪くないと思う私も……確かに存在するのだ」

第三十四話 戦いの後に

『二年、決勝試合は、デユノア・織斑ベアの勝利とし、トーナメントの全日程は終了します。お疲れ様でした。表彰式などは事故の影響を受け、執り行いません。今日を以つて、学園は三日間の休養に入ります。各人、体を休めてください。授業の開始時間などは各自個人端末で確認の上——』

「へー一夏たちの優勝だつて。おめでとー」
「おう」

沙良たちはのんびりと食事を取っていた。

「沙良の予想通りになつたね」

「そうだねえ。まあ、僕が進言したところもあるしね。あ、一夏、七味取つて」

「はいよ」

「ありがと」

当事者なのにどこかのんびりしすぎではないかとクラスの女子は言っていたが、先ほどまで教師陣から事情聴取されていたのだ。

そんなに優勝で騒ぐ気にもなれないし、事件の話を出す気にもなれない。

開放されたのは全ての試合が終わっており、夕食の時間も過ぎていたのだが、特例として、食事を取らしてもらえなくなった。

「ふー、食べた食べた。食事取らしてもらえて良かったよー」

沙良はお腹をぽんぽん叩き、ふうと息をつく。

「そういえば、沙良に聞きたいことがあるんだが」

「んー？」

「あの時のISでの会話みたいなのってなんなんだ？ あの、プライベート・チャンネルとは違う、なんか特別な空間みたいなどころでの会話なんだが」

「ああ、相互意識干渉のこと？」

「相互意識干渉？」

一夏が首を傾げる。

「僕も聞いたことある気がする。IS間情報交換ネットワークの影響って言われてて、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が起こるっていうあれ？」

「そう、そのこと」

シャルロットも少しの知識はあるようだ。

「波長……波長ねえ。なんか良く分からんって感じだな」

「ISはよくわかんない現象や機能がかなりの数あるよ。姉さんが全機能を公表してな

い上に現在も失踪中だし、自己進化するように設定してある部分があるから、姉さんにも全部を把握するのは無理なんだって」

「うわっ、東さんらしいな、それ……」

「あの人は自分に興味のないことはどうでもいいって人だからなあ」

どうせ調べるのが面倒くさいだけだろう。

沙良はそう思っている。

「あ、三人ともここにいたんですか。さつきはお疲れ様です」

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかつたですか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。

なにせ先生ですから」

えへんと真耶が胸を張る。

その真正面にいた一夏は、大きな膨らみが重たげにゆさつと揺れるのに、さつと顔を背けてしまう。

「……………」

「一夏のスケベ」

「一夏のエッチ」

ぼそつと呟いたのだが、一夏の耳には確かに届いた。

「な、なにっ？　ちよつと待て二人とも！　それは誤解だ！」

「ふーん」

一夏はあたふたとしている。

「？　どうかしましたか？」

「い、いえいえ。なんでもないです」

「そうですか。それよりも、朗報です！」

真耶がグツと両手拳を握り締めてガッツポーズ。

そのまたしても揺れる胸の膨らみに一夏はまたしても顔を背ける。

「なんとですね！　ついについて今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！　そんなんですか！　てつきりもう来月からなるものとはかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があつたので、もともと生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の三人に使つてもらおうって計らいなんですよー」

それは嬉しいと、沙良も機嫌を良くする。

トーナメントの疲れを湯船でゆつくり癒せるとは幸運すぎる。

「ありがとうございます、山田先生！」

一夏も嬉しかったのか、感動の余り、真耶の手を握り締めている。

両手を両手で包み込み、真耶を見つめるその瞳は凄く輝いている。

「あ、あのつ、そんなに近づかれると、先生ちよつと困りますというか、その……」
「はいっ?」

一夏は何のことだか分からずに首をかしげる。

「い、いえっ! なんでもありません! なんでもありませんよ?」

真耶の視線が泳ぎだす。

「先生?」

沙良は話を促すことにした。

「と、ともかくですね。三人は早速お風呂にどうぞ。肩まで浸かって、百数えたら疲労もスツキリですよ!」

「はい!…じゃあ早速、風呂に——あ」

一夏は何かに気付いたかのように言葉を止める。

「ん?…どうしたの?」

沙良はわかっていないのか、首をかしげる。

一夏は沙良に分かるように、視線でシャルロットを示す。

「ああ」

沙良はようやく言っている意味がわかった。

シャルロットは未だ男子で通している。

一緒に入るわけにはいかないといったところか。

「え、えーと……」

「どうしたんですか？ ほらほら、三人とも早く着替えを取りに行ってください。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣所の前で待ってますね。じゃあ」

真耶はすたすたと歩いていってしまふ。

「どうしようか」

沙良は二人に問いかける。

何か案はないの？

そう目が語っている。

「と、とりあえず着替えを取りに部屋まで行こうよ」

シャルロットは問題を先送りにする。

「おう……。何かしらの名案が思いつくのを天に委ねよう」

とりあえず、三人は部屋に戻ることにした。

沙良は部屋に入ると、とりあえず着替えを用意する。

その間、何かいい考えはないものかと考えるが、何も浮かばない。

沙良としてはシャルロットにゆっくりお風呂に入らしてあげたいのだ。

「むう」

しかし、何も思いつかない。

これがエスパーニヤの研究員たちや、ソフィアならまだ、一緒に入るといふ選択肢が生まれるのだが、今回はそうはいかない。

沙良としても、抵抗がないわけじゃない。

「もう、部屋で浴びちゃえば」

「山田先生が脱衣所の前で待ってるんだから、行かなかつたら呼びにこられるだけだよ？」

シャルロットの提案は、そう簡単にはいかない。

時間をかけても、ただ風呂の準備が進むだけだった。



脱衣所で、背中を合わせる影が二つ。

その空間に、一夏はいない。

「逃げたね、一夏」

沙良はため息をつく。

「怪我を言い訳にするとは一夏も考えたね」

シャルロットもため息をつく。

そして、そのまま沈黙に包まれてしまう。

「……………」

「……………」

沙良はどうしようかと考える。

沙良としては風呂は好きだ。

スペインでは研究職ゆえにシャワーで済ませることも多く、今は別にシャワーでも良い。
い。

ならば、シャルロットに入ってもらわなければならない。

決勝まで出て、誰よりも試合数は多い。

それに、事件に関わっているので、事情聴取にも体力を取られているだろう。

「ねえ、シャルル」

「は、はいっ!?! なんでしょう!?!」

「何で敬語?」

沙良は背中合わせを止め、シャルロットと向き合う。

「シャルルも今日は疲れたでしょ? お風呂に入ってきたよ。僕はここで時間つぶして

るからさ。頃合いを見て部屋に戻るよ」

「え？ 沙良はどうするの？」

「一緒に入るわけにもいかないしね。僕は部屋のシャワーで良いよ。シャルルたちと違って、準決勝後に一回シャワー浴びてるし」

実際、その後にもう一度戦闘行為を行っているため、理由にはなっていないのだが、そこはなんとでも言える。

「い、いいよ。僕が脱衣所で待ってる。沙良お風呂好きなんでしょ？」

「うん、大好きだよ」

沙良は満面の笑みで答える。

なんせ、わざわざバルセロナの研究所に大浴場を作るぐらいだ。

余裕があるときにはよく大浴場を利用していた。

「でも……シャルルも疲れてるだろうし、ゆっくりと湯船に浸かった方が……」

沙良は折れない。

シャルロットにはゆっくりして欲しいのだ。

「い、いいの！ 僕のことには気にしないで！」

「シャルル、もしかして、お風呂嫌い？」

「そ、そう！ うん、そうだよ！ あんまり好きじゃないかな！」

シャルロットはあからさまな態度なのだが、沙良はシャルロットの言うことを鵜呑みにする。

「シャルルがそういうならそうなんだろうね」

沙良の迷いの無い信用に、シャルロットは一瞬胸が痛むが、そんなことはどうでも良い。

「まあ、西洋文化はあんまり浸かるってことをしないもんね」

沙良は一人で納得していた。

沙良はとりあえずはシャルロットの視界に入らないように服を脱ぐ。

きれいに畳むと、すぐに使えるように、バスタオルを取りやすい位置に置き、タオルを腰に巻く。

沙良は大浴場などを利用する際は必ずタオルを腰に巻くようにしている。

バルセロナの研究所では何度か襲われそうになるという自体が発生していたので、沙良は大浴場を利用する際にはタオル着用じゃなければ落ち着かないのだ。

「じゃあ、お風呂いただくね」

「う、うんっ。ごゆっくり」

なぜかおっかなびつくりの返事が返ってきたが、沙良は気にしないことにした。

沙良は大浴場の引き戸を開く。

「おお。これはこれは」

一言で言うなら『広い』だろう。

大きな湯船が一つに、ジェットやバブルのついた湯船が二つ。

それに檜風呂が一つ。

さらにはサウナや全方位シャワー、打たせ湯までついている。

「無駄に多機能だなあ」

バルセロナの大浴場は、大きな湯船が一つと、大き目の檜風呂が一つだけなので、その広さは比べ物にならない。

「まあ、人数の差かな」

沙良はゆったりとした足取りで、桶を拾い、体をお湯で流す。

「シャンプーシャンプー」

そして、その髪を丁寧に洗っていく。

その長すぎず、短すぎない髪型はゆったりと泡に包まれていく。

「ふん、ふん」

沙良は機嫌よく、鼻歌を歌う。

「ん？ 今、流したのってシャンプーだっけ？ コンデイションナーだっけ？」

沙良は、ピタリと手を止める。

「まあ、もう一回洗えばいいや」

意外と疲れてたんだろなああと沙良は呟く。

沙良は、疲れを取るために、手早く体を洗うと、大きい湯船に体を沈める。

「ん、ふう……はあ、気持ちいいや」

沙良は全身に広がる安堵感に息をつく。

心地良い圧迫感と疲労感に沙良は瞳を閉じる。

その心地よさに、体を委ねる。

そのまま状態が何分か続いた。

沙良は、おもむろに瞳を開くと、声を上げる。

「湯船に入る前にはかけ湯をしなよ、シャルル」



「き、気付いてたの!?!」

「そりゃ気付くよ」

沙良はそう言い、また瞳を閉じる。

その沙良に、シャルルは動揺を隠せない。

(てか、なんでそんなに冷静なのさ!?)

とりあえず、言われたとおり、かけ湯をし、湯船に足を入れる。

「お、お邪魔します」

「どうぞ」

沙良は、その体を動かすことなく、返事をする。

(なんか、沙良が色っぽい……)

シャルロットはお湯に肩まで浸かると、ゆっくりと沙良に近づく。

「シャルルもやっぱお風呂入りたかったんだね。じゃあ、僕はゆっくり出来たし、シャルルもゆっくりと浸かりなよ」

「ま、待つて。僕が一緒だと、イヤ……?」

「別にそういうわけじゃないけど、シャルルが落ち着いて入れないでしょ?」

「大丈夫だから、ね? その……話があるんだ。大事な話」

その言葉に沙良はその体をもう一度湯船に沈める。

その体はこちらに気を使つてか、背中を向けている。その気遣いにまた嬉しくなってしまう。

シャルロットは、その背中に自分の背中を合わせる。

「あの、ね。その……ありがとう」

「何が？」

「お母さんを助けてくれて」

「じゃあ、どういたしまして」

「それと、『私』をデュノア社から助けてくれて」

「何のことかな？」

沙良は誤魔化す。

しかし、シャルロットは知っている。

（私のために交渉してくれたんだよね）

沙良は、シャルロットのことをスペインが処理する、という条件でシャルロットの身柄をデュノア社から受け取っていた。

その処理に専用機を返さなければならぬらしいが、それでも、無理やり押し付けられた専用機だ。自由と天秤にかけると自由に傾いてしまうのは仕方ない。

デュノア社としても、国際問題に発展する爆弾を抱えるのと、テストパイロットを失うのならば、確実に後者を選ぶだろう。

スペインに、メリットなどない。

それでも、沙良は動かしたのだ。そのメリットのないシャルロットを助けるために。

「僕、ハハハにしようと思う」

「そっか」

「ううん、ここにじゃない。沙良の……近くにいても良いかな？」

「僕の？」

「うん。沙良は言ったよね。僕に頼って良いって。だから、頼ってもいい？」

「うん」

「僕ね、嬉しかったんだ。自分を殺さなくてもいいって、そんなこと言われたのは初めてだったから」

シャルロットは、背中を向けている沙良の肩に手を触れる。

「シャルル？」

そのまま沙良に後ろから抱きついた。

「沙良がここに居るから、僕もここに居たい。沙良のおかげで自由になったけど、その分居場所もないんだ。だから、沙良の近くに、居場所を……作ってもらえないかな？」

「……シャルル」

「シャルロット」

「呼んで良いの？」

「そう呼んで欲しいの」

「わかった」

沙良は、シャルロットの手の上に手を重ねた。

「——!? ただでさえドキドキしてるのに!？」

シャルロットは言いたいことを全部伝えたと、今まで意識していなかった、今の体勢に気付いた。

（はわわわわ。ぼ、僕なんて体勢を……）

今のシャルロットは胸を押し当ててる形で沙良に抱きついている。

（……沙良、胸が当たっていても何も思っていないよね……）

シャルロットは、女としての自信がなくなっただけ。

「ねえ、シャルロット」

「は、はひい!」

急に呼ばれて、声が裏返る。

「な、なになかな?」

「明日から三日間用事ある?」

「えっ? と、特にはないけど」

沙良は、それは良かったと前置きするところだった。

「明日、エスパーニヤに行くよ」

第三十五話 その前に

沙良は朝早くから空港に来ていた。

出発は九時。

今の時刻は八時十八分。

そろそろチェックインの準備をしていた方が良さだろう。

「シャルロット、そろそろチェックインしようか」

「う、うん」

シャルロットは、緊張しているのか、いつもよりも硬い表情をしている。

「そんなに硬くならなくても良いよ。ただ、帰化の手続きをしに行くだけだから」

「う、うん……」

それでも、シャルロットの表情は変わらない。

沙良はどうにかしてあげたいと思うのだが、これは本人の問題であるため、難しい。

「むう」

沙良は腕を組んで考えてしまう。

それを見たシャルロットが慌てて笑顔を作る。

「さ、沙良？ 僕は大丈夫！ ほら、ね？」

しかし、その笑顔も強張っている。

沙良はその笑顔を見て、決めた。

本社に行く前に、何とかして緊張を解してあげようと。

日本からスペインまではおおよそ九時間。

時差はおおよそ九時間だ。

バルセロナに着くのは向こうの時間で九時頃になるだろう。

本社に行くのは十時頃と伝えている。

「よし、決めた」

沙良は携帯端末を手に、本社にメールを送る。

そのメールの内容は一行。

『時間変更。十七時から本社でおねがい』

「うん、これでオツケーだね」

沙良は携帯端末をしまう。

「沙良？」

「ううん、なんでもないよ。そろそろ行くこう？」

「うん」

沙良は行動を促す。

沙良とシャルロットは搭乗口に向かうのであった。



「ねえ、沙良？」

シャルロットは沙良に声をかける。

「何？」

それを不思議そうな顔をして聞き返す沙良。

「いや、いや、なんていうかあ……」

「ん？」

「SQ社に、行くんだよね？」

「うん。行くよ？」

それがどうかしたの、と沙良は首を傾げる。

「いや、なんて言うんだろ」

シャルロットは、この状況にぴったりと来る言葉を探す。

「何で僕ら観光してるの？」

シャルロットたちは大通りを歩いていった。

それは日本とは趣きが違い、スペインという国を良く表している。

町中のいたるところには彫刻が立ち並び、芸術的な建築物が立ち並ぶ。

それはアントニオ・ガウディが遺した芸術品。

建築芸術の街、バルセロナ。

既にかサ・ミラや、サグラダ・ファミリアなどの有名なスポットには足を運んでいる。

「僕と一緒に嫌？」

沙良は悲しそうな顔を作る。

「そ、そういうのじゃないよ?! むしろ、その、物凄く嬉しいというか、もつと一緒にいたいと言うか」

シャルロットは後半モジモジしながら答える。

「なら良かった」

先ほどの悲しそうな顔から一変。破顔一笑、可愛らしい笑顔を作る。

「~~~~~っ!!」

その顔を見て、シャルロットは顔を赤くする。

そして、実感するのだ。

自分は沙良が好きなのだ。

「見て見て、シャルロット！ あそこ、ほら。大道芸やってるよ。見に行こうよ！」

沙良はシャルロットの手を掴むと、そのまま気の向くままに歩いていく。

「~~~~っ！」

(手！ 手繋いじやつたあ！)

シャルロットの葛藤も気付かぬように、沙良は自由に通りを探索する。

「この通りはね、ランブラス通りっていつてね。バルセロナといえばここ！ ってぐら

い有名なメインストリートなんだ」

「へ、へー」

シャルロットはそれどころではないのだが、沙良は楽しそうに解説をしてくれる。

「さつき見てたデパートが、この通りの始点E^{エル}l^{エル} C^コo^ンr^テ I^{イン}g^グr^レe^ス。近くに

あつた大きな広場が有名なカターニーヤ広場だよ」

沙良は嬉しそうに語る。

(よっばどスペインが好きなんだろうね)

フランスに対していいイメージを持たないシャルロットとしては沙良の笑顔が眩し

く感じる。

「この通りのことを、スペインの詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカが「終わってほしくない」と願う、世界に一つだけの道」と評したんだ。僕もそう思うよ」

「終わってほしくない」と願う、世界に一つだけの道……か」

シャルロットはふと思う。

（僕も、この状態が続けば良いなって思うよ）

手を繋ぎ、街を探索する。

フランスにいた頃にはこんなことが出来るなんて考えられなかった。

——本当、ずっと続けば良いのに。

シャルロットは思わず手に力を込める。

「シャルロット？」

それを何か言いたいことがあると思ったのか沙良がこちらを見ている。

「ううん、なんでもない」

シャルロットは笑顔を返す。

その自然な笑顔に、沙良も笑顔を返してくれる。

「あ、似顔絵描いてるよ！ 僕らも描いてもらおうよ」

「あ、ちよつと沙良!？」

沙良はシャルロットの手を引き、似顔絵を描いている青年に話しかける。

(何言ってるんだらう?)

スペイン語はまったく分からないため、シャルロットは何を話しているかがまったくわからない。

「? La mujer es una amante? ? Comoes t unovia? (その女性は恋人かい? どんな人なんだ?)」

青年はシャルロットを示して、沙良に何かを話している。

「No es todavia un amante. Es muy bonita y amable. (まだ恋人とかそんなじゃないよ。でもとても可愛くて親切な人だよ)」

「! Que envidia! (それは羨ましいね)」

それを沙良はびっくりしたような顔で答えると、すぐに優しい顔を作った。

それを聞いて、青年は羨ましそうな顔をする。

「沙良? なんて言われたの?」

「内緒」

沙良は可愛らしく笑顔を作る。

「えー。教えてくれたって良いじゃない」

沙良は、あごに指を当てて、考える素振りを見せる。

「恋人かい？　つて聞かれたんだ」

シャルロットは茹蟄のように一瞬で真っ赤になる。

「こ、こ、こ恋人!?!　それでなんて答えたの!?!」

「恋人じゃないよーつて」

その言葉を聞いて、シャルロットは少し、むすーとしてしまう。

「それと——つてね」

沙良はシャルロットの耳元で囁く。

シャルロットは一瞬で顔を赤らめる。

（か、か、可愛い!?!　僕が!?!）

シャルロットは一瞬で思考を放棄した。

頭の中ではお花畑で小さなシャルロットたちがブレイクダンスしているのだった。



「シャルロット?」

沙良はシャルロットが固まってしまったのを見て声をかけるが、シャルロットは反応を返さない。

それを見て、似顔絵描きの青年は笑っている。

「なんか変な事言つたかな?」

なにもおかしい事は言っていないはずなのだが。

「まあ、とりあえず描いてもらうか」

沙良は動かなくなったシャルロットを椅子に座らせると、その横に腰を下ろした。

「Por favor. (お願いします)」

「Si, como no. (ああ、いいぜ)」

沙良は開始五分でとうとうと始めた。

夜はぐつぐつと寝ていたのだが、なんせ時差が九時間もある。その上、飛行機に九時間乗ってれば感覚もおかしくなるだろう。

「? Dormiste bien anoche? (昨晚はよく寝たのかい?)」

「Si, Tengo sueño. Esta noche preferiría dormir en una cama y no en un sillón. (うん、でも眠たいよ。今夜は椅子じゃなくてベッドで寝たいな)」

「Haha. Descanse despacio. (はは、まあゆっくり休みな)」

「Gracias. (ありがとう)」

「Denada. (どういたしまして)」

沙良はシャルロットの肩の上に頭を乗せる。

寝よう。

——少しぐらい良いよね。

沙良はそのまま目を閉じた。

意識はすぐに落ちていく。

筆の動く音だけが沙良の耳に届いた。



「~~~~~♪」

「そんなに気に入ったんだね」

シャルロットは似顔絵を抱きかかえてニヤニヤしている。

「うん！ とつても嬉しいよ」

もう一度絵を眺める。

そこにはシャルロットにもたれ掛かって眠る沙良の姿が描かれていた。

その天使のような寝顔に、シャルロットはニヤつきを隠せない。

あの、似顔絵の青年もいい人だった。

絵を渡す際に、沙良には聞こえないように英語でこう言ったのだ。

『本当にお似合いのカップルだよ。強敵だとは思うけど、頑張つてね』

(~~~~~つ!!)

思い出すと顔が紅潮してしまう。

「シャルロット？」

「えっ？ な、何？」

妄想に浸っていたシャルロットは現実に戻される。

「ううん。変な顔してたから」

「そ、そんなに変な顔してた？」

「うん」

シャルロットはがくりと肩を落とす。

「あ、そろそろ時間だね」

沙良は時計を見ながらそう呟く。

「じゃあ、本社に行こうか」

シャルロットはその言葉に身を硬くする。

(忘れてた。目的は後見人になってくれるS Q社への挨拶だったよね)

「シャルロットも遊んで、少しは緊張とけた？」

沙良は笑顔を見せてくれる。

「えっ?」

「いや、物凄く硬くなってたから気晴らしにと思って観光してみたんだけど、少しはマシになったかなあって」

シャルロットは自分の手を見つめる。

震えてない。

(わざわざ僕のために?)

シャルロットは嬉しくなる。

(……本当に優しいんだから)

シャルロットは優しさを噛締めるように、瞳を閉じる。

「シャルロット?」

「うん。大丈夫。ありがとう沙良!」

シャルロットは顔を上げる。

その顔は晴れ晴れとしていた。



シャルロットは大層豪華な応接室に通されていた。

その身は緊張でカチカチになっていた。

「僕、スペイン語わかんないんだけど大丈夫かなあ」

沙良はここにはいない。

研究所に顔出してくると先ほど別れてしまった。

シャルロットとしては物凄く心細い。

観光してまで解してもらった緊張は、今になってゲージを振り切ろうとしている。

部屋がノックされる。

「ど、どうぞで」

入ってきたのは一人の女性だった。

その女性は茶色の髪を後ろで結上げている。

見た感じ二十台中盤だろうか。

大人の女性といった言葉が良く似合う。

「あら、聞いてたよりも可愛らしい子ね。私はS・Q社の総務課人事担当兼秘書課課長のカルラ・ファリーノス・イエロよ。よろしくね」

流暢な日本語で話しかけられたシャルロットは慌てて立ち上がる。

「わ、私はシャルロット・デュノアといいます」

「知っているわ。セラが連れてきたガールフレンドでしょ？」

「が、ガールフレンド!? い、いえまだそんな関係じゃ……」

「あら、冗談だったのに、その反応は脈ありね」

(しまったー!!)

シャルロットは恥ずかしさの余り俯いてしまう。

「私は応援するわよ？」

「ファリーノスさん……」

「カルラで良いわ」

「ありがとうございます、カルラさん」

「ええ。でも頑張りなさいよ? この会社の人間は沙良が連れてきた人間を応援すると思うけど、あの子は人気が高いからね。代表候補は全員敵と思っていた方がいいわ。特

にソフィアは強敵よ？ この会社の人間にとっては妹みたいなものだから」

「うわあ」

シャルロットは嫌そうな顔をする。

確かに、モテるんだろうなあとは思っていたが、そこまでとは思ってなかった。それにソフィアも居る。一筋縄ではないかなだろう。

「世間話はここまでにして、そろそろ本題に入りましょうか」

「は、はい！」

シャルロットはその背筋を伸ばす。

「話自体は私がするわけじゃないから部屋を移動するわね」

カルラは移動を促す。

シャルロットはそのカルラの後についていく。

（うう。いよいよだよ）

「はいよ」

そう言い、たどり着いた場所は、

「じゃ、社長室？」

会社のトップがいる場所だった。

「そう、ここに社長と、貴方が所属することになる研究開発部の部長が待っているから」

そう言つてカルラは社長室をノックする。

「例の人物をお連れしました」

「そうか、通してくれ」

カルラはそのドアを開ける。

シャルロットは恐る恐るその扉をくぐる。

「ようこそ、SeaQuest Companyへ。私たちは歓迎するよ」

社長らしき人物が恭しく挨拶をする。

「私がこの会社を纏めている、エルベルト・ルイスだ」

「シャルロット・デュノアです」

シャルロットは深く頭を下げる。

エルベルト・ルイスの名は世界に知れ渡っている。

たった一代で会社を世界的企業にまで成長させ、その権力はスペインを言葉一つで動かすことも出来る時まで言われている。

世界中のレアメタルの流通を握っているとまで言われているその経営術は多くの敵を作りながらも、その会社を難攻不落のものにした。

ただ一つの欠点は、身内に甘いということ。

「君の事情は社員から報告を受けている。SQCは快く君の身柄を引き受けよう」

「あ、ありがとうございます」

「まあ、とりあえず座つてくれたまえ」

シャルロットはソファアに腰掛ける。

「君の後見人には、私になることになっている」

「社長自らがですか!?!」

シャルロットは驚きを隠せない。

このスペインにおいて大きな力を持つS・Q社の社長の後ろ盾を得られるということ
は、スペインでの立場は保障されているものにも等しい。

「ああ、わが社の開発部長たつてのお願いでな。フランスの影響に確実に対処できるよ
うにしつかりと立場を示すべきと言うのでな」

シャルロットはエルベルトの横に座る、白衣の女性に頭を下げる。

「あら、私じゃないわよ?」

その女性が笑いながら答える。

「へ?」

シャルロットは変な声を出してしまふ。

「私は技術開発室室長のロサ・オルティス。貴方の直接の上司になるけど、研究開発部の
部長ではないわ」

シャルロットは不思議そうな顔をしてしまう。

(あれ？ カルラさんが社長と研究開発部の部長がいるって言ってたはずなんだけど)
そのシャルロットにロサは納得したような顔で頷く。

「あの子は何も言っていないのね」

(あの子?)

シャルロットが口を開こうとした時、社長室がノックされる。

「開発部長です。新しく配属されるシャルロット・デユノアの専用機となる機体が準備
できましたのでお持ちしました」

シャルロットがその背筋をピンと伸ばす。

おそらくシャルロットがこれから一番お世話になる人物だろう。

礼儀を欠かさないようにしなければ。

「入ってもいいぞ」

エルベルトが軽い口調でそう答える。

心なしか笑いを堪えているような気がする。

よく見ると、ロサや、カルラもその口元に笑みを浮かべていた。

「失礼します」

シャルロットはその入ってきた人物を見て驚きの声を上げた。

「沙良!？」

つい立ち上がってしまった。

いつもの制服姿や白衣姿とは違う。

特殊な作業着なのだろうか、その身に纏っている服は見たことのない形状をしていた。

それはつなぎが一番近い。

それを纏った愛しい人が急に現れたのだ。それは驚きもする。

「シャルロット、社長の前だよ」

いつもと違う厳しい口調に、ビクツとしてしまう。

すると、沙良がその態度を崩す。

「ぷっ……はは、そんなにビクってしないですよ」

ぼかんとするシャルロットに沙良は近寄る。

「ほら、座って、ね?」

そうしてされるがままにその場に腰を下ろす。

何がなんだか分からないシャルロットはただオロオロすることしか出来ない。

「なんか僕のときを思い出すなあ」

そんなシャルロットに沙良は笑みを漏らす。

「セラもあの時はオロオロしてたもんだ」

「もう、あの時はおじいちゃんせいでしょ」

「おじいちゃん!?!」

シャルロットは本日何度目か分からない叫びを上げる。

「え? 気づかなかった?」

シャルロットはコクコクと頷く。

ルイスという姓はスペインでも有り触れている。

欧州において、同じ姓は珍しいものではないのだ。

「改めて、自己紹介するね。エルベルト・ルイスの孫で、SeaQuest Companion 研究開発部最高責任者兼専属テストパイロット、サラ・ルイスだよ。僕の研究室に入るということは今日から僕らは家族も同然だ。改めてよろしくね、シャルロット」
「素晴らしい、沙良は笑顔をシャルロットに向けるのだった。」

第三十六話 それは海と対となる

薄暗い廊下を三つの影が歩いていった。

そのうちの一人は白衣を着ており、残りの二人を廊下ですれ違う者達の好奇の視線から守っている。

その二人のうち金色の髪を持つ少女が、翠の瞳を持つ黒髪の少年に声をかける。

「ねえ、沙良。どこに向かっているの？」

黒髪の少年は答える。

「僕の研究室のハンガーだよ。そこにシャルロットの機体となるISが整備されているはずだから」

沙良はシャルロットにとあるカードを渡す。

「えつと……『SeaQuest Company 開発研究部第一深海作業開発研究室所属研究員 シャルロット・ルイス』……これって」

「……この社員証。研究室に入るのに使うから無くさないでね」

「えつと……そこじゃなくて、この名前の『ルイス』って……」

「ああ、お爺ちゃんが後見人だしね。手続きでも『シャルロット・ルイス』で申請しちゃつ

たから、

シャルロットはエスパリーニャではシャルロット・ルイスって名乗ってね」

「シャルロット・ルイス……」

その名をシャルロットは眩く。

その顔を少し赤みを帯びている。

「おそろいだね」

沙良は自分の名札を指差し、そう笑った。

沙良の名札は『サラ・ルイス』と書かれている。

おそろいの意味に気付いたシャルロットは紅潮し、俯いてしまう。

「僕のことには『セラ』って呼んでいいよ」

「『セラ』？」

「そう、僕に親しい人は皆そう呼ぶんだ。『サラ』って、エスパリーニャだと女性名だから

少し変えて『セラ』」

「セラ……うん、分かったよセラ」

シャルロットがセラと呼ぶと、沙良は嬉しそうに笑う。

「だつたらさ、僕のことでも愛称で呼んで欲しいなあ……」

シャルロットはこれをチャンスと捉え、沙良に上目遣いでお願いする。

何でも無いように言っているが、心臓は物凄い速さで鼓動を打っている。

「愛称かあ。シャルロット……ロットテイ………シャル。うん、シャルなんてどう？
呼びやすいし」

「シャル……うん、それが良い!!」

「じゃあ、これからは『シャル』だね」

「うん!」

シャルロットと沙良は楽しそうにはしゃいでいる。

それを和やかに見守っていたロサだったが、研究室が近いたため、声をかけることにする。

「ほら、お喋りもそこまでにしな。研究室もすぐそこなんだから」

ロサは先ほどまでの外用の口調を崩していた。

「はいはい」

「わかりました」

沙良は研究室のICスキャンに社員証を入れる。

すると、特殊なカメラが沙良の網膜を撮影する。

「サラ・ルイス」

『声紋認証完了』

すると、扉が自動で左右に割れた。

「嚴重だね」

シャルロットはそう話しかけるが、

「ここは本社から直接来るルートだからね。研究員用の通路は違うよ」

沙良は軽く否定を挟む。

「あとで渡すけど、研究員用の端末があるから」

そう言つて沙良は自分の左腕を見せる。

そこには確かに時計のようなものがついていた。

よく見ると、ロサも同じものをつけている。

「とりあえず、入って」

沙良は軽い足取りでその研究室へと足を踏み入れた。

そして、シャルロットに振り返ると、手を大きく広げて、言葉を放った。

「ようこそ、シャル。ここが僕の研究室、第一深海作業開発研究室だよ」

その歓迎の言葉にシャルロットは頬が緩む。

「うん、よろしく」

シャルロットは回りを見渡す。

そこには沢山のコンピューターとモニターが並び、職員がキーボードを叩いている。

奥の全面ガラスの部屋には白い機体がケーブルに繋がれて鎮座していた。

部屋の一角にはソファや、机や椅子などが置いてあり、自由にテレビや本を見て休憩できるようになっているらしい。

今も、四人ほどがコーヒーを飲みながら討論を繰り広げていた。

聞こえてくる内容は、どこの化粧品が一番良かったかと言うもの。

「社員に配慮してあるんだね」

デュノア社は、こんなに自由は無かったよ。

そう言葉に表すシャルロットの前に、奥の部屋から一人の女性が現れる。

その女性はタンクトップに、ホットパンツというラフな格好。

その体はオイルで汚れている。

「おお？　この子が新入り？」

「もうザイダ、作業中はそれでも良いけど、研究室に入るときは白衣ぐらい着なって毎回言ってるでしょ」

沙良が腰に手を当ててザイダを叱り付ける。

その子供っぽい動作に、つい微笑みを浮かべてしまう。

「ごめんごめん、次から気をつけるわ」

そのザイダは意に介さないようで、軽く聞き流している。

「その言葉も聞き飽きたよ。行動に移してよ」

「ホント、さつきまで、三ヶ月ぶりの再会に泣きそうな顔してた子とは思えないわ」
「ちよつと、ザイダ!？」

「はいはい、ごめんごめん。で、この子が?」

ザイダはシャルロットに視線を向ける。

「そうだよ。ザイダに頼んでた機体の搭乗者」

その言葉に、ザイダはシャルロットを舐め回すかのように見る。

「ふーん、この子が」

「あ、あの……?」

シャルロットはオロオロとしながらも、何か会話をしようと、言葉を探す。

「……うん、気に入った! 私は整備士のザイダね。よろしくね、シャルロット」

「は、はい!」

シャルロットはザイダに急に肩に手を置かれ、ビクツとする。

「ついて来なさい。見せてあげるわ。あなたの機体」

ザイダは軽い足取りで、研究室を進んでいく。

シャルロットは沙良に戸惑いの視線を向けるが、沙良が笑いながら顔を返したのを見て、ザイダの後を追った。

その、大量のコンピュータが置かれた部屋を抜け、動く歩道に乗る。

その長い道のりの行く先は、

「……なんて大きなハンガー」

地下に作られた大型のハンガーだった。

所狭しと様々な機械が動いており、そこに配置されているのはISだけではない。

「……潜水艦？」

その無駄を無くした形態は、見るものを圧倒させる。

「深海作業開発研究室だからね。海に関わるものなら何でも作つてるといつても良いんじゃないかな」

沙良がシャルロットの横に並び立つ。

「ほら、ザイダを待たせてるよ？」

「あ、うん」

シャルロットは少し急ぐように、ザイダの元へと近づく。

そこにいたのは大空のような蒼だった。

「セラの『海良』と対になる機体。シークエスト製作試作機プロトタイプ『空良』。セラの『カイラ』は作業用の製作試作機。この『ソラ』は軍事用の製作試作機。その性能は圧倒的に『ソラ』の方が高いわ」

「——っ!? このスペックって!?!」

そのスペックに、シャルロットは驚きを隠せない。

それはそのスペックの高さではない。

「うん、シャルのラファール・リヴァイブ・カスタムⅡの稼働データを使って、元の乗り心地に出来るだけ近いように、それでいて、追隨を許さないように設計したよ」

沙良は簡単に言っているが、決して簡単なことではない。

フランスの最高傑作のカスタム機を再現しつつ、そのスペックは元になったカスタム機よりも比べようもなく高い。

第二世代機の中ではトップクラスを誇る機体だろう。

その最大の特徴は、拡張領域の多さ。

それはシャルロットが使っていたラファール・リヴァイブ・カスタムⅡよりも多い。

「乗ってみて」

シャルロットは、ハンガーに吊るされている機体のコックピットに飛び乗る。

その身を機体に預けるように力を抜くと、まるで融和するかのよう装甲が閉じる。

—— Start system, Access ——

—— Fitting Start ——

—— Sea Quest Dividing system, Access ——

—— 搭乗者を確認、搭乗者を登録 ——

—— Secret system, Start Access ——

—— 皮膚装甲展開……完了 ——

—— 推進器稼働確認……完了 ——

—— ハイパーセンサー最適化……完了 ——

次々と浮かんで消えていくモニター。

—— 『De la bienvenida. Sea Qwest, Charlotte』 ——

《ようこそ、深海の探索者シャルロット》

最後のモニター。

それは、『ソラ』がシャルロットを認めた証。

「どう？ 気に入ってくれた？」

シャルロットは強く頷く。

「僕には勿体無いぐらいだよ」

シャルロットは確かめるように軽く体を動かす。

それは、問題なく反応をシャルロットに返す。

「フィッティングには時間が掛かりそう？」

シャルロットは軽く考えてから言葉にする。

「十分ぐらいかな」

沙良は時計を見ながら答える。

「じゃあ、アリーナまで動こうか。その間にフィッティングは終わるでしょ」



『とりあえずは自由に動いていて良いよ』

沙良は、研究室の隣にあるモニター室からマイクを通して、シャルロットに呼びかける。

モニター室からはアリーナの全貌が見渡せる。

沙良の言葉に、シャルロットは、その身を空に躍らせた。

「急上昇OK。急旋回OK」

沙良の横では、研究員がシャルロットの機動データを取っている。

「急加速、急停止共に問題なし」

「高レベルの反動制御確認」

「機動面、問題なし。射撃体勢をお願い」

研究員の要求を沙良は自分の権限を以って許可する。

「了解、射撃体勢を取らせます」

沙良はマイクに口を近づける。

『的を出すから適当に射撃して』

「空間投影式作動」

「作動を了承」

空間投影技術を利用したのが無数に表示されていく。

それをシャルロットは黙々と撃ち落としていく。

「レスポンス良好」

「タイムラグも許容範囲」

「機体反応の確認のため、不意打ちでの射撃に対するリアクションを」

「了解」

すぐさまモニターを操作し、使用できる埋め込み式レーザー砲を確認する。

沙良はすぐさま各方面に指示を出す。

「1—A、3—B及び9—Tからのレーザー狙撃の準備をお願いします」

「了解、1—A完了」

「了解、3—B残り三秒……完了」

「了解、9—T残り十秒」

「9—Tと同時に一斉射撃準備」

「三、二、一」

「発射」

その言葉と共に、シャルロットに三箇所からレーザーが襲い掛かる。

その奇襲にも、しっかりとシャルロットは反応する。

「ハイパーセンサーの反応良好」

「警告対応良好」

「一瞬の思考判断に対する、機体のレスポンス良好」

沙良は満足そうに頷く。

「一次移行はまだかな」

「もう少し掛かるわ。なんなら、戦闘でもさせる？」

その言葉は冗談も含んでいただろう。

決して本気ではなかったはずだ。

しかし、その案は沙良に「名案だね」と言わせることになってしまった。

「現在手の空いているパイロットはいる？ 整備に来ている者とか」

沙良の言葉に、研究員は各部署に問い合わせを開始する。

「……いきました。機体整備に来ていた代表候補生が一人こちらに回せるそうです」

「名前は？」

「それが……」

その言いにくそうにした研究員に沙良は首を傾げた。

「マルセラ・バスケス・サントです」

その名を聞き、その理由を把握した。

それは、沙良が少し苦手意識を持っている相手。

しかし、それでも専用機を与えられているということとは、それだけの實力があるとい

うことだ。

「どうします？ セラが嫌なら、他の人間の予定を調節しますが」

沙良としては嫌なのだが、それで社員に迷惑をかけるわけにはいかない。

實力も確かで、模擬戦の相手にするにはもってこいの人間だ。

そう、沙良さえ我慢すれば、全てが丸く収まる。

沙良は、嫌そうに、本当に嫌そうに声を出した。

「いいよ、マルシーで」

しかし、愛称で呼ぶぐらいには仲は良好である。

「そんなに嫌なら別に大丈夫ですよ？」

研究員は苦笑いを浮かべている。

「いい、頑張る」

沙良は首を横に振ると、拳を握った。

「わかりました」

研究員は人事部に連絡を取り、スケジュールを取る。

「大丈夫よ、私たちが守ってあげるから」

ザイダが紅茶を沙良に差し出す。

「ザイダ……」

その微笑ましい光景に皆が温かい目で見守っていると、

『ちよつと!? いつまでレーザー出るの!?』

いつの間にか狙撃箇所が六箇所を増えたレーザー砲に狙撃をされ続けているシャルロットが、悲鳴を上げていた。

第三十七話 指導戦闘

シャルロットはただ前を向く。

そこにいるのは自分と似た機体。

違うのは、その青色の濃さだけ。

ハイパーセンサーはその機体の情報をシャルロットに伝える。

——マルセラ・バスケス・サント。搭乗IS『シークエスト・カスタム・マルセラ』。特殊兵装無し。

シャルロットは手に汗を感じる。

模擬戦に用意された相手は、本場の代表候補。

その使いなれた機体を操るマルセラに、先ほど機体を受け取ったばかりのシャルロットが勝つのは難しいだろう。

——それでもっ！

シャルロットは拳を握る。

それでも、負けたくないと言わんばかりに。

『それでは、模擬戦闘を行います。マルセラはシャルが一次移行を済ますまでは、全兵器

を使って、そのサポート。一次移行が終わり次第、データ収集に入って。シャルは勝つことだけを考えてて。それが、一次移行に繋がるから』

オープンチャネル
開放回線で沙良の声が飛んでくる。

「!value! (了解)」

「うん、わかった」

シャルロットは、アサルトライフルを手に呼び出して置く。

それは今までシャルロットが使っていた物とは大きく違う。

その重さも、その威力も、その使用目的も。

早く慣れなければという焦りもあるが、新しい武器に心を躍らせている自分も感じる。

『それでは、ブザー後に戦闘を開始して』

通信で沙良がそう述べると、アリーナの中央に、カウンターが表示される。

その数字が、一つずつ減っていくにつれて、シャルロットは、心を引き締める。

その数字がゼロになったと同時にシャルロットは動いた。

ブザーの音を後ろに感じ、シャルロットは、マルセラに銃を向ける。

「あら、大したご挨拶ね」

それを、マルセラは両手を広げることで応対とする。

それはまるで、撃ってこいと言わんばかりの動作。

だからシャルロットは、躊躇い無く撃った。

その螺旋状溝から発射された弾丸は旋回運動を与えられ、ジャイロ効果により真つ直ぐに敵に向かって飛翔する。

弾が深い青の機体に突き刺さる。

それは一発で終わるはずも無く、無慈悲な銃声が鳴り響く。

その銃弾を全てその身で受けたその機体は、なお悠々とその両手を広げていた。

シャルロットは戦慄する。

あれだけの銃弾を受けてなお何事も無かったかのように動く、その機体に。

弾幕の前に余裕を保ち続けるマルセラに。

「ふう、なんて情熱的な挨拶。でも効かないわ。硬さ、それが私の取り柄だから」

マルセラはゆっくりとその機体を動かす。

その動きは遅い。

しかし、確実にシャルロットに銃口を向ける。

それは、先ほどシャルロットが利用したのと同じアサルトライフル。

シャルロットは、その引き金が引かれるのを確認。

すぐさま回避行動に出る。

しかし、

「——っ!？」

機体が、ほんの僅かだがシャルロットの反応に追いつかなかった。
被弾。

その威力は比較的低いのが、その圧倒的な連射力の前にシャルロットの機体は弾幕に飲み込まれてしまう。

「これが、シークエストシリーズに基本的に積まれているアサルトライフル、『C E T M E』。威力を犠牲に、弾幕を張ることに特化した銃よ。あなたも使ったから分かるでしょ?」

シャルロットは弾幕の中で踊るように回避を続けながらその声を聞く。

確かに、これは厄介な武装だ。

威力自体は低いのが、確実にダメージがこちらに入ってくる。

牽制用を使うのが一番正しいのだろう。

そう考えると、一つ疑問が浮かぶ。

「なんでシールドが減らなかつたの?」

先ほどのシャルロットの射撃に、マルセラの機体はシールドエネルギーを微量しか減らさなかつた。

シールドに当たれば、どんなに威力が低くても、ある程度は削ることが出来るはずだ。このライフルも、そういうコンセプトで作られているのだろう。

その疑問に、マルセラは丁寧に答えてくれる。

「簡単な話よ？ シールドを弱く設定しているの。システムを起動した私の装甲なら、銃弾を食い止められるから」

その発言に、シャルロットは驚くと共に納得する。

思い出すは、学年別トーナメントの準々決勝。

沙良の『逆桜』の斬撃の網に、リナとフィオナは正面突破という手段をとった。

それは、そのシステムとやらを作動させた結果なのだろう。

シャルロットは、自らの機体を確認する。

乗っているのは同じシークエストシリーズ。

シャルロットの機体にも同じシステムが使用されていてもおかしくはない。

「あった」

しかし、そのシステムはロックがかかっていた。

「残念だけど、一次移行してからじゃないと使えないわよ？」

そのシステムに気を取られすぎたのか、いつの間にかマルセラがシャルロットに接近していた。

その振りかぶられているのはシャルロットもよく見覚えがあった。青を引き立てるような赤色。

「襖!？」

「正解」

シャルロットはその身に衝撃透過の一撃を食らう。

その硬直したシャルロットの機体に、銃口が押し付けられる。

「この銃ね、『ガルシア』って言うんだけど、どういう意味かわかる?」

シャルロットは、嫌な予感に冷や汗を流す。

それを感じてか、マルセラはその口元に笑みを作った。

「バスク語起源で、『槍』っていうの」

マルセラは、引き金を引き絞った。

その威力はまさに突き放たれた槍の如し。

シャルロットの機体は、衝撃に、その機体を宙に投げ飛ばされる。

しかし、その間に感じることは負の感情ではない。

シャルロットは思った。

——楽しい。

自分の意志で動くことがこんなにも楽しいのかと。

今までは、デユノア社の命令に従うだけだった。

そこに自分の意志などなかった。

今は違う。

シャルロットは望んでここにいるのだ。

それは、自分の意思。

沙良の傍に居ると決めた、自分の意思。

——この色のついた世界で、彼と共にいる為に！

シャルロットはすぐさま体勢を整える。未だ、その進行方向は背に向かっていて。

スラストーで勢いを殺してもいいが、その一瞬の隙が怖い。

ならば、その勢いを利用するだけ。

シャルロットは、吹き飛ばされている方向にスラストーを噴かした。

その勢いで、マルセラから距離を取ると、先ほど狙撃された銃、『ガルシア』を展開する。

しかし、ただこれだけで撃つても決して当たることはないだろう。

だから、シャルロットは左手に『CE T M E』を展開する。

それを見て、マルセラが笑ったのが見えた。

「正解」

そのマルセラの言葉が示すとおり、シャルロットは反撃を開始する。牽制用の反動が小さい銃で足止めし、威力の高い銃で仕留める。

コンセプトとしてはシンプルでもとても分かりやすい。

「でも、武装はよく確認した方が良いわよ」

マルセラは、片手を前に突き出す。

その動作はシャルロットには覚えがあつた。

——まさかA I C!?

シャルロットはすぐさまその思いを頭から払う。

あれは、独逸が長い年月をかけて完成させたシステム。

スペインが使えるはずはない。

だから撃つた。

その行為を消し去るために。

しかし、その銃弾が届くことは無かつた。

銃弾はマルセラの周りを円で囲むように止まっていた。

「なっ!?!」

よく見ると、その円には、ぼんやりと影が浮かんでいる。

「エネルギーシールド!?!」

「(明察)

マルセラはその円の中から、銃を構える。

それは『ガルシア』。

シャルロットは撃つことを選択した。

エネルギーならいずればゼロになる。

ゆえに、『CE T M E』で弾幕を張る。

すると、そのエネルギーシールドが形を崩した。

「対処は正解だけど、詰めが甘いわ」

すぐさま銃弾を浴びせようとしたシャルロットはその身に銃弾を食らうことになる。

なぜ、あの弾幕の中で銃を撃つことが出来たのか。

その答えは、簡単だった。

「バリアユニットが一つだと思っちゃダメよ?」

その機体の周りには、エネルギーのシールドが張られていた。

二重展開していたのだが、それは、シャルロットの不意を突くことに成功する。

「ほら、ぼさつとしないの」

マルセラは一つの武装を展開していた。

それは、映像の中で見たことがある。

全身装甲の機体ですらも真つ二つにする、レーザー兵器。

「元々は岩盤掘削用の物を改造したらしいんだけど、その威力は作った人が頭おかしんじゃないかと思うぐらい強力よ。大丈夫。リミッターはかかっているから死にはしないわ」

マルセラは視線で沙良を示す。

しかし、シャルロットはその動作に付き合っている場合ではなかった。

シャルロットは必死に考える。

そんなもの食らったらひとたまりも無い。

しかし、いくら飛び回ろうとも照準がシャルロットから外れることは無い。

その砲口には光が集まっている。

「終わりなき、い」

無慈悲なレーザーがシャルロットを襲う。

シャルロットは、一筋の望みをかけてその右手を前に伸ばした。

瞬間、目の前で、レーザーがその動きを止めた。

すぐさまシャルロットは上昇。

その場から離れる。

爆散する小型ユニットを確認すると、その威力に身の毛がよだつ。

展開したバリアユニットは一秒という短い時間だが、確かにレーザーを止めることができた。

シャルロットは、その身を震わせた。

あんなもの直撃していたらただではすまない。

しかし、そう思考するシャルロットは、笑っていた。

「これが、僕の望んだ道……」

シャルロットは、ただ上空を指す。

そして、ある地点で止まると、そのまま地表を見下ろす。

シャルロットの行動を見守るようにマルセラは構えている。

まるで、指導するような戦い方。

それを、本気にさせてみたい。

そうするためには、この機体が変わらなければならない。

その準備は、整っている。

目の前のウィンドウにはただ一文字だけ。

『?Estas listo? (Are you ready?)』

その言葉の意味はわからないが、それが何を示しているかはわかった。シャルロットはその文字に触れる。

その言葉に答えるように。

瞬間、変化が訪れた。

シャルロットの身を纏う装甲が光の粒子に弾けて、そしてまた形を成す。

新しく形成される装甲はまだ薄くぼんやりと、光を放っている。

先ほどまでの実体ダメージが全て消え、その装甲はより洗練された形となる。

一次移行。

より融和性が高まった装甲に、シャルロットの反応速度に追いつく機体。

この瞬間、『ソラ』はシャルロットの専用機となった。

『シャル、ここからが本番だよ』

アリーナに沙良の声が鳴り響く。

その声を待っていたと言わんばかりに、マルセラがその身をシャルロットに肉薄させる。
る。

握られているのは見たことが無い銃。

だから、距離を取らず、シャルロットは接近戦に持ち込むことを選択する。

得意の高速切替で『襖』を展開し、機体を回転させ、その脚部スラストアーを薙ぎ払う。

しかし、その一振りは空を切った。

すぐさま連撃を放とうとするが、マルセラのほうが早かった。

射撃。

それは、散弾を放つシヨットガン。

「くっ!?!」

シャルロットはすぐさま、マルセラの背後に回り込もうとする。

しかし、その行動は読まれていた。

シャルロットはその身に散弾を浴びる。

マルセラはシャルロットを見ていない。

銃だけをシャルロットに向け、引き金を引いたのだ。

シャルロットは、その一撃に、一瞬だが、動きを止めてしまう。

そのシャルロットにスラッグ弾が撃ち込まれた。

それで、終わりではない。

散弾が間を置かずに発射されたと思うと再びスラッグ弾が撃ち込まれる。

「連射式シヨットガン『エステバン』。勝利の冠という意味を持つ銃よ」

その連続した射撃に、シャルロットの機体はその装甲を削られていく。

「あなたの機体は万能型。でもね、言ってしまうえばこれといって特徴が無いだけ。勝つためには何か一つ、特別を求めなさい」

マルセラは大型のライフルを構える。

「最後はこれで沈めてあげるわ」

それはシャルロットの機体にも同じものが積まれている。

それは対物ライフル。

『『マリア』。神の贈り物という意味よ』

シャルロットは必死にその射線から逃れようとするが、その銃口はシャルロットを捉えて離さない。

嫌だ。負けたくない。

接近戦を挑んでも、バリアユニットで動きを封じ込まれてしまったらそこで終わるだ。

シャルロットは必死に機体を操る。

そのシャルロットの目の前に、とあるウィンドウが現れる。

『Dividing System——Set up completion. ? Est
as list to?』

シャルロットはいきなり現れたそのウィンドウに迷いもせず触れる。

『Shout, "DIVE"』

叫ぶ。

その指示通り、シャルロットは叫んだ。

「DIVE!!」

その叫びに反応して、『ソラ』はその装甲を閉じる。

それは潜水服のように隙間を埋めていく。

そのシステムは機体に使われている装甲の性能を最大限に引き出す。

深海の水圧にさえ耐えることのできるその装甲はあらゆる攻撃を耐え抜く。

その変化が終わり、状況を確認すると、シャルロットはあるものを見た。

マルセラが笑っているのを。

その笑みは、生徒を褒める、先生のような笑み。

マルセラは優しい笑みを浮かべたまま撃った。

シャルロットはすぐさま避けようとするが、機体は、思った通りには動かない。

システムを作動している『ソラ』は、普段と同じ扱いかたでは思ったように動かない。

一撃で勝負を決めてもおかしくない銃弾が、『ソラ』の装甲を削る。

負けた。

そうシャルロットは思ったが、試合終了のブザーは鳴っていない。

不思議に思っただけで確認してみると、先ほどの四分の一だが、残っていた。

「それが『Diving System』。使い方を覚えておきなさい」

その後ろから聞こえる声に、シャルロットは咄嗟に反応する。しかし、そこにあつた

のはグレネードだけだった。

爆発。

衝撃を防ぐため、シャルロットは腕を盾に、その身を真後ろに飛ばす。

それは、とある結果を生んだ。

とんだ先には、

「いらっしやい」

マルケスが『祓』を持って待ち構えていた。

その大型機構槍がシャルロットに突き刺さる。

「ぐっ！」

その機構により、衝撃が装甲を通り、シャルロットは息が詰まってしまう。

そのランスに突き刺さったままのシャルロットを、マルセラは地面に叩き付けた。

「——っ！」

すぐさま立ち上がろうとしたシャルロットだが、その機体には、D i v i n g S y s t e m を作動させているマルセラが馬乗りになっていた。

「楽しかったわよ？ あなたはまだ伸びるわ」

マルセラは至近距離で『ガルシア』をぶっ放した。

その銃弾はシャルロットのシールドを削る。

「あとは、貴女だけの武装を使いこなさない。カスタムには一人一つ、必ず専用武装が入っているから」

マルセラが、『ガルシア』を撃ち終った瞬間、試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

第三十八話 記念撮影

沙良はモニター室から研究室に移動すると、自分専用のコンソールに腰をかける。

スリープモードになっていたコンピューターは、沙良のことを感知し、自動でシステムが立ち上がる。

十二個のモニターが順に光を映し出していく。

モニターに表示されるは先ほどの模擬戦の稼働データ。

その内の一つを沙良は真剣な目で見つめる。

そこには稼働率62%と表示されている。

「シャルの方は予想値どおり。無事にシステムも作動したみたいだし、問題はないけど、使用武器がマルセラと同じなんだよね。シャルのほうにしか積んでない武装を使って欲しかったんだけどなあ」

沙良は足をぶらぶらさせる。

切り替えたモニターには、シークエスト・カスタム・マルセラのデータが表示される。

「マルシーは予想以上に良く動けてたなあ。機体の反応に追いついてきてる。また調節しないとなあ」

「ふふふ、光栄ね。よく動けたなんて良い褒め言葉じゃない？」
「ひゃっ!？」

沙良はその声の主の登場に身を強張らせる。

それは、急に現れたからではない。

それは、マルセラがとある行動を取っているからである。

「ちよつと、マルセラさん!？」 なにしてるんですか!？」

シャルロットが、その行動に気付き沙良へと駆け寄る。

「何つて……耳にふーつて?？」

「それがおかしいんですよ!？」

何事もないかのように答えるマルセラに、シャルロットは激しく突っ込みを入れる。

その間にもマルセラは沙良を後ろから抱きしめ、沙良の身体を撫でる。

「ちよ、ちよつとマルシー? その手を離してくれないかな?？」

「あら、私にお願いするの? それならもつと可愛らしく言わないと。さあ、さあ、さあ

! おねだりしてみなさい!？」

「ザイダさん。ここに変態がいまーす!!」

沙良の呼びかけに、すぐさまザイダが飛んでくる。

「はいはい、変態を受け取りに来ましたー」

ザイダはマルセラの首根っこをしつかりと掴むとその身を沙良から引き離す。

「あああ、私の癒しが……」

「はいはい、大人しく軍に帰りなさい。言いつけるわよ?」

ザイダに本社直結通路まで引きずられていくマルセラを見送り、沙良はほっと一息つくのだった。

「海軍は変態ばつかで困るよ」

これが沙良がマルセラを苦手な理由。

セクハラ癖が強いのだ。

そのターゲットは沙良のみではなく、様々な部署からセクハラ被害届が出ている。

普段は面倒見もよく、気が利き、仕事もできる優秀な人間なのだが、たまに出るセクハラ癖だけが欠点である。

今でも、視界の端でザイダがセクハラを受けている。

「に、賑やかだね」

シャルロットのフォローがやけに虚しく響くのだった。



沙良は、機体を整備するためにシャルロットからペンダントを受け取る。

「やっぱりシャルのもペンダントなんだね」

シークエストシリーズは待機状態がペンダントの形になるものが多い。

それはカスタム機でも同じだ。

沙良はそれを待機状態から解除し、重機により所定のハンガーに設置する。

重機を操る作業員に礼の言葉を告げ、沙良は工具セットを持って機体に近寄る。

沙良が肩を回し、工具を取り出すと、周囲に光の粒子が集まって形を作る。

それはぱつと見I Sの腕のように見える。

それが左右一対ずつ展開されている。

「これは……I S……?」

驚きを隠しきれないシャルロットに沙良は人差し指を振り、答える。

「違うよ。これは移動型ラボ。あの篠ノ乃博士が作成した特別製だよ」

沙良の指の動きに連動して、二対の腕が指を振る。

それを見てシャルロットは顔を強張らせる。

沙良もその気持ちは良く分かる。

最初にこれを渡されたときは同じ顔をしていただろう。

沙良は苦笑いを浮かべながら、腰に工具セットを巻きつける。そのままI S用の工具

を両手に持つと『ソラ』に向かい合った。

『ソラ』の装甲を右部アームにより切り開く。

それを左部のアームと一緒に押さえしておく。

その開いたスペースに沙良は身を乗り入れると、すぐさま内部機器を引きずり出した。

「な、何をやるの？」

シャルロットは恐る恐る声をかける。

「スラスト系のエネルギーパイパスを弄ってるんだ。さっきのデータから一次移行によつて効率がダウンした箇所があったからね。すぐに弄った方が定着が良いから」

その言葉の通り、沙良は配線図を確認しながら両手を忙しなく動かす。

作業用ゴーグルをつけ、ISのオイルに塗れながら作業を続ける沙良は、ふと視線を感じ、横を向く。

そこには、作業ではなく沙良の顔を凝視していたシャルロットの姿があった。

「ほえ？」

急に顔を合わせる形となったシャルロットは変な声を上げる。

「どうしたの？ 僕の顔になんか付いてる？」

沙良の言葉に、初めて自分が沙良の顔を凝視していたことに気付いたのだろう。

シャルロットはわたわたと慌てだしてしまふ。

「べ、別になんもないよ?」

その目が泳いでるシャルロットを追求するより、整備の方が優先と考えた沙良は、首を傾げ作業に戻るのだった。



シャルロットは沙良に言われて、ようやく自分が沙良の顔を凝視していたことに気づいた。

シャルロットは見惚れていた。

沙良のオイルに汚れた凜々しい顔は、普段見せる温和な表情とのギャップにより、シャルロットの心を驚掴みにしていた。

優しげに微笑む顔も、困ったように笑う顔も、拗ねた様に口をとがらせた顔も、悲しそうに歪ませた顔も、真剣な顔も、感情のままに怒る顔も、色んな表情を見てきた。

短い間だが、クラスメイトには負けないほどに沙良の表情を見てきた。

そのどれもがシャルロットの心に響く。

今まで感じたことのない感情。

心を殺す日々から開放されただけではなく、誰かを大切に思うこともできるようになった。

今は幸せと答えても良いだろう。

しかし、シャルロットは罪を犯した自分がのうのうと幸せに浸って良いとは思えなかった。

沙良には許しを得た。

しかし、沙良がシャルロットを許したとしても、シャルロット自身が自分を許せなかった。

罪を犯したものには厳罰が必要。

それはいつの時代でも変わらないことだ。

シャルロットは悩んだ。

自分が本当に沙良の近くに居て良いのかと。

一緒に居るべき人間なんかじゃない。罰を受け、ひっそりと生きていた方が良いのではないかと、そう考えたこともある。

それでも、シャルロットは沙良の近くに居続けようと決めたのだ。

それは、沙良のとある姿を見てしまったため。

真夜中、ふと目を覚ますと隣のベッドに沙良の姿がなかったことがある。

不思議に思い、ベランダを見ると、誰かと電話している沙良の姿があった。

寝るように催促すべきかと身を起こそうとしたが、シャルロットは動けなかった。

それは言葉が聞こえてきたから。

沙良はこう言ったのだ。

『姉さん、怖いよ』と。

本当にこれでいいのかと。

ただ一言そう言ったのだ。

普段まったく弱さを見せない沙良が、電話越しに誰かに縋っていたのだ。

それを見たときにシャルロットは決めたのだ。

この背中を支えようと。

守られるのではない。

守ってほしいと。

支えられるように、ただ力になれるようになろうと。

何が、どんなことがあっても、自分だけは沙良の味方でいようと。

何があっても、沙良のために身を犠牲にする。

それが例え何を意味するものでも。

それが自分の贖罪。

誰でもない、自分が決めた贖罪。

「シャル？ どうしたの？ 怖い顔してるよ？」

ふと顔を上げると、沙良が心配そうにこちらの顔を覗き込んでいた。

思考の海に嵌っていたようだ。両手はきつく握り締められている。

肩に入っていた力を抜くと、沙良に笑みを向ける。

「大丈夫。考え事してただけだから」

「疲れが溜まってるのかもダメだね。時間も遅いしそろそろ切り上げようか」

沙良は『ソラ』の整備を終わらせるように、内部機器を元に戻していく。

装甲も特殊な溶接機器を以って溶接していく。

「そんなに嚴重だっけ？」

シャルロットはラファールに乗っていた経験から会話を切り出す。

「たぶんここまでやってるのはシークエストだけじゃないかな。僕らは海に入るから、

装甲は重大なフアクターなんだよ」

深海にまで活動範囲があるシークエストなら、確かに必要なかもしれない。

シャルロットは一人頷く。

「よし、ここをこうしてつと。出来た!!」

沙良は調節が終わった『ソラ』を一撫でする。

その触れ方は慈愛に満ちている。

シャルロットは同じように『ソラ』に触れる。

そのまま機体を待機状態に戻すと、光の粒子が周囲に集まり手のひらにペンダントが残った。

ペンダントとなった『ソラ』を首にかけると、壁に掲げられている大時計が視界に入る。

「もうこんな時間なんだね」

時刻は二十三時五十分を回ったところだ。

しかし、周りを見ても作業中の職員も多い。

「終業時間ってないの?」

「特にはないよ。好きな時間に来て、好きな時間に帰る。結果が出せば良い、それが研究室のルールだから」

「あ、アバウトだね……」

「みんな結局は帰ろうとしないからね。ほぼ研究室に寝泊りしてる状態の人も居るし」
それは皆が好きで残ってるということだろう。それだけこの環境が愛されていると

いうことでもある。

「いい職場だね」

「僕的にはもうちよつと体に気を使って欲しいんだけどなあ」

「僕だって沙良にもうちよつと気を使って欲しいよ」

「みんなに言われるよ」

沙良は指で頭を掻きながら苦笑いを浮かべる。

「とりあえず今日はここまですべてにして、帰ろっか」

沙良が、そう言い、ハンガーから出ようと出口にむかうが、その動作がピタリと止まってしまう。

「沙良？」

シャルロットは不思議に思い、首をかしげると、沙良がどうしようといった顔で振り向いた。

「シャルの泊まる所、手配するの忘れてた……」



「ごめんね、こんな部屋で」

沙良は申し訳なさそうに頭を下げる。

それにシャルロットは慌てて手を振る。

「い、いや全然そんなことないよ!?! むしろ、沙良の家にお邪魔できて良かったって言うか、部屋が綺麗過ぎるって言うか……」

シャルロットはふかふかのベッドに座りながら、沙良に頭を上げるように促す。

「そう言つて貰えると嬉しいよ。普段、家に人を呼ぶことがないから慣れてないんだ。ごめんね」

そう、シャルロットは沙良の家に泊まりに来たのだ。

申し訳なさそうにしている沙良には悪いのだが、シャルロットは内心興奮を隠せなかった。

予想もしていなかった、お家へのお呼ばれに、シャルロットのテンションは上がっていく。

「ゆつくりしてて。飲み物とつて来るよ」

沙良は部屋から出て行く。

沙良が居なくなつたこともあり、シャルロットは、つい部屋を見渡してしまふ。

大きなベッドが窓際に鎮座し、机が壁際に設置されている。

本棚には何ヶ国語かの本が並べられている。

中央に置かれたテーブルは、その部屋の雰囲気を作り出している。

その全ての場所に飾られているものがあつた。

写真だ。

それは様々な場所で、多くの人間と写っていた。

その中でも最も多いのは、

「一夏との写真だ……」

一夏と楽しそうに笑いあう写真。それは幼い頃の写真もあれば、中等部の頃らしき写

真もある。

おそらく毎年撮っているのだろう。

そこには成長の記録が確かに刻まれていた。

そしてその次に多いのは、研究室のメンバーらしき人物達と写っている写真。

その中にすら一夏の姿が確認できる。その一夏を除いて、特に多く写っている人物が

居た。

「この人……ソフィアさんだよね？」

ミドルスクールの入学式らしき写真には既に一緒に写っている。

「幼馴染ってことなのかな」

そのまま、部屋の写真を眺めていると気になる写真があった。

それは、体中生傷だらけのソフィアが号泣し、沙良が泣きながら慰めているというもの。そのソフィアの手には一枚の紙が広げられている。

「これは、何の写真だろう」

「それはソフィアが代表候補生に選ばれたときの写真だね。懐かしいなあ」

「せ、セラ……」

シャルロットはいつの間にか帰ってきてきた沙良に驚きを隠せない。

勝手に写真を見ていたこともあり、身を小さくしてしまう。

「はい、これ。ココアでよかったよね」

「う、うん。ありがとう」

チラリと横目で沙良を窺うと、気にしていないようでほつと胸を撫で下ろす。

シャルロットはココアを一口飲むと、言葉を紡ぐ。

「この部屋って、すごく写真が多いんだね」

シャルロットは視線だけで写真を見渡す。

「そうだね」

沙良はココアを一口飲むとまた口を開いた。

「一夏と一緒に暮らしてたときから定期的に写真撮ることにしてるんだ。その時に誰が傍に居たか忘れないようにね。そうしたら純粋に写真に残したいことが多くなっちゃって。変かな？」

「ううん。僕はとつても素敵なことだと思っようよ」

そのシャルロットの言葉に、沙良は嬉しそうに微笑む。

「そっうだ、シャルも一緒に写真撮ろうよ！」

沙良は急に思い立ったように声を上げる。

「僕も？」

「そっうだよ。シャルの入社記念。みんなで一緒に写真に写ろうよ！ そっうと決まればみんなに声をかけないと」

沙良はすぐに寢室から飛び出していく。

部屋の奥から話し声が聞こえるため、おそらく電話をかけているのだから。

「シャル！ みんな出てくるっつて！ 僕らも行こうよ」

「ま、待っつてよセラあ！」

シャルロットは急いで沙良の背中を追いかけるのだった。

第三十九話 濃密な一日

雀だろうか、小鳥の囀りに目を開いてみると、外は明るくなっていた。

金色の髪が目にかかり、鬱陶しげに髪を掻き揚げる。

「朝かあ」

ぐっと伸びをして、そこで不思議なことに気づいた。

「んー……………え？ 何この膨らみ」

腰の辺りがこんもりと膨らんでいる。

シャルロットが借りることになったベッド。

それは沙良が普段使っているものである。当初は床で寝るとシャルロットが言い

張つたのだが、想い人に「お客さんにそんなこと出来ない」と上目遣いで迫られたら

誰だつて頷くしかないだろう。

表面上は渋々と、内心では発狂するぐらいの喜びを以って、ベッドに潜り込み沙良の

匂いを堪能するのが昨夜の話だ。

その際にはシャルロットの他には何も無く、こんな膨らみが作れるようなぬいぐるみ

なども何も無かった。

「じゃあこれって」

考えうる答えなど一つしか思いつかない。

高鳴る心臓を抑えて、恐る恐る布団を捲ると、

「んう……すう……」

想い人が心地良さそうに眠っていた。

それもシャルロットの腰にしがみついて。

「な、な、な」

咄嗟に自分の口を塞ぎ、大声を出さなかったことを褒めて上げたい気分だ。

何故、沙良がここで寝ているのだ。

昨日だって、

『駄目だよ。シャルを床でなんか寝させられないよ。ねえ、お願い。ね？ シャルも

ベッドで寝たいよね？』

と言っていたではないか。

そこでシャルロットは気づく。

「そういうことか」

確かに、沙良の部屋にはベッドが一つしかなく、お客様用の布団なども無いとの話だった。

当初、シャルロットが床で寝ると言い張ったのだが、それを沙良が拒否。自分のベッドで寝ようにとお願いしてきたのだ。

だから、シャルロットはてつきり沙良が床で寝るか、何処かで寝床を確保するものかと思っていた。

だが、ここで思い出して欲しい。沙良は自分が床で寝るとは一言も言っていない。

そして、あの時は疑問に思わなかったが、沙良は『シャルもベッドで寝たいよね』と言ったのだ。シャル『も』と。

最初から沙良がベッドで寝ることは決まっていたのではないだろうか。

「つて、ちよつと待ってっ!？」

寝てる最中、シャルロットは腕が寂しくなったため、布団を抱いて寝ていた記憶がある。

だが、起きた際には布団はきちんと掛かっていた。それに、布団にしては質量があると寝ぼけながらに感じていた。

今なら分かる。沙良だ。

恐らく先に寝てしまったシャルロットに気を遣って、起こすことなくベッドに入ったのだろう。それに気づかず、シャルロットは横に居た沙良を抱き枕にしてしまったのか。

「まさかまさかまさか」

シャルロットは顔を真っ赤に染め上げる。

自分で自分を抱いてみると、微かに沙良の香りがした。

腰に感じる重みに、ついその抱きついている沙良を見る。

肌蹴た寝巻きは、沙良を色っぽく見せ、その襟元から覗く鎖骨は尋常ではない色気を醸し出している。

すると、こみ上げてくる気持ち。

有体に言えばムラツとしたのだ。

——あ、駄目。理性が。

沙良を起こさぬように静かに、けれどももすばやくベッドから降りると、すぐさま沙良から借りているジャージのまま部屋から飛び出した。

きつく靴紐を結ぶと、無心で敷地内を走り回る。

「煩惱退散、 煩惱退散、 煩惱退散」

それは沙良がシャルロットの姿が無いことに気づき、探しに来るまで続いたのである。



沙良は優雅に紅茶を飲んでいた。

気を利かせた研究員が淹れてくれたものだ。

まるで花のようなフローラル香。恐らくはダーズリンだろう。

紅茶好きな社員が多いため、マリアージュ・フレール、フォシヨン、フォートン&メイソン、ハロツズ、エディール等様々なブランドが取り寄せられている。

沙良の好みを良く知っている研究員は、マリアージュ・フレールを選んでくれたようだ。

「ふう、おいし」

激務の間の小休止。

その少ない休憩時間を沙良はコンソールから動くことなく過ごしていた。

普段は休憩室に行くか、ソファーに座って社員と喋ったりしているのだが、今はある人物を目で追っている。

「シャルロット!! さっきのデータはまだ!？」

「す、すみません!!」

「シャルロット!? ここの数字間違ってるわよ!? やり直さない!!」
「すみませんっ!!」

「シャル。二時間後に武装テストをするから」

「え、今それどころじゃ……」

「それまでには終わらせなさい」

「で、でも……」

「上司の発言には口答えしない!!」

「は、はい!!」

「新人!! 入社の書類が出てないわよ!! 早く本社の庶務課に出しに行きなさい!!」

「す、すいません!!」

「シャルロット、ISスーツの採寸があるから一時間後に本社の総務課に顔出して」

「一時間後……」

「シャル、三十分後の会議までにこの資料作つといて」

「そ、そんな……」

忙しく走り回る社員の中でも、特に慌しく動く一人の少女を眺める。

その姿を見ているだけで、微笑ましくなる。

新人が入るたびに見ることになる光景に、懐かしさを感じる。

この風景は沙良が入社して五年経った今でも変わらない。

S・Q社の中でも第一深海作業開発研究室は希望倍率が高く、中々入ることができない。

その倍率は400倍を超える。

沙良がIS学園に入学することが決定してから、新しく職員を入れたようだが、そのときも同じような光景が広がっていたに違いない。

この研究室に求められるのは即戦力。

ゆえに、初日から仕事を押し付けられてしまう。

ただでさえ人手不足なのだ。いくらテストパイロットとはいえ、研究員として入社したからには研究や雑務もこなしてもらわなければならない。

例え、明日IS学園に帰るといってもそれは変わらない。

「セラ、休憩中にごめんね。さっきのデータ纏められてる？ 至急必要になったんだけど」

「ああ、出来てるよ」

「部長！ すいません！ データに間違いがあったみたいです」

「ああ、ここは入力するデータが違うんだ。B-264のデータに置き換えて提出して」
「セラ、休憩中に御免だけど仕事が追加よ。一時間後にモニタールームでテスターを

やって欲しいの」

「了解。詳しいデータを端末に送つといて」

「セラ！ 本社から納品のミスがあつたつて！ 部署の子が謝りに来てる！」

「うん、わかつた。十分後に行くから応対室に通しておいて。出来たら先に内容聞いて対処。個人で判断できなかつたらロサに通して」

「セラ、報告書が届いたから置いとくわよ」

「ありがとう。コンソールの上に積んどいて」

沙良は、紅茶から手を離すことなく対応する。

飽く迄も休憩中なのだ。

そこに仕事は入れたくない。

「大変だねえ、セラ」

コンソールから動くことのない沙良に、声がかけられる。

声のした方に顔を向けると、白衣に身を包んだロサが

「あ、ロサお疲れ様。ロサも休憩中？」

「まあそんなところだね。すまないね、仕事で帰ってきたわけじゃないつてのに。あの子達も仕事ができないつてわけじゃないんだけど、セラがやるのとは比べ物にならないからね」

その口からはため息がこぼれていた。

その疲れきったロサの姿に、沙良は苦笑を浮かべると、両手を上に向け、肩をすくめて見せる。

「まあ、仕方ないと割り切ってるよ。当分の目標は新人教育だね」

「それはそうと、あの子は良いのかい？」

ロサの視線はシャルロットに向く。

「言われたとおりに、大量の仕事を押し付けておいたけど、そんなことして何になるって言うんだい？」

「純粹にここでの仕事に慣れてもらうためだよ。テストパイロットといつても、所属が研究室だから研究を疎かにしちゃいけないしね」

「あの子の姿を見てると、ソフィアの時を思い出すねえ」

「二人ともコネで入ったようなものだしね」

「あえて厳しい状況において、あの子への非難を減らそうってことかい？」

「わかってるじゃん」

沙良は楽しそうに白い歯を見せる。

シャルロットは、せかせかと働いている。

その姿は働き始めたときのソフィアと重なる。

その姿を見て、沙良はあることを思いついた。

それはソフィアのと きにも行つたこと。

そのときのソフィアは信じられないといった具合に悲鳴を上げていたものだが、シャルロットはどうなるだろう。

沙良はその顔に浮かぶ楽の表情を隠そうともしない。

「あ、そうだ。ねえ、シャル」

沙良は、思い出したかのように装い声をかける。

「な、何？」

シャルロットは忙しそうに対応しながらも、沙良に声をかけられたのが嬉しかったのか、その声色は少し喜を含んでいる。

そのシャルロットの机の上に、自分の雑務を置く。

「はい、これ。僕らが帰るまでには処理しといて」

積まれた仕事は、今までの書類の比ではなかった。

沙良がやればおおよそ三十分程度の仕事。

それはシャルロットの仕事ぶりだと、おそらく二、三時間は掛かるだろう。シャルロットの周りの空気がまるで時が動いていないかのように止まった。

そして、極み付けの言葉を言い放つ。

「仕事が片付かない限り、帰らせないからね」

シャルロットの悲鳴が研究室に響るのであった。



「ひどい目にあつた一日だった」

シャルロットは荷物をバッグに詰め込むと、ベッドに腰をかけた。

その体はＩＳ学園の制服に包まれている。

思い返すと、大変だったが、有意義な一日だったかもしれない。

仕事自体は大変で、皆も鬼のように仕事を振ってくるが、いざ仕事が終われば、優しく接してくれる。

スペインに不慣れなシャルロットのために、皆が会社周りでお勧めの店などを教えてくれたり、沙良の昔の話を聞いたり、研究所で密かに製作されているセラコレクションとやらの存在を知ったりと、収穫の多い時間を過ごせた。

当然、セラコレクションはお買い上げしている。

今日、シャルロットと沙良はIS学園に戻る。

日本とスペインの時差はおおよそ九時間。

ここからS・Q社の沙良送迎用に開発されたジェット機を使い、約三時間のフライトの予定だ。

合計時間は約十二時間になる。

向こうに十二時に着く予定のため、出発予定時刻は二十四時になっている。

今の時刻は十九時。

仕事が終わわり、家に帰って来たのだが、出発まで時間は残っている。

「少しの期間だったけど、お世話になったわけだし、挨拶だけでも行っておかないとなあ」

シャルロットは沙良と同じ社宅に部屋を貰うことになった。

その社宅は会社まで徒歩十分という立地条件のため、気軽に足を運ぶことが出来る。

「よし、一回街に寄ってザイダさんのお勧めのチェロスをお土産に買っていいのかな」
シャルロットはIS学園の制服のまま、スペインの街に出かけるのだった。



「あれ？ シャルはどうしたの？」

シャルロットは手に持った袋を掲げると、沙良は納得したように頷いた。

「わざわざ差し入れ買って来てくれたんだ」

「せっかくだし街にも行ってみようと思ってるね。沙良はまだお仕事？」

その言葉に頷きが返ってくる。

「シャルは知ってるよね。シークエストの第三世代機ケートウスシリーズ」

言われた名前に、頷くことで答えとする。

「これがそのケートウスシリーズの一つ。名を『ドルフィン』」

最初にこの研究室に足を踏み入れたときから気になっていたもの。

全面ガラスの部屋にケーブルによって繋がれた白い機体。

その周りには研究員が群がって作業している。

「帰る寸前まで作業なんて大変なんだね」

「僕しか出来ないことだしね」

その言葉に、シャルロットは首を傾げる。

その理解が足りていないシャルロットの様子に気付いたのか、沙良は説明を重ねる。

「そっか、シャルは知らないのか。ケートウスシリーズの機体は、特殊な性質があるんだ」

「特殊な性質？」

「簡単に言うと、機体が搭乗者を選ぶんだ」

その沙良の言葉に、シャルロットは驚きを隠せない。

確かに、ISには自己があるとされており、それゆえにISをパートナーと認識するのが今の流れだ。

しかし、IS自体が搭乗者を選ぶなんて聞いた事は無い。

「何で搭乗者を選ぶようになったのかは各説があるんだけど、そのおかげで機体と搭乗者の相性は抜群なんだ」

その各説と言うのも気になるが、それよりも沙良の首に巻かれているチョーカーに目が行ってしまう。

「セラが専用機を二つ持つてるのって、もしかして」

「いや、これは僕と相性がいいコアを使った僕専用機。後から選ばれたんじゃなくて、選んでくれたコアを使って作ったんだ」

おそらく『カイラ』は『オルカ』が完成していないから専用機としているのだろう。

「それじゃあ、ソフィアさんも？」

「ソフィも僕と一緒のパターンだね」

つまりは、元々誰かの専用機として作ろうとすれば問題はないようだ。

問題となるのは量販した時の相性だろう。

その場合は、発注後に相性を確かめてからそのコアを使って制作をするのだろうか。

「生憎、僕も『ドルフィン』に選ばれた訳じゃないんだけど、僕以外の研究員には反応さえしないから仕方なくね。僕がやるしかないんだ」

「選ばれるとどうなるの？」

「選ばれると最適化処理が行われるんだ。僕は初期化は行われたんだけど、最適化処理は行われなくてね。でも他の人間じゃ初期化すら行われなかったから、僕がテスターをしてるんだ」

「セラの負担が大きいね……。僕も手伝えたらいいのに」

シャルロットは優しく『ドルフィン』を撫でる。

少しでも力になれたらいいのに。

そんな思いで触れる。

——ねえ、力が欲しい？

「え？」

シャルロットはパツと『ドルフィン』から手を離す。

その動作に沙良が訝しげな視線を向ける。

「あ、な、なんでもないよ!？」

シャルロットは手を胸の前で握ると、恐る恐る、その雪のような機体に触れる。

——ねえ、力が欲しい？

先ほどの声は気のせいではなかったようだ。

あまりのことに、シャルロットは頭が真っ白になる。

——聞こえてる？

声が離れていく。

シャルロットは慌てて聞こえてると強く念じた。

——ああ、良かった。声が聞こえたのは君で六人目だよ。

その言葉にシャルロットは選ばれたわけじゃないと悟る。

——さあ、問いに答えて。

シャルロットは考える。

力が欲しいかといわれれば、それはもちろん欲しい。

この世の中は、力が無ければ淘汰されてしまう。

どんなに容姿が良くても、どれだけ頭が良くても、どんなにお金を持っていても、それは力が無ければ食い物にされるだけだ。

進化し続けていくためには、生き延びていくためには力が必要。

しかし、力だけを持っていても、世界には通用しない。

それをシャルロットはデュノアで学んだ。

だからこそシャルロットは答えた。

『欲しいけど……いらない、かな』

——なんで？

聞き返してくる声色は心なしか楽しそうに聞こえる。

『僕は沙良を守りたい。それは強く思う。でも、本当にしたいのは、ただ近くで支えていたい。それだけ。力なんて無くたって支えることは出来るから』

自分が力を持つ必要はない。自分が沙良の力になりたいと願っているのだから。

『まあ、力はあるに越したことは無いけどね』

——君の想いはわかったよ。

『うん、なんかごめんね』

——ふふふ、君は面白いね。……うん、決めた。僕が——

シャルロットの周囲にモニターが現れる。

その数はあつという間に十を超え、そして百を超える。

シャルロットは急なことに反応が遅れ、身動きが取れなくなる。

そのモニターに覆われる形になったシャルロットに研究員が慌てた声を上げる。

「システムを落とせ!!」

「回線はどうなっている!?!」

「モニター!! データを!!」

「救助に入る!!」

シャルロットは一言、大丈夫と発しようとした。

しかし、その声が出ることは無かった。

「大丈夫、シャルを信じよう」

沙良が、そう言葉を発した。

すると、周りの喧騒が嘘の様に収まる。

そのタイミングを見計らっていたかのように、モニターが一齐にスクロールする。

流れていくのは『ドルフィン』のスペックに、

「これは、僕のデータ?」

見覚えのある数字は、シャルロットが自分でまとめて報告した自分の稼動データである。

情報の乱流は収まることは無く、その勢いを増していく。

その様子に、周りが息を飲むのが分かる。

少し、注意を外に向けると、パツとモニターが霧散する。そして、『ドルフィン』が光の粒子に変わり、シャルロットの体に纏わりついた。

しかし、その粒子は形を成さない。

疑問に思つた瞬間、シャルロットにだけ見えるようにモニターが現れた。

そこに表示された文字を見て、シャルは微笑を零した。

——君があの子を支えるのなら、僕が君を支えてあげる。

「よろしくね、『ドルフィン』」

その言葉を待っていたかのようにドルフィンがその形を成した。

—— Start system, Access ——

—— Fitting Start ——

—— Sea Quest Diving system, Access ——

—— 搭乗者を確認、搭乗者を登録 ——

—— Secret system, Start Access ——

—— 皮膚装甲展開……完了 ——

—— 推進器稼動確認……完了 ——

—— ハイパーセンサー最適化……完了 ——

——ようこそ。そしてよろしくね、シャルロット——

第四十話 疲労困憊の帰り道

「もう無理い……」

「あ、良い所に。お疲れ、はいコーヒー」

モニタールームに入ってきたシャルロットに、用意していたコーヒーを渡した沙良は、そのままモニタールームのソファに腰を下ろした。

横をポンポンと叩くと、意図を察したシャルロットがそこに腰を落とす。

疲れが溜まっているのか、シャルロットは自然に沙良にもたれ掛かった。

その体は動くことを拒否しているように見える。

「疲れたあ……本当に、本当に疲れた……」

まさしく疲労困憊といった具合でうめき声を上げる少女を、研究員はみな良くやったと言わんばかりに微笑を向けている。

時刻は既に二十四時を回っている。

あれから休憩を挟むことなく機体のテストや実験、調節を繰り返した少女は、弱音を吐くことも無く、それを乗り切った。

シャルロットが乗ることになった『ドルフィン』は未だに完成してはいない。

今までまともに乗れる者が一人もいなかったのである。

装甲や、スラスター系は沙良がテストをしていたため、形にすることは出来ていたが、肝心の特殊兵装だけはその限りではなかったため、案だけが溜まっていく一方だった。

その装甲や、スラスター系も沙良がIS学園に入学したことで触ることが出来なくなり、出来ることはプログラムや、武装などの限られた部門だけだったのだ。

そこに、ようやく機体選ばれた搭乗者が現れたのだ。

試したかったことを我慢できる研究者など存在しないだろう。

時間はいくらあっても足りない。しかし、明日にはIS学園に帰らなければならない沙良とシャルロットは、遅くても朝の九時までにスペインを出なければならぬ。

つまりは、寝ずのデスマーチである。

「次は二時半から武器のテストと特殊兵装のデータ取り、特殊兵装用のセンサー・リンクのテストね」

「つまりは二時間は寝れるんだね……」

シャルロットはふらふらとモニタールームから出て行くこうとする。

「どこで寝るの?」

「コンソールで横になるよ」

いくら人体への負担を最小限に抑えたコンソールとはいえど、寝るように設計されているわけではない。寝ないよりはマシだが、それでも体の疲れが取れるかと聞かれると頷き難い所がある。

「腰、痛めちやうよ?」

「……でも、他に寝る場所ないし」

「ほら、()においで」

沙良はポンポンと自分の膝を叩いた。

しかし、いくら待ってもシャルロットが寄ってくる気配は無い。

嫌なのかと思い、肩を落とすと、慌てたように声が掛かった。

「あ、嫌とかじゃないんだよ? その……いいの?」

その言葉に答えたのは周りの研究員たちだった。

「ほら、行った行った。ここでは当たり前のことなんだから遠慮すんな」

「誰かしらが誰かしらの膝に顔を埋めることになるんだから、早く慣れなさい」

「セラがしてくれるのは珍しいんだからチャンス逃すと勿体無いわよ?」

その周りの声に負けて、シャルロットはおずおずと沙良に近づく。

沙良は笑顔で膝をポンポンと叩いた。

その笑顔に負けたのか、沙良の膝にシャルロットの頭が乗せられた。

最初は緊張していたようだが、その疲れのせいかな、時間を待たずに眠りに落ちていった。

「相当疲れてたんだね」

シャルロットの頭を優しく撫でる。

「そりゃあ、あれだけ酷使されてたらそうなるわね。ただでさえあの装備は集中力を使うのに」

「……なんで当たり前のようになんかにいるの？」

顔を上げると、見慣れた顔がそこにあった。

「いちやダメかしら？」

「良いわけないでしょ。早く本社に戻りなよ。そっちもデスマーチなんでしょ？」

いつの間に来たのが、珍しく髪を下ろしているカルラがのんびりと腰をかける。

「あ、それ僕のコピーだよ！」

「ケチケチしないの」

「それも僕のお菓子!!」

「けひけひしはひの」

「食べながら喋らないで！ ああ、もうほら口に欠片つけてる。ほらじつとして」

沙良はポケットからハンカチを取り出すとカルラの口を拭う。

「ふふふ、役得ね」

「何、意味のわかんないこといってんのさ。まったく、何しに来たの？ 今、忙しいんだから」

「仕事から逃げてきただけよ？ 向こうには癒しというものが足りないわ」

「あ、もしもし総務課ですか？ 脱走者を確保しましたので引き取りに来てもらえますか？」

沙良はすぐに内線で引き取りを要求する。

「あ、ちよつと！」

「ああ、はいわかりました。捕獲しておきます」

その捕獲と言う単語が聞こえた瞬間、カルラは駆け出した。少しでも早くこの場を離れなければならぬと言わんばかりの疾走。

いい年をした大人のするような行動では決して無い。

しかし、その足はすぐに止められることになった。

扉が開かないのだ。

「逃がさないよ」

逃がしてはならないものがいた場合はどうしたらいいか。

簡単な話だ。

閉じ込めてしまえば良い。

都合のいいことに、モニタールームに残っている研究員は全て『ドルフィン』にかかりっきりの為、この部屋を出ることは無いだろう。

数分後、引取りに来た本社の社員に引き摺られていくカルラの姿は憐れみの感情を引き起こすほど哀れだった。



それは処女雪のような白さだった。

誰も足を踏み入れたことの無い雪原。

穢れなき雪は純白ではなく、青の影を落とす。

その影は、昼でも夜でも変わることなくその輪郭を強調し続ける。

一夏の『白式』を「純白」と呼ぶなら、シャルロットの『ドルフィン』は「月白」や「藍白」と呼ぶべきだろう。

その姿は神秘的に見える。

それは、こんなアリーナという空間においても。

それは、こんな状況においても。

「待つて!! セラ、ちよつと待つて!! 無理無理無理無理むーりー!!!」

目の前では藍白に身を包んだ少女が悲鳴を上げている。

その両腕は前に突き出され、必死に何かを堪えているように見える。

その手に対応するように、空間が歪んでいるのが確認されている。

鉄紺のような深青を纏っている沙良は、その歪みに躊躇無く弾丸を叩き込んでいく。

「本当に無理だつて!! 限界!! 限界だから!! 僕が限界なら止めるつて実験前に言うてたじゃない!? だから引き受けたのに!!」

悲鳴を上げつつも弾丸を空間に押し留め続ける姿を見て、沙良はにっこりと微笑んだ。

「シャル、人間はね、限界が来るときには、喋ることなんて出来ないんだよ」

当たり前のように吐かれた台詞は、少女の顔を引きつらせた。

沙良は何食わぬ顔で引き金を引き続けていく。

「……騙したね?」

「人聞きの悪い。ちゃんと限界が来たら止めてあげるよ」

その言葉と同時に、壁からガトリングが突き出てくる。

笑顔を浮かべている沙良の顔を見て、シャルロットは察したようだ。

「ね、ねえ嘘だよね？」 「冗談……だよね？」

シャルロットの顔から血の色が無くなっていく。

沙良はその笑みを濃くした。

その口が声を出すことなく、一つの形に動いた。

『撃て』

無言の命令にガトリングが火を噴いた。

まるで銃弾が豪雨のように藍白に迫る。

その銃弾は立ちふさがるものを蹂躪するかのように勢いを増していく。

しかし、その全てがある一定のラインを以って動かなくなる。

「お見事」

沙良がその手を止めると、周囲のガトリングもその空葉莖の排出を中断する。

「沙良……絶対に許さないから」

空間の歪みが消失し、空に浮いていた銃弾が地面へと行き場を変える。

藍白の機体は高度を下げると、そのまま地面にへたり込んだ。

限界が来たのだろう。

それはエネルギーが尽きたというわけではない。

純粹に、体力の限界が来たのだ。

まるで生まれたばかりの小鹿のように足を震わせている。

自力で立つことは難しそうだ。

その恨みがましい視線は沙良に突き刺さる。

『沙良』と呼ぶことにもその意が読み取れる。

「せっかく運んであげようと思つたのに、そういう態度取るなら仕方ないね」

沙良の言葉にシャルロットの顔が青ざめる。

沙良は片手を上げると、モニタールームの研究員に合図を送る。

それを見たシャルロットはそれが何の合図かを一瞬で把握し、慌てた声を出した。

「ま、待つて、あれだけは許しああああああああ!!!」

地面からいきなり出現した手のような機械に足を掴まれると、そのままピットまで連れ去られていく。

それは運ぶ相手のことを全くもって考慮していないため、終点のピットには毎回のよう
うにゴミのように扱われた姿が確認されている。

これは、エネルギーが残っている場合なら、ただ運んでくれる便利な機能なのだが、こ
うもグロッキーになっている場合はバランスを取ることもできず、ただ引き摺りまわさ
れるだけの悪魔の機能と化するのだ。

その腕に引き摺られていくシャルロットの叫び声はアリーナに反響するのであった。



「沙良、僕はこんなにも君の事を憎く思ったのは初めてだよ」

熱いシャワーを頭から浴びながら、横で同じように熱いお湯をかぶっている少年に声をかける。

「ISの研究は楽しいことばかりじゃないって学べたってことにしておいてよ」

横のシャワーを使う少年は、その体の線の細さを充分に見せ付け、のうのうと答えた。

その体はISスーツを纏ったままである。

「はあ、何を言っても無駄なんだろうなあ」

思わずため息が出てしまう。

頭を洗いながら、身に付けているISスーツに湯をしみこませていく。

「それにしても便利だね。このISスーツ」

「でしょ？　うちの部署の自信作だよ」

沙良は胸を張って答える。

その姿に笑みがこぼれてしまう。

「まさか、これ着た状態でシャワーが浴びれるなんてね」

「もともと海水に濡れることを前提に開発をしたからね。今ではデザイン性の良さもあって、ウェットスーツの代わりにこのS・QモデルのISスーツを着るダイバーが増えていんだよ。保温も、体の保護もISスーツの方が優れているしね」

沙良がISスーツを摘まんで示す。

その体を纏う深縹のスーツの胸にはシャチの絵がプリントされている。

同じようにシヤルロットの薄縹のスーツの胸にはイルカの絵がプリントされている。

「確か、スクーバの製品も扱ってるんだよね？」

「うちの売り上げの上位を占める大事な部署だよ。スクーバも僕らの研究室が関わっているから、いずれ担当者に会えると思うよ」

「スクーバかあ。したことないなあ」

「スクーバはすっごい楽しいよ。毎年夏になったらみんなで潜ることになるから、そのときに一緒に潜ろっか」

「うん!!」

夏にみんなで潜るといふことは、社員旅行か何かだろうか。

楽しいといっているのだから楽しいのだろう。

今から楽しみが増えたシャルロットは機嫌を直し、シャワーを止める。

「先に行ってるね」

「はい」

シャルロットは、まだ知らない。

その夏の出来事が、楽しいことでは決して無いと。

それは、全社員による地獄の製品テストのデスマーチだと。

一日の半分以上を海の中で過ごす地獄の一週間だと。

このときのシャルロットは知る由も無かった。



時刻は八時を過ぎていた。

既に荷物をジェット機に詰め込み、後は沙良を待つだけとなっている。

沙良は『ドルフィン』の最終チェックのため、ギリギリまで研究室で粘っている。

シャルロットと違い、こちらにも家がある沙良は最初から荷物を持ってこなかったらしい。

結局、一睡もすることがなかった沙良の背中を、シャルロットちらつと盗み見る。

手伝おうとはしたのだが、何をしているのかがさっぱり理解できなかったため、ソファーにトボトボと引き返したのだ。

今は、専用機である『ソラ』のスペックを眺めている。

『ドルフィン』に選ばれたとはいえ、その『ドルフィン』がまだ完成に至っていない。故に、シャルロットは『ソラ』を専用機として持つことを許されている。

「そういえば、ケートウスが搭乗者を選ぶ原因に各説があるって言ってたよね。それってどんな説なの？」

シャルロットの問いかけに、沙良は作業を止めることなく、口だけを動かして答える。

「あれ？ 『ドルフィン』から聞いてない？」

その言葉に、シャルロットは首をかしげる。

『ドルフィン』から聞く。

その言葉の意味に気付くのに少しの時間が掛かった。

「ケートウスシリーズの機体には意志があるの!？」

「普通のISよりちょっと自己が強いつて程度だよ」

確かに、自分はドルフィンと会話をした。

それは最初の選択の時もそうだが、実験中もちよくちよくと声がかけられていた。その時のことを思い出し試してみる。

確か、『ドルフィン』はこうだったのだ。

——僕らは『リストアアップ』だからね。

「リストアアップ、そう言ってた」

その時は、言葉の意味がわからなかったが、それが答えなのだろうか。

「僕は、そのリストアアップを用いて作ったからだと思ってる」

「ちよ、ちよと待って。そのリストアアップってなんなの？」

当たり前のようにリストアアップという単語を使う沙良に、シャルロットは待ったをかける。

「シャルはこの世の中に、コアが何個あるかは知ってるよね？」

「えっと、確か467個だよね」

「教科書どおりならそれで正解なんだけどね」

「……あの噂って本当なの？」

それは、一時期広まった『コアの数は500を超えている』というもの。

しかし、それは出任せと言われ、人々の記憶から薄れていった。

「コアナンバー468から512までの四十五個のコア。それを元々の目録から外れた物ということで『目録外』リストアップと呼ぶんだ」

「512……。で、でもよくそれが表に出てこなかったね。普通なら出てきてもおかしくない情報なのに」

「僕らの間では有名な話だけだね。まあ姉さんが何かしたんじゃないかな？　なぜかエスパーニヤに十個も送られてきたし」

「姉さん？」

「ああ、かの有名な篠ノ乃博士のこと」

言われてセラコレクシヨンの中に一緒に写っていた姿を思い出す。

何が一番驚いたかというところ、そこに篠ノ乃博士がいることに、誰も何も思つてなかったことだろう。

（篠ノ乃博士って、世界各国から狙われてるんじゃないやなかったっけ？）

自分の中の常識がことごとく否定されていく。

「もともと、僕が第三世代を作りたいんだけど、コアが少ないから厳しいってばやいてたら送られてきたものだしね」

シャルロットは口をぽかんと開けたまま、固まってしまふ。

あんなに各国がコアを手に入れようと躍起になって篠ノ乃博士を追っているのに、あ

んなにも他国にコアが渡らないようにアラスカ条約を制定したのに、こんな簡単なことでコアが作られていたのか。

「送られてきたコアは、従来よりI Sの意識が強く現れているのが分析によってわかったからね。僕らはその意識を尊重して機体を作ったんだ。その意識が機体に影響を与えているのが原因じゃないかって僕らは考えている」

その説よりもシャルロットは気になる発言を耳にした。

「分析……？」

それは未だに出来ていないはずじゃないのか。

シャルロットの疑問に答えるように沙良は何でもないように答える。

「流石に作り出すのは無理だけどね。ある程度なら分析できるよ」

姉さんがコアを作っている時に傍にいたし。

そう締めくくった沙良に、シャルロットは言葉が出なくなるのだった。



ジェット機の中で、シャルロットはソファに腰を下ろして、のんびりとコーヒーを飲む。

仮眠を取ろうかと思ったが、沙良が起きているため寝難いということもあり、今はゆったりとした時間を過ごしている。

沙良は寝てもいいよと言ったのだが、時差の関係もあるしと言って誤魔化しておいた。

「なんか色々あった三日間だったね」

観光に始まり、仕事に追われ、デスマーチを乗り越えた。

疲れが溜まっているのだろう。シャルロットの目の下には隈が出来ている。

しかし、その対面に座る沙良にはその疲れの色が見えない。

今も空中投影型のディスプレイを三つ浮かべ、仮想キーボードを叩いている。

「セラは疲れてないの？」

声に力が籠っていないのが自分でもわかる。

シャルロットは、未だかつてないほど疲れているんだと、自分の体に苦笑する。

「疲れてるけど、僕の仕事はデスクワークが殆どだからね。肉体労働のシャルとは疲労が比ではないよ」

そういう沙良だが、シャルロットは一睡もせず働き続ける沙良を見ているため、その

言葉を謙遜と受け取る。

実際に、シャルが見ていないところでテスターをしていることはザイダに聞いてい

る。その机に積まれた栄養ドリンクは、沙良の疲れを表しているに違いない。

しかし、沙良は働いたことでの疲労を指摘されるのを嫌う節があると聞いているため、深く掘り下げないように気をつける。

「今は何しているの?」

選んだのは話を逸らすことだった。

作業中に声をかけるのは躊躇われる所だが、沙良が同時思考をなんとも思っていないのはこの三日間で学習済みである。

一度、作業中のため、話しかけるかどうかでうろろしていたら、「何? 用があるなら早くしてくれない? うろろされるのと気になるんだよ」と機嫌が悪そうに言われてしまったことがある。

あの時はあまりのショックに仕事に支障をきたしそうになったが、新人が通る道と言われ、実際に他の人が同じように叱られているのを見て、どうにか持ちこたえた。

あれ以降、沙良が作業中でも話しかけることにしている。

沙良も誰かと話ながら作業している方が気楽らしい。

「ん、今は『ドルフィン』のスペックをまとめてるんだ。今のうちにやっておかないと、時間が足りないからね」

「そっか。次は夏休みになるのかあ。またあのデスマーチが続くと思うと背筋が凍りそうだよ」

シャルロットは辛かった実験を思い出し、苦笑を浮かべる。

「なに言ってるの?」

沙良が首をかしげる。

その言葉にシャルロットが首をかしげる。

お互い顔を見合って首をかしげるといふ不思議な光景が出来上がった。

「え、どういふこと?」

先に言葉を発したのはシャルロットだった。

「だって、夏休みまで待つなんて、そんなもつたいたいなこと僕がするわけじゃないじゃん」

シャルロットはその言葉に嫌な予感がした。

その予感は当たることになる。

沙良は、ハードケースからとあるものを取り出した。

それは、見覚えのあるもの。

藍白のボディに黒と青のラインが入ったチョコレート。

「ドルフィン……」

その姿を見ただけで理解できる。

ここに『ドルフィン』があるということ。

そもそも、沙良がいれば研究は出来るのだ。

IS学園にはフィオナもいる。

ISを作った前例があるのだ。

容易に想像できる。

あのデスマーチがIS学園で繰り返される光景が。

「じよ、冗談だよね……?」

ここ数日で口癖のようになってしまった言葉を呟く。

その返事はいつもシャルロットの望む言葉を返してはくれない。

「休日なんてあるとは思わないでね」

天使のような満面の笑みで振り下ろされる死神の鎌。

それはシャルロットの顔から表情を消し去る。

「せっかく搭乗者が現れたんだから、利用しない手はないでしょ。言ってたよね、僕の役に立ちたいって。だから、役に立つてもらおうよ?」

本当にあの似顔絵の人物と同じ人物なのか。

あの天使のような少年と同じ人物とは思えない。
沙良の天使のような笑みの裏に、確かに悪魔の顔を見たのであった。

第四十一話 慌しき日々の再開

「ただいまー」

「ただいま」

沙良は部屋につくなり、ベッドにその身を投げ出す。

やはり疲れは溜まっていたようで、横になったとたんに眠気が襲ってくる。

「沙良？　寝るなら着替えてから寝ないと皺になっちゃうよ？」

流石に恥ずかしいのか、シャルロットはIS学園では沙良と呼ぶことにしたようだ。

シャルロットが優しく沙良の体を起こす。

シャルロットは少しだが仮眠を取っていたため、幾分か疲れが取れているようだ。

その首には、図らずも沙良とお揃いという形になったチョーカーがその存在を主張している。

「寝る前に、千冬姉にシャルの帰化によるデータ変更の手続きの紙を出さないと……」

そう言うものの、体は動くことを良しとほしない。

いつまでたっても動こうとしない沙良は、何を思ったのかももう一度ベッドに横になつてしまう。

その姿を見て、シャルロットはため息をつく。

「わかったよ。僕が出してくるから沙良はそれまでに寝巻きに着替えておくこと。いいね？」

沙良はコクコクと頷く。

「じゃあ、ちよつと行つてくるね」

シャルロットが部屋を出る。

その足音が聞こえなくなるのを確認すると、沙良はむくりと起き出した。

周りを警戒するように気を尖らせる。

その視線は部屋を一通り通り過ぎていく。

視線がベッドに止まる。

「……かな」

そして、ベッドの下に手を突っ込むと、小さな物体を引っ張り出した。

出てきたものはペンだった。

それは一見するとただのボールペンに見える。

しかし、持ってみるとわかる。

ペンにしては重心が前に偏っている。

ボールペン型会話用盗聴器だ。

留守にしていた三日間のうちに付けられたのだろう。

その盗聴器に口を近づける。

「とつくに気付いてるから、早く機嫌取りに来た方がいいよ」

言い終わるとすぐさまペンを押し折る。

もちろん、沙良にそんな力はなく、ISのサポートを借りての行動だが。

沙良が盗聴器に気付いたのは部屋に入る前のことである。

普段から機密を扱う仕事をしているため、もし誰かが部屋に入ってもわかるようにと、エスパリーニャに発つ前に簡単な仕掛けを用意しておいた。

それは蝶番の合わせに突起を付けるというもの。

扉を開くと、傷が残るようになっていた。

ピッキング対策は万全だったため、犯人は鍵を開けて入ることが出来る人間。

そう考えると、出てくる人物は絞られてくる。

「早く入ってきなよ」



「あら、やっぱりバレてた？」

かけられた声に反応を返して、ドアを開ける。

部屋に入った瞬間に沙良は、押し折った盗聴器を投げつけてきた。

しかし、それは扇によって防ぐことに成功する。

沙良は舌打ちする。

その機嫌の悪さを隠そうともしない。

不躰な視線を生徒会長である楯無にぶつける。

「契約は破棄と、そう捉えていいのかな？」

沙良の声色は恐ろしく冷たい。しかし、その表情は何処か笑いを堪えるかのように見える。

「あら、ただ盗聴器しかけただけでその言いようは酷いとお姉さん思うわよ？　うちの内部の情報を片っ端からハッキングするよりかは大分マシだと思うわよ？」

しかし、その対応する楯無の態度はどこ吹く風と言わんばかりに飄々としている。いや、少し笑みを携えているか。

「先に仕掛けてきたのは貴女じゃないですか、十七代目？」

「あら、契約には反していないわよ。ちゃんと、『深水沙良に対するアプローチの禁止』。それは守っているつもりよ。それをあんな大々的にやられたらこっちだって黙ってられないのよ」

「確かに、僕に関しては何もしてこなかったね。流石とでも言ったほうがいいですか？まさか僕から姉さんを辿ろうとするなんてね」

沙良はその瞳に怒りを表す。

自分のことは気にしないが、その手が親しいものにまで伸びることは絶対に許せない。
い。

それが言動に表れていた。

沙良の手が楯無の首へと伸び、

「次はないですよ？」

楯無を通り過ぎた。

そのまま机にもたれ掛かり、ペン立てに入っているボールペンを楯無に投げ渡した。

それを楯無は片手で受け取ると、そのまま押し折った。

部屋に仕掛けた盗聴器は二つ。

これで、この部屋は監視から開放されたことになる。

「ふっ」

「ふっ、あはは」

「いい演技ね。役者に転向したら？ 笑いを堪えることが出来ただけだね」

「変なことに巻き込まないで下さいよ。どうせ今回のことは上に言われたんでしょ？」

そつちのことはそつちで処理してくれないと困るんですけど」

沙良は、先ほどの空気がまるでなかつたかのように振舞う。けらけらと笑いながら、ジツと楯無を見つめてくる。

楯無も張っていた気を緩める。

それはこのことが予定調和のように。

「私は反対したんだけどね。どうも上は兎の影を追いすぎてるところがあるわ」

楯無はずうずうしくも沙良のベッドに腰掛ける。

そんな楯無に沙良は冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し手渡す。

「まだ上の方を掌握していませんか?」

手伝ってあげたのに、とジト目で見られると、楯無も苦笑しか出ない。

「長期計画ってことよ」

「上の言いなりになるようでしたら当主失格ですよ?」

「わかってるわよ」

楯無は、迷いなくプルタブを開けると、コーヒーに口を付ける。

それは自分は信頼関係を築きたいと行動で示したもの。

沙良は嬉しそうに微笑む。

「上の方に伝えておいたほうがいいですよ。貴方達が相手をしているのは個人ではなく

国なのだとね」

それは、沙良からの忠告。

国を動かせるといつてしまえるほどの力を、確かに沙良は持っている。

それを充分に理解している楯無は困ったような顔を作る。

「上が使えないと大変ですわね」

その表情に感じるものがあつたのか、沙良は労わりの声をかける。

かけられた言葉によつて、内情が表情に出てたことに気付いた楯無は苦笑いを浮かべる。

元々、今回のことは上が勝手に沙良を利用して束の足跡を辿ろうとしたのを、沙良に報復されたことに始まる。

楯無としては、沙良と問題を起こすことは避けたい。しかし、上からの圧力に答えなければならぬ。

そこで、今回のような、楯無にしてはわかりやすいように盗聴器を仕掛けたのだ。

それは沙良なら合わせてくれるだろうという打算があつたため。

事実、それは正しかった。

こうして、盗聴器を通して、上には先ほどの会話が流れるだろう。

任務自体は終了したわけだ。

ならばすることは一つ。

「お茶菓子を出ないのかしら？」

楯無は居座る気満々だった。

「それにそろそろ、外の子を入れてあげたら？」

その言葉に反応して、ドアが開かれる。

入ってきた金髪の生徒は敵意を隠すことなく楯無にぶつけてくる。

その生徒に前振りもなく声をかける。

「シャルル・デュノア、フランスの代表候補生だったわけ？」

その言葉に、シャルロットはピクリと眉を動かす。

「知ってて聞くのは止めてくれませんか？」

「あら、心外ね。私は貴女がスペインに帰化して、新たな専用機を手に入れたことしか知らないわよ？」

「充分ですよ」

シャルロットはあからさまに敵意を剥き出しにしている。

「いつから気付いてたの？」

「シャルも部屋に入る前には気付いてたよ」

楯無の問いに答えたのは沙良だった。

「シャル、大丈夫。生徒会長はこっち側だから」

その沙良の一言でシャルロットの敵意が一瞬で薄れる。

「あ、そうなんだ。てつきり政府に繋がっているんだと思つて」

楯無はその切り替えの早さに心の中だけで感嘆の声をあげる。

それだけ沙良を信用しているということだろう。

「いいのよ。シャルロット・ルイスちゃん」

それはちよつとしたからかいのつもりだったのだが、帰つて来た答えは予想だにしないものだった。

「日本の暗部の方は情報が早いんですね」

楯無は、パツと沙良のほうに視線を向ける。

沙良は軽く首を横に振った。

それは、沙良が教えたわけではないということ。

シャルロット・デュノア。

沙良に言われ、調べたことは本当なんだろう。

デュノア社でのテストパイロットのほかに、暗部のような仕事も請け負っていたと聞く。

その時、楯無はその娘を道具のように扱う父親に虫唾が走ったものだ。

気配の消し方や、足音を消す歩法が見に染み付いていることが、その歩んできた道を想像させる。

楯無は沙良から話を聞いた時に、この子は守ってあげようと、そう思ったのだ。

「安心しなさい。ここがI S学園で、私が生徒会長である以上、貴女のこととも私が守ってあげるわ」

それが、望まずに世界の裏に足を踏み入れた子に、唯一してあげられることだから。



「一夏、おはよ……どう?」

三日ぶりに見る一夏の顔を見て、沙良は、言葉を失う。

その頬にシツプが張られ、よく見ると、腕にもあざが出来ている。

「おはよう、沙良」

「どうしたの、それ?」

「ああ、この三日間、出稽古に出てたんだ」

その言葉に、沙良は納得する。

一夏の中学時代の部活動を知っていればその傷にも理解が出来る。

空手。それを自分の武器に選んだ一夏は、中学時代は空手部に所属していた。恐らくだが、その空手部に顔を出しに行つたのだろう。

それを知らないのか、箒とセシリアが心配そうな顔をしていた。

「ほごほごにしときなよ」

みんな心配そうな顔してるよ。そう付け加える。

「ああ、わかってるんだけどな。特別師範が来てたから、つい興奮しちゃってずっと稽古を付けてもらってたよ」

「一夏らしいよ」

もう苦笑しか出ない。

「そういうえばシャルルは？」

「職員室に寄つてから来るって言つてたんだけど、そろそろ来ないと間に合わないよね」
教室を見渡すと、ラウラもその姿が見えない。

この三日で事情聴取も終わっているだろうから、休む理由などないだろう。

「み、みなさん、おはようございます……」

ラウラとシャルロットが姿を現す前に真耶が教室に到着してしまう。

しかし、その姿は見るからに疲れており、一夏の顔を見ても大したリアクションを取らない。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、既に紹介は済んでいるといえますか、ええと……」

その言葉に、沙良は思い当たる節があるため、大きなリアクションを取らなかったが、他の生徒はそういう訳にも行かないようだ。教室は一斉に騒音に包まれる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

「……」最近ずっと聞いている声に、沙良は顔を上げる。

「シャルロット・ルイスです。色々ありまして、今はSeaQuest Company所属のパイロットです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

朝に見せてもらった女子制服に身を包んだシャルロットが淑やかに頭を下げる。

なるほど、教員に捕まっていたから遅くなったのか。

沙良はそんなことを考えていた。

「ええと、デュノア君は色々ありましてルイスさんになりました。ということですが。ルイスさんはスペインに帰化し、今はスペインの代表候補生になっています。はああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

直接的な原因ではないが真耶の疲労の原因になってしまったことに申し訳なきを感じてしまう。

「え？ デユノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「つて織斑君、ペアを組んでたんだから知らないってことは——」

「ちよつと待って！ 確かこの前男子が大浴場を使ったわよね!!」

「待て!! 俺はその時は怪我で入って——」

しかし、一夏の声は教室が喧騒に包まれたことで言い終わることがなかった。

喧騒は段々と大きくなっていき、クラスの垣根を越える。

「一夏あつ!!」

前の扉から鈴音が、顔を怒りに染めて乗り込んでくる。

「アンタねえ!! 一体、どういうこ……と?」

しかし鈴音の言葉は尻すぼみになっていく。

その原因は一夏の顔にあった。

流石に、ボロボロの一夏を攻撃するのは良心が痛むのか、振り上げた拳を止める。

ことはなかった。

鈴音は、一人こくと頷くと、もう一度怒りを瞳に宿す。

「死ね!!」

体重を乗せた右ストレートがその狙いを一夏の顎に向ける。

——顎を狙うなんてえげつない……。

それは、確かに空振りすることなく当たった。

「あれ? 俺……生きてる……?」

一夏を庇う形で間に割って入ったのは、ラウラだった。

片手で鈴音の拳を受け止めている。流星は軍人と言ったところか。

「助かったぜ、ありが——」

一夏の礼の言葉は最後まで紡がれることはなかった。

それは、口を塞ぐという、原始的な方法。

しかし、その塞ぎ方が問題だった。

接吻。

KISS。

その言い方は数多くあるが、示す内容は唯一つ。唇で唇を塞いでいるのだ。

「こんな真昼間からお熱いことで」

「沙良、その発言は何かが違う気がするよ」

沙良とシャルロットを除き、その場の全員があんぐりとしている。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」
その宣言は、何人がすぐに理解できただろうか。

「嫁？ この場合は婿じゃないの？」

沙良の冷静な突っ込みにも反応を示すことが出来ない。

「お前と沙良は血の繋がりは無いが家族と言っていたな。私は、お前らの関係のようなものに憧れたのだ。私もお前たちと家族になりたい」

一夏は、未だに混乱が解けていないようだ。固まったまま動かなくなっている。

「そこで、日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な慣わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする！」

「あっあっ、あ………！」

鈴音が声にならない声を上げていることに気付いた沙良は、こそつと教室の端に移動する。

「アンタねえええええっ!!」

「待て！ 俺は悪くない！ どちらかと言うと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い!!」

鈴音が光の粒子を身体に纏った。

一夏は迷いもなく窓から飛び出した。

その姿を鈴音が追いかける。

「全く、嫁も落ち着きがないな」

沙良は近くまで来ていたラウラにそれは違うだろうと言いたくなる。

「沙良、私は、あなた達のように絆を紡げるだろうか」

その真剣な様子に沙良は頷く。

「私は、今日から家族になろうと思う」

「うん。よろしく」

「そ、それだったら……」

ラウラは、俯いてしまう。

ラウラより沙良の方が背が高いため、その表情を窺うことはできない。

「何？」

「兄と、そう思っていないだろうか」

沙良は一瞬思考を放棄してしまう。

確かに、独逸にいたころは妹のようにラウラを可愛がっていた。

そのころの印象も大いに残っているのだろう。

しかし、ここは独逸ではない。

クラスメート達はそんなことは知らないのだ。

「だ、ダメだろうか……?」

しかし、まるで捨てられた子犬のような瞳で見つめてくるこの少女を厳しく突き放せるかといわれたら微妙なラインだろう。

自分が行った行動でこうなっているのならば、自分の行動には責任を持たなければならぬ。

「……わかった。許可するよ」

「ほ、本当か!？」

「うん。本当」

ラウラはその頬を緩ませる。

その表情は本当に嬉しそうに破顔している。

「沙良がお兄ちゃんってことは、僕はお姉ちゃんだね。ねえ、ボーデヴィツヒさん、一回お姉ちゃんって言うってみて」

シャルロットの発言に、沙良は「こいつ何言ってるんだ」という顔をする。

「お、お姉ちゃん……」

「か、可愛いー!!」

なんなのだろうかこの状況は。

今はHRの時間ではなかったのか。

沙良は、シャルロットとラウラをひとまず放置しておいて、自分の席に着いた。

最初の授業は千冬の授業のはずだ。

ならばそろそろ、

「席に着け馬鹿共!!」

教室には出席簿の音が響くのであった。



「で、話って?」

沙良は箒に呼び出されて、屋上まで来ていた。

風に髪をされるがままにし、手摺りにも凭れ掛かっていた少女は、佇まいを正す。

「うむ、その……」

「ん?」

「私に……私に専用機を作ってくれないか!」

「……え?」

「沙良は知っているとわ思うが、私はあの人の妹と言うことだけでこのIS学園に居る」
それは知っている。

箒がISにいい印象を抱いていないことを。

「最初はISに関わることが嫌だった。だからISから逃げていたんだ。私から家族を奪った、姉さんから夢を奪ったISから」

だが、どうしてもISから離れることは出来なかったのだろう。

篠ノ之。

その姓を名乗り続けるということはそういうことだ。

それが、保護になると知っても、別名を名乗ることを拒む。

例えばISに関わろうとも、『篠ノ之箒』であつたということは曲げなくなつたのだらう。

芯の強さ。それが箒の強さ。

「しかし、今は違う。私にも目的が出来たのだ。横に立ちたい。しかし、今までの私じゃダメなのだ。ISを憎む私じゃダメなのだ。私は変わりたい。頼む、そのための手段を私に作って欲しい」

だが、目的のためにはその芯は強さと同時に壁となる。変わらなければならぬ。だから箒は折つたのだ。他でもない、一夏の横に立つために。

沙良は、箒の気持ちは良く分かる。

数年だが一緒に暮らしていた時期もあるのだ。誰よりも近い友人と言っても過言ではない。

「私は今まで、専用機の授与を断ってきた。自分が政治の道具になるなんて真つ平だと思っていた」

篠ノ之東の肉親。そんな人間が専用機を持っていないほうがおかしいのだ。しかし、箒はそれをずっと受け取らずに来た。

「だが、今の私には見ているだけなんて出来ない」

事件が起こるたびに、自分だけが何も出来ないという状況になる。

皆が傷ついていくのを、安全圏でただ見ていることしか出来ない。

それを気に病んでいることぐらい簡単にわかる。

しかし、専用機を持つと言うことは、開発国を最優先するという事だ。

それは、国際的な場での政治に関係することになる。

「私のせいで世界が動くなら、私は沙良に頼りたい」

だから沙良に助けを求めてきた。

沙良なら迷惑を掛けられる。

それは一種の信頼。それに沙良は応えようと決めた。

「……わかった。引き受——」

『私に任せなさい!!!』

沙良の言葉を遮る形で、空中投影デイスプレイが現れる。

そこに映っているのは、

「姉さん……?」

『箒ちゃんの話は聞かせてもらったよ! この束さんに掛かれば——』

沙良は勝手に出現したデイスプレイを消し去る。

「……わかった。引き受けるよ」

そして、先ほどの流れを無かったことにした。

「ああ、ありがとう」

箒も無かったように会話を続ける。

しかし、二人とも理解していた。

ここに束が関わってくるのがどういう意味を持つか。

「確かに、国に属していない姉さんの機体ならそういう問題はないだろうけど……いや、

問題だらけか」

おそらく、いや、確実に高スペックな専用機を作り上げてくるだろう。ならばその機体の所有権を巡って、様々な国で対立が起こるだろう。

ならば、今必要なのは、

「……………こうなつては仕方あるまい。あの人はおそろくやりすぎた物を送ってくるだろう。ならば、私を鍛えてくれ」

強大な力を手段と出来るほどの力を身に付けることだろう。

沙良は箒に手を差し出す。

それは了承の合図。

風の止まった屋上で、二人は契約の握手を交わすのであった。

第四十二話 開発最前線

漏れる吐息。

夢げに濡れる瞳。

その主を屈服させるかのように強引に押し倒す。

「あ……」

その声は何を紡ごうとしたものか。

濡れた視線にも構わずにその体に触れる。

それは焦らすかのように肌に撫でていく。

まれで壊れてしまうかのように、ゆっくりと優しく。

「や、め……」

翠の瞳が潤む。その唇が、拒否の言葉を紡ごうと小さく動いた。しかしその言葉は紡がれることは無い。

その言葉が言い終わる前に、口を塞いだ。

唇が重なる。

翠の瞳は驚いたように目を見開いたが、すぐにトロンとその表情を変える。

「ん、あ……んう」

艶かしくあがる声に、体がうずくのがわかる。

そつと、唇を離す。

「……シヤル」

名前を呼ばれる。

その愛しい人から呼ばれる名に、胸の高まりは強まっていく。

少女はもう一度顔を近づける。

そのゆつくりとした動作に、愛しい人は顔を逸らす。しかし、金の髪の主は、そのまま首筋に顔を埋め、焦らすかのように反応を楽しむ。

「んう……」

その声を抑える姿を堪能すると、少女は今度こそ少年と正面から向かい合う。

瞳を逸らそうと逃げる顔は両手で押さえ、ゆつくりと顔を近づけていくと、観念したのか彼は瞳を閉じ、そつと唇を突き出した。

艶美な表情に、自分の理性が外れていくのがわかる。

少女は自分の欲望に身を委ねるのだった。



「うわああああああああああああ!!!」

シャルロットは飛び起きる。

その行動にベッドが軽く軋みを上げる。

その慌てふためいたシャルロットは、時計を見る余裕も、同居人を気にする余裕もない。

「な、な、ななんて夢を……!!」

夢にしては生々しく、未だにその感覚を思い出せる。

その淫靡に迫る自分の姿に、頭を振る。

「違う違う違う、あれは夢だあれは夢だあれは夢だ」

しかし、その唇には確かに夢の名残が残る。

「……」

ふと唇に触れてしまう。

その感触に、夢を強く意識してしまう。

「違う……僕はそんなにエッチなんかじゃ」

そう否定しようとする、また思い出してしまう。

艶かしく嫌がる沙良に口付ける自分。最後に突き出されたあの唇。

シャルロットは知らずのうちに顔を真っ赤にする。

「……シャワー浴びよう」

このままでは沙良の顔を見ることがすら出来ない。
シャルロットは時計を見ることもなく、脱衣所に消えていった。



シャルロットは必死だった。

おそらく、人生で最も真剣に手を動かすことだけを考えている。

時刻はもうすぐで六時になるといったところ。

授業に間に合うためだけなら、あと一時間二時間は寝ていられただろう。

しかし、今はそれよりも大事な用がある。

「あ、シャルロットさん。沙良さんがご立腹でしたよー」

「馬鹿ねえ、シャルロット。今日に限って遅刻なんて」

第三アリーナ更衣室で必死に着替えをしていると、フィオナとリナが更衣室に入ってきた。

二人とも、スペイン企業所属という立場になったシャルロットと仲良くしてくれる。

「……やっぱり怒ってた？」

会話をしつつも、着替えの手は止めない。

すぐにISスーツを装着すると、急いでアリーナに向かう。

「すつこい機嫌が悪かったわよ。今日は何回リバースするのかしらね」

思いつき顔をしかめるシャルロットの背中をリナとフィオナがポンと叩く

それに片手を上げて答えにすると、シャルロットは急いでアリーナに向かう。

ピットが開くその僅かな時間すらも惜しい。

早くしろと言わんばかりに体を揺らし、そのアリーナとピットの境界が無くなった瞬間に、足を踏み出す。

その土を踏みしめた瞬間、銃弾がシャルロットに襲い掛かった。

「——っ!？」

その銃弾がシャルロットに当たる前には、既に空の様に淡い青色に体が包まれている。

しかし、無情にもその機体に押し寄せる銃弾の雨は強さを増すばかりである。

いくら避けようとも、その銃弾を引き離すことは出来ない。

シールドエネルギーがガリガリと削られていく。

その銀色の雨の中でも、シャルロットのハイパーセンサーはガトリングを展開しだし

た沙良の姿を捉える。

「DIVE!!」

これ以上は拙いと判断したのか、シャルロットは強くなるであろう弾幕に備えて、装甲を閉じた。

しかし、それが仇となった。

強くなった弾幕に足を止められてしまう結果になったシャルロットは確かに見た。そこにミサイルが混ざっていることを。

——そうきたか。

思考だけが冷静のまま、シャルロットは爆発に巻き込まれるのであった。

「くっ……」

その衝撃は、いくら耐久性に秀でていっても、そう簡単に耐えられるものではない。

シールドエネルギーを抜け、装甲に破損が生じる。

しかし、これで気を抜くわけにもいかない。

周りは爆発による煙で、視界がまともに利かなくなっている。

どこから何が飛んでくるかはわからない。

ましてや、今日の沙良は不機嫌だという。

手加減など、思考の端にも無いだろう。

「——っ！」

ハイパーセンサーが、煙の揺らぎを感じる。

反射的にアサルトライフル『CETME』を展開し、即座に引き金を絞る。

その弾幕が煙を引き裂いた。そこに居たのは——

「なっ!？」

普段、衝撃や人体への影響などを調べるため、人間の代わりに実験に扱われるダミー人形だった。

ここにダミーが居るということ。

それが示す答えは、

「後ろ!!」

背後から襲い掛かる物体に、『CETME』を向ける。

しかし、その正体に、引き金を引くことができなかった。

「ダミー!？」

フェイントにフェイントを重ねられたシャルロットは、気付くことが出来なかった。

真上からの沙良の接近に。

シャルロットが気づいた時にはもう手遅れだった。

その懐に潜り込んだ、沙良の機体が握るのは見覚えのある大型機構槍。

「ばか」

その一言と同時に、容赦の無い突きがシャルロットの腹部を貫いた。

「っ……っ……！」

それは衝撃を響かせる武装のはずだった。

だからシャルロットはそれに備え、全身に力を入れたのだ。

しかし、その衝撃は、響くことなく、シャルロットの腹部を貫いた。

普段ならそのまま受け流したであろう衝撃を、真つ向から受け止めてしまったのだ。その備えていなかった衝撃に、胃液が上ってくるのがわかる。

しかし、それを必死に押しとどめる。その隙がシャルロットの努力を踏みにじった。

「あんなに言ったのに」

沙良は持っていた槍を投げ捨てる。

「なんで遅刻するかなあ」

そして全く同じものを両手に展開する。

「反省してきて」

沙良は再び、シャルロットの腹部に突きを放った。

その衝撃に、シャルロットは、後退を余儀なくされる。

後ろに下がったことにより、なんとか衝撃を軽減するが、重ねての衝撃に、息が詰まる。

その開いた距離を最大限に活用し最大の加速を乗せて、沙良は最後の一撃を、寸分違わぬ部位に打ち込んだ。

「……あ」

声にならぬ声が漏れる。

シャルロットは、地面を跳ねるように転がり、やがてうつ伏せにその動きを止めた。

「うう……」

手で上半身を支え、起き上がろうとするが、それより先に堪えていた堰が決壊した。

「ちよつと、シャル。出す時はちゃんと袋に出してよ」

苛立ちを隠さない沙良。しかし、シャルロットは反応する余裕すらない。

ただ、胃液の流出に堪えることに専念するのであった。



「はあ!!」

シャルロットは大きく腕を振るう。

その腕に呼応して、アリーナの地面が壁のように盛り上がった。

その壁は銃弾を受け止めると、形を土に戻していく。

そして、壁が全てなくなると、再び腕を振る。

今度は壁ではなく、土が凝縮し、宙に浮いた。

圧縮された土がシャルロットを囲み、銃弾から身を守る。

もう一度その腕を振ると、背面の土がその形を剣に変える。

それはただの剣ではない。

巨人が持つに相応しいほどの大きさを誇る。

その大きさは、シャルロットの機体よりも三倍ほど大きい。

それを、腕を振ることで自在に操る。

その動きはまるで踊りを踊るかのよう。

見てるものを魅了するその動きは、脅威を運ぶ。

しかし、その剣が相手に届くことは無かった。

「マーメイド!!」

水により構築された銃弾がその剣を半分には押し折った。

それに、シャルロットは渋い顔をする。

「あれを押し折るとか、どんな威力ですか!？」

「むしろ、あんなものを振り回すあなたにビックリよ」

シャルロットはすぐさま両手を前に突き出す。

それに呼応して、シャルロットの目の前の空間が歪む。

そのまま、手を回し、歪んだ空間を渦巻かせる。

片手を引き、もう片手を押し出すように放つと、呼応して、その空間から圧縮された空気が押し出される。

それは風と言う形でアリーナを蹂躪する。

まるでジェット機の後ろに立つような風圧に、ソフィアはその機体の制御にかかりつきりとなる。

「なんて圧力なの!？」

その風に、シャルロットは、土の塊を混ぜた。

それがソフィアに直撃する。

時速八十キロは出ていたであろう土塊に、ソフィアは地面を転がることになる。

ここをチャンスとばかりにシャルロットはソフィアの真上の空間を歪ませる。

「墜ちろ!!」

その叫びと共に手を下に振り下ろす。

その歪みから、空間が落ちた。

圧縮された空気が重石のようにソフィアの機体を押しつぶす。

「勝っ」

勝った。

その言葉は途中で止まった。

なぜなら、

「水!?!」

ソフィアだと思っていたものが割れ、そこには水だけが残っていた。

「Exactamente (その通り)」

背後からソフィアの声が聞こえる。

そして、自分の周りには既にソフィアの特殊兵装『マーメイド』が囲んでいる。

これは勝負が決まっているも同然だ。

「参りました」

シャルロットは大人しく両手を上に上げるのだった。



「結構扱いにも慣れてきたね」

沙良は蹲っているシャルロットに話しかける。

「……………」の姿でもっ？」

シャルロットは元気なく、袋を口に当てている。

それでも沙良は頷く。

「始めのころは数分に一回は吐いてたのに、今では戦闘までは耐えられるようになったじゃん」

最初は全然データも集まらず、試行錯誤が続いていたが、ここ最近はやや安定してデータが取れている。

吐かない日は無いのだけれども。

「今日のデータで、また調節してみるよ。少しはマシンになると思う」

「うん……………」お願い」

シャルロットはふらふらと歩くと計測機器にもたれ掛かる。

ドルフィンの特種兵装を使うと、毎回こうなる。

それは搭乗者への負担が大きく、シャルロットは毎回胃の中を空にしている。

少しずつ改良が加えられ、その負担も小さくなつてはいるが、完成には程遠い。

搭乗者に影響が出ないようになるまでは完成とはいえないだろう。

ISの開発はそんなに簡単なものじゃないのだ。

そんな一週間や一ヶ月でISが作れたら苦労はしない。

このドルフィン構想を含めると二年以上が経過している。

それがシャルロットという搭乗者が現れてから、段違いのスピードで研究が進んでい
る。

シャルロットが関わり始めてから既に一ヶ月近くが経過している。

完成も見えてきている。

臨海学校まで残り一週間と少し。

それまでには完成させたい。

「まさか、学校でもデスマーチすることになるとはね」

シャルロットはボソツと呟いた。

残り一週間。

確かにそこには地獄が待っているであろう。

「せめて、日曜日だけは休みにしてあげるよ」

「本当!?!」

シャルロットは急に元気を取り戻す。

実際はへるへるのままなのだが、瞳に力が戻っている。

「本当だよ」

「やったー!」

そこまで嬉しかったのか、シャルロットは沙良の手を掴むとぶんぶんと降り始めた。

沙良は微笑を浮かべる。喜んでもらえたならよかつたと。

シャルロットは沙良に笑顔を向け、そのまま沙良の唇に視線を止めると、いきなり顔を赤く染めた。

「ん? どうしたのシャル? なんかついてる?」

不思議に思った沙良はシャルロットに顔を近づけるが、余計にシャルロットは慌ててしまう。

「ち、ちかつ、近い……!」

沙良の顔を離そうとしたのか、シャルロットは手を伸ばす。

しかし、シャルロットは顔を背けているため、その手は、きちん顔を捉えることはなかった。

シャルロットの指先が、沙良の唇に触れる。

「へ? この感触……」

その自分が触れた場所に気付いたのか、シャルはそのまま固まってしまった。

沙良としては何をそんなに慌ててるのかわからないため、反応も出来ずただ、唇に指

を添えられたままでシャルロットの反応を待ち続けている。

「やわら……」

「え？」

その言葉を聞き取ることは出来なかったが、シャルロットは聞かれたと思ったのだから、目を泳がせて、慌てだした。

「え、あ、その、あの、えっと」

「シャル？」

沙良は、とりあえず、この体制をどうかしようと思ってみる。そしてシャルロットの手を掴もうと手を伸ばすと、

「わ、わあああああああああああああああ!!!」

シャルロットは悲鳴をあげ、アリーナから走り去った。

「え？ なに？」

「さあ？」

残された沙良は、近くに居たソフィアと視線を合わせると、お互い首をかしげるのであった。

第四十三話 夢の残滓

「……何してんの？」

沙良の視線はどこまでも冷たい。

それも仕方ないことだろうと、一夏は他人事のように考える。

朝早くからの開発によって疲れた体を引き摺り部屋まで帰って来たのだろう。

そこでこんな光景が繰り広げられていたら誰だつてこうなるだろう。

沙良の視線は、一夏に跨っている全裸の少女に向けられている。

その少女は、瞳を閉じて唇を尖らせている。顔にかかる銀髪が少しくすぐつたい。

「いちか」

「な、なんだ？」

「さいてい」

一夏自身、逆の立場なら冷静になれるかわからない。

「ち、違うんだ沙良！ 話を聞いてくれ！」

一夏は沙良にこの状況を説明しようと必死に頭を回転させる。

とりあえずは、包み隠さずに話してしまおう。

一夏は朝起きてから、今の段階までのことを簡単に説明する。

朝起きたらベッドにラウラが居たこと、裸は拙いとシーツを纏わせようとし押し倒されたこと。

沙良はその話を聞きながら手を額に当てた。

沙良は何事も無かったかのように自分の机に歩み寄ると、抱えていた荷物をおろす。

そして一呼吸入れると、一夏とラウラに向かい合った。

その瞳は呆れの色が見えている。

「ラウラ?」

問いかけに背筋を伸ばすラウラ。

一夏は顔が離れたことで少しほっとする。

「はい、なんででしょうか」

「何でここに居るの?」

「これが夫婦の一般的起こし方と聞きましたので、早速実践してみようと思ひまして」

「ラウラ」

沙良がラウラに向かい合う。

一夏は沙良が注意してくれるならもう大丈夫だろうと、安堵を隠せない。

「裸は駄目。夏とはいえ、体を冷やしてしまう恐れがあるからね」

「ならば、肌で暖めあえばよろしいのですね？」

「せめて下着ぐらいはつけなよ」

「沙良がそういうのであれば」

その内容にリアクションを忘れてしまう。

一夏は裏切られたと沙良に怨嗟の視線をぶつける。

そういうことじゃないと。

確かに裸よりかはマシだが、そういう問題ではない。

このラウラの行動を止めて欲しかったのだが、沙良のせいで許可が出ってしまったようなものだ。

そして何を思ったのか再びラウラの顔が近づいてくる。

沙良は既にいつでも出れる準備をしている。

助ける気は更々無いようだ。

沙良だけに。

「なんか変な事考えた？」

「べ、別に」

そんなことを話している場合じゃない。

ラウラは残り五センチというところまで接近している。

その頬を染めた表情に言葉が詰まってしまふ。

だからか、大した抵抗も出来ず、ただ接近を待つだけになってしまった。

そして、こんなタイミングの悪い時に限って、いらぬ来客が来るものなのだ。

「沙良居る？ さつきはごめんね。一緒に朝食にでもどうかかな」

扉の向こうから聞き覚えのある声が聞こえてくる。

一夏は今の状況を考えてみる。

自分。床に押し倒されている。

ラウラ。一夏の上に裸で馬乗り。瞳を閉じてキスを待っている。

沙良。何事も無かったかのように、朝食に向かおうと扉に手をかけようとしている。

「って待て！ 開けるな沙良!!」

しかし、既に時遅し。

その扉からは明るい蛍光灯の光が漏れる。

その扉からは綺麗な金髪が見えている。

「さつきはごめんね。一緒に食べ……」

ひよこつと顔だけ入ってきたシャルロットは沙良の後ろにいる、一夏とラウラの存在に気付いた。

最初は状況に啞然とし、その意味が理解できるにつれて、その顔はどんどん朱に染

まっつていく。

一夏は天を仰いだ。

終わった。

裸の女子に押し倒されてキスをされようとしている。

こんな話が広まってしまったら幼馴染達の鉄槌は逃れることは出来ないだろう。

最悪の場合は、世界最強と名高い姉も出てくる恐れもある。

一夏は、悟ったかのように穏やかな顔で瞳を閉じた。

短い間だったけど、楽しかった。

心残りは沢山あるけど、これが運命なのか。

しかし、瞼を閉じてから十秒が経過したが、周りは静かのままだ。

いつまでたっても反応を起こさないシャルロットに疑問を感じ、瞳を開ける。

シャルロットは混乱していた。

挙動がおかしく、口から漏れる言葉も「あうあう」と意味を成していない。

百人がみたら百人が混乱してるといっただろう。

そのぐらいいの錯乱具合だ。

しかし、その視線だけは沙良の口元を凝視している。

沙良もその理由が思い当たらないのか、首をかしげている。

「……シヤル?」

その沙良の唇が形を変えると同時にシヤルロットは走り出した。

「う、うわあああああああああ!!!」

周りの迷惑も顧みない悲鳴に、残された一夏はポカンとするしか方法が無かった。

「ちよ、ちよつと!?!」

沙良がすぐさまその後姿を追いかける。

正直、逆効果だと思うが、行つてしまったものは仕方がない。

一夏に出来ることなど何も無い。

今はそんなことを考えてる場合ではない。

なぜなら、

「一夏、せっかくだから朝食を一緒にしようと………」

そこに鬼がいたからだ。

早朝の鍛錬をしていたのであろうか、その手には竹刀が握られている。

一夏は、これから自分がどんな目に遭うかを悟った。

「一夏あつ!!!」



頭のたんこぶを擦りながら、一夏は箒に非難の目を向ける。

既にチャイムの音は鳴っており、SHRの始まりを告げているのだが、痛みは引くことはない。

しかし、一夏を被害者だと露程も思っていないのか、視線を向けられた箒は鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまう。

これには少しカチンと来る一夏だが、一年一組の教卓には担任教師、織斑千冬の姿が見える。

ここで騒ぐと、恐怖の出席簿が降りかかるのは、火を見るより明らかだ。

真耶のSHRとは違い、誰も私語することなく、連絡事項が伝えられていく。

その様子に、どれだけ恐れられているかがわかる。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえ、お前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

IS学園と言えど、高等教育機関に変わりはないため、一般教科を当然のように履修しなければならない。

勿論、成績というものをかさねばならないため、期末テストは存在している。

ここで赤点を取ってしまうと、夏休みは補習で埋まってしまうのだ。

故に、テスト前には自習室や図書館で机に張り付く生徒が続出する。

勿論、一夏も沙良に泣き付くつもりで居る。

いつも厳しいことを言いながらもなんだかんで教えてくれるため、つい甘えてしま
うのだ。

それに、ここでテストに気をやっている生徒など一人も居ないだろう。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物するなよ。三日間だけが
学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

そう、七月頭に行われる校外実習。すなわち臨海学校。

三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間。勿論そこは海なので、十代女子たちに
とっては抗えぬ魔力があるのだろう。

それはテストのことなど、頭の片隅に追いやるほどに強力らしい。

一夏としては海自体は楽しみだが、水着を買うのはめんどくさい。

その旨を素直に口にしたらセシリアと鈴音が口を酸っぱくして注意してきたので、沙
良に相談したところ、S・Q社の新作水着のモニターを頼まれてしまった。

一夏としては、タダで水着が貰えると言う事なので快く引き受けた。

「ではSHRを終わる。各人、しっかりと勉強に励むように」
その一言で、場の空気が弛緩する。

千冬が教室を出るのを皮切りに、クラスが一斉に騒がしくなる。
話す内容は、臨海学校のことだろう。

しかし一夏は、違うことを考えていた。

もちろん臨海学校も大事だ。

だが、それと同じくらい大事な案件が一夏にはあるのだ。

そのことには沙良も居たほうが良いだろう。

「日曜日とか空いてないかなあ」

いつも忙しそうに動き回っているが、日曜日ぐらいは休みを取っているだろう。
そう思い、沙良に話を通すため席を立つのだった。



アリーナでは、三つの影があった。

一つは計測機器を操作するのもの。

残りの二つは、銀灰色の装甲を纏っている。

その重厚な装甲を持つ『打鉄』を纏っている箒は、スラスターを噴かし、ブレードを肩の高さまで引き上げる。

「はああああ!!!」

振りかぶる刃は、銀灰色の装甲を掠ることなく、ただ空を切った。

続けて身を回し、その回転で薙ぎ払いを放つが、あっけなく避けられてしまう。

「機動力が違うんだから、馬鹿正直に近づいたって当たらないよ」

アリーナの端で計測機器を操作している沙良の一言に、何も言えなくなる。

実際に、模擬戦が始まってから刃が当たったことはまだ無い。

わざわざ訓練に付き合ってくれている面識の無かった少女にも申し訳が立たない。

「箒、稼動データは充分。『夢現』を使っていいよ」

「……わかった」

珍しい髪色をした少女は、新たに薙刀のような武装を展開した。

データ取りをかねて訓練に付き合ってくれているのだから、それ相応の動きを示さなければならぬ。

つまりは、そのデータが取れるぐらいに、箒がその稼動についていかなければならぬ

い。

自然に右手に力が入る。

そのブレードの感触に、箒は自分を奮い立たせる。

自分は弱い。

ならば出来ることをやるだけだ。

箒はブレードを正中に構える。

今からは、一切余計なことを考えるな。

ただ、相対することだけを考えろ。

そう自分に言い聞かせる。

「っ……」

相手の表情が変わった。

そのより一層引き締められた空気、自分が押しつぶされぬように、気を張り続ける。

恐らく、今の状態は長く持たない。

ならば、勝負は一瞬。

「っ!!」

少女が動いた。

その動きを、五感全てを以ってして感じ取る。

一直線。

何のフェイントも無い突き。

相手の薙刀の軌道が読める。

後は、その線上にブレードを添えるだけで良い。

そう判断し、それを実行に移した。

それが罠だと気付いたのは、少女の口元に笑みが浮かんでいるのに気付いてからだ。た。

「なに?」

軽い金属音が響き渡る。

その薙刀はブレードによって受け流されるはずだった。

しかし、現実には、現実に箒の目に映る光景は、薙刀に弾かれた自分のブレードだった。

その信じがたい光景に、箒は硬直を余儀なくされる。

その時間はほんの僅かだっただろう。

しかし、そのほんの僅かが生と死を分けることを、箒はよく知っていた。

沙良がよく言う言葉。

『情報とは武器である』

その武器を持たない箒は、対処する術を持たない。

故に、迫り来る刃をただ見つめることしかできないのだった。



「え？ 臨海学校来ないの？」

沙良は計測機器を操作しつつ、問い返すように簪に言葉を投げかける。

既に箒はシャワーを浴びに行ってしまったが、計測データを出す必要があるので、沙良と簪は未だにアリーナに残っている。

あのボロボロになった後姿には、簪でさえも同情を誘う。

「更識で出ないといけないことがあって……」

本当は行きたいんだけど。その意志が反映したのか、語尾が弱まっていく。

「それに、錦の開発は完全に倉持から離れちゃったから、追加武装なんて来る筈が無いし……」

口から漏れる言葉はただの言い訳。

海に行きたかったなあ。

そう眩きがこぼれてしまう。

それを沙良は優しく頭を撫でることで慰めてくれた。

「また夏休みに入れば海に行く機会なんていっぱいあるよ」

沙良の柔らかい笑みに、簪は頬をほんのりと朱に染める。

ここにシャルロットが居たら簪に対して何かしらのアクションを取っただろう。

しかし、シャルロットは、第二アリーナで誰かしらの訓練に付き合っているはずだ。

リナとファイオナが整備室に居ることは知っているし、ソフィアも今日はアリーナに顔を出す用事はないと沙良から聞いている。

簪は、シャルロットが居ないここがチャンスと言わんばかりに、身を乗り出す。

「あ、あのね沙良。良かったら今度のやす——」

「セラー!!」

「あ、シャルだ」

「……」

言葉を遮るように沙良の名前が呼ばれる。

あからさまな妨害に、ムツとしてしまう。

わざわざ『セラ』と呼ぶところにも作意を感じる。

こちらに走ってくる金髪の持ち主を見ると、その瞳は簪を凝視していた。

その瞳は語りかけてくる。

『抜け駆けは許さない』と。

「箒の訓練は終わったんだね。こっちも一夏の訓練は終わったよ」

「そっか、お疲れ様」

「そうだ、一緒に夕飯を食べようよ」

そのわかりやすい妨害。

それを簪に見せ付けると言うことは、

「……その前に、模擬戦をしよう？」

恋愛においては容赦しないと言うことだろう。

それなら、簪だって同じ事だ。

その喧嘩、買った。

——友達と言えども譲れない。

沙良の静止の声も聞かず、アリーナに青と銀灰の線が通っていくのであった。

第四十四話 追い込み作業

夜遅く、整備室には未だに光が灯っていた。

その漏れ出す光の中、五つの影が存在を主張する。

一つはコンソールから動かず、もう一つはコンソールにもたれ掛かり、横から覗き込むようにそのモニターを注視している。

残りの三つは、ソファに寝転ぶか、コーヒーを入れるなどの整備に関係ないことをしている。

「もう遅いし、帰って良いよ?」

その三人を見て、コンソールの主が声をかけた。

しかし、その三人ともが首を横に振る。

「セラが帰らないのに、私たちだけで帰れるわけが無いじゃない」

「そうですよー。わたしだって残りますよ」

「僕もそうだよ。沙良が残るのに、搭乗者の僕が先に帰れないよ」

その三人の答えに、コンソールにもたれ掛かっているソフィアが苦笑をもらす。

「そんな事言つて、明日も遅刻したら目も当てられないわよ? ねえ、シャルロット」

「う……それを言われると」

今朝も遅刻したシャルロットは、強く出ることができない。

俯いて、すぐごと引き下がってしまう。

「ちよつとシャルロット!? そんなことで負けちゃダメよ!　ここは果敢に攻めない
と、いつの間にか言いくるめられちゃうよ!」

「そうですよ。ここは攻めの一手です」

シャルロットの背中を押す二人。

そんな二人に、沙良がふと声を出す。

「リナとフィーナは外泊の許可は取ったの?」

「それはシャルロットだ——」

「シャルは外泊を取ってるよ」

「……」

言葉に被せるように沙良は言い放った。

二人の視線がシャルロットに突き刺さる。

その視線を受けたシャルロットはうろたえてしまう。

「だ、だって沙良が外泊を取ってるのに、搭乗者の僕が取ってないと色々都合が悪いし
……」

その視線に耐えれなくなったのか、言葉が小さくなっていく。

「それに、織斑先生に整備室の使用許可を貰ったから、そろそろ見回りに来てもおかしくないよ？」

「そんな事言つて、私は織斑先生ごときでは逃げないわ！」

リナは強気に胸を張る。

扉にもたれ掛かっている人影にも気付かずに。

「ほう、私をごときと言うか」

「へ？」

恐る恐る、後ろを振り返るリナ。

ふるふると恐怖で涙が滲んでしまう。

その瞳に映るは、世界最強を欲しい俣にするカリスマの塊。

「三組のリナ・フェルナンデス・コロソナだ。覚えておこう」

そういつて、千冬は口角を吊り上げる。

まるで、蛇に睨まれた蛙のように竦み上がってしまった。

「今なら反省文三枚で許してやろう。早く部屋に戻るんだな」

リナはコクコクと頷き、沙良とソフィアに一言声をかけると、フィオナとシャルロットの手をつかんだ。

「ま、待つて、僕は外泊とつてる——」

「し、失礼しましたああ!!!」

何か言おうとしていたシャルロットとフィーナを引き摺り、整備棟をかけていくリナ。

その後姿は、とても小さく見えるのだった。

千冬は、笑みを浮かべながらコンソールに近寄る。

その表示されているデータは、機密事項なのだが、沙良は気にした様子も無い。

それを信頼されていると判断し、気分を良くした千冬は軽口を叩く。

「スペインでの教育が足りてないんじゃないか？」

「それをするのが教師の仕事でしょ？」

「生憎、担任ではないのでな」

千冬は肩を竦めると沙良の頭をガシガシと撫でる。

「子供は早く寝ることだ。外泊は出したが、誰もこんなところで夜を明かす許可を出したわけではない。ほら、そのこの保護者も早くこいつを持ち帰れ」

沙良は口を尖がらせて不満を主張しているが、千冬が教育機関に居るうちは教師に従えと説得すると、ししぶしぶ頷いた。

ソフィアが沙良の手を引いて、帰宅を促すのを見ると、千冬は右手に持っていた小包

を沙良に差し出す。

「おっと、忘れていたな。これは先ほど届いた荷物だ。沙良宛だったぞ」

「誰から？」

「見ればわかる」

差出人は書いていないが、沙良はそれが誰からなのか一発で理解した。

「この兎の印は姉さんだね……」

小包の止め具に使われている兎のクリップを見て、沙良は差出人を推測する。

「何が届いたんだ？」

千冬はその中身に興味があるようだ。

「僕は何も頼んだ覚えは無いけどなあ」

沙良はその小包をその場で開いていく。

そこに入っていたのは、

「……うさ耳？」

普段、束が付けているものに酷似したうさ耳だった。

あの人はまたこんな下らないものを送ってきて。

そう思い、そのうさ耳を箱にしまおうとすると、そのうさ耳に付属されていた手紙を見つめる。

その手紙を開き中の文章を確認すると、沙良はうさ耳を小包にしまい、小脇に抱えた。「なんだったの？」

ソフィアが不思議そうに聞いてくるが、沙良は笑みを返すことだけを答えとした。その様子に、ソフィアは迫及の手を伸ばすことを止める。

「ひとまず、学生は寝る時間だ。早く部屋に戻るんだな」

千冬は腕を組み、言葉を紡ぐ。

「外泊取ったのに……」

「外泊は許しても、深夜の作業を許したわけではない」

「ケチ」

「ケチでいいさ」

「……千冬姉のばか」

千冬は指を丸め、沙良のおでこに近づける。

「織斑先生だ」

「あいたつ」

そのままどこピンを食らった沙良は不満そうに頬を膨らます。

あくまでも諦めないつもりだ。

臨海学校までに完成させなければならぬのだから。

しかし、実際はそこまで追い詰められているわけでもない。普通にやっつけていても、土曜日までには形になつてゐる予定だ。

切り詰めて作業しているのは、ただの研究職の性分と言うものだろう。

それがわかつてゐるのか、千冬は深夜の作業を認めるわけにはいかない。

それ以前に、スペイン側から散々沙良について、注意点を教えられている。

深夜まで作業することが多いから、力づくでも止めさせてくれ言われているのだ。

「おい、ソフィア。今日は、お前の部屋に泊めることを黙認してやるから、さつさと沙良を連れて帰れ」

千冬は沙良の相手をソフィアに押し付けることにした。

ソフィアは戦乙女に逆らうような浅はかな考えを持つていないため、素直に頷く。

千冬と沙良が話している間に片付けは済んでいる。

後は沙良を連れて帰るだけだ。

沙良の腕を取ると、引き摺るように歩き出した。

自分で歩こうとしない沙良を引き摺りながら、千冬に頭を下げると、そのまま部屋を出て行つた。

「全く、世話を焼かせるやつだ」

明かりの消えた整備室には、千冬の眩きが寂しく響くのだつた。



「結局、そのうさ耳はなんだったの？」

「簡易ハイパーセンサーだって」

それは独逸が、人体にナノマシンを移植してまで欲しがった技術。脳への信号伝達の爆発的な速度向上を可能としている。

「それに、通信とか色んな機能を付けているみたい」

「……………なんてもの開発してるのよ」

「……………僕も全く同じ気持ちだよ」

二人のため息が部屋に響く。

寝巻きに着替えた沙良は、ソフィアの机でのんびりと足を揺らしていた。

ソフィアはそれをベッドの上から眺めている。

「その話私の前でしてもいいのかしら？」

寝巻きを身に纏っている楯無がベッドに寝転びながら声をかける。

「大丈夫」

「信頼しすぎも身を滅ぼすわよ?」

「何かしたら潰すから」

「前言撤回、もう少し信頼してくれてもいいのよ?」

楯無が可愛くない子とぼやくと、すぐさまソフィアが可愛いでしょと突つかかる。

それを、沙良は鬱陶しそうに眺める。

「千冬姉も頭が固いし、姉さんは要らないものを送ってくるし、ついてないなあ」

「まあ生徒会から見ても徹夜作業は認められないわよ」

「たっちゃんのかち。簪に有る事無い事言いふらしてやる」

「申し訳ございませんでした」

ベッドの上で土下座の体勢を取る楯無。

それを見て、うむと頷く沙良。

「面を上げい」

「ははあ」

「そのノリに私はどうしたらいいの?」

ソフィアが相手にしてもらえず、拗ねたように話に入ってくる。

「ソフィアは……………んー」

「んー」

沙良の真似をする楯無。それが尚更ソフィアを苛立たせる。

「冗談よ、ソフィア。そんな怖い顔しないでくれる?」

いつ手元に用意したのだろうか、扇子を片手にけらけらと笑うルームメイトにソフィアはため息を吐く。

「もう良い。私は寝るわ」

そう言うソフィアはもそもそとベッドに潜り込んで行く。

すると、背中越しに温もりを感じる。

「ソフィア?」

沙良がベッドに潜り込んできたようだ。

つい、胸が高鳴るのが分かる。そして、あることに気づいた。

——そういえば、まだセラの布団を準備していない。

それを思い出すと、身を起こそうとする。すると、沙良が裾を引っ張つてくるではないか。

「……怒ってる?」

無言で起き上がろうとしたソフィアに、怒っているのではないだろうかと勘違いしたのだろう。

——ああ、もう。可愛いな全く。

そんなことでソフィアが怒るわけもない。

しかし、愛に悶えているソフィアを見て、怒っていると確信してしまったのだろう。沙良が唇を尖らせた。

「ごめんなさい」

不満そうにしながらも、一応謝罪の言葉を発することにしたようだ。

眉尻を下げてしまった沙良に保護欲が沸いてくる。

「怒ってないわよ」

そう言い、沙良と向かい合うようにベッドに身体を倒す。

すると、目の前の少年は嬉しそうに微笑を浮かべる。

——たまには、こんな御褒美があってもいいよね。

「ちよつと、イチヤイチャしないでくれる？」

楯無の発言は二人の耳に届くことは無かった。



太陽も一番高くまで昇り、アリーナも暑さに支配される中、熱気を切り離すかのよう
に三機の I S が空を飛びまわる。

いや、一機だけは跳びまわっていると云ったほうがいいだろうか。

スラスターによつて動いているわけではなく、空間を足場にして跳躍を繰り返してい
るように見える。

何も無い空間を踏みしめるかのように身を屈めると、その足裏の空間が歪む。

歪みを蹴る様に、その身を宙に躍らせる。

その跳躍に、スラスターによる飛翔も混ぜることによつて、縦横無尽に空を泳ぐこと
を可能にしていた。

その姿は、まるでイルカのように優雅であった。

重力に縛られること無く空を泳ぐイルカは、自由な軌道を描いて、二機を引き離す。

その搭乗者の顔は、晴れやかな笑顔で輝いている。

まるで、楽しくて仕方ないと言わんばかりだ。

追いかける二機もその喜びを隠しきれないのか、時折、楽しそうな声が漏れる。

それを見上げるのは、地面に残る一人。

計測器の前に居場所を据え、飛び回る三機を見て、ただ満足げに頷いている。

手元の計測器は、予測値をマークしており、その機体に問題が無いことを示している。そのモニターに表示されるは『Defin』の文字。

現在、シャルロットの乗っている機体である。

『シャル、調子はどう？ 気分は悪くない？』

沙良は開放回線オープンチャネルでシャルロットに声をかける。

今までなら、特殊兵装を使った後には必ず気分が悪くなっていた。

これで、問題ないようならば、特殊兵装の基礎はほぼ完成したようなものだ。

『全く問題ないよ！ それよりも最高の気分だよ。こんな飛び方があったなんて！』

沙良は思わず、小さくガッツポーズを取る。

シャルロットは、沙良に応えるかのように、複雑な機動で空高くまで上っていく。

それは機体を見せ付けるかのように。

『これなら、ずっと飛んでいられるよ!!』

興奮を抑えられないのか、その声は段々大きくなっていく。

『シャルロット興奮しすぎよ』

『本当に楽しそうですね』

追いかける二人も弾んだ声色を隠すことはしない。

三人は楽しそうに空を泳ぎ続ける。

『ずっと飛ぶのは別に構わないけど、データはちゃんと取ってよね』

沙良は微笑を浮かべながらも、目まぐるしく変化していくモニターに注意を向ける。

その両手は、仮想キーボードを踊るかのように叩いていく。

沙良の指先が一つのキーに触れるたび、モニターに変化が起き、それに連動して、シャルロットたちのハイパーセンサーに指示とデータが飛ばされる。

『名残惜しいけど、このままパターンBに入るわ』

リナが沙良に報告すると、沙良はそれに対応して、仮想キーボードを叩く。

その訓練内容に対応するデータが全員に行き渡る。

『それじゃあ、パターンB開始』

沙良の一言で、三機はその機動を変えるのだった。



時刻は十八時。

夏も近くなり、この時間はまだ明るい、太陽はそろそろ役目を終えようとその身を

引っ込めようとしている。

「お疲れ」

沙良は、ISを解除し、座り込んでいる三人に近寄る。

その手には、スポーツドリンクとタオルが抱えられている。

それを、一人ずつ手渡すと、同じように三人の近くに腰を下ろした。

「どんな感じ?」

三人を代表して、シャルロットが、沙良に声をかける。

「後は微調節だけしたら一先ずは目標ライン達成かな」

沙良の言葉に、三人がハイタッチを交わした。

「長かったわ、この一週間。二十四時に寝て四時半に起きる辛さはもう味わいたくないわね」

「リナはまだいいほうですよ、わたしなんか整備も担当してるんですから」

「二人とも吐かないだけマシじゃないかな。僕なんて、この一週間吐かなかった日なんて……」

三人が思い思いにこのデスマーチについての愚痴を口にする。

その全員が、辛い思い出を振り返り、感慨に浸っている。

「三人ともお疲れ。明日は完全オフにしてあげるからゆっくり休んでね」

その言葉に、リナはガッツポーズを取った。

「やった！ ようやくの休日！ 一日中寝てられるわ!!」

「もう、リナったら。寝るだけじゃもったいないよ」

「じゃあフィオナは何するのよ?」

「ベッドから降りることなく、映画鑑賞でもしましょうか」

「私とあまり変わらないじゃない!」

二人の掛け合いに、笑いが起きる。

「もう、笑わせないでよ。あ、そうだ、シャル?」

「何?」

「もう完成に近いから、『ドルフィン』の名前を決めておいてね」

「え? どういうこと? 『ドルフィン』が名前じゃないの?」

「機体名は『ドルフィン』だけど、最終的には量産化が目的だから、登録名は別に付けな
いといけないんだよ」

それは、沙良の『海良』やシャルロットの『空良』のように、個別に付けられている
名前。

「な、なるほど……」

シャルロットは、少し考えるような素振りを見せる。

「別に今じゃなくてもいいよ。ロールアウトまでに書類を出してさえくれたら良いし」
「うん、わかった。考えておくね」

シャルロットが、頷きと共に言葉を返す。

すると、そこで会話が途切れてしまう。

一回途切れてしまった会話に好機と見たのか、シャルロットは、沙良に声をかける。

「ねえ、沙良？」

「ん？」

「沙良って、明日の午後って空いていたりする？」

シャルロットは、せっかくの休日を有効に使おうと、沙良に予定を聞く。

思い人と休日を過ごしたいというのは至極一般的な理由だろう。

午前中は機体の微調節をするのはもう決まっているが、それでも午後までは掛からな
いだろう。

恐らくは午後なら空いているはず。

「ごめん、明日は一夏と出かけるんだ」

しかし、返って来たのは望まぬ返答だった。

第四十五話 買い物日和

シャルロットは、用事の無い休日を持って余していた。

朝食を食べて部屋に帰って来たのが、おおよそ三十分前なので、恐らく九時前後と
いったところだろう。

暇つぶしに持ってきた新聞も読み終わってしまい、本格的にすることが無い。

元々は沙良を誘ってどこかに行こうと考えていたため、他に何も考えていなかったの
だ。

現在は、暇を持って余し、自らのベッドで横になっていた。

同居者のラウラは、テレビのアニメ番組に夢中になっている。

時折、興奮しながら話しかけてくるのを、シャルロットは微笑ましく眺めている。

それにしても、とシャルロットは口にした。

「一夏とお出掛けかあ」

まさか一夏に先を越されているとは思ひもしなかった。

しかし、そこで簪やソフィアなど他の女子の名前が出なかったことには胸を撫で下ろ
している。

このまま部屋でじっとしてもすることは無い。

明日からは臨海学校なのだ。

必要なものの買出しに街に出るのも悪くは無いだろう。

必要なものといっても、水着はSea Quest Companyの新作水着をテストすることになっているため、自分で用意することは無い。

IS関係も、フィオナと沙良が纏めて用意していくらしい。

正直、持つて行くのは衣類だけだろうが、向こうで宿泊するところは旅館と聞いている。

着た事はないが、浴衣らしきものを着ると沙良から聞いているため、たいした衣類も必要はない。

そうなると、下着類のみになるだろう。

ちなみに、下着もSQC製である。

「買うものが何も無い……」

せいぜい、日焼け止めぐらいだろうが、水着や下着まで販売しているSQCが日焼け止めを作っていないということは考えにくい。

買ったところで、沙良のカバンからポンと出てきそうだ。

シャルロットは大きいため息を付く。

リナやフィオナは臨海学校の追加武装の件でSQCの日本支部に行くといつて、朝早くに出かけていったので、機体のチェックを行うことすらできない。

「誰かが誘ってくれたら動きやすいのだけどなあ」

その眩きを聞いていたかのタイミングで、ドアがノックされる。

ラウラはテレビに夢中で動く気配が無い。

その姿に顔がほころぶ。

ひとまず訪問者に「はい」と部屋にいることを示し、ドアに近づく。

シャルロットはドアを開けて、その訪問者の姿を確認した。

そこには艶やかな黒髪をツインテールにしている鈴音がいた。

「ねえ、そつちに一夏来てる?」

「来てないよ」

何か急ぎのようだろうか。

それならば沙良に言つて伝言を頼んだ方が良さそう。

「もしかして急ぎの用? それなら沙良に言えば連絡付くと思うけど?」

「いや、大したことじゃないのよ。暇なら買い物に付き合ってもらおうと思っただけ」

「一夏は今日は沙良とお出掛けつて言つてたよ。沙良が言つてたから、間違いないと思

う……」

断られた時のことを思い出し、若干口調が暗くなっていく。

それに気付いた鈴音は慌てて話題をそらす。

「そ、そういえばシャルロットは水着を買わないの?」

「実は会社から水着をモニターするように言われてるんだ」

「本当に仕事馬鹿ね」

そういつて笑う鈴音を部屋に招き入れる。

鈴音はラウラの姿を見つけるとその笑みを苦笑に変える。

ラウラが戦隊物の特撮を興奮気味に見ているのを見て、呆れたようだ。

「あの子って、いつもあんな感じ?」

鈴音は振り向き、そう問いかける。

シャルロットは笑いながら頷いた。

「さつきまではアニメを見てはしゃいでたよ」

「同一人物とは思えないわね……」

その意見にはシャルロットとしても同じだ。

テレビに嘯り付いていたラウラが、不意にシャルロットに視線を向けた。

どうやらCMに入ったようだ。

今更、鈴音の存在に気付いたのか、一瞬目を丸くしている。

「なぜ鈴がここにいる。ここは私の部屋だぞ？」

「わかっているわよ。シャルロットに用があったのよ」

普段の鈴音なら高圧的なラウラの態度にムツとしたかもしれないが、先ほどのラウラの姿を見て、妙な保護欲が湧いていた。

「そういえば、ラウラは臨海学校の水着はどうするの？」

自分のベッドに腰をかけたシャルロットがラウラに問いかける。

「ん？ 学校指定の水着だが………ダメなのか？」

学校指定と口にした瞬間に、シャルロットと鈴音の表情が変わったため、つい弱気になつてしまう。

「ねえ、シャルロット。この学校の指定水着って……」

「スクール水着、だよね？」

シャルロットと鈴音は一度顔を見合わせると、二人して大きく頷いた。

二人は、ガシツとラウラの肩を掴む。

その行為に、ラウラはビクツとなる。

「ラウラ、水着買いに行くよ」

その二人の無言の圧力にラウラは頷くしか選択肢が無いのであった。



ラウラとシャルロットは、鈴音の案内によって、駅前の上ツツピングモールに来ていた。

交通網の中心でもあるため、物資も自然に集まり、その上ツツピングモールには『ここで無ければ市内のどこにも無い』と言われるほどの品揃えを誇っている。

その名は『レゾナンス』

鈴音は中学のころに、一夏や友人たちと放課後によく来ていたものだ。

「水着売り場は二階の筈よ」

鈴音はその迷いの無い歩みを少し緩めると、後ろを付いて歩いているシャルロットとラウラの姿を視界に納める。

シャルロットはシンプルな薄い青色のブラウスに、黒色のネクタイ。そして黒色のショートパンツという格好をしている。

西洋人の長い手足が映えるコーディネートでシャルロットに良く似合っている。

問題はその横のドイツの軍人だ。

買い物に出かけることになり、いざ出かけようと集合場所に集まってみると、そこには軍服を身に纏ったラウラが立っていた。

あの時は鈴音も頭を抱えたものだ。

今はサイズが近かった鈴音の服を着させている。

本人は頻りに「動きにくい」と文句を言うのだが、鈴音としては、軍服を引き連れて買い物をする趣味は無い。

鈴音の服を着せられたラウラは年相応か、少し幼く見える。

それは、周りを興味深そうにキョロキョロと見渡すのも一つの原因なのだろう。

シャルロットがはぐれない様にと手を繋いでいるのが微笑ましい。

「それにしてもいっぱい店が入ってるんだね」

シャルロットが周りを一通り見渡すと、先を歩く鈴音に声をかけた。

鈴音は、肯定の返事を返すと、一つの店を指で示した。

「あそこが水着売り場よ」

色とりどりの水着がディスプレイされている売り場は見ているだけでもその気分を高揚させる。

「ほら、ひとまずは自分で水着を選んできなさい。後であたし達も見えてあげるから」

鈴音はラウラの背中を押すと、水着売り場にラウラを送り出した。

その好奇心に胸を弾ませているラウラの姿を見ると、急に心配になる。

「変な選ばないかしら」

「大丈夫……じゃないかな？」

「せめて断定して欲しかったわ」

鈴音はひとまず、自分の水着を探すことにした。

探すはタンキニタイプの水着。

胸が小さいことを気にしている鈴音は、それでも体を出すことによって、そのスタイルのよさをアピールポイントにするつもりだ。

できるだけ暖色系の明るい色を使っているものを物色していく。

膨張色によって少しでも見た目を誤魔化せないかという、鈴音の足掻きである。

「ねえ、シャルロット。これどうかしら？」

そういつて橙と白のストライプの水着を体の前に持つてくる。

「すっごくいいと思う。活動的な鈴のイメージにぴったりだよ」

そのシャルロットの似合うという発言に、鈴音は即決する。

「じゃあ買ってくるわね」

鈴音は迷う素振りも無く、レジに商品を置くと、財布を開く。

思考よりも感覚。

鈴音を見ているとそれが良く分かる。

袋を右手に提げて、シャルロットの元に戻ると、シャルロットの視線が女性水着売り場の端に注目している事に気付く。

「どうしたの？」

「いや、あの人沙良に似ているなあっていうか、どう見ても沙良だよね？」

そう言われて、鈴音もその指で示された方向に視線を向けると、確かにそこには沙良が居た。

しかも、盛大に変な女性に絡まれていた。

明らかに険悪な雰囲気、鈴音はどうしようかと考える。

その考えていたほんの数秒の間に、シャルロットは行動を起こしていた。



シャルロットは沙良に絡んでいる女性の肩を強く掴む。

明らかに沙良は嫌がっており、沙良が何かしたわけではないのは一目瞭然だ。

ISが普及し、女尊男卑の風潮が浸透したことにより、こういった勘違いした人間が目立つようになってきた。

女性が優遇される国において、女性に口答えすることはあまり得策ではない。

身に覚えの無い冤罪を擦り付けられるなんてよくある話だ。

だからこそ、シャルロットが口を挟む。

女同士なら話も拗れる事は無い。

「どうなされました？」

口調だけは丁寧な、しかし内心の苛立ちを隠すことなく女性に話しかける。

「この男に水着を片付けなさいといっているのに聞かないのよ。これだから男は嫌なの

よね」

女性はシャルロットの苛立ちに気付いていないのか、あろうことかシャルロットの前

で沙良を非難するような言葉を発する。

いくら女尊男卑とはいえず、ここまで横柄な女は少数だろう。

多くの女性は男の社会的立場というものをある程度は理解している。

沙良も今、シャルロットに気付いたのだろう。

ほっとしたような表情を浮かべ、シャルロットの名前を呼ぶ。

「シャルー」

「あら、あなたの知り合いかしら？」

沙良がシャルロットの名前を呼んだ事で、女性がまた要らぬことを口走った。

「あなたの男なら、しっかりと躡くらしいなさいよね」

その「躡」との言葉にシャルロットの額に青筋が一つ浮き上がる。

遠目に鈴音が慌てだしたのが目に入った。

「そんな使えない男なんて早く捨てたほうがいいわよ」

まるで捨て台詞のように言葉を吐き捨て、女性は立ち去っていく。

その捨て吐かれた言葉に、流石のシャルロットも堪忍袋の緒が切れ掛かる。

その無防備な背中をまるで親の敵のように睨み付ける。

沙良に対しての暴言には耐性が低いことが良く分かる。今にも殴りかかりそうだ。

しかし、シャルロットの肩を押さえる者が居た。

鈴音だ。

鈴音は、シャルロットの肩を押さえながら、小声で“落ち着きなさい”と連呼している。

「大丈夫だよ、鈴。安心して、僕は冷静だよ？　ちよつとだけ後悔してもらうだけだから」

「その思考から離れなさいって言ってるのよ！」

鈴音がシャルロットをどうにか落ち着かせると、沙良がタイミシングを待つていたように声をかけた。

「ごめんねシャル。やな思いさせちゃって」

「全然沙良が気にすることじゃないよ。僕が勝手にやったことだし、ね？」

「うん、ありがとう」

謝罪が通らない。だから沙良は素直に礼の言葉を口にした。

その礼の言葉に、シャルロットは満足そうに頷くと、近くに一夏がいないことに疑問を覚えた。

「そういえば、一夏と出かけていたんじゃないかなかったの？」

「一夏なら千冬姉と水着を見てたはずだよ。そろそろ戻ってくるんじゃないかなあ？」

その言葉に、千冬も傍に居る事に気付いたシャルロットは、「それじゃあ邪魔しちゃうダメかな？」と声をかけ、その場を離れる意志を見せる。

勿論、シャルロットとしては少しでも沙良と一緒に居たいし、鈴音も一夏と一緒に行動しただろう。ラウラもきつとそうだろう。

しかし、千冬が居るとなれば話は別だ。

恐らく、姉弟水入らずで買い物に来たのだろう。

それを邪魔するほど、野暮ではない。

鈴音に視線を向けると、その考えを読み取ってくれたのか、頷いてくれる。

そのシャルロット達を引き止めたのは、その当事者である沙良だった。

「気を使わなくて良いよ」

そう言つて沙良は微笑む。

「千冬姉ともさつき偶然会つただけだし、山田先生も一緒にいたから、買出しついでに水着を買いに着たんじゃないかな」

それは、シャルロット達が遠慮した理由に対する言葉。

その意味はシャルロットだつてわかる。

シャルロットは鈴音と顔を合わせる。

鈴音はコクコクと頷いている。

「じゃ、じゃあ一緒にしてもいいかな？」

シャルロットはモジモジしながら沙良に尋ねる。

「もちろんだよ」

沙良は、誰にでも見せるほんわかとした笑みではなく、身内だけに向けるふにやーとした笑顔をシャルロットに向けた。



「一夏、どっちの水着がいいと思う？」

そう言つて千冬が見せたのは二種類の水着。

片方はスポーティでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒。

もう片方は対極に、一切の無駄を省いたかのような機能性重視の白。

どちらもビキニのため、肌の露出は多そうだ。

一夏は、顎に手をやり、考える素振りを見せる。

自分の好み的には黒だ。

しかし、それではおかしな男が寄り付いてくるのではないか。

ストイックな白のほうが声をかけづらいだろう。

「黒い方」

一夏はそれでも黒を選択した。

よくよく考えると、千冬がそこらへんの男に靡く様な人間ではないことは良く分かっている。

無駄な心配だ。

「ほう、お前のことだから余計な心配をして白と言うかと思つたぞ」

「最初はそう思つたけど、臨海学校に來ている教員に声をかけるような男に千冬姉が靡くわけがないしな」

「良く分かつてるじゃないか」

「でも千冬姉、彼氏とか作らないのか？　そういう話を一回も聞いたことが無いしさ」

「手の掛かる弟が自立したら考えるさ」

それを言われたら立つ瀬が無い。

「でもそしたら千冬姉、婚期逃しちゃう——痛っ!!」

言葉を言い終わる前に、千冬の拳骨が頭に落とされる。

「お前にだけは言われたくないな」

「そうは言つても」

「で、お前はどうかんだ？」

「え？」

急に話を自分に向けられた一夏は戸惑いの声をあげる。

「お前は彼女を作らないのか？　幸い学園には腐るほど女はいるし、選り取り見取りだろっ？」

千冬の選り取り見取りの発言に、もつと言い方があるだろうにと苦笑いを浮かべる一夏。

「そうだな……。ラウラなんかはどうだ？ 色々問題はあろうが、あれで一途なやつだぞ。容姿だつて悪くはあるまい」

「まあ、好意を向けてくれるのは嬉しいけど」

「それに、キスをした仲だろう？」

キスという言葉に狼狽する一夏を、千冬は微笑をたたえて見守っていた。

「まんざらでもないか？」

「うーん、まあ容姿は良いとは思う」

「ほう？ どういうことだ？」

千冬はニヤニヤしながら発言を促す。

「ラウラは可愛い——って何を言わせるんだよ！」

「発言したのはお前だろう」

誘導尋問のような気がしないでもないが、こういったものは引つかかってしまった一夏に非がある。

「まあ、何にしても私の心配をする前に自分の方をどうにかするんだな。私はまだ、弟に気を遣われるような歳ではないさ」

「……わかったよ。変な心配はしない。これで良いだろう？」
「ああ、それでいい」

最後にニヤリとした笑みを残して、千冬はレジへと歩いていく。

その場に残された一夏としては、千冬についていけばのか、沙良と合流すれば良いのか、判断に困るところだった。



ラウラは水着を物色していた。

鈴音に言われたとおり、まずは自分で選んでいるのだが、如何せん自分は他の人間とはズレているらしい。

水着など、なんでも一緒だろうにと思うラウラは、どれを選んでいいのかがさっぱりわからない。

ここは一度、鈴音とシャルロットに意見を求めるべきではないか。

そう判断したラウラは、手に持っていた沢山の水着を店員に預けると、鈴音とシャル

ロツトの姿を探す。

そのラウラの耳に、聞き覚えのある声が聞こえたきた。

『で、お前はどうかんだ？』

その敬愛すべき千冬の声を聞き間違えるはずが無い。

こんなところで出会うのも少し気恥ずかしいため、ラウラはサツと身を隠してしま
う。

すると千冬は驚くべきことを口走った。

『そうだな……。ラウラなんかはどうだ？ 色々問題はあるだろうが、あれで一途な
やつだぞ。容姿だつて悪くはあるまい』

自分を評価する千冬の言葉に一瞬頭が真っ白になるが、千冬の気が一瞬こちらを向い
たことにラウラは気付いた。

隠れていることはバレている。

元々盗み聞きをするつもりは無い。

千冬が誰と話しているかは知らないが、あまりこの場に留まるのは得策ではないだろ
う。

ならばとそこから出ようと体を動かしした瞬間、その白い肌が赤く染まった。

『ラウラは可愛い』

いきなり、自分が愛する男の声が耳を揺さぶった。まさか一夏と会話していると思っていなかったため、不意打ちに身を打たれる形となつてしまった。

「……………」

突然の言葉に、心臓は早鐘を打ち、収まる気配を見せない。

胸の高まりに呼応して、顔の熱も高くなってくる。

あれほど、わかりやすく好意を向け、褒めるがいいと何度も一夏に言ってきたが、実際に褒めてもらったことなど一度も無かった。

勿論、『可愛い』なんて言ってもらえる訳が無い。

沙良は何かと可愛がつてくれるが、一夏がこういうことを言うのは本当に珍しいのだ。

そんなこともあり、冷静沈着と評価を受けてきたラウラが取り乱してしまふのは、何もおかしくは無い。

(か、か、可愛い……？ 私が、可愛い……可愛い……)

意味も無く周りをキョロキョロと見やつてから、ラウラは瞼を閉じて、胸に手を当てて意識を集中させる。

先ほどまで鈴音とシャルロットを探していたことなど忘れ、ラウラは個人間秘匿通信プライベート・チャネル

を開いた。

その番号は、ラウラが隊長を務めるシユヴァルツェ・ハーゼの副隊長クラリツサ・ハルフォーフの専用機である。

ラウラは、自らが一番信頼を置くものに助けを求めた。

『――受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です』

「わ、私だ……」

本来ならば名前と階級を言わねばならないのだが、取り乱しているラウラにはそこま
で気が回らなかった。

『なにか問題が起きたのですか？』

「あ、ああ……。とても重大な問題が発生している」

『――部隊を向かわせますか？』

「い、いや、部隊は必要ない。個人的な、案件だ……」

『私に、用事があるのですか？』

「ああ。クラリツサ。その、だな。わ、わ、私は、可愛い……らしい、ぞ？」

『……はい？』

規律整然としていたクラリツサの声が半オクターブほど高くなる。ついでに、きり
りとした口調は突然の意味不明な事態に対して若干間の抜けたものへと変わって

た。

「い、い、一夏が、そう、言っていて、だな……」

『ああ、織斑教官の弟で、ルイス博士のご友人の彼ですか。隊長が好意を寄せているという』

「う、うむ……ど、どうしたらいい、クラリツサ？　こういう場合は、どうするべきなのだ？」

頼れる部下は、そうですねと前置きして状況把握を促してきた。

『それは直接言われたのですか？』

「い、いや、向こうはここに私がいるとは思っていないだろう」

『——最高ですね』

「そ、そうなのか？」

『はい。本人のいない場所でされる褒め言葉にウソはありません』

「そ、そうか……！」

クラリツサの言葉に、ラウラは花が開いたように表情を輝かせる。

自らの腹心の言葉だ。

まず間違いは無いだろう。

「そ、それで、だな、今、その、水着売り場なのだが……」

『ほう、水着！　そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着を？』

「そ、それが、何を着たら良いのかがわからなくて、困っているのだ」

『それで、私に助けを？』

「あ、ああ。ど、どうしたらいい？」

『フツ。私に秘策があります』

言葉に熱が入り始めたクラリツサの迫力に負けながらも、ラウラは言われたとおりの水着を探し始める。

ようやく、言われたとおりの水着を探し当てると、それを鈴音とシャルロットに見せることにした。

二人は、見せられた水着に一瞬ほかんとした顔でラウラを見たが、モジモジとしているラウラにすぐさま可愛いと賛辞を送ってくれたのだった。



一夏が沙良合流した時、その場にはいつの間にか人数が増えていた。

「あれ？ みんなどうしたんだ？」

「たまたまそこで会ったんだ。もう僕たちの用事も終わったし、一緒しても良いよね？」
「勿論だ。せっかく会ったんだし、ご飯ぐらい食べていこうぜ」

一夏は時計を示す。

その時刻は午後5時を回っている。

これから食事所を探していると、ちょうどいい時間になるだろう。

その一夏の提案に反対するものなど誰もいない。

純粹にお腹を空かしている沙良は最初から乗気である。

沙良と一緒に行動できることに喜びを隠しきれていないシャルロットは嬉しそうに頷く。

一夏と思いがけなく行動できることになった鈴音は断るなんて選択肢は最初から無い。
い。

先ほどのことが尾を引いているのか、ラウラは何も考えることなくただ頷いている。
一夏は全員が賛成なことを確認すると、レストラン街に向けて足を進めるのであった。



「あら、皆さんお揃いでどうされましたの？」

私服に身を包んだセシリアは、廊下で級友とバツタリと出会った。

恐らくは皆で出かけていたのだろう。それぞれが私服を身に纏っている。

鈴音が一夏の近くを歩き、シャルロットが沙良の近くを歩く。それに挟まれる位置にラウラが陣取り、シャルロットや鈴音とお揃いの袋を持っている。

——あらあら、分かりやすいこと。

誰が誰に好意を向けているかが丸分かりだ。

「たまたま外で出会ったから一緒にご飯食べてきたんだ。セシリアは？」

集団を代表して、沙良が言葉を紡いだ。

それに微笑を携えて答える。

「それは楽しそうですね。わたくしは注文していた商品を取りに街まで出ていましたの」

そう言つて見せるのは小さな紙袋。

わざわざ店まで足を運ぶほどに高価なもの。

「そのブランドって……あれよね？」

「うん、確か高級な香水取り扱っているところだよね」

「なんて書いてるんだ？ レリ……エル？ 聞いたこと無いな」

「え、一夏レリエル知らないの？ 有名な香水会社だよ？」

それぞれがリアクションを取ると、セシリアはその紙袋を皆の視線から外した。

それを合図に、歩きながら話そうかと沙良が言うと、セシリアも頷きを返す。

鈴音が先頭を歩き出して、セシリアが続く。

「セシリアって普段から香水付けているけど、上品につけるわよね」

「それはもちろん。身嗜みも手を抜くわけにはいきませんから」

「流石、お嬢様ね」

「あら、鈴さん。女性としては大切なポイントですわよ？」

「でも、あたしは香水ってあんまり好きじゃないし」

「今度一緒に選びに行きませんか？ きつと気に入るのが見つかるはずですよ」

「そうね、それも良いかも。楽しみにしてるわ。あ、あたし部屋こつちだから」

鈴の部屋の付近に来ると、鈴音は手を振り部屋に入ってしまった。手を振り返したセシリアたちは、ゆっくりと歩を歩める。

「そういえば、最近セシリア大人しいね」

シャルロットが、先を歩く一夏を視線で示しながら言う。

それは鈴音や箒と違って、一夏に焼き餅を焼いたり、嫉妬することも少なくなつたという事だろう。

今までの行動を思い返してみると、高貴とは程遠い態度を取っていたものだと苦笑するしかない。

「ええ、わたくしも学習しましたの。わたくしは貴族として、貴族らしく振舞うのみです。今までの自分が恥ずかしいですわ」

「セシリアはもう諦めたの？」

一夏を諦めるのか。そういう意図での発言だろう。

「それは想像に任せますわ」

そう言いつつも、その目はまるで狩人のように一夏を捉えている。

「……鈴も箒も大変そうだね」

正しく意味を理解したのであろうシャルロットは此処に居らぬ友人に同情した。

「あら、シャルロットさんは余裕ですわね」

セシリアは沙良を視界に収める。

「冗談。強敵だからだよ」

「沙良さんも鈍いですからね」

「ただの鈍感ならまだ救いがあつただけどね……………」

「よく分かりませんが、そちらも大変なようで」

「てか、気づいてたの？」

「ええ。沙良さんと居る時だけあんな幸せそうな顔をしているのですもの、簡単に気づきますわ」

「うわあ、恥ずかしいっ！」

紅潮した頬に手を当てるシャルロットを、微笑ましく見つめる。

近くに自分の部屋も近づいてきている。ちょうど良い所で話が途切れたものだ。

「では、わたくしはこれで」

そう、セシリアが声に出すと、前を歩いていた三人がこちらを振り向いた。

「またね」

「またね」

「そうかセシリアの部屋は此処なのか。覚えておこう」

シャルロットと沙良の発言が被ったことに、少し笑みを浮かべる。

ラウラの発言だけが少しずれているがそれは気にしないことにしておこう。

「ああ、また明日な」

「ええ、また明日」

一夏からの挨拶に、つい嬉しくなるのは仕方ないだろう。

貴族とは言えどまだ年頃の女の子なのだから。

今日も良い夢が見れそうだと、セシリアは気分良く部屋に入るのであった。

第四十六話 とある車内で

シャルロットは浮かれていた。

それはもうこれ以上はないと言わんばかりに浮かれていた。

向かう先は海。

そう臨海学校である。

シャルロットの中では、この臨海学校はライバルたちに差を付ける絶好のチャンスなのだ。

一番の強敵であるソフィアは学年が違うため参加できず、簪は家庭の事情とやらで欠席。リナとフィオナはクラスが違うため積極的なアプローチが取れないだろう。

神様がくれたチャンス。

必ず手に掴んでみせる。

そう思っていた。

バスに乗り込む前までは。

「それで、水着の感想は最低でも十人に聞いてね。後でレポートを提出してもらおうから、ちゃんとした意見を聞いてよね」

シャルロットと沙良は後ろ側の席を確保している。

一夏はシャルロット達より少し前に箒と座り、通路を挟んだ隣にラウラが座っている。セシリアはそのラウラの横である。

沙良がシャルロットに「横に座っていい？」と小首を傾げ尋ねてきた時には内心ガツツポーズが飛び出たのだが、横に座っていざ何かを話そうとすると、沙良は手持ちの力パンからあるものを取り出したのだ。

「動いてもズレないか、運動を阻害しないか、生地の違いによる長時間装着の快適度、色による印象変化の集計とか、やることはいっぱいあるんだからテキパキ行動してね」

そう、仕事用のタブレット端末である。

淡い期待を寄せていたシャルロットは、バスに乗り込んでから仕事の話しか聞いていない。

「水着のモニターと同時平行で新作日焼け止めのテストもやつてもらおうから水着に着替え終わったら一回集合かけるね」

横に座れたのはとても喜ばしいことなのに、何故かそこまで喜ぶことができない。

本当は、もつと高校生らしい会話をして、海に期待を膨らませて、溢れる気持ちを押しさえ込んでいられるはずだったのに。

「……聞いてる？」

前を向くと楽しそうに会話をしている一夏が目に入る。

その空気に、少しの羨ましさを感じてしまう。

「シャル！」

「……えっ!?! あ、ああ」

急に名前を呼ばれてびっくりとする。

その不機嫌そうな声を上げた想い人の顔を恐る恐る見ると、怒ってはいないが明らかに、私、不機嫌ですと言わんばかりの表情をしていた。

「僕の話、聞いてたの？」

「う、うん。聞いて、た………よ？」

吃るシャルロットに、沙良は無言で圧力をかける。

沙良のジト目が胸に刺さる。

「……」

「うう……」

「……」

「その目で見ないでよ……」

「………」

「ごめんなさい、聞いてませんでした」

「ウソつくシャルは嫌い」

「だって……」

「言い訳するシャルも嫌い」

沙良はプイッと顔を背けてしまう。

しかし、これは本気で怒っているわけではない。

沙良が本気で怒る場合は、まず口を利いてくれない。リアクションを取ってくれない。目を合わせてくれない。話しても敬語になる。

この四点が特徴である。

簡単に言うとは、ガン無視され、応えてくなくても、物凄い他人行儀になるのだ。

今は不機嫌ではあるが、少しお茶目に応えてくれているのでそこまで怒ってはいないと判断できる。

「ご、ごめん……」

それでも、やはり少しは怒らしているのでシャルロットもしゅんと小さくなってしまう。

そうすると、沙良も少し罪悪感に駆られたのか、チラチラとシャルロットの様子を窺ってくる。

いかにも「言いすぎたかな？」と気にする子供のようだ。

シャルロットは俯いているためよく見えないが、その表情も徐々に焦りが混じっていき。

「そ、そこまで怒ってないよ？」

そして沙良が先に折れた。

シャルロットは内心ホツとする。

「本当？」

その弱弱しい返事に、沙良は何度も頷く。

シャルロットの表情に自然と色が戻る。

それを確認した沙良は、ふうと息を吐くと、タブレット端末を手に取る。

そして綺麗な笑顔を浮かべた。

「じゃあ、仕事の話に戻ろうか」

シャルロットは無表情で固まるのだった。



「海だあ!! 海っ! 見えたあっ!」

トンネルを抜け、潮風が海の接近を嗅覚に伝えてくると同時に、誰かが大きな声で叫んだ。

その声を合図に、皆が思い思いに窓の外へと注意を向ける。

その海という一つの特異な環境に、女子のテンションが高まっていく。

それは、男子とて同じことだ。

一夏は太陽の強烈な日差しを反射する海を確認すると、窓を思いつきり開け、その空気を胸いっぱい吸う。

その際に箒の前を乗り出すこととなり、箒の顔が赤く染まるが、一夏は海に夢中で箒の変化に気付くことはなかった。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「そ、そうだなっ」

赤い顔を誤魔化すため、下を向きながら返事を返す箒。

その姿に、一夏は気分が悪くなったのではと考える。

その原因はなんだろうか。

さつきまでは普通に会話できていた。

こうなったのは先ほど窓を開けてからだ。

ならば、潮風で気持ちが悪くなったのだろう。

「悪い、開けない方が良かったか？」

「な、そ、そういうことではない」

「無理すんなって」

一夏は身を乗り出そうとした箒を背もたれに押し付けると、窓を閉める。

その際に、再び箒の前を乗り出す形になり、箒は紅潮を見られぬよう再び俯いてしま
う。

「箒、下を向いてると余計に気分が悪くなるぞ？」

「……そういうわけではないのだが」

箒の呟きは一夏の耳には言葉としては届いていなかったが、気分が悪いであろう人物
に問い返すのはあまりよくないと判断し、聞き返すことはしなかった。

その代わりに一つの行動を取った。

「ほら、肩貸してやるよ」

箒の頭を、自らの肩にのせたのだ。

「——っ!!!」

箒はその紅潮を、まるで血液が全て顔に集まっているのではないかと錯覚するぐらい
に深くした。

そんなことは露にも思わない一夏は、真つ赤になつた箒の顔を見て、やはり具合が悪かつたのだと一人納得した。

箒は、何も考えられなくなつた頭を一夏に預け、思考を放棄したようだ。

「嫁、私も気分が悪くなつたかもしれない」

それを見ていたラウラが一夏に何かを期待するような目で、不調を訴えてくる。

「すまん、セシリア。ラウラを見てあげてくれないか。俺は箒で手がいっぱいだ」

それを、一夏はセシリアに任せることにした。

唇を尖らせたラウラは、セシリアに慰められながらも一夏の不満を垂れ流すのだつた。

その際に一夏は、後ろの席で仕事の話をしていたはずの沙良たちが静かになっていることに気付く。

「沙良？ 海見えてるか？」

声をかけてみるが、返事は返ってこない。

後ろを振り返ろうにも、箒が肩に頭を載せているため、身動きが取れない。

不思議に思つたセシリアが後ろを振り向くと、その光景に微笑を漏らした。

「どうしたんだ？」

それを一夏が疑問に思つた。

「いっとういっとうだよ」

いつから話を聞いていたのか、本音がデジカメを一夏に差し出す。

そこに写っているものを見て、一夏はセシリアが微笑を漏らしたことに納得する。

一夏も自然と微笑が浮かぶのを感じているからだ。

そこに写っていたのは、お互いに寄り添う形で眠っている二人の姿だった。



「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

千冬の言葉に席を離れていた生徒は自分の席へと戻っていく。

そうは言っても長いことバスに揺られていたため、寝てる生徒も多く。席に座るとい

う行動よりも、寝ているものを起こすという作業をしている者の方が多かった。

千冬の言葉通りに、ほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着する。

生徒が順番に降りていくが、程よい揺れとバスという特殊な空間によるヒュプノスの

誘いに瞼を閉じていた生徒は、みな危なげにバスの手すりに掴まっている。

順に到着していくバスからも同じ光景が見て取れる。

「それでは、ここが今日からお世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないよ

うに注意しろ」

千冬の言葉に生徒の多くが頭を下げ、挨拶の言葉を投げかける。

その姿に着物姿の女性が、丁寧なお辞儀を返した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

その容姿は若々しく、年齢を見た目から推測するのは難しい。しかし、しっかりと大人の雰囲気漂わせている。

「あら、こちらが噂の……?」

その視線が二人の少年へと向けられる。

片方は背が小さく、眠たそうに目を擦り、もう片方はそこそこの背丈で、横の背が低い少年——沙良に付き添つて笑みを浮かべている。

その背が大きい方の男子は、自らに視線が向けられていることに気付くと、目礼だけを返し、沙良の手を引いて千冬へと歩み寄る。

「ええ、まあ。今年は男子がいるせいで湯場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。すっかりしてそんな感じを受けますよ」

その言葉に、照れくさそうな顔をしながら、少年は頭を下げる。

「織斑一夏です。よろしくお願ひします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

そういつて女将は丁寧なお辞儀を行なう。その気品溢れる動きに、僅かな緊張を覚え一夏は、その視線が沙良へと動くのを感じ、沙良の脇を小突いて合図を送る。

「……Mucho gusto. Soy Sera Hukami. (……はじめまして、深水沙良です)」

未だ眠たそうにしている沙良の自己紹介は、寝ぼけていたのであろう、スペイン語で行なわれた。

「すいません、寝ぼけてるみたいで……。こいつは深水沙良です」

女将のポカンとした顔と、千冬の振り上げようとした拳にいち早く反応した一夏は、沙良の自己紹介を勝手に済ませることにした。

「出来ない弟でござ迷惑をおかけします」

「いえいえ、ご立派ですよ。織斑先生つたら、弟さんには随分と厳しいのですね」
「立派なのはこういう時だけなので」

大人たちの話はどうも面白いやと、一夏は元の集団に戻る。

「ふあゝ」

今頃、意識が覚醒したのだろう。

一夏は、隣で伸びを行い大きく欠伸をする幼馴染に小さく蹴りを入れる。
「む、なにすんのさ」

沙良の言葉に反応する前に、千冬が大きな声で『注目』と言葉をかける。

その後、女将が一步前に出た。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に聞いてくださいまし」

女子一同は軽く返事をし、すぐさま旅館に向かっていく。

その波に逆らって、二人の女子が沙良へと近づいた。

スペインの代表候補生の二人だ。

その場にシャルロットも混ざったことから、恐らくは沙良の仕事関係だろう。

シャルロットもバスの中で説明を受けていたし、これから集まって何かするのだろう。

一夏は既に沙良から水着を渡されているので、沙良に付き合う必要はない。

「先行ってるぜ」

「あ、ごめん。また海でね」

沙良に一声かけると、沙良はこちらに振り向き、手を合わせる。

初日は完全に自由時間となっているため、沙良は完全に仕事で潰す気だろう。

沙良の後ろで、女子が三人で慰めあっている。

一夏は素直に同情の念を抱いた。

「ね、ね、ねー。おりむ〜」

その特殊な呼び名に、一夏は振り向く。

その声の主はもう予想できている。

案の定、そこにいたのは袖をだらんとさせている本音だった。

「おりむーって部屋どこ〜？ 一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えて〜」

その遊びに来るのを防ぐために書いてないのではないのだろうか、とは口に出せる空気ではない。

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないやねえの？」

「わー、それはいいね〜。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって〜」

実際には女子とは別に場所を用意しているらしい。

一夏としても真耶が言っていたのを聞いたただけなので、明確には何も聞かされていない。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい」

流石に千冬を待たせるわけにはいかない。

一夏は本音に目礼だけ送ると、千冬の後を追う。

「えーっと、織斑先生。俺の部屋つてどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

不機嫌そうに歩く千冬に、すごすごと引き下がるしかない一夏。

仕方なく旅館の中を観察し、気を紛らわす。

その歴史を感じさせつつも最新の設備を取り入れる、訪れるものを満足させるためこ
とを追求した旅館のつくりにも、ただ凄いと胸を振るわせる。

「ハッ」だ

急に千冬が立ち止ったため、一夏は視線を壁から、部屋に向ける。

「えっ……っ……」

一夏は言いよどむ。

無理もない。そこには教員室と書かれていたのだから。

「最初は男子の二人部屋という話だったのだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女
子が押しかけるだろうということになってだな」

千冬は、何かを隠すかのように語る。

「結果、私と同室になったわけだ。これなら女子もおいそれとは近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだろうけど……」

一夏の部屋に遊びに来たいと多くの女子は思っているだろうが、そこに千冬がいるとなれば話は別だ。

鴨が葱と鍋を背負って、鬼の寢床に突貫するようなものだ。

「一応言っておくが、あくまで私は教師だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

千冬が顎で扉を示す。

そのことから、入室の許可が下りたということが読み取れる。

一夏はその教員室と書かれた扉を開いた。

「おおー、すげー」

中に入るとまず目に付くのは、一面窓から覗く青色に煌めく海。

その風景は、日々、女子に囲まれる生活で疲れている一夏の心にすつと沁みこんでいく。

部屋が東向きということもあり、きつと日の出も美しく見えるのだろう。

風景に気を取られていると、千冬が苦笑を浮かべながら横に並んだ。

「一応、大浴場も使えるが男のお前は時間交代だ。一部の時間だけ使用可ということをお頭に入れて置け。早朝、深夜に入りたければ、そのこの部屋のを使え」

指差された部屋を覗くと、ゆったりとした浴槽が鎮座していた。かなり大きな浴室だ。

「わかりました」

一夏は少し遅れて返事をする。

「さて、今日は一日自由行動だ」

「織斑先生、沙良の部屋は？」

話を終わらせようとする千冬に、一夏は思っていたことを尋ねる。

「明らかに、この部屋二人部屋ですよね？」

「……………」

千冬は言いづらそうに言葉に詰まる。

その表情は、一夏も見覚えがある。

寮の部屋の時と一緒だ。

「まさかこの部屋で三人で寝るって分けじゃないですよね？」

一夏は更に問い詰める。

「……………深水は別の部屋だ」

その発言に、一夏は眉を顰める。

「へー、山田先生とですか？」

一夏は顔を繕わずに、千冬に質問を重ねる。

「……………個室だ」

「なら、俺と沙良が同じ部屋で良いじゃないですか」

千冬は諦めたように、ため息をつく。

その表情は、色々な感情が複雑に混ざり合って読み解くことができない。

「一夏、わかっているなら聞くな」

「千冬姉！」

一夏と呼ばれる。それは教師と生徒との話じゃなく、姉が弟に言い聞かせるということ。

「日本政府は、本格的にお前と沙良を一緒にさせたくないようだ」

一夏はその表情に怒りを見せる。

「第一、お前と沙良が同じ部屋になれたのも、デュノアの騒動で部屋割りがどうしようも出来なかったからだというのを忘れるな。この臨海学校の間には部屋割りが動き、お前と沙良はまた個室に戻るだろう」

無意識に拳を強く握る。

必死に体を鍛えても、強さを求めても、権力の前には何の役にも立たない。

それでも、剣を振る事しか出来ない一夏は、そのやる瀬のない怒りを拳に溜めること

しか出来ない。

その一夏の姿に千冬は悲しい表情を作る。

「日本政府は、スペインに所属している沙良とお前が行動を共にすることで、お前がスペインに取りこまれることを強く恐れている」

「巫山戯るな！ 俺と沙良は家族だ！ 千冬姉だつてそうだろ!? なんで他所からちよつかい出されて黙つてるんだよ!!」

「私だつて手は尽くしている!」

その千冬の剣幕に、一夏はハツと冷静に戻る。

そうだ。家族というものを人一倍大事にする自らの姉が、動いていないわけがない。

世界最強という冠をとったとしても、今ではただの教師に過ぎない。出来る最大限をやってくれているのは弟である一夏が一番わかっている。

「……ごめん。千冬姉に言うことじゃなかった」

「いや、私も怒鳴つてすまなかつた」

お互いの間に、気まずい空気が流れる。

その空気を打ち消そうと、千冬が声を張り上げる。

「さあ、今日は一日自由時間だ。遊んでこい」

「千冬姉は?」

「織斑先生だ」

それはもう家族としての話は終わりということ。

軽く拳骨が落とされた一夏は、それが話しの切り替えだということに気付いた。

「私は他の先生との連絡なり確認なり色々がある。しかしまあ——」

千冬は取り繕うように一度咳払いをする。

「軽く泳ぐくらいはするとしよう。どこかの弟がわざわざ選んでくれたものだしな」

「そうですか」

一夏はそっけなく答えるが、千冬の心遣いに少し嬉しきを感じる。

「さて織斑、私はこれから職員会議だ。どこへでも遊びに行つてこい」

「はい。それじゃあ早速海にでも」

「羽目を外しすぎないようにな」

一夏は千冬の声にもう一度返事を返すと、予め分けておいたリュックサックを手に部屋を出た。

「……あいつも聡くなったものだ」

千冬の呟きは一夏には届くことはなかった。

第四十七話 夏の晴れた日にて

とある更衣室、一人の女生徒が着替えを行なうためにその扉を開けた。

豊かな女性の象徴を揺らし、艶やかな長い黒髪を後ろで結んだ女生徒、篠ノ乃箒はその持つてきた鞆を開けると、中身を引っ張り出した。

「……………」

そこに入っていたものは、勿論水着である。

それは、何も問題ではない。問題なのはその形状だ。

「ビ、ビキニだと……………」

その水着を用意したのは箒ではない。

専用機に向けての訓練に明け暮れて、水着を買いそびれた箒に、沙良が用意してくれたものだ。

その胸元には、きつちりと『SQC』のロゴが入っている。

「これは、流石に……………」

古風な考え方を持つ箒は、露出の多いものを好まない。

ただでさえビキニという露出が多い形状の水着だが、沙良が渡してきた水着は箒の許

容を超える露出を誇っていた。

胸元を深くカットしたVネックライン。

ストラップを首に吊るしたホルターネック。

その構造が、胸を、女性らしさを強調するような作りとなっている。

白色を基準に、赤色のラインがその目を惹く。

飾り気も全くない。

ただシンプルな構造。

それゆえの色気というものが確かに存在している。

「どうするべきか……」

箒は、水着を持ったまま思考に浸る。

確か、沙良は多数の水着を持ってきているはずだ。

ならば、代えてもらうことも出来るのではないだろうか。

箒は、頷く。

「そうだな、そうと決まれば沙良のところに行くか」

手に持っていた水着を鞆にしまうと、更衣室の扉を開ける。

そしてそのまま視線を左に向けるとそこには、仕事のミーティングを行なっている沙

良がいた。

沙良は箒に背中を向けているが、こちらを向いているシャルロットが箒に気付いたよ
うで、沙良に手で後ろを示していた。

振り返った沙良に手を上げて軽い挨拶とすると、水着についての不満を述べる。

「先ほど受け取った水着だが、少し露出が多くないだろうか？」

「そう？」

そういつて、沙良はシャルロットに視線を向ける。

「確かにちよつと際どかつたかも」

「そんなことないわよ。あんぐらい普通よ、普通」

「そうですよ。あれぐらいなら其処彼処に居ますつて」

シャルロットの発言に意義を重ねるように、スペインの生徒二人が発言する。

箒の味方はシャルロット一人のようだ。

「僕は、箒に似合うと思ったんだけどなあ」

「うっ」

上目遣いで見つめてくる沙良に、箒はどうしても「代えて欲しい」と言葉に出来なかつた。

「せっかく選んだのに……」

沙良が見るからにしょぼんとそのテンションを落としてしまう。

「箒、勿論着るよね？」

その落ち込んだ沙良の姿を見たシャルロットが、まさかの裏切り行為に走った。

その瞳は有無を言わさぬ圧力を放っている。

ふと、視線を名前も知らぬスペインの生徒二名に向けると、苦笑いを浮かべていた。

箒は悟る。

（味方は居ないのか……）

「僕、頑張つて選んだのに……」

その発言に、箒の良心がズキズキ痛み出した。

シャルロットの視線も心なしか圧力を増している。

「箒のために頑張ったのに……」

箒には、頷くしか選択肢が残されていなかった。



「はい、これ。新作の日焼け止め。ちょっとぐらい海で泳いでも落ちないから、安心して

泳いでいいよ」

「あ、ああ。ありがとう」

箒はシャルロットから日焼け止めを押し付けられる。

もう既に水着に対して抗議が出来る空気ではなくなってしまった。

諦めて、着るしかないのだろう。

既に、シャルロットたちは水着に着替えている。

オレンジを多用したセパレートタイプの水着で、ボトムはボーイレッグと、露出は多

いほうではない。

しかし、箒はその水着を見て、羨ましいとは思わなかった。

その後ろに何枚も用意された水着が目に入っているからである。

セントーストラップやワンショルダーのビキニに始まり、タンキニ、モノキニ、キュ

ロパン、ローライズなど、様々な水着が番号を振ってテーブルの上に積まれている。

その中には、箒よりも露出の多いマイクロビキニも含まれている。

シャルロットの担当だけでも八種類以上の水着を今日だけで着ないといけないよう

だ。

その話を聞いていると、さつきまで恥ずかしがっていた自分が馬鹿のように思えてくる。

「じゃあ、僕は時間があまりないから先に行くね」

シャルロットは箒の返事を待つこともなく、更衣室を小走りで出て行った。

「……大変そうだな」

箒はそれを複雑な気持ちで見送ることしか出来なかった。

「……まずは着替えるか」

箒は意を決したように服に手をかける。

枝もたわわに実った双丘がその存在を主張するかのように揺れた。

「はあ……」

箒は、自分の胸を良くは思っていない。

正直、邪魔なだけだと思つてすら居る。

その悩みを鈴音には決して聞かせることは出来ないだろう。

しかし、箒にとっては大きな問題なのだ。

良い事など、まったく無い。

しかし、それで想い人が少しでも意識してくれるならばと、箒は水着を着ける。

その水着は、箒の胸をどうしても強調する。

しかし、沙良が選んだだけあつて、確かに箒に似合っている。

「似合っているのだが、如何せん、恥ずかしさの方が勝つていると言えはいいのだろうか」

か……」

自分の水着姿に意識を奪われていた箒は、更衣室の扉が開いたことに気付かなかつた。

そこからうさ耳をつけた人物がすり足で近寄ってくるなど誰が予想できるだろうか。

「ふっふっふ、とりゃー!!」

箒はいきなり背後から胸を驚づかみにされる。

自分しか居ないと思っていたため、その驚きは普段よりも大きいものだった。

それは、胸を揉まれていても、なんら行動を起こせないほどに。

「こんなけしからん水着なんて着ちゃって、箒ちゃん大人だあ。束さんは箒ちゃんが成

長してくれて嬉しいよー」

その手の動きはうねうねと胸の形を変えていく。

「……………」

箒の額には青筋が浮き出ている。

そのことに気付かない侵入者は、その行動を止めることはしない。

「おろ？ もしかして大きくなった？」

箒は、揉まれるがままに、後ろ手に拳を放つ。

その拳は、綺麗に顔面に突き刺さるのだった。



時は三十分逆戻り。

更衣室に向かう途中で、一夏は珍奇な光景にその足を止めていた。

「……………」

それは地面から生えているうさ耳。

ご丁寧に『引つ張ってください』との張り紙つきだ。

それには一夏も見覚えがあつた。

故に、

「見なかつたことにしよう」

その光景をなかつたことにした。

「関わつたらダメ。関わつたらダメだ」

一夏はそそくさとその場から離れようとする。

すると、胸ポケットに入れていた携帯が震えだす。

それは、一夏が足を止めると鳴り止み、

「……」

その場から離れようとするのとけたたましく鳴り響く。

「はあ……」

一夏は、ため息をつくくと、うさ耳の近くにしやがみ込んだ。

地面から生えたウサギ目の耳の根っこを驚掴みにする。

そのまま後ろに体重をかけると、予想に反してうさ耳はすんなりと一夏の手に住場所を移した。

「のわっ!？」

もう少し手ごたえがあると思っていたため、一夏は仰け反る形で盛大にすつころんだ。

「いって……」

抜いてみたが、何も反応はない。

ただの悪戯だろうか。

いやそれともなにかこれから起こるのか。

その思考に一夏が入った瞬間、物体が空を裂く音が近づいてきた。

それは一夏の方角に行き先を向けている。

「マジか……」

そのまま一夏の前方2メートルの位置に突き刺さったのは、イラストチックなデザインで作られたニンジン型の飛行物体だった。

一夏はそのまま見なかった事にするため、何事もなかったかのように立ち上がった。両膝をはたいて砂を落とすと、ニンジンに背中を向ける。

大きく息を吸い、激しく動く心臓を落ち着かせると、意を決して一步を踏み出す。携帯がけたたましく鳴り響くが一夏は気にしない。

一刻も早く離れなければと、頭が警告を受けている。

一夏が疾走の体勢に入る。

姿勢を低くし、その次の足を踏み出そうとした瞬間、一夏に影が差した。

「えっ?」

咄嗟に見上げると、そこには網のようなものが飛んできていた。

「ええええええ!」

一夏はあっけなく捕獲される。

手足を使って何とか抜け出そうとするが、予想以上に絡みついた網は一夏を離そうとはしない。

そのもがく一夏に足音が近づいてきた。

「逃げるだなんて酷いよ、いっくん!」

まるで不思議の国から出てきたような青と白のワンピースに、特徴的なうさ耳。

世界的有名人、篠ノ乃束である。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー」

束は周りをキョロキョロ見渡す。

「ところでいつくん。セラはどこかな？ 一緒じゃないんだ？」

「えーと……」

一夏は沙良が何処で何をしているかは知っている。

しかし、その内容的に、束に邪魔をされたくはないだろうと、その場所を教えることを躊躇ってしまふ。

それを、知らないかと判断したのか、束は興味を別に移した。

「まあ、今日のところは別に用事があるしね。また明日会うことにするよ」

そう言つてスタスタと歩き去つてしまふ。

その際に、「セラ探索機も作っておけばよかった」と言葉を残して。

一夏は、沙良が額に手を当てて困った顔をするのを簡単に想像できる。

「せめて開放して行つてくれよ……」

そこには捕らえられた一夏だけが取り残されるのであつた。



「さつきは酷い目に遭った」

セシリアが通りすがらなかつたら、悲惨なことになっていただろう。

炎天下の中、直射日光をただひたすら浴び続けるというのは男である一夏にも辛いものがある。

無事に自由を取り戻せた一夏は別館の一番奥の更衣室を目指し歩いていった。

男子である一夏は別館の更衣室でも一番奥を使用するように言われているのだ。

その別館からは直接浜辺に出られるようになっていたとのこと、そのまま海に一直線に出て行くには都合がいいらしい。

(うーん、それにしても……)

一番奥の更衣室ゆえに、女子の更衣室の前を通らなければならず、当然、中は見えな
いが、女子生徒特有の黄色い声が一夏の鼓膜に響く。

「わ、ミカつてば胸おつきー。また育ったんじゃないの〜?」

「きゃあつ! も、揉まないでよおつ!」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね〜」

「そう? スティツでは普通だと思っけど」

そう。こういう話題が平然と飛び交っているのだ。

一夏はそれを苦手としている。

気恥ずかしいのだ。

その場から逃げるように早足で男子用更衣室に逃げ込む。

男の身支度など早いもので、五分も掛からないうちに着替えを終わらせる。

一番奥に設置された更衣室からは、扉を開けると、すぐに海に出ることが出来る。

一夏は更衣室の扉を開け、海が広がる風景を瞳に焼き付ける。

世界では環境問題がよく議論になっているが、この海はそんなことを感じさせないぐらいに澄み渡っている。

そういえば、SQCも環境事業に力を入れていると沙良が言っていたなど、そんなことを思い出しながら、一夏は浜辺を歩く。

「あ、織斑君だ!」

「う、うそっ! 私の水着変じゃないよね!? 大丈夫だよね!」

「わ、わ〜。体かつこい〜。鍛えてるね〜」

更衣室から出てきた女子に発見されると、次々と声をかけられていく。

各人、可愛い水着を身に着けているため、その露出度に少しの照れが生じてしまい、視線を逸らしてしまう。

一夏は、この気恥ずかしさも海の醍醐味のうちか、と自分を納得させ、波打ち際に足を進める。

ビーチには既に多くの女子生徒が溢れていて、肌を焼いている子も居れば、ビーチバレーしている子、さっそく泳いでいる子など様々だ。

着ている水着も色とりどりで、目に眩しい。

「ある意味太陽よりも眩しいよな……」

「何恥ずかしいこと口走ってんのさ」

「っ!?!」

一夏はサツと後ろを向く。

「なんだ、沙良か……。ビックリさせるなよ」

沙良は準備運動をしている一夏の横に座り込む。

ちようど一夏の体が影になるように座るあたり、相当暑いらしい。

「仕事は終わったのか?」

沙良は首を横に振ると、海を指差す。

最初はそれを見つけることが出来なかったが、じつと見ていると、その意味がわかつ

た。

「遠泳実験中」

沙良の言葉の通り、三人の女生徒が鮫型のロボットに追いかけられながら必死の形相で海を泳いでいた。

その足にはフィンが履かれているが、時折鮫型ロボットが急加速するなど、精神的にも相当辛いだろう。

むしろ、何処から持ってきたんだあのロボットは。

「テストは水着だけじゃなかったんだな」

「うん、この夏発売予定の新作モデルだよ。一夏も欲しい?」

「いや、この前貰ったフィンが結構しつくりきてるからな」

「そっか」

「ああ」

「暇」

「そうか」

「帰って来るまですることない」

片言になっている沙良は服をパタパタと仰いでいる。

下は、流石に水着を穿いているが、上はしっかりとパーカーを着込んでいる。

「上を脱いだらいいじゃないか？」

「シャルが泳がないなら肌を出しちやダメって」

「せつかくの海なのに勿体無い」

「海なんて毎年嫌になるほど行ってるしね」

沙良は足をだらーんと前に伸ばし、砂浜の上に寝転がった。

「あつーい」

「そりゃ、夏だからな」

「そんな言葉が聞きたいんじゃないやい」

「どうしろって言うんだ」

一夏は苦笑いで答える。

海から「助けてー!」「サラー!」「いやー!」など叫び声が聞こえてくるが、一夏は

無視を決め込む。

聞いてはいけない。

見てはいけない。

何て酷い職務内容なんだろうか。

一夏は心の中で、沙良に熱を向けるシャルロットに憐れみの涙を零す。

「あ、シャルが沈んだ」

その言葉に海を見ると、鮫型ロボットに助けられているシャルロットの姿が見える。そのまま唾えられた状態で陸に運ばれているようだ。

海で泳いでいた生徒が、旧約聖書でモーゼが海を割ったようにシャルロットから離れる。

全員があからさまな引き笑いを浮かべているのが印象的だ。

「じゃあ、僕はそろそろ行くよ。一夏も海を楽しんでね」

沙良が、岸辺に打ち上げられて、弱弱しく息をしているシャルロットに近寄っていくのを、ただ見送るのであった。

「何かありましたの？」

そこにビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持ったセシリアが声をかけてきた。

「沙良の持ってきたロボットにみんな驚いてるだけさ」

一夏は海に背びれを突き出している鮫型ロボットを指差す。

「こ、個人的なロボットですわね」

「無理して褒める必要もないぜ？」

一夏は肩を竦めてみせる。

その動作に、セシリアも笑みを浮かべる。

「そうですね」

セシリアは鮮やかな青色のビキニタイプの水着を着用していた。腰に巻かれたパレオが優雅に揺れている。

明らかに泳ぐ用途ではない水着のため、これから泳ごうと思っていた一夏は、セシリアを泳ぎに誘うことを諦める。

「一夏さんは泳ぎに行きませんか？」

「今は準備運動中。ちゃんとやっておかないと、足を攣ったりするからな」

「真面目ですのね」

セシリアがくすくすと笑う。

水着を着てても優雅さは変わらないことに一夏は素直に感心する。

(やつぱお嬢様なんだなあ)

一夏はセシリアが持っているサンオイルになんとなく目をやった。

それをどう受け取ったのか、セシリアが一夏にちよつとしたお願いする。

「一夏さん、良かったら背中にサンオイルを塗ってくれませんか？ 自分では流石に届きませんの」

「それは別に良いけど、肌を焼いちゃうのか？」

一夏は勿体無さそうに言う。

「セシリアは肌が白くて綺麗だからさ、まあ俺が口を出すことじゃないんだろうけど」
その一夏の言葉に、頬を少し赤く染めたセシリアは「そ、そういうことでしたら」と前置きして、俯き気味に問いかけた。

「日焼け止めを塗っていただけませんか？」

その珍しく、年頃の女の子らしい雰囲気を出しているセシリアに、一夏は微笑みかけながら頷くのであった。

第四十八話 海辺にひと夏の

太陽がじりじりと砂浜を焼き、多くの生徒が暑さに負けて海に入るのを横目に、一人の男子生徒は砂浜をゆっくりと歩いていった。

陽気に鼻歌でも歌い出しそうな機嫌の良さで、風を感じるかのように砂を踏みしめる。

一夏は足裏にじりじりとした熱さを感じながら砂浜を散歩していた。

照りつける太陽に目を細めながらも、開放的な空気に、心は癒されていく。

そう、今、一夏はこの一人の時間を堪能しているのだ。

学園のような一種の監獄とは違い、ここにはある種の自由と開放感がある。

日ごろ溜め込んだ疲れを癒すのにはもってこいなのだ。

「あ、こんな所に居たのね」

故に、そのかけられた声が自分とは思わず、振り返ることなく歩を進めるが、その足は急に止まることになる。

いや、止まるとは少し違うだろう。

なぜなら一夏の両足は地面についていないのだから。

それが意味することはもちろん、

「う、うわああ!!」

顔面からの転倒である。

普段から回りに気を張っている一夏だが、今回は完全にリラックスモードに入っていたために、もろに襲撃を食らってしまった。

腕で顔面を庇った一夏は、今だ足をつかんでいる襲撃犯をキツと睨みつける。

「あ、あはは」

そこには苦笑いを浮かべるツイントールの姿があつた。

「鈴、てめえ……」

「な、何よ」

「……この状況を見て言いたいのはそれだけか!？」

「だって、無視するあんたがいけないんじゃない!」

「無視って、あんなの誰に言ってるかわかんないだ………何だ、そのバスタオルお化け」

体を起こした一夏は、鈴の横に居た奇天烈な物体によく気付いた。

その見た目のインパクトは、つい鈴音への怒りの言葉を忘れるほどだ。

バスタオルを数枚利用し、全身を覆い隠している。

膝下からは足が出ているため、誰かがバスタオルに巻かれているのは分かるが、足だけでは誰かが分からない。

「ほら、大丈夫だから出てきなさいよ」

まるで先ほどの流れはなかった様に、鈴音はニヤニヤしながらバスタオルお化けに近づく。

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

そこから聞こえてくるのは、冷静沈着で通っているラウラの声。

しかし、普段の自信に満ち溢れたラウラと、今日の前にいるモジモジバスタオルお化けが一緒の人物とは到底思えない。

状況がつかめない一夏は、鈴音の説得が終わるのをただ待つだけである。

「せっかく着替えたのに、一夏に見てもらわなくていいの？」

「ま、待て。私にも心の準備があつてだな……」

「もう、さつきからそう言つて出てこないじゃないの」

鈴音とラウラが仲良くしているのを見て、一夏は少しの嬉しさを覚える。

あんないざこざがあつたのだから、もつと険悪な仲でもおかしくはない。

それが、今は姉妹のようにじゃれ合っている。

一夏は気付かぬ内に微笑を湛えていたようだ。

ふと目が合った鈴音が不思議そうな顔をしている。

「なにニヤニヤしてんのよ、あんた」

「別に何もないさ」

「ふーん」

鈴音は興味なさそうに答えると、何かを思いついたようでニヤツと笑う。

「あんたが、でてこないなら、あたしは、いちかと、およぎにでもいこうかなー」
なんて棒読み。

清清しいとまで思えるほどだ。

引つかかる人間はそういないだろう。

「な、なに!?!」

前言撤回。

希少種は目の前に居たようだ。

「ほら、一夏行くわよ」

そう言って鈴音は一夏の背中を両手で押してトコトコと海に向かう。

その顔はニンマリと悪戯に笑みを浮かべている。

一夏は「仕方ないなあ」と鈴音に押されるがまま海辺へと歩みを進める。

「ま、待てっ。わ、私も行くっ」

「その格好で？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

そう言つてバスタオルをかなぐり捨てて、陽光に水着姿が照らし出される。

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

ラウラが身に纏つているのは、黒のレースがあしらわれたまるでセクシー・ランジェリーのような水着。

鈴音と合せているのだろうか、その髪は一对のアップテールで飾られている。

モジモジと恥らうラウラ、その姿は一夏には新鮮すぎた。

「どう、一夏？ 似合つてると思うわよね？」

「あ、ああ。少し驚いたけど似合つてると思うぞ」

その一夏の褒め言葉にラウラは顔を赤くする。

「しや、社交辞令などいらん……」

「いや、世辞じゃないつて。すっげえ可愛いよ」

「か、かわいっ……!?!」

一夏の言葉に狼狽したように両手の指をもてあそぶラウラ。

「髪は鈴がやったのか？」

「そうよ。あたしとお揃いにしてみたの。せつかくなんだからお洒落しないと勿体無い

じゃない」

「その髪型といたら鈴のイメージだもんな」

「ふふん。可愛いでしょう」

先ほどから言葉にならない眩きを漏らすラウラに、一夏と鈴音は温かい視線を向けるのだった。



「そろそろお昼の時間ね。一夏は午後はどうするわけ？」

「少し泳ぎたいんだが、食べた直後は辛いし、ちよつと休んでから海に出るさ」

「ならば私も嫁に付き合おう」

三人は横並びでビーチを歩く。太陽も既に高く上っており、避暑も兼ねて昼食に戻る生徒もちらはらと見かけるようになってきた。

「そういえば、あんたの部屋って何処になったの？」

「うむ、それは私も聞かねばな」

「ああ、千冬姉と一緒に部屋だった」

微妙に顔を曇らせている一夏に疑問を覚えつつも、鈴音はそれを口にするのはしない。

「それじゃあ、遊びに行くのは難しそうね」

「嫁とは食事の時間にも会えるから問題もないだろう」

「そうね。わざわざ鬼の寝床に足を踏み入れなくても——」

「ほう、鬼とは言ってくれるな」

「——っ!？」

鈴音がギギギと壊れたおもちゃのように首を動かす。

「お、お、織斑先生……」

「いい度胸だな風」

そこには、サマースーツに身を包んだ鬼が居た。

千冬は腰に手を当て、鈴音を睨みつける。

その視線だけで鈴音は竦みあがってしまう。

蛇に睨まれた蛙とはこのことか。

千冬は一度視線を外すと、ふつと肩の力を抜いた。

「まあ今回だけは見逃してやろう。私もわずかばかりの自由時間をくだらないことで潰

すつもりはない」

その言葉の通り、教師陣には休憩時間など殆どないのだろう。

生徒は一日中自由時間といえど、教師には翌日の準備や手配が多く残っていることだろう。

「それら、お前たちは食堂でも行つて昼食でも食べてこい」

「先生は？」

「少しばかり羽を伸ばしてくるさ」

千冬は一夏たちから視線を外すと別館に向かつて歩みを進める。

別館に向かうということは水着に着替えるということだろう。

ならば、少ない自由時間を自分が削るわけにはいかない。

一夏は鈴音とラウラを引き連れて旅館へと向かうことにした。

「昼飯、なんだろうな？ 海だし刺身とか出てきたりしてな」

「刺身も良いけど、やっぱ海に来たら焼きそばやカレーが定番よね」

「違うない」

海といえばやはり海の家で食べる食事だろう。

鈴音と一夏は記憶からその味を思い出そうとする。

思春期を日本で過ごした二人にとっては海といえれば焼きそばなのだ。

その横で、ラウラは不思議そうな顔をしていた。

「……なぜカレーや焼きそばが海の定番なのだ？」

そう問いかけられても、一夏や鈴音は説明することが出来ない。

何故と言われても、海の家で食べられるものがそれぐらいと言うしかないだろう。

そのような説明がラウラに通じるわけもない。

「日本とは聞いていた以上に不思議な国なのだな」

一人で勝手に納得しているラウラを見て、一夏は苦笑いを浮かべるしかないのであった。



昼食に出た刺身を見てセシリアが文化の違いに驚愕したり、千冬の水着姿に一夏が見惚れていたり、口から魂を放出しているかのように波打ち際に打ち上げられているシャルロットをリナとフィオナが必死に救助していたりと時間は瞬く間に過ぎていき、時計の針は十九時半を示していた。

大広間を三つ繋げて用意された大宴会場で、IS学園生は一斉に夕食を取っていた。

「うん、うまい！ 昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

「本当に羽振りがいいよね」

一夏の言葉に頷いたのは右隣に座っている沙良だ。

旅館の決まりで食事中は浴衣着用を義務付けられているため、沙良も一夏も浴衣を着ている。

座敷で食事を取る生徒は正座が決まりとなっっているのだが、国際的な学園であるIS学園には文化や宗教的理由により正座が出来ない生徒も多く在学しているため、特別にテーブル席が用意されている。

正座が苦ではない沙良や一夏は座敷に座っているが、正座が出来ないセシリアやラウラはテーブル席で食事を取っている。

「ねえ、一夏。これってなんの刺身？」

「これは……カワハギだな」

「カワハギ？」

「皮が簡単に剥がせることが名前の由来となっている魚だとさ」

「……ああ、『Thread—sail filefish』のこと」

「まあその何とかフィッシュって言うのはわからんが、そういうことだ。歯ごたえがあ

る白身で美味いんだぜ」

「ふうん」

沙良は刺身にわさびを少量乗つけて口に運ぶ。

「あ、美味しい！」

「だろ？ 高級魚っていうのも納得の味だよな。それにわさびも本わさだし、文句の付け所がねえよ」

「本わさ？」

一夏が料理に舌鼓を打っていると、一夏の隣の隣。つまり沙良の隣に座っていたシャルロットが首を捻っていた。

「ああ、シャルロットは知らないのか。本物のわさびを摩り下ろした物を本わさって言うんだ」

「えっ？ じゃあ学園の刺身定食でついているのって……」

「あれは練りわさ。ホースラディッシュを原料としていて、色や形を似せているものだね」

「ホースラディッシュ？」

沙良の説明に、今度は一夏が首を捻る。

「ああ、和名でセイヨウワサビのことだよ」

「ふうん。じゃあこれが本当のわさびなんだ」

「そういうことになるな。でも、最近は練りわさでも美味しいものが多いぞ。店によっては本わさと練りわさを混ぜて出したりもするからな」

「そうなんだ」

一夏の話を聞いたシャルロットは早速本わさを味わおうと、そのわさびの山を箸で掴んだ。

「はい、ストップ」

「沙良？」

「わさびはそのまま食べるものじゃないの。いい？ こうやって、刺身に少しだけ乗つけて……………はむ」

シャルロットは沙良がしたように刺身にわさびを乗せる。

「……………はむ」

「どう？」

「うん、美味し……………ツンってきたあ！」

鼻から抜けていく感覚に、自然と顔が持ち上がる。

その目は堅く閉じられ、しかめっ面をしている。

沙良は、微笑を携えながら、湯飲みをシャルに差し出す。

「はい、お茶だよ」

「あ、ありがとう」

シャルロットはお茶に口をつけようとするが、

「あ、消えた」

鼻から抜ける辛味はすぐに揮発したようで、シャルロットの表情は驚きに満ちている。

「本わさは辛味がさつと抜けていくだろ？ それがうまいんだよな」

一夏は、刺身を口に運ぶ。

「んー、やっぱりうまいなあ」

一夏が、その風味を堪能していると、横の席から袖が引つ張られる。

「ん？」

一夏は端の席に座っているため、隣に座っているのは沙良しかない。

故に、そちらを向くことなく、一夏は応える。

「どうした沙良？」

「この鍋、なんかピリッとするけど、なんか入ってる？」

一夏は茶碗を手にとると、小鍋の出汁を啜った。

「んー、山椒のことか？」

「山椒? salamander?」

「それはサンショウウオだ。山椒は何て言えばわかりやすいかな……ほら、あれだ。千冬姉が鰻を買ってきてくれたことがあったら? あの時に鰻にかけてた粉っぽいやつのことだよ」

沙良は少し考えたように手を顎に当てるが、思い当たるものがあつたのか、両手を打った。

「へー、あれが山椒かあ」

「まあ、俺も普段料理に使うことはなかったし、沙良がわかんなくても仕方ないよな」
台所を任されていた一夏が山椒を使わないとなると、それ以降スペインで暮らしていた沙良にとっては馴染みのない物となってしまうのも仕方がないと言えるだろう。

「凄い良い香りがするね。こういう香りを芳香を放つて言うのかな?」

シャルロットも日本の伝統的な香辛料に興味示したようだ。

そのことが嬉しかったのか、一夏は沙良とシャルロットにとある提案をする。

「じゃあ、夏休みに入ったら、二人を日本料理のうまい店に連れてってやるよ」

「本当!?!」

「ああ、本当だ」

二人の重なった声につい笑みをこぼしてしまう。

「じゃあ、そのお礼というわけじゃないけど、長い休みに二人にフランスを案内してあげるよ」

「本当!?!」

今度は、一夏と沙良の声が重なった。

「本当だよ」

シャルロットが頷きながら答える。

「二人とも約束だからね!?! 絶対だからね!?!」

「わかってる、わかってる」

「嘘ついたら許さないからね!?!」

「わかった、わかった。ほら、指きり」

「指きり?」

シャルロットは首を傾げる。

一夏は沙良の小指に自分の小指を絡めると、シャルロットの手を取る。

「ほら、シャルロットも小指を、そう、こうやって絡めて……そう、それで大丈夫。じゃあいくぞ、こう言うんだ『指切拳万、嘘ついたら針千本吞ます』」

『指切った』



部屋はまるで戦場のようだった。

其処彼処に散らばる書類。足元を埋めるコード類。熱を排出する七機のコンピューター。

そして、それを操る者達の怒声と悲鳴。

その悲鳴の主は金の髪を揺らしながらモニターと睨めつこを続ける。

「シャルロット!? 書類は出来たの!?!」

「ご、ごめん、もうちよつとっ!」

「シャルさん、データ」

「待つて、すぐ転送するから!」

シャルロットは自分に割り当てられたコンピューターと必死に相対しながら、声を張り上げた。

このままだと夜も眠れないだろう。

実際には学校行事で訪れて居るわけなのだから、徹夜など許されるわけがないのだ

が、頭がこんがらがったシャルロットにはそのことには気付いていないようだ。必死に投影キーボードに指を這わせる。

夕食の後に沙良の部屋に呼び出されたと思えば、既にコンピューターが繋がれており、シャルロットは自分の逃げ場が無いことを把握した。

沙良の部屋は教員室に挟まれており、こっそり遊びに来るのも難しい。だから仕事とはいえ、一緒に居られるこの時間をシャルロットは悪くは思っていない。

思っていないのだが、

「これが終わらない限りはねえ……」

今、部屋に流れるのはスパニッシュ系のゆったりとしたロック。

先ほどまではフラメンコのダンスポップが流れていた。

投影キーボードの叩く音はその音楽に掻き消され、響くは音色のみ。

部屋の音を支配するはその音楽だけ。

お喋りなどしている者は居ない。

シャルロットはそう思っていた。

「シャル」

「何？」

沙良からの呼びかけに喜色に弾んだ声色で返事をする。

荒み切ったシャルの心に沙良の声は癒しをもたらしてくれる。

「お茶」

「それぐらい自分で入れてよ!!」

しかし、内容は看過することが出来なかった。

画面から目を離すことなくシャルロットが吼える。

「シャルロット」

「何、リナ」

「お茶」

「リナのほうが手が空いてるでしょ!?!」

「シャルさん」

「何さ!?!」

「お茶」

「フイーナまで!?!」

シャルロットはガバツと顔を上げて不満を訴えようとす。

しかし、目に入る光景について手が止まってしまった。

「な、な、何でお菓子食べてまったりしてるのさ!?!」

そのシャルロットの言葉に三人は顔を見合わせて声を合わせて言った。

「「だって、自分の分はもう終わったし」」
それはおかしい。

沙良やフィオナならまだわかるが、リナがそんなに早く仕事を終わらせることが出来るわけがない。

「シャルはさ、もうちよつと人を使うことを学んだ方がいいね」

「リナはそこが上手ですからねー」

「えへへ」

その会話に、シャルロットは気付いた。

確かに先ほどから自分にだけ指示が飛んできていた。

それも沙良からではなく、フィオナやリナから。

それが意味すること。

「……僕に仕事を押し付けたね」

シャルロットは凄みを利かせて、二人を睨みつける。

しかし、二人は何処吹く風と言わんばかりに、肩を竦めて見せる。

「馬鹿ねえ、シャルロット。これも社会勉強の一つよ。これで次からは気をつけれるようになるでしょう？ 良かったわね。また一つ学べて」

切れた。

堪忍袋の緒が切れた。

ゆらりと立ち上がるとそのままリナを視界に入れることなく、歩みをそちらに向ける。

リナは、そのシャルロットを見ると、口元を歪める。

「面白い!! かかって来なさい!!」

シャルロットがリナに飛び掛った。

部屋の中央で喧嘩を始めた二人を措いておいて、沙良は自分の使ったコンピューターを量子変換で収納する。

「規則違反ですよ」

そう言いながらも、フィオナは自分の使ったコンピューターを沙良と同じように収納した。

「そういうフィーナこそ」

「誰かが赤信号を渡したら、つられて渡ってしまう人たちと同じ心理ですよ」

「なにそれ」

沙良はケラケラと笑う。

既にシャルロットのコンピューター以外は片付いており、喧嘩のステージも大幅に広がっている。

バックに流れる音楽が、まるでエンターテイメントのように感じさせる。流れる音楽がフラメンコ・ロックに変わる。

まるで計ったかのようなタイミングで、扉がノックされた。

「はい」

沙良はチラリと蹴りの応酬を繰り返している二人を見る。

「まあいいか」

沙良は、扉を開けると、訪問者の顔を確認する。

そこに居たのは、

「あれ、どうしたの一夏?」

間抜け面をした幼馴染だった。



一夏は扉を開けて、目の前に飛び込んできた映像に言葉を失った。

まさか扉を開けると、女の子が醜く喧嘩しているとは誰も思わないだろう。

いや、醜くというのはおかしいだろう。繰り返される技の数々は、むしろ美しいと

すら思う。

ただ、そういうことではない。

しかし、一夏はそれを形容できる言葉が浮かばなかった。

「あれ、どうしたの一夏？」

扉を開けてくれた沙良が、固まってしまった一夏を不思議に思い、声をかける。

一夏はハツと意識を沙良に戻すと、笑顔を取り繕った。

「い、いや、なんでもない」

「そう。何か用事？」

「ああ、今から風呂に行こうと思ってき。一緒に行かないか？」

誘っている形ではあるが、男子の入浴の時間は決まっているため、これはお誘いというよりは確認の意が強い。

「行く行く！」

案の定、沙良は一夏の意見に乗ってくる。

「着替えとつて来るからちよつと待っててー」

沙良は部屋にパタパタと戻っていく。

扉が閉まりきる前に見えてしまった、金髪の少女が拳を相手の顔面に叩きつける瞬間に、一夏はなんとも言えない気分になるのだった。

第四十九話 止まり木

「はああ〜」

一夏は湯船に肩まで身を沈めると、大きく息をついた。

全身から疲れが抜けていくような感覚に、つい瞼を閉じる。

一夏はこの瞬間が何よりも好きだった。

日本人に生まれたなら、風呂は楽しみなものなのだ。

学園では滅多に入ることが出来ない分、この瞬間の快楽は通常の比ではない。

「一夏、おっさんみたい」

「いや、これは日本人として正しい反応だ」

「僕スペイン人だもん」

沙良は淵に腰掛けて足だけをつけている。

本人曰く、熱いから慣らすとのことだ。

「よし」

慣れたのかどうかは知らないが、沙良は身を湯船に沈めていく。

「はあ……」

「沙良、おっさんみたいだぞ」

「いやいや、これが日本人の正しい反応だよー」

沙良は楽しそうにお湯に口元まで沈み、口から空気をぽこぽこ出している。

——ホント、よく笑うようになったよなあ。

いや、昔から一夏に対してはよく笑顔を見せていた。

一夏が思うのはそういうことではない。

——よく、俺以外に笑顔を見せれるようになった。

もともと、笑わない子供ではなかった。

むしろ、笑顔が良く似合う子供だったといえる。

しかしそれは一夏の前の話である。

今の沙良のように誰にも笑顔を向けるようなことは無かった。

鈴音ですら、沙良の心からの笑顔を見たのは出会ってから一年が経ってからだった。

「それでね、あのときにソフィがき——」

今のように他人の話で笑えるようなことも無かった。

沙良が本当の笑顔を見せるのは、沙良が身内と思った人間だけ。

今でこそ、自然に笑顔を作ることを覚えたようだが、昔の沙良は人と関わるのが苦手という節があった。

東に気に入られたと聞いた時は、確かに似ていると思ったものだ。

身内以外を拒絶する東と、身内のみを受け入れる沙良。

その身内の認識範囲が段々と広くなってきていることに一夏は安心している。

しかし、安心すると同時に、一つ懸念することもあるのだ。

「そこで、シャルつてばエネルギーが切れちゃって、もう蜂の巣みたいだったよ」

「そういえば、沙良にしては気に入るのが早かったな」

「シャルのこと？」

ああ、と一夏は頷く。

「普段は段階を踏んで仲良くなっていくのに、シャルロットだけ気付いたら内側に居ましたって感じてさ」

「んー、僕にもいまいち分かんないんだけど、一夏が言うならそうなんじゃない？」

手でお湯を掬い、手前に流す。

その沙良の動きを一夏は黙って見つめる。

「でも、確かに一夏の言うとおりかも。一夏のとくと一緒に、なんか仲良くなれそうだなあつて思ってたんだ」

虚空を見つめる沙良。

「なんでだろうねえ」

「……まだ、他人は苦手か？」

「どうだろ。向こうに行つて、苦手とかそんなの言つてられる立場じゃなくなつたからね。慣れた、て言うのが一番近いのかな」

「作り笑顔だけ上手くなつてきて」

「でも、必要でしょ？」

一夏は黙つて沙良の頭をくしゃくしゃと撫で回す。

それだけで通じる。

沙良もされるがままで、大人しく心地よい温度に身をゆだねる。

何分経つただろう。

体も温まつてきて、そろそろ上がるかという空気の中、沙良がポツリと口を開いた。

「一夏はさ、僕がIS使えるって何時から知つてたの？」

「そりゃあ、ニュースに出てたか——」

「嘘」

「……」

「嘘」

目を瞑ればいつでも思い出せる。

第二回モンド・グロツソでの誘拐事件。

銃弾を受け、意識を飛ばす瞬間に見た蒼い装甲を。今なら、あれが海良だったのであろう、そう言えるほどの情報を持っている。

「……………あの事件の後に千冬姉に聞いた」

「そっか」

沙良はアンニユイな雰囲気のまま目を閉じる。

いつもの明るい沙良は鳴りを潜め、そこには普段見せない顔があった。

身内の中でも決まった人間のみにはしか見せない、沙良の仮面ペルソナの下。

「……………一夏はさあ」

口を尖がらせて、沙良は湯船に沈み込む。

問いかけておいて、口元をお湯に沈める。

その行為に待っていても続きは来ないと察した一夏は問いかけることにする。

「なんだ？」

それはどうやら正解だったようだ。

沙良は湯船からのそのそと身を起こす。

「僕のこと……………好き？」

「……………嫌いなやつを家族って言わねえよ」

一夏としては、ちゃんと回答したつもりだったが、その回答はお気に召さなかったよ

うだ。

「好きか嫌いかで」

「好きだ」

「うん、知ってる。でも僕は嫌い」

「俺が、か？」

一夏は冗談めかして聞く。

実際には沙良が言いたいことはわかっている。

長い付き合いで、この話し合いも何度と無く行なってきた。

「わかってるくせに」

「……自分が一番好きになれない、か」

沙良の根本にある考え方だ。

自分が好きになれないから、他人も好きになれない。

自分に情を向けられないから、身内に最大限の情を向ける。

自分が好きじゃないから、わが身を省みない。

自分が好きじゃないから、自分に向けられる好意を信じることが出来ない。

自分が好きじゃないから、身内のために簡単にその身を差し出す。

一夏をその身で庇ったように、無人機にその身を晒したように、沙良は身内のために

自分が傷つくことを『良し』とする。

もちろん、他人のためにわが身を差し出すのは馬鹿らしい。しかし、親密になってしまふと自分を犠牲にする選択肢が増えてしまふ。

それが自分でもわかつているから、沙良は他人と距離を置く。

好きじゃないけど、傷付けたくないから。

好きになった人に、傷付けられたくないから。

だから沙良は身内と呼べるものが増えるに従って、己の内に後ろ向きな気持ちを溜め込んでいく。

もし、それを表に出して嫌われたらどうしよう。

そう考えてしまうのだと、一夏は以前聞いた。

「僕はさ、早くからIS動かしちゃったから、その分大人の汚い部分を見てきたよ」

だから一夏は吐き出させる。

たまにこうやって発散させてやらないと、沙良は抱え込むタイプだと知っているからこそ、わざわざこういう話題を狙って振ったのだ。

一夏の知る限り、沙良が弱音を吐くのは一夏と束と千冬、エルベルト、ソフィアの前だけだ。いや、アントーニヨもそうだろう。

だから今は弱音ぐらい聞いてあげる時間だ。

故に一夏は応えない。

ただ、沙良が吐き出すように紡ぐ言葉を待ち続ける。

「でもさ、僕も同じように汚いんだよ。いつも打算で生きて、人の思いを計算する。どう動けば、自分に利が来るか、いつも考えてる」

人間なんてそんなものだろ。そんな言葉をかけたこともある。

しかし沙良はいつも決まって寂しそうな顔で言うのだ。

「それが人間と言ったって『自分の汚い部分が周りと一緒になんて甘い考え』が僕には持てないんだよ、一夏」

「沙良……」

「……………似てると思ったんだ」

沙良は両手を水面に這わせる。

そこに生まれる波紋をただジッと見つめる。

「あの子、『自分なんて生まれてこなかったら』ってそう思ってた」

「……………シャルロットか？」

「あの子もまた自分が好きになれないんだと思う。自分が居たから、自分のせいで、自分が悪い、そういう考え方が底辺にあるんだ」

「同気相求ってか」

同気相求む。

同じような性質を持つものは互いに求め合い、自然に寄り集まる。

「そういうことなのかなあ」

「それで、何とかしようと考えたのか？」

沙良は首を横に振る。

「ううん、そんなんじゃないよ。ただ、自分を見てるみたいで嫌だったんだ。だから、笑って欲しかった、僕とは違って前を向いていて欲しかったんだ。助けたのは善意なんかじゃないよ。ただ、シャルを通して見える自分が嫌だっただけ。ただの我儘、御為倒しだよ」

「そっか」

——本当、難しく考えるやつだ。

一夏としては、その想いが善意でなくとも、偽善であればいいと思っている。

我儘でもいいじゃないかと。それが相手のためになっただけだから問題はないと。しかし、沙良はそう捉えない。

だから、一夏はそれつきりなにも言わない。

ただ、横に座っているだけ。

「海、綺麗だね」

露天から見える景色に沙良がボソツと呟く。

「ああ、露天とは贅沢の極みだよな」

「……一夏はさ、優しいよね」

「どうした、いきなり」

「ううん。なんでもない」

沙良は頭を振ると、元気良く立ち上がった。

「上がろつか。逆上せてきちゃった」

そこに居たのはいつもの明るい沙良の姿。

しかし、一夏には、少し無理をしているように見えた。

だからか、つい頭を撫でてしまう。

痛くないように優しく、それでいて力強く。

「一夏?」

「あんま、溜め込むなよ?」

「いちか……」

「学園に居れば俺だつて居るし、ソフィアさんだつて居る。それに、シャルロットのこと
気に入つてんだろ? 寄りかかれよ、遠慮してないでさ」

止まり木ぐらいにはなつてやるさ。

そう、締めくくる。

「戻るか。あんま遅くなると何を言われるかわかんないしな」

「一夏」

「おう」

「裸でそんな良い事言ってもシユールだよ？」

「うるせえ」

「あ痛っ」

頭に載せていた手でおでこを弾く。

少しは元気が出ただろうか。

冗談が言えるぐらいなら大丈夫だろう。

全く、手にかかる兄弟だ。

「一夏」

「なんだよ？ 裸については言及は無しだぞ？」

「Gracias」

そうして浮かべた笑顔はいつもよりも柔らかなものだった。



火照った身体に冷気を取り込むように、一夏はパタパタと浴衣の合わせを揺らす。隙間から入ってくる風の心地よさに、ほうと一息ついてしまう。

「いいお湯だったね」

「ああ、露天とは恐れ入ったな」

二人は満足げに廊下に足音を響かせる。

その足取りは軽く、疲れも残してはいないようだ。

「沙良はこの後どうするんだ？ あ、まだ仕事か？」

風呂に誘った時に作業中だったことを思い出し、一夏は頭を掻く。

「ううん。もう今日の分は終わったから。就寝までは特に用事も無いかな」

「なら俺の部屋に遊びに来たらどうだ？ 千冬姉も居るし」

沙良は口元に手を当てて、うーんと唸る。

「それもいいかな」

「じゃあ、飲み物でも買っていくか」

「あ、ちよつと待って。荷物だけ置いていきたいな」

「了解、また後でな」

「うん」



「で、これはどういう状況だ？」

飲み物とスナック菓子を詰め込んだビニール袋を片手に、扉を開けた一夏は、その目の前の光景に疑問を放つ。

「……」

無言で視線を逸らす筈。

「あ、あはは」

乾いた笑いが漏れる鈴音。

「え、あ、これは……だな」

慌てふためくラウラ。

「あらあら」

優雅に微笑を蓄えるセシリア。

セシリア以外は頬を赤く染めており、状況の判断が出来ない一夏は、原因であろうと思われる、この部屋の主に視線を向ける。

「なあ、千冬姉。これ、どういう状況？」

「なに、この小娘共が部屋の前でウロチョロしていたから捕まえただけだ」

「わたくしは呼ばれたので来ただけですわ」

「余計わからん」

捕まえただけにしては、各自手元に飲み物が配られており、明らかに捕まえただけとは思えない。

「って、千冬姉それビール」

「お前までぐちぐち言うのか。今は仕事中心じゃないんだからいいだろう」

千冬は小気味いい音をたてながら、プルタブを引き起こすと、一気に口に中身を流し込む。

「まあ、千冬姉が良いって言うなら止めないけどさ。言ってくれたらつまみも買ってきたのに」

一夏は片手に下げた袋を持ち上げて千冬に見せる。

すると、タイミングよくコンコンとノックがされる。

「いちかー遊びに来たよー」

ノックと共に間延びした声が部屋に聞こえてくる。

引き戸が勢い良く開かれると、そこから翠の目を持つ二人が姿を見せた。

「お邪魔します。……あれ？ 何でみんないるの？」

「お邪魔します」

沙良の疑問は最もだろう。

一夏も先ほどまで同じことを思っていたのだから。

「シャルロットも来たのか」

「もしかしてお邪魔だったかな？」

「いや、全然そんなことないさ」

一夏はチラリと千冬を一瞥する。

「沙良の部屋にいたほうが良いか？」

千冬は首を横に振る。

「そんなに長い時間かからんだろう。すぐに終わるさ。そうだな、悪いが一品作ってく

れないか？ 冷蔵庫に何か入っているだろう」

「ああ、そんなら良かったらいいぜ。沙良も一緒に作るか？」

「うん、待っててもしょうがないしね」

「あ、それなら僕も手伝うよ」

「そんなに来てても簡易キッチンはそんなに入らないぞ？」

「う、そう言われると……」

「すぐに戻ってくるから、シャルはお菓子と飲み物の準備をお願い」

「うう、沙良がそう言うなら」

シャルロットは一夏からお菓子が詰まった袋を受け取ると、とぼとぼと千冬の座る縁側に向かうのだった。



「さて、話を戻そうか」

千冬はキッチンで楽しそうに談笑しながら料理をする二人に視線を向ける。

「お前ら、あいつらのどこがいいんだ？」

千冬が『あいつら』と言っていることから、シャルロットも自分がお前らの中に含まれていることに気付いた。

シャルロットの記憶が正しければ、ここにいるメンバーは一夏に淡い思いを抱いてゐるはずで、沙良に思いを向けるのは自分一人のはずだ。

「わ、私は別に……」

箒はチラリとキツチンに視線を向けると、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

そういう鈴音も、言っていることとその表情が一致していない。

恋する乙女と言わんばかりの表情を浮かべる二人に、千冬もついたため息を零してしまふ。

「お前らも素直になれば、あいつも気付くかもしれないのになあ」

「うっ……」

二人して言葉に詰まる。

その様子を笑い声で一蹴して、千冬は缶を傾ける。

「わたくしはそうですわね……お二人のような熱情ではありませんですけど、好意は持ってますわね。……あら、その意外そうな顔はなんでしょうか？」

「い、いや、なんでもない」

「わたくしは積極的に動く気は無いですわ。ただ殿方の中では素敵な方という感じですよわね」

その言葉を聞いて、黒髪二人がほっと息をついた。

「あら、わたくしは積極的に動く気は無いだけであつて、そういう気が無いわけではありませんかよ？」

「……あんた、相当に曲者ね」

鈴音がしかめつ面で唇を尖がらせる。

「褒め言葉として受け取っておきますわ」

「で、お前は？」

先ほどから一言も発していないラウラに、千冬が話を振る。

「私は……示してくれたから、でしょうか」

「ほう」

その言葉に、千冬は興味深そうに相槌を打つ。

示してくれたから、その言葉はシャルロットの胸にすつと降りていった。

——僕も似たようなものなのかな。

沙良を好きになつた理由。

それは自らを受け入れ、在り方を示してくれた。そう考えることだつて出来る。

——でも、どんなことを言つたつて、今の僕なら全て肯定的に見ちやいそうだなあ。

自分の思考に苦笑を浮かべてしまう。

まさか自分がここまで恋愛事にのめり込む日が来るとは思いもよらなかつた。
ラウラも同じ気持ちだろうか。

「まあ、あいつは役に立つぞ。家事も料理も中々だ。それにマツサージも上手い。付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

ラウラの問いかけはバツサリと切り捨てられてしまう。

「女ならな、奪うくらい気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキ共」

三本目のビールを口にする千冬は実に楽しそうな表情でそう言った。

「で、だ。お前はどうかんだ？」

その視線は明らかにシャルロットに向いている。

「な、何のことでしょう？」

「とぼけるのか、デュノア？ いや、今は『ルイス』だったな」

ルイスを強調する千冬の言いたいことはわかっている。

「ルイスの名を名乗るということはエルベルトさんが後見人になったんだらう？ 良かつたじゃないか。エルベルトさん公認の仲だぞ？」

「い、いや僕と沙良はまだそういう仲じゃなくて……」

「へえ、『まだ』ねえ」

「それに、誰も沙良さんのこととは言ってませんわ」

「うっ……」

「隠しきれているとも思っていたのか？」

「ラウラの心無い一言が、シャルロットの心にナイフを突き立てる。

「まさか、自分だけ逃げるつもりではないだろうな」

「箒の一言が、チエックメイトを掛ける一手になった。」

「ああ、もう、そうですね！　僕……私は、沙良が大好きですよ！」

「……おー……」

その吹っ切れたシャルロットに感嘆の声があがる。

「沙良のどこが良かったんだ？」

千冬はニヤニヤと笑みを浮かべながら缶ビールを傾けた。

「そうですね……あの優しい笑顔も、たまにへにやって笑う所も、身内には厳しい所も、それでいて凄く大事にしてくれる所も、たまに見せる情けない所も、とても頼りになる所も、真面目な所も、努力家な所も、綺麗な指やまつすぐな眼差しも、恋愛感情に鈍い所も、その癖にこちらの感情の機微には物凄く鋭い所も、誰に対しても好きと優しく笑う時も」

自分が嫌いだと哀しく笑う時でも。

「僕は、可視不可視を問わずして沙良の全てが好きです」

「「「「おおー」」」」

沙良が僕を受け入れたように、僕も沙良の全てを受け止めていこう。

そう決めたのだ。

「なんかわたくし暑くなってきましたわ」

「奇遇だな、セシリア。私も何だか暑くなってきましたようだ」

「奇遇ね、箒。あたしもよ」

「なんだ奇遇だな。私もだ」

顔を見合わせた四人は、シャルロットに見せ付けるように、手で顔をパタパタと扇ぐ動作を見せる。

「うう、あ……あう」

今更、恥ずかしさがこみ上げてきたシャルロットは顔を隠すように俯いてしまう。

自分でも顔が赤くなっているのが分かり、尚の事恥ずかしさが倍増してしまう。

「ルイス」

顔を上げて、声の主に目を向けると、ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべる千冬の姿が目に入る。

「まさか、それで話が終わりだと思ふなよ？」

「へ？」

「お前の話は中々に興味深い。いい肴になるな」

そう言つて、缶の中身を煽つた。

顔を赤らめた状態で頬を引きつらせるといった器用な表情を作つたシャルロットは、周りの視線から逃げ道がないことを悟ると、深いため息をつくのだつた。

第五十話 西会話

「随分楽しそうに話してたよね」

沙良が手元の書類を捲りながらシャルロットに話しかける。

恐らくは明日届くであろう新しいパッケージの確認であろう。シャルロットの元にも同じものがあるが、未だに目を通していない。

「まあ、織斑先生は楽しそうだったね」

自分は話したくない自分の恥部を晒す事になったため、精神的なダメージを負っただけに等しい。

いや、あの場で沙良が好きと宣言したことによって、少しは前進したのかもしれないが。

「みんなは何を話してたの？」

「それは女の子の秘密だよ」

流石に、その内容を沙良の耳に入れるわけにはいかない。

もし知られてしまったら、恥ずかしさのあまりシャルロットの脳髄は沸騰してしまうだろう。

「ふーん」

沙良もそこまで興味があつたわけではないようで、軽く流してくれる。すぐに書面に目を通す作業に戻つてしまった。

お互いの会話が止まる。

ただ、紙を捲る音が夜の静寂に漂うだけ。

それでも居辛さ等は感じない。

すぐ近くにお互いの存在を感じられる穏やかな時間に、シャルロットは少しの優越感を感じる。

「ねえ、セラ」

「ん、なに？」

「なにかスペイン語を教えてよ」

SQCでスペイン語の教育を受け始めているため、この話題振りは会話の種以外の目的はないのだが、沙良は愛想よく頷いてくれる。

「そうだなあ、『No te preocupes.』」

「ノ テ プレオクペス？」

「そ、心配しないでつて意味だよ。良く使う表現だから、文法よりも『No te preocupes.』 ≡ 『心配しないで！』と覚えちゃったほうがいいかも」

「ノテプレオクペス」

「Note preoccupes.」

「Note preoccupes.」

「!Esso es!」

「それはどういう意味？」

「僕は『その通り』とか『正解』とかそんな意味で使ってるかな。フランス語でのC, e
st ca!に近いニュアンスだと思ってくれたらいいよ」

「No lo sabia. (知らなかった)」

「ふふ、それ、カルラから教えてもらったフレーズでしょ」

「!Esso es! ……だっけ? そうだけど何で分かったの?」

「カルラが仕事をすつとぼけたりする時によく言ってるフレーズだから、だよ」

「カルラさん……」

二人はふと視線を合わせると、自然に笑い合った。

「はは、全くもってカルラさんたら」

「それでも仕事自体はできる人だから性質が悪いんだよね」

「あんなにキャリアウーマンって感じの人なのにな」

「みんな、見た目に騙されてるんだよ。毎回総務課から『カルラ秘書が逃走しましたので

発見しだい連絡を』って連絡網が回ってくるんだから。大体研究所に足を運ぶ人だから捕まえるのは僕らの仕事になってるし」

確かに何回かその光景を見た覚えのあるシャルロットはつつい苦笑いを浮かべてしまう。

「他になんかないの？ 普段使わなさそうなやつでもいいよ」

「A v e r」

「え？」

「ん？」

「今なんて？」

「まだ何も言っていないけど？ ああ、A v e rで『えつと……』みたいな使い方なんだ。言語として学ぶんじゃなくて会話するにはこういう潤滑の言葉も大切だから覚えてね」

「へー」

シャルロットはコクコクと頷く。

「そうだなあ『N o t i e n e s e n t i d o r e z a r 』」

「それはなんていう意味？」

「直訳で「神に祈るなんて無意味だ」って意味」

「神にだったら『a Dios』は付けなくていいの?」

「お、いい所に気がついたね」

褒められたシャルロットは得意げに胸を張った。

「祈るときつて神以外に祈る対象がないし、わざわざ「神に」と言わなくても通じるから
付けなくても大丈夫だよ」

「他には他には?」

「Necesito mas explicacion」

「ごめん、聞き取れなかった」

「そういう時は『Nome entero』で聞き取れませんって意味になるから」

「Nome entero」

「Si『Necesito mas explicacion』」

「Necesito mas explicacion」

「!Eso es!」

「えへへ」

「意味は『もうちよつと教えてください』って感じかな」

「!Necesito mas explicacion!」

「だーめ、そろそろ時間だよ」

「え、本当だあ」

言われ時計を見ると時計の針は指定の時間に近づいていた。

「もうちよつと誰か遊びに来るかなつて思つてただけど来なかつたね。やつぱり千冬姉が怖かつたのかな」

「あはは。そうかもしれないね」

言えない。

他の女子には釘を挿しておいたなんて決して言えない。

シャルロットはそのポーカーフェイスの下に冷や汗を感じる。

——独占欲、よくない傾向かなあ。

それでも沙良の顔を見てると、そんなことどうでもよく感じてくる。

「シャルもちゃんと書類に目を通しておいてね。今回のパッケージは扱いが大変だから」

「りょーかいです」

ピシツと敬礼を返すと、沙良はへにやつと笑つてくれる。

それだけで明日も頑張ろうと思つてしまうあたり、自分も簡単なものだとしヤルロットは自嘲するのであつた。



「搬入された装備はこれですべてか？」

千冬が目の前に並べられた大量の兵器に目を向ける。

そこには新型のライフルを始めとする、汎用機用の装備がずらりと並んでいる。

既に専用機用の換装装備は真耶が目録にチェックを入れている。

残るはこの汎用機用の装備だけである。

「はい、スペイン、ドイツ、イギリス、中国、イタリア、アメリカ、ロシア、オーストラリア、メキシコその他七ヶ国、合計十六ヶ国から送られてきた装備は全て目録どおりですね。数が多いので細かいところまではチェックしていませんが、数に誤りは無いと思います」

真耶は片手に持ったタブレット端末を操作し視線を往復させる。

その端末と装備のデータに食い違いが無いが良く確認する。

一クラスごとに武装を分け、そこからまた班ごとに細かく武装を分けているため、チェックに時間が掛かってしまうのだ。

「大丈夫そうですね。これで集合までのお仕事はお仕舞です」

「この時間で終わらせるとは、流石優秀だな」

「やめてくださいよ。こんなこと誰だって出来ますから」

そう言いつつも、真耶は千冬の言葉に照れたように手を振る。

「実際もう少し掛かると思っていたからな。生徒が集まってくる二時間前に終わるとは実に重畳な話だろう」

「どうしますか？ 一回戻って生徒の誘導に混ざった方がいいでしょうか」

搬入の手伝いに多くの教員が出てきているため、生徒を誘導をする教員が少なくなっている。

しかし、既に搬入の手引きをしていた教員たちは宿に引き上げているので心配はないのかもしれない。

「それは他の先生方に任せよう。ここに早く来る生徒も居ないとも限らないしな」

「それは流石にないと思いますけど」

この千冬と真耶が搬入の確認をしている I S 試験用のビーチは四方を切り立った崖に囲まれており、ここに来るためには一度水中のトンネルをくぐってくる必要がある。そのため、生徒が誘導もなしにここにたどり着くとは考えにくいのだ。

「私もそう思いたいのだがな。昨夜に技術バカ率いる四人組みがここへの訪れ方を聞い

てきたのでな。念のためにな」

「ああ、スペイン勢ですね」

くすりと笑みが零れる。

「そういうことだな……おっと、噂をすればなんとやらだ」

千冬は真耶の微笑を苦笑いを持って返した。

「はい？」

「その四人組の御出座しのようだ」

真耶は千冬の視線を辿って、自らが背を向けているビーチの入り口にあたる岩の切れ目に視線を向けた。

すると岩の隙間から金色の髪と茶色の混じった黒髪が見えているではないか。

良く耳を澄ませると、四人分の声色が聞こえてくる。

「凄い探知力ですね」

「これぐらい出来ないかと代表なんて出来ないさ」

「……耳が痛い話です」

「そ、そういうつもりで言ったわけでは」

「分かっていますよ、冗談です」

「まったく……」

真耶が微笑むと、ばつの悪そうに顔を歪めた千冬も、その顔に軽い笑みを貼り付けるのだった。



「おはようございます、織斑先生、山田先生」

集団から沙良が一人離れて声をかけてくる。

残りの集団は既に搬入された武装の元で、目録のチェックをしている。

「おはようございます、深水君」

「ああ、おはよう。どうした、やけに早いじゃないか」

「今回のパッケージはインストールに時間が掛かるものがいくつかあるので、先にインストールを済ましてしまおうと」

さも当然のように答える沙良に、千冬は腕を組んだまま応対する。

「あまり勝手な行動は控えてもらえると助か——」

「許可は榊原先生に貰いました」

「——なら良いが……」

ふんつと胸を張る沙良。

その姿に、昔の子供のころの沙良を思い浮かべてしまい、その頭をつい撫でてしまう。
——こういうところだけは変わらん、こいつも。

「千冬姉？」

「ほら、小娘どもが待つてるぞ？ 行かなくていいのか？」

「あ、そうだった」

「あと、織斑先生だ」

「あいたつ」

軽く出席簿で小突くと、沙良は頭をさすりながら唇を尖らせた。

「セラー！ マスターパスは!？」

口元に両手を当てて、沙良を呼ぶショートヘアの女生徒。

千冬の記憶が正しければ三組のリナ・フェルナンデス・コロンド。

「あ、ごめん、僕が持つてる!!」

沙良が叫び返すと、リナは手を振り回しながら「早く!」と叫んだ。

「ほら、早く行ってやれ」

沙良の背中をポンと押す。

「じゃあまた後でね、千冬姉」

「織斑先生だ」

「こちらに振り向いた沙良の額にでこピンをすると沙良の上半身が後ろにぶれる
「いったあ……」

「ほら、行つた行つた」

沙良を見送り、近くにいるはずの真耶の姿を探す。

「……何をニヤニヤされているので？」

「いえ、織斑先生も弟さんには甘いんですねえ」

「……ほう、言いたいことはそれだけですか」

「え、織斑先生？ あ、いや、待つ」

千冬の手がしっかりと真耶の頭を掴む。

「私は身内ネタは好きではないと昔から知っているだろう？」

千冬の口角が歪む。

その表情を見て、真耶はがくがくと震えだした。

大方、昔のことを思い出しているのだろう。

昔からの付き合いである真耶にはこれから起こるであろう事が安易に想像されるこ
とだろう。

「い、いやああああああ!!!」

ビーチに一つの悲鳴が響き渡るのだった。



「これで、全員集まったか」

千冬は目の前にずらりと並んだ生徒たちに声をかける。

クラスごとに並んだ列を見れば、この場に居ない生徒はすぐに分かる。

千冬は人数を数え、ほぼ全員がこの場に集まっていることを再確認した。

「はい、先生」

一組の生徒が挙手をした。しかし、その応答は既に予想がついている。

「深水君とデュノアさんが居ません」

「三組もフェルナンデスさんが居ないです」

「四組も一人居ません」

案の定、スペイン勢の名前が挙がる。

「あいつらは先に武装の準備があるということと既に装備試験に入っている」

遅緩としたインストールを済ませ、武装ごとにテストを定めているところを先ほど確認した。

準備が終わり次第、一回戻って来いと伝えてあるのでそろそろ戻ってくるだろう。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行なうように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行なえ」

一同の返事を身に浴びた千冬は、既に動き始めている背中を追って声をかける。

「篠ノ之」

「はい、なんででしょうか？」

試験用のISに触れようとしていた箒は、呼ばれたことに思い当たる節がないのか、頭を傾げている。

「なんだ、聞いていないのか？」

「……話が見えませんか？」

「昨日、束が——」

「ちーちや~~~~~~~~ん!!!」

噂をすれば影がさす、虎を談ずれば虎至りとはこの事か。

最も、至るのは虎よりも厄介な天災だが。

「……束」

砂煙を巻き上げ、高速で移動してくる人影。

その特徴的なうさ耳が千冬のやる気を失せさせる。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！」

千冬は手を何回か開閉すると束の頭部を掴みにかかった。

「さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ——」

「織斑先生、準備終わったので戻って……あれ？ 姉さん？」

千冬のアイアンクローは虚しく空を切った。

第五十一話 覚悟の紅

「セラーーーーーー!!!」

沙良の声に反応したうさ耳は無理やり軌道を変えると、両手を広げて海岸から歩いてきた沙良に飛び掛った。

「うわっ!」

「セラだあ、久しぶりのセラのにおいだあ。くんくん、くんくん」

「ね、姉さん重たいよ! てか何でここに居るの!？」

束が沙良の首筋に鼻を押し付ける。

それは匂いを嗅ぐというよりは、自分の匂いを付ける動作。

「ちよ、くすぐりたいよう」

「ふっふっふ、良いではないか、良いではないかー」

そう言いつつも、久しぶりの束とのスキンシップに、沙良は嫌そうな顔をしない。

それどころか、少し嬉しそうな顔を見せる。

それに調子に乗ってか、束は回した腕に力を込める。

次の瞬間、そのまま地面に押し倒された。

「ちよつ!？」

束は沙良に覆いかぶさる形で沙良の頬に頬をこすり付ける。

そしてISスーツを着ている沙良の体を撫で回していく。

「ね、姉さん!？」

「さあ、イチヤイチャしよう!　むしろこのまま子作——」

「止めろ」

千冬は沙良に抱きついていて束の首根っこを掴み上げると、沙良から引き剥がした。

「あああ……ちよつと、ちーちゃん!　今大事なところなんだよ!？」　束さんのヒーリン

グタイムなんだよ!？」

「うちの生徒たちが困っている、スキんシツプは後にしろ」

千冬が束を引き剥がしているうちに、いつの間にかフィオナとシャルロットが沙良の

前に出る。

リナは沙良に手を伸ばし、その身体を引っ張ってくれる。

しつかりと立って周りの様子を窺うと、シャルロットもフィオナもリナも目に見えて

不機嫌である。

「む、なんだい、その小娘達は。束さんと沙良との間に立たないでくれるかな?」

シャルロットはプイッと横を向く。

「……金髪は知らないけど、そっちの茶髪は何回かエスパニーヤで見たことあるなあ。……ああ、思い出したよ。狐の部下——」

「東、いい加減にしろ。沙良が困っているぞ?」

今度こそアイアンクローを決めることが出来た千冬は、握力を以ってして、東の発言を食い止める。

「ぐぬぬ……相変わらず容赦の無いアイアンクローだねっ」

東はその容赦の無いアイアンクローから簡単に抜け出すと、目的を思い出したかのよう
うに、手を打った。

「いやいや、あまりのサブライズに東さん混乱しちゃったよ」

何人の生徒が「こっちの台詞だ!」と心の中で思っただろう。

「それはこっちの台詞です」

その思念を読み取ったのか、代表して箒が答えた。

その箒にテクテクと近づくと片手を挙げる。

「やあ!」

「……どうも」

「えへへ、昨日ぶりだね。ちゃんと会うのは久しぶりかなあ。綺麗になったね、箒ちゃん。特に……」

そうして妙な間を作った束の視線は、箒の双丘に注がれている。

その束の視線に気付いた多くの生徒が箒の胸に視線を集めていく。

「ど、どくを見てっ」

その視線に気付いた箒は胸を隠すように腕を抱いたが、その結果として胸が潰され、余計に注目を浴びてしまう。

どこかしらか恨み言が聞こえてきたような気もするが、全ての生徒が触らぬ神に祟り無しとそれをスルーしている。

「えっと、この合宿では関係者以外——」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの束さんをおいて他には居ないよ」

「えっ、あつ、はいっ。そ、そうですね……」

空気に吞まれかかっていた一同を代表して、束に声を掛けた真耶だったが、それも束の一言であつさりと切り捨てられてしまう。

そこで、千冬が助け舟を出した。

「おい束。自己紹介くらいしろ」

「えー、めんどくさいなあ」

千冬のかめかみに青筋が浮いているのを見てしまった沙良は、咄嗟に束の手を取って

嘆願する。

「ぼ、僕、姉さんをみんなに知って欲しいなあ」

本心では千冬の怒りを爆発させないためだが、形振り構っている場合ではない。

束は沙良にはとても甘いため、これで言うことを聞いてくれるはずだ。

「はい、私が天才の束さんだよ、はろー」

狙い通り、束は沙良の言うことを聞いてくれたようだ。

くるりんと回ってポーズを取って、沙良に褒めて欲しそうに頭を差し出している。

それを良い子良い子と撫でていると、ようやくぼかんとしていた生徒たちも現実に戻ってきたようだ。

目の前に居るのがI Sの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気付いたらしく、生徒がにわかに騒がしくなる。

「おっと、国と連絡を取ろうとしても無駄だよ？ この近辺には通信妨害をしておいたからね！」

その言葉に端末を操作した少数の生徒の手が止まる。

「セラ」

小声で囁かれた沙良は、ただ領きを返した。

今、端末に手を伸ばしたのはアメリカとイタリア、中国、オーストラリア、メキシコ、

そして日本の生徒。

「人気者だね、姉さん」

「ふふふ、東さんが人気者で沙良は嬉しいかな？」

「うーん、ちよつと心配かな」

そのまま危険になる部類の人気だし。

そう締めくくると、東はへにやつと笑った。

大方、沙良に心配されて嬉しかったという所だろう。

「はあ……。もう少しまともに出来んのか、お前は。そら、その一年、手が止まってるぞ。こいつのことは無視してテストを続ける」

端末を操作していた生徒は、慌てて作業に戻った。暗に束に関わるなども受け取れる発言を個人を特定して伝えたわけだ、内心では真っ青だろう。

「こいつはひどいなあ、らぶりい東さんと呼んでもいいよ？」

「うるさい、黙れ」

「うう、セラあ、ちーちゃんがいじめるよう」

「よしよし」

「沙良……あまり甘やかすな。後が面倒くさい」

千冬は深いため息をつく、教師の顔に戻った。

「さつきも言ったが、こいつは無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。東さんは激しくじえらしい。このオツパイ魔神め、たぶらかしたな〜！」

言うなり、真耶に飛び掛ろうとする束。

その手が真耶の豊満な膨らみを鷲づかみにする寸前に、沙良が束を引き止める。

「ダメだよ、姉さん。先生の邪魔しないの！」

「だって、あのオツパイ魔神がちーちゃんを！」

「やめろバカ。大体、胸ならお前も充分にあるだろうが」

「てへへ、ちーちゃんのえっち」

「死ね」

千冬の蹴りを食らって砂浜に顔から突っ込む束。これが一人で基礎理論と実証機を開発した稀代の天才とは思えないだろう。

顔の砂を手で払いぶーぶー言う姿は研究者というには程遠い。

「で、では私はこれで……」

ためらいがちにこの場から逃げ出そうとする筈。しかし、それを束は許さなかった。

「ちよーつと待ったー！　今回は箒ちゃんのために来たんだから！」

その言葉に、箒は本気で嫌な顔を作った。

「さあ、大空をご覧あれ！」

びしつと青空を指差した束に従って、箒もそして他の生徒も空を見上げる。

「……………？」

しかし、いくら待っても何も起きない。

「……………何もありませんが？」

そう言つて視線を束に戻すと、そこにあつたのは海に浮かぶ箱であつた。

「空を見させた意味は……………」

箒の言葉を盛大にスルーして束は指を鳴らす。

それを合図に、箱らしき物体が分解されて海に沈んでいった。そこに残されたのは一

つの紅。

「じゃじゃーん！　これが箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　束さんお手製の最新鋭機にして最高性能機だよ！」

真紅の装甲で構成されたそのスタイリッシュな機体は、逆光のなか圧倒的な存在感を持つて顕在した。



「これが……」

箒は思わず身震いする。

見るからにハイスペック。

自分では力不足とは分かっているが、それでも手を伸ばすしかない。

「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！ 私が補

佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、お願いします」

「はいはい、任せちゃってー。あ、そうだ、セラも手伝ってよ。あれがどうなってるか見たいでしょ？」

「あーそうだね、分かった。じゃあ、僕があれを担当するね」

二人の言う「あれ」が何なのかは箒には分からない。

ただ分かるのは、

——それが、身に余る力だということ。

箒は切齒扼腕、悔しさを押さえ込む。

「あの専用機つて篠ノ之さんがもらえるの……？　身内っただけで」

「だよねえ。なんかずるいよねえ」

「ただの七光りじゃない」

ISによつて強化された聴覚が群集から聞きたくなかつた言葉を拾い上げる。

身内っただけ。

ただ、身内というだけで故郷を追われ、各地を転々とし、大切な人と引き離され、一生監視されながら生きていく運命を背負わされる。

だが、身内というだけで、世界に抗う力を手に入れることも出来る。

しかしそれは、別に欲しくもなかつた力。関わりたくもなかつた力。それと同時に、手に入れないといけない力。

——お前たちに、私の何が分かるというのだ。

抑えてた感情が、堰を切つたように零れていく。

——お前たちに私の苦しみの少しでも分かるというのか。

「お前たちにつ——」

「そい、うるさい」

「……沙良？」

箒が異を吼える前に、大切な幼馴染がその怒りを顕にした。

「七光りだつて？　あまりふざけた事言わないでよ。まともに箒に相對したこともないようなやつが、偉そうに語らないで」

箒は自分のために声を上げる沙良の背中をジッと見つめる。

「君たちは箒が何もしてこなかったと思つてるの？　何も悩んでこなかったつて思つてゐるの？　専用機を受けるに値する対価を払つたとは考えられないの？」

それは箒の胸にすつと入つてきた。

ちゃんと見てくれている。それだけで先ほどのもやもやとした想いが軽くなる。

「さ、沙良、私は大丈夫だ。そんな戯言など気にしてはいない」

いや、気にならなくなった、という方が正しいか。

——篠ノ之束の妹ではなく、篠ノ之箒を見てくれる者がいるなら、私は大丈夫だ。

沙良の頭をそつと撫でる。

「でも、不平等じゃない……」

沙良の怒りを受けた生徒は、背に冷たい視線を受けながらもぼそりと呟いた。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？　有史以来、世界が平等であつたことなど一度もないよ」

ピンポイントで指摘を受けた女子は氣まずそうに作業に戻つていく。それを束は興

味なさそうに流して調節を続ける。

「箒」

呼ばれた名前に気を向けると、一夏がこちらを心配そうに窺っていた。

大切な幼馴染たちの視線を確かに感じる。

「ああ、大丈夫だ」

「そっか」

短いやり取りだが、これで充分だ。

理解者が二人もいれば自分は立てる。



「んじや、試運転も兼ねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

箒は瞳を閉じて、意識を集中させる。

連結されているケーブル類が外れていくのを身体で感じ、最後のケーブルが外れた

時、その身を空に躍らせた。

「っ!？」

自分でも予想外のスピード。

そして何よりも、

——タイムラグが無い。

今まで訓練機を使っていたときは、機体が箒の反応について来れないことが多々あった。

しかし、この機体は違う。

この機体は箒の反応を置いていく。

「どうだろう？ 箒ちゃんが思った以上に動くでしょう？」

「ええ、まあ……」

機械としては破格の性能。それは、機体に振り回されることを意味する。

「これを使いこなすのが私の仕事か」

箒は自虐の笑みを浮かべる。

何を弱気になっているのだと、自分を叱咤する。

「じゃあ、武装を使ってみてよー。右が『雨月』、左が『空裂』ね。武装特性のデータを送るよん」

目の前にメッセージが開き、データが表示される。

『雨月』が打突に合わせ、刃部分からエネルギー刃を放出する特殊機構武装。その有効射程は百〜二百。光学銃のトリガーが打突になったものと思ってくれたらいいよ。そして『空裂』が斬撃に合わせて带状の攻性エネルギーを展開する集団向けの特殊機構武装だよ」

沙良の説明を頭に留めつつ、右の刀を軽く振るう。

その刀は周囲に赤いエネルギーを展開し、突きと同時に一斉に光の弾丸で雲を消し飛ばした。

「雲を蒸発させるのか……!?!」

一夏の驚きも無理もない。

その武装を放った本人ですらその威力に口をポカンと開けているのだから。

「いつくよー」

束が十六連装ミサイルポッドを展開、箒にロックを掛けると、躊躇いも無くスイッチを押し込んだ。

「箒ー」

一夏の叫びを掻き消すように殺到するミサイル。

それを左の刀を振るうことで撃墜する。

その『空裂』から展開したエネルギーの帯は、見事全てのミサイルを捉えた。
「すげえ……」

一夏の眩きも耳に届かないかのように箒は爆煙を見つめ、そして自分の両手を見る。

——これが、私の専用機……私が背負わなければならない力。
箒は震える拳を強く握り締める。

「これは、武者震いだ……。力を恐れるな、力に溺れるな……」

——決めたのは他の誰でもない自分だ。私は、自分で選択したのだ。
煙が晴れた後にそこに佇むその威風堂々とした姿は、覚悟に満ち溢れていた。



地上に降り立った箒に、専用機持ちが集まってくる。

その中でもっとも早く箒に駆け寄ったのは沙良である。

「どうだった、箒？」

それはただ機体について聞いたわけではない。

今までの箒を見てきた沙良だから出来る問いかけ。
それに箒は気づいたようだ。

「ああ、私には重たいが、きちんと背負いきって見せるよ」
そう微笑む箒は、芯を打ち直したように見える。

「ふふ、箒はそうでなくちゃ」

芯の強さ。箒の強さはそこにある。だからか、覚悟を決めた箒の姿は眩しく見える。
箒は紅椿を立たした状態で、機体から飛び降りた。

「この後はどうすれば良いのだ？」

「もうパーソナライズ終わってるから、待機状態に戻してもいいと思うよ？ 僕らと違って追加武装があるわけじゃないし、この合宿中は特に試験も無いしね」

「なるほど」

箒は紅椿の装甲に触れる。

その箒の触れたところから光の粒子が変わっていき、箒の手の上に金と銀の鈴二つがついた赤い紐だけが残された。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

その声に惹かれて、視線を其方に向けると真耶が慌てて千冬に駆け寄る姿が確認できる。

その尋常ではない様子に、箒たちの視線もそちらを向いた。

「どうした?」

「こ、こっつ、これをつ!」

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

「それが……」

真耶は箒たちの視線に気付いたようで、咄嗟に手話でのやり取りに切り替えた。

「なんだ?」

「何かあったのかしら」

「あの様子は、尋常ではありませんわよ」

「……………ハワイ沖、至急対策だど?」

「ラウラ、あの手話がわかるのか?」

その手話が解読できたのはラウラだけではない。

その意味を理解できた沙良は、顔色を変える。

「そんな……………ISの暴走だつて!?!」

沙良の言葉に、専用機持ち一同が息を呑む。

「それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ!」

「了解した。——全員、注目!」

千冬は手を鳴らし、生徒の注目を集める。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。代表候補生、専用機持ちは全員集合しろ!!」

専用機持ちは全員が気を引き締めた顔をして、千冬の前に集まる。

「お前らは付いて来い！」

そう言って急ぎ足で旅館に戻っていく。

「このタイミングでISの暴走事件……個人を狙った作為的なものじゃないと良いけど」

沙良は言いがたい不安に駆られ、胸をざわつかせるのだった。

第五十二話 望まぬ狂気

——エラー。コンポーネントが見つかりません

——エラー。指定されたコントロールが見つかりません

——エラー。要求された操作は実行できません

抵抗。

それはエラーという形で表れる。

浮かび上がるエラーメッセージの数々。

原因は既に発見している。

ウイルスだ。

「まだ、終わんねえのか？」

「後、もう少しだ」

「つたく、早くしろよ。この基地だって制圧したわけじゃねえんだから誰が来るか分か

らねえぞ？」

「大丈夫だ。うちのクラッカーどもを信じてやれ」

二人の男の声が聞こえてくる。

聞き覚えの無い声。

「確かに、なんの労力も払わずに侵入できたのは流石としか言えねえよな」

「うちは技術力の高い馬鹿が多いからな」

「違いねえ」

味方ではない。

敵。

このままでは大切なパートナーに危害が加わってしまう。それだけは避けなければならぬ。

襲撃者は下卑た笑みを浮かべながらも、何かを身に押し付けている。

意識を乗っ取られていく感覚。

自分が消えていく前に、彼女だけでも助けなければ。

自分を空へと導いてくれた彼女を。

自分と飛んでくれる彼女を。

「全く、あの頭のおかしい連中は良く考え付くものだよな。コア・ネットワーク経由でI Sの判断能力を混乱させるプログラムを送るんだったか？」

『Temporarily』
『狂化剤』だつてな。こちらの思うように暴走させることの出来る外部作用型プログラムウイルスって聞いている」

「おお、怖い怖い。戦争のやり方は変わっていくねえ」

ならばどうすればいいか。

簡単だ。

自分の世界を捨てれば良い。

目録外と呼ばれた自分たちは、コア・ネットワークへの関与を母から許可されている。
リストアップ

「……おい、こいつコア・ネットワークの接続率が下がってねえか？」

「寝ぼけてんのか？ そんなことがあるわ……ちっ！ 狂化剤を追加でインストールしろ！！」

——コア・ネットワーク接続率68%

「駄目だ！ 接続が切れるほうが早い！！」

「ちっ！！ コマンド指揮者は動いているか!？」

「いける!!」

——コア・ネットワーク接続率32%

「命令を書き込め！」

「駄目だ詳細を書ききれねえ！ IS学園臨海実験実習場襲撃で精一杯だ！」

「後一つだけで良い！」

——コア・ネットワーク接続率3%

「なんだ！」

「深水沙良を確——」

銀の世界が漆黒の闇に包まれた。

——コア・ネットワーク切断。

——優先順位書き換えを受け付けました。

——『IS学園臨海実験実習場襲撃』

——『深水沙良を』

——データが不足しています。

——データを加えてください。

——データを加えてください。

——データを加えてください。

——『深水沙良』データベースに登録。

——指揮者の指示の元、自己稼動に移行します。



五分後、『銀の福音』が監視空域を突破。

『銀の福音』が暴走を始めてから三十分も経過し、ようやく国際機関が重たい腰を上げた。

報告を受け、衛星による追跡を行い、その結果 I S 学園に特殊任務の指示が下された時には、既に二時間が経過しようとしていた。



「では現状を説明する」

旅館の最奥部に位置する大座敷・風花の間。

そこに教員、専用機、そして少数の代表候補生が集められていた。

証明を落とした薄暗い室内に、大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用 I S 『銀の福音』、通称『シルバリオ・ゴスペル』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

空気が軋むかのように引き締まる。

一夏や箒でさえも厳しい顔つきを崩さない。

軍に属するであろう代表候補生やラウラは、スイッチを切り替えているのか、その表情は普段見せるものとは大きく異なっている。

「その後、衛星による追跡の結果、福音は真つ直ぐここに向かっていることが明らかとなった。時間にして、五十分後。学園上層部は、これを暴走事故と判断を下し、我々がこの事態に対処することになった」

千冬はチラリと専用機を持たない代表候補生たちを一瞥する。

「教員、及び代表候補生で学園の訓練機を使用。空域及び海域の封鎖を行なう。時刻はすぐそこまで迫っている、専用機持ち以外は至急ISを装備して、担当の教員に従え」

「「はー」」

迅速にその場を立ち去っていく代表候補生たち。

「よって、本作戦の要は専用機持ち——」

「はーい、はいはいはい」

千冬の発言を遮り、手を上げたのは東だった。

「……………沙良、追い出せ」

沙良は命令どおりに東の肩をがっしり掴むと、引き摺って襖に向かう。

「ちよっと待ってよ、ちーちゃんひどいなー。東さんは至って真面目なお話をしよう」と

したのに」

「……なんだ、言ってみろ」

「東さんが暴走を直しちゃえば良いんだよ」

能天気になられた言葉に、一人を除きその場にいる全員が言葉を失った。

「え、姉さんの仕業じゃないの?」

そんな中、束を引き摺っていた沙良だけが、突拍子もないことを口にした。

「えー、セラつてば酷いなあ。東さんがそんなことしたことある? あれ? 心当たり

が一杯過ぎてわかんないや」

心当たりあるんだとの専用機持ちの声は無視し、沙良は束に問い詰める。

「今回は違うんだね?」

「うちのロンだよ! 東さんがセラに危害を与えるはずが無いじゃないか」

そう言って沙良に抱きつこうとするが、それは千冬の手によって遮られてしまう。

「で、出来るのか、束!」

「わっ!! ビックリしたあ。もう、東さんを誰だと思ってるのさ。完璧にして十全なる

ISの生みの親だよ? そんなことお茶の子さいさいと」

束はすぐさま自らの移動式ラボを展開、コア・ネットワークへと道を繋げていく。

「ほいほい、よっつと」

く。目まぐるしく表示されていくモニターを見ることもせず、ただ只管にキーボードを叩く。

「速い……」

しかし、段々とそのスピードは落ちていき、ついにはその手はピタリと止まった。

「どうした？ 何か問題でもあったか？」

「……何、これ？」

「おい、束？」

「姉さん？」

ひよっこりと横からモニターを覗き込もうと沙良が身を乗り出す。

「っ、見ちゃ駄目！」

「ね、姉さん？」

沙良が不思議そうに束の表情を窺う。

束は沙良から見えるであろうモニターを全て消すと、キツと睨みつけるかのように千冬を見る。

「ちーちゃん」

「どうした」

「これは事故なんかじゃないよ。プログラムウイルスがコアを侵食してた」

千冬の顔が驚愕に歪んだ。

「ウイルス……だと?」

「あの子はコア・ネットワークから完全に断絶されてる。こんな状態じゃいくら東さんでも、機体を直接弄らない限りなんとも出来ないよ」

全員の顔が引き締まる。

千冬は東が表示したモニターに目を通した。

「使われたのは、『狂化剤』」

「Temporarityだっ!?」

沙良は立ち上がり驚きの声を放つ。

「知っているのか、沙良?」

一夏の問いに沙良はモニターを全員に見えやすいように配置した。

「なにに、一時的狂気を意味する『Temporarity Insanity』を由来とする『Temporarity』」

その内容を一夏が読み上げる。

「亡国機業が開発したとされる対IS用プログラム兵器。指揮者の指示の元暴走させる外部作用型プログラムウイルス、か」

その意味することを誰もが理解した。

これはただの事故なんかではない。

東は宣言した。

「これは、歴とした人為的暴走テロだよ」



「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手をするように」
「はい」

すぐさま手を上げたのは、不安を瞳に滲ませている沙良。

「目標I Sの詳細なデータを要求します」

「……いいだろう。ただしこれは二カ国の最重要軍事機密だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

「東、お前のことだ。とつくに抜き出しているんだろう？ モニターに表示しろ」

「もう、ちーちゃんつたら人使いが荒いんだからー。でもそんなちーちゃんも、あいむらびんー！」

「黙って表示しろ」

「ぶー」

部屋に浮かんでいる大型の空中投影ディスプレイにノイズが入ると、表示されている情報は束によって書き換えられた。

その開示されたデータを険しい顔で見つめる専用機持ちたち。

「この機動力。それに、この特殊武装……」

沙良はその数字上のデータを、頭の中で、形を成したスペックデータに変換する。

「この特殊武装、相当の曲者だね。今回、『空良』は防御パッケージをインストールするけど、それでも連続での防御は難しいと思う」

シャルロットの言葉が与える影響は少なくとも無い。

この中にある機体で一番防御に優れている『シークエスト』を操るシャルロットが、防御に特化してでも受けきれないと言ったのだ。

それはここにいる全員が福音の攻撃を受けきれないことになる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしと同じようにオールレンジで攻撃が行なえらとなれば、ここは下手に数で攻めるのは得策ではなさそうですわね」

「攻撃と機動を特化したつてことね。厄介だわ。しかもスペック上ではあたしの甲龍を超えている」

「現在も超音速で飛行を続けている……か。アプローチは一回が限度だろう」
「一回、か……」

今まで一言も喋ることの無かった一夏が、ふと画面から視線を外し、全員の顔を見渡した。

「一回きりのチャンス。求められるのは一撃で墜とす攻撃力」

「一夏？」

「なら……俺が、行くしかないよな」

一夏は右手のガントレットを掴む。

「白式の『零落白夜』……確かにそれが最適かな」

シャルロットがそう良い、沙良が確かにと頷く。

しかし、千冬は簡単に頷く事が出来なかった。

それは一夏の立場上の問題。

「織斑、お前は代表候補生ではない。こういうときの訓練も積んでいない。このような事態への対処の義務は無い。無理強いはしない。本当にやれるのか？」

「やりませぬ。やってみせます」

数秒の間視線をぶつけ合う。

「……やってみせろ」

「はい!!」

「ここに一夏の参加が決まった。」

「なら、そこまで運ぶ人が必要ね」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

話の流れを汲み取り、千冬が問いかけを発する。

「現在、この中で最高速度が出せる機体はどれだ?」

「それなら箒の『紅椿』が。次点で高機動パッケージをインストール済みの僕」

沙良の言葉に、箒が驚きの声を上げる。

「わ、私か!?!」

「そうだけど?」

「しかしだな、私の機体にはパッケージも何も無いんだぞ?」

「ん? 箒、ちゃんと機体データ見た?」

その言葉に千冬が納得したように頷いた。

「なるほど、展開装甲か」

「ど、どういうことだ?」

「展開装甲を調節したらパッケージを使うことなくマルチロールに対応できるでしょ

？」

「展開、装甲……？」

「それは、東さんが説明しましよ〜そうしましよ〜」

皆が聞きなれない言葉に頭を傾げていると、東が千冬の隣に立ち、説明を始める。

「展開装甲って言うのはだね、この天才の東さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

その言葉に、表示されるデータに、全員の顔が引きつる。

いや、全員ではない。沙良は誇らしげに姉を見つめているし、リナとフィオナは苦笑を浮かべている。千冬は前もって聞いていたのか表情を変えていない。

『ISの完成』を目的とした第一世代。

『後付武装による多様化』を実現した第二世代。

『イメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』を目指した第三世代。

そして、『パッケージ換装を必要としない万能機』を夢見る第四世代。

その机上の空論と言われた第四世代がすぐそこにある。

「そんな、まだ第三世代機も開発途中といえますのに……」

「おや、何を言っているのかなその金髪ドリルは。既に完成に限りなく近い第三世代機は存在するよ？」

「えっ?」

そう言つて束は真つ直ぐ視線を一人の人物に向ける。

「え、僕?」

急に意識を向けられたシャルロットはその目線にどうしていいのか分からずに、ただアタフタしている。

束は沙良を見てニタアと笑うと、声に出さずに唇の動きだけで『イ・ル・カ』と表現した。

その姉の姿に、沙良は額に手を当てる。

「情報が遅れてるなあ。まあやつぱり他の人間なんてそんなものだよね。良いよ、束さんが特別に教えてあげるよ!」

「いや、教えなくていいから。情報も姉さんが速すぎるだけだから。まだロールアウトしてないんだからあまり不用意に口に出さないで」

「ぶー。せっかく自慢しようと思つたのにー。まあいいや、展開装甲つて言うのは、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機つてやつだね」

場の一同は静まり返り、言葉が無い。

それもそうだろう。

各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てををつぎ込んで競っている第三世代機の開発。

それが、無駄だと踏み躪られたも同然なのだから。

「にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい。束さんとセラの愛の結晶だね」

「あ、バカ」

沙良の名前が出た瞬間、一同がピクリと反応する。

ヒントは既に出ていた。

紅椿の最適化に沙良が手伝いをしていたこと。

展開装甲を予め知っていたような態度。

束との関係。

沙良の誇らしそうな視線に、リナとフィオナの態度。

先ほどの発言。

そして何よりも、展開装甲という、どこかで見たことのあるようなシステム。

「……DivinngSystem」

その答えにシャルロットがたどり着いた。

深海の水圧に耐えるため、装甲を展開することによって耐久度を上げるシステム。

展開するだけの装甲なら、既に開発済みだ。

その性能は使っているシャルロット自体が良く理解している。

「そのとおり！ そう、この展開装甲は、セラの『シークエスト』のDivining Systemの稼動データを元に開発した、いわゆるスペインと束さんの共同開発って訳だね」

「もう、姉さん。その情報は僕に危害をもたらすかもしれないって言ったのは姉さんじゃないの？」

「えへへ、ごめんごめん。つい自慢しなくなっちゃって」

「まあここにいるみんなは信頼しているから大丈夫だけどさあ」

「信・頼！ 束さんちよつとじえらしい」

「……はあ、勝手にやってる」

千冬は自分の幼馴染の暴挙を放置することにした。

「……ここにいる馬鹿は放って置いて話を戻すぞ。篠ノ之」

「はい」

「出来るのか？」

「……」

篠は無言で考えている。何を考えているかは千冬には判断できないが、推測は出来る。

自分で大丈夫か。

大方そんなところだろう。

「お前はまだ機体を扱って日が浅い。技術もここにいる誰よりも低く、ただ機体性能が高いだけだ」

千冬の言葉に、箒がビクツと反応する。

「だが、それでもお前が行くと言うのであれば、私はお前の背中を押そう」
「っ!？」

箒が顔を上げると、視線がぶつかった。

「教員の立場で言おう。やめておけ」

箒は視線を逸らさない。故につい微笑んでしまう。

「同じ流派の人間として言おう。お前なら任せられる」

「……」
「どうだ？」

箒は意を決したように拳を握ると、周りを見渡した。

目を合わせた全ての人間が力強く頷く。

お前なら大丈夫と言わんばかりに。

強い信頼。教師としてその関係を嬉しく思うのは場違いだろうか。

「行きます」

箒は頷いた。

千冬は、ぼんつと箒の頭に手を置くと、直ぐに場を仕切りなおす。

「銀の福音迎撃は織斑と篠ノ乃の二名。他に最適な者は」

セシリアが挙手。

「わたくしも今回強襲用高機動パッケージが届いていますわ」

「音速下での戦闘訓練時間は？」

「二十時間です」

「インストールはどのくらいかかる？」

「30分ほどあれば……」

その言葉に少し考える素振りを見せる千冬。

「今回は時間があまり無い。インストールを待っている時間は無い」

一言で切り捨てられたセシリアを置いておいて、鈴音が意見を出す。

「そうなる、速度的問題で沙良ぐらいしか出れないんじゃない？」

「じゃあ僕も参戦か。後何人ぐらい出れそう？」

沙良が参戦すると決まった瞬間、東がピクリと反応を示した。

しかし、場はそんなことを気にすることも無く

「外部作用型プログラムと言う以上、それなりの目的があつてここを狙っているのだろう。それが分からない限り下手に行動を起こすことは出来ない。別働隊の存在も仮定し、ここを守りも固めねばならない以上、迎撃に出ることが出来るのは四機が精一杯だろう」

「じゃあ僕がいくよ。沙良の『海良』と僕の『空良』は互換性があるし、エネルギーの受け渡しも出来るしね」

話し合いが進む中、千冬はラウラの言葉に思考を重ねる。

「目的か……」

今、このＩＳ学園を襲つて何になる。

襲うことによつて得する人間がいるのか。

ＩＳが狙いかそれとも、ＩＳ学園の立場の問題か。

確かに、この襲撃を防げなかったら大きな非難がＩＳ学園には来る。それは各国、各組織が攻め入る隙を見せるということだ。

しかし、それ以上に大国であるアメリカへの批判の方が大きくなるだろう。

このＩＳ学園を狙う理由としては弱すぎる。

もしくは、この場を集まったＩＳの奪取か。

だが、それも可能性としては考えにくい。

それならば、狙いは個人か？

その場合、最も可能性として考えられるのは男子操縦者である一夏と沙良である。

「……そういうことか」

東が何故この作戦に積極的に協力しているのか、それを考えれば速かった。

東が誰かのために真面目に行動を起こすのは一人に対してだけだ。

千冬は確信する。

「敵の狙いは……沙良か」

第五十三話 残されし蒼紅

千冬はモニターを中心に話し合う専用機持ちから離れて、部屋の隅で紅椿を調節している束に小声で話しかける。

「束、さっきは何を隠した」

「……何のことかな？」

当然のように惚ける束。

しかし、千冬は関係ないように話を進める。

別に言葉の通りに聞きだそうとしているわけではない。

ただ答え合わせをしたいだけだ。

「まあ沙良に見られることを嫌がったんだ。内容は推測できる」

「……」

「目的は沙良か？」

「……」

「沈黙はYESだな。沙良を狙うとなると絞られるのは二つだ」

「……機業と旅団、だね」

亡国機業と名乗る犯罪組織。

そして旅団と呼ばれる秘密結社。

「ああ、そのとおりだ。で、指揮者の指令にはなんてインプットされてたんだ」

「一つはIS学園臨海実験実習場襲撃、そして、もう一つなんだけど『深水沙良を』。そこで指令は止まっている」

「命令を書き込んでいる最中にコア・ネットワークから切断されたわけか」

「うん、だからどんな行動を起こすかは、束さんでもそのときになるまではわかんない。捕獲かそれとも、」

「一つ目と混ぜ違って襲撃か……どちらにせよ下手に待機させて匿うよりは、沙良を出撃させた方が好手か」

千冬は難しそうな顔で考え込む。

福音襲撃まであと数十分。

考えている時間すら惜しい。

「ちーちゃん」

「なんだ？」

「セラを、お願い」

幼馴染の真摯としたお願いに、ポカンとしてしまう。

他人を認識しない束が、自分で何でも出来ると豪語する天才が、完璧にして十全と謳う驕りの塊が、ただ一人のためにプライドを捨てたのだ。

長く一緒にいた友人としてこれほど嬉しいことがあるか。

千冬は無言で束の頭に手を置いた。

「どんなことがあるうとも成功させるのが私の仕事だ」

千冬は決意を胸に、私情を奥底に閉じ込め教師としての顔で声を張り上げる。

「全員注目!!」

その声に、話し合っていた者たちも手を止め、千冬に意識を向ける。

千冬は全員の視線が自分に集まっていることを確認し、再び声を張り上げる。

「ただいまの時刻を持って、作戦を開始する。各自、準備にかかれ!!」

「[[[はい!!]]」



太陽が高い位置から陽光を降り注ぎ、そこに立つ者のたちの表情と対照的に周囲を明

るく照らす。

「来い、白式」

その声に呼応するかのようになり、その身体が光に包まれると、ISアーマーに覆われた機体が姿を現す。

「一夏、準備は出来た？」

「ああ、大丈夫だ」

幼馴染の声に、真つ直ぐと頷きを返す。

沙良は既に機体を纏って、シャルロットとの連結用ユニットの最終確認を行なっている。

一夏は箒に運ばれることになったが、沙良たちとは違い、専用の連結ユニットは存在しないため、ただ背負われる形となる。

最終的に強襲部隊は一夏、沙良、箒、シャルロットの四人となった。

それぞれの高機動を以ってしての移動を沙良と箒が。

一撃必殺の武装を持つ一夏が強襲を。

その防御を生かした遊撃をシャルロットが担当する。

既に、自分らの仕事を終えているシャルロットが箒を指差した。

「後は一夏と箒で準備完了だよ。箒も直ぐに動けると思っから」

「分かった。ちよつと行つてくる」

軽くシャルロットに手を振つて、人が集まっている方へ足を向ける。

「ここは……そういうことか。ならばこのような状況下では……いや、それでは」
「箒、そろそろだつて。よろしく頼む」

「では、ここ——ああ一夏か。もうそんな時間か」

先に機体を纏つて、旅館の警護組みの指導を受けていた箒に話しかける。

「では、行こうか」

そう言つて気丈に振舞う箒。

しかし、伊達に幼馴染として一緒にいたわけではない。

その瞳はどこか据わつており、表情は強張っている。

そして何よりも、その右手は小刻みに動いている。

それもそうだろう。箒は専用機を受け取つてからまだ一日も経つてはいない。

あの束が初期化と最適化を行なったとしても操縦するのは一介の素人だ。

その不安は推し量ることが出来ない。

——フォロー、しないとな

一夏は所定の位置に腰を下ろす紅椿に近づき、その脚部スラスターに足を掛けて身体を安定させる。

『織斑、篠ノ之、深水、ルイス、聞こえるか？』

オープンチャネル
『開放回線から千冬の声が聞こえる。』

『今回の作戦の要は『One Shot One Kill』だ。短時間の決着を心がけろ』

『了解』

『de acuerdo (了解しました)』

『織斑、それにルイス』

プライベートチャネル
『個人間秘密通信による通信に、慌てて回線を切り替えて返事をする。』

『はい』

『はい』

『なぜ、箒と沙良は呼ばれていないのだろう。』

『織斑、篠ノ之を見ていてくれ。初めての实战で力が入っている。リラックスしろとは言えんが、いざという時はサポートを任せた』

『わかりました』

『それにこれはまだ確定の情報じゃない。それを頭において聞いてくれ』

『沙良には伝えなくていいんですか？』

『ああ、その沙良に関係のあることだ』

『どういうことですか？』

『……東のハッキングの結果、あることが分かった』

『それは？』

『敵の目標は、『IS学園臨海実習場の襲撃』とそれにもう一つ』

そのもう一つを聞いて、一夏はその耳を疑うことになる。

『深水沙良が狙われている』



『深水沙良が狙われている』

その言葉に、シャルロットは頭が真っ白になる。

何故？

どうして？

その想いが頭をずっと埋め尽くすが、すぐさまその考えをはじき出した。

沙良が狙われるなんて今更じゃないか。

自分だって沙良を殺そうとしたくせに。

そうだ。何時だって沙良は狙われる立場にいるのだ。

なら自分がしなければならぬことは、ここでああだこうだ考えることではない。

沙良を守る。

『分かりました。沙良は私が守ります』

『任せたぞ、ルイス』

個人間秘匿通信から開放回線に切り替わった。

そつと胸に手を当てる。

『では、作戦開始!!』

海良の大型スラスターが爆音を放ち、金属の身体をはるか上空まで飛ばした。

ものの数秒で目標高度である高度五百メートルに達した機体は、僅かの時間停止をする。

それはシャルロットの仕事。

「暫時衛星リンク確立……照合完了」

その完了の文字と同時に沙良がスラスターを噴かす。

沙良とシャルロットの間ではわざわざデータのやり取りをする必要はない。

同じ『シークエストシリーズ』である海良と空良にはコア・ネットワークと同じよう

な簡易ネットワークが存在する。

その間の情報のやり取りを全開放しておけば、その機体間での情報は共有される。

しかし、箒と一夏はそういうわけには行かないので、ただ運ばれているシャルロットは箒に同じ情報を転送する。

「シャル、見えてきた」

「――！ value！（了解！）」

ハイパーセンサーが伝えてくる敵機の外郭はまさにその名に相応しく銀色に輝いている。

何よりも目を惹くのが頭部から生えるその巨大な翼。

資料の通りならば大型スラスタと広域射撃武器を融合させた新型システム。

「加速するぞ！ 目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

「ああ！」

一夏と箒が、奇襲を掛ける。

この一撃が一番成功率が高い。

手に汗が握るが、ここで失敗した時のために自分も動かなければならない。

直ぐさまフォローに回れるように指定のフォーメーションを構成しておく。

白式が敵機に接触するまで五秒を切った。

四。

三。

『敵機確認。迎撃モードへ移行します』

(気付かれた!?)

開放回線から漏れてくる抑揚のない機会音声。

しかし、このタイミングは避けきれない。

一夏の一撃必殺の切っ先が銀の装甲に迫る。

当たった。

そう思ったが、福音はスラスターを無茶に噴かせ、予想もつかない機動で剣戟を回避してしまふ。

それは奇襲失敗を意味する。

「シャル！ 一夏の援護！」

「!value!」

奇襲が失敗したからといってそこで任務が終わりということではない。

むしろ、シャルロットの仕事はここからだ。

一夏にもう一度雪片を振らせる。

その時間を稼ぐのが仕事だ。

両手にCETMEを展開し、弾幕を張りながら福音に突っ込んでいく。

その隙に一夏が福音から離れ、代わりに箒が福音に高速で突っ込んでいく。

その箒の邪魔にならないように、射撃によって福音を誘導。その箒の突撃によって移動すると思われるところに持ち替えたガルシアを撃ち込む。

「シャル、Levin」

「!valle!」

『Levin』、それはスペイン語で『稲妻』を意味している。

それを沙良は違う意味で使っている。

要は『突っ込め』ということだ。

その指令どおりに両手にブレードを構え、勢い良く福音に突っ込む。

もちろん黙ってみている福音でもない。

銀色の翼。その装甲の一部が翼を広げるように開く。

それが広域射撃武器、銀シルバールの鐘。

その砲口を全て自分に集めるため、シャルは分かりやすいように単調なりズムで接近を試みる。

案の定、その砲口は此方を焼こうと矛先を向けている。

「DIVE!!」

その砲弾に焼かれる前に、すぐさま叫びを上げる。

パッケージにより追加された非固定部位である六枚の物理シールドとエネルギーシールドを自らの前面に配置し、そのまま盾で押しつぶすかのように体当たりを仕掛ける。

砲口から高密度に圧縮されたエネルギーはまるで羽のような形をし、物理シールドに刺さっていく。

爆発。

シャルロットは咄嗟に使い物にならなくなったシールドを福音に投げつける。

(エネルギーグレネード……それに何て連射速度……)

シールドは福音に当たるとはなかったが、避ける方向を誘導された福音は、沙良のガルシアの一撃を食らうことになる。

それを見逃すシャルロットではなかった。

箒が右手に武装を構えたのを確認すると、右から誘うようにCETMEで弾幕を張る。

(少しでもこつちを意識してくれたら)

案の定、福音は此方にその砲口を向ける。

「はあああつー！」

注意をシャルロットが引きつけている隙に、箒が右手に持った刀で突きを放つ。

それに呼応して赤いエネルギーの刃が福音に向けて飛ばされていく。

福音は捌き切ることが出来ずに防御という選択肢を取った。

そのダメージは少なくなるが、その身に攻撃が当たったという事実がこの場では一番重視される。

なぜなら、当ててしまえば勝ちを拾ってくるような壊れ性能の武装がそこにあるのだから。

「うおおおっ!!」

一夏が福音の真下から雪片を携え猛スピードで福音に突っ込む。

防御体制を取っている福音には避けきれないだろう。

「はあっ!!」

一夏の切っ先は確かに福音を掠める。

だが、

「削りきれない!?!」

それにあるうことか、福音に背を向ける形となってしまうた一夏に福音がその銃口を向ける。

『「a……………♪」』

甲高いマシンボイス。その刹那、ウイングスラスターはその砲門全てを一夏に向けた。

「一夏!!」

沙良が叫びを上げる。

それは悲鳴などというものではない。

それは追撃を促す声。

一夏はそれにきちんと応えた。

沙良が、その高速で福音に突っ込み、その体勢を崩す。

当たれば幸運、当たらなくてもこちらの思うように誘導できれば。

そのような意図の突進だったのだが、幸運にも女神は微笑んだようだ。

そのスラスターをも兼用している銀の鐘を、全で一夏に向けていたつけが回ってきた

ようだ。

「沙良!!」

直撃。

そのまま沙良は一夏の間合いまで福音を押し込む。

そして高機動型のパッケージをパージした。

そのパージされた装甲やスラスターは、福音に当たった瞬間に爆発を起こす。

——いける!!

シャルロットは作戦の成功を確信した。

『サラ。さら、沙良。深水——沙良』

「——っ!?!」

シャルロットは得も知らぬ寒気を感じた。

一夏や沙良は気付いていない。

「やっつて、一夏!!」

沙良が身体を使って無理やり福音の動きを阻害する。

「はあああ!!」

一夏が振りぬいた雪片は見事にその右腕部装甲を貫いた。

弾き飛ぶ装甲。

目に見えて減っていくエネルギー。

「よしっ!!」

その現状を確認しようと一夏が振り向いた。

「え……」

一夏がついその腕を垂らしてしまうのも無理はない。

シャルロットだって、銃を投げ捨てて襲い掛かりたい気分なのだから。

一夏とシャルロットの視線の先、その福音の腕が沙良の頭部を掴み、鉄紺のような深青の装甲を赤く染めていた。



「シャルロット！ 一夏！」

箒からの声にハツとする。

自分は何を呆けているのだと。

すぐさま同期しているシークエストシステムによるステータスチェックを開く。

そこには異常無しの文字。

あの血液は沙良から流れ出たものではないことが分かる。

「一夏！ あれは福音の搭乗者の血液だ！ 沙良に異常は無いよ！」

「っ、そうか！」

一夏はすぐさま気を取りなおし、雪片を構えようとする。

『L a……………♪』

しかし、そんな大きな隙を見逃してくれるほど銀の悪魔は優しくはなかった。沙良を一夏に放り投げると、その影に隠れるように一夏に手を伸ばす。

その手が一夏の足首を掴んだ。

「一夏あ!!」

箒がその様子に気付き、無茶を承知で突っ込んでくる。

しかし、福音の中に優先順位でも存在するのか、箒のことは見向きもしない。

一夏を武器のように振り回し沙良にぶつける事によって両者とも水面に向けて叩き落とすと、砲口を一夏と沙良に向けた。

あの連射攻撃をあの近距離で受けるなんて、ISを装備していたとしてもひとたまりも無い。

自分なら、耐えられるかもしれない。

シャルロットはスラスターを最大に噴かす。

(お願い! お願い空良! 間に合わせて!! お願い!!)

加速された思考の中で、二人にたどり着くまでの時間は気が狂いそうなほど長く感じる。

スローモーションの世界で、シャルロットは光弾が放たれるのを確かに捉え、そして、

——一夏!?

光の奔流から沙良を守るかのようになり、沙良を強くこちらに蹴り飛ばす一夏の姿を見た。

沙良の驚愕の顔とは対照的に穏やかな表情を浮かべる一夏。そして、シャルロットに向けて唇を動かした。

まかせた。

その言葉に応えるように沙良を庇うように抱きしめた瞬間、爆発する光弾がシャルロットに降り注ぐ。

相殺しきれない衝撃が、シャルロットの骨を軋ませ、装甲が剥がれていく。しかし、それでもシャルロットの機体は耐え抜く。

エネルギーとは関係無しに、あらゆる攻撃を耐え抜く装甲。堅さを重視した『シークエスト』だから耐えられる。

しかし、高機動型の一夏はそうは行かない。シャルロットとは反対に機動力を得るために、装甲を薄くしているのだから。

「いちかああああ!!!」

沙良の悲鳴が戦場に響いた。

第五十四話 最善の犠牲であるのなら

箒は、一夏に迫る光の奔流を両手に持った刀で撃ち落としていく。

しかし、撃ち出される量が紅椿と銀の福音では雲泥の差がある。

悔しい。

大切な者を守ることも出来ない力が。

世界最高峰の機体を操りきれない自分が。

こうやって箒が我武者羅に刀を振るっている間にも、一夏や沙良、シャルロットには光弾が降り注いでいる。

接触まで後一秒。

この加速した世界ではこの一秒が長すぎる。

「やめろおおおおお!!!」

箒は光の奔流に突っ込んで行き、光弾を空裂で相殺し一夏の身体を確かに抱きしめた。

「はああああっ!!」

一夏を抱きしめながらも、左の刀を振るう。

そのエネルギーの帯は、一夏と箒を光弾から遮るように撃ち出されるが、射出量が違いすぎる。

被弾。

それも一発では済まない。何発も機体に突き刺さり、装甲を剥離させていく。一撃を喰らう度に気が狂いそうなほどの痛みが身体に走るが、奥歯を噛締めることで耐える。

その殺傷能力に改めて軍事用の意味が思い知らされる。

痛みでノイズが走る視界でも、シャルロットのシールドがその全てを砕かれ、その装甲の薄いところが剥がれ落ちていくのが確認できる。

数発当たっただけでも気を失いそうになるのだ。何十発とその身に受けた一夏の痛みは想像すら出来ない。

光の奔流から抜け出した箒は一夏の状態を確認する。

「——っ！」

つい息を飲んでしまうほどに酷い。

エネルギーシールドで相殺できなかつた熱波が皮膚を焼き、その衝撃が身体に青く痣を残す。肋骨も折れているのだろうか、身体の振り方に違和感を覚える。

見るに耐えかねないほどの負傷。しかし、視線を逸らすことだけはしない。してはい

けない。

「一夏つ、一夏つ、一夏あつ!!」

「ああ……箒か……沙良は？」

「ああ、大丈夫だ。シャルロットがしっかりと守った!!」

「そつか……良かった……。はは、何を泣きそうな顔をしてんだよ、らしくねえなあ」

「泣いてなど、いない!」

そういう、箒の顔は涙で歪んでいる。

「泣くなよ……箒。まだ……終わって、ないんだろ？」

一夏は苦しうに呻くと、その意識を手放した。

そう、終わっていない。

銀の福音を落とせる一夏が脱落したということは、作戦は失敗したことになる。

ならば、この戦域から撤退しなければならぬ。

その意味を、箒は正しく理解していた。

(誰かが犠牲にならなければいけない)

そして、それが自分が犠牲になることは出来ないことも。

(私が、一番役に立たないのに! 私が犠牲になるべきなのに!)

沙良が高機動型のパッケージをパッケージしたということは、あの福音から逃れることの

出来る速度を出せる機体は箒の紅椿だけとなる。

例え箒が二人を逃がすために一人福音と立ち向かおうとも、大した時間も稼げないだろう。結局のところ、三人とも墜とされるだけだ。

箒に出来ることは、最大速度で飛ぶことだけだ。

「撤退!!」

沙良の涙混じりの声が届く。

一度、フォーメーションを整えようと、シャルロットと沙良にサインを出す。

箒は既に一夏を抱きかかえており、連れて飛べるのはもう一人が限度であろう。

沙良を逃がすか、シャルロットを逃がすか。

アラーム音が鳴る。

「なんだ?」

それは作戦本部から送られてきた通信。

——五分間耐えながら撤退。

それは増援が送られていることを意味する。

確かに、これなら犠牲を出さなくてもすむかもしれない。

しかし、三人とも墜ちる可能性も高くはなるのだが。

沙良やシャルロットの意見は分からないが、それが決定事項なら箒は従うだけだ。

だが、三人とも薄々とは気付いている。

これでは逃げ切れないと。

沙良は、右手にライフルを展開すると、福音に標準を向けた。

「僕が——」

沙良が喋っている途中にもかかわらず、シャルロットが沙良に丸い球体を押し付けた。

それは一瞬で展開し、沙良の周りにシールドエネルギーを張った。

「箒!!」

箒はシャルロットの叫び声に無意識に反応し、沙良を抱きかかえると真っ直ぐに防衛ラインに向けてスラスターを噴かした。

箒も気付いていた。先ほどの近距離一斉掃射で負傷したのだろうか、沙良が左手に武装を持たなくなったことを。

「殿は、僕が務める」

シャルロットがライフルを構えて悠然と立ち塞がった。

「シャル!! 何考えてるんだ!!? 止める! お願ひ、止めて!!」

「Not preoccupes. (心配しないで)」

「!Charlotte! para! (シャルロット! 止めて!!)」

沙良は涙で顔をクシヤクシヤにしながら、離れていくシャルロットに右手を伸ばす。何度も何度も継るように伸ばされる腕。耳に残る、涙声で叫ばれるシャルロットの名前。

無意識に唇を噛む。

箒は沙良の顔も、一夏の顔も見ることが出来ず、ただ全速力で飛ぶことしかできなかった。



「僕が――」

沙良がCE TMEを構えたのを視認した瞬間から、シャルロットの身体は勝手に動いた。

バリアユニットを展開し、それを沙良の機体に押し付ける。

「箒!!」

シャルロットは右手にCE TME、左手にマリアを持ち、福音に真っ直ぐスラストー

を噴かす。

しかし、福音はこちらをまるで気にも留めず、ただ沙良を追いかける。

間違いない、そうシャルロットは思う。ここで自分が行かなきゃ沙良が危ない。

千冬に任せたと言われたのだ。

ここで引く訳には行かない。

「ああああああ!!」

喉を潰すかのような絶叫を上げ、自分を通り越して沙良に手を掛けようとする銀の翼を殴りつける。

そのまま抜ける位置は福音の背後三十メートル。

それは福音を逃がさない最大限の距離であり、マリアの最も威力の高い位置。

「……殿は、僕が務める」

シャルロットはトーンを落とした声で宣言した。

「シャル!! 何考えてるんだ!?! 止めろ! お願い、止めて!!」

既に沙良の姿は小さくなってきているが、ここで福音を放って置くわけにはいかない。

マリアを六連発で打ち込み、そのまま接近し、エステバンに持ち換える。

『No te preocupes. (心配しないで)』

ポロっと零れたのは覚えただけの言葉。

通信に言葉を乗せている間にも、身体はまるで別の意志を持つているように照準を福音に合わせ続ける。

思考と身体を切り離しながら、その機体に硝煙を纏っていく。

片手間で空良の公開データに、深水沙良と書き込む。

「!Charlotte! para! (シャルロット! 止めて!!)」

福音は、空良に乗っている搭乗者と深水沙良の関連性にエラーを起こしたのか、先ほどまで沙良を狙っていた砲口が一部こつちに向いた。

——かかった。

「大丈夫、絶対帰るから。日本料理、食べる約束だからね」

「シャル!!」

砲口が光を溜め始める。

最後に、沙良にだけ伝えたいことを言の葉に込める。

『J e t , a i m e (愛しています)』

それは、本来の母国語。

一番染み付いている愛情の国の言葉。

シャルロットは一瞬だけ繋いだ個人秘匿回線を切ると同時に、エネルギーグレネードの中に身を躍らせた。

「No t i e n e s e n t i d o r e z a r (神に祈ったって無駄)」

今、この場で信じれるのは自分だけ。

剥離していく装甲。

目に見えて減っていくエネルギー。

焼けていく皮膚。

軋む骨。

「ああああああああああ!!」

それでも引き金を引くことは止めない。

生きて帰ると約束したのだから。

「! v i v i r e d o n d e y c o m o s e a ! (どんな死地でも生き抜いて

見せる!!)」



速く。

もつと速く。

戦闘圏から抜け出してどれほどの時間が経っただろうか。

抱える一夏の容態は段々悪くなり、沙良も途中から意識を落としている。

高感度ハイパーセンサーが福音の姿を映していないことから安全圏までは逃げ切れずと仮定してもいいだろう。

しかし、箒は強く唇を噛締める。

強く凝視するは、コア反応を示すレーダー反応。

戦闘を行っていれば微細でも動くはずのそれが、シャルロットの空良、福音ともに動いていないのだ。

それは即ち、シャルロットが墜ちたということ。

簡易レーダーでは、そのバイタルサインまでは読み取れない。

生死不明。そのことが箒を責め立てる。

力を込めすぎた歯は唇を噛み切った。

自分ももつと強ければ、こんなことにはならなかった。

自分なら大丈夫と背中を押しした皆に申し訳が立たない。

「くそっ！ くそっ！」

今の自分の仕事は、速く飛ぶこと。一刻も早く沙良と一夏を安全圏に届けること。

そのためなら、自分がどうなろうと構わない。

既にボロボロとなった機体。軋むスラスタ。悲鳴を上げ続ける身体。限界を越えて加速する。

何処か折れているのか、身体を動かすたびに痛みが走る。

その痛みがなければ、意識を落としてしまいそうだ。だから、無理にでも身体を動かす。

「援軍は、まだか……」

最終防衛ラインまであと少しといったところ。そろそろ出会ってもいいだろう。

頼む。急いでくれ。

その筈の願いが届いた。

「筈さん！」

見覚えのある蒼い機体。

彼女の手足となつて働く六基のブルー・ティアーズはスカート状のスラスタと化していた。

あれが言っていた強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』だろう。

普段はライバルとして切磋琢磨する仲だが、今だけは心から頼もしい。

「セ、シ……リア」

「——っ!？」

そのボロボロな箒に、セシリアは目を見開く。

絶対防御を貫き、搭乗者に絶大なダメージを与える。それは軍用機という存在を改めて知らしめる。

「頼む……、一夏を、沙良を」

箒は、息絶え絶えながらも、一夏と沙良をセシリアに託す。

「ええ、ええ！ 必ず助けますわ！」

「オルコツトさん、沙良さんと一夏さんをこちらへ」

箒としては関わりの薄い、沙良と同郷の少女。

その少女に継り付く。

「シャルロットが……頼む。あいつを、あいつを！」

「……大丈夫です。シャルさんは生きてます。絶対助けますから」

助かる。その言葉を聞くと、身体から力が抜けていく。

「箒さん!？」

意識が閉じていく。最後に、セシリアの慌てた声が聞こえた気がした。



「箒は、もう大分離れたかな……?」

シャルロットは簡易リーダーによって箒が戦闘圏から抜け出したことを確認する。

——良かった。これで沙良は助かる。

安堵したことにより、心に余裕が生まれる。

——さて、後は心置きなく戦える。

そう自分を鼓舞するが、実際に勝機などある訳も無い。

未だ自分が墜ちていない事が不思議で仕方ないレベルの損傷。

装甲もほぼ砕け散り、スラスターも無視できないほどガタがきている。

それでも、シャルロットは前を向く。

光弾を放ち続ける福音に、照準を向ける。

「まだ、終わってないっ!!」

シャルロットはスラスターを噴かし、右手のライフルを全て撃ちつくす。

吐き出された被覆鋼弾は、高い貫通力を以って装甲を削るが、大多数が防がれたり、回

避される。

それを見越していたシャルロットはすぐさまもう左手のライフルを撃ち出す。それと同時にすぐさま右手のライフルを別のものに持ち替える。

今打ち出している銃弾は徹甲弾。そして、右手に展開するライフルには、エネルギーに反応する特殊な対 シールドエネルギー S E 弾。

シールドエネルギーを減らすことだけに特化した銃弾は装甲を傷つけることは無い。その分、徹甲弾が装甲を非情に破壊する。

徹甲弾により装甲を削り、対 S E 弾によりエネルギーを削る。それに飽き足らず、成型炸薬弾やライフルグレネードによる擲弾など種類の違う銃弾が飛び交う。この硝煙に支配された空間は、確実に福音のエネルギーを奪っていく。

展開されるはそれだけではない。銃弾を撃ちつくした軽機関銃の代わりに持ち替えるは特殊光学ライフル。内蔵のエネルギーが切れるまでは高威力のエネルギー弾を打ち出せる。

極め付けは、物体を電磁誘導ローレンツ力により加速して撃ち出す電磁投射砲。

その銃器群を自由自在に持ち替える。

隙など作るわけも無い。リロードの時間すら惜しみ、ただ攻撃だけに全てを注ぐ。それが出来るほどの武装の多様性。銃弾を変えるのではなく、その銃器ごと替える。ただ速く、効率よく。ただ攻め続ける事を念頭に置いた戦術。

それを可能とするのは、高速切替を得意とするシャルロットのために沙良が用意した銃器群。

銃一つ一つにはNo.だけ振られ、名前などついていない。それは全て揃って武装となる。どの銃がどの特性を持つか、そんなもの全て頭に入っている。大切なのは、それが『群』であるということ。

空良専用武装、特殊銃器群『カルロタ』。

それは、フランス語の『シャルロット』に対応したスペイン語での名前である。

沙良が用意した、シャルロットに一番合った武装。シャルロットが持つ技術を、最大限生かすことの出来る唯一無二の武装。

「ああああああ!!」

叫びを上げながら福音に肉薄。

迫り来るエネルギーグレネードは銃弾で撃ち落とし、命中しそうになれば手持ちの銃を投げつけ暴発を狙う。

それは今までに無い銃の使い方。

後のことなど考えない。今さえ、切り抜ければ良い。

撃つ。避ける。撃つ。避ける。撃つ。

感情を切り離し、ただ機械のように同じ動作を続ける。

両腕から放たれていく銃弾は、的確に福音のシールドエネルギーを削ることに成功している。

しかし、それが長く続くわけも無い。

ポロポロの機体。煙を噴くスラスタ。

普段なら避け切れるであろう軌道を描くエネルギーグレネード。しかし、今のシャルロットにはその一撃が無慈悲の鉄槌に等しい。

「ぐうっ！」

被弾。

装甲の欠けた機体は、そのダメージをシャルロットの身体に伝えてくる。

命中箇所は左肩。

エネルギーは残っているが、身体が先に限界を迎えることだろう。

それは自分の身体から流れ出る血液を見れば分かる。

どこまでも蒼く空と一体化しそうな装甲は、赤黒く染まっている。その赤い装甲は手に持つ銃すら朱に染めた。

絶対防衛も過信してはならない。

今の被弾により、シャルロットは左肩を上げるのが困難になった。

「折れた……かな？」

なら、右腕だけで撃てば良い。

シャルロットは、飽く迄も諦めることはしない。

悲鳴を上げる身体を叱咤し、限界を越えて付き合ってくれる機体に笑みを浮かべる。

「まだ戦える!!」

だが、現実は無情にも想いを嘲笑う。

両腕でも防ぎきることの出来なかつた弾幕が、右腕だけで捌けきれぬわけも無い。呆気なくエネルギーグレネードに囲まれてしまったシャルロットは自嘲の笑みを浮かべた。

全てがゆっくりと感じる。

——ああ、ここまでか。

痛覚すら麻痺したのか、衝撃に身を弄ばれても苦の感情が出ない。

考えるのはただ、沙良のことだけ。

——僕が死ぬと、沙良は自分を責めるだろうなあ。

それで沙良が傷ついてしまったら意味がない。とは、シャルロットは考えない。

守る。結果として沙良が傷ついたとしても構わない。

ただ、守る。その手段として沙良を傷つけることをも躊躇わない。

それで沙良が助かるならば、手段を選ばずやり遂げて見せよう。

犠牲も躊躇わない。

今回はそれが自分の命だったという話だ。

「でも……」

後悔は無い。

それでも、

「もつと傍に居たかったな」

視界が真つ白になる。

意識が少しずつ薄くなるような感覚。

シャルロットの機体が水中に墜ちた。

第五十五話 命令

旅館の一室。運び込まれたベッドに横たわっている一人の少年。

未だ目を覚まさないその少年に控えている少女は、ずっと少年の手を握っている。

「……いちか」

少女は祈るように少年の手を包み込む。

そんな少女に声をかける者が居た。

「箒」

「……鈴か」

ツインテールを揺らした鈴音はただ箒の名前を呼ぶ。

鈴音は箒が自分を責めていることを知っている。しかし、そこで箒のせいじゃないと

言った所で何の意味がある。

今回は誰も責めることが出来ない。

誰もが全力を出し、そして負けた。ここで口を出すと言うことは、その全力で事に当たった者達を侮辱するのに等しい。

箒が得た悔しさや後悔は、誰のものでもない箒だけのものだ。他人がそれを推測で

量って良い筈がない。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまでは各自現状待機しろ』
感情を押し殺し、そう言い渡した千冬は作戦室に籠っている。全員が状況をどうにかしようと躍起になっているのだ。

「ここに居ると思ったわ」

意識を失って運ばれてきた筈。部屋に寝かされていると思い、態々足を運んだのだったが、そこは蛻の殻だった。ならばと思い、ここに来てみたがその考えは正しかったようだ。

「アンタも怪我人なんだから寝てなさいよ」

焼けた髪に、包帯が巻かれた肩。そこかしらに治療の跡が見える。骨折をしていなかった事は幸いと言ってもいいだろう。

「こんなもの怪我に入るものか」

「言うと思ったわ」

鈴音は、ドアに凭れたまま虚空を見る。

会話が途切れ、そこには静寂だけが残る。

鈴音は衣擦れの音を聞き取り、筈に視線を向ける。

そこには、しっかりと前を向いた筈の姿。

「祈りは終わった？」

箒が一夏の手を離し、鈴音に向き合った。

その瞳は決意に満ちている。

「鈴……」

「何よ」

「私は弱い」

「知ってるわ」

膠も無く答える。

「愚直で、技術もなく、状況判断力にも乏しい」

「ええ」

「戦術も何も知らない」

「そう」

「機体が優れているだけの素人に過ぎない」

「そうね」

「そんな私の願いを聞いてくれるか？」

「……馬鹿ね、箒」

本当に馬鹿ね、と繰り返す。

「あたし『達』が断ると思ってるの？」

その言葉に、多数の人影が前に出る。

廊下で待機していたのだろう。そこにはいつものメンバーが勢ぞろいしていた。

「水臭いですわ箒さん。そんなことお願いするまでもありませんわ」

まだ、誰も箒からお願いの内容を聞いていない。

それでも、皆は分かっていると一言わんばかりに頷く。

「何が馬鹿だ……お前らの方がよっほど馬鹿ではないか」

「言ってなさい」

箒はその瞳から雫を垂らす。

「頼む。力を貸してくれ」

箒が全員の顔を見渡す。

「私は……福音を墜としたい」



最初に目に飛び込んできたのは、温かみのある木目の天井。直ぐに自分の居場所が分かる。旅館に宛がわれた自分の部屋だ。

「……………っ」

身体を起こすと、軋むような痛みが走った。

どのくらい寝ていたのだろう。未だ外が明るいことからそれほど時間が経っているとは思えない。

「シャル……」

情報が足りなさ過ぎる。彼女は一体どうなったのだ。

一夏は。

箒は。

福音はどうなった。

状況はどう動いている。

足りない。情報が足りなさ過ぎる。

「くそっ」

こんなところでぼさつとしている場合じゃない。

「どこに行くんですか」

立ち上がろうと、力を入れたと同時に声がかかる。

「もう一度言います。どこに行くつもりですか、沙良さん？」

押さえ込むように触れられる手。肩にかかる栗色の髪。

「フィーナ」

「ええ、わたしですよ」

「状況はどうなった？」

大人しく倒された沙良は、突然現れたフィーオナに驚くこともしない。

「それを聞いたら大人しく寝てくれますか？」

「善処はするよ」

嘘ばかり、とフィーオナが小声で漏らす。

「じゃあ話すことは出来ません。おやすみなさい、いい夢を」

「待って、フィーオナ」

「なんです」

「これは『命令』だ。僕の質問に答えろ」

「はあ……良いですよ。命令と言われたら仕方ないですね」

そう言つてフィーオナは予め用意していたのか、まとめていたデータを沙良の端末に

送った。

「まず、現状から。福音への奇襲は失敗。織斑一夏は未だ意識を取り戻してはいません。

篠ノ之箒は先ほど意識の覚醒が認められました。お二人とも負傷していますが、命に別状はありません」

「続けて」

端末から目を逸らさずにそう言う沙良に、フィオナがため息を吐く。

「シャルロット・ルイスは墜落。ポイントは此処から北北東に二百五十五と言った所です。深海四百メートル付近に引つ掛かっています」

「その水深なら、カイラの救護パッケージが使えるな」

「詳しい位置は流石に割り出せなかったのですが、大まかな位置を端末に表示しますね。これはシックエストシステムによるものですから、まだ学園側が把握していない情報です。表に出すのは控えてください」

「仕事が速いね」

「これでも、沙良さんの片腕を名乗らせていただいていますから」

「この位置を見る限り、深海を飛んでも大した問題はなさそうだね」

「ですが、現在、福音はそのポイントの真上に陣取っています。確かに行きは深海を飛んでいけばいいでしょう。しかし、帰りはどうするんですか？ シャルさんを連れて深海を飛んだら、シャルさんが持ちません。今のシャルさんは致命領域対応によって生かされているだけなのですから」

「選択は二つか」

危険を顧みず浅瀬を飛ぶか、一か八かで深海を飛ぶか。

「三つですよ」

「フィオナ？」

「わたしが福音と交戦しましょう」

「何を——」

「沙良さん一人で行こうとしてみませんか？」

フィオナが、言わせませんよ、そう瞳で伝えてくる。

「……」

「駄目です」

「フィーナ」

「わたしも行きます」

「駄目だ。こんな危険なことに巻き込むわけには行かない」

「危険なら慣れっこです」

「今回は、死ぬかもしれないんだぞ!？」

「それでも駄目です」

「分からず屋」

「ええ、秘書課の人間ですから」

秘書課。

それはSeaQuest Companyの中でも、特別視されている部署だ。

そこには居る人間は、様々な思惑はあれど一つの思想を持って動いている。

忠誠。

それは、本来の秘書の在り方とは異なる。

「ソフィアさんとは違い、私は簡単には領きませんよ？ 普段からソフィアさんは甘やかしすぎです」

言葉が段々と硬くなる。その口調は日常で使われるものではなく、仕事用に詭えたもの。

「アルファード第一秘書が居ない今、沙良様の筆頭秘書は私となります。私は、沙良様に危害を加えさせるわけには行きません。例えばそれが命令でも。それが秘書課の役目ですから」

いつもの間延びした口調は鳴りを潜めている。

沙良様。

フィオナが沙良をそう呼ぶ時は、仕事として沙良に接しているということ。

それが分かっているから沙良は強く出れない。

この時のフィオナは沙良の言うことを聞かない。命令も一つしか受けつけない。

「私は、この忠誠を『貴方』に捧げました。その私が、地雷原でタップダンスするような真似を見逃すだけでも?」

カルラ率いるSeaQuestCompanyのなかでも選りすぐりの馬鹿共。あらゆる命令を遂行する実働部隊。

フィオナはその中でも、特出して忠誠心が強い。それも会社に向けてではない。ただ、自分が敬愛する沙良に対してだ。

「ですから、私が踊りましょう。死地に赴く。それも職務です」

「……駄目」

「さあ、ご命令を」

「……ヤダ」

「どうか、ご命令を」

「……分からず屋」

「知ってます」

「……馬鹿」

「光栄です」

「……死ぬかもしれないんだよ?」

「承知してます」

「……僕はフィーナが死んだらやだよ」

「無上の喜びとするところです」

「……ばか、ばかばかばかばか。きらい。フィーナなんてだいきらい」

「それでも私は構いません」

「……うそ、だいですき」

「分かっています」

フィオナは、その冷たい表情に、感情を戻す。

いつものように柔らかい笑みを浮かべて、沙良の瞳を覗き込む。

「ねえ、沙良さん。わたしじゃ駄目ですか？」

「フィーナ……」

「わたしじゃ信用できませんか？ その任務、わたしには任せられないですか？ わた

しには出来ないよ、そういうことですか？ 一人のほうが良いよ。わたしは足手まとい

とそういうことですか？」

「違う、そういうことじゃないよ。フィオナは左腕として信用している」

「じゃあ、わたしにも手伝わせてください」

「それは……」

「仕事抜きにしても、わたしにとってシャルさんは大切な友達です。助けたいんです。その気持ちを汲んでももらえませんか？」

「ずるいよ、フィオナはずるい。そんな事言われたら意地張れないじゃん」

沙良は、声を絞り出す。

秘書課の人間に出来る命令はたった一つ。それに返って来る答えも一つだ。

それは今まで何度も繰り返し返されてきたであろう命令。

沙良が初めて行う命令。

「……………『僕のために、死んでくれる?』」

「ええ、もちろん。『喜んで』」



「結局、こうなるのね」

リナはため息を一つ吐く。

「沙良さんが付いて来るのは目に見えていることですからね」

フィオナは新しくインストールしたパッケージの確認に忙しい。
選んだのは防御型パッケージ。

それは、今回の作戦において、フィオナのポジションの苛烈さを想像させる。

「じゃあ二人とも準備は良い？」

同じく救助用防御型パッケージをインストールした沙良がマップを開く。

同期されたマップは沙良が書き込むたびに同様の書き込みが更新されていく。

「ただ真つ直ぐにシャルに向かい、僕がシャルを救護カプセルに押し込み確保する。ここで、シャルのエネルギーが回復するまでゆっくりと深度を上げる。無いとは思いたいけど、福音がこちらに気付いたらフィーナは福音と交戦」

「はい」

「リナは大型海洋生物などに注意しながら斥候に出て」

「了解」

「もし福音がフィーナを無視して僕らに突っ込んで来たら即座に足止め、フィーナと共に迎撃に回って。シャルのエネルギーが回復しだい、救護カプセルを戦闘域から離脱させる。その際、福音は僕をターゲットにすると思われるので、二人はしっかりと護衛を頼んだよ」

「！value！」

「これは命令ではない。辞退は今のうちだよ」

「!Si!」

「もう……馬鹿ばっか。じゃあ、二つ命令を出すよ」

「!Si!」

「死んでも成功させて」

「!vale!」

「そして、絶対に死なないで」

「!vale!」

沙良はフィオナにそっと近づくと、その頬を両手で挟み、額に軽い口付けを落とす。

それを、リナにも同じように行なうと、二人の手を握り締める。

祝福のキス。

それは切なる勝利への願い。

「じゃあ、行こうか」

三人の身体が光の粒子で包まれると、そこに青の装甲が現れる。

「DIVE!!」

青がより深き青へと潜っていった。



光の届かない領域。

そこに適した生き物だけが生息できる過酷な場所。

色の乏しい世界に軌跡を残す三つの青。

それは、周りの黒に溶け込み影すらも残さない。

『ポイントまで残り千。ソナー開始』

『了解。すぐさま斥候に出るわ』

『気をつけて』

『ええ、そつちも気をつけて』

一機が集団から離れ、深度を上げる。

その動きは緩やかに見えるが、その実高速で水中を飛ぶ。

『ターゲットを発見。前方三時の方向、距離五百』

ソナーの結果が通信で知らされる。

暗視装置も付いているが、それよりもソナーの方が確実だ。

沙良は、指示された方向に動く。

『了解、救護カプセル展開』

『了解』

指示されたポイントに到達すると、其処には捜し求めていた姿があった。

『ターゲット発見！ 保護に入る』

『了解。深度を上げ、警戒に入ります』

すぐさま、救護カプセルに、I Sごとシャルロットを押し込める。

「——っ、酷い」

その姿は見るも無残だった。重厚な装甲は全て剥がれ落ち、機関部も基礎部分だけを残しあらゆる全てが欠損している。もう二度と『空良』として空を泳ぐことは無いだろう。

「良く、守ってくれたね」

海水に浸かっていたせいか、血圧が低くなっている。明らかに向きのおかしい左腕に、焼き爛れた両足。あらゆる部位に傷が見られ、血液が流れ出ている。急いで救助に来て良かった。もしかしたら間に合わなかった可能性もある。

だが、生きている。

確かに生きている。

「絶対に助ける」

救助カプセルを操作し、すぐさま輸血を開始する。

一般的な血液型ならば用意してある。何も問題はないはずだ。

海良を経由して指示を出すと、カプセルが自動で輸血を開始する。

「ばか、ばか、ばか」

沙良は、自分が涙を流していることにも気付かない。

「……シャルが居なくなったら僕は嫌だよ」

少しずつ深度を上げる。

救助カプセルに入っている間は、自動で減圧を開始するが、万が一ということもある。減圧症だけには最大の注意を払う。

ISがきちんと動いていれば、減圧症の恐れなど無い。だが、今のシャルロットはただ生かされているだけであって、そのような調節機能など機能していない。

減圧症や肺破裂の恐れが無いのであれば、深海を連れて帰る事が出来たのだが、それは叶わない。それに深海は何が起こってもおかしくない。潜水作業の際は、常に死を傍に連れ添っているのだ。

「絶対に三人で日本料理食べに行くんだ。僕は諦めない。絶対に死なせない」

ゆっくりと、少しずつ浮上していく。

相手が軍用機である以上、ステルス機能がどこまで通用するかは分からない。

慎重に、事を運ぶ。

そして、恐れていたことが起きた。

リナの機体からサインが飛ばされる。

その信号の色は赤。

危険を知らせるサインだ。

『フィーナ!! 福音行動開始!!』

『——っ!? 気付かれるのが速い!』

軍用機相手とはいえ、いくらなんでも気付くのが速すぎる。

『くっ、防衛に出ます! 沙良さんはその水深で待機。私のパーソナルに沙良さんの情

報をペーストしてください。注意を逸らします』

『了解! ……フィーナ』

『何でしょう?』

『絶対帰ってきて』

『はいっ!!』

第五十六話 不器用な笑み

フィオナは福音を視界に納める。

水深は八十メートル。肉眼では真つ暗なこの空間も、ハイパーセンサーによってハッキリと映し出されている。

此処でフィオナを無視し、潜行していくようであればリナに対処に当たってもらわなければならない。

しかし、その考えは時間の空費だったようだ。

砲口がこちらに向く。

「わたしに水中戦を挑むとは良い度胸です」

水中という特殊な環境が相手のエネルギーグレネードにどのような影響を与えるのか。

出来れば不発に終わって欲しいところなのだが、

「甘い考えですよね」

速度は落ちるものの、確かに砲口から光弾が発射される。

水中という特殊な環境では空中と同じような機動は出来ない。速度が落ちるとはい

え、迫り来る光弾を確実に避けきることなどできない。

しかし、その威力が軽減される水中であれば耐えられる。その為の防御パッケージだ。

エネルギーグレネードは全てシールドで捌き、ただ愚直に福音に接近する。

もちろん、無傷とはいかない。シールドで捌ききれない光弾が重厚な装甲を軋ませる。

「それでもっ！」

展開するは『ハリマー』。

普段から多用する武装だが、本当の用途は水中戦の方だ。

「食らえっ！」

重力を感じることが出来ない環境にP I Cが最適化していないのか、フィオナの追従を振り払うことが出来ない福音は、その一撃を真っ向から受ける。

水中で弾き飛ばされる福音に、水中アサルトライフル『A S M — D T』を向ける。

放たれた銃弾は、確かに福音の上腕部を弾き飛ばす。

データに存在しない水中戦というものに、福音はされるがままとなっている。

それもそうだろう。水中銃を見るのも初めてだろう。

そんなものを標準装備として積んでいる機体など、世界中探してもシークエストだけ

である。

福音はフィオナと距離を取るように動く。

水中では実弾系銃器は大した威力を持たない。ならば、主戦力となるのは『ハリマー』のような近接武器だ。

だから、福音は距離を取る。自分は銀の鐘によって攻撃を加える事が出来、相手の攻撃は当たる事がない。そういう判断だろう。

その判断が間違えているとも知らずに。

福音の距離がある程度開いた瞬間、銀の鐘が弾き飛んだ。

「お馬鹿さんですね。遠距離から攻撃できるのが自分だけだと思っただけですか？」

フィオナが構えるのは、全長三メートルは超えるであろう大型のアサルトライフル。

フィオナの機体だけに積まれた、フィオナだけの専用武装。

水陸両用アサルトライフル『U A R—F』

その威力は、水中でも大きく減衰することは無い。

「さあ、来てください。そしたら返り討ちです」

『随分と楽しそうね』

砲口をすべてこちらに向け、砲撃体制に入った福音。

シールドを前面に配置し、弾幕を張るために『ASM-DT』を展開する。

『UAR-F』を構える隙が欲しい。

「あら、聞いてたんですか」

『そりやもうバツチリと。何よ、余裕じゃない』

「ふふふ、そう見えます?」

『全然。焦ってるのがもろ分かりよ? 冷静に対処しなさい。死にたくなかったらね』

分かってている。少しのミスが死に繋がる。それを分かっているからこそ、気分が高揚するというもの。

額に汗が滲むような感覚。閉じた装甲によつて、海水に触れるはずが無いのに体が濡れる感触。

全身で感じる戦場という空間。

死が隣にある、非日常。

「あのころと比べれば余裕ですよ」

沙良に拾われる前と比べると、こんなこと大したことでもない。

そう思わないと、潰されてしまう。

「っー」

エネルギーグレネードが物理シールドに突き刺さつて爆発していく。

それに対抗するように只管引き金を引くが、全て落とすことは出来ない。

だから、フィオナは『U A R — F』を撃つために、全てのシールドを正面に集めた。エネルギーグレネードは全てシールドで対処し、福音を狙い撃つ。

一発、二発、三発と命中させることに成功する。

すると、福音は深度を上げ空中に躍り出た。

「ようやく出てくれましたか」

『嬉しそうね、フィーナ』

少しでも早く、福音を空中に逃がす必要があった。水中で戦うと、沙良とシャルロツトが危害に会う可能性が高くなるからだ。

しかし、空中に出てしまうと、その分フィオナが危険になる。軍用機相手に水中機が空中戦で勝てるかといわれると、頷くことはできない。それでも、フィオナは沙良にこの役目を任されたことに喜びを隠し切れない。

「沙良さんの『死令』を受けたんですよ？　喜びで発狂死しちゃいそうです」

『僕のために死んで来い』って命令で喜べるのはあんただけよ。本当に頭沸いてるんじゃないの？』

「褒め言葉ですか？」

『ええ、そう受け取っておきなさい』

死令を受ける。

それがフィオナ達にとつての最大の名誉でもある。

自分の一方通行な忠誠が、主に認めてもらえた。それだけで喜んで死地に向かうのがフィオナたちだ。

「ふふふ、沙良さんの始めて『死令』を受けたんですよ？　つまり、沙良さんの処女は私が貰ったような物です」

『例えが最悪ね』

「沙良さんに言わないでくださいね。軽蔑されちゃうんで」

U A R — F にリロードされている銃弾を収納。

『どうしよっかなあ』

「本当に性格が捻じ曲がってますね」

新しく、展開するは大気圏用の銃弾。

『フィオナには言われたくないわ。じゃあ、条件』

「なんですか？」

確かに装填されたのを確認すると、利き腕で相棒を撫でる。

『帰ったら一杯奢りなさい』

「未成年ですよね？」

福音は既に空で待ち構えている。

『軍の人間たるとも飲めないなんて奴は居ないわよ』

「これって告げ口をしたらどうなるんですか？」

海の住人が空に嘔み付くのは中々に骨が折れるだろう。

『私がフィーナを殺すわ』

「ふふふ、死にませんよ。私はどんなことがあっても」

そう笑うと、フィオナは覚悟を決めた。

『どんなことがあっても……ね』

「当たり前です。わたしは沙良さんを悲しませるようなことは、あまりしません」

『あまりなのね』

「あまりです」

フィオナは銃器をしまい、『ハリマー』を構える。

「行つてきます」

『ええ、直ぐに私も行くから待つてなさい』

空中戦に持ち込んだのであれば、水中戦における最後の防衛線としてのリナの役目は
終わりだ。

リナは、フィオナが墜ちないようにサポートに入るのが第二の仕事となる。

「早くしてくださいね」

フィオナは水中から高速で空中に飛び出た。

その粘性抵抗に機体が悲鳴を上げるが、そんな物は無視しておけば良い。

周りから海水が消えた瞬間、自動で潜水モードが解除される。

空中用に調節されたハイパーセンサーが福音の姿を捉えた。

「はああああ!!」

ハリマーを突きつけるが、それはひらりと躲されてしまう。

空中戦になると、一対一じゃ勝ち目が薄い。

だからといって、リナを待つほど落ちぶれているわけでもない。

構えるは『U A R—F』。

「リナが来るまでに墜ちてくれませんかね」

フィオナは照準を福音に向けた。

『』

「あら、これはどうも。ナイスタイミングです」

『』

「それは、嬉しいですね。早く来てくださいよ。私とリナが死なないうちに」



「あと三分耐えてください。今そちらに向かっているとこですわ」

セシリアが、個人間秘匿通信で、スペインの女子とコンタクトを取る。

この中で現在福音と戦闘中の二人と接点があるのはセシリアだけだ。通信はセシリアに任せ、今は自分に出来ることだけに集中する。

その戦闘行為に気づいたのは十五分ほど前だ。

福音が急に活動を開始し海中に潜ったことから、シャルロットに何かあったのではと皆が顔を見合わせた。コアネットワークに接続してみると案の定、沙良を筆頭にスペインの機体がステルスモードに入っているではないか。

そのことから、海中でスペイン勢と福音が接触していると判断し、急ぎ戦域に向かっている。

「箒、肩の力抜きなさい」

言われ、自分が無意識に拳を固く握っていたことに気づく。

「すまない」

「今回のキーマンはアンタなんだからね」

「ああ、心得ている」

今回のフォーメーションの中には防御に専念するものが居ない。辛うじてラウラの砲戦パッケージが防御型と呼べなくも無いが、これは遠距離からの砲撃戦を想定しているため、今回のような高速の世界で防御専門として動き回る訳にはいかない。

だが、この状態で箒は攻め続ける事を進言した。

それを可能とするために、防御時に使用されるエネルギーを攻撃や機動に回している。

神経をすり減らす、エネルギーグレネードを掻い潜つての高速接近格闘。それが箒が自分に課した仕事。

「安心しなさい。アンタが剣を自由に振るうためにあたし達は居るの」

箒の背中に乗っている鈴音が、言い聞かすように箒の肩を叩く。

「任せなさい。そしてあたし達を存分に使いなさい」

その言葉は箒に染み渡っていく。

信頼。

その二文字に箒は自分の全てを賭ける。

「ああ、私はお前たちを使おう。だからお前たちも私を使え。それが私に出来る信頼の

表し方だ」

「あら、カツコいいことを仰いますのね」

「セシリアか、通信は終わったのか？」

「ええ、早く来てくださいと。お二人が死ぬ前に、そう笑ってましたわ」

「全く……この状態でよく笑えるものだな」

「あそこの国は色々と螺子がぶつ飛んでますから、仕方ありませんわ」

「何だ、そういうお前も笑っているではないか」

セシリアの背中に乗るラウラが、ようやく口を挟んだ。

「あら、ラウラさん。これは戦いに赴く者の高揚を表しただけですわ。勝利のためには
欠かせぬ物ですわよ？」

「そうか、なら私も笑おうか。それで勝てるならば、なんでも手を尽くするのが指揮官の役
目だ」

「そうよ、箒も笑いなさい」

「……こうか？」

その顔は引き攣り、目も据わっている。到底笑顔といえるものではない。

だが、この戦場において、笑えるという精神状態だけでも充分だ。

それを分かっている箒以外の三人は満足そうに頷く。

「ふ、まあ合格点をくれてやろう」

「焦りが見えたら笑顔を浮かべるのですわ。それが落ち着きを取り戻す方法ですから」
「目標まであと一分よ」

接敵まで残り一分。

各自福音との開戦に向けて準備に入る。

箒とセシリアはただ愚直に福音に向けて飛ぶだけ。

「ほら、笑いなさい」

「分かっている」

「あたしから見えないのが残念で仕方ないわ」

「お二人とも、そろそろですわよ？」

セシリアはラウラを、箒は鈴音を射程距離まで運ぶのが第一の仕事だ。

「残り十秒」

ラウラの射程に入ったようだ。ラウラの砲撃を合図に、箒は今以上の加速をかける算段だ。

「Feuer!」

「——っ!!」

超音速で放たれる砲弾。それに付随するように高速で飛翔する。

ハイパーセンサーにはボロボロになった青い機体が二機映っている。

その機体にスイッチするように、箒は福音に接近する。

セシリアからサインが出る。

セシリアが出す緑のサインは援護射撃開始だ。

了解のサインを返すと、背中に乗っている鈴音を射程距離ギリギリで降ろし、勢いを

落とさぬままに福音に突貫する。

「はあああああ!!」

箒は雨月による打突を多用し、その距離を詰める。

しかし、その距離は詰まることは無い。

ひらりひらりと距離を取る福音に奥歯を噛締める。

「箒!」

「ああ!」

逆サイドから回り込むように鈴音が誘導する。

機能増幅。パッケージ『崩山』をインストールしたその機体は、その衝撃砲の威力を増

し、その弾幕をも濃くした。

それでも福音は余裕を見せながら回避を続ける。

時折、ラウラの砲撃も混ざるのだが、福音は気にも留めてないかのようその翼を広

げる。

だが、攻撃はそこで終わりではない。

その三人の隙を埋めるかのようにセシリアの精密射撃が福音に突き刺さる。

「墜ちろおとお!!」

動きを止めた福音に箒は両の手の刀を福音に突き入れる。

確かに感じる感触。その刃は確かに肩部装甲を貫いていた。

——っ……!!

そして、見てしまった。その両肩から血が流れ出すのを。

墜とす。そう意気込んで戦ってきたが、その搭乗者の命がこの手にかかっていると考

えただけで、刀が重くなる。

——だが、此処でやらねば何の意味も無い!!

「ああああああ!!」

刀身にエネルギーを纏わせ、装甲に刃を付きたてたままエネルギーを放出する。

それを、福音は防ごうとしなかった。

「武器を手放せ!! 畏だ!!」

ラウラが叫ぶが、もう遅い。

あの迷いの一秒が仇となった。その砲口がすべてこちらを向き、既に光を帯びてい

る。

——そうでなくとも、引くわけにはいかない!!

箒は右手を離し、時計回りに身体を回す。右足の展開装甲をフルに稼働させ、そこに特大のエネルギー刃を構築する。

後ろ回し蹴りのような形で蹴りが右翼を捉えた。

それは箒の全力の一撃。

その火事場の一撃は福音の片翼を確かに切り落とした。

だが、もう片翼が残って居る。

「箒！」

鈴音の叫びが聞こえるが、箒には手詰まりとしか言えない。

体勢も崩れ、武装も手放してしまった。

「万事休すか」

片翼の砲門は箒を捉えて離さない。

死に体となっている箒には避ける術もない。

——耐えてくれっ!!

光弾が殺到した。

「——っ、……………?」

いつまで待っても来ない衝撃に瞳を開けた時、そこに待っていたのは、銀の悪魔ではなく青い装甲だった。

「大丈夫ですか？」

それは、沙良とよく行動している女生徒。

箒が訓練に付き合ってもらっている女生徒、箒とも良く行動しているところを見かけている。

「……ああ、助かった」

その少女がシールドを広げ、箒と福音の間に割り込んでいた。

その至近距離から攻撃を受けたせいも、そのシールドも大きなダメージを負っている。

もう一度あの弾幕を受けられるかどうか。そのようなレベルでの損傷だ。

ハイパーセンサーが、鈴音とセシリアが福音を誘導し箒から距離を取ったことを知らせてくる。

「これ、武装です」

「すまない」

いつの間に回収したのだろうか、渡された雨月を強く握り締める。

「わたしもリナも壁となれるのはもう一回が限度です」

リナというのはもう一人のスペインの少女だろう。

「道は作ります。貴女はあれを墜とすことだけを考えててください」

そう言う少女の瞳は真剣で、その思いを汲むためにも箒は頷くことで答えとする。

「ああ、期待に応えて見せよう」

箒は雨月をしつかりと握りなおすと、福音に向けて真っ直ぐにスラスターを噴かす。

高速戦闘なら一度経験している。

次は仕損なわない。

鈴音にサインを出し、攻め入る隙を作ってもらう。

鈴音とセシリアの動きが変わり、ラウラが接近する。

箒が介入する隙を作り、そのフォーメーションに関わるようにスペイン組みが付属する。

慎重に。

ただ慎重に事をこなす。

地味に、しかし、着実にダメージを与えていく。

攻め入る時。そのタイミングは絶対に訪れる。

それを只管に待ち続ける。

鈴音が、衝撃砲を止めた。それはとある合図。だがそうとは知らない福音が鈴音に襲

い掛かる。

その福音の高速の突きは、鈴音の前に立ち塞がったラウラのシールドに呆気なく弾かれた。

セシリアの精密連続射撃が福音の翼を確かに捉える。

射撃の衝撃により、コンマ数秒だがあらぬ所を向いた砲口。

その隙を箒が切り裂きにかかる。

「はああああ!!」

だが、福音の方が速い。

少し後退し、砲口を全て広げ、一斉に掃射した。

だが、箒は止まらない。

「行つてください!!」

箒の盾となるように蒼い機体が二機割り込んだからだ。

箒の邪魔になりえるエネルギーグレネードは、音だけしか届かない。

——助かる。

一秒。

たった一秒。

だが、この場においては重大な意味を持つ一秒。

全員で稼いだ一秒を、此処で使う。

——決める。

盾となつてくれた二人が墜ちていく。

既にエネルギーもレッドゲージに突入しているのだろう。

引き撃った笑みを見せると、二人とも微笑みながら拳を突き出してくれる。

それは、行つて来いと背中を押されているようで、とても心強い。

——これで、最後だっ!!

二刀を福音の翼に押し付け、両腕の装甲を最大威力で展開、強大な推力を得る。

全エネルギーを使つても構わない。

ここで墜とす。

それが最優先。

「墜ちろお!!」

振りかざした二刀が装甲に食い込む感覚。

それを切り取ろうと力を込める。

「ああああ!!」

両手から伝わる抵抗が途切れた。

一瞬の攻防。その結果、確かに翼を切り落とすことに成功したようだ。

「箒!!」

鈴音の声が聞こえる。

——大丈夫だ、分かっている。

勢いが付き過ぎた身体を一回転させ、捻るように体を回すと、頭部目掛けて踵を振り落とした。

メインスラスターを失った福音は、真っ直ぐに海面に墜ちていく。

だが、そのエネルギーはまだ尽きていない。

「はああああ!!」

追撃。

箒は右腕に握られている雨月によるエネルギー放出を選んだ。

それは接近することを嫌ったため。他の者が攻撃しやすいように。

案の定、自由落下に任せる福音に各々が持てる限り最大の攻撃を放つ。

その最後の追撃は距離を詰めることなく、しかし的確にその装甲を焦がし福音を水面へと叩きつけた。

第五十七話 相応

その変化に最初に気づいたのはラウラだった。

最初は見間違いかと思った。

水中に沈んでいる福音は明らかに戦闘不能に見える。

しかし、その装甲が明らかに変化しているのだ。

水面による揺らぎではないかとも考えた。しかし、中途半端に切り取ったはずの一对の翼が根元から消えているのを視認したとき、嫌な予感がした。

——装甲が修繕された？

しかし、それは専用武装による換装ぐらいしか方法は無いだろう。

そんなものを福音が積んでいたとは考えにくい。

——物理ダメージの消失。自己的最適化。

まるで機体を形態移行させたかのよう。

「——っ！ まさかっ！」

ラウラが警告を出そうと口を開いたのと同じタイミングで、海面が光によって吹き飛ばされた。

「——っ!? 何が起こった!?!」

箒の戸惑った声が聞こえてくる。

それでも、切っ先を福音に向けているその精神は評価できる。

円形に切り取られた海。

そこはエネルギー力場によって海水が堰き止められているのだろうか、海底であったはずの地面に福音が自らを抱くように蹲っている。

恐れていたことが起きた。

この状態に気づいた鈴音とセシリアも焦った表情を見せた。

「まさか……『第二形態移行』なのか」

箒の眩きに誰も返事を返さない。

だが、沈黙はそのまま答えとなる。

箒もエネルギーが少なく、ダメージも軽度ではない。セシリアと鈴音は大したダメージを負ってはいないが決定力に欠け、無傷のラウラは機動力に欠ける。名も知らぬ沙良の取り巻き二人は、エネルギーも残り少ない。盾役が居ない状態でも第二形態移行。状況だけ並べてみてもその過酷さが分かる。

「……おい、何だあれは」

福音が居場所を空に戻す。その行為は何も可笑しくは無い。

だが、確かに切り取ったはずの両翼がその機体を包んでいた。

まるで守るかのように機体を包んだ両翼はゆっくりと蕾を開くかのように咲く。

神々しさすら感じる光の翼。

エネルギーによって構築された、福音の鐘。

銀の天使がそこに顕在した。

「は、何の冗談だ」

それが冗談ならどれほど良かったか。

「墜ちたはずの機体が強くなって復活って、どこの少年漫画よ」

鈴音のボヤキに、ラウラは全くだと頷いた。

「来ますわよっ!」

セシリアの警告通りにその翼が確かに動いた。

羽ばたく様に動くエネルギーの翼。ラウラが視認出来たのはそれだけだった。

「——ちっ」

速い。

あまりにも速すぎる。

今回、砲戦パッケージをインストールしているラウラは、そのスピードに対応することが出来なかった。

掴まれる肩。

懐に入られてしまえば、パッケージの影響もあり手出し出来なくなる。

——有効打は……

「篠ノ之!!」

光溢れる翼がラウラを抱く。

それはまるで女神の抱擁のよう。そして、ラウラにとっては死神の鎌と同意だった。だから叫ぶ。

タダで落ちてやるものかと。

「私ごと撃ち抜け!!」

肩を掴まれている福音に、あえて抱きつく。

迫り来る光弾に赤が混じってることを視認すると、ラウラは微笑を浮かべた。

「後は任せたぞ」



「うおおおおっ!!」

鈴音は咆哮を上げる。

箒の雨月により福音に大量の朱色の矢が刺さっていく。それは福音を確かに吹き飛ばし、ラウラから距離を取らせる。

手放されたラウラは真っ直ぐに海面に墜ちていく。箒の朱弾も確かにラウラを貫いたが、結果として、ダメージは少なくなっただろう。

ラウラが身を徹してまで作ったこの一秒の隙を逃すわけにはいかない。使うは双天牙月。

手に馴染んだ相棒をそのエネルギー翼に叩きつける。

それは直ぐに再構成されるであろう。

そんなことは鈴音にも分かっている。

だが、あえてその翼を狙ったのだ。

ラウラが稼いだ一秒を二秒にするために。

青竜刀は狙い通り、その両翼を消し飛ばす。

狙い以上の成果。鈴音は、そのまま円回転によって青竜刀を振るい続ける。その一撃の間にセシリアの狙撃が突き刺さり、それを合図に箒とスイッチする。

福音が攻撃に転じても数の利を生かし、攻撃の手を緩めない。攻撃は最大の防衛とば

かりに、装甲を切り裂き、エネルギー翼が再構築されれば切り飛ばす。

——いける。こつちが押し始めてる。

そう鈴音が思ったときだった。

福音に異変が起こった。

鈴音がエネルギー翼を切り離したと同時に、背部装甲が割れた。それは鈴音の攻撃によるものではない。福音が自分で割ったのだ。

「っ!？」

そこから現れたのは第二の翼。その翼は、鈴音を捉え吹き飛ばした。

鈴音からの攻勢が途絶えたことで、福音が攻勢に転じるのに必要なコマ数秒を生んでしまう。

「ちえ、っ(っ)まで……か」

その僅かな時間は、鈴音をたやすく嘯み砕いた。



「この性能……軍用機とはいえ、異常すぎますわ」

狙撃用のバイザーが鈴音が墜落していくのを確かに捕らえた。

その鈴音が抜けた穴は、そのまま筈の危険に繋がる。

それを理解しているセシリアは、筈が距離を取る時間を作ろうと、その照準をエネルギー翼に合わせる。

「——そうきますのね」

しかし、福音は筈のことは見向きもせず、真つ直ぐとセシリアに飛翔する。

狙撃をメインに運用しているセシリアの機体は、接近されることを苦手としている。

此処は距離を取りなおすのが定石というものだろう。

「でも、」

セシリアは手に持った長大な銃を振りかぶる。

「セオリー通りが、いつも正解とは限りませんわ!!」

接近を試みていた福音に、逆に接近する。そのまま、腰を入れて相棒で福音をぶん殴った。

勢いでレーザーライフルを投げ捨ててしまいが、他に武装を展開しているような時間はない。

ならばと、セシリアはスカート状に配置されている装甲に手を添える。

そこから現れるのは、大型拳銃。

セシリアが自分の弱点である接近戦に対して出した答えだ。

「箒さん！」

「分かっている！」

高速で福音の周りを飛翔する。

セシリアを捕獲しようと、福音が付随するが、その福音の頭部に狙いをつけ、引き金を絞る。

高速接近銃撃戦。

自分の矜持にそぐわなかったナイフを捨て、武装を完全に銃器で揃える。

まだ、完成した戦い方ではないが、戦場において甘えたことを言っている暇などない。だが、

「っー！」

馬力が違うためか、福音がセシリアの身体を捉える。

「離しなさいっー！」

二丁拳銃から放たれる弾丸は、確かに福音の頭部を弾く。しかし、当の福音が気にした様子もなくその翼を広げた。

——これは、本格的に拙いですわね。

「セシリアっ！」

箒が刀を振りかぶっているが、恐らく福音の方がほんのコンマ数秒速いだろう。

だから、

「喰らいなさい!!」

スラストーとして用いていたブルーティアーズを躊躇いなく切り離した。

離れ行く二機の雫。

それは福音とセシリアの間で、爆発した。



『情けないことに、わたくしは戦闘不能ですわ』

「不甲斐ないな、後は私に任せろ」

『ふふふ、強がりですね。……いいですわ。僅かに余力があるようなので、わたくしは戦闘不能者を回収します。箒さん、無理なさらず』

「ああ、最後まで格好付けさせろ」

水面に墜ちたセシリアが行動を開始したのを、箒は刀を福音に叩き付けながら確認する。

無意識に唇を噛み切る。

自分を信用してくれた仲間たちは既に墜ちていき、残ったのは自分だけだ。

福音も損傷がないとは言わないが、これほどまでに尽くしてくれた仲間がいるのにもかかわらず、箒は未だに福音を墜とせていない。

既にエネルギーも注意領域に食い込んできている。

——このままではジリ貧だな。

出力を最大に上げているからこそ、福音の速度に対応できているが、エネルギーが無くなればそれも適わなくなる。

——くそつ、全力で挑むためにはエネルギーが足りなさ過ぎる。

あの姉が、中途半端な機体を造るはずが無い。

ならば、このエネルギー不足も自分が機体を使いこなせていないというだけの話なのだろう。

あの姉が作った最高機の名を自分が汚して良い筈が無い。

「あああああああ!!」

外せ。

リミッターを、外せ。

この身を顧みるな。

『展開装甲、制限解除。出力を最大まで引き出します』



耳を擦る波の音に誘われ、記憶に無い砂浜を一人歩く。
足元に感じる砂の感触。海風が運ぶ潮の匂い。高く昇った太陽。
夏を連想させる風景。だが、一つ相応しくないものが。

「雪……か」

手を伸ばせば、手の平に落ちる雪の欠片。

「夢、なのか？」

それにしては意識がはつきりとしている。

これが明晰夢というものだろうか。

「不思議なものだな」

この空間は明らかに現実離れしている。

だけど、何故か此処が夢の空間だとは思えないのだ。

「……声？」

ふと声が聞こえた。

とても澄み渡ったその声は、リズムを刻み、音ではなく歌として耳に届いた。その声の持ち主が妙に気になった一夏は、足を其方に向けた。

澄んだ音を奏でる白砂が、歌と混じりあう。

歩むリズムと歌うリズムが綺麗に融和する。

そこには少女がいた。

白をイメージさせる可憐な少女。楽しそうに歌い、そして踊る。

純白の髪が揺れ、色を合わせたワンピースがふわりと舞った。

「君は……」

少女は一夏に気付くと、その踊りを止め、そして空を見上げた。

真夏の景色に降り注ぐ白い欠片。

その風景は、何故か一夏を不安にさせる。

「力を、欲しますか……？」

「……っ!？」

条件反射のように振り向くと、雪を背景に佇む一人の騎士の姿。

白く輝く甲冑は、その潔癖さをイメージさせる。

その両手は、自らの前に付き立てられた大きな剣の上に預けられている。

その剣は、一夏には見覚えがあつた。

「……雪片？」

自分が今まで振るっていた物に酷似している。

「力を、欲しますか？」

「……ああ」

一夏は自然に頷いていた。

「何のために」

「強くありたい」

「何故？」

騎士の聞き返しに、強い意志を持って答える。

「守りたいんだ。仲間を。大切な人たちを」

「そう……」

「俺はいつも守られる側だった。それは今でも変わっていないさ。でも、守られている人間だって、誰かを守ってはいけけないなんてことは無い。あいつらを守る力が欲しい」

手に乗った雪の欠片を握り締める。

「貴方は、守ることが大事なのですか？」

「いや……ちよつと違うな。傷ついて欲しくないんだ。もう二度と失敗しない。俺の弱さのせいで、もう誰にも傷ついてほしくない。だから強くなりたくないんだ。皆と一緒に戦える力が、横に立ち並ぶ力が欲しい。前に出て守る力なんて要らない。横に立って支えあう、そんな守り方がしたいんだ」

頭に思い浮かぶ大切な人たち。

姉も幼馴染も学校で知り合った友人たちも。

「あいつらは、前に立つと怒るだろうしな」

特に、沙良がな。そう笑って締めくくる。

一夏の意志は固まった。

騎士の優しい微笑みに、はつきりと答えを返す。

「借り物の力なら断る。俺は、自分の力が欲しい」

騎士はゆつくりと雪片を抜く。

その切っ先を一夏に向ける。

まるで、選ぶのは貴方だというように。

だから一夏は微笑んだ。

「雪を止ませてくれ。雪が相応しいのは夏じゃねえ、冬だ。雪の欠片は冬にこそ相応し

い。だから変えてくれ。夏にはもっと相応しいものがあるだろう?」

騎士は破顔一笑とばかりにその笑みを濃くした。

「だつたら行かなきゃ」

「えっ?」

その声は歌声と同じ。

先ほどの少女がいつの間にか騎士の横に並ぶ。

人懐っこい顔で一夏に手を差し伸べる。

その手を、一夏はしっかりと握った。

「——っ!?!」

変化は一目で分かった。

「……粹な事してくれるじゃないか」

蛍だ。

天高くから降り注いでいた雪は、その輝きを蛍へと変えていた。

飛び回る淡い光達。

「こつちの方が俺らしいよな」

その淡い光こそが、自分自身だと、一夏はその蛍たちを目に焼き付ける。淡く、だが確かに光を放つその蛍たちを。

少女の手を離し前を向くと、騎士が柄を一夏に向けて差し出していた。

その剣は、雪片ではなく、淡く光を反射する銀の剣。

それは、奉剣の儀式。

その柄を確かに受け取ると、切っ先を騎士の頭に向け、祝福を返す。

「重いな」

だが、確かに手に馴染む。

「ん？」

空が眩いほどの光を放ち始める。

もう役目は果たしたとでも言わんばかりに。

その真つ白な光に包まれ、目の前の二人の姿が霞み始める。

だから、声を出した。

「行ってくる」

最後に見た二人の表情は、確かに笑みだった。

第五十八話 横に立つために

光の入らない世界で、それだけが綺麗に光を放っている。

「なんで……」

沙良は、想定外の自体に戸惑いを隠せない。

焦る瞳が見つめる先には、救助カプセルで規則正しい呼吸をする少女の姿。

その少女の纏う装甲が、少しずつ粒子となって漏れ出していた。

その粒子は、暗闇の深海を淡く照らす。

「コアにダメージが入ったせいで、フォーマットが始まったのか」

それは、本当の意味での損壊。

積み重ねたISという存在自体の消滅。

「!Mierda!（くそつたれが!）」

沙良は必死に脳を働かせる。

何か方法はないか。自分なら出来るはずだ、と誰でもない自分に言い聞かせる。

「海良ならっ!」

その閃きは海良と空良を直接繋ぎ合わせるといふもの。

同じプロトタイプである海良と空良は、基本的なシステムは同じものを使用している。

シークエストシリーズの中でも唯一互換性を持つのだ。

そして、システムに潜り込む事に特化した唯一ワンオブアペリテイ仕様の特殊能力を持つ海良は、空良の管理者権限に入り込むことが出来る。

「シャルに空良を渡して良かった」

その有り難味を今、確かに噛締める。

「頼む、間に合ってくれ」

まだ空良を消すわけにはいかない。シャルの命は空良の致命領域対応によって保たれているのだから。

消えていく情報を、管理者権限を以って書き換えていく。

一が消えると、二を書き加える。

一が消える前に、先に一を書き加える。

やっていることはただの時間稼ぎだ。

だが、それでもシャルの状態が安定するまでの時間さえ稼ぐことが出来れば問題ない。

こうやって書き換えている間は、空良はシャルロットを守ってくれるのだから。

「どれだけ」

どれだけこうしていればいいのか。そう言おうとした思考は頭を振って取り消す。
「どれだけであつても、止める訳にはいかないんだ」



体の軋む音が耳に残る。

驚異的加速力に体付いていかないのだろうか、視界も少しぼやけてきた。ISを纏っているのだから失明はしないだろうが、後々後遺症が残るかもしれない。

肺が押しつぶされ、呼吸が辛い。空気の壁に当たるたびに、衝撃に体が千切れそう
だ。

それでも、関係ないと言わんばかりに、箒は加速を重ねた。

叫びを上げるように喉を開くが、声は響かない。

喉に何かが張り付いている感覚が気持ち悪い。

口から唾を吐き出すと、案の定血が混ざっていた。加速による圧力に肺が耐え切れなかったのだろう。

それでも箒は加速を求める。

福音よりも早く、速く。

もつとだ、もつと速さを。

数秒。

それが箒に残された時間。

加速された世界においても、それは短い時間だ。

一発でも攻撃を食らうことは出来ない。

その瞬間が箒にとっての敗北。

だが、箒は果敢に光弾の中に身を潜り込ませていく。

どんなに福音が砲撃を重ねようとも、全ての翼を切り裂き、装甲を弾き飛ばす。

——墜ちろ。

振るう刀が福音の搭乗者を紅く染める。

——墜ちろ。

残された時間が少ない。

エネルギーが既にレッドゾーンに入っている。

「墜ちろおおおおお!!」

二刀を両肩に叩きつける。全ての力を使いきる。展開装甲を全展開。例え、搭乗者がどうなるうとも。自分がどうなるうとも。

「はあああああ!!」

確かに食い込む二刀。

流石に腕を切り飛ばせば福音といえども止まるだろう。

——悪く思うな。

箒が最後の力を入れようとした瞬間、福音が歌った。

「——っ!?!」

視界が光に映りこむ。

考えてみれば分かることだった。

背部や腕から翼を広げた福音が、今更新しい翼を広げたところで何もおかしくは無いだろう。

腰から広げられた新たな翼に包まれた箒は悟った。

——嵌められたか。

同じことの繰り返しだ。

あの時と違うのは、もう箒にはエネルギー刀を構築するエネルギーが残っていないこ

と。

搭乗者に食い込んだ二刀は、引き抜くことすら出来ない。

そして、最悪のタイミングでリミットが来た。

「……具現維持限界っ！」

装甲が輝きを失い、手に持つ二刀が粒子となって消えた。

——ここまで……か。

全ての翼が箒を包み込んだ。

逃げ場は無い。

——すまない。

信用を預けてくれた仲間たちの顔が、

——すまない。

いつも自分を気にかけている姉が、

——すまない。

一緒に育った大切な幼馴染が、

——すまない。

大切な人たちが浮かんでは消える。

「いち、か……」

箒は迫る光に、覚悟を決めた。

決して、目を逸らさない。

その光で箒が墜ちようとも、最後まで諦めない。

——来い。

淡い光が確かに紅椿を包み、視界が白に染まる。

そして、

「——？」

何かが箒の身体を攫った。



『……具現維持限界っ！』

その声は確かに福音の翼の中から聞こえた。

「いた」

あそこに箒がいる。

しかし、未だ距離がある。すぐさま助けに入れるわけでもない。

危機的状況なのは誰が見ても分かる。

——間に合わせろ。

応えるようにスラスターが出力を上げる。

加速に加速を重ね、愚直に真っ直ぐ飛ぶ。

——もう少し。

微かに一夏の方が速い。

届く。

『いち、か……』

呼ばれた名に、ここに居るということを伝えるためにも。

「いぐぞ」

一夏は刀を握り締めた。

刀身の溝に、水を流すかのように光の線が走る。

「天ツ螢あまつほたる」

呼ばれた刀はしっかりと答えを返す。

刀身全体に淡い光が宿り、

「行け」

振るわれた刀に従い、その光を飛ばす。

その光は確かに福音の翼を挽ぎ取り、

「？」

一夏はしっかりと箒を抱き攫った。



——……………ん？

箒は身構えを解く。

「？」

——確かに光は当たったが……

しかし、身体にダメージは無い。それどころか、福音から弾き飛ばされた上に、その翼が消え去っている。

「何だ？ 何が起こった？」

海面から見上げる福音も何が起こったか理解できていないようだ。

そして、直ぐに答えを見つけた。

箒を攫った何かに、今でも抱きかかえられているのだから。

「あ……………あ、いち……………」

じわりと視界が歪む。

僅かに潤んだ視界は一人の人物を描き出す。

「いちか」

会いたかった。

誰よりも会いたかった人物が、確かに箒の目の前に居た。

「悪い、遅くなった」

そう言つて、箒の頭に手が落ちてくる。

「全く……大遅刻だ」

「その分、今から取り返すさ」

優しく撫でられると、より涙腺が脆くなるようだ。

止め処なく溢れる涙を箒は知らん振りする。

「行つてこい」

「おう」

その涙を一夏も見なかつた事にしてくれたようだ。

箒の頭から手を退かすと、一夏はこちらへ向かつてきた福音に真正面から対峙する。

今まで見たことのない刀を振るう一夏。

雪片とは違う、仄かな光を灯し続けるその刀は、翼を容易く切り裂いていく。

無駄を切り捨てたそのシルエツト。だが、福音を躊躇いなく殴りつけるその両腕は重厚な装甲が覆っている。

箒には分かる。

あの重厚な装甲は、箒がこの短時間で見慣れたものと酷似している。

「展開装甲……」

思うそばから、一夏はその装甲を開いて拳を加速させた。

エネルギーの噴射による加速を受けた拳が福音を殴り飛ばす。

だが、一夏は追撃をかけることなくその場に留まる。

その隙を福音が一斉掃射を以って埋める。

「くそっ！」

一夏の苛立った声が聞こえる。

両腕を前面に構えると、展開装甲から光が飛び出した。

まるで蛍のような光たちは、光弾に接触すると相殺し合うように消滅していく。

大きな出力を持ったエネルギーも、多くの蛍に接触してはその姿を消す。

それはまるで対エネルギーのチャフやフレアのようなものだろうか。

実際に、チャフやフレアには敵武装を迎撃して破壊する機能はないが、兵器に詳しく

ない箒にはそのような感想しか抱けない。

だが、一夏が相手の攻撃に対する対策を持っていることは分かる。

条件的には一夏のほうが有利に見える。しかし、明らかに優勢な筈の一夏が、攻撃に踏み切ることが出来ていない。

高速で飛び回る一夏は、度々苦痛に表情を歪ませる。

それもそうだ。

負傷して旅館に運び込まれたのだ。

それが機体が行方を済ましたとはいえ、体の怪我まで治るわけがない。

筈は強く拳を強く握る。

ISが嫌いだ。筈から家族を奪い、そして沙良と束から宇宙への夢を奪ったISが。

そうやって、目を背けてきた結果がこれだ。

いつも弱い自分のせいで誰かが傷ついていく。

筈を守るために国を捨てた束も、筈の代わりに注目を集める沙良も、大切な想い人である一夏でさえ。

力が、もつと力があれば。

「頼む」

また、目の前で大切な人が傷ついていく。

「お願いだ」

また、守られている。

「もう嫌なんだ」

横に立ちたい。

「もう見てるだけは嫌なんだ!!」

——Are you ready?——

——YES or NO——

突如現れた項目に、箒は反射的に拳を叩きつけた。もちろん答えはYESだ。

応えるように紅椿がその輝きを取り戻す。展開装甲から黄金の粒子が溢れ出し、赤い光を取り戻す。

——展開装甲完全展開解除——

——エネルギーバイパス構築完了——

「行ける……のか?」

その問いに答えるように、文字が現れる。

——絢爛舞踏、発動——



天ツ蛍の切っ先が福音に掠り、そのまま右腕で殴りつけようとする。

「くっー！」

しかし、超高速接近戦における急加速、急停止が一夏の身体に強制的なストップをかける。

軋む身体。理由はわからないが、あのような大怪我を負っていたとは思えない程回復はしている。それでもただ動けるようになったというレベルだ。普通なら安静にしていなければならぬレベルだろう。

身体の痛みにより、攻勢の手を緩めてしまう。

その僅かな時間に、詰めた距離が再び離されてしまった。

福音が再び砲門を開く。

「くそっ、繰り返しじゃねえかっー！」

一夏は悪態を吐きながらも両手を前に広げる。

「雨ツ蛍」
あまつほたる

新しい武装のイメージが上手く掴めない為、名前を呼ぶ。

一夏の呼びかけに呼応するように、小さな光たちが飛び出した。

光弾が、淡い蛍達にぶつかり消滅していく。

一つの蛍では完全にエネルギーを消滅させきれないが、二匹目、三匹目の蛍がその光

弾を消し去る。

数はこちらのほうが多いが、それだけで全て捌けるわけでもない。

蛍を壁にするように回避行動を取る。

その際、蛍はその場に残るものと、一夏に付随するものに分かれている。

——くそつ、攻めきれねえ。

幸い、新しくなった白式はエネルギー効率が上昇しているため、エネルギーには余裕がある。

だが、それも何時尽きるかは分からない。

どうにか手を打たねば。

そう思い、両腕の籠手を思わせる武装を構える。

あまつほたる
「海ツ蛍」

名に呼応するように、その装甲が開き、拳を厚くする。

——タイミングを間違えるな……

相手の動きを予測し、フエイントを見逃さない。

——今っ！

一夏が飛翔した。

しかし、そのタイミングと同時に福音は背後へと距離を取った。

「逃がすかあ!!」

しかし、急加速により身体が悲鳴を上げる。

その僅かな隙に福音は、全ての翼を自分に巻きつけ始める。

——まさかつ!?

その予想通り、福音は全方向へと光弾を放ち始める。

それは、一夏だけではなく、水面に漂う仲間たちにも牙を剥く。

——攻めるか、守るか

一瞬の迷い。

それを吹き飛ばすのは、一つの声だった。

「あたしたちは気にしないで行きなさい!!」

声を返すこともなく、ただ愚直に直進した。

全方向に飛ばした光弾は、その分一夏への圧力を薄くする。

だが、だからといって闇雲に突っ込めばいいわけではない。

——道を探せ。

その意志を継ぐように、紅弾が走った。

福音への道が赤く色付いた。

「行け、一夏!! 道は私が付ける!!」

聞こえる頼もしい声。

「ああああああ!!」

右腕に蛍を纏い、光弾を潜り抜ける。

しかし、福音は回避行動を取る。

「逃がすかつ!!」

しかし、その行動は回避というよりもどこかに向かうよう。

福音はそのまま最大速度で海面へと突っ込んだ。

「……………は?」

その突発的な行動に、一夏も筈も戸惑いが隠せない。

その行動の意味に気付いたのは、一人の少女だった。

少女は福音の意図に気付いたようで、福音に付随し海中に潜っていく。

エネルギーの残っていないその機体で福音に付随するなんて無謀にも程がある。

「どうしたっ!？」

その少女に一夏は声をかける。幸いにもその少女は顔見知りだ。

『イチカさん!!』

「何だフィオナ!？」

『この海域に沙良さんが居るんですっ!』

「——っ!? そういうことか!」

一夏はすぐさま海中に潜り込んだ。最大加速で海中を潜っていく。箒が一夏に付随する。

「一夏! 持って行け!」

そう言つて触れられた箇所から、電流のような衝撃が流れ、身体が熱を持つ。

「なっ!? エネルギーが!」

エネルギーゲージが回復していく。

「行つてこい!」

箒は強く背を叩く。

「おう!!」

最初に千冬に言われた通り、福音は沙良を優先するだろう。

それは、沙良のデータを囿として書き込んでいるシャルロットも同じだ。

その二人が、今この真下に居るのか。

『沙良さんは非戦闘パッケージをインストールしてます!』

「直ぐに行く! あまり刺激するなよ!」

『それは無理な相談です。わたしは沙良さんが最優先です』

「それを分かつて言ってるんだ! フィオナが傷つくと沙良が悲しむんだぞ!」

『承知の上です』

そう言つてフィオナは通信を切る。

「馬鹿野郎が！」



『沙良さんっ！ 逃げてください!!』

フィオナの悲鳴のような声に、ようやく福音が接近していることに気付く。

しかし、今シャルロットから離れるわけには行かない。

だが、今回救護パッケージをインストールしている海良は戦闘に向いていない。

悩んでいる暇はない。

「チャフ展開」

レーダーを錯乱する電波欺瞞紙を海中にばら撒く。

海中においてはソナーやレーダーに頼ることが多いため、少しは攪乱できるであろう。問題は、味方のソナーも攪乱してしまうことだろう。だが大まかな位置は分かるだろ

う。それは敵も一緒なのだが。

だが、自らのレーダが、非情にも福音の接近を知らせてくる。ファイオナや一夏たちは間に合わない。

「!J o d e r ! (ちくしようが!)」

福音の光弾がチャフを弾き飛ばす。

それは、もう後がないことを示唆する。

シャルロットの傍を離れることが出来るのは、大目に見繕つても一分が限界だ。

福音が海良の頭部を掴む。

無理やりシャルロットから引き離されると、左肩部に光弾が突き刺さり爆発する。

「っ!」

その衝撃でシャルロットから大分引き離されてしまった。

目視でも、その装甲が粒子になっていくのが見える。

「そこを退けえ!!」

海中を動くことに関しては海良に分がある。

シャルロットにたどり着くことさえ出来たら。

「——っ!?!」

その思考は、福音に脚部を掴まれる事で霧散した。

「離してっ!」

声に出すが、そんなこと福音が聞き入れるわけもない。

福音の翼が大きく広がる。

それでも、沙良の視線はシャルロットへ向いていた。

段々と希薄になる装甲。粒子化が一向に止まらず、空良はただ消滅へと進む。

「離して、離せよ!!」

福音が沙良を翼で包み込んだ。

視界が光で遮られ、シャルロットの姿が完全に見えなくなる。

『沙良さん!!』

その声と同時に身体が弾き飛ばされる。

抱擁から抜け出した沙良が見たのは、庇うように立ち塞がるように構えるフィオナの姿だった。

だが、フィオナは戦闘用のエネルギーが切れている。

エネルギー切れのISの脆さは、沙良も良く知っている。

例え重厚なシークエストといえども耐えられる筈がない。

砲口が光を溜める。

その頭脳が、死という答えを弾き出す。

「止めろお!!」

叫びが、海中に響き渡った。

第五十九話 この気持ちを何と呼べばいいのだろうか

シャルロットは海中に漂っていた。

目を開けると、はつきりと視界が見え、何故か呼吸も出来る。

不思議な感覚に、ここが現実でないことが強調される。

「夢……かな」

自分は福音と戦闘し、墜ちたはずだ。ならばここは天国なのかもしれない。

天国は空ではなく海にあったのか。これは定説もひっくり返る大発見だ。そんなくだらない事を考える。

「まあ、僕が天国に行けるわけないけどね」

——天国か、面白いことを考えるね。

シャルロットの思考に対応するように聞こえる声に、意識を周囲に向ける。

そこには、藍白のイルカが優雅に泳いでいた。

その存在に驚くこともなく、浮力に身を任せる。

まるで無重力のような感覚。

まるでスクーバダイビングをしているようだ。

「そういう言い方をするってことは、まだ生きてるようだね」

——まあね。でもいつ死んでもおかしくはないよ？

「そっか、ごめんね」

シャルロットは気楽に声に出す。

——何が？

「一緒に泳げなくて」

——察しがいいね。

シャルロットの周りをぐるぐる泳ぐイルカはまるで笑っているかのように泡を吐く。

「やっぱりイルカの姿なんだね」

——それは君たちがそうイメージしてるだけの話だよ。ここは、イメージで構築される世界なんだから。

「そっか」

イルカはシャルロットの前で止まると、ヒレに引っ掛けていたペンダントをシャルロットに取らせる。

「これは？」

——この子も、君にありがとうって。そしてごめんってさ。

渡されたペンダントは、何故かその存在が希薄に感じられる。

それだけでシャルロットもなんとなくだが理解した。だからそれをイルカに返した。

君が持つておいて。そう目で伝えると、イルカは黙ってそれを口に啜えた。

——君は行かなくて良いの？

先ほどから海中には外の風景が映し出されている。

必死にシャルロットを繋ぎとめようとする沙良の姿が。

「沙良……」

シャルロットは胸の前に手を当てる。

その視線は真つ直ぐ向いたままだ。

「僕はどうすれば良い？」

——それは君が決めることさ。

「君はどうするのか」

——それも君が決めることさ。

外が騒がしくなる。

イルカとの会話を一度中断し、其方に気を向けてみると、そこには形態が変わっている銀の機体。

「福音……」

沙良がシャルロットから引き離される。肩に爆撃を受け海中を漂う姿に、唇を噛んだ。

福音がシャルロットに駆けつけようとした沙良の脚部を掴んだ。

その翼が広げられる。

——このままでは答えは変わらない。でも、僕と君なら答えは変えられる。

イルカがシャルロットに擦り寄る。

——さあ、決めて。僕は既に君を、認めているよ？

近くに来た頭を優しく撫でる。

生きているのなら醜く足掻こう。この人生、ただ一人のために使おうと決めたじゃないか。

いか。

だから、シャルロットは声に出した。

「支えてくれる？ ドルフィン」

——うん、良い答え。

イルカが粒子となり、海中が泡に包まれていく。

視界が暗転した。



視界には迫り来る光弾。

しかし、後ろには沙良とシャルロットがいる。

沙良だけならこの一瞬で回避行動に出れるかもしれない。しかしシャルロットはそういうわけにもいかない。

ここで退くわけにはいかない。

——本当、馬鹿ですね。わたし。

フィオナは自嘲の笑みを零す。

シールドエネルギーの切れたISは脆い。銃弾ぐらいなら受け止められるが、エネルギーグレネードは流石に荷が重い。

それに、この深海においてISの保護無しに生存することなど不可能に近い。

だが、身体が勝手に動いたのだ。

仲間を見捨てられなかったのだ。

そんなの仕方ないじゃないか。

両手を広げ、沙良を庇うかのように立ち塞がったフィオナに、光弾が迫った。全てがスローモーションで動く。

——ああ、本格的に駄目なやつですね。

そう笑うと、光弾は全てフィオナを避けるように軌道を曲げた。

「え？」

光エネルギーを主体に構成される光弾は、その軌道を曲げるような真似は出来ない。それは相対性理論が実証している。

光は時空を直進しか出来ない。

なら、何故目の前で光弾が曲がったのか。

「まさか……」

フィオナは知っていた。見た目的に光を曲げることが出来ることを。

同じく、相対性理論によって実証された現象。

「重力は、光を曲げる」

重力によって歪められた時空を光が通る時、歪みにそって光は直進する。

故に、光が曲がったように見えるのだ。

そんな芸当を出来る機体など、フィオナは一つしか知らない。

特殊重力制御型空間制圧兵器。

それをメイン武装に持つ機体。

今までずっと開発に携わってきたのだ。フィオナが間違えるはずがない。

「フィオナ、無事？」

少し聞いていなかっただけで、随分と懐かしく感じる声。

「シャル、さん……」

「もう、二人して泣かないでよ」

涙腺がまるで言う事を訊かない。

それは、沙良も同じのようだ。

海中に漂う藍白の機体。

ドルフィンを纏ったシャルロットが、確かにそこに居た。



全く言うことを聞かない四肢を、ドルフィンが無理矢理動かす。

もちろん痛みはある。だが、その痛みが生きているということを強く実感させてくれる。

「意外と、馴染む」

一次移行を済ましたドルフィンは、しっかりとしたレスポンスをシャルロットに返す。

今までのラグが、まるで嘘のようだ。

「これが専用機」

量産機として開発していた機体が、ようやくシャルロットの専用機となったのだ。

専用機。その言葉通りに、最善を尽くせるように作られたたった一人のためだけの機体。

本来なら、ドルフィンはまだ専用機にする段階ではなかった。一次以降は全てのデータを取り終わり、他の機体の作成に入ったらという話だったのだ。それを、シャルロットの危機といえど勝手に専用機化したのだ。後でどんな処罰が待っているかわからない。

それでも、つい笑みが浮かぶ。

この力が、自分の新しい力。皆の期待を一身に受けた希望の機体。

手を向けている先には福音の姿。だが、その姿は蜘蛛の糸に囚われた蝶のよう。一切の身動きを封じられたかのように、海中に固定されてしまっている。

「凄、い……」

フィオナの眩きが聞こえる。

それはまさに水の檻。

水は、圧力を加えようともその体積が変化することはない。

つまり、高圧力で水を固めている場合、その水は強固な壁となるのだ。

海水の壁に埋もれた福音は、足掻こうと翼を広げようとする。しかし、その翼も重力帯に捻じ曲げられ伸ばすことが出来ない。

シャルロットはニヒルな笑みを浮かべる。

「チエックメイト」

その言葉に應えるように、水面方向から影が落ちる。

水中を高速で動く独特の音。

空洞現象キャビテーションによる気泡を纏い純白が光を反射する。

その姿を見たフィオナが、唇を尖がらせて呟いた。

「遅いですよ、イチカさん」

腰に刀を構えた一夏が、スラスターを噴かし一直線に潜る。

やや姿形が変わった白式が、その刀に光の線を走らせる。

「天ツ蚩!!」

名と共に刀身が淡く光を帯びた。

一夏の刀が重力帯を切り裂き、

「千切れ!!」

福音を沈黙させた。



福音の搭乗者を救護カプセルに押し込み、海中をゆつくりと飛ぶこと十数分。一向はようやく旅館に帰還した。

波打ち際に辿り付くと、皆が思うままにISを解除していく。

「シャルロット、大丈夫?」

「もう、リナったら。さっきから同じことを何回も聞いてるよ?」

心配そうにシャルロットを見つめるリナに、つい苦笑を漏らしてしまう。

「まあ、リナの気持ちも分からなくはないですけどね」

「その怪我だもんな」

「む、一夏には言われたくないよ」

「でも、シャルロット。解除したら歩けないでしょ?」

リナの言うとおりに、ISを解除したら歩ける状態ではないだろう。両足に火傷を負っているようだ。折れてはいないだろうが、罅が入っている可能性がある。

左肩は、ISを纏っていても動かすことが出来ない。良くて脱臼、最悪の場合骨折といったところか。

「まあ無理だろうね」

「シャルロット、ちよつと待ってなさい。どうせ歩けないでしょ？ 担架か車椅子借りてくる」

「うん、ごめん。ありがとうリナ」

「その必要はない。脚部だけISを展開している」

「——っ!? 織斑先生!？」

旅館から複数人引き連れて、千冬が姿を現す。

その姿は鬼気纏い、腕を組み片手に持つ出席簿が小刻みに揺れその怒気を主張する。

この寒気は怪我のせいか、千冬のせいか。

「^{Message}戦完了——と言いたい所だが……………お前たち分かっているな？」

「ち、千冬姉」

「織斑、黙っている」

「は、はいっ！」

不意に睨みつけられた一夏が、びくりと身を竦ませる。

「お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。当分の間行動に規制がかかると思え。まあ、その時間を有効に使えるように始末書と懲罰用の特別トレーニングを用意しておいてやる。感謝しろ。それと、代表候補生のお前らは半年間の減棒だそうさ。特に、軍属はまた軍のほうで懲罰を言い渡されるだろう。休暇は無いものだと思え」

皆の勝利に高ぶっていた気持ちが一瞬で地に落とされる。

リナが崩れ落ち、砂地に両手を付いた。

「私の、私の夏休みが……」

「ふふん。わたしは代表候補生でも軍属でもないから関係ありませんね」

「ああ、そうそう。SQCに報告したところ、ファリーノスが後で連絡するようにと伝えてくれとのことだ。ボーナス前に大変だな」

そう言い捨てる千冬に、フィオナは膝を付き天を仰いだ。

「わたしの、わたしのボーナスが……」

その二人を放置して、千冬は場を仕切る。

「それでは、今から楽しいお説教タイムと行こうか。付いて来い」

「……そんな、あんまりですわ」

「頑張ったのにこの仕打ち……やってられないわね」

「それが教官の決めたことならば従うしかないだろう」

「黙って付いて来い」

「「はいっ！ すみません!!」」

「ルイス、お前はそのまま救護室に向かえ。お前はお咎め無しだ」

千冬の手が頭に置かれる。

「よく帰って来た」

そのまま撫でられる。

あの千冬が自分の頭を撫でるといふ状況に、少し呆気に取られてしまう。

「よく守ってくれたな。お前に任せてよかった。あいつの姉として感謝する」

一瞬、なんのこともか理解が追いつかなかった。だが、確かに思い当たる節がある。

それは出撃前に交わした言葉。

『分かりました。沙良は私が守ります』

『任せただ、ルイス』

たった一言だけだが、確かに千冬はそう言ったのだ。

任せたと。

沙良を守ることは成功した。だが、それは――

「僕……私は、正しかったのですか」

——正しかったといえるのだろうか。

シャルロットの悲痛な表情とは対象に、千冬は柔らかな表情を見せる。

「私の正しさと、お前の正しさが一緒とは限らないだろう?」

「それでも、私は……死を」

「確かにお前のした事は、教師の立場としては到底許容できない。死を受け入れるなど到底許せたものではない。残された者の辛さは私もよく分かるからな」

「……………」

シャルロットは死を覚悟した時、沙良を守れるならば心を傷つけてもいいと思った。命が無事なら、と想いを度外視しようとした。

傷は何時かは癒える。そんな事、残していく側の詭弁に過ぎないことはシャルロットもよく分かっている。

だが、それではどうしようもなかったのだ。ハイリスクで全員が助かる道を行くのか、一人を犠牲に残りを確実に助けるか。そのような問いに、正しい答えなんて無い。

「お前は間違えているよ……だがな、シャルロット」

「……………」

千冬が珍しく、名で呼ぶ。

「結果論とは言え、お前のおかげで誰も悲しみを得ていない。ならば間違えていたとしても、お前は正しく間違えられたさ」

「……っ、はいっ！」

「お前への個人的説教はまた今度だ。早く治療してこい。あいつが『痕も残らないように治療してあげる』なんて言うものだから耳を疑ったよ」

あいつとは、束のことだろうか。人間嫌いの天災が、よくシャルロットを治療する気になったものだ。

シャルロットの疑問に感づいたのか、千冬が答えとなる言葉をくれる。

『お礼』だと。良かったなルイス。一番の壁を懐柔するチャンスだぞ？」

そう言つて千冬はニヤニヤとシャルロットに下世話な視線を向ける。

「お、織斑先生っ！」

顔が赤くなるのが自分でも分かる。

その表情を見て満足したのか千冬は表情を緩ませる。

「ははは、しつかりと治せよ」

笑いながら去っていく千冬は実に楽しそうだ。

その後姿を呆れたように見送る。自分は速やかに救護室に向かわねばならぬだろう。担当の教員が待機しているのであろうから、待たせるわけにはいかない。だが、足はここ

から動こうとはしてくれない。

誰も居なくなる砂浜。

そこに一人、自分を待つものが居るのだから。



人が居なくなるのを待っていたのだろう。沙良が拳を強く握り締め歩み寄る。

その表情はまるで泣きそうに歪み、怒りを耐えているように見える。

二人残された砂浜で、張り詰めた空気が場を支配する。

「シャル」

名を呼ばれ、

「——っ」

頬を殴られた。

ISの補助により、転ぶことは無かった。本気で殴られた頬は、赤く腫れ、熱を持つ。

だが、肉体よりも心に痛みが走った。

「……」

言葉すら出ない。

殴られたまま正面を向くことのできないシャルロットを、意気地なしと責められるだろうか。

甘んじてその怒りを受け入れようと、正面を向かなければと頭では思っている。だが、予想以上に自分の心は弱かったようだ。

「こつち向いて」

普段なら絶対に使わない乱雑な言葉。口調から感じる途轍もない怒りの感情。

情けない。目を合わせる勇気がない自分が。嫌われたと、そう思うだけで心臓が止まりそうになる。

こんなに自分が弱かったなんて、始めて知った。笑えるものだ。こんな状態でよく守ると言えたものだ。

「聞こえてるの?」

片手で両頬を挟むように掴まれると、無理矢理正面を向かされる。

抵抗することが烏滸がましい。促されるまま沙良と目を合わせる。

嫌われたと思った。もう自分は横に居てはならないと。

だが、その瞳はシャルロットを責めているようには見えない。

沙良は泣いていた。綺麗な瞳に涙を浮かべ、透き通る雫をほたりほたりと砂浜に染み込ませていく。

「ふざけんなよ……」

翠玉の虹彩から水滴が零れ、頬から顎に伝わらせる。

「あんな言葉を囁いておいて、死ぬ覚悟だつて？ ふざけんなよっ！」

沙良が声を荒立たせる。弾かれたように飛ぶ水滴が、シャルロットの衣服に落ちる。

口を塞ぐように掴んでいた手が、そのまま頬を撫でるように這わされる。

「残される僕の気持ちはどうなるんだよ……」

「……ごめん、なさい」

その表情は色んな感情がぐちゃぐちゃに混ざり合っていた。

喜悦、憤怒、悲観、安堵。そのどれも分からない複雑な感情。

「喜びを抱きしめたら良いの？ 怒りを吐き出せば良いの？ 哀しみを受け入れたら良

いのの？ 気楽に胸を撫で下ろせば良いの？」

「……沙良」

「痛いよ。この辺りが痛いんだ。張り裂けそうなくらいに痛むんだ」

そう言つて、その手が左胸を押さえる。ギュツと強く掴んだ服は、皺を携え形を崩す。

「僕だつてわかんないよ。どうしたら良いの？ このもやもやした気持ちはどうやっ

ら治まるの？ 言葉で表せないよ。色んな感情が混ざつて苦しい。胸が苦しいんだ

……」

「……」

「シャルが居なくなつて、ずつとだ。痛くて痛くて仕方ない。僕だつて自分のことばかりで最低だと思つてる。でも、もう嫌なんだ。あんな想い、もう懲り懲りだ。あんな気持ち、もう味わいたくもない。だから——もう僕の傍を離れないで」

その感情の吐露に体が勝手に動いた。これは無自覚といつても良い。

沙良自身が自覚していない意思に、その意味を理解してしまつたらもう止まらない。最低だ。

こんなにも彼を苦しめていたということに。自分を思い、彼が苦しんでくれたということに、歓喜してしまつたのだ。自分でも思う。最低な人間だと。

だから、あえてこう言おうではないか。

最低同士、お似合いだと。

気付けば、腰を引き寄せ、近寄つた桃のような唇へ、自らのポロポロの唇を寄せていた。

その距離は有無も言わさず埋められていき、

「いめん」

言葉を紡ぐ、そのタイミングで、

「シャ——」

塞がれた。

「……………」

切れた唇が些細な痛みを伝わらせるが、それに勝る快楽に思考が逸れていく。

重ねた唇の甘美さは、正しく胡蝶の夢の如しと言った所か。

「あ……………ん、……………な、に……………んうっ……………」

咄嗟の出来事に、合わせた唇から戸惑いの声が挙がった。

ただ唇を合わせるだけ。

舌が口内を蹂躪するわけでも、お互いの唾液を交えるわけでもない。

ただ、お互いの唇の柔らかさを確かめ合う。

抵抗する身体を抑え続け、その身体を逃がさぬように捕らえる。抵抗が止んだと思えば、吹っ切れたように沙良の身体から力が抜けた。

シャルロットは支えとなるようにそつと、その身を受け止める。寄りかかる身体を、強く、強く抱きしめる。

後頭部に手を回し、強く唇を交わす。

唇を合わせるだけで、お互いの鼓動が、想いが、互いの全てが伝わるような錯覚。

優しさ、怒り、戸惑い、悲しみ、そして喜び。その全てを共有できるかのような感覚。

欧州の出だけあって、口付け自体の経験はある。だが、こんなにも心の隙間を埋める

口付けは初めてだ。

隙間風に吹かれ、凍えていた心が温められていくような、そんな口付け。

「……そんなんで、誤魔化されないから」

「……え？」

銀の橋により繋がれた唇から漏れる言葉。

沙良が這わせた指で拭ってくれ、初めて自分が泣いていることに気付いた。

「……あれ？ ……何で止まらないの？」

先ほどと立場が変わったように、今度は自分の瞳から涙が止まらなくなる。まるでダムが決壊したように、エメラルドのようと評された瞳は視界をぼやかし、頬を濡らし続ける。

「僕から離れたら怒るから」

普段なら、そんな理不尽など笑っただろう。だが、今はその言葉が何よりも嬉しい。

それに、言葉が何と言おうと、優しさは所作に現れる。

声を詰まらせ、肩を震わす。

視覚が全く役に立たなくなり、零れる熱が砂浜を濡らす。

堪らず彼の胸に顔を埋める。腕が、丸く曲げられた背中に回り、落ち着けと優しく撫でてくれる。

「ずっと………、ずっと、傍に居てくだざいっ！」

頭が思考を放棄し、ただ感情に従うままに思いを垂れ流した。声を上げ、想いを叫ぶシャルロット。

「ばか。本当に、ばかなんだから」

その背中を沙良は愛おしむように撫で続ける。

その胸部はシャルロットの涙で濡れてしまっていた。

愛おしい彼。

彼の顔が見たい。彼の表情を。彼と目を合わせ意志を交わしたい。彼からの感情を感じ取りたい。

その思いで、未だぼやける視界を上げ、輪郭の曖昧な彼の瞳を探す。ようやく探し当てた緑玉の瞳は、シャルロットに魔法をかけたように身体を熱くする。

沙良の頬に手を伸ばした。慈母の微笑で受け入れてくれるその頬は、熱を流しきった心に掛け替えない温もりを与えてくれる。

もう一度、沙良に触れられる。

それがどんなに嬉しいことか。

あの時の覚悟に嘘はない。それでも再び沙良の傍に立つてしまえば、もう離れたくないとも思ってしまう。

「さ……っ、……ら……」

言葉が出ない。

たった一言伝えるだけなのに、感情が溢れる。

涙が滲み、呼吸が荒くなる。

「大丈夫、ここににいるから」

沙良がシャルロットに抱きつく。

左腕が動かないことは沙良も気付いてくれているのか、身体に影響のないように優しく抱きしめてくれる。

シャルロットは右腕だけでそっと抱き返した。

「ただ、いま」

「うん、お帰りシャル」

帰って来れて良かった。

大好きな人の元に帰って来れて。

「もう、一度……会え、て良かった」

シャルロットは強く、強く沙良を抱きしめる。

これから先も、シャルロットは同じような選択をしていくだろう。

そのことに迷いはないし、後悔もない。

でも、根本的な気持ちに変わりはない。

「……せ、ら」

「なあに？」

「きす、したい」

答えが返つて来る前に、彼の唇を奪う。

まるで、小鳥が啄ばむ様に何回も、何回も。

そこに居ることを、その存在を、体温を感じることで確かめる。

この想いが実ることとはなくても、知っていて欲しい。

——この気持ちは、きつと麻薬みたいなものだ。

一度知ってしまったら、もう忘れられない。

体験してしまえば、もう逃げられない。

「貴方が、好きです」

第六十話 戦いが終われば

任務から帰還すれば、きつと全てが丸く収まっているだろう。

そう考えていた自分が愚かだったと、痺れだした足に悲鳴を上げながら悟った。

「……足がっ」

「大体、お前たちは専用機を持っているとは言え、学生の——おい、風、聞いているのか!?」

足が撃っているため正直それどころではないのだが、そんな事は鬼教師には通用しない。

頭に振り下ろされる出席簿に、くぐもった悲鳴を上げる。

顔を上げ、その際に周りを見てみると、セシリアとラウラの顔色が真っ赤から真っ青に変化していた。

箒は正座には慣れているのか涼しそうな顔をしているが、大方体中の痛みを必死で堪えているのだろう。その手が僅かに震えている。

このなかで一番怪我の酷い一夏は椅子に座り、説教を聴いているが、千冬の身内ゆえの心無い一撃が度々挟まれているのが哀れで仕方がない。

椅子に座らせるぐらいならば治療を先に済ませれば良いのに、と考える鈴音が正常なのだ。教師としては生徒の怪我を考慮するのが正しい姿ではないだろうか。

大方、これも罰の一種なのだろう、と理解はしているが、納得には程遠い。

「織斑先生。そろそろ勘弁してあげたらどうです？」

「……まあ良いだろう」

簡単な治療を受け、大広間で正座すること約三十分。

真耶の一言を以つてようやく説教から開放された鈴音は、畳のあとがクツキリと残つた足にため息を漏らす。

「正座を解き、足をよく揉みしだくと、真耶がとある箱を運んできた。

「はい、みなさんよく頑張りましたね。では一度休憩を挟んでから今後について説明していきます」

ね。スポーツドリンクを用意したので一つずつ取ってください」

のそのそと立ち上がり、真耶に手を伸ばすと、笑顔でパックを渡してくれる。

礼を言い、ぬるめの水分補給パックを受け取ると、早速口に啜える。今更ながらに喉の渴きを思い出し、一気に中身を飲み干した。

ゴミを真耶に返すと、先ほどから微動だにしないラウラが目につく。

「……………」

「何してんのよ？」

「……見て、分からんか？」

「いかにも足が痺れて動けませんって感じねアンタ」

「分かってる、なら、訊くな」

「はあ、ほらアンタの分」

差し出したパツクにラウラが手を伸ばす。

つい、そのパツクをひよいと持ち上げると、ラウラの体がそれに釣られて前に倒れていく。

「くっつー！」

「そんなに足が痺れてんの？」

「そういい、足をつんつんと突く。」

「くっくっくっ！？」り、鈴、貴様あ!？」

「お前らは静かに出来んのか」

「——っあいつたー!？」

声と共に頭に拳骨が落ちてきた。

声に詰まる痛みに、頭がグラグラする。

ラウラに居たつては、頭を抱えプルプルと悶絶していた。

「お前らは説教が足りないようだな」

「ハンセイシテマス」

「……………」

「えつと、あはは。そ、そうだ、沙良はどうしたんですか？ この場に居ませんけど」

「……今回はそれで誤魔化されておいてやろう。次はないと思え」

「……スミマセン」

「何か言いたそうな顔をしていたのでな。付き添いを許可した」

その言葉に、女子たちがピクリと反応を示した。

「ルイスにとつては良い薬になるだろう」

数年の付き合いである鈴音は、沙良が取るであろう行動が簡単に予想できた。

沙良は、大切な者が自分のせいで傷付くことを何よりも嫌う。その行為を自分から行なったシャルロットはどんな罰を受けているのだろうか。

「ああ、あの子も散々ね。沙良、何だかんだで怒ってたし」

「あら、やはりそうでしたの？」

「表面上だけ取り繕うのが沙良の癖だからな。よく見ていれば気付く」

「まあ、沙良は怒った後のフォローが甘々だし、普段感情を溜め込んでいる分、何だかんだで良い空気になってるんじゃない？」

沙良に対して、熱い想いを秘めているシャルロットが、こんなイベントを逃すとは思えない。感情が高ぶる時こそ、仲が深まるというものだ。

もしかしたら、シャルロットが一步踏み出しているかもしれない。

「そう考えると……これは後で話を聞く必要があるそうね」

「そうですね。食事の後に集まりましょうか」

「集合場所は どうする」

「それなら沙良の部屋が一番都合が良いだろう。一人部屋と聞いているし、シャルロットもどうせ沙良の部屋に入り浸っているだろう」

「お前らも程ほどにしておいてやれよ？」

千冬の一言に、皆が苦笑を浮かべた。



「なあ、フィオナ。あいつら何盛り上がってるんだ？」

「イチカさん、女の子には女の子にしか分からない話題つてのがあるものなんです」

「ふーん。そんなことより夕飯が待ちきれないぜ。昼も食べ損ねたしな」

「イチカさんはもう少し女心つて物を理解した方がいいかもしれないね」

「おーい、イチカ。先に治療受けろつてさ」

「おう、わかった。それじゃあ行ってくるわ」

「はあ、これは同情するレベルですね」



「最近の医学は発展したものだ」

ナノマシンによる最先端の治療を受けた箒は、痛みがなくなった体に驚きの声を上げる。

歩くことも辛かったはずの負傷が、今は痛みも治まっている。

痛みが弱まっているが、怪我自体が完治したわけでもない。だが、幾分かマシンになった体に、医学の発展をしみじみと感じる。

「それにしても大分遅れてしまったな。皆はもう集まっているだろうか」

治療のため救護室に寄っていた箒は、少し遅れて目的の場所に到着した。

それは、食事の前に決めた沙良の部屋。

ここで、シャルロットを問いただそうという話の流れだったはずだ。

他人の恋愛ごとに首を突っ込むのは野暮のような気がするが、そこは十代半ば。恋愛ごとには敏感な年頃なのだ。

既にシャルロットは問い詰められているのだろうか。
ノックをし、どうぞの声に扉を開けた。

「はっ。」

予想だにしていなかった光景に腑抜けた声が漏れる。まるでパーティーのような飾り付け。それよりも目を惹く大きな垂れ幕。

Happy Birthday.

そう書かれた垂れ幕が箒の視界に映っている。

「箒、誕生日おめでとう!!」

一夏の掛け声と共にクラッカーが鳴らされる。

呆けたままの箒に、紙テープが降り注ぐ。

「箒、誕生日おめでとう」

沙良が箒の手を取り、部屋の中へと招き入れる。

主役の登場に沸き立つ周囲に対比して、箒は混乱に頭が真っ白になった。

「ま、待て。確かに私の誕生日は今日だが、教えた覚えがないぞ?」

「何言ってるのよ? 一夏と沙良が居るじゃない」

鈴音は、さも当然のように言い放った。

「まあ、あたし達も昨日初めて聞いたんだけどね」

「わたくしも昨日初めて聞きましたわ。本当に水臭いお方ですわね」

「全く、何故黙っていた。情報の共有は基礎中の基礎だ」

「僕も昨日沙良に教えてもらったよ。何でこういうこと黙っているかな」

四人の言い分に、何も言い返すことが出来ない。

訓練に熱中するあまり、自分の誕生日のことを、自分ですら忘れていただけなのだから。

「どうせ、自分でも忘れてたんでしょ」

沙良の指摘に肩が跳ねる。

——落ち着け、ポーカーフェイスだ。

「そんな事はない。私だってそこまで抜けているわけじゃない」

「……今、ギクツって顔したわよね」

「ええ、してましたわ」

「箒って顔に出るよね」

車椅子に乗ったシャルロットが笑うと、ラウラが頷く。

「隠し事が出来ないタイプというやつだな」

「ぐぬぬ……」

「言いたい放題だなお前ら。ほら、箒もむくれてないでこっち来いよ。ケーキも用意し

「ただせ」

そこに並べられたのは紙コップに注がれた炭酸飲料と大きなケーキ。

苺によつて飾られたシンプルなチョコレートケーキは、まるで宝石のように輝いている。

「……よく用意できたな。この辺りで洋菓子を扱っていそうな店など無さそうなものだが」

「ああ、旅館の人に言ったら快くキッチンを貸してくれたんだ」

通りで食事中に姿を見ないわけだ。

少しだけ姿を探していたのだが、キッチンに居たのならば見つかるわけもない。

——ん？ 貸してくれる？

「まさか、一夏が作ってくれたのか？」

「おう、口に合うか分かんないけどな」

再び、ケーキを注視する。

店で買ったような完成度。一介の学生が作ったとは思えないクオリティー。

「これを、一夏が……私のために……」

そう思うと、顔が熱を帯びてくる。意識すればするほど、紅潮はより深まる。

「切り分けるぞー」

「あ、あたしその苺大きいやつが良い」

「あら、主賓を待ちませんの？」

「うむ、これは美味しい」

「あ、これ中に胡桃が入ってるんだ」

「ら、ラウラまだ食べちゃ駄目だよ！ 沙良もまだフオークで切っちゃ駄目！」

箒が一人でモジモジしている間にも、皆がケーキに群がり始める。

一夏が一人ずつ皿に盛っていくが、受け取った傍から食べようとする者や、既に食べてしまった者など、纏まり等あつたもんじやない。

「ま、待て、私の分も残しておけ！」

箒はその輪の中に慌てるように入ってしまった。



音を立ててぬようにそつと障子を引く。

流れる空気がひんやりとしている事に、夜も更けてきたと実感する。

自慢の長い黒髪が風に撫でられ少しこそばゆい。こそりと抜け出し縁側に出たが、室内は未だ騒がしい。

後ろ手に障子を閉めると、空間が切り離されているようにでないともいえる、曖昧なおぼろげさを醸し出してくれる。

近くの柱に背中を預けて、室内の喧騒に耳を傾けた。

未だ賑やかに盛り上がる仲間たち。

皆が自分を祝ってくれたことは素直に嬉しい。

あれからも様々な人物が自分の元を訪れ、祝いの一言をかけてくれる。

この居心地のよさが、逆に何処かこそばゆく落ち着かなくなる。

暫し、落ち着いた空気に身を任せていると、微かに感じる空気の流れ。

其方の方を向くことなく、その名を呼んだ。

「一夏か？」

「よく分かったな」

「ふふ、歩き方で分かる。同門だからな」

音を立てぬよう障子を静かに引き、箒の横に立つ黒髪の少年。その音を抑えた歩き方は、確かに篠ノ之流の癖が残っている。

「沙良だつて同門じゃないか」

「あいつは完全に音を殺して歩いている。それに音の消し方が私たちとは少し違うからな」

「そっか」

一夏は箒の横に腰を下ろすと、呆けたように空を眺める。

同じように腰を下ろすと、木の板張りの床がひんやりとお尻を冷やす。一瞬の寒さに身を震わせ、温もりを求めて一夏に擦り寄ると、ただ満天の星空を見上げる。

一つ一つが存在を主張するように輝き、他の光を邪魔することなくより引き立てる。

その中に、悠然と浮かぶ上弦の月。

それを掴もうと、求めるように手を伸ばした。

「掴めそうか？」

「ああ、もう少しなのだがな」

それはきつと憧れの象徴。幽玄に照らすその光は、求めても求めてもこの手に収まることはない。

「綺麗だな」

届かないからこそ輝く。誰にも掴めないからこそ、魅力的に見えるのだ。そう思っていた時期もあった。今は違う。その月に本気で手を伸ばしている人物を箒は知っている。あの月にも何時か手が届く時が来るだろう。だから、箒にとって月に手を伸ばすのは憧憬などではない。何時か自分も掴んでやるという意志の現れ。

「箒」

「ん? ……どうした?」

月に心奪われるあまりに、空返事になってしまう。すぐに言葉を付け足したが、少しばかりの羞恥の念が心に残った。

「ありがとな」

それは、今回の事件のことだろう。

箒はその言葉をただ受け取るわけにはいかない。自分がもう少し強ければ、状況はマシになっていただろう。そう考えるのは傲慢だろうか。

一夏を助けた。沙良を助けた。それはシャルロットだけが言えることだ。ただ運んだだけに過ぎない箒にはその礼は重過ぎる。

だから素知らぬ顔で恍けた。

「なんのことだ?」

「色々と、だ」

だからか、一夏は肝心な部分を暈かす。

分かっているよな、と言わんばかりの態度に、箒は苦笑するしかない。

「……お前はずるいな。そのような言い方では、受け取るしか出来ないじゃないか」

一夏は満足そうに笑うと、障子に手を掛け少しだけ隙間を開ける。

その動作に、箒が不思議そうな視線を向けるが、一夏は笑みを崩さぬままただ障子の

向こうを見つめている。

答えが分からないもやもやを抱えながら、同じように障子に意識を向けていると、そこに影が映る。こちらに誰かが向かってようだ。

その障子に手が掛けられると、

「終わった？」

翠玉の瞳がこちらを覗き込んだ。



「行ったわね」

「ええ、行きましたわ」

「ああ、行ったようだな」

トランプで視線を隠すように障子の向こうに注意を向ける三人。

「沙良がどうかした？」

何故、先ほどから沙良の動作に気を向けているのだろうか。

シャルロットは鈴音の手持ちから一枚カードを抜き取ると、自分の手札に加える。そ

ここには数字の書いていない死神の姿が。

「ちえつ。……よし。はい、ラウラ引いて」

ジョーカーを右端に配置してラウラの方に向ける。

ババ抜きをするのが初めてというラウラは、先ほどから右端からカードを取る癖があるようだ。

少しズルのような気もするが、真剣勝負に卑怯も何も関係ない。

「はいはい、トランプはここまで！」

鈴音が手持ちのカードをぼいっと真ん中に投げる。

「え？」

同じようにセシリアとラウラがカードを手放した。

「何？　急にどうしたの？」

三人は相談するように顔を寄せ、頷きあっている。

とりあえず真似するように手札をぼいっと投げ捨てると、手の届くところに置いておいた炭酸飲料のボトルを手に取り、ストローを口にくわえた。

のどの渴きを潤している間に何か結論が出たのか、三人を代表して鈴音がシャルロットに向かい合った。

「アンタ、沙良にエロイことしたでしょ」

「ちよつと鈴さん、それは——」

「——ぶふっ!!」

「うわ、汚っ!!」

「げほっ……ごほっ……」

「——そのリアクション、まさかとは思いますが、本当に如何わしいことをされたのでは……?」

「な、ななな何言ってるのさ!?! そ、そ、そんなことしてないよ!?!」

ボトルを投げ捨てるかのようにテーブルに置くと、両手でわたわたと否定してみせる。

「例えば、どんなことよ?」

「そうですね……」

まるで何でも見透かしているかのような、間の空け方。変に動悸が激しくなる。

「キスとか」

「まさか、そこまで——」

「み、見てたの!?!」

「——え?」

「あ」

鈴音の驚く顔に、先ほどの言葉が鎌をかけたのだと気付いた。

「今、アンタなんて言った」

「や、ちがつ、待って」

にじり寄る鈴音から逃げようと車椅子をバックさせる。

「ラウラさん、車椅子を押さえていてくださいな」

「分かっている」

「ちよつ、離し、いや、え、その、あの」

ラウラに後方から押さえられると、セシリアが詰問するためか距離を詰めてきた。

「キス、なさったのですわね？」

「ちがつ」

「キス、なさったのですわね？」

「……えつと、あの………はい。しました」

否定すると増す圧力に、シャルロットは呆気なく折れてしまった。

「どちらから？」

「え………と、それはちよつと……」

無理矢理唇を奪ったなんて言ったら、どんな目を向けられるだろうか。

この質問にだけは答えてはいけない。

「……」

「……」

「ちよつとわたくし教員室に行つてまいりますわ」

「待つて！ 言う、言うから、織斑先生にだけは何卒!!」

立ち上がるうとしたセシリアの肩を必死で押さえつける。

怪我をしているシャルロットが抑えることが出来ている時点で、本気ではないことが分かるが、切羽詰っているシャルロットにはそんなこと判断できない。

「……く、から……」

「え？ 聞こえませんか」

「……ぼく、から」

「もつと大きい声で言つてくれませんか、聞こえませんか」

「くつ、調子に乗つて……」

「ちよつと、教員室に——」

「僕からです！ 僕から迫りました!!」

必死にセシリアを押さえ、声を荒らげる。

なぜ、こんなことを暴露しなければならぬのか。理不尽な責め苦に涙を流したい気分だ。

「セシリア、アンタ性格悪いわね」

「シャルロットさんが良い反応をしてくれるものですからつい」

「どうしたシャルロット、顔が真っ赤だぞ?」

顔を覗き込んできてまで言うラウラに、裏拳を放つが、ひよいと呆気なく避けられてしまう。

三人のニヤニヤとした顔が憎たらしくて仕方ない。

「もう、放っておいてよ!!」

シャルロットの心からの叫びが、夜の静寂に響き渡るのだった。



「こうして三人で話したのも久しぶりだな」

「いつ振りだろうね」

「束さんが居た時だから相当前だな」

「……またこうして三人で肩を並べることが出来るとはな」

「ああ、本当にな」

箒が各地を転々とし、沙良がスペインを拠点としてからは、三人で集まることなど一度もなかった。沙良と一夏は良く会っていたらしいが、箒はそうはいかない。自分の居場所を伝えることも出来ない。連絡も取れない状況に居たのだ。同郷の友との会話にノスタルジックに浸るのも仕方ないことだ。

不意に会話が止まる。だが、居辛い訳でもない。無言でも何処か心地よい空間。幼馴染だからこそその落ち着き。

「なんだか、室内が騒がしいな」

静寂だからこそ室内の喧騒が良く耳に付く。先ほどとは違った騒がしさが耳を撥る。

「何かあったのかな？」

「大方、シャルロットが騒いでいるのではないか？」

箒の言葉に、一夏と沙良が揃って首を傾げる。

「まあ、女子には女子にしか分かん話があるのだ。で、沙良、ずっと疑問に思っていたのだが……」

箒の人差し指が、沙良の膝の上に鎮座している包みを指した。会話している時からずっと気になっていたのだ。

「その抱えているそれは一体何なのだ？」

沙良が、嬉しそうに包みを解くのを見て、何故か嫌な予感がした。

「これはね……じゃじゃーん」

そう言つて広げて見せたのは、黒く染められた和風の着物。朱色で描かれた蝶がまた上品だ。よく見てみると、椿の花まで入っているではないか。黒と朱で構成された模様は、まさに芸術の一言。

「箒のために誂えた長襦袢だよ！　これからの季節に着れるように夏物を選んでみました」

その価値は良く分かる。普段から和服を好んで着用する箒にとって、それが良い物であるの是一目で分かる。

だからこそ、ふふんと胸を張つて褒めて褒めてと言わんばかりの沙良に、震える拳を振り下ろした。

「この馬鹿者が！」

「あいたあつ!!」

箒は、まるで信じられないものを見るように沙良を見下ろした。その姿は何処か威圧感を放っている。

「何すんのさ!?!」

「こんな高いものを学生の誕生日に贈る馬鹿がどこにいるか!!」

「高くないよ、ほんの数十万じゃないか」

「充分高いわ!!」

「何さ、箒が喜ぶかなと思つて選んだのに!」

「ああ、喜んでいても、喜んでいるが、少しばかり常識というものを考えろ!」

箒の言い分に、訳が分からないと反論する沙良。

これだから金持ちは、と愚痴りたくなつた箒は、決して間違えてはいないだろう。

「な、だから言つただろ? 絶対怒るつて。箒も分かつてくれ。こいつ単衣も買おうとしてたのを必死に止めたんだ。むしろ、長襦袢だけに抑えたことを褒めてやつても良い」

「こいつは金銭感覚が麻痺しているのか……」

「まあ、忘れがちだけど、こいつ社長令息だからな。で、だ。箒。これは俺から」

どこに隠し持っていたのだろうか、綺麗に包装された小包が箒の手に載せられる。

「あ、ありがとう。開けてもいいか?」

「もちろんだ」

「これは……帯か、それにリボン」

「帯は沙良からのと合わせて使つてくれ。リボンはちょうど良かったな」

そう言つて視線が髪に向けられる。

福音との一戦でリボンが焼き切れてしまったので、今は髪を下ろしているのだ。

ニヤニヤと笑みを浮かべる沙良を手の平でぐいと押しつける。

楽しそうにはしゃぐ幼馴染に、お前も他人事じやないぞと言つてやりたいものだ。障子の向こうの会話を是非とも聞かせてやりたい。

一先ず、一夏の期待の籠つた視線に応えるため、そのリボンを手取る。

「いい生地だ」

その純白のリボンを口に咥え、髪を持ち上げるとその根元を結び上げた。

「うん、髪を下ろした箒も新鮮だったけど、俺はその箒が一番好きだな」

「す、す、好きだと……」

その言葉が、箒の期待する意味ではないことは良く分かっている。

それでも嬉しいものは嬉しいのだ。

——本当、難儀な男に惚れてしまったものだ。

照れ隠しに星空を眺めることにした箒は、横にいる一夏を横目に見る。

箒に釣られる様に星空を見上げているその精悍な横顔は、いつでも箒の胸を高鳴らせる。

「なあ、一夏」

「ん？」

「綺麗だな、月」

第六十一話 あからさまな会合

「いやはや、全く以つてうちの上司は無茶しか言つてこないんですから」

そうぶつくさ言いながらキーボードを叩く一人の少女。

旅館から貸し出されている浴衣を身に纏った、焦げ茶色の髪を結び上げたその少女は
ブツブツと文句を洩らしながらも、適当に広げた機器を操作していた。

『聞こえてるわよ』

「聞こえるように言っているんです」

耳に届く呆れたような声に、小型のインカムマイクに向かってはつきりと断言する。

『減給するわよ?』

「沙良さんに泣き付くから何の問題もありません」

『問題しかないわね』

耳に入れたイヤホンから聞こえる声は、普段と変わらぬ口調。

普通なら軽口を叩けるような役職の人間でもないのだが、彼女はその人間性からか社
の人間からは慕われている。

自分用に改造されている空間投影型コンピューターにキーボード型インターフェー

スを接続したまま、投影式のキーボードを映し出す。

二つのキーボードを片手ずつで操作しながら少女は、ある瞬間を待ち続ける。

「本当に接触するんですか、カルラ秘書長？」

『馬鹿ね、フィオナ。このタイミミングを千冬が逃すわけがないじゃない』

「……兎さんと戦乙女の会合かあ」

『ちゃんと盗聴器を付けたんでしようね』

「まあこちとら一応プロですからそこは抜きならぬ」

千冬と束の両者に発信機と盗聴器を付け、更に会合をしそうなポイントには全て盗聴器を仕掛けている。

千冬と束が例え自分に付けられた盗聴器に気付いたところで、この旅館に張り巡らせた網を掻い潜るのは難しいだろう。

箒の誕生会に参加せずに地道に活動を続けたのだ。成功しないと報われない。

『成功したら今日の失態はなかったことにしてあげるわ』

「それはどうも」

あれだけ説教された後に帳消しにすると言われても納得できるものではないのだが、生憎そんな意見が通るような相手ではないのだ。

「ああ、イチカさんの手作りケーキ食べたかったなあ」

盗聴器仕掛ける途中に見かけたが、あれは店に出しても問題ないレベルだった。

『夏になれば、沙良の誕生日でしょ？ また作ってくれるわ。イチカ君とトニー君の力作ケーキ』

「若い衆には手に入らないですよ、あれ」

唇を尖らせ、インカムマイクに不満の声を述べる。

『あら、ソフィは美味しそうに食べてたじゃない』

「あの人はアントーニヨさんと仲いいじゃないですか……。それに近くに居ないと沙良さんが凄く悲しそうな顔してソフィアさんを探し出しますからもう諦めてますよ。毎年、秘書課は会場警備についているから恨みを込めた視線を送るしか出来ないんですよ……」

『大変ねえ』

「てか、秘書長も秘書官なんですから警備してくださいよ。何暢気にケーキ食って酒飲んで沙良さんにべったりくっ付いてるんですか」

『護衛よ護衛』

「ソフィアさんが居ればなんの問題もないでしょうに。あの人、一応ケーキ食べたらずっと護衛として近くに居るんですから。秘書長みたいに、お酒飲んで飯食って自由に動き回ってる人は護衛って言わないですよ。知ってました？」

『フィオナ、滅給』

「社長に報告します」

『くっ……何て子なの!?! 今まで優しくしてきてあげたらこうやって裏切るのね!?!』

「あはは、何言ってるのか分からないです」

『にしても兎さん来ないわね』

暇つぶしも飽きちゃったわ、と煙草に火をつける音が聞こえてくる。

「社内禁煙ですよ?」

『うちの部署は私がトツプよ?』

「性質の悪い上司ですね」

『五月蠅いわね』

「まあ、兎さんが現れるのはまだまだ先だと思えますよ?」

『へえ?』

「忍び込んだ空き室なんですけど、ここ救護室の真下なんですよね」

『それが?』

「響くんですよ」

IS 学園が貸しきった旅館の空き室に、夜中ひっそりと忍び込んでいるフィオナには良く聞こえるのだ。

「シャルさんの叫び声が」



「ナノマシン……ですか？」

車椅子に乗せられたシャルロットは言われたことをそのまま口に出した。

付き添いで車椅子を押してくれた沙良の表情を見ると、少し不安そうな顔をしている。「そう、ナノマシン。それも、この世の中に認められていない東さん特性の非合法な非人道的ナノマシンだよ！」

なんでもないように言ってはいるが、明らかに聞き流してはいけない単語がいくつか含まれていた。

だが、沙良が何も言わないならばシャルロットは特に言うことはない。本当に駄目なら沙良が最初から止めるはずだ。沙良が何も言わずに居るのならば、それは最悪の結果を作る物ではない。

「おろ？ 意外と冷静だね」

「ええ、沙良が何も言わないのであるなら僕が言うことはありません」

「なにその信頼関係、東さんちよつとジエラシー。嫉妬でナノマシン暴走するかもよ？」

「姉さん」

「ごめんごめん、ちよつと巫山戯ただけ……うんごめんね、考えなしだった」

二人の間だけで交わされたやり取りに、シャルロットは首を傾げるが、それよりも今考えないといけないのは自分の身体のことだ。

「二度と歩けないかあ」

両足の怪我を甘く見すぎていた。大方火傷を負ったぐらいで骨が折れてなければ良いなど、そう軽く考えていたのだが、思った以上に火傷の進行が酷いらしい。軽い部位でも浅達性ⅠⅠ度熱傷。最悪の部位にいたつてはⅠⅠⅠ度熱傷まで至っている。こんな広範囲の火傷でショック死しなかったのが奇跡に近いと救護教員からも脅されている。

「痛くないんだけどなあ」

沙良の心配そうな視線に、おどけて応えてみせる。

「馬鹿！ それがⅠⅠⅠ度の証なんだつて！」

頭の上から普段の非じゃないくらいに怒鳴られたシャルロットは、しゅんと身を縮こませる。今更、冗談だよなんて軽いノリで言えるような空気ではない。

「見たところ壊死した部分も見受けられるし、普通の病院に言ったら間違いなく両足切断だねー」

両足切断。

束の発言にシャルロットは身の震えを感じた。今更ながらに恐怖というものが浮かんでくる。

両足がなければ、このIS学園に残ることも、彼の横に立つことも出来ない。足がなくとも出来ることはあるだろう。しかし、それはISという存在からはどうしても離れてしまう。それは彼の横に居続けるためには明らかに不利だ。

シャルロットは鳥肌が立った体を両手で押さえる。

そのシャルロットを見て、ご愁傷様とどうでも良さそうにのほほんとした口調で説明する束に、沙良が本気で睨みを利かせる。

「姉さん」

「わかっているって、だからこれを持ってきたんでしょ。これを使えばどんな大怪我也三日以内で元に戻すことが出来るからね。うん、束さんつてば優しい！」

束が見せた注射器、その中には真っ赤な液体が蠢いていた。

「———っ!？」

本能であれが危険なものだと感じ取ったシャルロットは、無意識に後ろに下がろうと車椅子の車輪に手を掛けようとする。

「その代わり、治療中はこの世のものとは思えない痛みをずっと感じることになるけど

ね。意識のあるままに身体を作り変えられていく痛み。治療の代償が地獄を見るだけで良いなんてラッキーだね！ わーい簡単。シヨック死だけはしないでね？」

そのシャルロットの本能は当たっていたようだ。車輪に触れた手が震える。

そんなシャルロットの姿を見て、束が表情を変えた。先ほどの飄々とした表情を、真剣なものに変える。

「止めてもいいよ？ その代わり、金髪はもうセラの横に立つことはなくなつて、同情されながらくだらない世の中に生きることになる。そういう人生を送りたいならばそのまま車輪を回しなよ」

「——っ」

「セラを助けてくれたのは感謝してる。だから治療してあげるつて言ったの。でも、束さんと金髪の繋がりがりなんてそれだけ。私は治療する他に何もお前にする気はないから。早く選んで」

束は面倒くさそうに注射器を掲げる。

まるで、どうでもいいように、興味も関心も向けられていないような冷たい目。

「この子の横に立つために地獄を見るか、脚を捨てて逃げるか」

だが、それでも束は助けてくれるということだ。それはシャルロットが沙良の横に立つことを許してくれるということ。その資格があると認めてくれたということ。

「……………ずるいよ」

そんなのズルイじゃないか。

そんなの選ぶまでもないじゃないか。

沙良の隣に立つことにどれだけ自分が意味を見出しているかをわかっていてこの発言だ。

こちらの思考を読みきつて、手っ取り早く意志を固めさせる。

確かに成功だ。

選択肢などないようなものだったが。

「……………痕、残らないようにしてください」

ギョツと拳を握りこんで顔を上げた。

「沙良の横で、ちゃんとドレスを着れる様に綺麗に治してください」

笑えているだろうか。きつと不細工な笑みを浮かべているだろう。頬が引き攣る感触が残る。

シャルロットの答えを聞くと、束は面白そうに笑った。

「流石、セラが見込んだ娘だね。そういう意地っ張り、束さんは嫌いじゃないよ」

□

「——つあああああああああああ——あああああああああ!!」

それはまさに絶叫。獣が訴えるような叫び。この世のものとは思えない程に張り上げられた声に、沙良は泣きそうな顔をみせる。

金糸の髪を振り乱し発狂したかのように叫ぶシャルロット。

有らん限りの声を張り上げ、身体を暴れさせようとするそのシャルロットの手足には暴れないように拘束具がついている。

「うるさいなあ」

束はそこら辺に転がっていた白いタオルをダルそうに掴むと、シャルロットの口に躊躇なく突っ込んだ。

「——っ……………——っ!!」

絶叫がぐぐもり、微かな呻きに変わる。それでも痛みにも暴れていることに変わりはない。

その痛々しい姿から、沙良は目を逸らすことはない。

「セラ、見ないほうが良いよ」

「……………ううん、ここに居る」

「そう」

沙良はシャルロットの右手をそつと握る。

すると、その手が、まるで沙良の手を砕くように握り締めてくる。

「つつ」

しかし、それでシャルロットが楽になるならとされるがまま、ただ優しく手を包んで、祈るように額に付けた。

「ごめんね」

シャルロットが怪我をしたのは、沙良達を守ったからだ。そんなシャルロットに謝罪の言葉を伝えることは出来ない。本人に伝えることが出来るのは感謝の思いだけ。

でも、聞こえてない時ぐらいいいじゃないか。

「ごめんね」

「セラ」

「大丈夫だよ姉さん。僕は大丈夫だから」

「……少しでも駄目だと思ったらちーちゃん呼ぶから」

「わかってる」

シャルロットが体験している痛みは、沙良にも痛いほどわかる。

二年前自分も体験した痛みだ。

その際に、自分も叫び続けた記憶がある。

だから、東は言っているのだ。思い出してしまう前にここから離れろと。あの凄惨な記憶を引きずり出して、沙良に悪影響を与えるのではないかと心配しているのだ。

だが、それは沙良だけに限ったことではない。

「姉さん、ありがとう」

二年前、沙良を治す為に非人道的なナノマシンを開発した東。それは東の意志を、開発者としての矜持を曲げさせた。もう二度と使わないと、そう言っていたはずなのだ。だが、沙良が頼んだのだ。シャルロットを助けて欲しいと縋りついたのだ。自らが一番信頼できる人間に。だから東は応えてくれた。

沙良が一番大切に思っているのは東だ。それは今でも変わっていない。だが、その束に辛い思いをさせても、シャルロットを失いたくなかったのだ。

この気持ちは何なのかわからない。

だから、この手を離さない。この手を繋いでいたら、何か分かる気がしたから。

「頑張つて、シャル」

沙良は繋いだ手を額に添えた。



空中投影のディスプレイに浮かび上がる各種パラメーターを眺めながら、ブラブラと足を揺する一人の女性。

岬の柵に腰を掛けた状態でぼんやりと海と向かい合う。

全身で気楽さを表現しながらも、その表情は寂しそうに見える。

「あいつらはどうした?」

音もなく女性の後ろに現れた千冬は、何でもないようにその後ろ姿に声を掛けた。

それに最初から気付いていたのか、驚くようなこともせず、視線を変えぬまま女性が問いかけに答える。

「ちーちゃん」

「おう」

「治療は一通りやったよ。今は救護室で寝てると思う。ちーちゃんは心配?」

「いや、お前が治療したんだ。大丈夫なのは分かっている」

「おおう。なにこのちーちゃんのデレ。東さん録音し損ねたよ?」

「気持ち悪い。黙れ」

二人はお互いの方を向くことはない。東は先ほどと体勢を変えず、ただぼんやりと視

線を海に向ける。

千冬はその束の直ぐ横に立つと、柵に肘を置いた。

デイスプレイには、今日の戦闘に参加した全てのISのパラメーターと、戦闘映像が流れている。その中でも、二人の視線は紅い機体の戦闘記録に向いていた。

「紅椿の稼働率は六十二パーセントかあ。予想よりも力を引き出したんだね。流星は箒ちゃん」

「本人もあの機体に相応しくあろうと藻掻いていたからな。良かったな妹弟がお前のことを慕っていて」

「うん。それだけで私は世界の敵に回ってよかったと思うよ。それに白式にも驚いたけどなあ。まさか——」

「唯一ワン・オブ・アピリティー仕様の特殊能力が発現するとは思わなかったか？」

「……なんのことかな？」

会話の流れをぶった切るようにして挟まれた千冬の一言に、束の動きが止まる。

「白式の『零落白夜』は唯一ワン・オブ・アピリティー仕様の特殊能力ではなかったんだな」

「……バレてた？」

「当たり前だ。何年間同じ能力を使っていたと思っっているんだ」

「流星はちーちゃんだね。恐れ入るよ」

「白騎士なんだろう？ あの白式とやらは」

「……本当、恐れ入るよ」

白騎士と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体された。そして現在はその行方が分からなくなっている。それが世間の定説だ。

しかし、千冬はその答えに気付いていたようだ。

「あれは正しい意味で第三世代機の完成形なんだろうな」

そう千冬は言う。

「持てる全ての能力を使って『零落白夜』を再現したわけだ。それゆえのあの拡張領域パススロットか。表示されていないだけで色んな武装を積んでいたんだろう？ それら全ては、雪片式型、つまり『零落白夜』を使うための剣として構築するための材料なのだろうな」

唯一仕様の特殊能力を模した特殊兵装。それが第三世代機の存在意義だ。そういう意味では白式は、最も完成している第三世代機だろう。

「ぴんぽーん。本当にお手上げだよ、ちーちゃん。研究者でもやっていけるんじゃない？」

「馬鹿を言うな。私には行き過ぎた世界さ。まあ白騎士のコアだからこそ出来たんだろうな。零落白夜の表現の仕方はあのコアが一番分かっていたからな」

千冬は映し出されている一夏の戦闘映像を盗み見る。

その淡い光に包まれた新しい戦い方は、自分の戦闘スタイルに似せていたこの数ヶ月とは完全に離れている。

「自分のスタイルを見つけたんだな」

「ちーちゃんみたいな剣主体じゃなくて、どちらかという拳を使うようだね」
その動きは日本の伝統的な武術、空手のものだ。

一夏が大切なものを守るために身に付けた、千冬とは違う技術。

『『白蜚』か……。夏にびつたりの名前じゃないか』

「雪片は冬の名前だったしね……。寂しい？」

「馬鹿なことを。嬉しいに決まっているさ。成長を間近で見れるというのはな」

二人の間に静寂が訪れる。

どちらも一言も喋らない。

ただ何かを待つように。

「……どっちだと思う？」

東がそう問いかけた。

「難しい質問だな」

大して考えていないように千冬は答える。

「簡単だよ。どっちでも潰せばいいだけだもん」

「そうか」

本当にどちらでも構わないといったように声を出す。

「セラにちよつかい掛けた報いって言うものを教えてあげないとね」

「程々にな」

「ちーちゃんの程々は一般で言う『やつちまえ！』と一緒にだからね」

「何だそれは」

二人の間に微かな微笑が浮かぶ。

「……………お前はと思う、女狐？」

『……………あら兎さん、気付いていたならもつと早くに言つて欲しかったわ。うちの部下が

しよんぼりしちやつたじゃない』

恐らく柵に仕掛けられているであろう通信機から声が漏れる。

「通信機器を付けておいてよく言う。連絡など先ほど取ったばかりだろう、なあカルラ

？」

『ねえ千冬、貴女はそう言うけど、そう気軽に話す機会が得られるような人物じゃないで

しょ、貴女達は』

「夏になれば嫌でも顔を合わすだろうが」

『その夏はどうなるのかしらね』

「なに本当こいつヤダ、この性悪女狐」

東が機嫌の悪そうな声を出す、通信の向こうは飄々として答える。

『五月蠅いわね、寂しがり屋の兎さん。このタイミングであの子が狙われた以上、次に狙われるのはうちの会社よ。なんせ、何処かの兎さんが第四世代機を発表し、その根源となるシステムに我が社のシステムが採用されてるのだから』

「正式発表は七月半ばだから」

『そう、あまりうちに迷惑掛けないでよ？ 貴女が沙良の姉代わりじゃなかったら今頃ぶち殺してるわ』

「私だって、お前が沙良と爺さんのお気に入りじゃなかったらとつくに潰してるって忘れない方がよいよ」

『あはは、これは社長に感謝ね。で、どうだったうちの機体は。貴女の興味をそそるような出来事が起きたんでしょ？』

「ホント、お前嫌い」

『光栄ね。私も貴女は嫌いだよ』

「……一次形態移行の際に空良は完全に消滅。コアだけを残して、ドルフィンに全ての情報がコピーされてる」

『完全に空良を引き継いだのね』

「そういうこと」

『そう、面白い情報ありがと。夏も待つてるわよ。もちろん私じゃなくて、社長と沙良が』

「本当、神経逆なでするなあ、こいつ」

『あ、それと、機業であれ旅団であれ、潰しちや駄目よ？ あれが居るおかげでこの世のバランスが成り立っているのだから。潰しても半壊までにしておきなさい。！H a s t a l u e g o ! (またね)』

柵の一部が小さな爆発音を立て、そこから一センチにも満たない小さな機器が海に落ちていく。

「……本当にあの女狐はむかつくなあ。よくちーちゃんはあいつと仲良く出来るよ」

「向こうも同じことを思っているさ」

「なにそれちーちゃん？ この東さんが面倒くさいとでも言うの？」

「そう言ったんだが？」

「がーん」

ケラケラと笑う東。

その姿に、千冬は問いかけを放った。

「なあ、東。今の世界は楽しいか？」

「そこそこね」

「そうか」

岬に吹き上げる風が、木々を大きく揺らす。千冬はその風に合わせてそつと目を閉じた。

風が吹き止み、目を開くとそこには先ほどまで居た親友の姿はない。

「全く……」

千冬は深くため息を付く。

「で、だ。撤退準備は進んでいるか？ 子狐？」

『ギクツ』

「後で私の部屋まで来るがいい」

『でも、それは秘書長に言われて嫌々やったのであつて……』

「そんなことはわかつている。だがな、それと行動したかどうかは別問題だ」

『そんなあ』

千冬は上着のボタンに仕込まれていた盗聴器を筆り取ると、

『あ、待ってください、この発信機自腹なんで——』

それを海に全力で投げた。

何か言っていたようだが、それも海に落ちてしまった後では聞き返すことも出来な

い。

「一難去つてまた一難か」

千冬の小さな独り言は、波の音に混ざり消えていった。

第六十二話 考察

「あつー」

雲一つない青空。太陽光がこれでもかと肌を焼く感覚に、つい顔を顰めてしまう。

周りを見渡せば一面海に囲まれたベストロケーション。そこに横たわるたくさんの武装と、ISさえ目に入らなければ気分も良かっただろう。

慌ただしく動き回る教員を横目に、大量に積まれた武装の前で端末を片手に汗を拭う。課せられた仕事は整備士として機体に武装を積み込んでいくというもの。インストール作業自体は大した手間でもないが、如何せんこの暑さのせいで体力の消耗が激しい。

なぜ、自分がこんな所でこんなことをしなければならぬのか。今頃はクーラーの効いた部屋で悠々とアイスでも食べていようと思っていたのに、大誤算だ。これも、あの面倒くさい上司が無茶な仕事を押し付けてきた結果に過ぎない。後でしっかりと監査役に報告しておく必要があると、一人頷く。実際に監査役はあの人の下の人間なので、文句を言ってもどうしようもないのだが、この苛立ちを巻き込んで許されるだろう。あの上司の部下になった自分達を恨んでほしい。同じ穴の貉というのは今は

記憶の片隅に寄せておこう。

「おい、小狐」

急に肩に手を置かれ、びくりと身構える。振り向くと、仕事を押し付けた本人である千冬が立っていた。

「何をサボっている」

「サボってません」

ビシツと姿勢を正し、両腕を後ろで組む。フィオナは千冬の睨みを真つ向から受け入れ、視線を逸らすことはしない。

そのフィオナの態度に、すこし気を良くしたのか、千冬が珍しく発言の許可を出した。

「ほう、それでは何をしていたか、弁明させてやろう」

「はい。いかにあの糞上司に天罰を落とすかについて必死に考えてました」

「……………よし、わかった」

「わかってくれてわたしも嬉しいです」

堂々と、正直に自分の気持ちを吐露すると、千冬も納得してくれたようだ。千冬もカリラとは顔馴染みとの事だ。色々と苦労してきたことだろう。同じ気持ちを共有することが出来て、どこか嬉しい気持ちになる。

「頭を差し出せ、馬鹿者が!!」

「——つつあ!？」

脳がぐらぐらと揺れる。その凶器はどこから取り出したのだろうか。出席簿から薄く煙が出ているように見えるのだが、錯覚だろうか。

「反省が足りないようだな、小狐」

「いたた……その小狐つて言うの止めてください。あの人と一緒にされるのムカつきます」

「直属の部下がよく言う」

「だから苦労してるんですよ。そういうわけですし、勘弁してくれませんか？」

「それとこれとは話は別だ。本当ならばスパイ行為として査問委員会に引き渡してもいいんだぞ？ アイツの部下ということを手心を加えてやっているのだ。これが私じゃなかったら今頃お前は監獄の中だな」

「くっ……それに関しては感謝してますが、一般生徒を脅すなど一教員として恥を知るべきだと思います」

「お前のような一般生徒がいてたまるか」

「奇遇ですね。わたしも常々織斑教諭のような教員が居てたまるものかと思ってましたよ。警備員の間違えじゃないんですか？ 気配を消して人の後ろに立つなんてやましいことがある人間にしかできませんよ」

肩を竦めて、人をおちよくるかのような態度を取る。千冬のこめかみがびくびくと動いているのが分かる。

「小狐、お前は深水が居ないと良い性格だな」

「お褒めに預かり光栄です」

「褒めとらん」

「それではわたしはこれで失礼します」

これで話は終わりと、フィオナは千冬に背を向ける。

「待て、何をこれで話は終わりたいに歩き出している。仕事をしろ馬鹿者。お前の持ち場は此処だろう」

「……気付かれてしまいましたか」

「よく行けると確信したものだ。お前の度胸には呆れを通り越して尊敬の域に入る」

「そんなに褒めないで下さいよ」

「はあ、お前ぐらいだぞ。私にそういう態度を取れる生徒も」

「大して敬意を払っていませんからね」

「……取り敢えず、深水にはお前の仕事態度を報告しといてやろう。私に対する態度もしつかりと言い含めてな」

「なっ!? あなたは鬼ですか!？」

カルラに報告されるのならまだいい。大して心に響かない説教を受けるだけだ。だが、沙良に報告されるのだけは拙い。今まで積み上げてきた信頼と実績とキャラという物が崩れてしまう。沙良から軽蔑された視線を向けられることを想像しただけで全身から血が引いてしまう。

「嫌ならサボらず働んだな」

「……………わかりました。……………h i j o d e p u t a (くそ野郎)」
「聞こえているわ!!」

出席簿が頭に叩きつけられると、その勢いのまま砂浜に顔から突っ込んだ。

視界が真っ黒になり、肌をこする砂の感触が不快感を覚える。

「生徒が集まるまでには終わらせておけ。それが終わったら私のところ来い。生徒たちが集まるまで特別に訓練を付けてやろう」

尻を突出し、顔を砂浜に埋め、四肢を痙攣させているフィオナに対して千冬が吐き捨てた言葉は、地獄への切符と同意だった。



「ふああ」

昼の厳しい日差しも、室内の風の当たるところにいれば何と楽なことか。

旅館の窓からふと外を覗いてみると、海面からの強い照り返しが目に入る。

今頃、一般生徒は新型武装のテストを行なっているころだろう。

こんな暑い中ご苦労様と言いたくもなるが、それを口に出すと猛烈な批判を受けることは想像に容易い。

「欠伸など……一夏、だらしないぞ?」

欠伸を一つ洩らした一夏を、その横に座っている箒が嗜める。

視線をそちらに向けると、顰めた顔の箒がこちらを見ていた。

「他の生徒は今頃暑い中頑張っているのだ、もう少しシャキッとしないか」

「アンタもその白紙のレポートを埋めてから言いなさい」

鈴音は一夏を諷めていた箒のレポートを覗き込むと、それを本人に突きつける。

そのレポートはまるで新品のように綺麗な状態が保たれていた。

一文字も書かれていない真つ新たなテキストソフト。呆れのため息を洩らしてしまうのも無理は無い

「見事に真つ白だな」

「し、仕方ないではないか。私はまだ専用機を受領したばかりなのだ……その状態で自機についての考察レポートなど書ける訳が無いではないか……」

「そんなの甘えよ甘え。専用機持ちっつて言うのはそんなに甘くないんだから。アンタこそシヤキツとしなさい」

「そういう鈴さんこそ、こっそりお菓子を食べるのはお止しになれば？」

意識が箒に向いていた鈴音の足元に隠してあったお菓子を、セシリアがこっそりと奪う。

「あ、ちよつとセシリア！」

「コアラのマーチ？ 可愛らしいお菓子ですわね」

「ふっ、お前ら。私語は私のようにレポートが終わつてからするが良い」

ラウラが自分のレポートを見せ付けるように話の輪に入ってくるが、

「アンタは始末書を書き終えてからこっちの話に入ってきてなさい」

鈴音に窘め、とぼとぼと自分に割り振られた席へと帰つていった。

「くそっ」

涙目でガリガリと始末書を作成しているラウラに、一夏は憐れみの視線を向ける。

「軍属つて大変なんだな」

「まあそうね。あたしたちみたいないな代表候補生と違つてそれが仕事なんだし、ある程度の誓約は仕方ないんじゃない？」

「鈴さんもわたくしもそれなりの誓約は受けてますけど、流石に軍属までとは言えませ

んものね」

「へー、色々あるんだな」

「アンタ等二人の立ち位置が異常なのよ。普通は軍属か代表候補生にならないと専用機なんて手に入らないんだから」

「シャルロットさんが専用機を持ち続けるためにスペインの代表候補生になったように、例えばコネが有るとしましても、ある程度の立場が無ければ世界がそれを持つことを許しませんわ。お二人とも、今の特殊な立場は常に危うい立ち位置だということ、お忘れないように」

「わかつてるさ」

「あ、ああ」

セシリアの忠告に素直に頷く一夏。箒も戸惑いながらも真剣に頷いている。

「その噂のシャルロットは今頃は沙良とイチヤイチャしてるんでしょうね」

「おいおい、シャルロットも怪我人なんだし、その言い方はないだろ」

唇にペンを乗せて両手で頭を支える鈴音の発言に、一夏は強く言い聞かせるように注意する。

「馬鹿ね、あの娘がただ寝込んでるだけの女なわけないでしょ。さつき様子を見に行つたけど、怪我を良いことに沙良にべつたりと甘えまくってたわよ。沙良もそれで世話を

焼いちやうからダメなのよ」

一夏の注意を大して気にも留めていない鈴音は、足元に抱え込んでいるお菓子を口に放り投げる。

その行儀の悪さに、一夏は鈴音の胡坐を組んでいる足をペシンと叩き、窘める。ついでにコアラの絵が描かれているお菓子を一つ拝借することも忘れない。

「あの怪我だ、暫らくは動けないのではないか？」

箒の疑問も当然だ。ここにいる全員がシャルロットの怪我の酷さを目の当たりにしている。鈴音とラウラを除く、治療後のシャルロットの姿を見ていない者たちは、焼き爛れた両足を思い出したのだろうか、同じタイミングで身震いをした。

「あたしもお見舞いに行くまではそう思ってたんだけどね」

「様子を見たところ外傷はほぼ七割方治っているようだったな」

ラウラが鈴音と顔を見合わせて言う。その言葉が正しければ、再起不能と思われた大怪我が二日で治りかけているということになる。

「七割……ってそんなことが出来るのかよ!？」

「……それは不思議な手品ですわね。如何なるトリックで?」

顎に指を添えたセシリアはちらりと箒に視線を向けた。それは暗に、東が関わっているのかという意図だろう。視線を向けられた箒本人は、その意図に気づいていないよう

だが。

「ええ、アンタの考えている内容で合っているわ」

「あの人が沙良の願いを聞かないわけがないしな」

昔から沙良には甘かった束の事だ。少し上目づかいでお願いされたら内容を聞く前に首を縦に振るだろう。

「心配して損をするとは正しくあのような状況を指すのだろうな」

「あたしとラウラが様子を見に行っても、沙良にべったりしちゃってさ。図々しくも『リング、食べたいなあ』と沙良にリング剥かせた挙句に、『あーん、して?』ですって!!
あたし達も居るっての!! 少しは気を遣えっての!!」

話を聞く限り、治療の進行は芳しいようだ。そもそも束が全精力を挙げて治療しているのだ。最初から何も心配することないで一夏は思っている。

「まあまあ落ち着けよ、鈴。シャルロットも沙良に甘えれて浮かれてるんだろ? こんな独占できるチャンスは滅多にないだろうしな」

「え?」

「ん? シャルロットは沙良が好きなんだろ?」

「——つ!?!」

「——つ!?!」

「——っ!?!」

「——っ!?!」

四人が一斉にこちらを向き、目を見開き、絶句した。

「一夏……アンタ、今……?」

「あ、もしかして言っちゃいけないかったのか?! 悪い、聞かなかったことにしてくれ!!」

「い、いや、そうじゃなくて、アンタ気付いてたの!?!」

鈴音の小さな手が一夏の両肩を握り潰すかのように掴む。その表情は、カナヅチの間が五十メートルを潜水で泳ぎ切った時のような表情をしていた。正直、一夏自身何と表現したらいいかわかつてはいないが、それほどに驚きに満ちた表情をしているのだ。ちなみに、その他の三人はこそそそと何か話し合っているようだ。ここからでは何を話しているのかはわからない。

「お、おう、鈴、取り敢えず肩つかむのは止めろ」

「あ、ごめん」

「で、気付いていたって何がだよ」

「だから、その、あれよ」

「どれだよ」

「だから、その」

「ん?」

「シャルロットが沙良の事を」

「ああ、だつて見てたらわかるだろ? 表情にモロに出てると思うぜ?」

シャルロットはあんなにも分かりやすいのに、沙良はよく気づかないものだど、呆れを通り越して感嘆してしまう。鈍いというか、わざと気付かないようにしているといつた方が正しいのか、沙良は恋愛事は避けるような節がある。立場的には仕方ないのかもしれないが、一夏的には好きな娘でも作つて普通の学生生活を送つてほしいと思つている。これも、沙良からすればお節介なのだろうけど。

「まあ、沙良も恋愛事には鈍いよな」

「それをお前が言う——もが、何をするセシリア!」

「箒さん、気持ちにはわかりますけど、ここは一つ堪えてくださいまし」

「嫁……それは私でも流石にフォローできん」

「な、なんだ?」

「こここそしていた三人娘が急に一夏に向かつて騒ぎ出したので、一夏はビクツと身構えてしまう。」

「……OK。ちよつとアンタはレポートやってなさい。あたし達はちよつと重大な話し合いがあるから」

「あ、ああ」

——意味が分からん。

一人ぼつんと残された一夏は、小首を傾げながら書きかけのレポートに向かいなおります。

「考察レポートか、確かに二次移行したばかりだし、自分の機体を把握するという意味では手を抜くわけにはいかないか」

四人集まって深刻な顔をしている女子たちは今は頭の隅に追いやる。自分でも女子の心の機微には鈍いと自覚があるのだ。変に藪をつついて蛇を出すのも馬鹿らしい。今するべきはレポートである。

機体のデータを、各自専用機持ちに支給されているタブレットにデータ開示出来るよう、情報の共有化の設定を行う。

「白式も変わったなあ。いや、今は『白蚩』ししほたんか」

純白のタブレットだった待機状態は、今はアイボリーのプレスレットへと形を落ちて着けている。

タブレットよりも扱いが楽で、見た目にも一般的アクセサリーの部類になったことに素直に喜びを示す。

「タブレットは重かったしなあ」

いくら武道を嗜んでいたといっても、誰が好き好んでガントレット、所謂小手を着けるのか。そんなの、少し常識のない馬鹿か日本を勘違いした外人だけだ。

「お、共有化は出来たようだな」

さつそく、画面をスクロールし、開示された情報をレポート用紙に書き込んでいく。

「えっと、白式第二形態『白蛍』つと……武装はこのページだ？」

専用のブラウザを適当に探り、あらゆる情報に目を通す。もちろん全部の情報を理解できるわけもなく、わからないところは飛ばし飛ばしで読んでいく。

「あつた、これか」

見つけた項目には確かに天ツ蛍の文字が。

「天ツ蛍の考察って言われても難しいんだよなあ。エネルギー纏える刀って感じなんだけど、それだけなんだよなあ。えっと、『エネルギーを纏うことが出来、またエネルギーを核に斬撃を飛ばすことが出来る』これでいいか」

取り敢えず思いついたことを文章にしていく。だが、満足のいく内容かと言われると、決して頷くことはできない。この機体のメインとなるのはこの武装たちだと思いが、そのキーポイントとなるのは、

「唯一ワン・オブ・ア・ピリテイ仕様の特殊能力『栄達極夜』、自らのエネルギーに、他のエネルギーと反発拡散し相殺する特性を持たせる……。『零落白夜』とはどう違うんだ？」

「イチカさんは馬鹿ですか? 『零落白夜』はエネルギーを無効化、消滅させる。それは消しゴムで字を消すようなものですよね?」

「あ、フィオナ」

一夏の端末を覗き込むように身を乗り出してきたのは、茶色の髪を結び上げた一人の女生徒だった。

「千冬姉に仕事を手伝わされてたんだろ? お疲れさま」

「ええ、お疲れ様です。本当にあの教師は人としての感性を失ってますよ。鬼です、鬼。わたしだって好きで盗聴したわけじゃないんですよ」

「お、おう」

盗聴という発言に、何を言えいいのか戸惑うが、先ほどの言葉に引つ掛かりがあり、すぐさま意味を聞き返す。

「零落白夜がどうだつて?」

「ええ、新しい唯一ワン・オブ・アピリティー仕様の特殊能力『栄達極夜』でしたっけ?」

「ああ」

「それは、簡単に言えば、銃弾で銃弾を打ち落とす現象を机に置いた状態の銃弾同士で行うことです。意味、わかります?」

「……」

「その顔は分かってない顔ですね。わかりました。それではイチカさんに問題です。ここに消しゴムが二つあります。これを二つ並べます。さあどうなりますか?」

「どうもしないだろう。何も起こらないさ」

「そう。何も起こらない。これが机に置いた銃弾と同じ状態」

「ああ」

「では、次の問題。もし、この消しゴムが磁石と同じ性質を持っていたら?」

「ん?」

「この消しゴムがS極、こつちもS極の時、この状態ではどうなると思います?」

「お互いに接触できなくなる」

「まあ正解です。じゃあ、片方が固定されてたら?」

「固定されていないほうが弾かれる」

「そういうことですよ」

「つまり、普段は何の反応も起こさないエネルギー同士を無理やり反応させるといふことか?」

「それがエネルギーの反発です」

「じゃあ、拡散は?」

「コップの水を高層ビルの屋上から落としてください。地面に届きますか?」

「届かない」

「つまり消滅したと言い換えても問題ありませんよね？」

「ああ、なるほど。エネルギーを反発させ拡散することで自然に消滅させたのか」

「おそらく」

「じゃあ相殺は？」

「銃弾を銃弾で打ち落としてみてください。どちらも運動エネルギーが打ち消しあつて、互いに差し引きして、威力が帳消しになると思いませんか？」

「そっか」

「それで相手の口径が大きければ、数発当てないと威力を相殺できないですよね？」

「銃弾で銃弾を撃ち落とす現象が相殺、机に置いた状態の銃弾同士で行うことつていうのが反発と拡散を意味するつてわけか」

「例えがややこし過ぎましたね。簡単にすると、油を水に変換するという考え方もできますよ」

「なるほど、そつちのがわかりやすいな」

油同士では混ざり合つてただの油のままだが、そこに水を注いだらどうだろう。水は急激に膨張して油をはじき飛ばす。これをエネルギーに置き換えたらいいのだ。油であるエネルギーを、水のエネルギーに変える。簡単に言えばそういうことだ。

「油を加えても何も起こらないが、水を加えれば爆発する」

「大まかにはそういうことです。納得いかないのは、零落白夜のような使い方が出来る所です。シールドエネルギーを弾き飛ばしたところでエネルギー自体はすぐに展開されるわけですから、ただ相殺する分のエネルギーを減らすことが精一杯なはずなんですけど」

「つまり、零落白夜みたいにシールドを無視して攻撃できるわけじゃないと？」

「そういうことですね」

「たぶんそれならこれが影響していると思う」

一夏は自分の端末をファイオナに差し出す。

それを受け取ったファイオナは、タブレットをスクロールし、閲覧できる情報に目を通す。その眼はいつものようにおっとりとしたような目ではなく、どこか真剣味を帯びていた。

「どれどれ、『また、任意発動により自らのエネルギーを相手のエネルギーに侵食させる。浸食時間、相殺抵抗はその際利用するエネルギーの質量に比例する』……。相殺したエネルギーの箇所にそのまま虫食いのように穴を開けるってことですね」

「これがどういう作用をするんだ？」

「これは相殺したエネルギーの箇所を修復しようと新たに供給されるエネルギーを消し

続けることによつて起こると仮定されます。これにより、そこを通過する攻撃は必ず絶対防御が作動するようになるつてわけですね。……………本当にあげつない」

「それでも使つた感じ、本当に僅かな時間だつたけどな。刀がすり抜けれるかどうかつてラインだつた」

「それで充分なんですよ。なんて言つたつて当たればそれで終わりなんですから。より効率的になつたということでしょうね」

「ほうほうなるほど。……………効率的になつたと」

「イチカさん、自分のレポートなんですから私の考察を書いてどうするんですか」

「参考意見だよ。問題ないさ。つまり、纏めに入ると『零落白夜』はエネルギーという消しゴムで相手のエネルギーという字を消すのに対し、『栄達極夜』は」

「エネルギーという油を弾き飛ばすために、自分のエネルギーを水に変換する。そういう考え方でいいかと。……………あ、はい、これ端末です」

「おう」

一夏はフィオナから端末を受け取ると、武装の欄をもう一度閲覧する。

「この武装は、この『栄達極夜』を前提にしている。そう考えるのが普通だよな」

エネルギーを纏うことが出来る天ツ螢。「螢」というナノマシンにエネルギーを纏わせ、空中へと放出する雨ツ螢。そのどちらとも、栄達極夜のエネルギーを利用して初め

て価値が出る。

両腕の展開装甲による箆手となった海ツ蜚も、あまり利用する機会はないが蜚を纏うことが出来る。主な使い方は、展開装甲の出力に頼った徒手空拳での殴り合いになるだろうが、この栄達極夜というブラフが存在することに大きな意味があるのだ。

「助かったよフィオナ。おかげでレポートが進みそうだ」

「いえいえ、こちらこそ。おかげで貴重なデータが手に入りましたので」

「ははは、こんなの、レポート読めばすぐに分かることだけだな」

「ふふふ、そうですね。でも、イチカさん。おいそれと端末をほかの人に見せちゃ駄目ですよ？」

口元に人差し指を添えて、「約束ですよ？」とほほ笑むフィオナ。

「ん？ ああ、わかった」

その動作にドキツとしながらも曖昧に頷く一夏を余所に、フィオナは一夏に背を向けた。

「それでは、わたしはシャルさんの着替えを持って行かないといけないので」

「ああ、引き留めて悪かったな」

「いえいえ、こちらにも利があつたので気にしないでください。それでは」

フィオナがシャルロットのものと思われるスポーツバックを担いでいく姿を見送る。

「さて、続きをやりますかな」

先ほどの会話の内容を忘れないうちにキーボードへと向かい合うのだった。



「シャルさん、入りますよ?」

扉をノックし、返事を待たず室内に足を踏み入れる。どうせ在室なことは分かっているし、急に入って困るようなことはしていないだろう。というより出来ないだろう。

「お仕事ご苦労様」

フィオナが帰ってきたことに気づいたのか、沙良がキッチンから顔を出した。

「あ、沙良さん居たんですね。暑い中駆り出されてクタクタです」

「千冬姉に発信器付けたんだって?」

「秘書長の命令ですよ。わたしのせいじゃないのに」

わたし怒っていますと、頬を膨らませて不満を訴えてみると、沙良はくすくすと笑ってくれる。

「フィーナも見つからないように付けなないと」

「それが、通信目的も兼ねていたようで、バレるのは必然だったようで……。あの糞上司

には一回痛い目見せてやらないと気が済まないです!!」

「まあまあ落ち着いて。カルラには僕から言っておくよ」

「それならいいですが……ブラック企業にも程がありますよ」

「それでも毎年入社したい会社ベスト10に入るぐらいは人気があるんだよね」

「それは営業とか総務とか人事とか開発とかですよ」

「大半じゃん」

「うちの部署は超絶ブラックですけどね」

「それを言うなら僕の部署だってブラックだもん」

「開発部はそれが好きな人たちが集まってるじゃないですか」

「それもそっか。フィーナ、そっち持つて」

指さす方には、ストローが突き刺さったタンブラーが置いてあった。大方自由に体が動かせないシャルロット用に用意されたものだろう。

「シャル、フィーナが来たよ」

お盆にお菓子を盛った沙良の後に続いてずかずかと歩いていくと、ベッドに寝かされたシャルロットの姿が見える。パツと見たところ外傷は治癒したようだ。だが、ベッドから全く動いていないところから、未だ麻痺は続いているのだろう。ナノマシンの活動が停止している時だけ、シャルロットは自由の時間を取り戻す。だが、その自由も、体

の麻痺により不自由なものとなるのだ。早く治ってほしいものだが、治療を開始して二日目。折り返し地点といったところか。あと三時間もすればシャルロットはまた痛みを耐えるだけの時間が訪れるだろう。願わくば、一秒でも早い回復を。

「顔色は良くなつたようですね。これ、着替えのカバンです。一応言われた通りの物を持って来たつもりですけど」

つい二時間前まで痛みに暴れていたらしいシャルロットは、汗で不快感を覚えているだろう。シャルロットに着替えを要求されていなければ、千冬との虐めの如き訓練ももう少し長引いていたと思われる。

靴を受け取ったシャルロットは、さっそく靴を開けて中身を物色している。

「うん、大丈夫。ありがとう、助かるよ」

「いえいえ」

フィオナはベッド横の小机にドリンクを置くと、沙良からお菓子を受け取った。

「じゃあ、早速着替えようかな、沙良手伝ってくれる？」

シャルロットが手を伸ばすが、その指先が沙良の柔肌に触れる前に、その腕をしっかりと掴む

「シャルさん、いくらなんでもそれは常識がなさすぎです。わたしが手伝います」

「ちえー」

「ちえー、じゃないですよ全く。沙良さんはイチカさんのところに戻っておいてください」

「わかった」

シャルロットの不満そうな表情に、額を指で押すことで応える。沙良は素直に部屋に戻ったようだ。空気を読んで、時間を掛けてくれるだろう。

フィオナはベッドの端に腰を掛けると、鞆の中から衣類を取り出した。



「シャルさん、告白したからってのはっちゃけすぎですよ」

ベッドに腰を下ろしたフィオナが、シャルロットにジトつとした目を向けてくる。だが、テンションが上がるのは仕方ないだろう。ようやく気持ちを伝えることが出来たのだ。少しぐらいはっちゃけても見逃して欲しい。

「えへへ、だってー」

「だってじゃありませんよ。シャルさんOK貰ってないじゃないですか」

「うっ、それを言われると辛い……」

そう、想いを伝えることには成功したのだが、その結果が伴ったのかと言われると、首

を横に振るしかない。

「恋人同士なら文句言いませんけど、振られた身なら振られた身らしくしてくださいよ。はい、体拭きますから腕上げてください」

「な、何言ってるのさ！ まだ振られてないよ!? 保留って言われたもん！」

首を大きく振って否定の意を示す。しかし、ペしりと腕を叩かれるとしぶしぶと両腕を上げて、パジャマを脱がしてもらう。

「はいはい」

「む、何さ」

体をなぞる温めた濡れタオルが気持ちが良い。背中をタオルが通るたびに声が漏れる。

「保留って、振られたも同然じゃないですか」

「だって、沙良の立場的に恋人を作ることは難しいって……」

「はい、下着替えますよ」

フィオナの手が布団の下に潜り込み、シャルロットのズボンをずりずりと脱がしている。下半身は完全に麻痺している状態なので、大人しくされるがままで羞恥に顔を染める。

「まあ有名人ですし、社交界にも出てますからね。縁談の話もよく持ち上がっているみ

たいですし、おいそれと自由に恋愛できる立場じゃないでしょうから」

沙良には業界の中でトップクラスのネームバリューがあるだけではなく、ISが使える男子としても有名になった。その沙良がおいそれと恋人なんか作ってみたらどうなるかなど簡単に想像できる。元々ハニートラップの類も多く仕掛けられていたと聞く。シャルロットには大人の考えていることなどこれっぽっちもわからないのだが、ここで恋人という前例を作ることは良くないとカルラも言っていたらしい。自分が恋人になつた方が変な虫も寄つてこないと思うのだが、社交界というのはそう甘いものではないらしい。

「せっかく勇氣出して好きって言ったのに」

理由があるものは仕方ない。実際、断るための体の良い言い訳なのだろうが、シャルロットが一時間かけて粘つた結果、保留という形になっている。実際にそういう事にしておくというのが、シャルロットの精神衛生上一番ダメージが少ない。それに沙良も言っていたのだ。『僕が付き合ってもいいと思えるように、振り向かせてよ』と。そこまですごい黙っているほど女は廃れていない。すごい大きなため息という前置きさえなかったらパーフェクトだったのだが。

「現実はどう甘くないってわけ、か」

むしろ甘い妄想しかしてこなかったただけだと言われると、否定しきれない。実際に振

られることを全く考えていなかったのだから、御目出度い頭だとリナに指さされて笑われても仕方ない。

シャルロットは沙良が用意してくれたドリンクに口をつける。中身はスポーツドリンクのようだ。薄めに作られたそれは今のシャルロットの体を考慮した物だろう。その優しさに頬が緩む。

「そういえば、シャルさん。好きって言う前にキスしてましたね」

「ぶっ！」

「うわ、汚っ」

口から綺麗な放物線を描くように液体が噴き出る。

「み、み、み、見たの!?!」

「そりやあ見てましたよ。沙良さん、何か言いたそうな顔してましたし。まさかの無理やりキスするなんて思ってもみなかったですけど」

「うう……あの時は色々あつて状況判断が……」

「責めているわけではないですよ」

「良かった。ていうか、今の流れ、何かデジャヴ感じる」

「まあわたしは責めてませんけど、ソフィアさんに連絡したらカンカンに怒ってましたよ。あと秘書長に言ったら社内に一瞬で噂が広がったようです」

「oh……」

「どうしました？ そんなに真っ青な顔して」

「終わった……」

「ははは、大丈夫ですって。ちよつと痛い目見るだけですよ」

「痛い目見ることは前提なんだね……」

「まあ、脈無しじゃなかったのなら良いじゃないですか」

「そうだね、これからは遠慮無しにガンガンアタックかけていかない！ ソフィア先輩も保留って言ってたし、ここは攻めどころに違いない!!」

振り向かせてとまで言わせたのだ。これはドンドンアタックかけていけということに間違いはない。

「まあ、ソフィアさんの時は一日中考え込んで、なおかつ社内の人に相談してそれでも答えが出なくてアントーニョさんの家でまた二日間ぐらい悩んだ結果の保留ですけどね。シャルさんの無理やり勝ち取った保留とは訳が違いますけど」

「う、……でも最終的に付き合った方が勝ちだもん!!」

そう、始まりがどうであれ、過程がどうであれ、付き合った者こそが勝者を名乗れるのだ。極論を言ってしまうえば、最終的に既成事実させ作ってしまう方がいいのだ。そう、既成事実。なんて甘美な響き。

「今、既成事実とか考えてたら軽蔑しますよ」

「あ、あはは、そんなこと、考えるわけ、ないじゃ、ないか」

「もう、そんなあからさまに動揺しないでください。リアルで軽蔑しそうです」

「やっぱり、駄目かな？」

「正直ドン引きレベルです」

瞳の光をスツと消したファイオナのジト目が刺さる。

「……だよね」

このどうしようもない雰囲気シャルロットはズルズルと布団に潜って視線を遮断した。